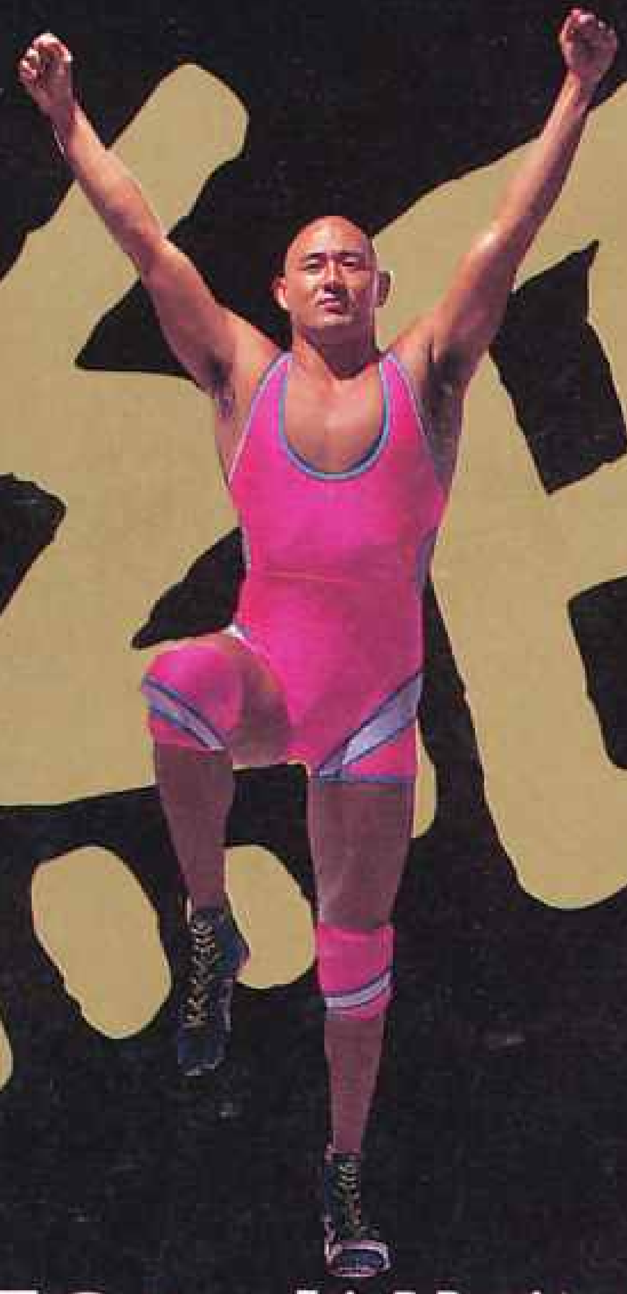
紙のプロレス RADICAL

No.12



アレクサンダー大塚
戦慄のマルコ戦に「んむはぁ」

高田よ、大振りせよ!
プロレスファンよ、祭り囃子を鳴らせ!!



何とでも言ってくれ!
俺は踏み出す!!

高田のハード・リベンジなるか?
「やらない奴が文句を言うな!」
10・11直前! 独占インタビュー!!
髙田延彦

昨年の「髙田敗戦」をプロレスラー・格闘家はどう受けとめたのか? "魔の10・11"
プレイバック発言集!!

格闘王から相談王へ
前田日明
堂々復活!『人生は語らず』

驚異のアラン・ゴエス戦を前に
桜庭和志 仰天発言!

ヤマケンの熱を読み込め!
「POWER OF DREAMとは何か?」
山本健一

「猪木イズム世界一決定戦」11・23両国で実現か!?
石川雄規／ザ・グレート・サスケ
二元同時インタビュー

L-1直前のドデカイ対談実現
神取忍 vs 北尾光司

本誌も太鼓判! 驚異のド新人
八木淳子 初登場!

問題提起
強ければいいのか?
弱くても人気があればいいのか?
What is プロ格闘家?
菊田早苗／郷野聡寛

大反響!
SWSを検証せよ!
「S多重アリバイ」
第2回 アポロ菅原

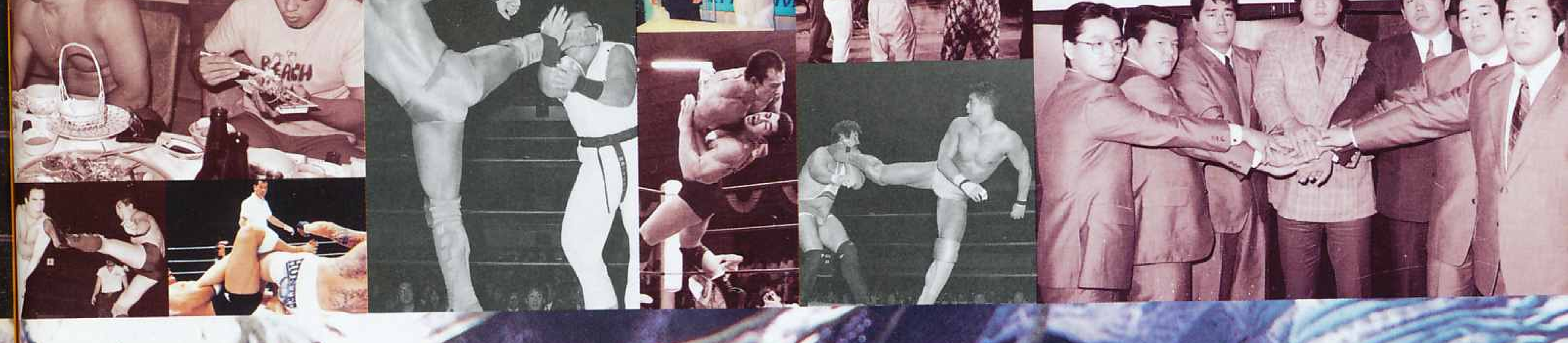
浅草キッド、大吠吼!!
「髙田vsヒクソン戦」を語る

紙のプロレス RADICAL No.12 ファンよ、祭り囃子を鳴らせ!!
発行元：(株)ダブルクロス 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話／03-3403-5188
定価：本体743円

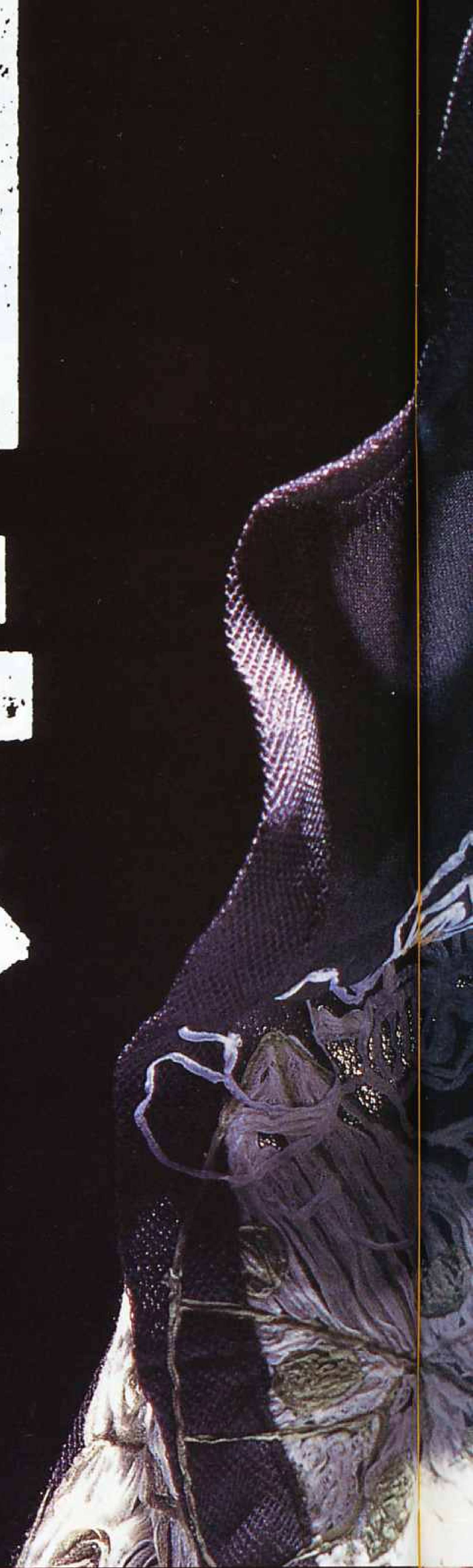

踏み出せば　その一足が道となる



なんとでも言ってくれ
俺は踏み出す!!

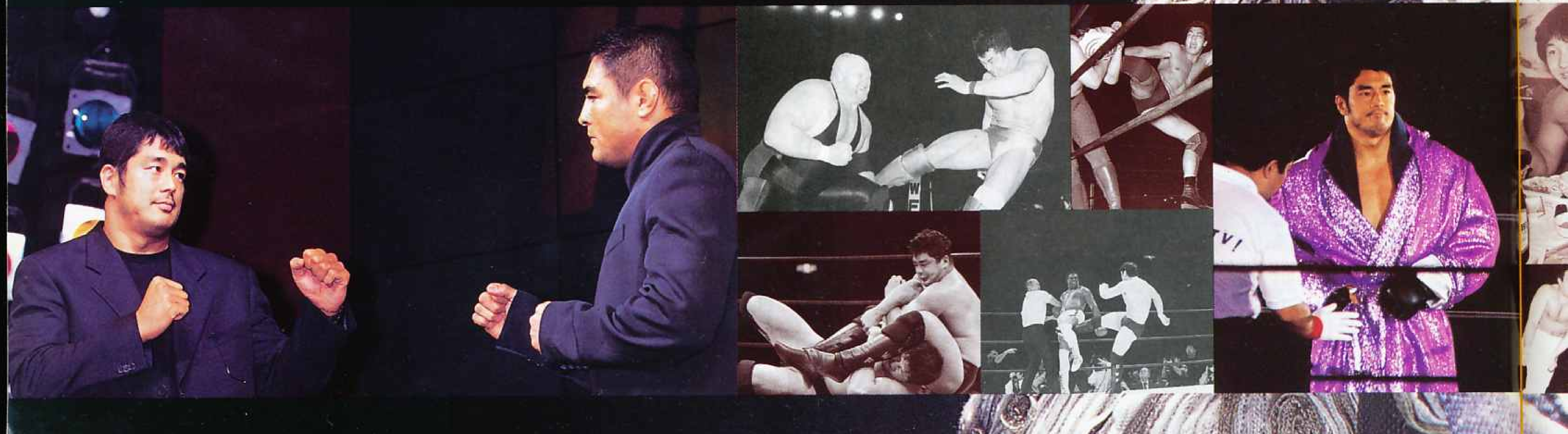


高田延彦



10・11世紀のリベンジマッチ直前!
独占インタビュー

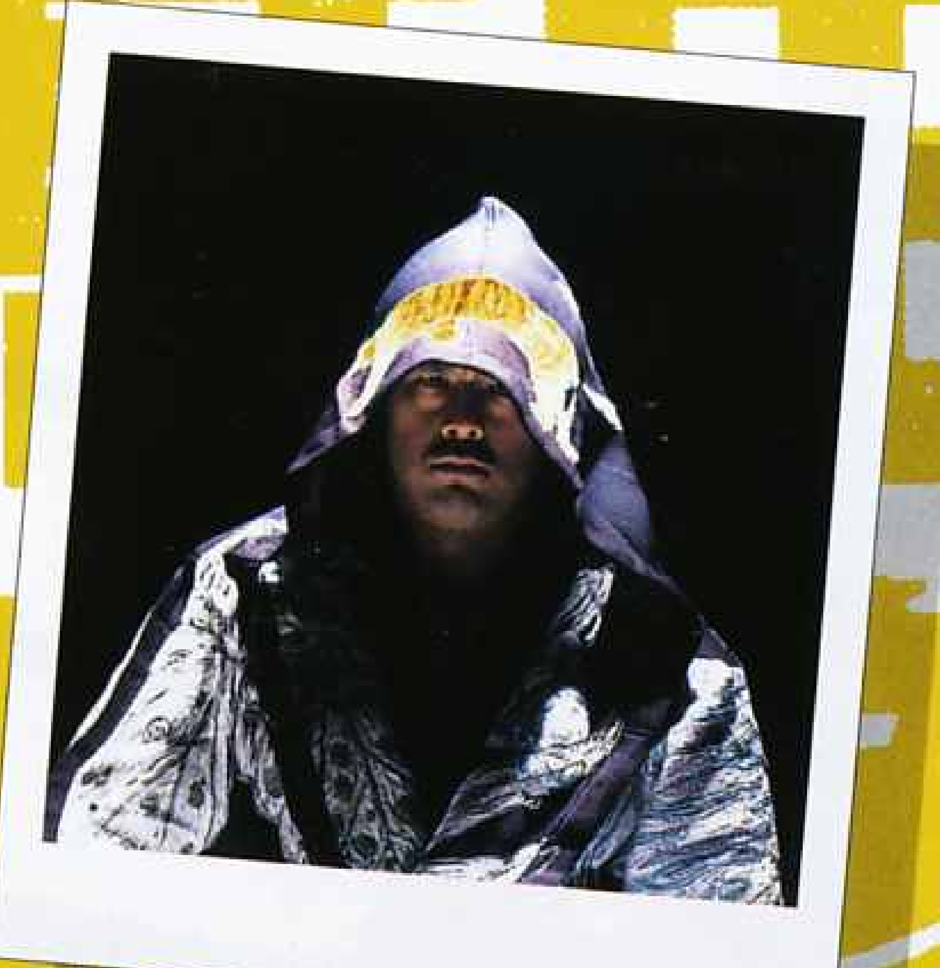
進行＆構成／山口日昇
text by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito





高田に虎の魂が宿った——。
9月11日、世紀の再戦をちょうど1ケ月後に控えた高田延彦の取材を行った。
撮影用に高田には『PRIDE.3』で着用したガウンを着てもらった。
そこで摩訶不思議な現象が起こったのである。
ポラを切ると、なんと、高田のガウンのフードの部分にある虎の模様が、まさに生きている虎のような雄々しさで黄色く光っているのだ。ご丁寧なことに黒い縞模様までクッキリと見える。
カメラマンは、その時のライティングでは虎の模様の部分だけが黄色く光ることはない、と首を傾げた。ガウンそのものにそのような細工がほどこされていることはない、と高田延彦もまた首を傾げた。
偶然にも高田は虎年。そしてご存じの通り、酔ったときの高田は手がつけられない。
これは、もしかしたら今年の高田は、その酔ったときのトラ・エネルギーをリング上に持ち込むという示唆ではないのか——？
トラだ、トラだ、大トラになるのだ!!
フードの虎が雄々しく光った事実はなんなのかわからない。が、ここは高田に虎の魂が宿ったと本誌は捉えたい。
根拠がない？　何とでも言ってくれ！　本誌は踏み出すのである。今年も高田延彦を応援するぜ！
そして、この日の高田延彦もまた、一足を踏み出すには十分すぎるほど、すこぶる元気だった——。

——高田さん、コンディションがメチャメチャ良さそうですね（笑）。
高田　いいね。ベストだね（笑）。
——桜庭さんと、この間話したら、「去年の高田さんは痩せすぎですよ」って言ってましたね。
高田　今年は太り過ぎ？
——ふくよかって感じがしますね（笑）。
高田　豊満？
——非常に健康的というか。
高田　じゃ健康優良児だね（笑）。まあ10・11まで健康優良児の健康が崩れないようにね。
——もう風邪ひかないようにしてください（笑）。で、先月はロスで猪木さんと対談したらしいですね。
高田　半紙に『道』という言葉を毛筆で書いたものをいただいてね。
——「迷わずゆけよ、ゆけばわかるさ」ですね！
高田　凄くいい言葉だね。
——一休和尚の言葉らしいですけどね。
高田　誰のどんな状況に対しても当てはまる言葉で、一番大事な意味合いっていうの？　もちろん今回の自分のテーマにもビターッとハマるしね！
——「その一足が道となる」ですからね。
高田　もう額に入れて飾ってあるよ。道場の俺のデスクの横に。ロスから持ってくるのにも、折れないように挟んで大事にして持ってきたからね。
——久々に猪木ファンに戻ったという感じですか？
高田　というんじゃないんだけど、凄くいい話ができたしね。余分なオーラを捨てたというか、猪木さん自身の言葉では「いろんなものを棚卸しした」と言ってたね。名誉も知名度も何もかも、すべて俺たちが想像できないものを体験してるわけでしょ。あの人にしかわからない足枷みたいなものを全部一度外した上で、「いまは俺は何もしてないんだ」ってね。そういういまの状態が凄くいい感じでね。最初は僕も付き人状態に戻って緊張したけどね。


これが問題のポラ。フードの虎の模様をよ〜く見てほしい。生きている虎の黄色かと思うくらいの黄色がわかるはずだ。怪奇現象か？　神のおぼしめしか？「高田、世紀のリベンジ達成」への予兆と、賢明なる本誌読者なら捉えたはずだ。10・11高田は虎になる！

——昔の記憶が甦って（笑）。
高田　そうそう（笑）。それがね、フと気付くと大先輩の威圧感とかなくて、話してるうちに年のいった良いオッちゃんと話してるような感覚になってきたんですよ。
——良き人生の先輩としていうニュアンスですかね。
高田　そういうことだよね。
——猪木さんのいまの力の抜け具合はなんか凄く素敵ですよね。
高田　僕の好きな猪木さんというものも含め、いま現在、猪木さん自身の好きな言葉というものをいただいたもんだから、凄く嬉しくてね。これはもう生涯大事に取っておきたいなと思って、帰ってきてからさっそく額に入れて一番見えやすいところに飾ったね（笑）。
——あの言葉は成功してる人でもドン底にいる人でも誰にでも突き刺さる言葉ですよね。かえって成功してる人で、あの言葉がピンと来ないなんていう人は、そのあと落ちていく気がしますよね（笑）。
高田　そうだね〜。たまにはいいこと言うね！
——いや、それほどでも（笑）。
高田　俺、成功してないからスッゴクわかるのよ！（爽やかに）。
——あちゃ〜。そうきますか！（笑）。
高田　ビンビンくるね（笑）。
——その猪木さんから、去年ヒクソンに敗れたあと「よりによって一番弱いレスラーが出ていった」という辛辣な言葉を浴びせられましたね。その誤解は解けたんですか？
高田　いや、誤解もしてなかったよ。あの人は何を言ってもいいし、何をやってもいい。そういう土壌を、あの人自身が作り上げてきたからね。猪木さんが言ったあの言葉を聞いた時に「俺が憎くてというより、プロレス界を救うひと言としてああいう言葉が浮かんだんだろう」という風にしか解釈できなかったから。
——大人ですね、高田さんも。
高田　そりゃあ大人になるよ。会社一個潰してるんだから（爽やかに）。
——ガハハハ！　大きな体験ですよね。
高田　冗談じゃないよォ。そんじょそこらのレスラーじゃ体験できないんだから



8月末日、ロス。『スコラ』誌の対談で猪木と再会した高田（再会ミニ秘話はP48に）。猪木から渡された直筆の『道』は、現在、高田のデスクの横に飾られている。猪木は高田と会うと、開口一番、「元気ですかーッ！」と一発カマしたそうである



ダメだ、あんなの許してちゃ馬場と大仁田は俺の中で抹殺!!

さ（笑）。

――バッグンに面白いですね、今日（笑）。

高田　地獄を見てるんだからね。選挙にも出たし（笑）。

――猪木さんと選挙の話もしたとか。

高田　したね。言われたよ。「もっと勉強してから出ろ」って。「もっともです」ってね（笑）。

――ガハハハハハ！　いやぁ、いい話ができましたね、ロスの燦々と輝く太陽の下で（笑）。

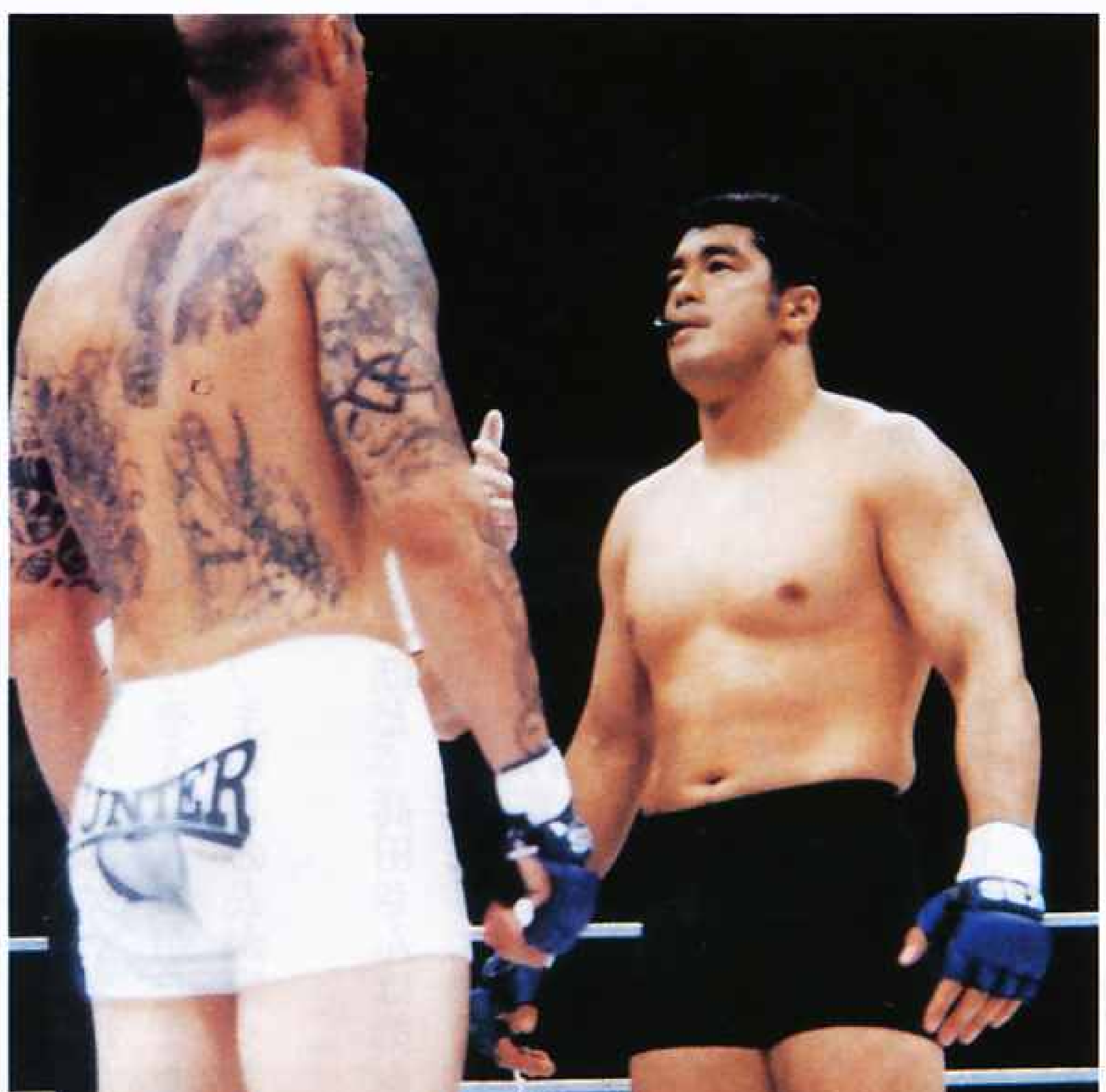
高田　できたねぇ～。燦々と輝く太陽の下の日本食屋でね（笑）。

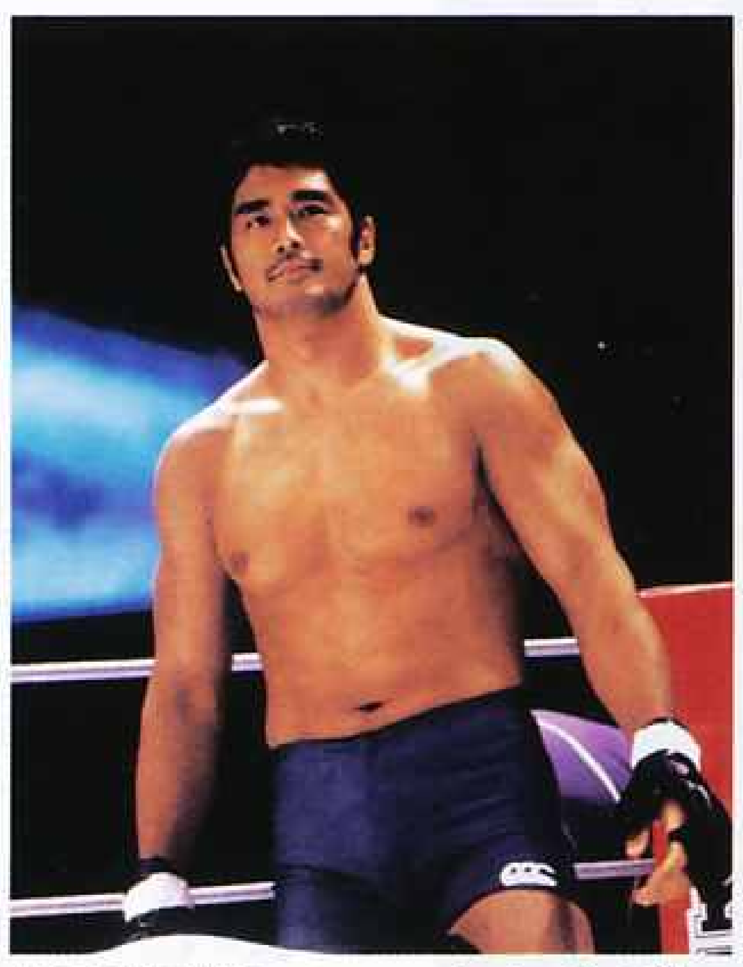
――僕の夢としては猪木さんと二人でぜひローラーブレードをやってほしかったですね（笑）。写真見るだけでみんな元気が出ると思うんですよ。いまのマット界に欠けてるところはそれだと思う。単純に元気が足りないというか。だから高田さんにも今度のヒクソン戦には、結果はどうあれ、元気に出て行ってほしいという気持ちが一番大きいですからね。

高田　そこだろうね、今回の試合のポイントは。なんにつけても元気に暴れ回ることだよ。

――ところで猪木さんよりも問題は馬場さんなんですよ。週刊誌などで馬場さんは、「レスラーを辞めた、高田という芸能人になりたい人が、ヒクソンとやること自体が感心しない」みたいな発言をしてましたけど。

高田　アレなに？　芸能人になりたい気持ちなんてね、「お前の1万分の一ぐらいだ」って。あんたはナンやねん！と。自分のことを棚に上げて人のことを言うな！って。ダメだ、あんなの許してちゃ。あんなのにいつまでも拍手を送ってるからマット界はダメなんだよね。だからね、高田の"た"の字も言われたくないよ。言うんだったら本人の前で言えよ。馬場とか大仁田（厚）とか！　俺は認めてないからな！　な～にが「シューティングを超えたものがプロレスである」だよ。お前やったことがあんの？　やったことがあるヤツが言うならいいわ。なんにもやってないのに偉そうなことを言うんじゃないって。それを支持する人がいるからダメなんだよ。





上の写真が昨年10・11、ヒクソンの待つリングへ足を踏み入れた時の高田。左が今年の6・24カイル・ストゥージョン戦の時の高田。明らかに顔つき、身体つきが違うのがわかる。昨年の高田は憔悴していたといっていい。昨年の高田、今年の高田が何であるのかを確認するために、10・11はドームに足を運べ！

――あの、一応、念のため聞いておきますが、馬場というのは呼び捨てでいいわけですか？

高田　馬場でいい！（爽やかに）。嫌いなんだよ。

――ガハハハハハ！　じゃあ、その馬場さんに比べると猪木さんの方がいまだに何かを得られる存在なわけですね。

高田　うん。正直だよね、だから失敗もするし、いろんな発言で誤解も受けたりするんだよね。それに比べてズルイ、馬場は！

――ズルイ！　なんかリアクション取るのに困っちゃいますね（笑）。相当ムカついてるようですね。

高田　もうこのムカつきは一生鎮まらない！　馬場と

猪木さんと馬場のどっちが正直か その発言でわかるじゃない





高田延彦

大仁田だけは自分の中では抹殺!! やっぱそこで出るじゃない、猪木さんと馬場の違いが。猪木さんの「よりによって一番弱いのが出た」という発言と、馬場がコメントした「高田とか何とかいうヤツが格闘技の技を覚えてヒクソンに挑んでいくなんて、なんてアホなヤツだ」みたいなことも言ってたでしょ。それだけでね、猪木さんと馬場のどっちが正直でストレートで、そしてマット界に対して愛情を寄せた言葉かってわかるじゃない。背がデカイと気持ちも強気になっちゃうんだろうね。上から人を見下ろすから(笑)。そうそう、友達から面白い話を聞いたことあるよ。トラックの運転手と軽自動車の運転手の喧嘩の話でね。蛇行運転するトラックに頭にきた軽の方が、トラックの前に出てガッと止めたんだって。トラックの運転手が頭にきて、肩をイカらせながら降りてきた。軽からは軽自動車と同じぐらいデカイ運転手が出てきて、トラックの運転手をボコボコにしたんだって(笑)。

——ガハハハハ! 軽の運転手は高田さんじゃないんですね?

高田 違う違う。で、軽の運転手は俺と同じようなこと言ったんだって。「お前、デカイのに乗ってるからって、なに気持ちまで大きくなってんねん!」って。

——デカイのは乗り物だけだと(笑)。でも世間的に見ると、馬場さんより猪木さんの方が嘘つきとかのレッテルを張られやすいじゃないですか。どちらかというと正直者は馬場さんだと見られますよね。草食動物的だし。

高田 それはまわりにいる人によって、猪木さんがそういう風にならざるを得ない状況になってきたんだね。あの人は正直に生きてきたにも関わらず、ダマされたり振り回されたりした人なんじゃない? 若い時は社会に対してもそんなに知識がないじゃない。だから人にダマされたりとかしてしまう。そういうのがたまたま悪い方向に出て、まわりの人が繕ったりとかね。

——ああ、なるほど。高田さんは第一次UWFの頃かな、要するにUスタイルというものが萌芽しかけていた頃に「馬場さんとやってみたい」って言ってましたよね。

高田 潰してやろうと思った! それだけ。

——ゲ!

高田 本当に脳天唐竹割りが痛いのか試してみようと思ったんだよ(笑)。

——そういえば、いまからもう10何年前ですけど、「十六文キックを受けてみたいな。ロープに飛ばしてバァーンだもんね」って、高田さんはいまと同じようなことを言ってましたね(笑)。

高田 あのデカイ足の裏を見たら吸い込まれるっていう噂を聞いたことがあるからね。

——でも、猪木さんが正直な生き方をしてるっていうのは、僕的にも凄くスンナリきますね。正直すぎてこんがらがる時もあるけど(笑)。

高田 あの人は人をダマせる人じゃないよ。

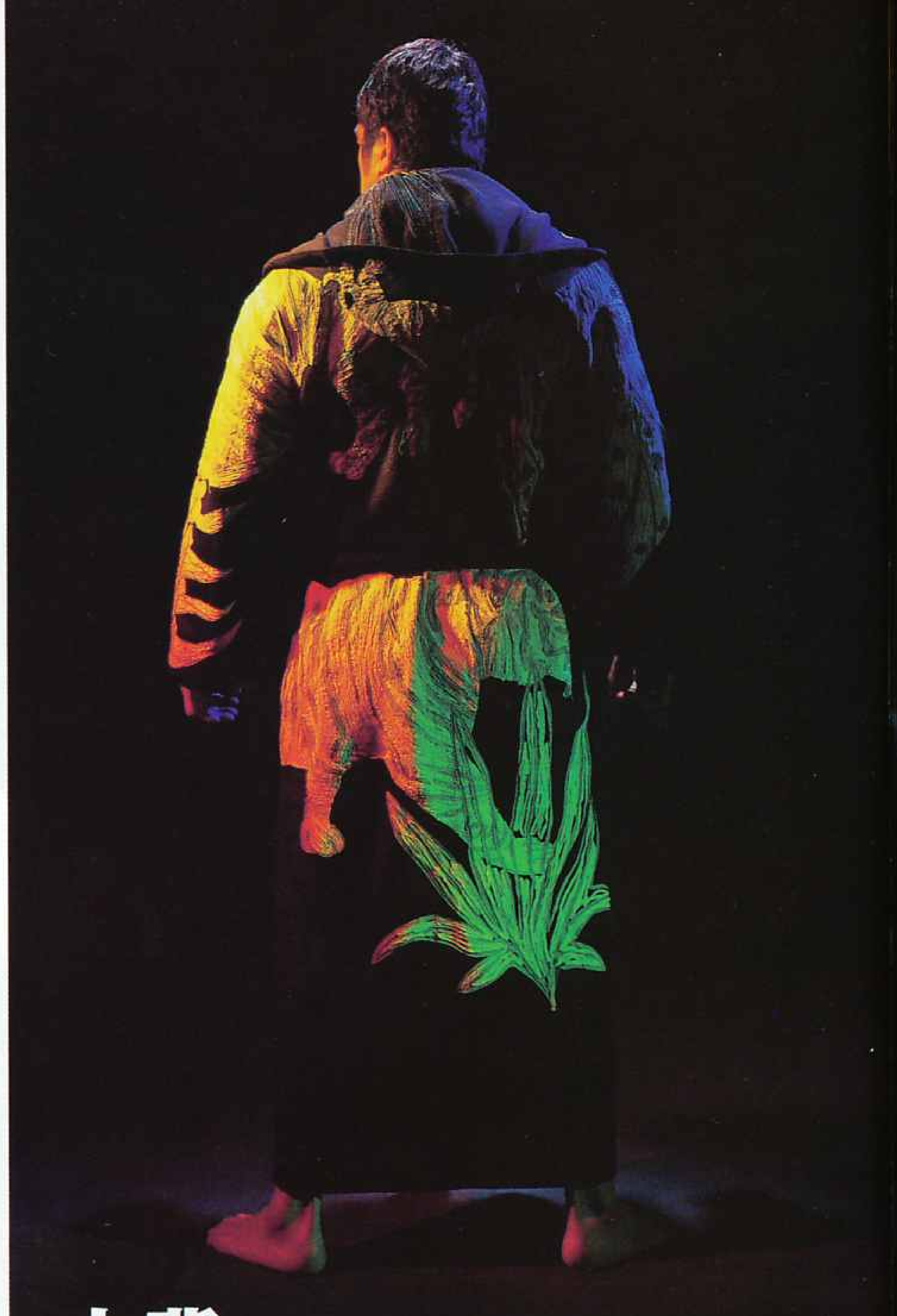
——ダマされるタイプですね(笑)。

高田 そう。正直に本能で動いてるでしょ。

——前田さんもそういうところがあるし。

高田 そうだね。

——高田さんもそうだと思うんですよ、系列というか同じエリアというかね。やっぱり馬場—大仁田エリアはちょっと違いますよね。でも、その大仁田厚も、「高田さんがヒクソンに負けてから自分のところの興行が入らなくなった」って発言



してましたよ。

高田　知らないよ、そんなの！　だって大仁田なんて同業者だと思ってないから。

――芸能人？（笑）。

高田　何だかわかんないよ。ああいうのがいるから、一生懸命やってる人たちがプロレスラーにプライドを持てなくなるんだよね。ところで大仁田はなんで復帰してるの？

――いや、よくわからないです。

高田　上っ面だけかもしれないけど、『男』を売りものにしといてさ、よく帰ってくるよね。俺が嫌いなのは、都はるみとキャンディーズと大仁田厚、それとテリー・ファンク。

――ガハハハハ。キャンディーズにまで噛みつきますか。一度辞めて戻ってきた人々は嫌い！

高田　ダメだね、ああいうのは。ああいうのを迎え入れちゃダメだよ。A級戦犯はほかにいるよ。

――誰ですか。

高田　ん？　馬場と大仁田だ。

――馬場さんはAじゃなくてBですけどね（笑）。

高田　B級戦犯か（笑）。そうすると俺はA級戦犯じゃない、T級戦犯だ。誤解してもらっちゃ困るよね（笑）。

――別に馬場さんと大仁田厚のことを言わせるつもりじゃなかったんだけど、今年は高田さんが元気だということは、これで十分伝わると思います。

高田　書いていいよ、全部！

●

――そういったところで、高田さんの新日本の若手時代の頃をちょっと振り返りたいんですけど。その頃の合宿所の写真とか見ると、ホントにいい笑顔が多いんですよ。まさに〝青春のエスペランサ〟って感じで（笑）。

高田　あ！　あれだけはやめてくれる。〝UWFのジェームス・ディーン〟は（笑）。怒られたんだから。「どこがジェームス・ディーンだ！」って（笑）。

――ガハハハ。誰に怒られたんですか？

高田　ファンレター。1通だけだけど（笑）。

――その1通がグサッときた？

高田　グサッときたねェ（笑）。でも、あの頃は楽しかったね。前田さんと話すときも、良き思い出の時代というと、新日本の合宿所時代になるからね。これに尽きるよね（笑）。

――前田さん曰く、高田さんはその頃は熱くて、酔うと「そうじゃないスかッ！」と1人で壁に寄り掛かりながら遠くを見てるんですって（笑）。で、何を熱くなって言ってるかわからないんだけど、前田さんも「そうやな」って適当に返事すると、「前田さんもそう思いますか！」って1人で感動して前田さんの手を握りしめてたらしいですよ（笑）。

高田　へぇ～。そんな頃もあったんだね。


――でも、いつの頃からか、高田さんはクールってイメージが付き始めちゃいましたよね。

高田　うん。わかりやすく言うと、若い時っていうのは冗談を言うときでも、何も意識しないでしょ。自分が楽しいと思うことがポンポン飛び出てくる。ところがUインター時代くらいからかな〝明るくしないといけない〟〝面白いこと言わなきゃいけない〟っていう義務感みたいなものに縛られてくる。この違いだと思うんだよね。

――何をやるにしても周囲のことを先に考えちゃうとか。

背がデカイと強気になるんだろうね 上から人を見下ろすから





ヒクソンとやりたいんだったらチャンスを作ってやればいい

高田延彦

高田　そうだね。誰がスネてるとか、あいつとあいつが仲が悪いとかね。「そんなの勝手にせーよ。俺は俺でやるんだ」っていう立場だったら気楽なもんだけど、ひとつの組織の上の方にいると、そうはいかないからね。会社を守っていかなければならないから。それが小さな組織であればなおさらなんだよ。ひとつヒビが入るとビリビリと裂け目が大きくなるんだよ。これがもの凄いスピードで裂けていくからね。その裂け目の修正に神経を使うってこと自体が、「近い将来引退します」発言とかにつながった最も大きな要因だね。

――高田さんの心にも裂け目ができてしまったわけですね。

高田　「もうやってらんねぇや」って。また最近もマスコミに「A級戦犯」とか言われてたから、「俺がやってることはとんでもなく悪いことなのかな」って、心に裂け目ができたけどね。

――マスコミといったって、しょせん紙ですからね。

高田　冗談だよ（笑）。どうでもいい！　マスコミがどう書こうが。好きに書けや、好きにやれや。まったく見えないし、気にならない。

――しかし最近の高田さんを見てると、実に充実してますね。

高田　充実してるよ！

――昨年の敗戦から今年にかけて、あまたの格闘家にはできない、実に大きな修行をしてるなぁと思いますね。

高田　う〜ん。別に負けたから俺の人生が終わるわけじゃないし、刑務所に入るわけでもないし、棺桶に入るわけでもないからね。俺は俺で、これだけの問題提起ができるような試合ができたし、提供したんだから、役目を一つ果たしたと思ってるよ。これは負け惜しみでもなんでもないんだよ。誰かがヒクソンという材料で問題提起しなきゃいけなかったんだからね。ただ、出た結果として、しょーもない試合で負けたことに対してファンは何を言ってもいい。「バカ野郎！」でも「裏切り者！」でもね。お金を払って見てるんだから、どんな評価を下してもいいと思う。ただし、ファンの人たちに対しては、期待を裏切って申し訳ないなっていう気持ちはある。勝負っていうのは勝つか負けるかしかないんだから。これはスポーツを見てる人なら誰でも受け止める準備をしてるわけだからね。でもプロレスをズーッと見てると、それを受け止める教育がされてないってのがあるから。その違いはあると思う。

――そうですね。僕は個人的には、例えば歌舞伎の花道で大見栄を切るような世界が昔のプロレスだとしたら、その世界やその瞬間が醸し出す解放感って決して嫌いじゃないんですよ。

高田　俺も好きだよ。

――だから、確かに従来のプロレスはそういう世界ではあるけども、単なるスポーツにはないエネルギーがあって、それが大衆にパワーを与えてきましたよね。

高田　うん、わかるよ。

――「スポーツだから勝ち負けがあるのは当然」っていう考えが当たり前になってしまったら、見る方はノメリ込めないですからね。

高田　だから、勝敗がすべてだったらつまんないよね。それは大相撲だってプロ野球だって勝ち負けじゃない部分ってあるでしょ。ただ現実を受け止めなければいけないんじゃないかな。本人がそれを受け止めてるわけだから。

――その現実を結果的に現出させたのが、トップスターである高田さんだったということに意義があると思うんですよね。ほかの団体のトップは出ていってないですからね。馬場さんだって大仁田厚だって出ていかない（笑）。

高田　出ていきゃいいのにね。〝世界の巨人〟なんだから（笑）。見せてもらいたいよね、その〝超えたモノ〟っていうものを。口で勝負するんじゃなくて肉体で勝負しないとね。

――逆に馬場さんは、「プロレスは口で勝負するものじゃない」って、よく猪木さんのことを批判してますけどね。

高田　近頃、馬場の言ってることが、ちょっと格のあるお坊さんが言ったことのように聞こえて、大事に大事に受け止めちゃう人がいたりするんだよね。あの人の生き方を見てみりゃあわかるんだから。

――だから、生き方って部分で言えば猪木さんも前田さんも高田さんも正直ですよ。高田さんもヒクソンとやりたいと思ってやったわけですから。

高田　うん。

――改めて聞きますけど、去年のヒクソン戦は自分から望んだことなんですか？

高田　当たり前だよ！

――誰かに焚付けられたとかは？

高田　ないないない。止める人はいたけどね（笑）。

――止められましたか（笑）。

高田　「やめとけよ」って人はいたよ。「やれ」という人はいなかったね。

――高田さんが出ていくのは、ＵＷＦの落とし前という部分では必然ですからね。

高田　ま、Ｕに落とし前でもなんでもいいんだよ。

――ユーでもミーでもなんでもいいと。

高田　Ｔの落とし前でもなんでもいいの（笑）。

――高田延彦自身の落とし前であったと。

高田　そう。落とし前つかなかったけどね。

――今年はつけてほしいですね、ぜひとも。で、いま現役のあまたの格闘家たちは、そのＵＷＦを見てプロのリングに立ちたいと思った選手ってたくさんいるんですよ。

高田　うん。

――そういう格闘家の中にも「なんで高田がまたヒクソンとできるんだ」「俺らの方が強いのに」と言ってる選手もいるんです。それについてはどう思いますか？

高田　やりたかったらやればいいんじゃないの？　それだけだよ。自分でチャンスを探してね。誰が誰とやろうと大きなお世話なんだからさ。俺は俺がやりたいからやるんであって、止めることはできないよね。だから、そういう思いがあるんだったら、自分でそういうチャンスを作って、あるいはそういう場を誰かに作ってもらってヒクソンとやればいいじゃない。それだけだよ。あとは何も言うことはない。

――チャンスをものにするというのは運であり、その運を掴むのも能力ですからね。

高田　それはその人の資質じゃないの。別に俺が関知することじゃない。やりたいという気持ちを持つことは大いに結構でしょ。俺がまた負けた時には、どうぞ



いつまで修行するんだろうね なかなか卒業させてくれないからね

ご自由に首を刈りに行ってくださいと。ただ、そんな簡単にキップは手に入らないよ。

——それは前田さんも「俺は強いからヒクソンとやりたい？　それは寝言や！」って言ってましたね。

高田　そんなこと言ったら何人のヤツが出てくるの？　自分が強いと思ってる奴なんかいくらでもいるんだから。世界の人口が12億人だとしたら……どれだけいるかわからないよ。だけど、「最強」とか「世界一」とかの言葉や旗印に、いちいち目くじら立てて突っついてたら夢なんか生まれないよ。

——それは同感ですね。

高田　そんなヤツはちっぽけなヤツだよ。大きくなれない、つまんないヤツらだよ。

——「最強になりたい」というエネルギーの方向を見たいわけですからね。そのエネルギーの方向まで消してほしくないですよね。

高田　うん。

——それは勝つ時もあって負ける時もあるのは事実だし、まるっきりウソじゃ通用しないけど、「俺は絶対に負けない」「世界を俺が束ねる」っていう、いい意味でのホラ吹きというかプロとしての大風呂敷といったものを200％拒絶する世界ではつまらないですからね。そこに大衆は夢を見るわけですから。

高田　そうだね。そこを見て、熱いパワーが生まれてくると思うんだよね、世の中の人々は。ちょっと現実離れしたテーマみたいなものが見えてきて、それをヒントにみんなが夢を見ると。現実だけ見せられたって、なんか冷たいだけだよ。

——「修行とは出直しの連続なり」じゃないですけど、その夢ある世界への再編成へ向けて、高田さんは修行しまくってますよね。

高田　いつまで修行するんだろうね。なかなか卒業させてくれないからね（笑）。

●

——で、現実的な修行として、4月と8月のマルコ（・ファス）道場行きがあったんですが。

高田　非常にいいトレーニングができたんだけど、期間が期間だったからね。この前はたった2週間だから。だけど、マルコのところに行ったことに関しては、いろんな意味で次の試合に対してのいいヒントを得ることができたし、メンタル的なパワーをもらえたよね。格闘技をやってきたこの人生の中において「良かったなぁ」って思う時間だった気がするね。だから居れるものなら1年でも2年でも居たかったね。

——ロスは気候もいいですしね。

高田　何はともあれ、楽しかったね、トレーニングが。

——じゃあ、女遊びとかはなしと（笑）。

高田　女遊びなんかす・る・か・い！

——そんな睨まないでください（笑）。

高田　だって俺、結婚してるんだよ。俺は一筋だもん（爽やかにウィンク！）。

——ガハハハハ！　やっぱり高田さんは面白いですね（笑）。

高田　昔からこうなの（笑）。

——それがわかってるから、去年の高田延彦がなんだったのかを確認するために会場に行くんですよ。

高田　うまいことというねぇ（笑）。

——いや、それほどでも（笑）。例えば、このヒクソン戦を終えたあとにバーリトゥード・ルールじゃなくて、また新しいルールでマット界を整備していくことは高田さんの頭の中にはあるんですか。

高田　それを現実的にやるには凄い作業がいると思うんだよね。

——人は歩みを止めた時に年老いていくんです（笑）。

高田　そうだね（笑）。だから結局ね、いまはどこも大変だと思うんだよ。例えばあるところとあるところが業務提携してベッタリくっついて行こうっていうのは言語道断だと思うんだよね。思想も違うし、お互い築いてきたものがあるんだから。そうじゃない形で、例えば4年に1回でいいからパンクラスとリングスのチャンピオン同士がやるとかね。それはルールまでは考えてないけど、K—1とかに対抗して俺らが見せられる素材は多いんだから。いい選手たちが揃ってるじゃない。しかもいま脂が乗ってるさ。

高田延彦

—乗り切ってますね、桜庭さんなんか、特に。

高田　だから、いまなにか爆発するような渦が起こせれば、どこも潤ってくるんですよ。

—そうですね。いまマット界はどこも不況とか言ってますけど、最大のピンチは最大のチャンスなり、ですよね。

高田　そうだね。材料が揃ってるんだから。タマがなければ何もできないけどね。

—その高田さんの言ういい素材というのは、どこまでのエリアですか。

高田　新日本にだってそういう試合ができる選手がいっぱいいるじゃない。例えば（佐々木）健介なんか、素晴らしい選手だからね、オールラウンドで。そういう選手を含めたら、いい素材がズラッと並ぶよね。これはファンも大喜びすると思うよね。

—メチャメチャ喜びますよ（笑）。

高田　そこにどういう組織が入ってくるのかわからないけれど、先頭を切って突っ走っていけるのは、やっぱりリングスとかパンクラスとかってなると思うんだよね。

—先頭といえば、高田さんって、いつもマット界の渦の中で先頭を走ってますよね。

高田　そうかな？

—マット界が変わる局面の時って、気が付くと特攻隊長的に突っ込んで行ってるっていう気がしますよ。

ん？　特攻隊長ってヘンですね。

高田　特攻隊長じゃ玉砕しそうじゃない！　俺はもうここにいないってことだよ（笑）。

—ガハハハハ！　だけど気が付くと先端を行ってるんですよ。やることが早すぎるというか。ＵＷＦ入りにしても、一連の格闘技世界一決定戦にしても、もちろんヒクソン戦にしても。もっともっと評価されていいですよね。

高田　評価なんかされなくていいよ。マスコミにはね。

—やっぱり、インター時代に着けた〝鎧〟によって、高田さんの〝素（もと）〟というか、例えば新日本の若手時代に持ってたエネルギーの素、みたいなものが遮断されて伝わりづらかったっていうのが一番デカかったと思うんですよ。

高田　どういう風にすれば伝わると思うの？

—元気！（笑）。

高田　ハッハッハ。単純にそれだけでいいの？　もっと細かくあそこ直せ、ここ直せと思ってるんじゃないの？『紙プロ』の山口っていう奴は（笑）。

—そんな大層なこと言えませんよ（笑）。「元気があればなんでもできる‼」でいいんじゃないでしょうか（笑）。

高田　じゃ、簡単だ！（笑）。

—だから今度のヒクソン戦も、もう思いきり蹴っていってほしいですね。

高田　蹴ってズッコケるくらいね。蹴ってコケて、そのままマウント取られるぐらいね（笑）。

—それは大振りすぎますよ（笑）。

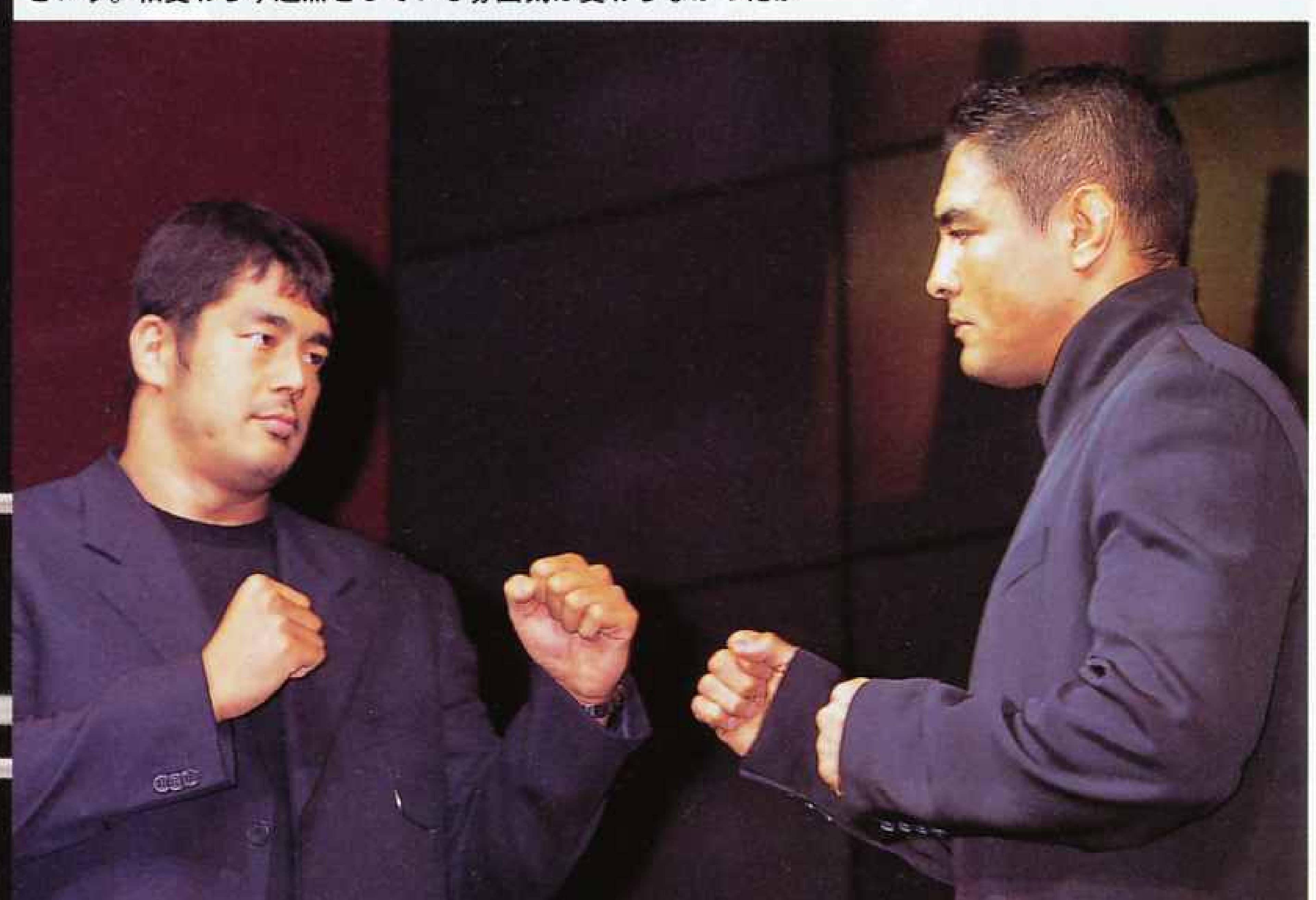
高田　ハハハハハ！……ヤバイ！　いま変なシュミレーションしちゃったよ（笑）。

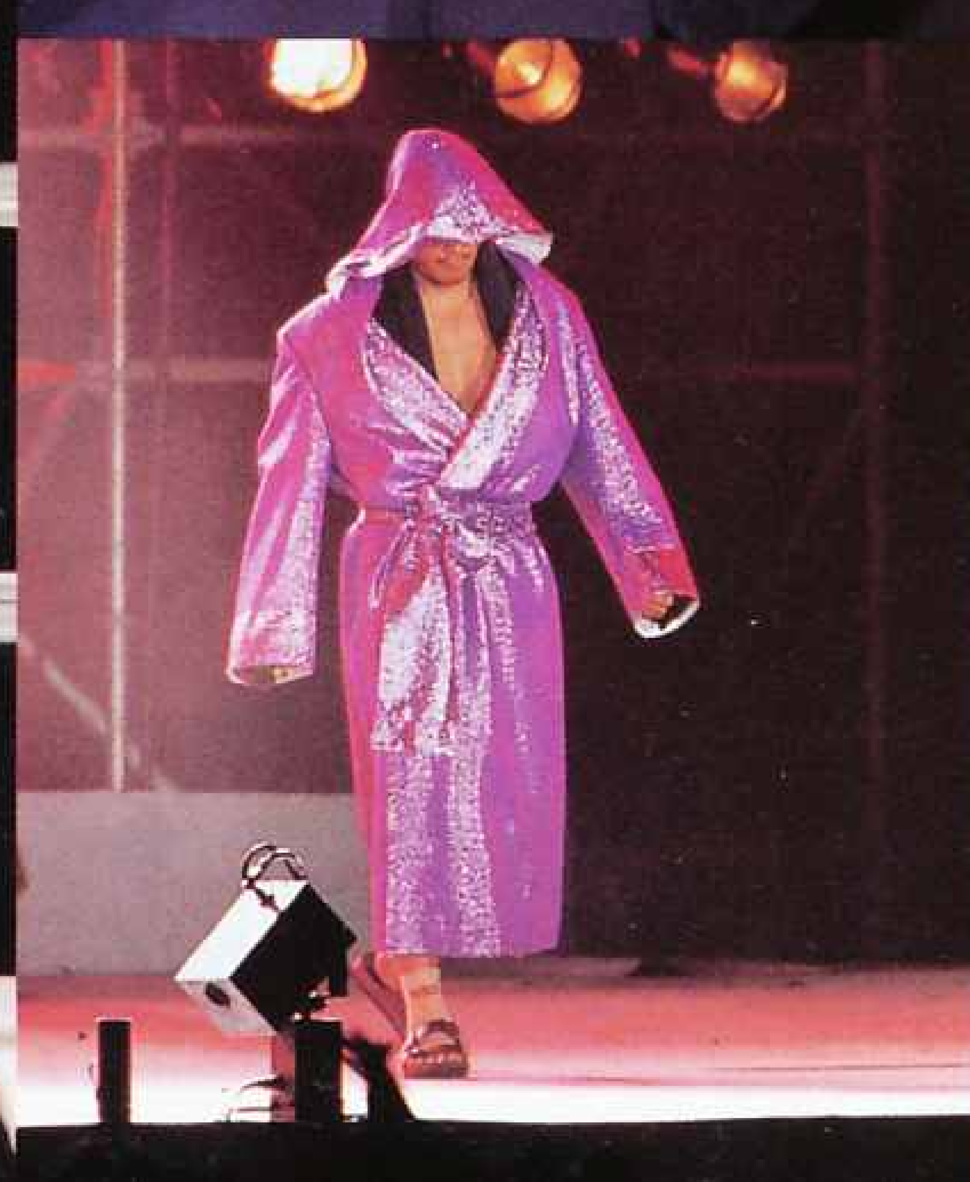
—やっぱりホームランか三振かというくらいの気持ちで行ってほしいですね。

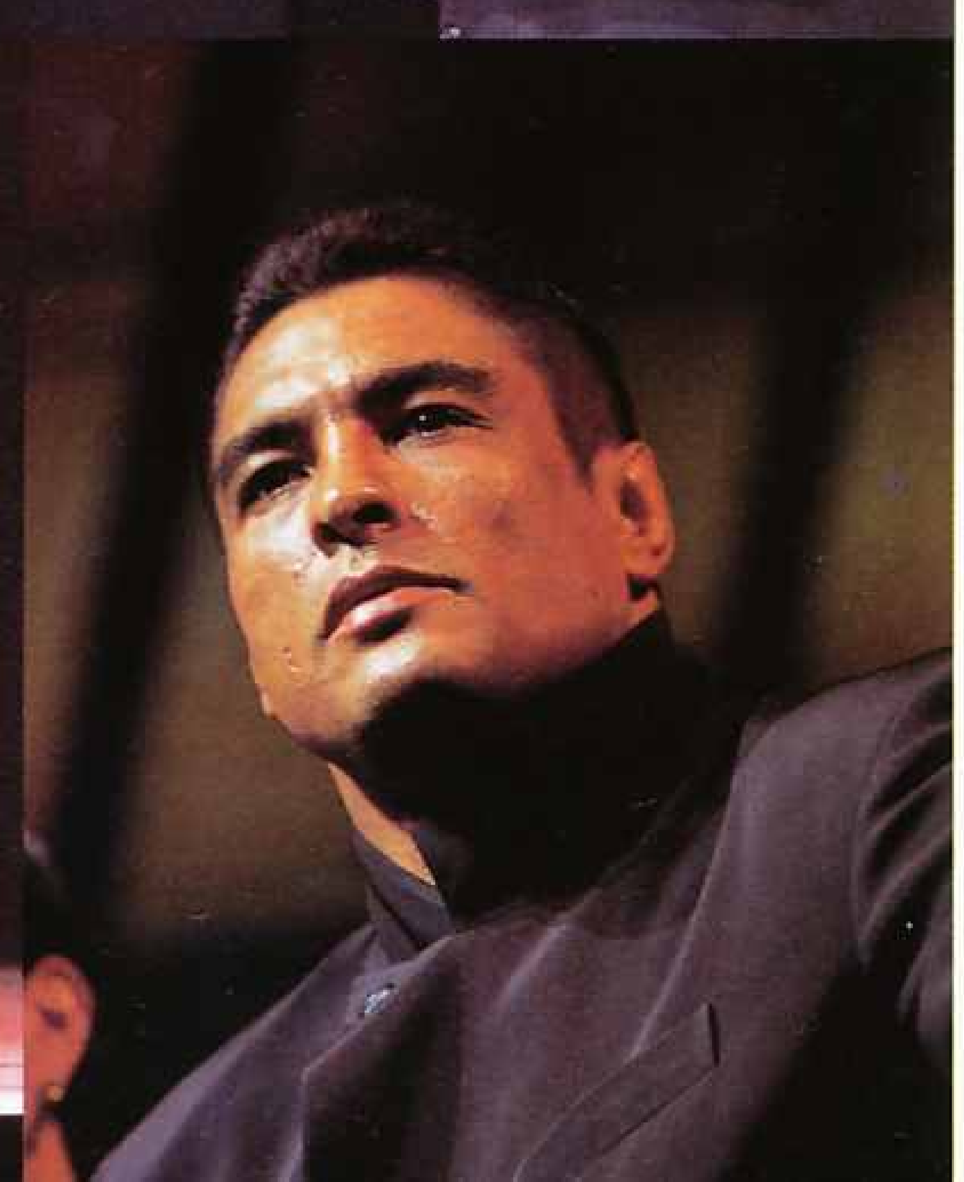
高田　イチかバチかって？



すぐ下の写真は９月13日、六本木ベルファーレで、しかも一般参加で行われた『ＰＲＩＤＥ．４』の記者会見。そこでの高田・ヒクソンの対面ショットだ。この日のヒクソンは終始堅く、高田は終始リラックス。ちなみにヒクソンは、高田—ストゥージョン戦を「興味ない」と言い切り、ビデオも見ていないという。相変わらず超然としている雰囲気は変わらなかったが









だから言ってるでしょ。今年は笑いを取るって（笑）もう泣かせない！

――ゼロか100か（笑）。ファンもそれを望んでると思いますよ。負けた時はどうしようとか一切考えてほしくないですね。

高田　それは考えてない！（爽やかに）。

――そういえば、「去年負けたのにもう一度やりたいっていうのは自分のエゴみたいなものだ」って高田さんは言ってましたけど、そのエゴが強烈なエネルギーに変わるといいですね。

高田　どういうこと？　いや、いまさ、エゴ、エゴ、エゴって考えてたら、エゴの意味がわからなくなっちゃったよ（笑）。

――は？

高田　そういう時ってない？

――へ？

高田　例えば、その人のことをジッと見てるとその人が誰かわからなくなるなんてことない？

――それ健忘症ですよ（笑）。

高田　違う違う。例えば、見続け過ぎると山口さんの顔じゃなくなってくるのよ。わかる？

――なんとなくボヤーッとしてくるみたいな。

高田　相当見なきゃダメだよ。それと同じでエゴ、エゴ、エゴ……「え？　エゴって何」ってね？

――ガハハハハハハ！　わかった！　高田さんは人より集中力が大きすぎるんですよ。

高田　なんで？

――ズッと見てられるんでしょ？　いまで言えばエゴ、エゴ、エゴってズッと考えてたわけでしょ。

高田　考えてた。

――集中力の深さが並じゃないんですよ。

高田　でもわかんなくなっちゃったからね（笑）。

—ガハハハハハハ！　だから去年はヒクソン戦に集中し過ぎたんですね。

高田　それはわかった！

—ほかのものが見えなくなるくらい見なくてもいいと思うんですけどね（笑）。

高田　ホントそう思う（笑）。

—もうエゴをガンガンとリングにぶつけてほしいですね。

高田　エゴね（笑）。欲望かな。でも、誰でもエゴって持ってるでしょ。

—欲という言葉はいいイメージはないけど、人間にとって大事ですよね。

高田　大事だよね。

—いま高田さんは、ただ単にヒクソンに勝つための修行をしてるわけじゃないと僕は思ってるんですよ。例えば人間的にひと回り、ふた回り大きくなるための修行ですよね。

高田　そこだろうね！　マルコのとこに行く前は10・11に向けてという意識が強かったわけよ。そのために行くんだから。でも練習の合間にフッと休んでる時、そのあと帰国してから〝これはヒクソン戦のためだけじゃないなぁ〟って思ってね。これはゆくゆく凄くプラスになるし、これからのためになるような気がするなぁと思ったからね。それはほんの一例だけどね。

—だから去年の敗戦は人生の修行として捉えれば、まさに大きな修行ですよね。

高田　もう1回できるってのがありき、だけどね。あ！　今年はテーマ曲を変えるから。

—エ！　うそぉ～！

高田　変える！　やめたあんなの。変えちゃうよ！（笑）。

—「変えちゃうよ」ってビートたけしじゃないんですから（笑）。

高田　冗談じゃないよ、変えちゃうよ、このヤロッ！　義太夫、このヤロッ！　コマネチ！（笑）

—ガハハハ。たけちゃんの真似だ。

高田　ホント変える！　これ期待しててね。

高田延彦

—あの曲好きだったのになぁ～。

高田　あれダメなんだよ。歩いてるとだんだん滅入ってくるんだよね、ホントに（笑）。だから今年は変える。もう頼んだから、オリジナルテーマソング。吉川晃司氏に。

—まさかボーカル入り？

高田　ボーカルは入らない。

—日本語のボーカルが聞こえたら帰りますよ、僕は（笑）。

高田　じゃ、入れよう（笑）。

—去年あのテーマ曲で入ってきた時、僕は涙で前が見えなくなりましたから。

高田　だから言ってるでしょ、今年は笑いを取るって。もう泣かせない！

—いや、「今年は笑いを取る」って宣言されても（笑）。

高田　泣かせない！　3回目はないんだから、おそらく。大事にいくから。だからテーマ曲がなったときさ、「来たゾ。今年はなんとかしてくれよ」っていう思いをさせたくないから。こう、グッ！て余計な力を入れさせないというね（笑）。

—「なんか違うぞ高田」っていう（笑）。

高田　「お前、どうしちゃったの？」「おいおい」っていうね。もちろん、いい意味でだけどね。それを持っていきたいから、敢えて変える。今年は楽しみにしてね、テーマ曲。

—せめて前奏だけでもいままでのテーマ曲にしてもらえないですかね。リミックスしましょうよ。

高田　それでさ、膝くらいまでのバカボンみたいな浴衣を着てさ、♪チャンカチャンカチャンって上がるの。ね？　で、始まったら大振りしてコケてマウント取られて終わるの。「今年は元気だけはあったなぁ～」って（笑）。

—ガハハハハハ！　ドリフのコントじゃないんだから、それだけはやめてください（笑）。でもホントに、10・11は一足踏み出した高田延彦の闘いを期待してます。頑張ってください!!

高田　ハイ！　頑張ります！　ありがとうございました!!（立ち上がって振り返り）忘れ物、なしと。

—今年は一番大事な〝元気の素〟を忘れないでリングに上がれますね（笑）。

高田　忘れ物、なし！

高田は樹海から踏み出した。去年の高田が高田延彦じゃないとしたら、10・11には「高田延彦とは何か？」を確認しに行かなければならない。我々もその一足を踏み出さなければならない。

もう傷つくのはイヤ？
この道をゆけばどうなるものか危ぶむなかれ
危ぶめば道はなし
行きますかーッ!!

【10・11までちょうど1ヶ月の9月11日、六本木アートセンターにて収録】

「私は非常にラッキーな戦士であり、また日本のサムライと同じようにいつ死んでもいいし、誰とでも闘う、と考えています。しかし、それがなんのためかというと、誇りのために闘いたいのです」
〈97・10・11、高田戦後の共同インタビューにて〉

「私は闘う者として、ただただニュートラルな気持ちで、この時を待っていました。大切なのは、精神を空の状態にして闘いの時を待つことなのです。**そう、（宮本）武蔵のようにです。入場の時には、すでに自分の運命を神に捧げる気持ちになっていました。もちろん、これから何が起こるのかわかりませんでしたが、私の中ではすべてに対しての準備ができていたのです」**

「私自身は、高田選手のことをファイターとして非常に尊敬しています。ただ、彼は得意と聞いていたパンチもキックもまったく見せなかったし、さらにはマットの上でも何もできませんでした。あれほど彼が混乱していれば、ここまで試合を運んでくるのは、私にとってたやすいことです」

「私は、柔術というのはスポーツではなく、芸術であり、私のすべてを捧げるのに値するものだと思っています。**私は今回のような試合での勝ち負けは、あまり気にしません。自分の名誉というものを一番大切に考えていきたいと思っています。もし私が名誉のために戦い死んだとしても、私は幸せでしょう」**
〈『Number』97・11／6号〉

"魔の10・11"

世紀の再戦、メガ迫る！ 昨年の高田―ヒクソン戦が投げかけた核を読み取れ



ヒクソン・グレイシー

Rickson Gracie

ヒクソン・グレイシー柔術センター

〈『PRIDE．1』という興行はあなたと高田の試合のために企画されたというのは本当ですか？〉

「本当です。この試合で私ははじめて日本のゴールデンタイムのニュースになりました。10分間もさいてもらったんですよ」

〈日本人は高田のことをどのように考えていますか？〉

「彼は現在群を抜いて有名な人物です。彼はビデオゲームのモデルになったり、彼の人形が作って売られたりしています。私が彼と闘うことの大きな意味というのは、私が本当に興味を持っている人々のみからなる格闘技愛好家の世界でしか認知されていないのに対し、高田は若者から老人まで誰にも知られている国民的アイドルだというところにありました」

〈つまり噛みつくまえのマイク・タイソンのようであったわけですね。誰でもその名前を知らないものがいないというような？〉

「ハルク・ホーガンかマイク・タイソンのようですね」

〈彼は取り決めのあるプロレス試合で名を知られているのですか？ それとも真剣勝負で？〉

「日本人は100％高田は真剣勝負の格闘家と信じています。もちろん彼はいくつかの大きな試合をプロレスラーとして闘っています。しかし日本人は高田の闘いの技術に深い信頼を寄せています」

〈日本のだれかがあなたに試合前に事前の取り決めを持ちかけたりしませんでしたか？〉

「ええ。しかし、それは私の行動原理に全くはずれたこととしか言えません。**高田の周囲の人々は取り決めのある試合を我々に望んでいました。しかし私は申しました、『No！ 私は八百長試合を闘うことはしない』と。私は自らを格闘家、武道家そして武術教師として任じております。芸人の類では全くありません。**私は私の闘いの技術を、勝ったり負けたりして単に人を楽しませるために使う気は毛頭ありません。そんなことは私の積み上げてきた名誉に反することでしかないのだから」

〈米国の武道雑誌『Black Belt』5月号〉

プレイバック発言集! PART 1

―昨年の「高田vsヒクソン戦」を語ったプロレスラー＆格闘家のコメント大集合!! その発言の向こう側にあるものとは何だ!?―

昨年10月11日――。マット界にテポドン級の衝撃を与えた「高田延彦、完敗」という事実。このリアルさをプロレスラーや格闘家たちはどう受けとめたのか。そして、ヒクソン・グレイシーという存在をどう捉えているのか。本人たちのコメントを含め、"魔の10・11"に関する発言をプレイバックさせてよ98!!



高田延彦

高田道場

Nobuhiko Takada

「実はそんな悲壮な気持ちなんて一切なかった。楽しみでたまらなかった。その浮かれた気分のままヒクソンの待つリングに上がっちゃた感じだよ（笑）」

「新日本の若手時代に負傷してしまった首（ヘルニア）が、それまでなんともなかったのに痛みが再発したりね。その痛みで、寝てても目が覚めてしまう状態だった。〈中略〉水の入ったコップすら持てないんだからね。もちろん、腕立て伏せのような基礎練習もできなかったな。他にも、体の抵抗力が低下してしまったんだろうね。すぐに風邪を引いたり。試合の前日も風邪を引いてしまって点滴を打つ状態だったよね。いや、わかってる。体調管理はすべて自分の責任だって。でも、この世に神様がいるのなら、よくぞ試合前日まで試練を与えるもんだなって思ったよ（笑）」

「負けに至る道のりの中でたくさんのことを学んだし、体に植えつけることもできた。そうだな、"挫けない心"というようなものをつかみ取ることができた気がする。その"挫けない心"さえあれば、負けた現実をパワーやエネルギーに転換して、また前を向いて進めるんじゃないかと思っているんだ」

〈『週刊プレイボーイ』98・2／17号〉

「（高田が負けたことによるプロレス界のイメージダウンになったという声に関しては）**そういう見方をする人がいるなら"よし、俺が!"って**（ヒクソン戦に）**行ってもらいたいです。それが**（言葉と行動が一致しているのが）**前田さんですね」**

〈98・11・3キングダム後楽園大会の共同会見〉

〈業界の中からも、A級戦犯とか戸惑いとか反発とか違和感を感じるとか、そういう声も上がってるんですよ〉

「ふざけるなって! オマエら何考えて仕事してるんだ! 何で、誰でメシ食ってるんだ! 自分の書いたものをオレの前で読み上げてみろ! 自分たちが何でメシを食ってるのかまったくわかってないな。悪い結果、あるいは結果を出してない者に対してマスコミが叱責するのは当然だよ。だけど、共存共栄の中で生きてることをわかってないよ」

〈本誌NO．8＝98年2月発行〉

「マルコ・ファス先生なり、例えば他の先生なりに素直な気持ちで教えてもらう。それはなぜかって言ったら、自分のプライドを取り戻すためなんだよ! いまカッコつけてもなんにも生まれてこないし、意味ないし。どう考えたって、いまからヒクソンに技術で追いつくっていうのはムリ。だから、そんなナンセンスなことは考えない。**いまからボクシングを始めてもタイソンにボクシングで勝つのはムリ。だけど、こういう試合だからこそ勝てないことはないんですよ、逆に言ったらね。そういう可能性がなかったら、僕は二度とやりたくないと思ってるはずだよ。**それはやった人間にしかわからない部分で、勝負になると思ったからこそ、こういう風になってるわけです」

〈本誌NO．10＝98年6月発行〉

「引き過ぎたからね、去年は。引きっぱなしだったから。でも、今年は思いきっていきますよ!」

〈本誌NO．11／エンセン井上との対談での発言＝98年8月発行〉



「日本マット界が全部地盤沈下でどうすんねん! なあ? どうするの! なあ? やられたよ!! 高田どうすんの!!」
〈97・10・14／リングス後楽園大会の共同会見で大勢の記者を前にして〉

「結果は負けだよ。ああ、見事に負けたよ。でもな、高田は高田なりに自分の体の故障と闘いながら必死な想いでリングに上がったんだよ! **そんな高田の気持ちをなにも知らんとマスコミの連中は好き勝手に報道するわけだ。〝高田は弱い〟〝UWFは弱い〟〝プロレスは弱い〟とね。ふざけるんやないで、そんなもん。**必死に闘った高田に失礼じゃないか。マスコミはなにを知っていたっていうんだ? 高田の辛い心境や故障だらけの体のことなんか、なにひとつ知らなかったんじゃないか! 高田が取材拒否してたから満足に取材ができませんでしただと? そんな理由は聞きとうないよ。拒否されても真実を突き止めることがマスコミの仕事やないか? **負けた結果だけを大騒ぎしてからに…。ファンと一緒になって〝高田は弱い〟〝プロレスは弱い〟と書いたりしやがって…。クソオ、この…」**
〈当時交渉していた、自身の対ヒクソン戦に関して〉

「ヒクソン戦は子供に戻ってムキになってヤリますよ。技術もクソもない、ムチャクチャやるよ。だって、**ヒクソンは自分で言っているじゃない。〝私は侍である。だから死ぬのは怖くない〟って。アホなこと言いなさんなって。死ぬのが怖くない奴がロープを掴むなと文句を言うんじゃないよな。**だろ? 死ぬのが怖くないなんて口に出さずに自分の中で思ってろって。そんな、死ぬのが怖いの怖くないのとほざいている奴と最後に子供のようにムキになって試合をするのもええかなと。なにも考えずに、純粋にムキになってヤリあってもええかなと思ってるんだよね。**その試合で俺がわからせてやるよ。死ぬことより生き抜くことのほうがよっぽど怖いことをね。死ぬなんて簡単なことだよ。本当の恐怖は、この人生を信念を曲げずに生き抜くこと、生き残ることなんだから」**
〈『週刊プレイボーイ』97・11／18号〉

「この世界の人間が、自分がいる役割とか立場を認識せずに逃げてばっかりだからね。誰も責任をとろうとしないでしょ? アントニオ猪木だって自分の弟子が出ていったのに〝一番弱いヤツが出ていった〟とかってね。だから、レスラーとかいう前に、人間性の問題ですよ」
〈『スコラ』98・4／23号より〉

「今、ヒクソンと試合をしようとしたらギャラだけで億の金がいりますよ。ドームクラス一杯にするぐらいしかない。**今のこの不景気な世の中で、それだけの人を集めることができますか? できないヤツがいろいろ言うのは卑怯ですよ、卑怯。**自分らの場合は強さだけじゃなく、そういうものも要求される。いろいろ言ってるヤツらは、それだけの額払えるのか、試合してもらえるほどのものなのか、できる可能性もないのに大きなこと言うな、と。**『オレは強いからヒクソンとやりたい』そんなの寝言ですよ!** もし、あなたがボクシングで世界で一番強いはずだと思っても、タイソンと試合をやろう、できる? できないでしょ。できない以上勝手なこと言っちゃだめですよ。**現実。そういう実績のないヤツ、力のないヤツの言うことは雑音ですよ。これが現実なんですよ、**今、無責任な雑音が多すぎますよ、言ったもん勝ちみたいで」
〈97・11・1／東京経済大学葵祭『リングス前田日明講演会』より〉

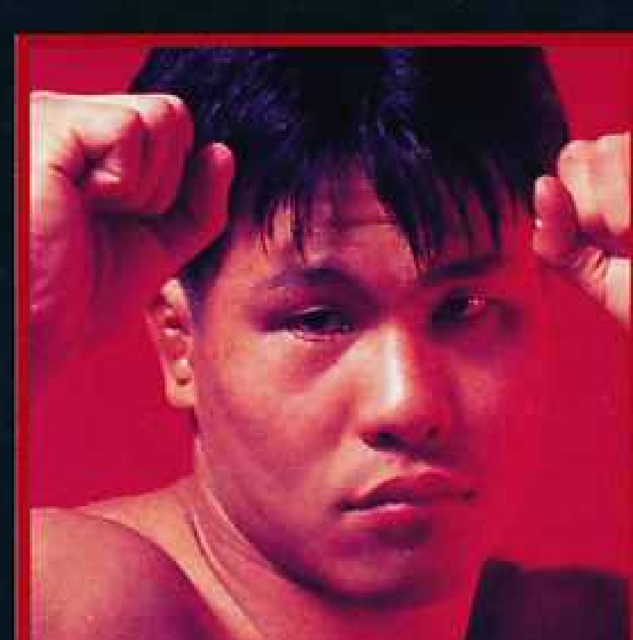


Akira Maeda

リングス総帥／思考のアルティメット・ファイター

前田日明

「(10・11試合当日に) がんばってくださいってひと言言いたくて、宮戸さんと一緒に高田さんの控室に顔を出させてもらったんですけど、なんか、僕が知ってる高田延彦じゃなかったっていうか。オーラが全然出てなくて…。それで、挨拶をしたあとに僕に**『どうしたらいいの?』**って聞いてきたんですよ。そんなことを僕に言うくらいですから、(高田は) 周りからいろんなアドバイスを聞いて、頭の中が何がなんだかわからない状況になってたと思うんです」
〈97・11・2国士舘大学楓門祭『田村潔司講演会〜真紅の美学〜』より〉



Kiyoshi Tamura

リングス／U-FILE CAMP

田村潔司

「(ヒクソンは) **邪魔ですね。どかしたいです。**『あなたのおかげでプロレス界はメチャメチャですよ』といいたいですね」
〈『スコラ』98・3／12号〉

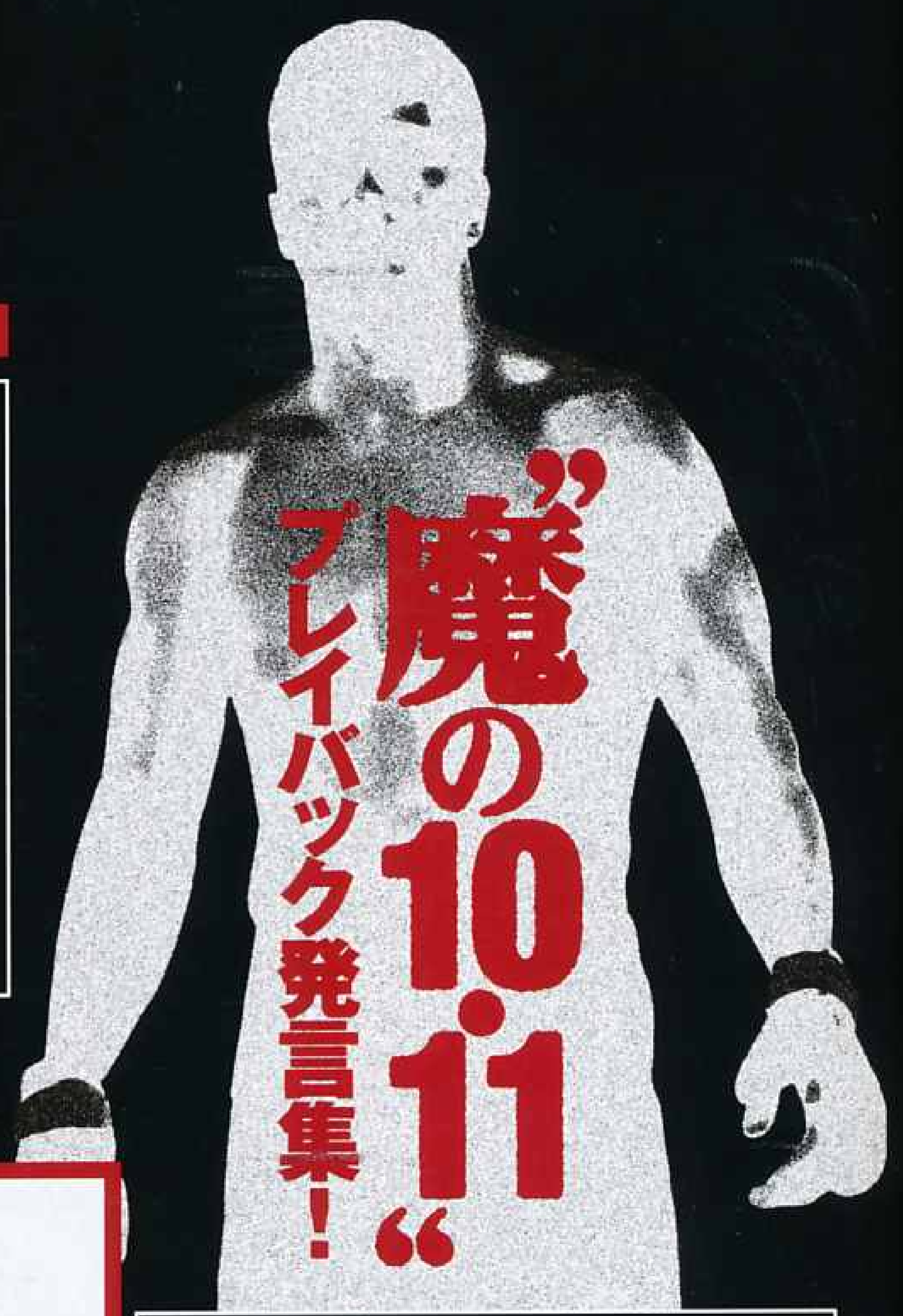


Enson Inoue

修斗ヘビー級王者／PUREBRED シューティングジム大宮

エンセン井上

”魔の10・11“ ブレイバック発言集！



プロレスの神様

カール・ゴッチ

Karl Gotch



「何か威圧されるものを彼（ヒクソン）から感じるな。グランドで上になった時から高田の腕が上がる瞬間を待っていたような感じだった。ともかく、グランドに対する執着心には凄いものがある」

「あれは私の知っている高田ではない。このヒクソンを前にした高田は戦う前から完全にゴースト（影）になってしまっていた」

〈『週刊ゴング』97・12／4号〉



「タカダ選手が弱いんじゃなくてヒクソンが強かったということだ」

「タカダ選手もいいファイターだと思う。恐らく日本では最高の選手、最高の選手の1人なんじゃないかな」

「あの試合はまるでチェスのようにヒクソンがタカダ選手をコーナーに追い詰めたという形。ああなってしまうと、もう打つ手は何もない」

〈『週刊ファイト』97・11／27号〉

Royce Gracie

ヒクソンの実弟

ホイス・グレイシー

「それでね、もし高田さんとの勝負が終わってヒクソンが引退したら納得できない。次はオレがお願いしたい。でも、高田さんが倒してくれれば納得できる」

「ワタシ、心は日本人だから。同じ日本人として倒してほしいね。で〜も、ヒクソンと2度も闘える人はいないよ。2度も闘わない理由は、ヒクソンは2度も闘いたくないからと思うよ。だから、凄くいいと思うよ。ガンバってほしいネ」

〈本誌NO.11／高田延彦との対談での発言＝98年8月発行〉



パンクラス

鈴木みのる

Minoru Suzuki

「また僕にしゃべらせて問題を大きくしようとしてるんですね（笑）。一番最初に感じたのは、ヒクソン・グレイシーという選手は、あんだけのお膳立てとお客さんのいる大舞台に上がるのは生まれて初めてだと思うんですよ。客の数というのをあまり考えていなくて、闘いだけ頭にあったと感じました。**なのに、あの人は変にチャラチャラしたのがないというか。普通、舞い上がってしまうじゃない。俺だったら間違いなく舞い上がります。**凄いな、というのが印象ですね。」

〈97・11・4／青山学院大学青山祭『パンクラス鈴木みのるトークライブ』より〉



Kazuo Yamazaki

フリー／
98G―1クライマックス準優勝

山崎一夫

「ビデオを何回も見直したけど、まずあれは明らかに高田延彦本来の動きじゃありませんでしたね。最初に構えた時から、『あ、違うな』と思いました。僕だけじゃなく、前田さんも藤原さんもゴッチさんも、高田さんをよく知っている人は全員そう思ったはずですよ。やるべきことをやらなかったのか、それともできなかったのかはわからないけど。（中略）それより僕は高田延彦が背負わされてたものが重すぎると思ってるんです。僕の認識では、あの試合は高田延彦とヒクソン・グレイシーという個人の格闘家の対戦だった。なのに**高田さんはいつの間にか『プロレスラー代表』にさせられていて、**主催者も『プロレスvsグレイシー柔術』ということを煽った。高田さんが何もできなかったのにはそういう要因が大きかったように思いますね」

〈『週刊プレイボーイ』98・6／30〉



Antonio Inoki

UFO総帥

アントニオ猪木

「プロレスにあぐらをかきかかってきたわれわれに、これでいいのか？と目を覚まさせてくれた感じかな。格闘技は本来素手で人を殺せる技術なんだよ、という部分をグレイシー柔術が気づかせてくれたというか」

〈98・11・28／龍谷大学『アントニオ猪木講演会〜闘魂の新世界観〜』より〉

〈高田選手が負けた時に、猪木さんの「よりによって一番弱い奴が出ていった」という言葉は、また波紋を呼んだんですけども〉

「ホントに弱いもん！　いや、ホントに弱いです。うちの若い衆の誰がやっても高田には負けないです！　だから、俺はヒクソンっていうのは評価しますよ。

実際に闘ってないからわからないけど。ただ、やはり柔術というか、あるいはその一族が持ってる血筋みたいなものを守ってきたってことは評価しますしね。ただ、非常に宮本武蔵的というか。剣豪っていうのは頭脳的にも優れていたんじゃないかと。要するに歴史に残るってことは必ずしも純粋でないというか、非常に世渡りがうまいということもあると思うんですよ。だから、宮本武蔵って人がもし生き続けていたら絶対誰かにやられていたでしょう。ある瞬間にどっかへスッと消えてしまった。それまでは絶対に自分より弱い相手としか闘わないという、逆に言えばね。ヒクソンっていうのは、そういう要素を持ってるんじゃないかなと」

〈ヒクソンに対して噛みついたのが前田日明ただ一人であるという状況は寂しくないですか？〉

「いや、小川も噛みついたでしょ。小川がやったら、やられないですよ。体力が違うから」

「前田日明は噛みついたかもしれないけど、実際にはやる可能性は薄いですよ。それはともかく、いま高田が負けましたと。それに代わる人なんかいないでしょ」

〈本誌NO.8＝98年2月発行〉



Naoya Ogawa

UFO
(Fighthing Aertist)

小川直也

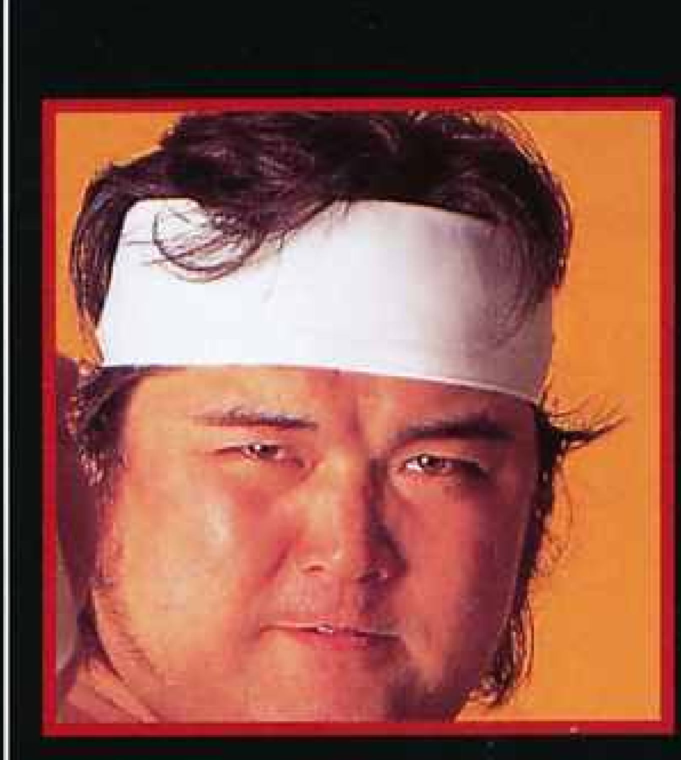
「もうヒクソンに触っちゃったから。問題はいかにして現実を受けとめるかですよね。特にファンがですよ（笑）」

「プロレスラーが強い弱いの区別なく『俺が』『俺が』で挑戦するから、負けが増えるってのもあるじゃないですか。確かにそこでも負けちゃったというのならば、プロレス側は総崩れになるんだけど、もうそれぐらいのとこまできてんじゃないの、プロレスも」

「格闘家もプロレスもないんですよ。それを区分けしちゃったのが、最強論が薄れる原因でもあると思うし。**本来、プロレスが総合格闘技だったんです。それを最初にやったのが（猪木）会長だったんですよ。噛み合わない異種格闘技戦でね。それが会長のいない間というか、議員時代に見事に分けられちゃったから、また元に戻さなきゃいけないなって」**

「今回の『PRIDE.1』にしたって、たとえ興行として成り立たなくても、本当にファンが思っていることを実現させる夢の場を提供してくれたっていうのはすごいですよね。やっぱり最終的にはファンがいったい何を求めているか、なんですよ。ヒクソン戦にしたってそうですけど、求められる試合をするのがプロだと思うし。**やるとなったらハートの問題ですよ」**

〈『Number』97・11／6号＝聞き手・吉田豪〉



Shinya Hashimoto

新日本プロレス

橋本真也

「まず、格闘家としてヒクソンにリベンジすべきだろうね。ま、負けは負けで認めて、再起すればいいと思う。同じ戦略（土俵）で闘ってしまって、本当のプロレスラーとしての闘い方ができなかったんじゃないかな。（ヒクソンに対して）何もできなかったっていうのはウソみたいな話だよ。本来、自分の持っているもので闘っていたら、もう少し展開が違っていたような気がする。たぶん、考えすぎたんじゃないかな」

〈『週刊ファイト』97・10／23号〉



Masahiro Chono

新日本プロレス／
nWOジャパン

蝶野正洋

「こないだ出た結果が高田さんのすべてと思ってない。ドームの興行なんてみると、すべての試合で全部ルールが違う。違う人間同士が闘ってその場でルールをつくっていったら、どっちかが有利なり不利なりというのが絶対出てくる。高田さんも相手もそういうルールのなかで闘わされたってのは、あのプロモーターは卑怯なヤツらだと思う。**もうルールなんかどうでもいい。とにかく人を集めて金を儲ければいいという典型的なプロモーターの形だと思ってるから、そっちの方に頭きてるし。**マスコミもそういうところを追求してほしい」

〈97・11・1／社団法人徳山周南法人会青年部主催／山口県徳山市民館ホール『蝶野正洋講演会〜プロレスに生きる〜』より〉

魔の"10.11"プレイバック発言集!

Giant Baba

全日本プロレス

ジャイアント馬場



「(高田vsヒクソン戦の結果をどう思うかの質問に)知りませんよ。プロレスラーは誰にも負けない、これがプロレスラーですよ。ね?そんなねえ、例えばボクサーに負けるとか、そんなことは絶対にありません。それだけの信念を持って練習して、普段やってるんです。だから、金が儲かればいいというだけのことじゃね。レスラーのプライドは金で売ってもらっちゃ困ります。これはね、彼が負けたことの負け惜しみでも何でもない。そう言われること、ましてレスラーが他の選手に負けるなんて有るべからずことです」

〈『スコラ』98・2/12号〉

「ヒクソン・グレイシーは知っていますよ。この間、レスラーを辞めて何かの技を研究しだしたのか高田っていうのがいますけれどもね、自分の名前を売りたい、芸能人になりたい、という人がヒクソンと試合をすること自体、僕は感心しませんね。ヒクソンとやるために毎日練習をしているんだったら理解できます。でも芸能人になりたい人たちが、格闘技戦に出場するなんて、一生懸命レスリングを勉強している人たちが迷惑すると思うんですよ」

〈『サンデー毎日』98・5/10、17合併号〉

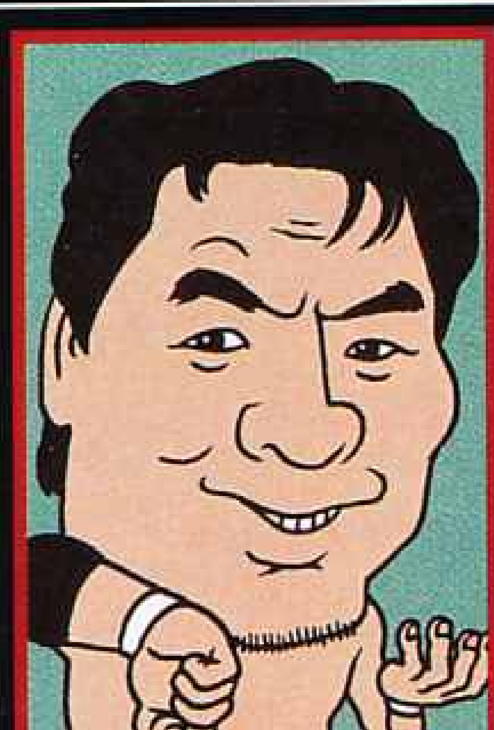
「ヒクソン? 興味はあるよね。そうだな…アルティメットのルールでヒクソン・グレイシーと闘ってみたいという気持ちは…持ってるよ」「ひとつだけはっきりしているのは、僕らは彼のようなスタイルで闘うことはできるけども、彼らは僕らのスタイルでは闘えないということ。この差は大きいと思うよ。その差に僕らはプライドを持っているしね。プロレスってそう簡単に出来るもんじゃないんだよ」「それに、彼はプロレスのことをフェイクとまで言っているんでしょ? そう言われると悔しくてたまらないよ。じゃあ、やってやろうかと思うよ。彼が日本のレスラー全員と闘って勝ったのならそういうことを言ってもいいけど、でも、実際には闘ってないじゃない。闘ってもいないのにフェイクだとか口にしてはいけないことだと思うよね。いや、とても恥ずかしいことだよ」

〈『週刊プレイボーイ』98・1/1・13合併号〉

Mitsuharu Misawa

全日本プロレス

三沢光晴



Jun Akiyama

全日本プロレス

秋山準



「これはアマチュア・レスリングやってた人間として聞いてください。やっぱりグレイシー柔術って立ち技じゃないと思うんですよね。もっとタックルとか、そこで倒してなんぼの感じですよね。もっと蹴りとかではなくて、タックルの切り方とか、相手を倒してどうこうとか、そういう練習をしたほうが良かったんじゃないかなって。今までアルティメットとかで勝ってる人を見てると、パンクラスの高橋(義生)さんとかね、あの人はボクらと一緒にアマレスやってた方なんでね、結局勝ってる人ってアマレスやっててタックル上手い人が、そういう突破口を見いだして勝ってるんで、そういう練習はしたほうがいいんじゃないかと思うんですけどね」

〈97・11・3/亜細亜大学アジア祭『秋山準講演会』より〉



Kobashi Kenta

全日本プロレス

小橋健太



「馬場さんの付け人やってたときによく異種格闘技戦の話を聞いたんですけど、やっぱり違うルールでやるのは難しい。ボクはプロレスの道に入ったからには、その道を極めたい、プロレスを磨きたいという気持ちが強いですから。もう会社からそういう試合をやれと言われれば、やるという気持ちはいつでも持ってますけども」

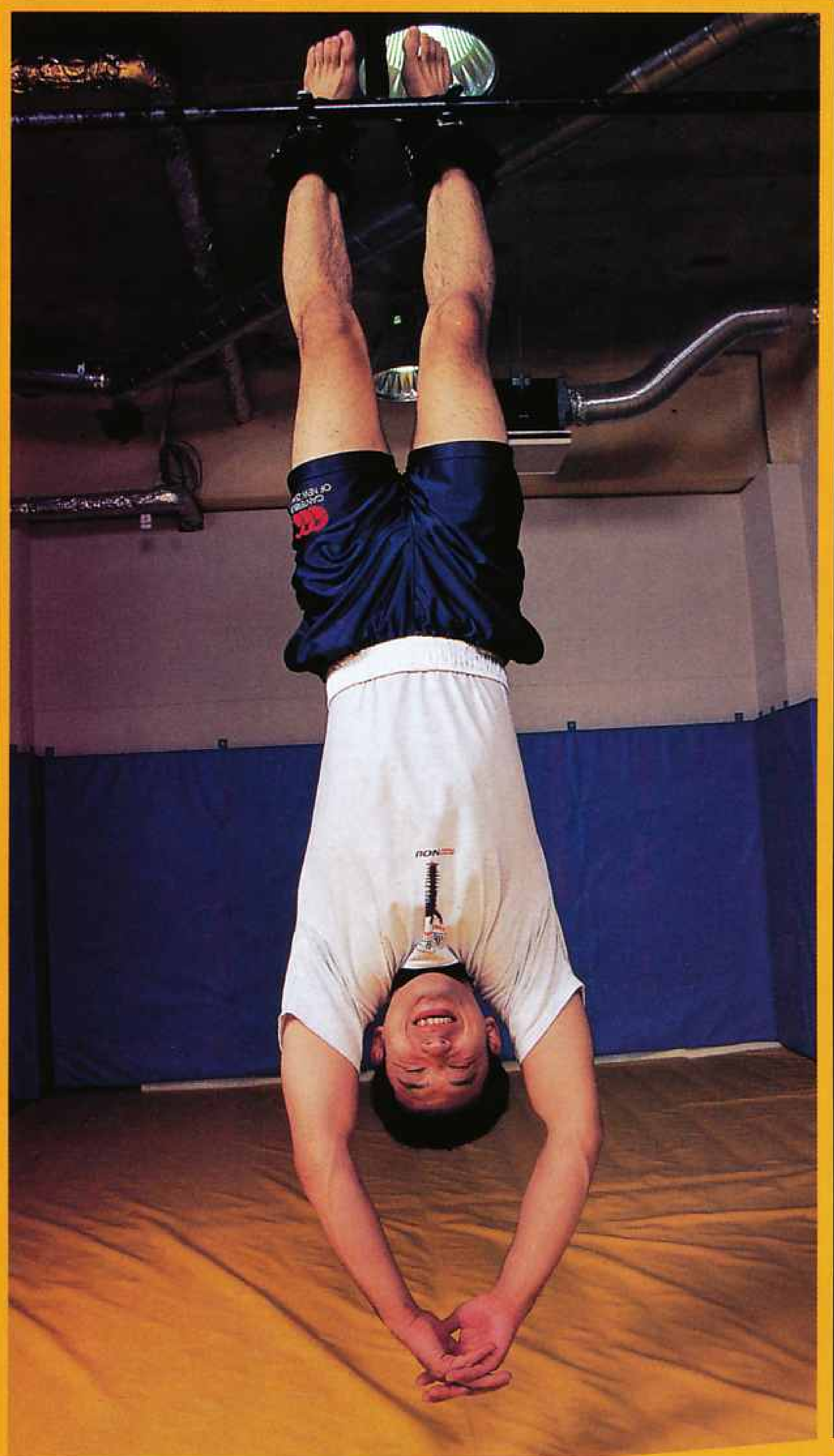
〈97・11・2/青山学院大学青山祭『小橋健太講演会〜青春の握りこぶし〜』より〉

イラスト/中川雅博

◀この続きはP42へ

聞き手/**山口日昇**
Interview by Noboru Yamaguchi
撮影/**松永源さん**
Photographs by Gensan Matsunaga

強くなりたいです!!」



……しかし、インタビュー中に「ムリですかね?」と突如あきらめる

一体何を考えてるんだ、桜庭!?

10.11アラン・ゴエス戦を見逃すな!

「サクラバ・カズシとは何者か?」

その一端を探し出せ!!



桜庭、宣言!!

「世界一

ジム生たちが練習に来る前の高田道場は実にヒッソリと静まり返っていた。靴を脱いで練習用のマットの上を歩き、奥の事務所に向かおうとしたときのことだ。柱の死角になっていた暗がりの部分から、突如声が轟いた。「おはようございますぅ（ちょっとニコニコ）」。驚いて声の主の顔を見ると、桜庭和志（格闘家・29歳）だった。なんと彼はマットの上で眠っていたのだ！　マットと同化するニコニコ鉄人!!　10・11のアラン・ゴエス戦でこの男のまだまだ謎のベールは果たして剥がされるのだろうか——。

——桜庭さん！

桜庭　ふぁい。

——起きてますか？（笑）。

桜庭　5時から生徒さんたちが来るんで、ちょっと昼寝しようかと思ってたんですよ。

——すいませんね、そんな大事な時に（笑）。ところで、いまは団体経営というシステムが金属疲労を起こしていて、こういった道場も増えつつありますよね。

桜庭　う～ん、いいと思いますよ。一般の人に技とか教えれば、お客さんとして観戦してても、どうしてあの技がかかるかとか理屈がわかるじゃないですか。見てるだけだとやっぱりわかんないところはわかんないですから。実際、自分で経験することで、なんであの技はこういうふうにかかるのかとかわかるから。それに団体には誰も入って来ないですもん！　みんな逃げますもん。いまの高田道場の会員と同じ人数の練習生が団体に入るなんて、絶対考えられないじゃないですかぁ。

——競技人口が増えれば、世界を動かすような逸材がマット界に誕生する確率も増えますよね。で、桜庭さん自身も6月24日の『PRIDE.3』では、難敵のカーロス・ニュートンに勝って、またもや認知度がグーンとアップしましたよね。

桜庭　え!?　そうですかね？

——CMにも出たし（笑）。それでもまだ桜庭志は「ボクは有名になりたくない」と言うのか否か、というところが今日の重要なテーマですかね（笑）。

桜庭　中途半端な有名ならいいですね！（ニコニコ）。

——へ？

桜庭　高田さんとか前田さんみたくなったら、そこらへん歩いてるだけでみんな見るじゃないですか。鼻クソほじってられないじゃないですか。それがイヤだから（ニコニコ）。

——ガハハハハ。鼻クソほじれないのがイヤ。どんな『格闘家（29歳）』だ（笑）。

桜庭　わかる人にはわかるくらいの、その程度でいいです。

——しかし「中途半端」という、一般的にはイメージの良くない言葉を強く打ち出す人も珍しいですね（笑）。

桜庭　試合会場に行けば騒がれてもいいんです。ただ、普段その辺を歩いてる時は、ほっといてくれって。だって何にも出来なくなるし、自分の行動に気を使わなきゃいけないじゃないですか。それがイヤですね。

——誰かに気を使うのもイヤ？

桜庭　でも、ボクに対しても気は使わなくていいです。

——「だからオレも気を使わないゼ！」と。

桜庭　ヒャハハハ。そう言ったらそうなんですけど。

——ところで、間近で見ていて、大一番を控えた高田さんの仕上がり具合っていうのはどうなんですか？

桜庭　いいんじゃないですか。去年の試合の時は、何かわかんないけど、凄い痩せてたじゃないですか？　病気じゃないかなっていうくらい。

——ホントそうでしたね。憔悴してたっていった方がいいですね。

桜庭　その頃と比べると、今回は気を張ってるわけでもなく普段通りですからね。今年は力も全然違うんですよ。いまスパーリングするのと、去年のいま頃スパーリングしたのとじゃ、力が全然違いますからね。

——去年のちょうどいま頃だったかな、桜庭さんと話しをした時、「高田さんの凄いところってどこ？」って聞いたら、「気持ちが強い。練習でも、こっちがイヤになってもやめない」って言ってたんですけど、最近の高田さんはどうですか。

桜庭　う～ん、最近の高田さんは、ボクと

一緒の時はそこまではやらないですね。去年のヒクソン戦の前はやってましたね。正直な話、「まだ終わんねえのかよ～」「キッツー!!」って感じでした。ボクと金原（弘光）さんと交代で高田さんの相手してたんですけど、ボクらは交代でやってても凄いキツかったですから。

――それだけ身体をいじめないと、精神的に不安な部分があったんですかね。

桜庭　そうかもしれないですね。

――じゃあ、今年の高田さんはいい意味で力が抜けてる感じですか？

桜庭　はい。

――「桜庭魂」が高田さんにも宿った（笑）。

桜庭　アハハハ。でも、普段練習してる時は、普通の状態でやってるわけじゃないですか。試合になったからって、気持ちだけガーッて上げてやっても、リング上で考えられることも考えられないと思うんですよ。だから、いつも通りにやってればいつも通りに考えられるし。普段の練習を試合のようにに気持ちをガーッと上げて練習してるんだったら、試合でもそういう頭の回転は出来ると思いますけど。試合だからといって極端に上げすぎても、良くないじゃないですか。

――なるほど。今回、もし高田さんがいかれたとしたら、次は「打倒・ヒクソン」に名乗りを上げるしかないですね、桜庭さんが。

桜庭　ベッ！　でも、高田さんはやってくれますよ！　やってくれたらボクが高田さんを倒して、それで高田道場を桜庭道場に変えるっていうのはどうですか？　ウヒャヒャヒャ。

――掟破りの道場破り（笑）。でも結局、経営とかタッチしないし、ジム生も教えないでパチンコとか行っちゃうんでしょ（笑）。

桜庭　ああ～、そうですね。ボクは忙しいのはイヤですから（笑）。

――高田さんと闘ってみたい気持ちはあるんですか？

Kazushi Sakuraba

桜庭　う～ん、でも練習（一緒に）やってるからなぁ。

――1年間一緒に研究してきて、ヒクソンの弱点とかもかなり見えてきてる部分ってありますよね。

桜庭　彼、持ち上げタックルされてますからね。

――ああ、木村浩一郎選手にですね（95・4・20『バーリ・トゥード・ジャパン』）。

桜庭　あれ、落とし方がちょっといけなかっただけで、シッカリ落としてれば、いい位置取れてたんじゃないですかね。

――高田さんに勝機があるとしたら打撃という声が多いんですけど。

桜庭　足技もイケるんじゃないですか。あと上半身（の関節）っていったらアッチの方がずっと長いことやってますからね。生まれてすぐやってるんですもんね。

――子供の頃からやってんですよ、奴らは（笑）。でも、昔は「倒せばプロレスのもの」「寝かせて関節で仕留めるのはプロレス」って他の格闘技と対峙した時は言われてたのに、それがグレイシーに取って代わられてますね。いつの間にかブラジルにお家芸を取られたという感じで。そろそろブラジルの天下を終わらせたいですね。

桜庭　いま一応、ヒクソンが一番上を取ってるだけで、下の方もドンドン出てきてるじゃないですか。だから追い詰められてるんですよ。あ！　こないだ思ったけど、ブラジルはこういうつくりなんですよ。（床にピラミッドの形を書く）

――ピラミッド型ですか？

桜庭　そう。実力が。一番強い人が上に一人いて、その下に何人かいて、またその下に何人いてっていうピラミッド型なんですよ。だから、下から崩していけば、残り少なくなっていくじゃないですか、ブラジル。で、ボクが一緒に練習してる人たちの間の形って形が違うんですよ。こ～ゆ～つくりなん

さて問題です。試合をすること、パチンコをすること、ゲームをすること――。それ以外に桜庭和志の好きなことがあります。次の3つのうちから答えてください。**1.人に見られること。2.人にかまわれること。3.眠ること。**さて、答えは何番でしょ――！　なお、答えは下の写真をご覧ください。
※写真モデル＝練習用のマットの上でタオルケットをかけて眠るキッズ・ファイター（ウソ）



他人にはオーラは見せないんです 見せるとみんなが見たがるから

去る6・24に行われた『PRIDE.3』では、“褐色の宮本武蔵”カーロス・ニュートンと対戦した桜庭。この試合で今年の東スポ選定・VT系年間最高試合賞は間違いない（そんなのないけど）。桜庭のグラウンド・テクは冴え渡り、ニュートンの“ボール”が転がりだす前に封じ込んだ。『PRIDE.4』でのゴエス戦では、ニュートン戦の要所要所で冴えた打撃で活路を開くのか、それとも、サク・スペシャルともいえるマット捌きで対応するのか。要注目の一戦だ







【アラン・ゴエス】1971年、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ出身。ブラジリアン柔術（カーウソン・グレイシーチーム）。柔術界一のトラブル・メーカーと呼ばれ、タンク・アボット、高橋義生など試合外の因縁の相手にも事欠かない、柔術150戦無敗男。95年にパンクラスのリングに初来日。フランク・シャムロックと対戦し、フルタイム・ドローとなったが、ポジション取りでは終始圧倒。カーウソンチームきっての寝技師ぶりも証明した。大丈夫か、桜庭!? 大丈夫だね、桜庭！

ですよ。（床に横幅の広い長方形の形を描く）

——エ？ どういうことですか？

桜庭 真っ平ら。日本は、みんな上の方が同じくらいのレベルで、誰か一人崩れても平らだから崩れない。まだ他に強い人が何人もいるから。

——だから桜庭さんは負けてもいいんだという言い訳にしようとしてませんか（笑）。

桜庭 アハハハ。でもホント、いまはブラジルと日本じゃ形が違うんですよ。

——ところで『PRIDE.4』では、そのブラジルのアラン・ゴエス戦が決まりましたけど、アラン・ゴエスという選手は知ってました？

桜庭 知ってますよ。アメリカのアルティメット大会を見ました。

——その時の印象は？

桜庭 すぐキレる人で、よくないな～と。喧嘩したとか言ってるじゃないですか。

——アルティメットの会場で、タンク・アボットと乱闘騒ぎしたのは有名ですね。

桜庭 でも、こないだタンク・アボットと一緒に写真撮ってたじゃないですか。なに考えてんだろう？って思いましたよ。

——で、その、なに考えてるかわからないゴエスと、これまたなに考えてるかわからない桜庭さんの対戦が注目されてるんですけど（笑）。

桜庭 またですかぁ？（ニコニコ）。

——ええ、またもや（笑）。

桜庭 あ、アレ面白そうですね。マーク・ケアー対ウゴ！

——そうやって話をはぐらかすならついでに聞きますけど、その2人だったらどちらと闘いたいですか？

桜庭 そりゃあ、マーク・ケアーですよ。

——やっぱり同じアマレス出身の猛者同士ということで。

桜庭 だって顔が怖くない。ウゴより。

——はらら。顔の問題ですか（笑）。問題なのはゴエスなんですよ。なにかゴエスさんに向かって言っておきたいこととかないですか？

桜庭 「お客さんがお金を払って見に来てくれるんだから、面白い試合をしましょう。ボクに勝たせてください」って言いたいですね。

——ガハハハハ、「オレが潰してやるゼ！」とかそういうのはないんですか？

桜庭 いや～、ないです（ニコニコ）。

——でしょうね（笑）。

桜庭 だって、ここは日本なんだから、ボクが勝たなければ面白くないでしょ。あ！こういうのはどうですかね？ ボクがブラジルで試合することになったら負けてあげますよ（笑）。

——ガハハハハ。バーターしてどうする（笑）。でも、アラン・ゴエスといえば、非常にキレやすいタイプというイメージですよね。

桜庭 いや、でも、キレてもらった方が多分、やりやすいと思います。だってキレたら自分で考えられなくなるじゃないですか。殴るだけとかになるんで、こっちの思うツボですね。

——桜庭マジック！（笑）。ゲーリー・グッドリッジとかみたいにパワーをフル回転させてくるタイプとはまた違うと思うんですけど。

桜庭 こんな風にやってきそうですよね、「ギャーッ!!」って（腕を子供の喧嘩のように振り回す）。キレて。

——そこまでのタイプですかね？

桜庭 ボクにはそう見えました。「ギャーッ、コノヤローッ!!」って。そしたらさらにまたボクの思うツボ。タックル入りやすいし（ニコニコ）。

——でも寝技が得意な選手でもあるから。

桜庭 まだ1回も肌を合わせたことがないんでわかんないんですけど。寝技が得意というより、寝技しかないじゃないですか！柔術やってんなら。だから、それが得意じゃなきゃどうしようもないですよ～。

——今回も密かに自信ありそうですね（笑）。対ブラジルということに関しては何かありますか？

桜庭 う～ん、そんな気負うような部分はないですけど、ブラジルの柔術は、競技人口が多くてレベルが高いから、いつもより気合い入れてやらないとダメだなとは思います。でも、ブラジルってスポーツとか凄いですよね、サッカーとか。なんでですか？

——あ、ボクに聞く（笑）。お姉ちゃんのボリュームが凄いということはわかるんですけど（笑）。

桜庭 きっとアマゾンがいいんじゃないで

格闘TEPODON!! '98
踊れ！10.11!!

すか？

――へ？

桜庭　緑がいっぱい。いい空気吸って。いい酸素を吸えば、強い人がいっぱいできるんじゃないですか？

――「日本のマット界もいい酸素がいっぱい吸えるようになればいいですね（格闘家・29歳）」という見出しにでもしましょうか（笑）。でも、リオのカーニバルとか見ても、ブラジルって尋常じゃないですよね、エネルギーが。

桜庭　狂ってるっていうぐらいまでいってますよね。でも、それを言うなら日本の祭りも負けてないと思いますけど。

――でも日本人って、いま疲れ切っててそういうイメージがないですよ。どいつもこいつもかったるそうで。

桜庭　ボクも練習して、飯食ったあとはかったるいですよ（ニコニコ）。

――ガハハハハ。いや、桜庭和志のかったるそうなのはまた別種のモノですよ。騙しですからね。エネルギーの埋蔵量を隠す天才！（笑）。

桜庭　アハハハハ。他人にはオーラは見せないんですよ。

――それはなぜ？

桜庭　オーラを見せるとみんなが見るから。

――ガハハハハ。じゃあ、なんでプロのリングに上がってるの？いつも聞くけど。

桜庭　う～ん、やっぱり……人と触れあうことですかね。

――マジメな顔してよくそういうこと言いますね（笑）。

桜庭　ヒャハハハ。でも、やっぱりレスリングが面白いんですよ。

――じゃあ、アマレスがプロ化したらそっちに行く？

桜庭　行かないですよ～。関節技がないと面白くないです。最初からこういうのをやりたくてアマレスを始めましたから。

――じゃあ、この世界で世界一強くなってやろうとか……。

桜庭　それは思いますよ！

――オーッッッッ！　衝撃発言ですね。

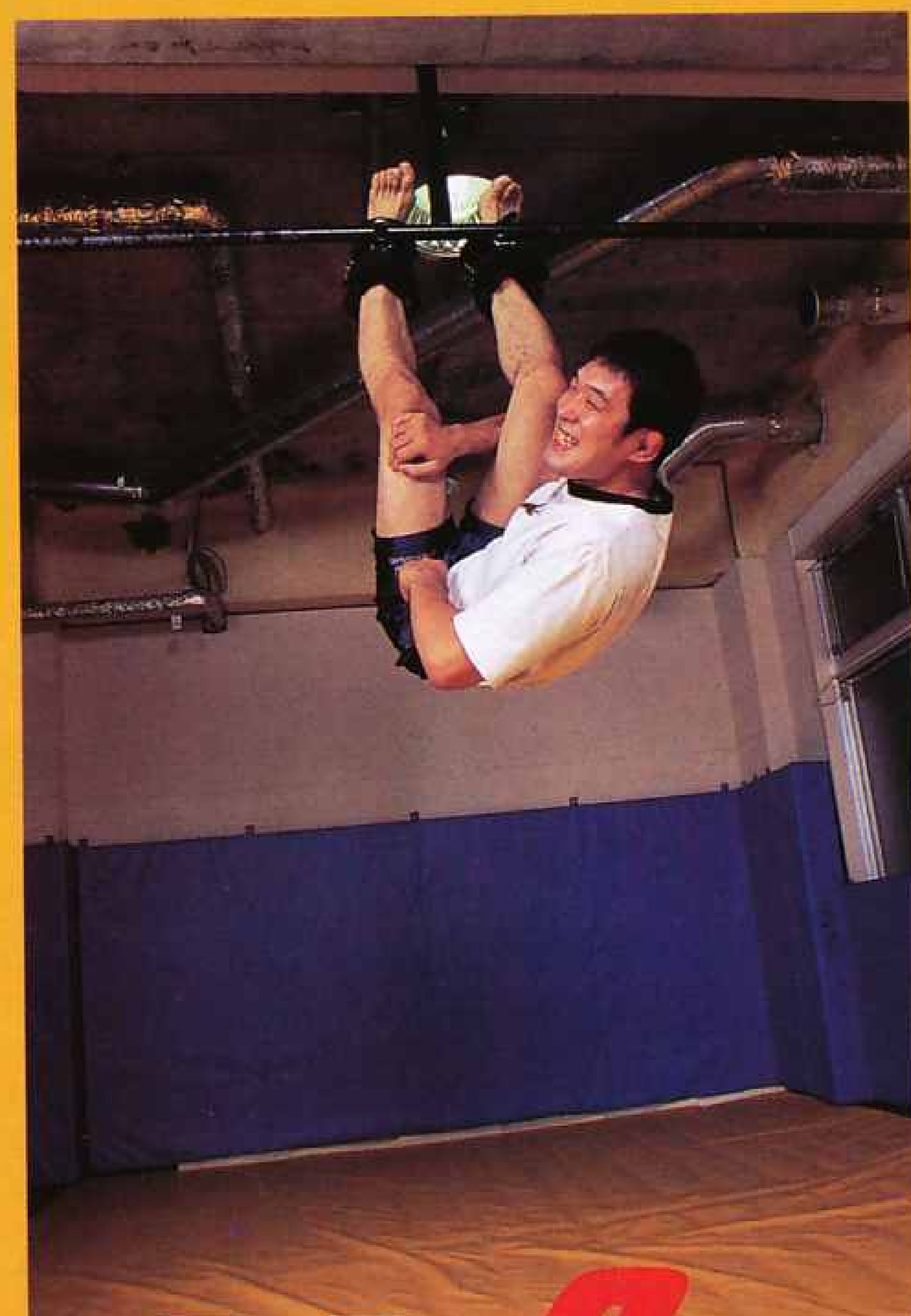
桜庭　陰でひっそり。

――ダハハハハ。そうきますか。

桜庭　バーリ・トゥードとかって、マンガのタイガーマスクに出てきた「地下プロレス」とか、ああいう感じですよね。

――アルティメットとか、まさにそうですよね。だから、タイガーマスクじゃないけど、いろんなバックボーンを持った、いろんなキャラクターが出てきたら面白いですね。

桜庭　マンガみたいに鍵がなければはずせないマスクとかはめた、そういうヤツも出てくるんですかね？（ニコニコ）。



Kazushi Sakuraba

――それこそ『虎の穴』みたいな秘密道場なんかあったら面白いですよ。桜庭さんとしては、バーリ・トゥードの世界で世界一強くなりたいんですか？

桜庭　…………。

――空手やボクシングで世界一強くなりたいというならわかりやすいけど、桜庭さんが目指す世界一っていうのは何の世界一なんだろうって素朴な疑問があるんですけど。

桜庭　う～ん…………やっぱムリですかね？（ニコニコ）。

――ガハハハハハ！　なんでインタビュー中にあきらめる！　でも、結局は、どんな状況であれ、場面であれ、どんなルールであれ対処できるということですよね。

桜庭　イコール、「プロレス」じゃないですか！

――そういうことですよ！　バーチャルじゃないプロレス（笑）。そこにタイガーマスク的な世界が絡んできたりすると、非常にワクワクドキドキの世界になりますよね。

桜庭　ツバ飛ばしてもいいんですかね？

――へ？　まったく言うことが唐突ですね（笑）。でも、狭い枠に限定するんじゃなくて、いろんな発想や考え方をすることによって人間の知恵って発達していくもんじゃないですか。

桜庭　そうですね。技や試合の展開もそうですからね。

――いまはまだ総合の世界が地盤固めの時期だから、興行面にしても技術面にしても生真面目な方向に目を向けざるをえないけど、将来発展する過程で、例えばトップロープを使っていいルールが出てくる可能性もゼロではないだろうし（笑）。

桜庭　あ！　バケツ使ってなんかやってたじゃないですか、マンガのタイガーマスクで。バケツを履いたままドロップキックしてましたよね。そういうのもいいんですかね？

――ホントに強い人たちが、夢があって広がりのある世界を作ってくれればバッグンですよ。ところで、いま桜庭さんが、日本でライバル視してる選手とかいますか？

桜庭　みんなやってみたいですね、練習でもいいから。

――桜庭和志激白！「みんなとやってみたい！」（笑）。

桜庭　バトルロイヤル形式で（笑）。

――バーリトゥード・バトルロイヤル（笑）。

桜庭　でも、コーナーのとこにへばりついて出てこない。

――馬場さんじゃないんですから（笑）。

桜庭　で、最後の最後においしいとこだけ取ってね（笑）。

――でも、リングス、パンクラス、シューティングも含めて、もっともっとワクワクする世界をつくり上げてほしいですね。

桜庭　そうですね。夢のある世界にはしたいけど、ボクは中途半端に有名でいいです（ニコニコ）。

――またそれだ（笑）。

【9月8日／高田道場にて収録】

10.11（日）　17：00　東京ドーム

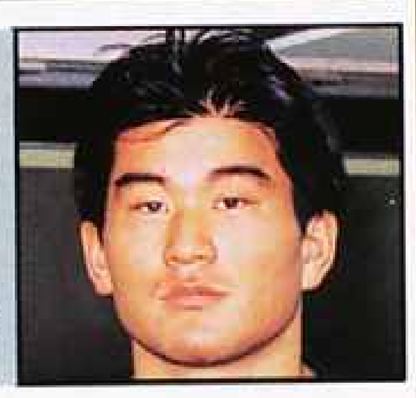
『PRIDE.4』

桜庭和志vsアラン・ゴエス
【高田道場】　【ブラジリアン柔術/ブラジル】



緊急決定!!
佐野友飛vs本間聡
【高田道場】　【フリー】

ホイラー・グレイシーに敗れて以来の出陣となる佐野と、これまた久々の試合となる本間の玄人注目の一戦も組まれた。かなり渋い対決だ!



これで『PRIDE.4』には高田道場勢から、高田、桜庭、佐野、松井とほぼフルメンバー（ゴメン、豊永）が出場。それぞれがどんな活躍を見せるのか、非常に楽しみだ（ニコニコ）。

前田日明の
WORLD MEGA-BATTLE 人生相談



格闘王から相談王へ 復活！

教育的指導企画 高校生祭り

第7回

人生は語らず

旧日本海軍の最強の戦闘隊として有名な台南航空隊という撃墜王揃いの零戦隊で、隊全体の教育指導を預かる先任搭乗員として隊全体をリードし、自らも撃墜王として、有名な坂井三郎さんという人がいる。いまもご健在だ。

そんな坂井さんの言葉は生死を達観した者のみが持つ不思議な明るさと重みを持っている。いまあるシタリ顔で書いた武士道の本に書いてあることが、チンケに思えるほどだ。

実際に戦争を闘った人は、本当の武士のたたずまいがあるし、「存在」そのものの迫力が違う。

そんな坂井さんから聞いた話で印象に残った話。

ある時、旧海軍の零戦搭乗員の生き残りで構成する「零戦搭乗員会」に出席した時の坂井さんと昔の部下の会話。

「分隊士、お別れにまいりました」

「どうしたんだ?」

「この度、医者よりガンを宣告されました。余命いくばくもないそうです」

「そうか、お前も遂にお迎えがきたか」

「じゃあもう会うこともないな」

「そう思ってお別れにまいりました」

「来年は忙しいので、お前の葬式には行けないな。だから香典はいまやるよ」

「じゃあ財布ごと頂きます」

「財布は勘弁してくれよ」

「分隊士、何をおっしゃるんですか。靖国神社でみんなに会った時に、分隊士は昔もいまも気前がいいと伝えておきます。ありがとうございました」

ここまで話したあと、坂井さんはニヤッとした。

「どうしたんですか?」と自分が尋ねると、「そいつ3年たったいまでもまだ生きているんだよ」と真剣な顔をして言った。

「ガンというのは冗談だったんですか?」と尋ねると、坂井さんは遠くを見つめながらこう言った。

「なあに。あの戦争でも死ななかった奴だから、ガンぐらいでは簡単にはやられんさ」

そう言うと坂井さんは、子供のような顔になって笑った。

構成／山口日昇
text by Noboru Yamaguchi
撮影／松永源さん
photographs by Gensan Matsunaga

私は、顔に特徴のある……ひらたく言えば「ヘンな顔の人」を見ると、どうしても笑ってしまいます。本人の前でもかまわず笑ってしまうので、相手は私のことを感じ悪いと思ってるかもしれません。せめて本人の前で笑わないようにするにはどうしたらいいですか？（サル・17歳・女子高生）

これは全然問題ない。ドンドン笑ってやりましょう。しかし、この場合、笑い方にコツがあって大笑いしちゃダメで、ニコッと微笑むくらいにしときましょう。笑われた方は女子高生に好意を持たれたと勘違いして大喜びするはずだから。

ハナ垂れ小僧からオジンまで、女子高生にニコッとされれば、それからの時間が、えもいわれぬ楽しい気分で過ごせる。とくに朝の通勤通学にそんなことがあれば、1日をエラく幸せな気分で過ごせる。だから、人助けとだと思って、思いきり笑顔をふりまいてやることやね。

ただし、問題が一つある。

この子がニコッと笑っても、間髪入れずに蹴りを入れられる場合がある。それはどういう場合かというと、この子が、頭の悪さや、心の浅はかさ、性格の悪さが現れたような変な顔の場合。つまりブス！（こういうのをブスと言うんです。容姿だけじゃない。わかったか？　ヨーシ）

ブスがニッコリ笑っても「ブスのクセになにを人の顔見て笑っとるんじゃ！」って、いきなり蹴りを入れられる危険性は大やからね。自分の頭と性格の悪さに自信のない場合は相手の手足が届く距離を取って、いつでも逃げられる体勢を整えてからニコッと笑ってあげることやね。

それからね、「相手が私のことを感じ悪いと思ってるかもしれません」って書いてあるけど、そういうことは、この子はやっぱりそういうブスの可能性があるかもね。

もしそうであるならば、この悩みを根本的に解決することができる。

他人の前で笑わないようにするには、自分の中にある性格の悪さや知能の低さ、下品さのにじみ出た顔を鏡で見て、自分で自分を笑うしかないということっちゃ。

私はとくに派手ではないし、ふつうの高校生です。ルーズソックスも嫌いなのではきません。なのに制服で歩いていると、どっかのオッサンにさそわれます。女子高生ならみんな金で何とかなると思われているのかと思うと、すっごくイヤです。こんなオヤジにわからせるにはなんて言ってやれば一番いいんでしょうか？（ミキの妹・16歳・女子高生）

これはチョロイで。「アタシにそんなことをすれば一生後悔させてあげるわよ。勇気がないならやめた方がいいんじゃないの。お父さんヤクザだし、兄は右翼、弟は暴走族、それにアタシはエイズかもよ」って言えば一発や。

でもね、ハッキリ言って、オヤジに誘われるいまの女子高生の服装を見てると、海外の売春婦と服装がまったく同じなんだよ。立ち方とか胸の出し方とかね。肌にピチッとした格好で髪の毛はマッ茶だし、顔はオバケが化粧したようだしね。見るからに「私、アホなの～」っていう看板ブラ下げて歩いてるようなもんや。

言葉使いもハッキリ言ってパー。人間と人間がコミュニケーションする時には、どういうボキャブラリーを使うかということで、その人間というものがだいたいわかってくる。

「超ムカツク～」とか言われたら、こっちも合わせて「超食べたい～」とか言ってホテルに連れ込んで、「ムカツク～」とか言われたら、「超カワイイね。俺たちの出会いって運命的じゃん」とかごまかせば、一発デキルんじゃないかと思わせちゃうからね。

子供が泣いてる時に「あっ！　○○ちゃん、アレなに？」とか言ってると泣きやむじゃない。それぐらいのレベルだと思っちゃうね。

MAEDA



この子は派手じゃないし、普通の高校生って書いてあるけど、この普通っていうのがまた何が基準なのかわからないからね。いまの子たちは妙に個性的個性的って言うけど、やってることはまったく同じ。カルガモの行列や。

いまのチーマーやらなんやらにしても見てもだらしないだけなんだよね、男も女も。デレーッとしてさ。「お陽さまに照らされてボォ～ッとしてる間に、脳味噌のシワが全部伸びちゃったぁ」って感じの子ばっかりでしょ。「ワタシ、ノー天気パー子なのぉ」っていうかね。

いまふうに履き違えた個性的というものになろうと思ったら、格好の問題で、ニューギニア住の原住民が、自分たちの部族の最高のメーキャップと衣装を、部族の踊りを交えて覇を競うコンテストがある。

シンシンというお祭りなんだけど、そこに出てくるような格好をすればいい。しかし、バカにしちゃいけない。写真集で見たシンシンの中のメーキャップと衣装は本当に絵になって美しかった。これぞ個性と思うくらいだ。あのレベルは感性のない奴にはムリだと思うけど。

で、なんの質問やったっけ？　ああ、だから、声をかけてくるオヤジはけっこう意気地なしが多いから、思いっきり脅かしてやればいいだけのこと。でも、オヤジのこと考える前に、自分の脳味噌に皺があるのかどうかよ～く調べるこっちゃね。

やせようと決心してダイエットを始めても、つい食べてしまいます。日明兄さん、自分をいましめて、ダイエットを続ける良い方法はないですか？（スズ・17歳・女子高生）

コラ！　これはまさか俺への当てつけやないやろうな？　俺も最近は「太った」とか言われるけど、身体の燃費が良くなっただけやからね。それに身体を動かさない分、頭をその数倍動かしとる。それは例えると、白鳥は優雅に泳いでいるが、水面下では足を必死に使っているように。そこを勘違いせんように。

つい食べてしまうってね、ホントはダイエットなんて必要ないんだよ、この子も。いまはみんな女の子はダイエット、ダイエットっていうけど、「ダイエットしたい」っていう子を10人並べてみても、そのうちの8人ぐらいはダイエットの必要はないよ。あとの2人だってそんなにダイエットするほど悩むことはあるんかな？っていうぐらいのもんや。ホントにダイエットが必要なくらいデブな子っていうのは、まずいない。

胸が出て、ケツが出て、足首がキュッと締まってれば女の子はバッチリですよ。それに10代っていうのはほっぺたにプッ

クリと張りがあるから可愛いもんなんや。10代の時から30代の女みたいに頬がコケてやつれたような女おるやんけ。ああいうのを見たらゲッソリするよ。無人島にどっちを連れていくかっていったら、ふっくらした30代を連れていくよ、俺は。40歳近くになってくるとルノアールの裸婦みたいな、ああいうのがいいなって思いだすからね。

ふっくらしているのとデブは違う。

若いうちはふっくらしよう。

だからダイエットなんてする必要はなし！ 健康的が一番。以上！

前田日明の
WORLD MEGA-BATTLE 人生相談
人生は語らず

Q **現在、つきあってる彼がいます。今年は2人とも受験生なのでだんだん会える時間が限られてきてしまいます。それに、卒業して別々の大学へ行ってしまったら、ますます会えなくなって別れてしまいそうで不安です。会えなくても恋愛を長続きさせるにはどうすればいいんですか？**

（ひとみ・17歳・女子高生）

A これは彼が2人いるっちゅーこっちゃないやろな？ 文章がヘタでよくわからんけど。そうじゃないんだったら簡単なこっちゃ。二人で大学落ちればいい。

あとは彼氏を妊娠親父固めに落とし込んで自分の亭主にするかやね。そこまでしたくないと思うんだったら、そんなのは悩みじゃないよ。大学に行っても続くもんは続くしね。それに一浪して彼氏と同じ大学に行くとかさ。いろいろ手はあるやん。

だいたい「ますます会えなくなって」っていうけど、「ますますデキなくなって」っていう悩みじゃないの？

だって、最近の女子高生は凄いで。この間、友達と喫茶店でコーヒーを飲んでたら、後ろの席に女子高生がおってな、「私の彼氏はマッハ君なの～」とか話してるわけや。「マッハ君ってなんだろう？」って聞いてたら、なんのこっちゃない、早漏のことやねん。「そのマッハ君は何分ぐらいなんだろう？」って、さらに話を聞いていたら、「10分」やって。ということは、俺はひょっとして高速エスパーか？ ウルトラマンという噂もあるけどな。それにしても、いまの女子高生ときたら、もっとマシな話ができないのか。

ま、バカな話はここまでにして、だいたいね、「愛」と「恋」は違うということをキミはわかっているのかね？

「恋」っていうのはともかく好きなだけ。カレーよりもレバニラ炒めが好きだとかと同じで、だから嫌いになるときも、例えばメシを食ったあとに「爪楊枝でシーシーしたから嫌いになった」とか、「私の前でおならをしたのが許せない」とか、なんかの拍子にすぐ嫌いになったり。そういうのはただの「恋」。

「愛」というのは違うんだよ。「愛」っていうのは、例えば待ち合わせして遅れたら「なんかあったんじゃないか？」って相手を心配する。そこに、待たされてイライラする自分はないわけや。だけどそれが「恋」のレベルだったら「遅れてきやがって、チキショー！」って相手を怒るだけやねん。

だから「愛」があったら彼氏が別の大学に行っても全然関係ないんだよ。

ただ問題はね、女の子の方が「愛」なのに、男の方が「恋」の場合。男の場合は「恋」よりも〃行為〃が好きやからね。それを女の子は「愛」だって受け止めちゃうんやね。

だいたい男は20代の頃までは性欲だけやで。性欲が70%、精神的なものが30%、そういうもんですよ。だから、女の子もとりあえずはハナ垂れ小僧を相手に「恋」をして、本当の「愛」は30歳過ぎの大人の男で経験すると。



しかしね、いまは25歳過ぎても馬鹿なこと言う奴多いし、30歳過ぎたってクルパーのこと言ってるわけのわからん奴がいるから一概に30代がいいとはいわない。しかし！ 心身ともに中身が詰まってる男と恋愛しなきゃあかん。

中身のぎっしり詰まってる男とは何か？ それを教えてほしかったら、写真でも送ってくるように。場合によっては俺が教えてあげましょう。

Q **顔もカラダも、すごく自分好みだけど、平気で人に「あたしの前から消えて！」とか言う女と、顔もカラダもフツウだけど人にものすごく気を使う女とでは、どちらを選ぶのが男としては賢い選択なんでしょうか？**

（タケイチ・17歳・男子校生）

A こいつはなかなか…チンケやな。選択する前に両方ともうまくやるにはどうしたらいいかを考えたらええやんけ。

「あたしの前から消えて！」っていう女を、「あたしの前から消えないで！」って言わせるにはどうしたらいいか？ それを必死になって考えることで人間の知恵というものが発達するわけですよ。その場面を読んで相手が何を考えているのか、どうされたいか、どうされたくないか、その場その場の場面を読むんやね。

喧嘩と一緒でね、相手が何を言われたら闘志が燃えて、何を言うと闘志が萎えてとか、そう

いう場面や雰囲気を読む訓練なんだよね
だいたい、こんなのはね、男として取り上げるような問題じゃないよ。男なら2人とも全身全霊をかけてガンバっていただきなさい。

古事記に2人の神様の話が出てくる。1人が男で1人が女。で、女の神様は言うんだよ。「あなたの出っ張ってるところと私の引っ込んでるところを合わせてまぐわいましょう。そして国を作りましょう」って。そういうもんですよ、建国の精神っていうのは。気だてのいいのも悪いのもチューしちゃえばええんや。

つまり、排他の精神じゃなくて、和合の精神。

Q ボクは日明兄さんみたいに「イヤなことはイヤ！」と言える生き方がしたいです。でも、「超カワイ～」とか「超○○」なんて言葉使いは、めちゃめちゃ大嫌いなはずなのに、気がついたら、まわりに合わせて「超○○」という言葉を使っていたりします。まわりに流されず、自分の考えを曲げずに生きていく第1歩には、まずなにをなすべきなのでしょうか。それから、日明兄さん、ぜひもう1試合やってください。お願いします！
(少年B・18歳・男子校生)

A 周りと違うことを言うっていっても実際に自分がどうしたらいいかわからないんだよね。俺が高校生の時もそうだったけど、いろんな人と出会うじゃない。で、この人のこういう喋り方は渋いな～とか、こういう仕草はカッコエエなとか、こういう考えもエエなとか。それが映画であったり、人であったりさ。それをアホみたいに真似してね。そうしてるうちに真似が真似じゃなくなって自分のものになる。

詩人のエリオットは言ってた。「創造とはすべて先人の剽窃である」。剽窃とはつまりコピーやね。人間が創造するものなんて、すべて先人のコピーであると。誰かがやっていたものであるというこっちゃ。その他大勢から抜きん出るにはその辺から始めることですよ。まずはいろんな人に会って、こういう人になりたいっていう人を探すんやな。

だけど、周りに流されず、自分の考えを曲げずに生きるってことは孤独だからね。孤独に対する抵抗力がなきゃダメだね。タフさが必要や。

で、このタフさを身に付けるのは簡単でね、周りが「賛成」って言っても、1人で「反対」って言ってればいいんだよ。そうすると孤立するから。それを繰り返していると、だんだん孤独に強くなる。まずは孤独になってみる。孤独に慣れてみる。そうするとタフさが身につく。しかし、意味もなくやってると、ただのイジけたノータリンと思われるから気をつけるように。それだけでは、ワタシのようなオリジナルな個性にはならないけど。ま、ムダな努力でもしてガンバルこっちゃね。

Q いま新聞や雑誌では10・11の高田―ヒクソン戦のセコンドに日明兄さんが付くとか付かないとか報道されています。ボクとしては日明兄さんがセコンドに付いてくれたらメチャ心強いです！ ぜひセコンドに付いてください！ でも、正直にいって、高田さんがヒクソンに勝てるとは思えません。高田さんがまた負けたら、去年みたいに、また心を抉られるのかと思うと応援に行くのも躊躇してしまいます。高田さんを心から応援できるように、少しでも安心できる話をしてください。それでもなかったら僕に喝を入れてください！ お願いします！

MAEDA



(ヒクソンハイセル・18歳・男子校生)

A 俺はセコンドには付かない。行けない状況にされてしまった。あと内々的にもリングス・グルジアとリングス・UKの旗揚げが、10・11とちょうど重なっちゃうんだよ。イギリスではいろんなメディアが待ちかまえていて、「リングスとはなんぞや？」みたいな取材がいっぱいあるから、創始者の俺としてはイギリスに行かなければならない。ヨーロッパでリングスを根付かせる絶好のチャンスだしね。

だけど、それでもドームには行こうかと思ったんだけど、これは俺の問題でも高田の問題でもなく、あるクルクルパーによって行けない状況にされてしまった。

ヒクソン戦で高田が一番気をつけなきゃいけないことは、試合当日になってルールをああしろこうしろっていうのを絶対に飲まないことだね。

それをヒクソン側が言いだしたら高田も試合に出なきゃいいよ。あとは去年の試合のイメージが悪い部分で気持ちの中に残ってないかどうかやね。それだけだね。でも彼が本来持ってる力からすれば、去年のあの試合経過で、あの結果っていうのはどう考えてもおかしいよ。

それにね、日本のファンは不思議でね、当日になって「ロープを持つな」ってヒクソン側に言われて、それを飲まなかった場合、どっちに非難がいくかと言ったら高田の方でしょ。「逃げた」って言うんだよね。ヒクソンに対しては何も言わないで。

この国の人間はおかしい。そんな奴らのために試合しなきゃあかんのかとみんな腐ってしまって、だからみんな「自分のために」とか簡単に言っちゃうんだよ。自分一人のためにやるなんてチンケなも

前田日明の

WORLD MEGA-BATTLE 人生相談

人生は語らず

んで、それだけ力が出ると思ったら大間違いや。

どんな分野でもどんな世界でも、何かのため、誰かのためにやってるもんなんや。「自分のために」って割り切ってしまったら、自分の感覚の及ぶ範囲の中の努力しかできないんだよ。

「何かのために」だったら、それは地獄を味わうことまで範囲として入ってくるからね。その部分で自分の限界を突き抜けることがあるんだよね。

だから日教組解体やね。戦後の左翼化した教師が悪い。あといまの団塊の世代。この間もウチとトラブった、ある出版社のナントカっていう奴と会ったけど、ちょうどこの世代の奴で毛ジラミみたいな顔をして、爪伸び放題で鼻くそのカスが溜まってそうな汚ないオヤジだった。

話を聞いてると、言うことも「人の家にドロボーに入って1万円取ったけど、そこまで行くのにタクシー代が9000円かかったから、本当に盗ったのは1000円だけだ」というようなことを言っていた。この世代にはこういうバカな奴が非常に多い。

万が一、アイツが負けるようなことがあるなら、俺がウルトラマンの仇を取るために少林寺拳法を習ったように、キミも高田の仇を取るために何か習いなさい。

誰かに何かをしてもらいたいなんて気持ちじゃダメだよ。甘えちゃいけない。いまの世の中、人のために何かしてくれる人なんて皆無だよ、皆無。いまはね、一見、取っ憑きは優しいんだけど、実際にそこまでやってくれる人なんていないんだよ。やってやるかわりにお金をくれみたいなさ、必ず代価を要求するんだよね。もう甘えるのはやめて、自分のことは自分で考えなきゃアカン。

自分に喝を入れられるのは自分しかいない。もし、キミの回りにそういう人がいたなら、何をおいてもその人を大事にすべきだと思う。

Q **自分が嫌いで仕方ありません。何をやっているときの自分も好きになれません。自分を好きになるためには、まず何をなすべきなのか悩んでいます。教えてください。**

(トシ樋口・18歳・男子校生)

A 自分の嫌いなところを考えてたらキリがないからね。あれも嫌いこれも嫌いってね。俺も経験あるけど、そういうのってなんか疲れるんだよね。でも誰でもあることですよ、こんなことは。青春期にはありがちなこと。

しかし、18歳にもなって情けない。平和すぎる。こういう奴に限って何もやってないんだよ、悩んでるだけで。テレビ見ては溜息をつき、本を読んでは溜息をつきってね。まずは街に出なきゃダメだよ。書を捨てて町に出よう。

まずは生活を規則正しくして、何か一つを続けてやることやね。3年ぐらい続けてやる。やっていく間にいろんなことを考えるもんなんだよ。石上三年！ なんでもいいからやることやね。

オレらが子供の頃はおせっかいな大人がいたからいいけど、いまは大人も子供も自分のことで精一杯で、他人のことや社会の動きを無視しちゃうんだよね。おせっかいを焼いてくれる人がいないから、他人にもおせっかいができない。

だから自分におせっかいになった方がいい。いまある自分を全部認める。で、いまある自分でどうするかだよね。生きていくことなんてレースのラリーと同じで、自分が乗ってる車、つまり自分の使ってる頭も身体もチューニングできるんだよ。チューンナップできるんだよね。

例えば軽四に乗ってアフリカ大陸を横断するとなったら、軽四でジャングルは走破できない。じゃあ、まずは道を探さなきゃあかん。でも、道さえ探せば軽四は燃費がいいから、スピードは出ないだろうけど長く走っていられる。それを「俺は軽四じゃイヤだ、4WDのハズだ」とか言ってたら何も始まらない。まずはいままでの自分を受け入れて、そのあとどうするかや。そのままで行くか、自分をチューンナップするか。

それでも自分を受け入れられなかったら、もう首を吊るしかない。こんな人生はイヤだから死ぬとか言う奴おるけど、そういう人間に限って来世でも首を吊るもんやで。首吊りっ放し。吊りバカ日誌や。

吊りバカする前に、いまある自分を受け入れよう。道具と同じで自分をどう使っていくかが問題だ。



AKIRA

つい最近自分にとって非常にためになる出会いがあった。

その人と話をしたり、その人の書いたものを読んだりすると、言葉というものの大切さがわかって勉強になる。

正しい言葉を使うには、人としての思いやりや、人を気遣う感性というのが非常に大切なキーワードなんだなと気づいた。

それがわかると、言葉は自分にとっての鎧となる。

また、そういう言葉を使える人には、品性と品格というものが宿るのだと思う。

いまの世の中、言葉さえも上っ面だけになってしまって、非常に物憂うものになっているが、その言葉の使い方を通して、自分の中にある品性を磨いて、鎌倉時代の鎧武者のように、美しい武士のようになりたいと思う。

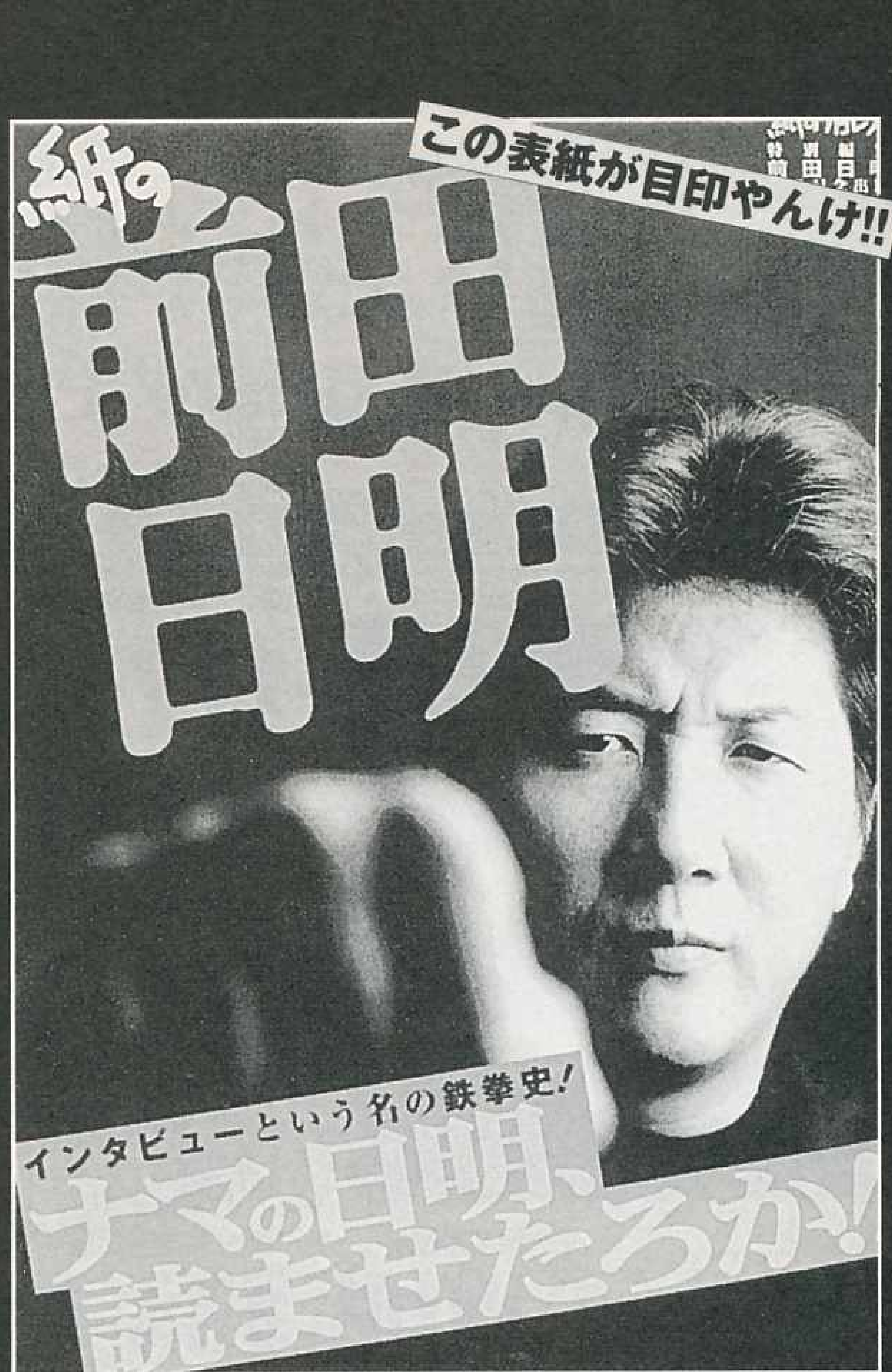
百瀬博教さん、ありがとうございました。勉強になりました。

キミたちのまわりにそういう出会いはあったかい？

美しい武士（もののふ）になりたいというなら相談にのってあげてもええで

マット界を勇退した者のみが持つ不思議な明るさと重みでもって飛び回る兄さんに、相談したいならいまやで!

〒151—0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷3—11—3—702
（株）ダブルクロス
『前田日明の俺は高速エスパーか？』係



★これこそ『活字鉄拳』『活字哲学』『活字スペクタクル』『活字格闘技』『活字プロレス』『活字巨乳』……つまり、これは『紙の前田日明』だ！ 【丸岡】

★読みながら、「そうそう、これが前田なんだよ」って思いました。 【倉田泰昌・男・28歳・運送業】

★趣味の広さが生き方の広さみたくひかれる人ですね。本当に知り合ってみたかったですね。いつか偶然に（素敵な）会う事ができたら話しましょう。 【安部敏雄・男・26歳・製造業】

★この本は格闘技ファンだけでなく格闘技が嫌いな人にも楽しめる本だと思う。本の表紙の右上に引退記念出版と書いてあるが本の内容とあまり関係ないような気が……。引退したあとでも、またこのような本や『紙のプロレス』誌上での対談を組んで欲しい。 【久米原剛・男・30歳・プログラマー】

★ちょうど心の中でモヤモヤしたものがあった時にこの本に出会って読んだら熱いものがこみ上げて来た。痛快！モヤモヤも無くなったし、ますます前田さんを追いかけたい。 【四野宮洋・男・20歳・フリーランサー】

★なんで私との対談がセッティングされないのだろうか？ 【小柳津慶三・男・31歳・会社員】

★前田選手のすべてがわかり、完全保存版で私のお宝です。このような企画をぜひ継続して下さい。お願い致します。P.S. 先日会社の上役にムカついたので、ゴンタ顔でその上役をトイレで待ち伏せし「コラ、オモロイヤンケ、シバイタロカ!!」とついすごんでしまいました。頭の中で「キャプチュード」がメリーゴーランド状態でした（今後、1人きりで会社を作るぞ） 【安斉隆之・男・32歳・会社員】

★やっぱり前田さんはすげぇかっこええ。そしてリングスはぶちおもしろい。大和魂じゃ！ 【石原光教・男・26歳・会社員】

★面白かったよ～。前田日明さんてやっぱり怖い人なんですね～。でもかっこいいっす。 【高階圭吾・男・25歳・会社員】

★これは、もはや格闘技とかプロレスの本ではない。前田日明というジャンルを確立した記念碑的一冊だ。 【能登英幸・男・24歳・職安通い】

★前田日明という人は、わかりにくいようでわかりやすいような、しかし、わかりにくい……と思ったが、やはりわかりやすい人だ！ ストレートだ。なんて単純な人なんだ。愛すべきバカだ。この本は、本宮ひろ志マンガを読んだときの痛快さに似ている。 【友田博之・男・26歳・団体職員】

★ありがとう『紙プロ』さん。あなたたちは素晴らしい本を作ってくれた。この本は人生の送り方、カッコイイ生き方、男らしい生き方なんかを教えてくれる本として超一級品だ。この本はノーベル賞モノっすよ！ この本は前田日明ファン、格闘技ファンだけではなく、あらゆる人に読んで欲しいし、そうされてもおかしくない。この本は将来文庫化されるべきだ！ 【平山憲司・男・18歳・一流大学合格を目指すインテリ高校生】

★あのなぁ～、おまえ、面白すぎるでエ～。よくまとめたのぉ～。まぁ、がんばれや。 【磯野均・男・30歳・会社員】

★この本を繰り返して読んで行くうちにこの前の「リングスラストマッチ」が、「田村vs高阪」が、「パンクラスとの違い」がわかってきた。と思う……。 【仲田成信・男・22歳・会社員】

★笑いあり、涙あり、怒りあり、懐かしさありで夢中になって読みました。 【山内勝幸・男・32歳・自営業】

★『紙プロ』誌上で読んだものも改めて読んで面白かった。 【山崎敬博・男・25歳・アルバイト】

★前田日明はやっぱりプロレスラーだと思う。じゃないとこんなに人を興奮や感動させられない。前田日明の喜怒哀楽が私の芯をゆさぶる。 【アジの開きにマヨネーズ・女・19歳・予備校生】

★やはり、前田日明の意志に揺れはなく、不動であるなぁと再認。スッキリしました。一方、常に時流におもねるあまり、迷走する安生のことを思い、軸のない人間は気の毒だなぁ、君、一体なにがしたいの？ などと問いただしたく思う次第であります。 【匿名】

★前田さんは大きい胸が好きだという事は言わずと知れた事ですが、ボクは微乳も「もののあわれ」があっていいと思います。年月を経ても垂れないですし。 【伊達三国志・男・高校生・18歳】

★唯一読みごたえのある格闘芸術ウルトラ級のプロレス雑誌を創造しつづける『紙のプロレス』に栄光あれ！！ 【浜前田日出昌明・男・31歳・無職】

★「ニーチェとは何か？」やって下さい。「大菩薩峠とは何か？」も可。格斗界の話より、文系チックな話のほうが、おもしろいです。 【師茂樹・男・26歳・大学院生・専攻日本仏教史ほんまやで！】

★脳味噌の皺が伸びるくらい面白かったネ。今度は『紙のリングス』を出してヨ。 【原田佳浩・男・22歳・前田信者】

★日本全国で何冊売れたか心配です。 【べんとう君・男・16歳・高校生】

★読んでいて無我になった。 【立根薫則・男・27歳・事務】

★最近一年間で読んだ本の中で最高の書物だと思う。前田日明氏のサムライとしての奥深さがよく解ったし、インタビューという形でそれを引き出している山口日昇氏もすごい。 【友利仁・男・46歳・会社員】

★前田選手の発言から考え方がだんだん良い意味で変わってきているのを感じました。人間は年を重ねると丸くなってきますが、前田選手にはいつまでも子供のように純真な心を持ってかっとんがっていてほしいと思います。 【大釜信樹・男・32歳・会社員】

★最近の日明兄さん本の中でコレが一番いいと思った。 【関野泰太郎・男・21歳・アルバイト】

★キレた日明兄さんは最高である。と印象付けられた価値ある一冊でした。 【秋田貴久・男・27歳・ソープのボーイ】

★私は7月20日引退試合を生涯の記念日とするために婚姻届を出して入籍するくらい前田選手が好きです。 【佐々木学・男・33歳・公務員】

★表紙がすごくかっこいい。内容がとっても充実してる。 【吉岡由喜子・女・TELオペレーター】

★高田が船木と和解したそうなんですが前田さんもパンクラスと手を取ってもう一度"U"を再開できませんか。はっきり言ってリングスとパンクラスの泥仕合的"絶縁状態"は耐えがたい。理想を幻想で終わらせてもらいたくない（本書にあんまり関係なくてすみません）。 【原田友也・男・28歳・清掃業】

★前田さんは強いけど、それにうぬぼれず、本を読んで勉強しているところがすごいと思った。自分も勉強しようと思った。 【渡辺大介・男・15歳・高1】

★パート2はないんですか？ 【安東重樹・男・27歳・会社員】

★前田日明は強いし、頭もいいので、真の「文武両道」だと思う。 【山口真弘・男・21歳・学生】

★こんな前田がいなくなったらこれからのマット界は誰が楽しませてくれるの？ なぁ、どうすんの？ 前田引退後の『紙プロ』どーするの？ なあ、どうすんの？ 【井岡淳二・男・27歳・会社員】

★純真なインタビュー、ひねり、批判、どれもすばらしい。 【DHCオイル・男・22歳・時にナイーフ、時にセクハラ】

★とにかく日明兄さんの言葉は僕らを幸せな気分にしてくれます。この本を読んでスッキリした気分になりました。 【林一哉・男・23歳・会社員】

★いや～ワタシも色々な本を読んで知識を深めようと思ったネ。日明兄さんに負けるワケにはいかん、でしょ？ 【前田篤・男・25歳・会社員】

★自分が頭の中で描いていた、言葉にできないモヤモヤしたものを、日明兄さんがちゃんと言葉にしてみんな説明してくれた。 【渡辺昇・男・27歳・プロパンガス販売会社社員】

★何故、『紙プロ』と日明兄さんの間にスーダラな信頼関係が築かれているのかと疑問に思っていたのだが理解できました。『紙プロ』の「度胸」と「覚悟」は正しい。いや、褒めすぎ。 【キャプテン名倉・男・29歳・ニセ大工】

見てみ、この称賛の雨あられ!!

WORLD MEGA BATTLE TOURNAMENT 1998 1ST.ROUND

10.23(FRI.)愛知県体育館

●OPEN 17:30 | START 18:30●

◉入場料金

ロイヤルリングサイド…￥20,000／アリーナリングサイド…￥15,000
リングサイド…￥10,000／スタンドS…￥7,000
スタンドA…￥5,000／スタンドB…￥3,000
学生特別優待席A…￥2,000／学生特別優待席B…￥1,000

◉発売場所

チケットぴあ ☎052-320-9999／チケットセゾン ☎052-290-9999
ローソンチケット ☎052-290-9900(Lコード41742)
IVY BOOKS ☎0568-31-0727
公武道 ☎052-241-2511／オーネストエンタープライズ ☎052-777-5051

◉お問い合わせ
オーネストエンタープライズ ☎052-777-5051

チケット絶賛発売中!

WORLD MEGA BATTLE TOURNAMENT 1998 1ST.ROUND

11.20(FRI.)大阪府立体育館

●OPEN 17:30 | START 18:30●

◉入場料金

ロイヤルリングサイド…￥20,000／アリーナリングサイド…￥15,000
リングサイド…￥10,000／スタンドS…￥7,000
スタンドA…￥5,000／スタンドB…￥3,000
学生特別優待席A…￥2,000／学生特別優待席B…￥1,000

◉発売場所

チケットぴあ大阪 ☎06-363-9999／チケットセゾン大阪 ☎06-232-9999
ローソンチケット ☎06-369-6633(Lコード59605)
リングス大阪インフォメーション ☎06-364-9115／アイドール大阪店 ☎06-641-4685
ビデオショップ・チャンピオン大阪店 ☎06-645-5186／プロレスショップ・バディスラム ☎06-645-1378

◉お問い合わせ
リングス大阪インフォメーション ☎06-364-9115

10月4日午前10時発売開始!

ワールド・メガバトル・トーナメント1998
～第1回国別対抗戦・FNRカップ～



FIGHTING NETWORK
RINGS

主催

BS-5ch WOWOW

FIGHTING NETWORK RINGS

紙のプロレス RADICAL

1998 no.12

ジャイ子宣言します!
ノブリンは絶対に勝ちます!
だって勝って欲しいんだもん!
お祈りしてるね、クリクリクリクリ!

紙のプロレス・ラディカル

RADICAL NO.12の中のどこかに
世界一小さいMr.ウォーリーが紛れ込んでいるぞ!!
見事探した人にはジャイ子のチューをプレゼント!!
みんなでウォーリーを探せ!!

CONTENTS

RADICAL特製ピンナップ
バトラーツ両国国技館進出記念
当社作製11・23両国大会
ポスター縮小版

読者のハガキを勝手にポートレート
UFO旗揚げ(10・24両国)
記念イラスト　ウォーリーをおえ!


※急遽決定した月刊ペースでの発売のため真樹日佐夫先生の大好評格闘プロレス小説『無比人』と『RADICAL MYSTERY TOUR』は今回は休載いたします。次号に乞うご期待! 押忍! 押忍!! 押忍!!!

※ピンポンパンポーン。T印刷の大杉様、T印刷の大杉様。ここ読んでないんですか?　今度のお土産は「ガリガリ君」以外のものにして下さい! ピンポンパンポーン。

Art Director
出田さん●San Ideta
Design/two-three
村松さん●San Muramatsu
ヒサくん●Kun Hisa
マツ●Matsu
古川ふるーる●Furuuru Furukawa

表紙モデル/髙田延彦
撮影/斉藤ユーリ
スタイリング/Nobuhiko Takada
ヘア&メイク/Nobuhiko Takada

※「RADICALとは何か?」ってよぉ、結構自信あるよぉ、俺。何?「根源的」、「根本的」って意味なのかよぉ。じゃあわかんない!!



祭り囃子を鳴らせ!!

プロレスファンよ、踊れ!!

心臓を抉り取られるかのような高田延彦の敗戦から約1年。再び10・11がやってくる。“世紀のリ・マッチ”をいかに迎えるべきか。“『紙プロ』読者が選ぶベスト・オブ・プロレスファンの芸能人”浅草キッド（いま呼び方これでいいのか？）が電撃咆吼！ 皺の伸びきったキミの脳味噌には祭り囃子はまだ聞こえてないのか？　プロレス・ファンよ、踊れ！

10.11近づく ガンバレ髙田!!

元?浅草キッド 電撃咆哮!!（自称?ツービート）

聞き手／山口日昇
Interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
Photographs by Yuri Saito

見ている方の興奮っていうのは これはプロレスの興奮だよね〈博士〉

（7・20前田日明リングス・ラストマッチについてジャブがわりにひと通りしゃべり終わる）

——というわけで、博士がいうところの「前田論で括られた7・20」が終わって、次は高田vsヒクソン戦なんですけど、これは「高田論では括れない10・11」になるだろうと。

博士 うん。

——とりあえず、気分的には盛り上がってきてる？　高田vsヒクソンに関しては。

博士 いや、ずっと盛り上がってきてますよ。1年間沈黙して『PRIDE．3』の試合がなかったらよかったと思ってますよ。あれはない方がよかったなぁ。要するに1年間沈黙して試合をしない人ほど輝けるというか、思い入れを乗っけていけるっていう具合になってくれた方が、いまのプロレスの逆目逆目を行ってて気持ちいいかもしれない。

——博士はその6・24は高田の長い入場シーンが『デッドマン・ウォーキング』に見えたって、何かの原稿の中で書いてましたね（笑）。

博士 死刑囚ですよ、ホントに。

玉袋 死刑執行人なんだよなぁ。なんか三角帽子被っちゃってさあ（笑）。オレにはヒクソンが死刑執行人に見えちゃうもんなぁ。でも、もうどうしようもないな。

——腹くくるしかない？

玉袋 もう腹くくるっていうか、タマらんですねぇ、オレは。クゥ～ッ。だけどこの一戦があまり盛り上がってないのが頭にきてるんですけどね、毎回毎回！　毎回毎回毎回！

博士 オレ、nWoなんかホ～ントにバカにしてたけど、今回のウチらの2代目ツービート襲名の一連の流れで、「こういうことをやってんだな」って思いがしたもん（笑）。いわゆるアドバルーンを上げてるんだけど、本気で反応する人がいるの東スポの一面見て。「こんな聞き分けのねぇ子分たちだったらなんとかしようか」ってたけしさんに言ってきた怖い人もいたらしいし（笑）。

——やるなぁ。

博士 オレのところはオレんところで『突破者』の宮崎学さんから電話があって、「たけしんところを割るんやったら面倒見るで」って（笑）。

——ガハハハハハ！　さすが突破者（笑）。

博士 やっぱり興奮する人がいるんだよね。造反だとかさ、ぶつかり合うものがあったらね（笑）。

玉袋 だけど昔のプロレスなんてぇのは、それをズッと楽しんでたわけだからなぁ！独占してたんだからなぁ。

——そこに出てきた久々に興奮する抗争劇が高田vsヒクソンだったはずなんですけど。

博士 そうなんですよね。K—1ってやっぱりスポーツだから勝った負けたのところでパッと消えていく。それに比べると高田vsヒクソンはこれをプロレスと呼ぶのかなんだかよくわからないけど、見ている方の興奮っていうのは、これはプロレスの興奮ですよね。1年前の興奮であり、UWFの興奮であり、前田と高田っていう物語の興奮であり、それはもうK—1で誰が優勝するかより、こっちの方が断然ね。

玉袋 オレもそうだよなぁ、うん！

博士 でも単純に言えば試合そのものが面白いわけじゃないでしょ、K—1に比べれば。だって前の試合で高田を応援した人が、試合の中で面白かった部分ってゼロじゃないですか。なんにも面白くないですよ。それを一見さんに納得させようったってそれは不可能だよ。

玉袋 これは大変だぁ。K—1の方がわかりやすいもんなぁ。

博士 100キロぐらいある奴のKO劇の方が面白いと思うよ。

——それにK—1の場合はみんな「だっちゅ～の」やってますからね（笑）。

博士 オレはね、あれがイッチバン腹が立つんですよ！

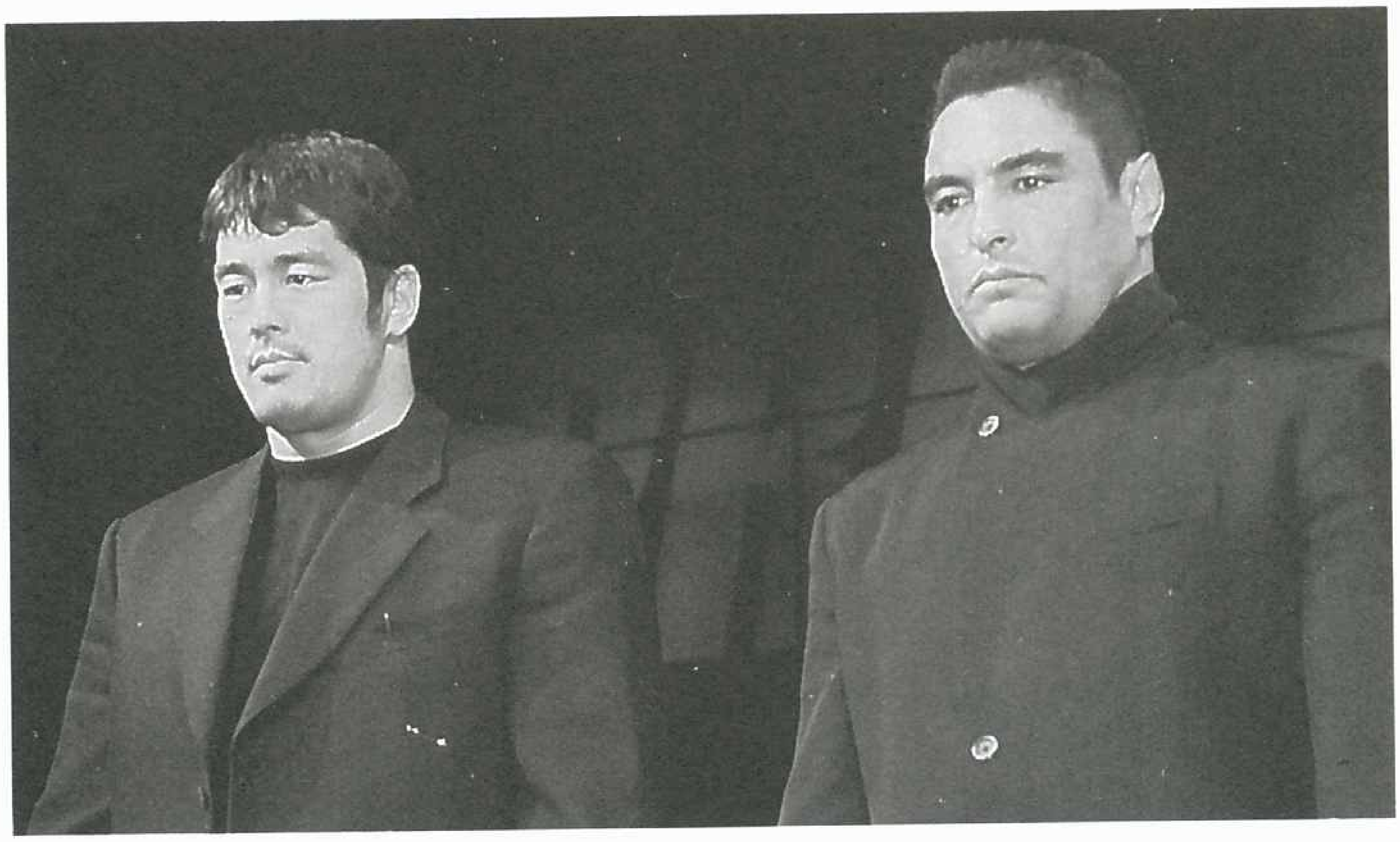
——ガハハハハ！

博士 （マイク・）ベルナルドが（グラウベ・）フェイトーザに勝った時の「だっちゅ～の」ポーズ。あんなことやられた日にゃーね、『空手バカ一代』世代としては頭にくるよね。崩れ落ちたもんね、自分が完成してきたものが何かっていうところで。

——でも高田がヒクソンに勝って「だっちゅ～の」をやってくれたら、これは素敵でしょうね（笑）。

玉袋 ダッハハハ。それはオレは万歳しよう（笑）。

——「だっちゅ～の」をやってる高田を目



の前にしてプロレスの歴史が走馬燈のように駆けめぐる。これは史上最大に贅沢な「だっちゅ〜の」ですよ（笑）。

玉袋　それをヒクソンがやったら腹が立つと思うなぁ。

博士　国辱ものだよ！

——ああ、それは想像するだけで腹が立ちますね。

玉袋　あぁ〜ヤダヤダヤダ。

博士　でもそっちの方がね、ありとあらゆるメディアに取り上げられますよね。『フォーカス』に載る写真っていうのは極め技じゃなくて、ヒクソンが勝って「だっちゅ〜の」をやってるところが載るわけでしょ。

——プロレスとか格闘技を取り巻く状況というか、中にいる人たちが「娑婆っ気」を持っちゃったんですよ。「娑婆じゃない世界」にいたはずの人たちがマスコミも含め、「娑婆っ気」を持っちゃった。「娑婆」に対して門戸が開放されてるんですよ。

博士　それがいけないっていう方向じゃないですか、ボクらは。

——そうそうそう。

博士　ただ、市場性っていう意味だと、娑婆じゃないと通用しないというか、仕掛けてる方はそっちじゃないと食えなくなるよ、っていう危機感が強いような気がするんだけどなぁ。だけど、前田vsヒクソン戦が10万円で、来たい奴だけ来いっていう興行の方がいいかもしれないね。今度のヒクソンvs高田も。それで何人くるかっていう興行の方が世間的には訴えるかもしれないよね。

玉袋　かけるかける。うん、かける。

——塀を高くして、それを乗り越えてきた奴を仲間にしていくっていう世界ね。「娑婆」の人たちが理解できないことをやってる方が、かえってある日、パーンッと弾けるかもしれない。

博士　そこになんと1万5千人のお客さん

10万円で来たい奴だけ来いっていう興行の方が訴えかけるかも〈博士〉

が10万円を払ってわざわざ見にきたっていうことの方が、この試合がどれほど凄いことなのかを訴えることができる可能性が高いですよね。そういうファンのね、耐久性とか忠誠度とかを試す興行もやんなきゃダメだよね。

——こういう時代の中でもヒクソンっていうのは娑婆じゃない雰囲気がありますね。

博士　あるね。高田に勝ってほしいって気持ちはヤマヤマだけど、ヒクソンが勝ってもいいよっていう気持ちもありますよ。

——ああ、なるほど。

博士　試合をやらないで神話ばかりが先走る現状は、これはこれで凄いなと思うんだよね。いまそんな神話なんか、ほかにはどこにもないわけだからね。

——そうですね。ヒクソンは久しぶりに出てきたプロレスラーらしいプロレスラーですよね。

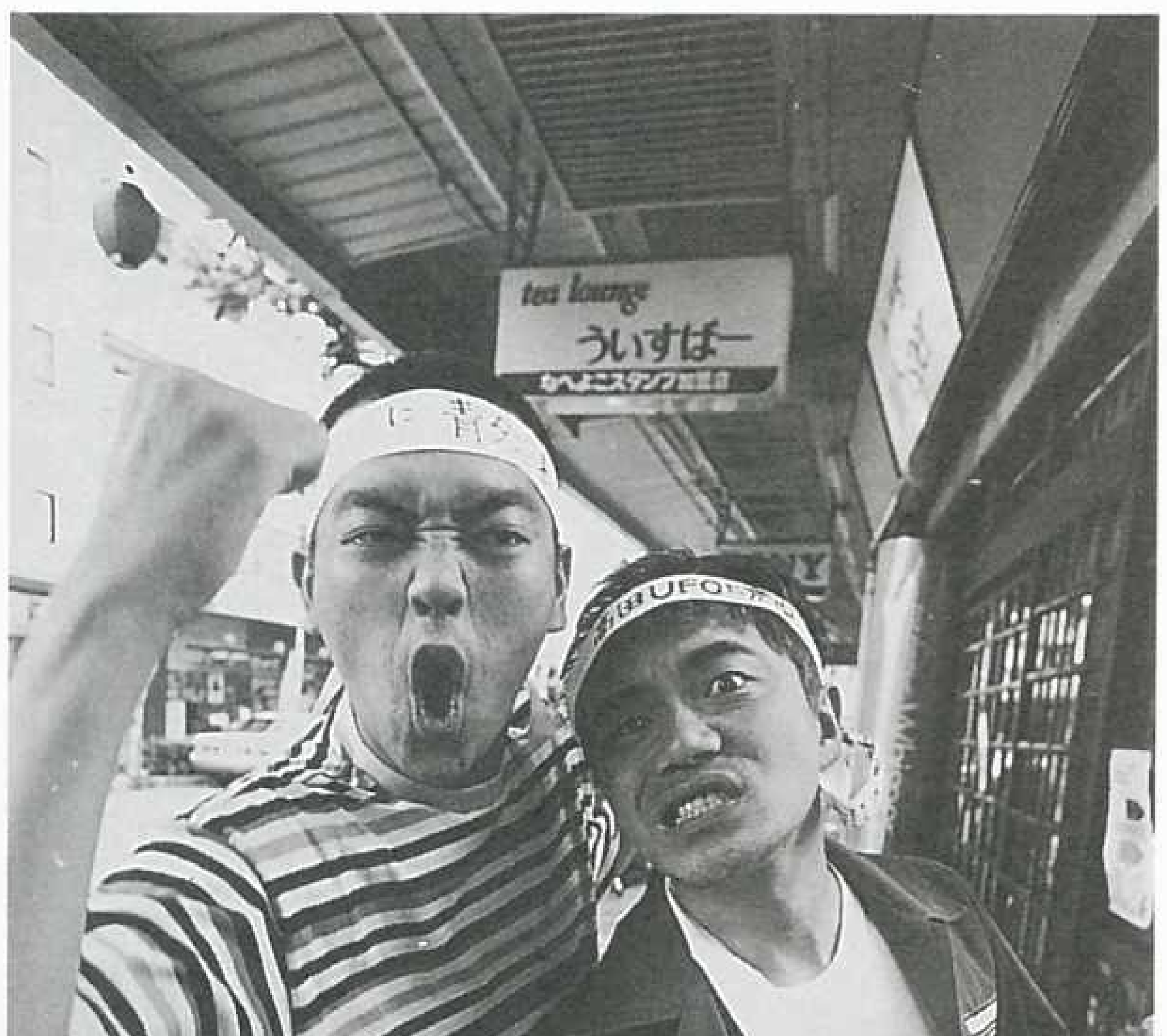
博士　まだ見ぬ強豪っていう奴ですよね。

玉袋　久々だよね。

——だからヒクソン中心に物語を見ようとしても見れるんだけど、でもやっぱり高田中心に見た方が面白いだろうというね。でも、たぶんプロレスファンの中には高田中心に見て「大丈夫なの?」っていう気分はあると思う。去年抉りとられた傷を、また触られるみたいな。

玉袋　みんな切り換えたもんなぁ、あれで。負けてなぁ。ショックだったもんなぁ。

咆哮!!



博士　大多数が「桜庭（和志）が行った方がいいだろう」とか、トレーニングしてるマルコ・ファスが「10年やっても勝てないよ」だとか、そういう情報が出てくるんだもんなぁ。

——ズバリ言って、まわりで「高田が勝つ」って言ってる人っています?（笑）。

博士　…………。

玉袋　…………。

——皆無?（笑）。

博士　向井亜紀さんぐらいかな。「主人は勝ちますよ」って（笑）。

——ガハハハ。カイムだけにムカイね（笑）。

玉袋　とにかく青タン作ってくれるだけでいいんだよぉ。一発入れてくれるだけで全然違うんだよぉ、オレ。ホント、勝ち逃げするでしょ、ヒクソンって。もぉ〜。嫌だなぁ、このまま負けっぱなしじゃ、も〜う。

——博士的にはこの10・11っていうのはプロレスファンとしてはどう見たらいいと思いますか。

博士　ヒクソンを賞金稼ぎっていうけど、いまはヒクソンの方にウォンテッドがついてるわけじゃない。だから、勝った方が全部金を取るっていうルールを大きく打ち出すべきだったと思うなぁ。オレのまわりじ

や、こんなに儲からない興行はおかしいってなって、近々合法的な殺人が行われるはずだって（笑）。和歌山のヒ素じゃないけど、保険金殺人だって（笑）。

玉袋　くわぁ〜。それはヤバイぞ〜。

博士　（ゲーリー・）グッドリッジの試合あたりじゃ、いつ死んでもおかしくないじゃない、相手が（笑）。

――（オレッグ・）タクタロフも危なかったですからね（笑）。

博士　でしょ。だからこれは保険金殺人だと思うんだよ（笑）。だから、高田vsヒクソンの保険金マッチをやれって言いたいね（笑）。それで雌雄を決するっていうのはホントに命を賭けてくれっていうことだから、そしたら見てる方だって凄いよ。極論だけどね。

――そういう風にやっぱり僕らは「娑婆じゃない世界」を望んでしまうんですけど、やってる選手にとっては、新しく入ってきた外来のスポーツを研究しているムードですよね。

博士　だけど、高田vsヒクソンがスポーツライクにやられていくんだったらお客さんは入りませんよ。初めて見る人には高田のタップの早さしか見えなかったわけだから。もっともっと娑婆じゃない部分で興行をやっていかないと。地下プロレスみたいな形にしてくれないかなぁ。

玉袋　斬った張ったのクセにそうでもねぇんだよなぁ。ホントはそうあるべきなのに、な〜んか単なるスポーツみてぇにさぁ。まあ、確かに野蛮なところはちょっと嫌なんだけどな（笑）。

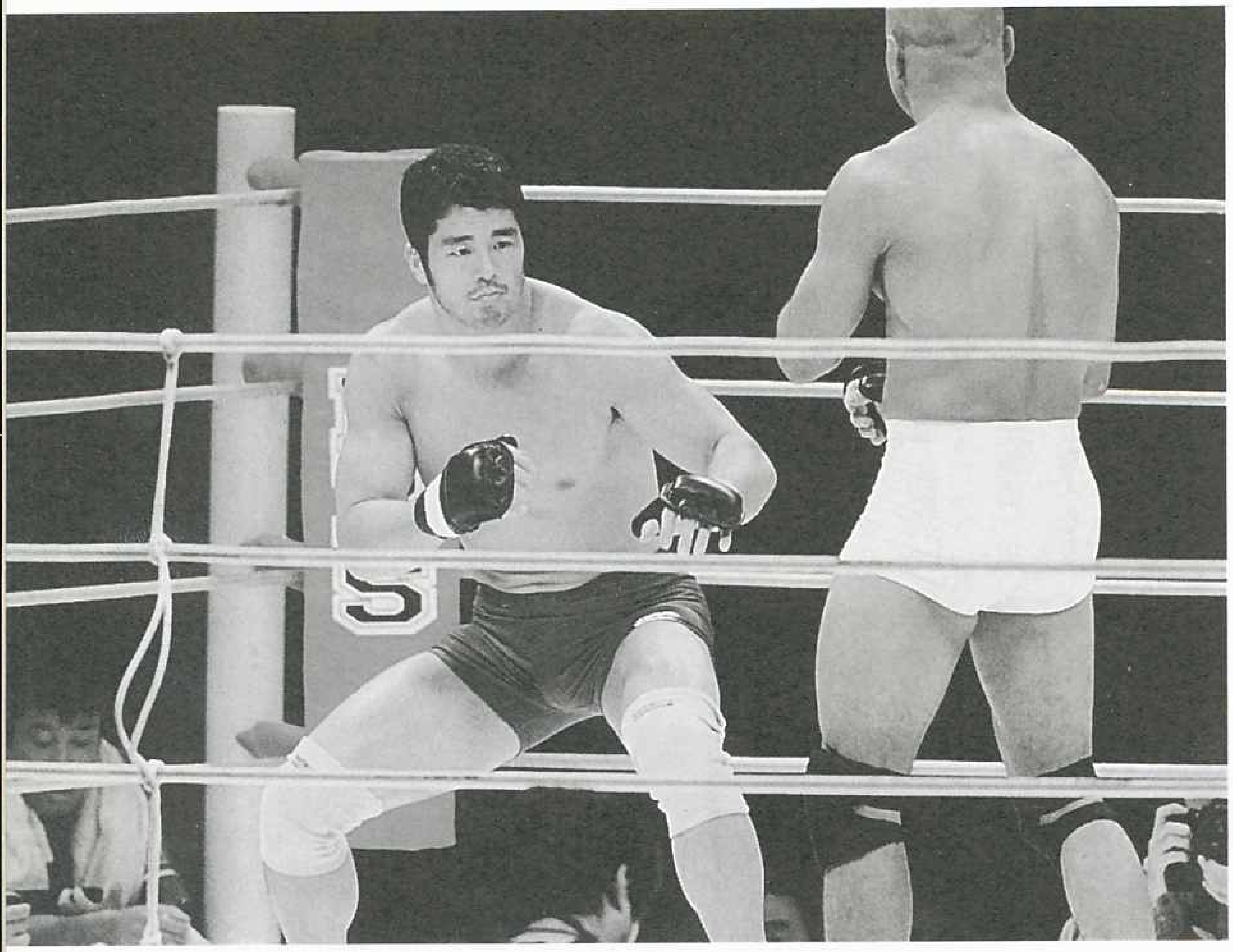
博士　スポーツ・ライクなレジャープロレスにしようとしてるのがおかしいっつうの！　猪木vsウィリー（・ウイリアムス）の時はさ、何人か関わる人は死ぬんだな、とか思ったからね。

玉袋　刃物を持ってる人がいるんだもんな（笑）。

博士　責任を取りますよっていう雰囲気があれだけ熱くさせたわけじゃないですか。

――腹をくくるという場面が華開く世界ですもんね。総天然色のド迫力で。

玉袋　でも去年の10・11にはそういうのがあったよなぁ。前田があの会場にいたってことは、それを醸しだしてるってことだもんな。



電撃

博士　松永（光弘）がオクタゴンの中に入った時に、多くのプロレスファンが「なぜバットを使わなかった?」って疑問を呈するわけでしょ。今回も「高田はルールに縛られるな」とか「噛みつけ！」とか言うじゃん。これって俺はジョークで言ってるわけじゃないと思うんだよね。だけど、そういう風には反応しないじゃない、レスラーそのものが。

玉袋　ロスに行っちゃうんだよな。

博士　仮に高田が負けたとして、高田はヒクソンの控室には行かないよね。「負けてないぞ、このヤロー！」って言って。でも、もしセコンドに前田がいたら、前田は行くかもしれないって思いますよね。

――っていうか、もし前田vsヒクソンがあって、例え前田がタップしても、タップしたあとが怖いという気がしますよね（笑）。

玉袋　それはある！　そっちの方が期待だよ。スポーツというより喧嘩！

博士　前田だったら「確かに柔術じゃ俺はタップしたかもしれへんけど、このあとは俺とお前の闘いや」って言って「まわりは関係あらへんで」って言いながら、そのまま続くようなことがありえるよなぁ。それこそが娑婆の世界じゃないってことですよね。

玉袋　娑婆じゃねぇ娑婆じゃねぇ（笑）。

――そう感じさせるリアリティーが前田日明にはありますよね。高田を応援してるプロレスファンも実は高田にもそれを求めてるんでしょうね。

博士　それを引き受ける高田はね、負けたら引退してテレビ界の人になるだろうとか、ジムの経営をやるんじゃないかとか思わせてしまうところに、高田自身のつまらなさの原因があるんですよ。

――思わせてしまうところね。

博士　そう思われちゃダメなのに。高田って生放送に出したらいけない人だなって思わない。そこがダメなんだよねぇ。前田なんか、生放送の試合なんかに出したら、とてつもないことが起こるぞって思うもんね。

――前田のまがまがしさというか、生々しさには誰もかなわないですから（笑）ね。でも前田と逆目逆目に行ってしまって妙な鎧をつけたのがUインターってことだと思うんですよ（笑）。

玉袋　さわやか新党でありね（笑）。

――そうそう。でも、そういう方向の人というところもあるんだろうけど、まだまだ〝高田の素（もと）〟って違うところにもあると思う。そうやって見ていくと高田延彦にも数々の物語がいろいろ絡んでくるんですよね。なかでも去年から今年にかけての往き方なんかは、プロレス界では初めてでしょう。2年で3試合だもん（笑）。

博士　俺は評価しますよ。コアのファンってのは逆転するのが面白いけどな。高田が試合をしない、悪口を言われ続ける、だけど次の試合が決まった途端、同じ日に再戦が決まった途端、高田ほど光を消したエネルギーを持った人はいないと思うわけじゃないですか。そっちにシフトできる人ですからね。何をやってるのかと思うもん、大仁田とか。

玉袋　あれはもう、ダメだぁ！

――そういえば金村（ゆきひろ）が最近ネタをパクってますね（笑）。

玉袋　パクってるんだよぉ！

博士　サザエさんネタな。

玉袋　あいさつもなしでぇ！　う〜ん！

博士　「キッドさんから聞いたんですが」とか言ってほしいな。俺らがそのネタやって「アレ邪道・外道がやってたよ」とか言われたらムッとするもん。

——今度リングでやる時は©浅草キッドって入れろ（笑）。だからね、高田は、「©高田延彦」っていうのがなかったんですよね。なにかしら前田日明の影を歩いてみたり、アントニオ猪木の陰を背負ってみたり。スターではあるけども、高田延彦オリジナルのネタがなかったんですよ（笑）。

博士 うんうん。

——でも、去年のヒクソン戦っていうのがそれなんですよね。考えてみれば。

玉袋 ああ、そうかぁ。

——ほかのトップレスラーがやらないことをやったんだから。デカイですよ。

玉袋 それであんなに叩かれてるんだからたまったもんじゃないよぉ！ だからこの1年の間にふざけたレスラーを潰しちゃえばよかったんだよなぁ、高田が！

——ホントに最強から最弱に変わっちゃいましたからね。イメージが。だってそこら辺の柔術道場行ってる素人が「高田は弱い」って言うようなね。

玉袋 よく言うよな！ そんなに弱かねえぞ。

博士 そこは憤りを感じますよ、ボクも。

玉袋 10年芸人やっててポッと出の方が面白れえって言われるのと一緒だぁ。そんなはずはねえよ。

——そう。そんなはずはないと思うんですけど、証明できない。イメージだから（笑）。

玉袋 グワァ〜！ 腹が立つなぁ。

——それをぜひ高田に証明してもらうには、「負けてもいいから、プロレスラーらしいことをやってくれ」ってとこに落ち着いちゃうんですかね。

博士 っていうかね、「噛みつけ！」って論理もわかるけど……だけどやっぱり〝勝て〟だけどな。

博士 「噛みつけ！」より前に〝勝て〟だけどな。

玉袋 まだオレらはこの試合を追っかけてる時点で高田の勝ちを少しは信じるわけだもんねぇ。信じてなきゃ見に行かないなぁ、オレ。ひっくり返すその感動を味わいたいじゃない。

博士 でも100%どころか1%ぐらいの可能性で言ってるだけだよ。

玉袋 でも1%でも、まだ感じるもんなぁ、ピピンッと。だから、それを味わいたい。とにかく。

——去年は、浅草キッド的には「たぶんヒクソンが勝つだろうけど高田には絶対に勝ってほしい」と言ってましたね。そこから抜け出す論理をどうにか見つけだしたいんですよね。

玉袋 あぁ〜〜〜、なんだろうなァァォォォォオオ！

博士 ボクシングの金平会長がいたらね、ヒクソンには……。

玉袋 オレンジかッ！（笑）。

博士 毒を注射するなりなんなり、ありとあらゆる悪さをしますよ。ホテルの横に街宣車で怒鳴って寝られないようにするなりなんなり（笑）。

玉袋 山篭りの時に熊を放ったりな（笑）。

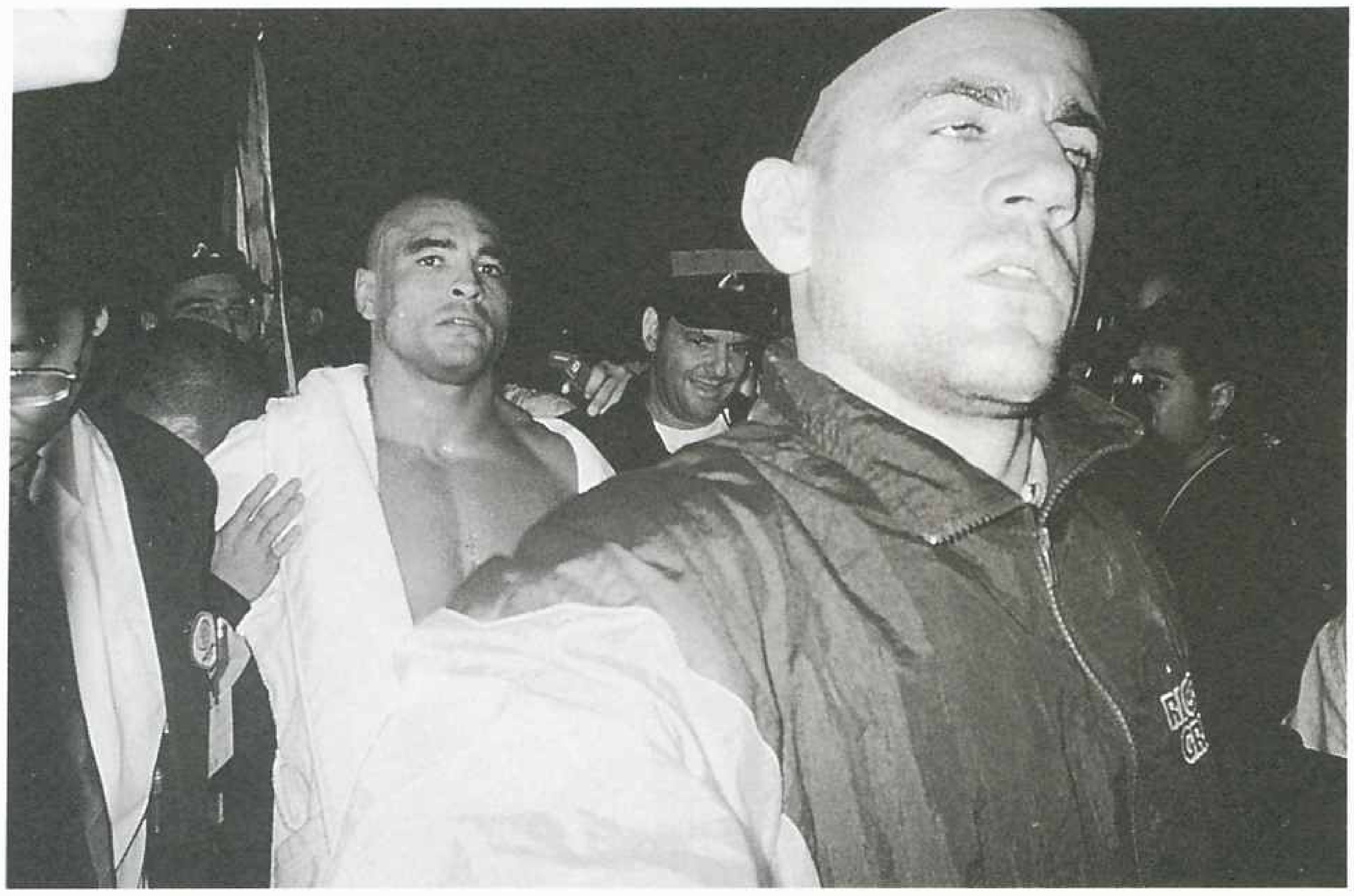
博士 それぐらいのことってあるじゃないですか、真剣勝負って言ったら。

——真剣勝負は本来そっちも含んでのものですからね。

博士 そうでしょ（笑）。

——って僕らは思っちゃうんですよね（笑）。

博士 だから勝ちたい気がないのかって思いますよ。興行を仕切ってるのが日本人だったら、KRS側の人に頼んで覚醒剤なりなんなり何でもいいけど、〝勝て〟っていうのはそういうことですよ。ボクシングの世界戦だったら、みんなで守ったりチェック入れたり、いろいろする。でも、それぐらいしてもいい大きなことでしょ、これは。



——さらにそこに、前田日明が絡むと一気にヴォルテージが上がってくる。セコンドに付く付かないだけでも（笑）。

博士 上がる上がる上がる（笑）。

——でも、なんか、ファン側にエネルギーがないなって気がして。

玉袋 ないないない、まったくないね。

——ファンまで「娑婆っ気」持ち始めちゃってね。

玉袋 もう暴動とかそういう匂いがねえんだもんな。前はそういうのがあったもんね。国際プロレスが新日と対抗戦やった時なんか鐘と太鼓がドンドコ鳴ったよな、会場で。いま鐘と太鼓が鳴る会場ってさ、辰吉（丈一郎）の試合しかねえんだよな。進軍ラッパがプップップップッ鳴るようなさ、それがなさすぎてさ、面白くねえよ！ それでもまだプロレスファンがいるのが不思議だよなぁ。

——だから、いまのプロレスファンっていうのは何を見てるんだか、よくわかんないところがありますよね。斜に構えようがなんだろうがいいんだけど、斜に構え方が中途半端だし、プロレスをナメるにしても、そのナメ方が5流なんですよ。そういうのがイヤ〜なムード作ってるっていうか。

玉袋 昔ながらのプロレスファンはさ、どうしたんだろ。オレはもう、耐えきれねぇけどなぁ！

博士 だからオレは、もう招待券バラまかれてドームに来るお客さんはいらないっていう理屈だね。100万円でもいいからこの試合を見たい人だけのためにやって、それがこれだけ集まるっていうパワーを証明にして外部に訴えた方が早いよ。これが今世紀最後のもの凄く重要な試合だっていうのを一般の人にわからせるなんて不可能だもん。

——高田に勝機があるとしたらどんなところだと思うんですか。なんかいきなりストレートな質問ですけどね（笑）。

玉袋 ……勝機……？

——やっぱ質問を変えましょう（笑）。何の技で勝ってほしいか？（笑）。

玉袋 なんだろう。もうオレはホントにボコボコにしてほしいんだわ（笑）。

博士 でもビバリーヒルズ柔術クラブじゃなくてね、高田が頭突きの練習を始めたとかね。そういうのを聞くと何かがあるっていう気がするはずなのにね（笑）。

玉袋 一杯ひっかけて闘っちゃったりな

進軍ラッパがプップップップッ鳴るさ　それがなさすぎて面白くねぇ〈筋太郎〉

（笑）。もう腕振り回してもいいと思うもん。一発は当たると思うんだよな。それだな。ヘタに技とか……（玉ちゃんシミュレーション・タイム）あぁ～、イヤだなぁ！

博士　アリキックの体勢もちょっと幻想があるよな（笑）。

玉袋　去年の高田はアドレナリンを出してなかったもん。もうグワァ～ッ！ていう喧嘩する時のさ、叩かれたって腕取られたってポンッと切れたって痛くねぇじゃん、喧嘩の時なんて。それが見えなかったもんな、去年な。おセンチになってるところってあったじゃないですか、見てる方も。グワァ～ッ！っていう勢いがなかったもん。

――でも、その頭突きの練習っていいな。いきなり韓国に飛んだりなんかして（笑）。パンチじゃなくてパチキに勝機を見いだす（笑）。

博士　だけど頭突きだって有効でしょ。

――頭突きは反則じゃなかったかな、確か。

博士　関係ないっしょ！　だって頭突きで辰吉なんかは額とかを割っちゃうわけでしょ。

玉袋　そうかそうか。

博士　例えば反則だって、あそこで終わっちゃうものは終わっちゃうわけだからね。

――そうですよね。だから、いま玉ちゃんが言ったみたいに鐘とか太鼓とかをドンドカ鳴らす雰囲気にならないのが嫌ですね。

玉袋　決定的瞬間を見慣れちゃったわけだよな。昔だったら『ジャンク』とか映画になってたんだから。『グレート・ハンティング』とかさ。でも、いまはあんなものはTVでやって普通の映像になってきちゃったもんなぁ。高田vsヒクソンだって凄い決定的な瞬間なのにさ、見てる方がなんか見慣れた風になっちゃってるような感じで面白くないんだよな。

――そういえば、決定的瞬間で思い出したけど、『誰も未だ見ぬ猪木』っていうビデオを見てたら、「世間からアントンハイセルが叩かれたり、新日内部から叩かれたりしてるけれども、ただ1人評価した人がいる。それが村松友視である」っていうナレーションがあってね。で、その村松さんは『ファイター』っていう本を書きましたよね。

博士　あれはブラジルに訪れるんですよねね。アントンハイセルが出てきますよね。

――サトウキビの絞りカスを飼料に出来ると目を爛々と輝かせながら語る夢追い人・猪木は凄い。だけども、ブラジルの地面を這ってる亀を捕まえて子供のように喜んでる猪木はもっと凄いっていうようなことを書いてるんですよ。

博士　うんうんうん。

――そんな猪木さんを見て、村松さんは「刻一刻変化する体験に感動する能力と体力」があるって表現してるわけですよ。で、プロレスファンってプロレスに対してそういうところがあったよなあと思ったんですよね。

玉袋　うんうんうん。

――いちいちビックリしたり驚いたり。あるいは冷めてはいても次の展開を予測してみたりとか。もの凄いエネルギーがあったはずなんですよ（笑）。

玉袋　ああ～！　そうでしたね。

――いまのファンってないんですよね、それが。流れてくる情報をただ単に見たり聞いたりしながら、「所詮こんなもんだろう」っていうところがあって、俺はそれが気に入らない。ものの見方として（笑）。

博士　その辺をとりこみながらやるビジネスっていうのはどうなんだろうなぁ。一連の冬木（弘道）の発言なんかは「プロレスっていうのは全部ショーなんだよ」っていうのをはっきりレスラーが言うようになってるわけじゃないですか。

――そうですね。「ショーに限りなく近いプロレス」っていう打ち出し方ですね。でも簡単な話、それしか答えがないんだったらだったら見ないですよね。違う答えもあるはずだから見続けるというね。

玉袋　そりゃそうだ。

――やたら答えを決められることに凄く嫌な感じがあるんですよ。最初から答えが決まってるものを見たって面白くもなんともないじゃんっていうね。凄く青臭い主張なんだけどね（笑）。

玉袋　それは重要だぁ。

博士　それはそうだよな。

――だから「真剣勝負ならヒクソン」という、その決めつけが邪魔ですね（笑）。じゃあ、「真剣勝負っていったって最初から答えが決まってるんだったら八百長やんけ」って言ってやりたいですね（笑）。

博士　オレは『K―1BUSHIDO』を見てる時なんて、99・9%、安生や長井に







オレ、全然醒めてねえですよ！盛り上がろうよ、なんにしても!!〈筋太郎〉

勝ち目はないと思ってますよ。

博士　思ってますけど、試合前の興奮たるや凄いですよね。もしかしたら勝つ瞬間が見れるかもしれないっていうね。ゼロではないっていうところのね。決まってはいないっていう感じはね。

——だから、さっきの村松さんの言葉じゃないけど、プロレスファンが刻一刻と体験することにいちいち感動しなきゃダメなんですよね。いちいち感動させないレスラーや団体も悪いんですけど（笑）。シッシーだけ感動しててもしょうがないですよ（笑）。

博士　でも山口さんは、いちいち感動しなきゃいけないっていうんだけども、でもいちいち感動できる試合っていうのは年に2～3しかないでしょ。猪木の引退試合、前田の引退試合、あと、10・11ぐらいじゃないですか。

——いまのところ三つですね（笑）。

博士　でしょう（笑）。

——だから刻一刻の体験をする体力、せめてファンとしての「体力作り」くらいしろよって感じですね。ズバリ言ってプロレスファンのレベルって相当落ちてますよ。マスコミのレベルも落ちてるけど。

博士　なんで『紙の前田日明』が100万部売れないんだろうとかって思いません？

——べ……。それはちょっと考えつかなかった（笑）。そうか、100万部売れるって思ってやんなきゃダメなのか（笑）。



博士　オレ、宮崎学さんの『突破者』に入れ込んでるんですよ。なんでこんなスゲエ本が200万部、300万部売れないんだってね。だから、たけしさんに持っていったり、大槻ケンヂに買って渡したり、どこでもいいからこれを広めてくれっていうね。そういうパワーなんだけどなぁ。「こういう価値観がスゲエぞ」っていうのが日常の中に何もないじゃない。

——なるほどね。

博士　例えば山口さんの『紙のプロレス』の巻頭記事だって5打席連続ホームランぐらい打ってますよ。

——ガハハハハ！　まさか（笑）。

博士　その熱さといい、もう毎回。前号は書いてなかったけど（笑）。この人はなんでこんなに良いことを書いてるんだ、毎回。

玉袋　おぉ～！　そうそう。

博士　「また場外に打ってるぞ」「もうその通りじゃないか」というのを感じたら、今度は読者が「いかにその通りか」っていうのをいちいち自分で刷って貼って歩くくらいの熱さがないとダメだと思うんだよ。

——だって正直な話、『週刊新潮』より『紙のプロレス』の方が売れないってことには憤りを持ちますよ（笑）。『新潮』じゃなくてもいいけど、ウチより確実につまんない雑誌が全然売れてたりとかね（笑）。

博士　そうそうそう。

——でもそういうのには、かなり慣れちゃってヤバイなぁっていうのはあるんですけど（笑）。

博士　それはゴルフの結果よりもK—1の視聴率の方が低いとかね、そういうことなんですよ。世の中はゴルフなんだっていうことなんですよ。

——そうですね。だからこそ、高田vsヒクソンなんていう面白いものは、ゴルフじゃない部分で勝負してほしいですよね。さっきの博士の10万円で何人来るかっていう意見と同じになっちゃうけど、

博士　うんうん。

——ゴルフみたいにサラリじゃなくて、ギラリとしたものを叩きつけてほしいというか。

博士　30年ぐらい前の力道山が生きてるころはさ、最もプロレスだったわけじゃないですか。60～70％の人が熱狂するものだったわけじゃない。どっからか、その波が引いてって完全に引き潮のまま止まってるんだって思いますよ。

玉袋　親しまれてたものなんだから。

博士　それがあるはずなのにね。

——どっかでやってる側も伝える側も大衆を切り捨てちゃうのかもしれないですね。

玉袋　ボクもこういう話になると年がら年中言う話なんですけど、リングサイドにオヤジとかババアがいなくなったっていうのが嘆かわしいですね、ボカァ。あの頃はなんだかんだいってパワーがありましたからね。昔の映像とかを見てもお爺さん、お婆さんとかポツポツとリングサイドにいたんですよね。なんか、妙にタレントを座らせてるのもおかしいんだよな。

——しかし、なかなか高田vsヒクソン戦にたどりつかないですね（笑）。

玉袋　オレは向井亜紀とか出そうとしてるのにさぁ（笑）。夫人の代理戦争だって一応考えてきたんだけどな（笑）。

——ガハハハ！　キム夫人とアキ夫人でいきますか（笑）。

玉袋　キム夫人と向井亜紀の代理戦争だとか色々考えてきたんだよね（笑）。そっちまで行ってほしいんだよな、オレは。一番危なっかしいところで勝負するんじゃねえと面白くないよな。

博士　高田が最初、そういうスポーツ化に

一番近い人だったっていうところに問題がありますよね。
玉袋 アスリート！
──だから、前田日明がなかなか色褪せないっていうのもさっきの村松さんの言葉に集約されると思うんですよね。「刻一刻の体験にいちいち感動する能力と体力」（笑）。
博士 そうですよね。
──ホントにいちいち感動するじゃないですか、あの人も。怒ったり泣いたり（笑）。
玉袋 喜怒哀楽だよなあ。
──だからそういう世界が格好悪いって言われるんであれば、格好悪くて結構ていう部分はありますよね（笑）。
博士 うんうん。
──だから去年あんな負け方した高田だけど、その高田の喜怒哀楽を追っていけば、ホントはもっともっと盛り上がらなきゃおかしい。醒めてても何も見えてこない。
博士 1年がかりでそういう努力をしてるんですけどね。
玉袋 「醒めるな醒めるな」ってな。だけど実際醒めてねぇんだけどな。オレ、醒めてないですよ、全然。だから盛り上がってねえところがイライラさせてるところだよ、オレを。盛り上がろうよ！ なんにしても、なんにしてもォォォ！
──いま思ったけど、今年が去年より盛り上がらないのは、『紙プロ』がいけないんですね。『紙プロ』が100万部に部数が上がれば盛り上がるんですよ（笑）。
玉袋 とにかく1回刷ってみろっつうのはあるよな（笑）。
博士 そっから売る努力していこうっていうね。「どうすんだよ、この在庫は」から始めて（笑）。でもホントさ、10・11なんて国民栄誉賞とかにしなきゃしょうがない話だもんねぇ。

電撃咆哮!!

玉袋 高田が勝ったらだろ？
博士 っていうか旗日だよねぇ、10・11は。そうするべきぐらいの日じゃん。
──旗日！（笑）。今日のインタビューの締めとしてはどうなりますかね。10・11に向けての抱負などを（笑）。
玉袋 オレはともかく仕事が入ってたってすっ飛ばして行くってことですよ。
──ガハハハハハ！ 飛ばしますか。
玉袋 スケジュールが決まった途端に、この日は絶対に空けてくれっていうさ。何があっても駆けつける奴らがいるっていうことだよな。うん。
博士 いまからじゃ無理かもしれないけど、入場料を上げて全部10万円の席にして試してほしいなぁ。何人プロレスファンがいるのか試すっていうのをやってほしいな。
──それは面白いですよね。
玉袋 凄い挑戦状だよな、そりゃあ（笑）。
博士 次回のヒクソン戦をそうすりゃいいんだよな。わかんないけど。
玉袋 で、売り上げを賞金にするか（笑）。
博士 だけど、高田vsヒクソン戦って一番感情が揺さぶられた試合なんだよ、実は。
玉袋 木戸銭払って見たもんに関してはね。もう最高でしょ。



あさくさ・きっど■水道橋博士（右）と玉袋筋太郎（左）の超実力派毒舌漫才コンビ。本誌読者によるアンケートではベスト・オブ・プロレスファンに選ばれているほどのツワモノファン。最近たけし軍団を離脱、理想の新天地を求めてビートきよし師匠とともにスリービートを結成するも、きよし師匠がとばく容疑で書類送検されてしまい空中分解か…。

博士 史上1位だよ。最後の結果、4分47秒だっけ。フィニッシュの一瞬以外はものスゲエ興奮してるよ。入場時から何から。
玉袋 いや、ホント凄かった。
──去年の高田入場で泣かないファンはプロレスファンじゃないって言っちゃいますか（笑）。
玉袋 言ってもいいな、オレ！
──でもなぁ、そういうことを言うと、ヒネくれてる奴までこんこんと相手にしなきゃならないからなぁ。
玉袋 でも、笑わば笑えですよ、そういう奴は。
博士 基本はそうなんだけどな、オレも。っていうか、高田がどうのこうのって喋ってるのも嫌なぐらいだもん、本当は（笑）。純粋に高田を応援したいから。
──とにかく勝て（笑）。
博士 いや、それこそお祭りに理由なんていらないじゃないですか。あそこに行って声の限り応援するぞっていうぐらいの意識なんだよなぁ。
玉袋 祭り囃子だよな。
──祭り囃子ですよね。
玉袋 御輿かついで喧嘩になれェ！ 行けェ、高田！
博士 踊れ！ プロレスファンよ、御輿をかつげってことだね。

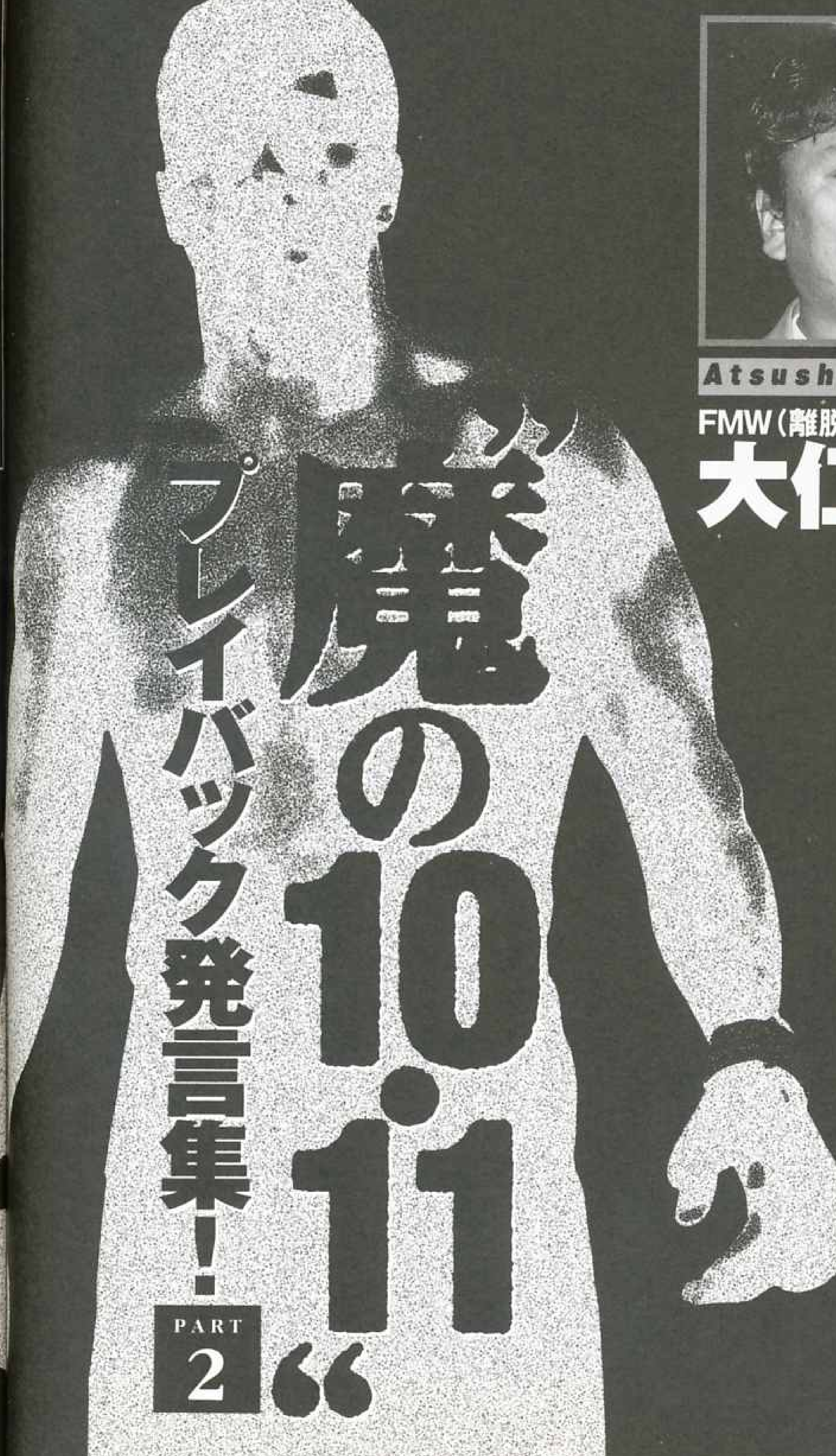
【9月4日／浅草キッド御用達／新中野・喫茶店うぃすぱーにて収録】

PRESENTS

キッド自筆のハチマキを巻いて貴様も(ごめん、キミも)高田を応援しようぜ'98

浅草キッド＆紙プロ連合ノブ応援団「祭り囃子」（仮）から公式直筆ハチマキを2本一組でプレゼント。博士バージョンは「高田UFOに乗れ」（飛べ、高田の意）。玉ちゃんバージョンは「ヒクソンに青タンを」。これを巻いて10・11ドームへ出撃だ！ このハチマキを巻いた状態でドームでキッドにバッタリ出会ったら、その日は必ず飲みに連れていってくれるそうだ！
宛先は、（株）ダブルクロス「うぃすぱ～」係。住所は読者プレゼントページか雑誌の裏でも見ておくれ。締め切りは10月5日。2度目はない！





魔の10.11“プレイバック発言集！ PART 2



Genichiro Tenryu

WAR／フリー

天龍源一郎

「過去にトップのレスラーが実際に（バーリ・トゥードに挑戦しに）行ったかと言えば、何人もいないんだからさ。そこんところを評価しないと。（中略）惜しむらくは（高田に）勝って欲しかったというのが本音だよ。でも、僕は『ごくろうさん』と言ってあげたいね。ここにくるまで10ヶ月も試合しないで、実際に彼が一生懸命練習に練習していたことも、体をみてわかったからね。だから、俺たち外野がガタガタ言うことじゃないでしょう」

〈97・10・12『格闘技の祭典』試合後のコメント〉



Thunder Lyger

新日本プロレス

獣神サンダー・ライガー

「（プロレスが負けたとも言われてますけど）ボクはそう思わないね。日本ではいろんな人がプロレスを見に来てくれて、市民権を得たかなァって思ってたんだけど、グレイシーとかちょっと出て来ただけで、すぐ揺らぐでしょ？　**アメリカなんていろんな格闘技、スポーツがあるけど、プロレスっていうジャンルが確立されてるじゃない？　アルティメットが出て来ても、客は入ってるし、テレビも毎週ゴールデンタイムで放映してもビクともしない。日本でもそれだけのものを築かないとダメ。何をオドオドしてんの？**　向こうがすごいと思うなら、そっちを見に行きゃいいんだよ。**でもボクは、自分がやってることに自信があるし、見に来た人には素晴らしいものを見せてあげるから。**本当は面白いコメントを聞きたかったんでしょ？　でも、ボクが高田さんの敗戦に関して言えることはそれだけですね」

〈『週刊ファイト』97・10／30号〉



Atsushi Onita

FMW（離脱？）

大仁田厚

「あくまでプロレスラーというのはプロレスラーと闘うことで相手のいいところを引き出したり引き出されたりするべきなんですよ」

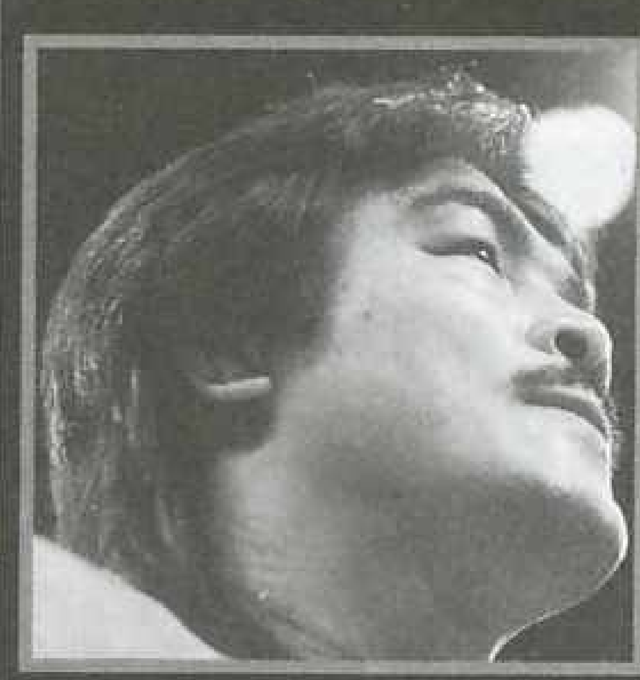
「とにかくあれ以降、プロレス熱が急激に冷めたと思うんですよ」

「グレイシーというプロレスに対する毒が出現して、その毒を誰かが食わなきゃいけない。だからその勇気に関しては高田選手を称えてもいいことだと思いますよ。だけど、これは素の大仁田厚が話してると思って聞いてほしいんですけど、**禁断の果実を食ったっていうことは、それを食ったために、プロレスという分野がある種、浸食されてしまったという部分は大いにあるでしょう。プロレスとはある種、エンターテイメントであり、ある種、面白い世界とか凄い世界とかを見せるものであって、**だからnWOがウケてるっていうのは、ファッション性やスタイルが楽しいからでしょ。僕はそう思いますよ。素直にああいいなって思いますよ。（中略）だからアメリカンスタイルのジャパニーズスタイルっていうのを確立しないとダメだと僕は思う。」

〈『格闘ゲリラマガジン』Vol．3＝97年12月発行〉

「高田選手は、あの北尾選手を一発のキックで倒した非常に素晴らしい運動神経と反射神経を持っている人ですよ。私も試合でガンガン蹴飛ばされたことがありますからね。その高田選手は今回、攻め方のパターンとシチュエーションをイメージトレーニングされていなかったのかなァと思いましたね。そういう感じですよね。**ボクはあの試合では『間合い』がすべてだったと思います」**

〈97・11・2／金沢大学学園祭でのターザン山本とのトークショー／『週刊ファイト』97・11／20号〉



Hiroshi Hase

全日本プロレス／国会議員

馳 浩

格闘 TEPODON!! '98
踊れ! 10.11!!



Yoshiaki Fujiwara

藤原組組長

藤原喜明

「高田？ うん、今日新聞で見たよ。感想？ 私らが言うことじゃない。彼らは一生懸命やったんだろうし、**実際に闘ってない人間がいろいろ言うのは、卑怯ですから。** 私から言えることは、がんばって、もう一回（ヒクソンを）目標にしてがんばってほしいと思います」
〈98・10・12『格闘技の祭典』試合後のコメント〉

「ある意味で、周りが高田さんをプロレスラーとしてではなく、柔術の初心者としてリングに出しちゃったような感じなんですよ」
〈『格闘ゲリラマガジン』Vol.2＝97年11月発行〉



Yuko Miyato

元・UWF
インターナショナル

宮戸優光

「それはね、もうルールが違う！ **ル・ウ・ルが違うのよ！** ヒクソンというのは柔術の選手でしょ！ あの『PRIDE．1』でヒクソンと戦った高田選手が負けた。あれはプロレスのルールではないじゃないですか…もしもね、ぼくらが柔道の選手と柔道のルールでやる、剣道の選手と剣道のルールでやる。それじゃ勝てませんよ。**だがね、ヒクソンがプロレスのルールでやるというのなら、絶対タダじゃ帰さない！ もう絶対にタダじゃ帰さない！ プロレスラーの怖さを見せつけてやりますよぉ」「（プロレスとバーリ・トゥードの違いについて）うーん、クク、ウーム…その差はねえ、確かにわかりづらいかもしれない。ボクらもハダカ、ヒクソンもハダカ。そんな二人ががらみあってんだ、そりゃ似ていますよぉ！ でもねえ違うんです！ プロレスはねぇ、ホンットに何でもありなんですよぉぉ！ そこが違う、そこが違うんですよぉぉ！ ガハハ！ もし彼らのルールでヒクソンとやるっていっても、絶対に僕はやらない！ 来るなら来いってことですよ！（プロレスだったら）タダでは帰さない！ もう、タダでは帰しませんよぉ！」**
〈ヤングマガジンUppers 98・Vol.10〉



Youji Anjo

フリー／プロレスラー
飲み屋ではK—1ファイター

安生洋二

「ここ一番の勝負強さとか精神力は技術よりも大切ですから。Uインターの頃の高田さんからはリングに上がった時点でそういうものを感じましたから。（中略）ヒクソン戦ではそういう高田さんの強さが発揮されませんでしたけど、ベストの状態の高田延彦はあんなもんじゃないですから」
〈『格闘ゲリラマガジン』Vol.2＝97年11月発行〉



Kantaro Hoshino

元・新日本プロレス＝引退

星野勘太郎

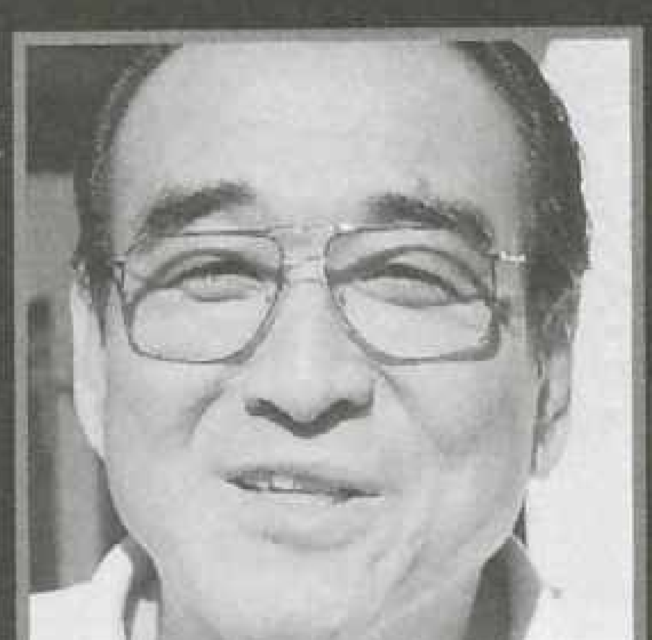
「観てないですけど簡単に済んだんでしょ。グレイシー柔術ですか、だいたいわかりますね。昔、うちにもブラジルのがいましたからね」
〈『格闘ゲリラマガジン』Vol.2＝97年11月発行〉



The Great Sasuke

スペイン語でUFOという
名称の新団体を興すことを
画策するみちのくプロレスバカ社長

ザ・グレート・サスケ



Hiro Matsuda

フリープロレスラーの元祖＝引退

ヒロ・マツダ

「高田選手は完全に負けてしまいましたが、弱いから負けたんじゃない。また強いからヒクソンは勝ったんじゃない」
〈『格闘ゲリラマガジン』Vol.2＝97年11月発行〉



Minoru Tanaka

格闘探偵団バトラーツ

田中稔

「ウ〜ン、やっぱり残念ですね。今日、見に来たプロレスラーはみんな高田さんを応援したと思うし、**ボクとしてもひと言、残念としか言いようがないです。それだけです！」**
〈97・10・11／高田―ヒクソン戦終了後に〉

高田道場
桜庭和志

Kazushi Sakuraba



「あれだったらタックル取れそうですねぇ」

〈97・10・11高田―ヒクソン戦終了直後、控室前の通路の立ち話で〉

「柔術、柔術って言ってるけど、あれ、服を着てないからレスリングですよ。**バーリ・トゥードも最終的にはレスリングじゃないですか。それに彼ら（グレイシー）はお金もらってるから、プロのレスラーですよ**」

「安達（巧＝高田道場コーチ）さんと話してても、『タックルは絶対取れそうだ』って結論になりますね。実際に取られてるじゃないですか、ホイスは。ガード・ポジションからやる技術もわかってきてるんで、それだけ気をつければいけるんじゃないスか？」

「（ヒクソンとやったら）**いけないかもしれないけど、『いけるかもしれない』って言ってますからね、ボクの感覚が！**」

〈本誌NO．8＝98年2月発行〉



Takehiro Murahama

シュート・ボクシング
村浜武洋

「でも、**高田選手が負けたからプロレスに裏切られたとか、**そんな気持ちは、もちろん全然ないですよ。そういうのって、ちょっと違うと思うんですよ。プロレスの勝ち負けっていうのは、そういうものじゃないでしょう。プロレスラーって難しいですよ」

「バーリ・トゥードでプロレスラーに勝つ格闘技選手はヒクソンだけじゃなくて他にも、何人もいるでしょう。そう思いますよ。**でも逆に言えば、格闘技の選手はプロレス出来ないでしょう。自分ら、プロレスせえって言われてもできないすよ。プロレスには、プロレスにしかない、すごさがあると思うんです**」

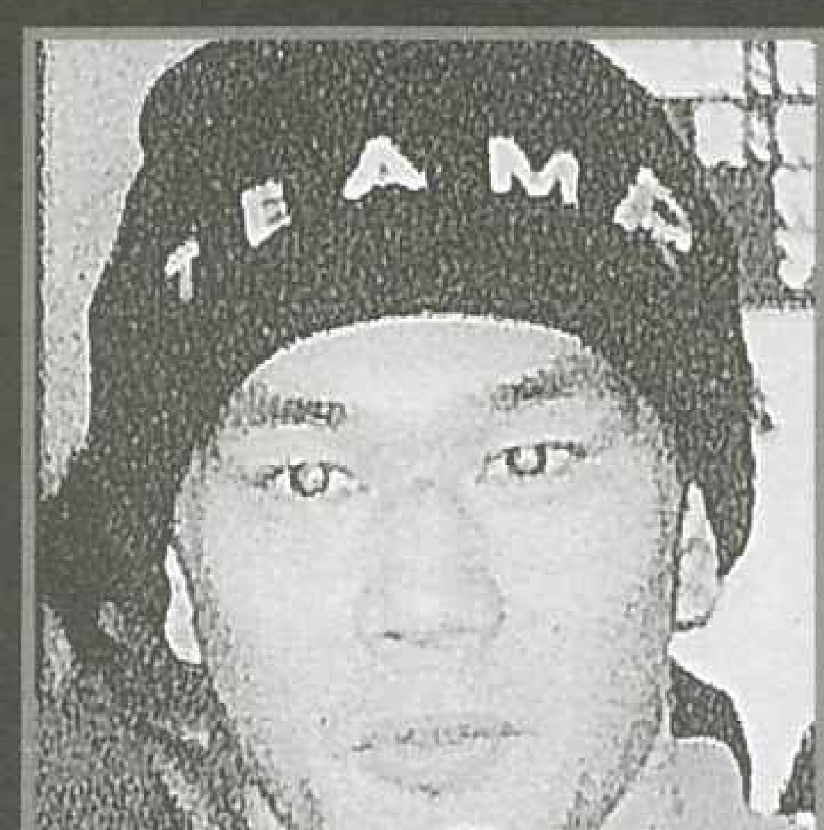
〈メディア・ファクトリー刊『ヒクソン×高田戦の真実！』＝98年2月発行より〉

「（高田vsヒクソン戦は）全体を、まだじっくりとは観てないんですけどね。高田選手は、怪我などが度々あったと聞いていたので、万全じゃない体調でよく頑張られたな、と。それが素直な感想ですね。（中略）逆に、**ヒクソンの方はもう、非常にベーシックで、危なげない試合運びだったと思います。**プレッシャーのかけ方なんかも、メチャクチャうまいんですよね。それだけで、普通の人間とは違うというか（笑）」

〈メディア・ファクトリー刊『ヒクソン×高田戦の真実！』＝98年2月発行より〉

Rumina Sato

修斗ウエルター級1位／K'z FACTORY
佐藤ルミナ



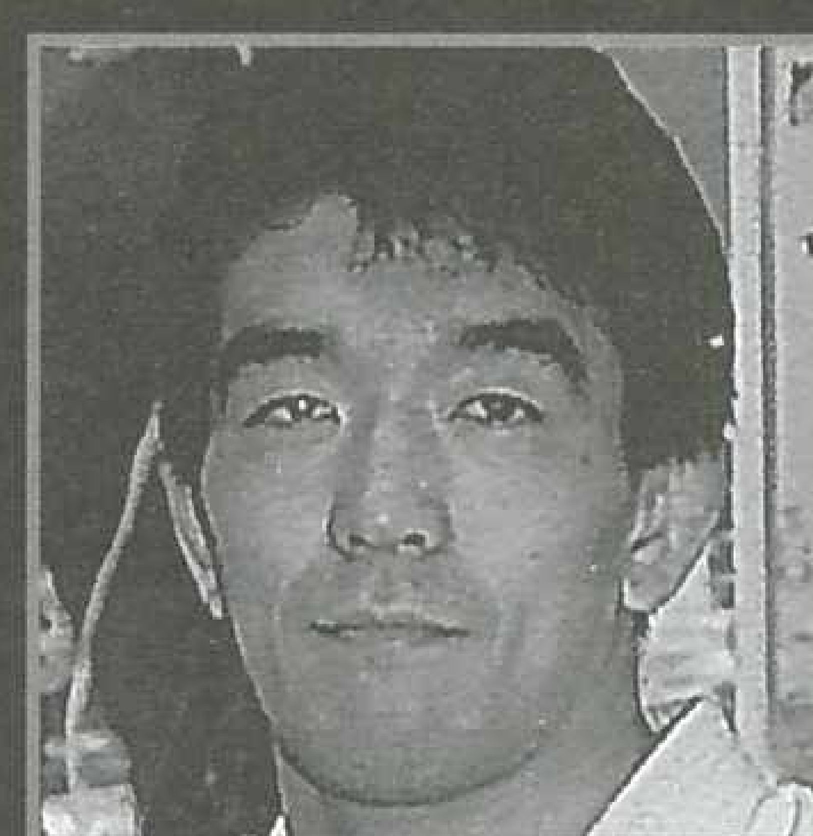


Koichiro Kimura

DDT／スーパー宇宙パワー？
木村浩一郎

「高田選手にも勝機はあったと思うんです。僕が見た限り2つあった。高田選手が何の迷いもなく打撃…自分がもっとも得意としているキックを100％の力で出せれば、もちろん展開は違うものになっていたと思うんですよね。あと、スタンドでのレスリングの攻防で、もつれた部分があったじゃないですか。高田選手がヒザ蹴りにいこうとして、抱え上げられる前あたりの攻防ですね。あの時、**高田選手が逃げないでレスリングで真っ向勝負してたら、高田選手の方がヒクソンの上に乗っていたと思うんですよ。**だから、迷いが一番の敗因だったんじゃないですかね」

〈メディア・ファクトリー刊『ヒクソン×高田戦の真実！』＝98年2月発行より〉



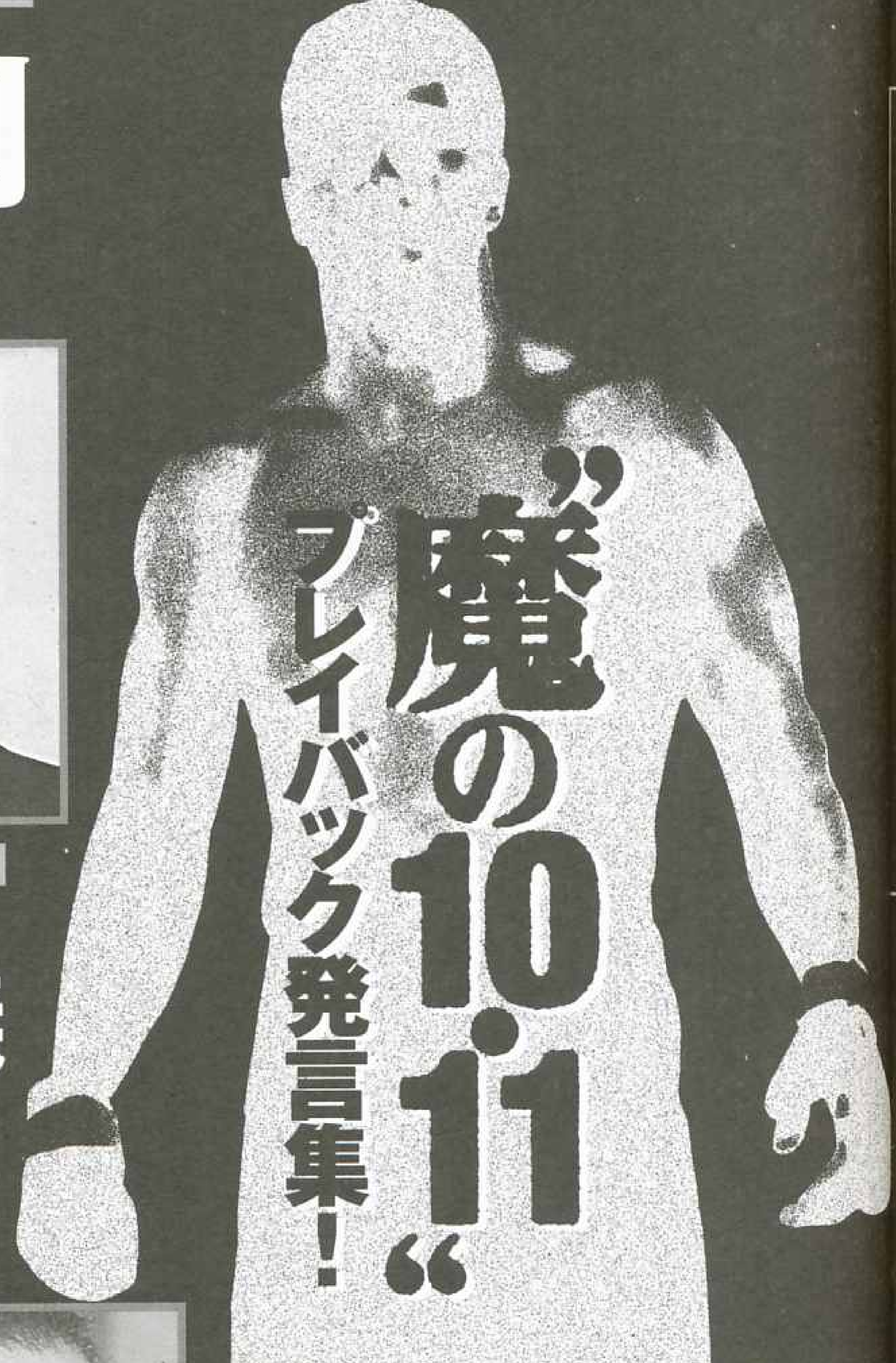
Yuki Nakai

PARAESTRA TOKYO代表
中井祐樹

「今回の高田さんとヒクソンの試合ですが、時期的にちょっと早かったんじゃないか、と思いますね。**ヒクソンと言わないまでも、他の選手とやって経験を積んでもよかったた**んじゃないかな、と」

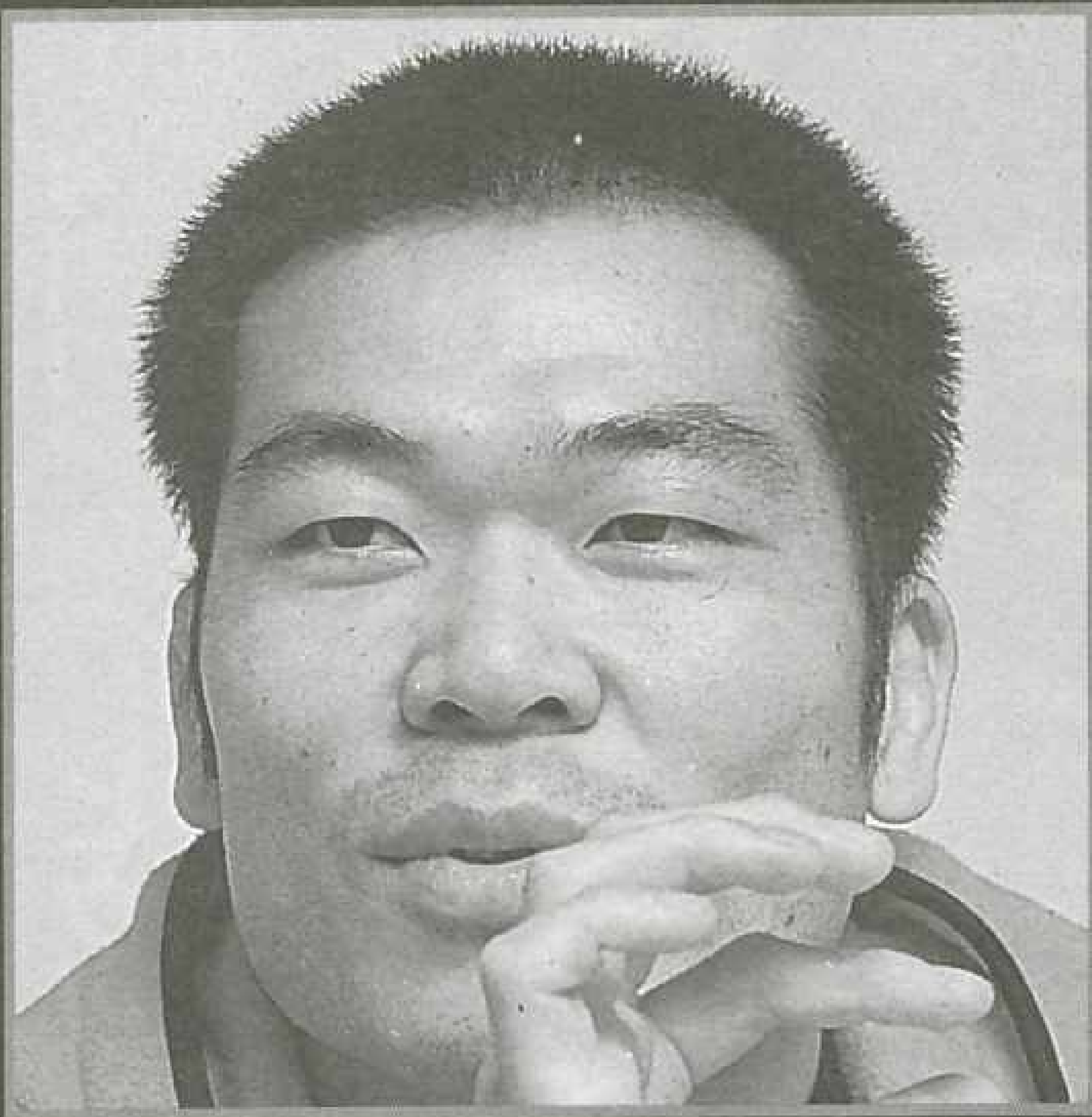
〈メディア・ファクトリー刊『ヒクソン×高田戦の真実！』＝98年2月発行より〉

"魔の10・11"プレイバック発言集！



「(グレイシー側が見たこともない技で勝つのは)それは近い将来ありえますよ。なんでかって言うと、グレイシー柔術がどういうものなのかっていうのは詳しくは知らないですけど、**例えばヒクソン、彼個人にしてみると、ハッキリ言って頭だけで闘ってるような人ですよね。**こうきたら、こう返すっていう。で、相手がひるんだら、ここで勝負をかけるとか。多分そういうのだけで闘ってる人だと思うんですよね。そんなメチャクチャ馬力があるわけじゃないだろうし。で、結局そうしてると自分の知らない技術とかでパッとかやられちゃうと、次のアイデアが浮かばないと思うんですよ。あそこまで行ってる人だったら。**でも、その勝つってことに関して言えば、正直言って自分も自信あるし、誰もがその機会を狙ってると思いますよ。**ただ、なかなかチャンスに巡り会えないっていうのがね。正直言って自分とかがやらしてくれっていったって、あそこまで周りが評価してる人間と、自分なんかを試合させるかって言ったらNOじゃないですか。だけど、『やれるんだったら、やりてえ』ってみんな思ってますよ。当然、あそこまで頭の肥えた人間だから、『なんだこれ？』って技じゃないと勝てないと思うんですよ、逆に」

〈本誌NO.9＝98年4月発行〉



Tsuyashi Kosaka

リングスジャパン

髙阪剛

「あのね、**勝負なんていうのはそんなもんなんですよ。負け方でいえば、去年はアンディ・フグなんて、フランシスコ・フィリオに、もっと簡単に負けたじゃないですか。**ただ、プロデュースという側面で、例えば高田さんを出したいと思った時には出し方ってあるんですよね。それに、確かに勝負もそうだけど、それよりも観る側が注目するのは『勝負』に至るまでの『ドラマ』なんですよね」



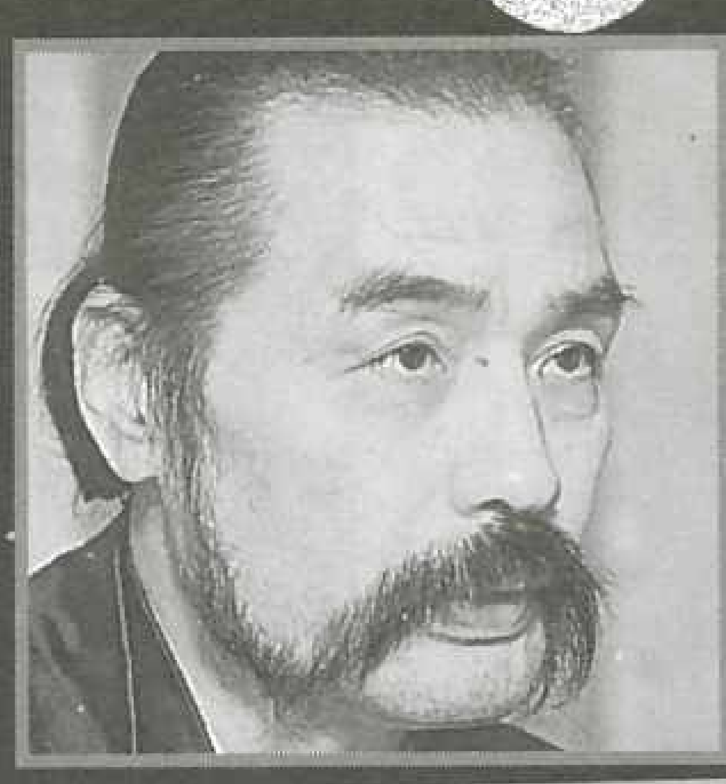
Ishii Kazuyoshi

K-1プロデューサー／
正道会館館長

石井和義

「もちろん、高田さんはヒクソンのイメージを大きくしてしまったのかもしれないけど、ヒクソンも同じように怖いわけじゃないですか。ただし、リングに登場する時は完全にヒクソンになりきって登場しますよね。それは『リングに上がれば1対1なんだ』ということが学習されているんですよね」

〈『スコラ』98・3・26号&4・9号〉



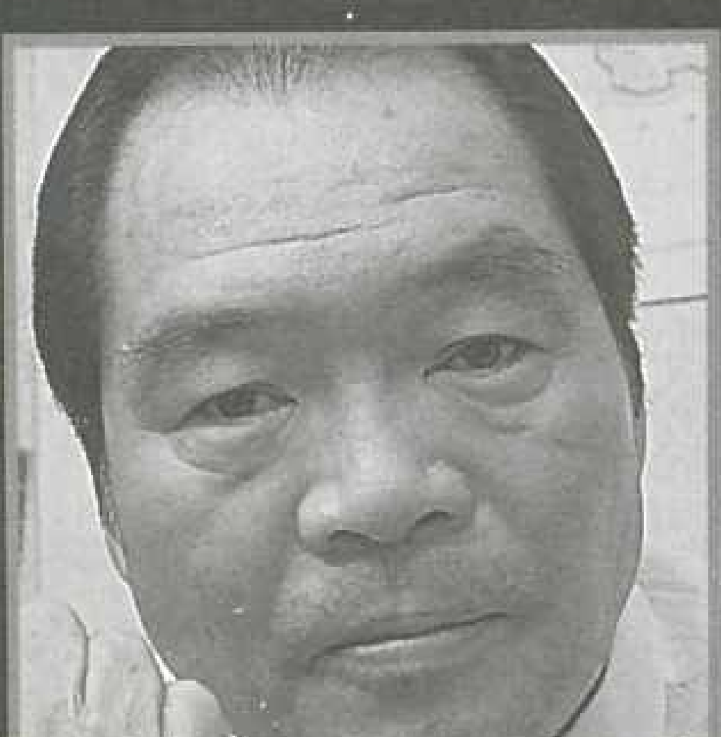
Masashi Horibe

日本武道傳骨法會創始師範

堀辺正史

「ヒクソンの精神的なバリアーに押されたことですね。ヒクソンが間合いを詰めてきた時に、(高田は)距離を置かざるを得なかった。その時から主導権はヒクソンにあったんですよ。やっぱり精神的な部分が大きかったですね。でも、この精神的っていうのは、抽象的な意味じゃなくて、過去の稽古の質とか量、あるいは試合の経験の積み重ねが精神という部分で現れている。その点でヒクソン選手の方が上回っていた」

〈『格闘ゲリラマガジン』Vol.2＝97年11月発行〉



Guts Ishimatsu

元・プロボクシング
WBC世界ライト級チャンピオン

ガッツ石松

「だから昨年の秋、ヒクソン・グレイシーが高田延彦に勝ちましたが、**それはグレイシーのルールで戦ったからの結果というだけでね。**違うジャンルの格闘技が競いあうのはしょせん無理ですよ」

〈出典不明〉

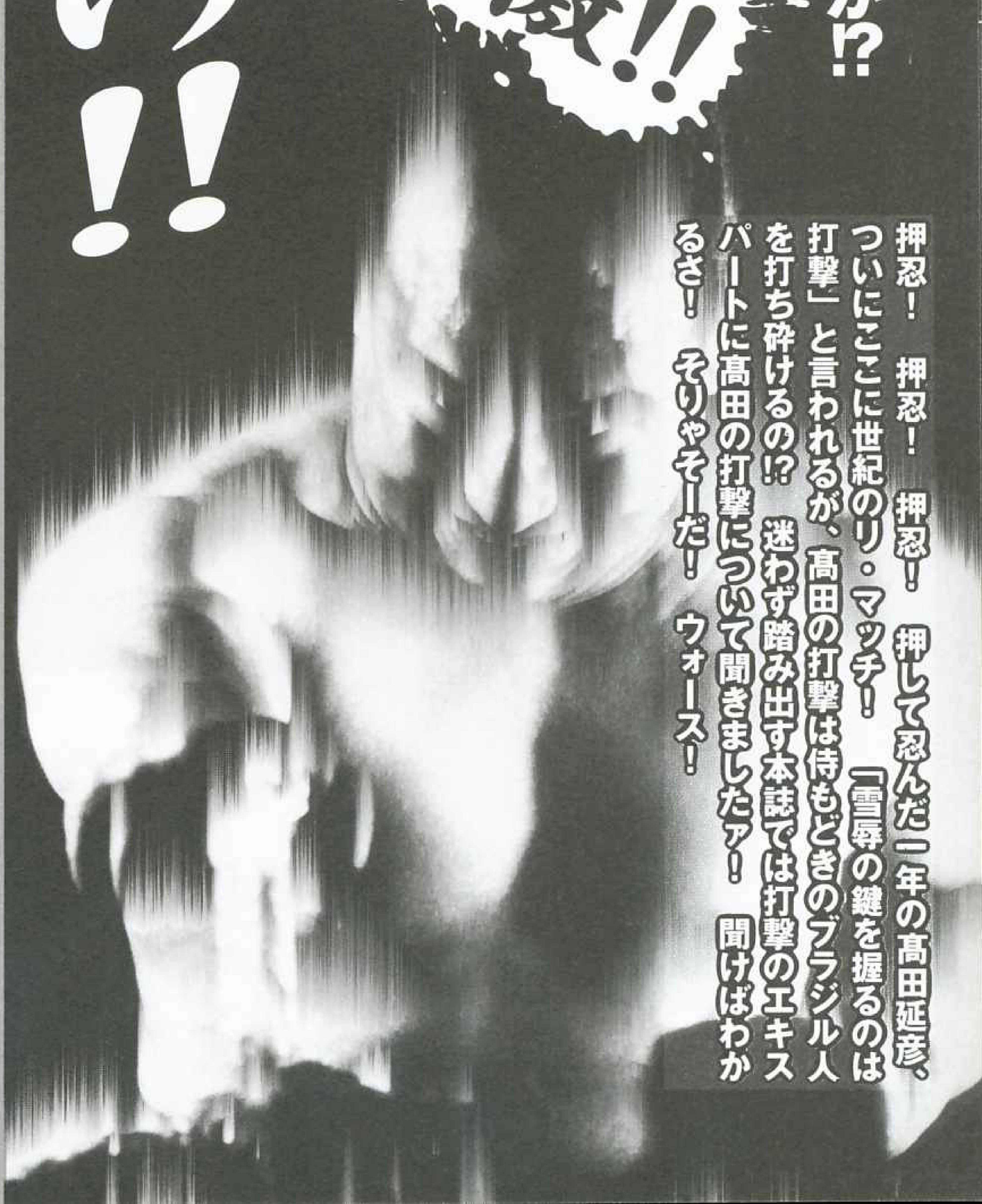
格闘TEPODON!! '98 踊れ！10.11!!

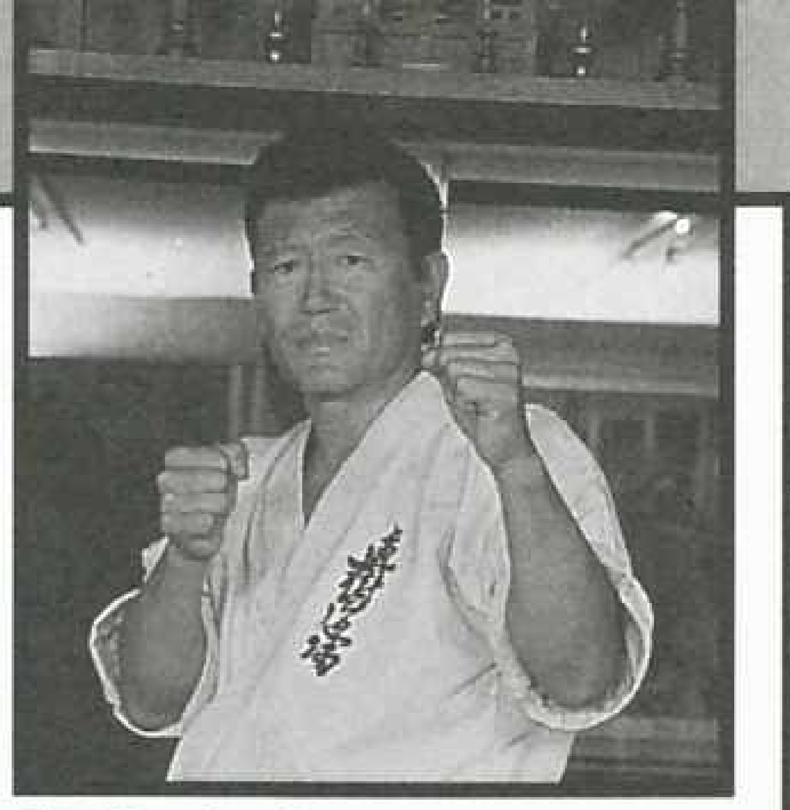
果たして髙田の打撃はヒクソン攻略の突破口か!?

髙田の勝機を空手家に聞け!!

髙田に一檄!!

押忍！　押忍！　押忍！　押して忍んだ一年の髙田延彦、ついにここに世紀のリ・マッチ！　「雪辱の鍵を握るのは打撃」と言われるが、髙田の打撃は侍もどきのブラジル人を打ち砕けるの!?　迷わず踏み出す本誌では打撃のエキスパートに髙田の打撃について聞きましたァ！　聞けばわかるさ！　そりゃそーだ！　ウォース！



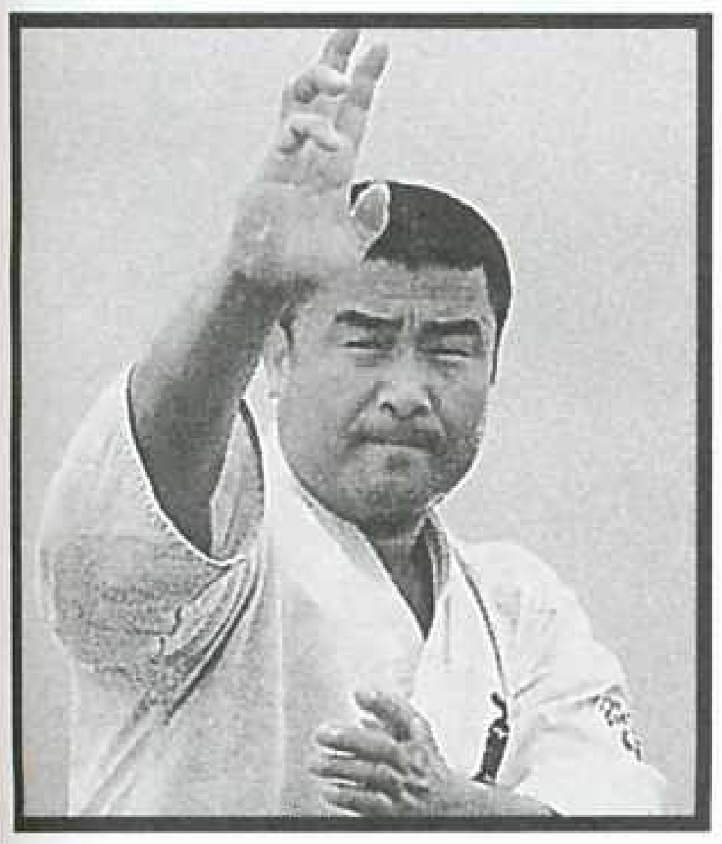


ヘタに顔なんか当てようと思わないでガードしてる腕を狙うんだよ。

いま俺が連載してる『無比人』でもいずれヒクソンとやるようになるんだよ。その時、無比人がヒクソンをどう攻めるかを楽しみにしててくれよ。

だけどあれだ、髙田とヒクソンだったらヒクソンかな。俺だって髙田を応援してるけど、

打撃で一発でボンッてみんな思ってるけどあれはほとんどない



添野義二
世界空手道連盟・士道館館長。佐山聡、三沢光晴、アブドーラ・ザ・ブッチャーといったプロレスラーに打撃を伝授し、最近では世界のスーパースター、マイケル・ジャクソンも弟子入りしたワールドワイドな空手家。極真会館時代には故・大山総裁の懐刀として修羅場の真っ直中を正面突破してきた命知らずの男でもある。10月25日には弟子のマイケルが空手の演武も行うキック各団体対抗戦を両国国技館で行う。（問い合わせ先・ニュージャパンケイプロモーション・03－3642－3161）

やっぱり髙田君が勝つとすれば気持ちの問題だよ。技とかはそんなに変わるもんじゃないよ、人間は。だけど猪木や佐山だったらわかんないよ。猪木vsウィリー戦で俺はウィリーのセコンドについたでしょ。それがきっかけで猪木とは仲良くなったけど猪木は何をするかわからないところがある。レスラーってのは強いんだよ。精神的部分で。

技の部分でいえば打撃だろうな。突き放して蹴ってって打撃でやるしかないだろうね。ただね、ハイキック一発で倒れるってないんだよ。一発で倒すなんてありえない。掴まないルールだったらありえるけど掴んでいいルールの場合は掴んでいい方が有利になっちゃうんだよ。打撃で一発でボンッてみんな思ってるけどあれはほとんどない。掴む方が早いよ。

佐山が言ってたけど、ヒクソンはリング上で親指で目ん玉を突いてくるらしい。見えないところで凄くうまいんだよ。ああいう場所でそんなことができるってのは心が強い証拠だよ。ヒクソンはゴムまりみたいな身体してるしね。筋肉も柔らかいし、関節も柔らかいし、心も柔らかい。そういうところでヒクソンの方が奥深いんだよ。

俺か？　俺がやるんだったらやっぱり目突きとか金蹴りしかない。まともなことをしたら勝てないよ。それしかない。ストリートファイトだよ。

ん？　俺は200戦無敗かな（笑）。ヒクソンの半分ぐらい。昔のことだけどすぐに喧嘩の助っ人を頼まれちゃうんだよな。それで調子に乗って行くわけだよ（笑）。ネリカンに入るわけだよなぁ（笑）。

ヒクソンの強さって血筋だろうな。小さい頃からやってるしね。あとは看板背負ってるプレッシャーに勝てるところだろうな。でもいい試合してもらいたいね。髙田君には頑張ってほしいよ。

ヒクソンに一撃!!

だけどあれだ、高田とヒクソンだったらヒクソンかな。俺だって高田を応援してるけど、こればっかりはしょうがねえなぁ。

高田に勝機があるとすれば打撃だな。蹴り足はまず掴まれるだろうから掴まれるまでにヒクソンの攻撃力を半減させるぐらいのダメージを与えられるかどうかだな。だからヘタに顔なんか当てようと思わないでガードしてる腕を狙うんだよ。しびれさせちゃって片腕利かなくしたら寝たって怖くないだろ。ボディとか、顔じゃなくて腕を殺しにいくんだよ。ヒクソンだって手を蹴ってくるとはまさか思わないだろ。拳を握って中指だけを突き出す、中高一本拳で二の腕を狙ってもいいな。あれは効くんだよ。二の腕の辺りは急所が集まってるからな。

あとロープワークは凄く大事だよ。高田はなんでロープを使わないんだ？　掴むのは反則にしても身体をぶつけてのリバウンドはいいんだろ？　ロープの反動を使って撹乱するんだよ。キンシャサの奇跡でさ、アリがフォアマンをやっつけたのもロープ際だろ。アリはロープにもたれてリングを広く使ったんだから。ヒクソンなんて追い足は早くねえだろ、年だし。ロープの弾力を使って動くのは高田の方がうまいに決まってるんだから。その点プロレスラーは有利なんだから、ロープにバンッと体当たりしてあっち行ったりこっち行ったりするだろ？　ああいうので簡単には幻惑されねぇだろうけど、もうちょっとそういうこともやってみてほしいな。真っ正面から行かねえことだよ。

俺も無比人にヒクソンとやらそうとしてるから、ほんのちょっぴりエッセンスを見せただけだけどな（笑）。まあ、これが俺からのスペシャル・アドバイスだって高田選手に伝えておいてくれ（笑）。

真樹日佐夫
故・梶原一騎の実弟であり、元極真空手総本部師範代。現在、真樹道場首席師範にしてステゴロでプロレスラー、バディ・オースチンに金的をキメた過去を持つ日本でただ一人の小説家。ヤクザ相手の喧嘩など数々の修羅場をくぐり抜け、その経験をもとに本誌では格闘小説『無比人』を連載中。

ころで凄くうまいんだよ。ああいう場所でそん

よ。

意外と思い切って中段に蹴りを叩き込む

どちらが勝つなんてことは僕には言えないですけど、高田選手とは一度は酒を酌み交わした仲なので応援してますよ。前回の闘いでは闘い以前にヒクソンに飲まれて高田選手の実力が発揮できなかったように感じましたね。向こうはグラウンドのプロフェッショナルですからね。あれはヒクソン側のルールと言ってもおかしくないものだし、それに向かっていった高田選手っていうのは凄いと思いますよ。

プロレスラーは体はデカイし、トレーニングを積んでいるから強いはずなんですよ。だから勝機の第一は相手に飲まれないことですね。技の面で言えばやはり打撃ですね。高田選手のハイキックは極真空手の選手から見たら早い方ではないですけど、パワーはあると思いますからね。これは自分の分析なんですけど意外と思い切って中段に蹴りを叩き込む。そうやってボディーを攻撃していく中で顔面を狙うとかですね。最初から顔ばかり狙ってると必ず足を掴まれて倒されちゃういますから。ボディーを叩いてスタミナをロスさせた中で顔をガンッと。ボディーの攻撃に意外に突破口があるんじゃないかと思うんですね。

精神面で言えば、また負けるんじゃないかなって不安がやっぱり強いでしょうね。相手がもっと強くなってるんじゃないかなとか。それに打ち勝つにはもう練習しかありません。これ以上追い込めないぐらい追い込んでそれで相手の名前を叫びながらサンドバッグを叩く。僕がリベンジマッチに臨んだ時はそうして自らを鼓舞しましたからね。負けた悔しさを思いだすんですよ。

前回負けた高田選手は勝ったヒクソンよりも得るものが多かったんじゃないですか？　例えばマスコミにボロクソ書かれたわけですよね。それで相当悩み苦しんだ末にもう一度闘いたいと思ったわけですから。あれで終わっていたら高田選手はそこで終わりでした。しかし、大きな壁に立ち向かうことを選んだわけですから自分もそうでしたけど必死の力で立ち向かっていくと思いますよ。世界大会を前に大山総裁からいただいた言葉で「死力達成」という言葉があるんですが、それを高田選手にも贈りたいですね。心から応援してるんで勝ってまた酒を酌み交わしたいですよ（笑）。



緑健児
極真会館（大山派）副代表。身長165センチという小兵ながら第5回世界大会では外国勢を次々と倒し、優勝を手にした小さな巨人。現在は後進の指導にあたり、9月27日には福岡県大会を開催。出場者300人という県大会クラスでは異例ともいえる大きな大会を成功させる。空手の普及に命を賭ける身体は小さいが、やることはドでかい負けじ魂の男。

ツボにハマれば間違いなく髙田さんは勝ちます



黒澤浩樹
KRS代表幹事にして実戦空手・黒澤道場師範。極真会館時代には豪快な下段蹴りで一本勝ちの山を築くとともに、中指の骨が突き出ても試合をやめなかった驚愕の闘いぶりから格闘マシーンの異名を持つ。昨年のPRIDE.1のリングでもイゴール・メインダートと異種格闘技戦を行い、膝靭帯を断裂しながらも闘い続けた不屈の男。ケガも完治し、近々復帰も予定。格闘マシーンいまだ健在なり！

ルールの問題とか去年の実績とかを考えるとヒクソンの方が断然有利であることは疑いのない事実だと思うんですね。だけど僕個人としてはやっぱり勝負の世界は何があるかわからないということです。

この前の試合は髙田さんはかなり絞ってるんですよ。だから、髙田延彦のベストの体重ってもうちょっとあると思うんですよ。身長にしても体格にしても、もともとはヒクソンよりは大きいわけですから。要はヒクソンに勝てるものは何かっていうものを例えば身体だったら身体、パワーだったらパワー、打撃だったら打撃とピックアップしてそれをうまくヒクソンとの試合にかみ合うようにもっていくことが一番大事なことでしょう。

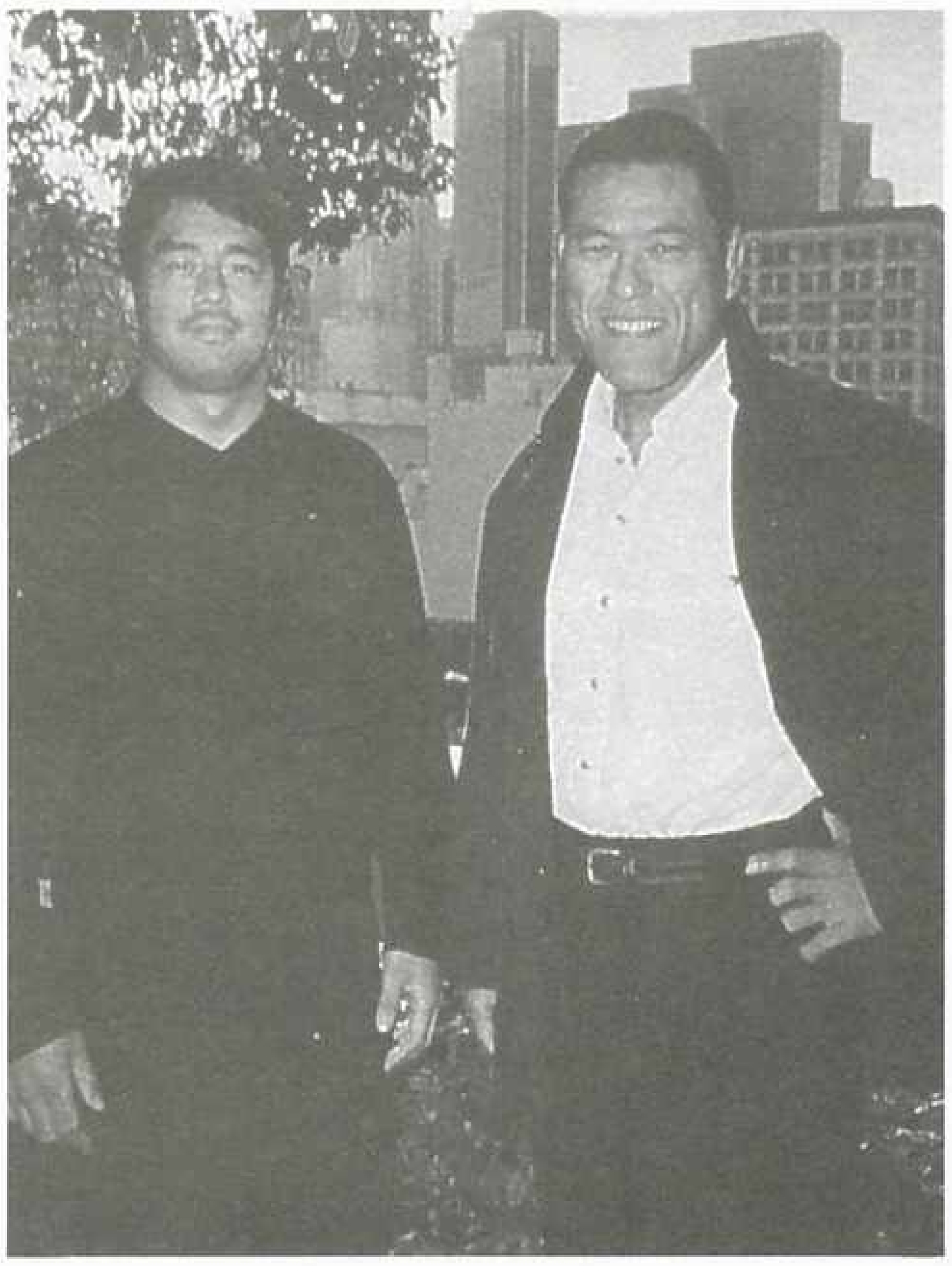
向こうのノーホールズバードに出てる選手が言うんですけど「ヒクソンは打撃に対して凄くナーバスになる」と。練習の時も「打撃に対して凄く警戒心が強い」と言ってるんですね。打撃の選手から見れば髙田さんの打撃技術に疑問を持つかもしれませんが、充分にヒクソンを倒すだけの打撃のレベルはあると思います。ルールが違いますから。しかも髙田さんは寝技もできますからね。

要は打撃にもってくまでの誘い方が問題になってくると思いますよ。「俺は寝技は得意だよ」って見せておいてパンチにいくとか、柔術で挑んできやがってっていう状況を作っておいてカウンターでフックとかね。そういう形はヒクソンが倒れる可能性が一番あると思います。本当の勝負は打撃だっていうのを見せないのも戦術・戦略だと思うんですよ。もちろん髙田さんもそういうシミュレーションをいくつか立ててると思いますんで、それがツボに入った場合は間違いなく勝てるでしょう。

髙田さんがPRIDE.3のリングで「ヒクソンをただではリングから降ろさない」って言ってましたけど、あれを根底に持って頑張ってもらいたいですよ。いい試合をしなくていいから勝ってほしいです。

Showちゃんの『昨日・今日・明日』紙プロ直言

98年8月・猪木&高田再会秘話





米国にあるリトルトーキョーの高層ビル群をバックに微笑む二人。やはり壮観な光景である。大の和食党の高田にとっては、日本料理店での対談は願ったりかなったりだったのかも……。ただ、僕（Ｓｈｏｗ）にはあまり食事の味を味わう余裕はなかった

8月下旬、単行本『T多重ウェイブ』（スコラ刊＝10月上旬発売予定）の仕事で、アントニオ猪木と高田延彦の対談を取材するために米国まで行ってきた（ただし2泊4日の強行スケジュールのため、僕は心身ともにボロボロになって日本に帰国した）。

もちろん、対談自体は大成功。猪木も高田も喜んでくれたように見えたし、これをセッティングをした僕らも、素直にやってよかったと思えるものだった。

そこで、この項は多少なりともその時の話を書いてみようと思う。

実は、きっかけは『スコラ』編集部で、担当編集者A氏と雑談していた時のことだった。

いつの頃からか、A氏は「ミスター・ウォーリーのインタビューがしたい。え？　猪木には5月にインタビューした？　なんで猪木が関係あるんですか！　僕が話を聞きたいのは、あの外国人のウォーリーですよ!!」



終始和やかなムードで行われた対談は、いつしか日本国そのものの行く末に関して盛り上がり、実に内容の濃いものだった

という手前勝手な願望を持っていた。それをその日は、なんとか本格的に実現できないか、という話になったのである（いまのところ、これはまだ誰も実現していない企画なので、もし可能ならば誰でもいいから実現の方向で動いてもらいたい）。

さて、ウォーリーをインタビューするにはどうすればいいのか？

とりあえず猪木事務所に連絡し、なぜか猪木の居場所と日程を確認した。

すると、「8月いっぱいまでは米国（サンタモニカにある自宅）にいる」とのこと。だとすれば、早くても9月にならなければ、日本でこれを実行することはできない。

米国まで行ってやるべき企画なのかどうしようか……と考えていると、高田が8月下旬には米国（ロス）のマルコ・ファスの下に（4月に一度行って以来、）再指導を受けに行くという知らせが入ってきた。

待てよ。とすると日程だけを考えれば、米国で猪木（ウォーリー？）と、マルコに再修行を受ける高田の両者の取材が可能になる。しかもサンタモニカとロスなら距離的にはほとんど問題がない。

もちろん、ウォーリーの話は聞きたいが、ぜひ単行本『T多重ウェイブ』には、去年の高田 vs ヒクソン・グレイシー戦の後に猪木がいった「一番弱いヤツが出ていった」発言の真意を、猪木自身に確かめておかなければならない。

そんな気持ちで米国行きをA氏と相談していると、ふと脳裏にひとつの考えが浮かんできたのである。

「いや、せっかく二人とも米国（しかも近く）にいるのだから、いっそのこと対談してもらうことはできないもんかなあ」

きっと高田にしても「一番弱いヤツ〜」の真意は、実際に自分の耳で確認したいのではなかろうか。

そう思うと、即座に両者にアポを入れずにはいられなかった。高田には実際に会って話をすると、基本的にはOKの返事。ただし「会っても師匠と弟子の関係は変わらないから、会うのならキチンと何を話すのか事前に相談しよう」とのコメント。もちろん、猪木側も問題はない。しかも猪木側には「対談というと堅苦しいものになるから、いっしょに食事をしながらラフなかたちでできないか」という提案をもらった。それなら高田もそれほど緊張せずにいられるに違いない。

僕は多少の身震いを覚えながら、当日が来るのを待った。

成田空港からシンガポール航空の旅客機に乗り、米国に到着。翌日、対談場所であるホテルニューオータニにタクシーを走らせる。

そして、ついに両者が対面!!

高田が「ごぶさたしてます」と言えば、猪木は「元気ですかーッ」と、早くも猪木節を爆発させ、「いい顔してるじゃねえか」と高田を牽制。最初は緊張していた高田も徐々に本来のさわやかさを取り戻し、途中からは秘蔵の昔話を公開するなど、緊張感の中にも暖かな空間が両者の間に感じられた。

注目の「一番弱いヤツが出ていった」発言に関して、猪木は理由を述べながらも「反省してますよ」と陳謝。さらに、両者がそろって出馬した3年前の参議院議員選挙について猪木は「高田がいたから、俺は政治家には向かないと気づかされた」と、思いがけず感謝の弁を述べる。

それから、ヒクソンとの再戦については、高田に「人生の棚卸しをして、まずは自分が輝けよ」と激励の言葉をかけるなど、あの空間には、昔とまったく変わらぬ両者の師弟関係があった。

まあ、内容に関してはこの程度にとどめておく。詳しくは、10月上旬に発売される『T多重ウェイブ』を一読願いたい（もち必読!!）。

断言する。

「これを読まずして、高田 vs ヒクソンの再戦を観るなかれ!!」

Show語録

ああ、自分が「文章を書いてはいけない人間」だとわかっているのに、また文章を書いてしまった。だが、個人的には「批判」はともかく「誹謗中傷」を書きたいとは思わない。裏を返せば、この両者の違いがわからないようでは「文章を書いてはいけない人間」よりも、実は陳腐な文字を重ねているのと同じ。そのことに一刻も早く気付くべきである。

RADICAL BOUT REVIEW

紙プロ的 RADICAL観戦記

だって観戦記なんだもん

超名物!!



鈴木＝猪木?、髙橋＝長州?
ヒクソンはこれをどう見た?

最も観客が沸いたのは、オーロラ・ビジョンにヒクソン・グレイシーが映った時だった。バス・ルッテンの入場時でのことだったが、いくらルッテンがヒクソン狩りを宣言しているとはいえ、ファンが望んでいるのはヒクソンvs船木誠勝。この点は譲れない。それはそうと、ここでは髙橋義生vs鈴木みのる戦について触れてみたい。大会直前に発売された『週刊プレイボーイ』のインタビュー記事で髙橋は「日本人が好きそうなお涙頂戴っぽい（鈴木の）考え方が大っ嫌い」と鈴木を罵倒。これ以外にも、かなり辛辣な発言も掲載されていたが、観客全員が事前にそれらの情報を知っていれば、より観る側の興味がそそられたように思う。

鈴木は入場後、リング上でレガースをはずし、一瞬だがアントニオ猪木を思わせる、などと書くと、賢明な『紙プロ』読者に怒られそうだが、それでも単なる〝子ども騙し〟とは思えなかった。鈴木が謎かけをしているのがよくわかったからだ。一方、鈴木の行動に髙橋はニヤリ。そんな両者のやりとりを見ていたら、案の定、またまた自然と涙腺が緩んできた。「なに泣いてんだよ（それほど号泣ではない）」と『週刊プロレス』の佐藤正行記者に突っ込まれても、「しょうがないじゃんか」と答えるしかない。

勝利した髙橋の顔を見ていたら「俺の人生にも一度くらい……」といった長州力もこんな顔をしてたんだろうなと、ふと思った。

その他に関しては割愛。ただ、欲をいえば「5周年記念大会」で、桜庭和志vsカーロス・ニュートンのような「ハイブリッド・レスリング」と思えるものが一試合は観たかった。それともうひとつ、ヒクソンがどう観たのかが気になる——。

（Ｓｈｏｗ）



『PANCRASE 1998 ADVANCE TOUR』

9／14（日本武道館）

PANCRASE

極私的ベストバウト

1位　バス・ルッテン
vs渡部謙吾
（和製デニス・ロッドマン誕生!!）

番外　ガイ・メッツァー
vs柳澤龍志
（不甲斐ない試合をした責任をとって柳澤は「やめる」といったらしいが、やめて責任がとれるほどマット界は甘くない。大事なのは次の柳澤の試合である）



『奥さん！ DDTですよ！』

9／12（板橋区都税事務所前）
DDT

極私的ベストバウト

1位 E・吉田&鴨居（&ジャイ子）vs矢口&T・鳥羽
2位 S・宇宙パワー&黒影 vs高木&佐々木
3位 仮面S・Sライダー&三上 vs西野&菊澤

わたし、『紙プロ』のジャイ子じゃないんですぅ～

だってお姉ちゃんがいけないんだよぉ。このデカ女！ なんで私がジャイ子やらなくちゃいけないのぉ～。なぁ～んて、一卵性双生児だから、私も十分にデカイし、プロレスも大好きなんだもん。でもねDDTに履歴書送ったのはお姉ちゃんだもん。だって当日になってさぁ、オーディエンスの前に出るのが恥ずかしいだって言うんだよ。ボ●ナス●●ボ！ あっ間違っちゃったぁ（泣）。この意気地なし！ そ～う、それが言いたかったのね。そしたら「目がかゆいんですぅ～」な～んて言うんだから、妹としても恥ずかしい。でもなんか目がかゆくなってきちゃったぁ～。だってしょうがないでしょうよぉ。双子なんだもん。

会場に着いたらね。高木さんがね、控室用意してくれたの。やっぱり優しくされると嬉しいな。みんなももっと優しくしましょうよぉ～。エヘヘ！ でもね聞いてくれる？ 控室っていっても床屋さんだったの（涙）。それも幕張ってるし、外見えないの。しょんぼりしちゃった。試合見たかったのね、私も。

私、鴨居長太郎さんのマネージャーやるんだって。だって、鴨居さんのことよく知らないからちょっと不安。でも頑張るぞっ、ジャイジャイ！ やっぱり恥ずかし～。オーディエンスたくさんいたらドキドキしちゃうかも。だって、体は大きいけど私、お姉ちゃんみたいに打たれ強くないもん。ちょっと心配。「青コーナーから鴨居長太郎、エキサイティング吉田の入場です」。あっ出番だ。うぅ～、でもね、私は目が悪いから眼鏡ハズしたら見えないんですぅ。だから緊張しないもん。頑張るもん。でも、やっぱりドキドキしてきちゃった。おまじないしよ。クリクリクリクリ。うん。だいぶ落ち着いてきた。ヨシ行こ！ （ジャイコル・バス）



『STARTIST'98』

9／9（後楽園ホール）
アルシオン

極私的ベストバウト

1位 玉田凛映のプロ根性
2位 本部席に座り続け、飾り物に徹したタイガー・ドリーム
3位 飛ばない府川唯未

浜田文子が平田淳嗣みたい？ 元気がないのは問題です！

この日の興行の目玉だったはずのタイガー・ドリームが頸椎捻挫で欠場してしまった。数カ月前からあおり続けてきただけに、かえすがえすも非常に残念。結果的に、浜田文子が休憩前の試合後にドリームの穴を埋めるべく、メインにも大抜擢されることが決定。場内も期待と興奮で大いに盛り上がった。

それにしても、この日の主役であるはずの浜田は、あまりにも元気がなさすぎた。リング上でも声が出ず、ドロップキックはほとんど相手の腹に命中、おまけに技の失敗も多かった。ラ・ケブラーダなど、随所に天才的な動きを見せるだけに、このムラっ気は非常にマイナスの印象が強い。

この試合を見た後、デビュー前に収録した浜田のイメージビデオを見た。あまり得意ではなさそうな日本語を駆使して「（デビュー戦が）しょっぱい試合だったらスミマセン」と試合をやる前から平田淳嗣みたいなことを言い出しているのは問題だろう。周囲の期待が重すぎるのは仕方ない。ビジュアルとスター性は文句なしに抜群だからね。でも、それだけでプロレスやるわけじゃないんだから、新人に期待し過ぎるのも考えものだ。センスは光っているだけに、緊張が取れれば試合内容もグッと良くなるはず。

この日、救いだったのはメインで浜田と対戦した玉田凛映だ。肩の骨を外しながらも、締まりのない展開を必死に引っ張り、初挑戦のムーンサルト・プレスまで披露してしまう姐御っぷり満点のプロ根性は非常に素晴らしかった。玉田はアルシオンに入ってから、ぐっと逞しく見えるようになった。ビジュアル担当からははずれて、目立たない位置にはいるが、もっと評価されていい。ミックスド・マッチの鬼、石川雄規もお気に入りみたいだし。（ノブ）



『ヤングジェネレーションバトル'98』

9／6（TFMホール）
格闘探偵団バトラーツ

極私的ベストバウト

1位 トンパチ・マシンガンズ&岡本衛 vs池田大輔&モハメド・ヨネ&マッハ純二
2位 石川雄規 vsビクター・クルーガー
3位 臼田勝美 vs竹村豪氏（無我）

『闘いのドンキホーテ』ことバトラーツに、まいったか!?

毎年、真夏のクソ暑い時期に全国を這いずり回る、バトラーツ恒例の『ヤンジェネ』の最終戦である。それにしても、今年のヤンジェネは非常にバラエティに富んだ内容だった。ファン的には1枚のチケットで、バチバチ、デスマッチ、ルチャ、エンターテイメント・プロレス……プロレスのいろんな面を見れてしまうという非常にお得な団体である。それだけバトラーツの個々の選手が闘いの幅を広げているということだ。安くて、いろいろ品揃えがあって、客には嬉しい……まるで、いま話題の大型激安チェーン店『ドンキホーテ』のようなプロレスをバトラーツは展開している。この日の興行は文字どおり『闘いのドンキホーテ』（小社発売のビデオ・絶賛発売中）状態で非常に満足度が高かった！

トンパチ・マシンガンズは2人の天才的なプロレスセンスがかみあって、いまホントにプロレスが楽しくてしょうがないといった感じだ。大ちゃんのケサ斬りチョップを小野武志が真剣白刃取りでキャッチ（しようとして失敗！）するシーンは、まさにB系の馬場vsフリッツ・フォン・エリックだった。明るく、楽しく、激しいヒールである。

アレクが土方を横綱相撲で下し、vsマルコ・ファス戦が決定したことをリング上から発表すると、会場は大歓声に包まれた。世界の強豪と、あのパーマンが闘うのだ。多くの格闘家が「なんでアイツが？」と悔しがってるらしいが、そんなもんは「ザマアミロ」の一言である。そしてもう1人、「ザマアミロ」が口癖の男・石川雄規がヤンジェネを初制覇して両国へ向けて最高の女装、じゃなかった助走をつけた。ますます猪木っぷりに磨きがかかっている。 （ノブ）

RADICAL BOUT REVIEW



『FIRE DAY』

9／6（後楽園ホール）

JWP

極私的ベストバウト

1位 高橋奈苗の絶叫

2位 キューティー＆豊田＆福岡 vs久住＆高橋＆中西

3位 関西＆堀田vsデビル＆宮口

今回の教訓・取材に行ったら客出しするまで会場にいるべし！

だって、良かったもんJWP。面白かったもん、みんな勢いあって。メンツも豪華だったしジャイ子の大好きな関西＆堀田組も登場。メインも元気な若手が大健闘、それにつられたようにベテランチーム（っていうか豊田）も異常なハイテンションで元気なところ見せてくれました。ジャイ子も元気だもん、ジャイ子も異常だもん。みなさん、実はジャイ子、体もデカいけど失敗もデカいの。なんと、この興行の一番の目玉（？）、久住のマイク（フリー宣言）を聞かずに帰っちゃったんですぅ。すぐ会社に戻って、「面白かったよー。奈苗最高だもん」とか呑気に報告してたんだけど、まさかそんなコトがあるなんてね、エヘヘ。でもね、まぁ、ジャイ子の事情も聞いてよぉ。だって、その後バトラーツのTFMホールで物販やらなきゃいけなかったし、会場に行くのも迷ったぐらい仕事がいっぱい残ってたんだもん（涙）。だからとにかく急がねば！って思ってすぐ帰って……（涙）。ホントにコレが発覚したときほど会社行くのが嫌だったコトはないもん。だってタダでさえイジメられてるのに……。案の定、陰湿なイジメが待ってたよ。まぁ、コレばっかりはジャイ子が悪いってコトで、耐えたもん。久住はJWPに戻り、周りの冷たい視線を浴びながら毎日試合をしているようですが、ジャイ子も頑張るもん。負けないもん。大っきいんだもん。

で、肝心の試合は高橋スゴイもん！　あのものスゴいジャイ子級に説得力のある身体で、なんだか身軽そうに動くし、コーナーで控えてる間ずっと絶叫してるの。なにかあったのかと心配しちゃったぐらい。ジャイ子も見習おうっと。ジャイジャイ。

（ジャイ子）



『SB・the COMING GENERATION』

9／5（後楽園ホール）

シュートボクシング

極私的ベストバウト

1位 森谷吉博vs山木小兵太

2位 村浜武洋vsグライガンワーン・オー・スイープワローイ

3位 土井広之vs嶋村哲昌

キック・ガッツ顔の男たち

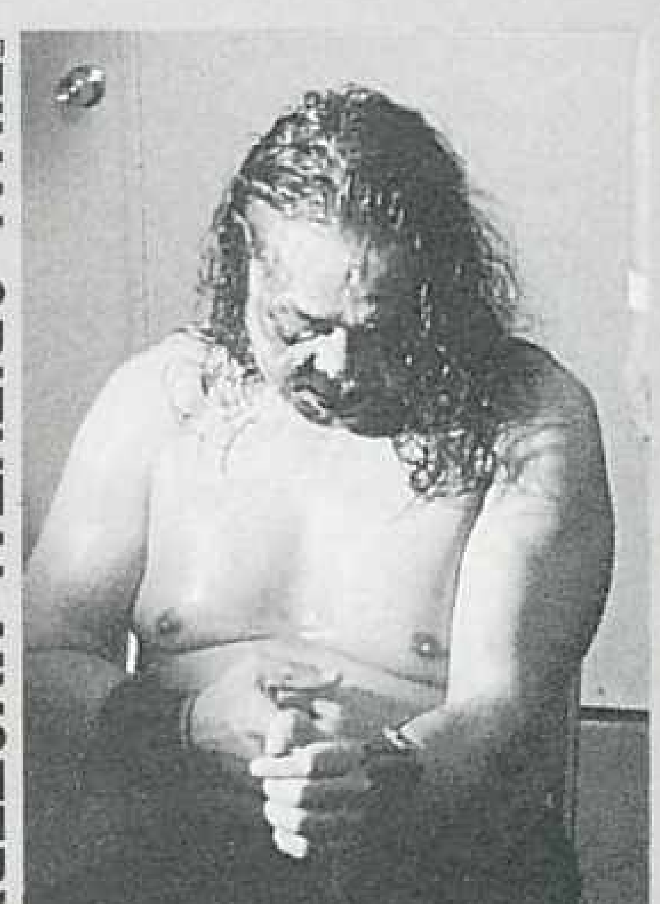
シュートボクシングの選手とキックの選手の顔はあきらかに違う。SB勢は緒形を代表するように、血生臭さのないおしゃれといえばおしゃれな若者たちだが、対するキック勢は汗臭くて泥臭い不器用な顔立ちである。森谷吉博と対戦した山木小兵太はいまどき三度笠姿で登場し、これがまたよく似合う。ガッツ石松顔というか、たこ八郎顔というか、その系列の因果な顔立ちなんである。闘い方も左のフック一本を振り回し、コンビネーションで攻める森谷とは好対照。試合の前半なんかセコンドから「足はガードに使うだけでいい」とか言われる始末。試合で「蹴るな」と言われてるわけだ。因果顔が不器用な人生を呼ぶコクのある男である。現場帰りのオッチャンたちがワンカップ片手に野次を飛ばしていた古き良き後楽園ホールがよく似合う。

MAキックウェルター級一位の嶋村哲昌も目つき一つでSBの土井広之を圧倒。結果としてはKO負けではあるが、喧嘩させたらなにするかわからない不気味な底深さを感じたわけだ。

底深さでいえば村浜武洋を1ラウンドでKOしたタイ人グライガンワーンも特筆すべき男だ。試合後、「煙草を吸ってるしトレーナー業が忙しくてあんまり練習してないし」とニコニコ顔で語る。日本のフェザー級ではほぼ敵無し状態の村浜を見事なハイキック一発で倒しておきながら、この呑気なセリフ。

立ち技格闘技の男たちは最近のプロレス団体が忘れようとしている泥臭さや猥雑さをいまだ残している。日明兄さんが言っていた「リングに立つってことはね、なんかね、かっこいいもんじゃないんだよ」というのを地でいっている。地でいきすぎてるところがやっぱり因果ではあるが。

（ブチ）



『FINAL ORIENTAL MYSTERY TOUR～KABUKI FOREVER～』

9／4（横浜文化体育館）

IWAジャパン

極私的ベストバウト

1位 ザ・グレート・カブキ＆グラン浜田 vsザ・グレート・サスケ＆テリー・ファンク

2位 山田圭介vs奥村茂雄

3位 折原昌夫＆江川英知＆パロミノ vs佐藤竜騎士＆ザ・グレート・タケル＆三上恭平

だってジャイ子も毒霧吹かしてクリクリ

『SAMURAI!』視聴者のジャイ子は、カブキが山田圭介に突然自宅に押し掛けられ、IWA入りを懇願される場面や、元川恵美の誕生日パーティーでニコニコする場面を呑気に自宅で見てたワケですが、そんなジャイ子がまさかカブキのインタビューに立ち会ったり、引退興行の取材するなんてねぇ。世の中ナニがあるかわからないね。

3日後に控えたカブキ最後の試合の対戦者決定トーナメントでは、山田が見事、優勝。顔面を血で真っ赤に染め、号泣しながら控室で言った言葉が……「カブキさん、オレと最後の試合ではなく、レスラー人生最後の勝負をしてください！」おぉっっ、カッコいいコト言うじゃん。さすが社長。「カブキさんはその日2試合目ですけど、キャリアを考えればそのくらいのハンデでちょうどイイと思います！」えぇ～っ？　なんでレスラー人生最後の勝負を挑む若人がハンデもらうのよ！　ジャイ子、がっかり。まあ、かなり流血してたんで、朦朧としてうっかり言っちゃったと解釈しましょう。

主役のカブキはメインに登場。サスケとの『グレート対決』は見事にスウィング、とはいかなかったけど、ラストのカブキの飛んでるサスケへの毒霧は見とれちゃった。ジャイ子、感激。

試合後、観客のみなさんへカブキからの挨拶があり、最後にみんなで「エイ、エイ、オー」のかけ声で締め、となったんだけど、一度リングを降りたカブキがナニを思ったか再びリングに上がり、「ひとこと言い忘れました。少～しだけ、少～しだけ。」と、いつものポーズ。最後までファンサービスを忘れないカブキのプロ魂を見ちゃいました。ジャイジャイ。

（ジャイ子）



『禁断の果実～無限の可能性～』

9/1（北沢タウンホール）
LLPW

極私的ベストバウト

1位　神取忍&八木淳子 vsキャロル美鳥&ハーレー斉藤

2位　立野記代のガウン

3位　立野記代vs沖野小百合

デビュー2ケ月でL-1参戦！ 彼女はLLの救世主になれるのか？

LLの若手に絶賛注目中のジャイ子的には、見逃せないカード揃いだったこの日の興行。前半4試合が『下克上シングルマッチ』と銘打って若手vsベテランのシングルが組まれてたんです。今日は誰がジャイ子の目を釘付けにしてくれるのかしら……。と、思いきや、この日は皆さん不発に終わってしまい、ジャイ子しょんぼり。気迫は感じられたんだけどね……って、こんなコト、ジャイ子に言われてるようじゃダメなんですぅ。だってレスラーなんだから、気迫を感じさせて当然だもん（まぁ、全く感じられない人も結構いるんですけどね、実際）。プラス何かを見せてくれないと。先輩をいきなり叩き潰す（無理でも試みる）とか、「アタシもL-1出るもん！」等、無謀な発言も可。ジャイ子も出るもん！

結局、ジャイ子が前半で一番目を惹かれたのは、立野記代のウエディングドレス仕様のガウン。OG戦で盟友の山崎五紀と再会し、（JBエンジェルスってみんな知ってる？）彼女の幸せな結婚生活に憧れての行動とジャイ子は推測するね。ガンバレ、記代！

ところで、八木淳子ですが、メインのタッグマッチに登場。ジャイ子ばりにものスゴイ体格で周囲を圧倒、関節技の入り方も申し分なく、とてもデビュー2戦目とは思えない堂々とした試合っぷりぷりぷり。まさに逸材。オマケに柔道やってたとはいえ、いきなりL-1参戦と、根性まで座ってるんだもん。とても3月まで女子大生だった人のするコトとは思えない。

浜田文子しかり、パンクラスの渡部謙吾しかり、『大型新人』というプレッシャーに押し潰されずに（自分のデビュー戦を見にお客さん来ちゃうんだよぉ）ファイトしてる姿は、見ていて気持ちイイんだもん。ジャイ子もLLだしね。ジャイジャイ。（ジャイ子）



『革命点火　AGAIN~Romancing Road~』

8/31（後楽園ホール）
WAR

極私的ベストバウト

1位　荒谷&平井&安田&ゴディ vs天龍&木村&多留&岡村

2位　ケンドー・カ・シン&安良岡裕二 vs福田雅一&望月成晃

3位　斉藤旭資 vsたにぐちゆういち

イスで伝わる強さもある!!

安田&ゴディを世界最強タッグリーグ戦に出したい。コーナーを挟み、並び立っている安田とゴディの後ろ姿を見てそう思った。まぁ、そんなことはどうでもいいとして……。

第三試合、たにぐちvs斉藤の一戦。たにぐちは、開始早々、師匠（ナガサキ）ゆずりの情け容赦ないイス攻撃で、斉藤の頭を叩き割った。斉藤は近年稀に見る大流血で、その頭頂部からの鮮血は、まるでクジラの潮吹きの様にリングサイドに振り掛かっていった。想像を絶する流血に会場もボクもちょっと引いてしまった。後楽園ホールは、三試合目から、なにやら血生臭い雰囲気が漂い始めてきた。そんな感じがしたのだ。

たにぐちの師匠であるナガサキもその雰囲気に同乗していった。序盤こそ青柳の蹴りを受けていたが、いったん場外へ出るとナガサキの独壇場であった。タダでさえハンパじゃないイス攻撃も、2脚、3脚、6脚となり、しまいには目に付いた物はイスだろうが机だろうが片っ端から叩き付けるのだ。リングに戻るとパイルドライバー一発でケリを付けた。その感情がどこを向いているのかは、わからないが、そういう摩訶不思議な怖さをナガサキには見せて欲しかったのだ。そういう意味で今日のナガサキには大満足。しきりに噴射を試みようとした消火器が、不発に終わったのが残念ではあったが。そしてナガサキは何事もなかったかのように、控室に姿を消した。その頃、青柳は立ち上がることもできずリングに横たわっていた。心配した観客は休憩も取らず青柳を見守った。それから約30分後ようやく担架で運ばれていった。

たにぐちとナガサキに何があったかは知らないが、ただごとじゃない暴れっぷりを見せてくれた師弟コンビだった。（チョロ）



『ヤングジェネレーションバトル'98』

8/29（札幌テイセンホール）
格闘探偵団バトラーツ

極私的ベストバウト

1位　石川雄規 vsアレクサンダー大塚

2位　臼田勝美 vs山川竜司（大日本プロレス）

3位　トンパチ・マシンガンズ vsチームX

常識を超えた街に石川が舞う イカレた主張が札幌に響く！

21年間生きてきて恥ずかしながら、この取材で初めて北海道に上陸させていただいた。夜のススキノは、新宿・歌舞伎町と似たような感じだが、いろいろ路上観察をしてみると東京との違いに驚かされることが非常に多い。実際、新宿のコマ劇場前で絶叫している尾崎豊もどきなどは、ススキノにいない。そのかわり、いい顔をしたハゲオヤジや、JUDY AND MARYのボーカルもどきのロリータ少女が、街角で持参したカラオケセットで熱唱する姿があった。東京の常識を超越した世界が北海道には存在していた。

さて、本題に入ろう。石川雄規はイベントや宣伝の関係で、この試合の1週間前から北海道に乗り込んでいたらしい。イカレ社長らしく、この街の常識を超越した部分がよっぽどお気入りなのかもしれない。札幌では、今年1月以来のvsアレク戦が待っていた。受けの強さには定評のある2人の対戦だったが、一方的に石川が頭部への衝撃を受けまくるシーンばかりが目に付いた。アレクの殺人スープレックスで何回も頭を打ち続け、驚異的な受けの強さを発揮。最後には根負けしてしまったアレクから、石川が朦朧としながらも魔性のスリーパーでギブアップを奪ったのだった。

よくプロレスラーが語る「プロはケガしても、させてもいけない」という考え方は、確かにその通りだ。だが、その一方で石川雄規の「身体すり減らし観」はそこから一歩踏み込んだものである。「バトラーツが世界征服をするのが先か？　俺たちの身体がブッ壊れるのが先か？　最後まで見届けろ！」という、おなじみの狂気の挑発を観客に向かって叫び、闘い続けている。

この日の大歓声を聞くにつけ、札幌のファンにもそのイカレた主張が刻み込まれたと実感させられた次第だ。（ノブ）

RADICAL BOUT REVIEW

『プロフェッショナル修斗公式戦VOL.53 Las Grandes Viajes（大航海）』

8/29（後楽園ホール）
ワールド修斗



極私的ベストバウト

1位　加藤鉄史 vsアレックス・クック
2位　ヒカルド・ボテーリョ vsジェエル・ギャルソン
3位　朝日昇 vsトレント・ベギズ

プロレス・バカから修斗のバカに

マウントポジションを取ったらそりゃ嬉しいだろう。だが、その嬉しさのあまり観客に手を振ったらどうなるか？　当然、相手から一瞬でも視線をはずすわけだから返されるに決まってるわけだが、今回加藤鉄史と対戦したアレックス・クックはそれを修斗のリングの上で披露したゴキゲンなバカである。

試合開始直後はマウントを取られたクックであったが、下になりながらも「オレにはなんともない」とガードする手を一旦解いて、ここでも観客に手を振り余裕を見せようとする。余裕があるなら、さっさとひっくり返せよと思うのだが。まあ、やがてはマウントを取り返してさきほどの観客アピールにつながるわけだ。

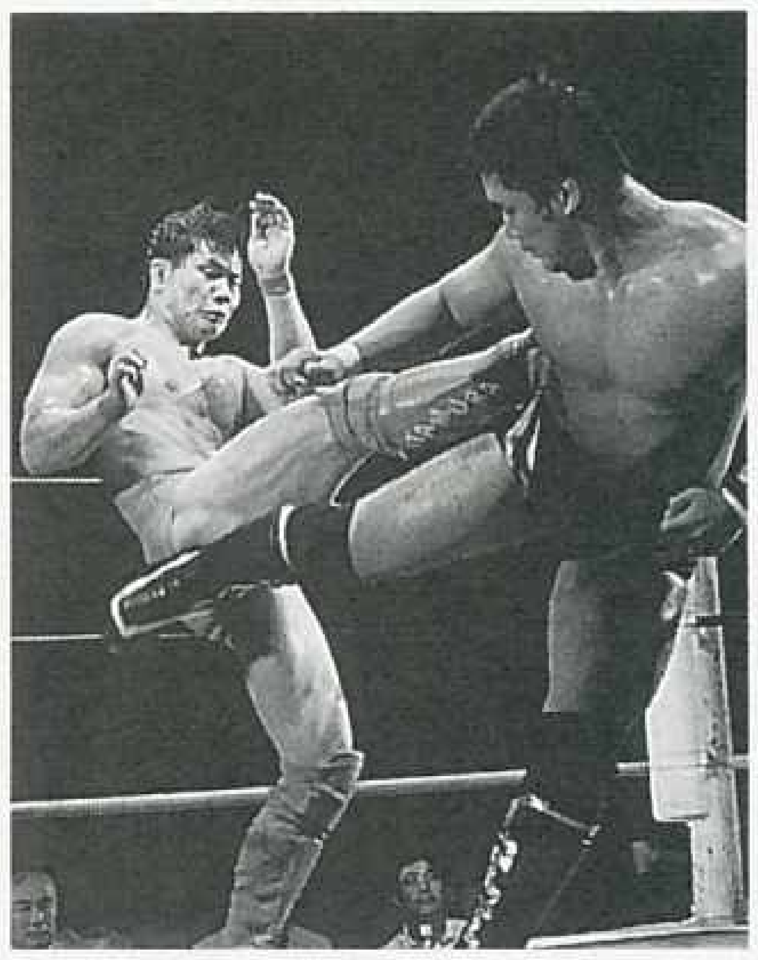
この男、バカだが決して弱くない。グアムで開催されたバーリトゥードの大会で優勝経験もある加藤を相手にバカ力のみで対抗し、判定にまで持ち込んだわけだから。

修斗には毎興行こういうイカレた外人が登場して楽しめる場である。ストリートファイトで鳴らした喧嘩自慢が技術自慢の日本人シューターと意地の張り合いを見せるのだ。かといえばヒカルド・ボテーリョvsジョエル・ギャルソンという共に佐藤ルミナに雪辱を期する二人が佐藤との対戦を賭けて高度な技術を見せあう、技術とテーマのある試合が展開したりとバラエティーに富んでいる。おしいのは日本人にバカがいないことであるが、とうとう修斗にも登場した。かつてプロレスバカ剛竜馬のところでプロレスラーとして活躍し、バカを注入された田中幸一がレッドスレイヤー・ガイに改名して下北のリングに立つ。修斗のバカはぜひ見たい。

（ブチ）

『FIGHTING INTEGRATION 5th.』

8/28（新潟市体育館）
RINGS



極私的ベストバウト

1位　ビターゼ・タリエル vsヴォルク・ハン
2位　山本健一vs坂田亘
3位　金原弘光 vsグロム・ザザ

マエダアキラという木を、リングスという森の中で探さない勇気

この日の全試合終了後、本部席から引き上げる前田日明総師に対し、それまでのどの試合の声援よりも大きな「マエダ・コール」が起こった。

入場式の際に客席を見渡して入りを確かめた、この日の〝プロフェショナルなメインエベンター〟田村は、成瀬に勝利を収めたあと、内容に不満足だったのか四方に向かって手を合わせた。敗れた成瀬は試合中も何かに対してイラだっている様子だった。

ヤマケンと坂田の実験性溢れる動き。ハン・マジックを封じたタリエル・ラッシュのド迫力。見るべきところは腐るほどあるし、実際にも多々あった。しかし、何かの噛み合わせがうまくいっていないために、伝わるべきところが伝わらない。そんな大会だった。

ＵＷＦの出現によって、「プロレス」と「格闘技」は久しぶりの邂逅を果たし、その後、近年のジム制度の普及によって、「プロ」と「アマチュア」の接点が生まれた。つまり、「娑婆ではない世界」と「娑婆」がクロスしたボーダレスな時代が誕生したわけだ。

その時代の風を選手はもうとっくに体感しているはずなのに、ファンは、無意識のうちにまだ「娑婆ではない世界」を望んでいる。

その意識の噛み合わせがうまくいかない限り、リングスという森の全貌はファンの目には立ち現れてこないだろう。

噛み合わせをうまくするにはファンの側も、もうそろそろ勇気を持たなければならない。

マエダアキラという、とてつもなく野太い木を、リングスという森の中で探さない勇気をである。

その勇気を持ったときに、おそらくマエダアキラという巨木の魂は、リングスという森に再び宿るはずなのだ。

（日昇）

『K-1 BUSHIDO'98』

8/28（代々木競技場第二体育館）
K―1



極私的ベストバウト

1位　マイク・ベルナルド vsアンドリュー・トムソン
2位　佐竹雅昭 vs安生洋二
3位　中迫剛vs長井満也

元気とは生活力のことです

イギリスの皿洗い、マット・スケルトンに敗北した佐竹雅昭に、この日、安生洋二は2ラウンドＫＯ負けを喫したわけだが、それから約半月後の9月9日。用賀の串焼き屋「市屋苑」（「幼少の頃より父無し貧乏家庭の団地っ子で育った」元Ｕインター代表・鈴木健オーナーの店）に姿を現し、気持ちのいい酒を飲んでいたのである。グレイシーＴシャツを着ていたうちのチョロの首を締めてみたり、折れた足を引きずりながら「シェ〜」ポーズを取ってみたりと、その日本人離れしたファンキーぶりはまったくもって素晴らしいの一言。男はかくありたいってもんだろう。

この日のリング上で安生はやり残したことはないわけである。まあ、あるんだろうけど、バシッと吹っ切ってるのである。あの日、リングには安生そして長井満也の二人のレスラーが登場し、サブミッションを封じられた苦しい闘いを強いられたわけだが、ともに食ってくためには仕方のない、生活力をも試される過酷な闘いだったわけだ。安生は評価を受けたが、長井はいま一つ。リングス離脱後、フリーとしてリングに上がる意地はまったく見えなかった。

つくづくリングとは技術を見せるだけの場ではなく、生活力つまり生の活力を見せつける場であることがわかる。

リングはすべてを手にできる場でもあるが、すべてを奪う場でもある。元リングスの肩書とかは、この一敗で意味をなさなくってしまったのである。長井は今後リングに自らの恨みやつらみを突き刺していくしかない。キングダム崩壊後の鈴木の健ちゃんがその恨みつらみを鳥肉相手に串刺しにしているようにである。その店で一億円を稼ぎ出そうとしてるようにである。

（ブチ）

ども! 前号から今号までの間に観戦したのは、わずか7興行。相変わらずマット界の流れなんてピンときちゃいないが、若さと勢いだけで突っ走るコーナー!

nちょうのマット界出来事!



マット界の流れが目をつぶって30秒!

9/15。この日は『紙プロ』読者からの電話が4件もあったんだよ。みんなパンクラス武道館大会の感想を話したくてウズウズしてたんだね。ボクも見たよ。ペイ・パー・ビューで。やっぱりシッシーの解説は感情がこもってて、抜群に面白いね。「いっ、いけーケンゴ!」だって。ボクもあそこまで思い入れタップリにプロレスを見なきゃダメだよなって、ちっと反省してるところなんだ。ボクもコブシを握りしめて応援するよ、木村健悟!(チョロ)

1998 8.14〜9.13

AUGUST

8・14
【女子プロOB会】/ダンプ松本(今号もインタビューあり=P81参照)をはじめ、懐かしの女子レスラーがリングに集結。ほとんどが、気のいいオバさんになってしまっていたが、その中で唯一エロ光線を発し、野郎どもの視線を釘付けにしていたのが、ハイパー・キャットこと小倉由美。どの団体でもいいから復帰して欲しい。①



①堂々とヘア・ヌードで入場してきた永友香奈子。この後、事情聴取される(嘘)。相方の小松美加は出産の為、欠席。

8・15
【キングダム】/ネオ・レディース後楽園大会を間借りしての会見■「今日は鈴木(健代表)さんに出て頂くまでもないので一人で会見に臨みました。先程、鈴木さんからタウンホールを押さえたという連絡が入ったので、そこがキングダム再開の場となります」と入江秀忠が言うと「鈴木さん、そこにいるじゃん」との突っ込みが。「ハハハ! おかしいなぁ(笑)」。8・15、鈴木(健)はどこに……。②



②「名前があって弱い人もいますし……」エッ! 誰のことですか?「え〜〜と、言えません(笑)」

8・16
【ネオ・レディース】/後楽園ホール■ネオ・レディース・トーナメント決勝は、井上京子vs.〝逆バイアグラ・デカブツ君〟ニコル・バスの間で行われ、ニコルの不思議なチョーク・スラムで京子を敗り、優勝。そんなバスも人の妻。日本滞在中、16歳年上の旦那様、ボブ・フチス氏への毎晩のラブコールは欠かさなかったらしい。

8・17
【パンクラス】/ピーズ・ラボ■9・14日本武道館で高橋義生vs鈴木みのるの一戦が決定し、両選手同席の記者会見が行われた。鈴木は、「パンクラスの日本人対決は、仲間内だから、どっちが勝っても関係ないと思ってる人がいるらしいんですけど、ふざけるなって!! そんな気持ちで闘う選手はいませんよ。そういうことを絶対書かれないような試合をします」とマスコミに噛み付いた。誰のこと? ブチ!?

8・18
【高田&船木】/「スカイパーフェクTV」本社会議スペース■7・2に行われたスカイパーフェクTV発足記念パーティーの壇上では、一言も言葉を交わさなかった高田と船木だが、この日は揃って会見に応じ、和気藹々と会話をするシーンが見られた。お互い二人でお話をするのは久しぶりだと思うんですけど、どういったことが印象に残りました? 船木「高田さんは高田さんです。変わってないです」高田「同じです。ノー問題、ノー問題!!」。高田まだまだ元気!!③

8・22
【THE ROCK・GIG・SPECIAL&プロレス〜一発入魂ALL NIGHT】/クラブチッタ川崎■チッタならではのロックとプロレスの合同イベント。「俺はやっぱり、ロックより演歌の方が好きだな。でもロッカーの音楽に賭ける熱意を感じさせてもらったよ。インディーの骨のない奴等も見習え」と夜明けと共に入場してきたターザン後藤は叫んだ。後藤は、世直しと演歌が似合う男であった。やはりここはパンクロッカー本田多聞に出場して欲しかった(無理だろうけど)。



③交流という話は? 高田「うん、じっくりね」船木「15秒ぐらい話をしました」高田「3時間分ぐらいの内容ね」。んっ。

8・22
【全日本】/後楽園ホール■この日デビューの大型レフェリー、マイティ井上。入場時には選手をも上回る声援を浴びたマイティ。本人は「ちょっと緊張しちゃったね。やれやれだよ」と謙遜していたが、その堂々とした井上流レフェリングにしびれたマイティフリークがあっちこっちで増殖中とのことである。いや、これホント!

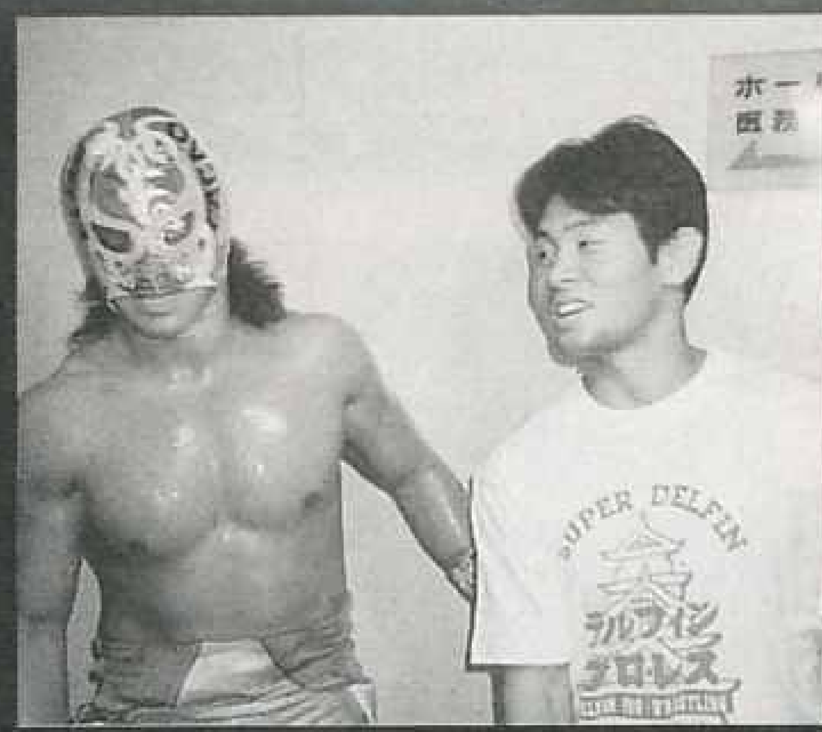
8・23
【大日本】/大阪花博公園広場■新人3人がデビュー戦を行った。その中の1人、葛西純は、桜庭(NO.9ハガキ道場参照)を書かせたら天下一品、常連投稿者と同一人物と思われるが、気になってしょうがないので、連絡下さい。そしてデビュー戦勝利おめでとう。

8・24
【WWF】今、話題沸騰中なのがWWF版アルティメット大会『ブロウル・フォー・オール』。トーナメントには、ホーク・ウォリアー、ス

ティーブ・ウィリアムス等が参加して行われ、ブッちぎりの優勝を決めたのが、バート・ガン！　本家アルティメット大会出場も噂されたウィリアムスをKO。決勝で全日にも出場したブラッドショーを左フックで（45）秒殺！　バート・ガン（鳥？・雁）日本マットへ飛来せよ！

8・24
【CMLL】／後楽園ホール■ルチャの休憩時間は熱い。フィッシュマン、ウルトラマンJr、サントJr、ピラタ・モルガン等レスラー総出でグッズ売りさばいていた（力ずく）。VIVAメヒコ ！④、⑤

8・28
【DDT】／北沢タウンホール■旗揚げから参戦していた野沢一茂がメイン後、涙ながらに退団表明。今後は、「ルチャをやっていきたい」ということだが、まだ上がるリングは決まっていないという。何処へ行く野沢!?　そして長いこと欠場を続けていた黒影がこの日より見参！　技も肉体もパワーアップした黒影は推薦しときます。


④デルフィンのセコンドに付いた村浜武洋。大阪臨海アッパーが出ると手を叩いて喜んでいた。

8・31
【アルシオン】／大阪なみはやドーム■この日デビューのタイガードリーム。アルシオン初戦の矢樹広弓相手にタイガースープレックスで見事勝利を飾った。なお、女夢虎にはライセンスナンバー15、フリーの矢樹にもライセンスナンバー16が与えられた。それを聞いたジャイ子「いいな。だって、私も欲しいんだもん。ジャイジャイ」。

8・31
【WAR】／後楽園ホール■WAR控室でケンドー・カ・シンの独占インタビューに成功。カシンさん、高田vsヒクソンの勝者はどっち？「ノーコメント!!」ありがとう。WARと言えば見ました？　WAR革命点火AGAIN～Romancing Road～の広告。1ページ丸ごと、んっ。しかも対戦カードは、CSVO vs PIQF、WJ vs UTなど、画期的な表記方法。ちなみに、ケンドー・カ・シンはJ、安田忠夫はV。まさに、んっ。なおこの日、次回後楽園ホール（9・27、昼WAR、夜LLPW）で1Day男女混合トーナメントを開催することを発表。日頃から友好関係にあるWARとLLPWだけにそれほど違和感はないが、優勝ペアに5泊7日のラスベガス・ツアーが送られるとなったから、さあ大変。どのチームが優勝するか俄然興味が湧いてきた。天龍＆風間ペアか？　北原＆イーグルペアか？　想像するとちっと怖いですね。いろんな意味で…。⑥、⑦


⑤タレント出身の本物ビジュアルファイター藤田愛。売店でモルガンTシャツを懸命に売ってました。何点？


⑥斉藤旭資の後頭部をカチ割った谷口君。斉藤の頭はブレイク、その後大歓声を受け再度ブレイク。


⑦ナガサキのイス攻撃そしてパイルドライバーで、ピクリとも動かなくなってしまった青柳館長。

SEPTEMBER

9・3
【ファイト】／木戸修争奪戦ボッ発か■来年1月、新日の木戸修が契約解除となる。木戸は現在48歳。現役として、まだまだやれるコンディションは保っているだけに、各団体からのオファーは必至。確かに木戸は、新日以外でも十分に通用するレスラーであろう。想像しただけでも、アパート経営をしながらSPWFで谷津と抗争を繰り広げるというのも渋くて合ってるし、みちプロでなにげにウェリントンと闘うのもしっくりくる。バトラーツでトンパチマシンガンズと対戦するのも興味深い。キングダムを入江と二人で引っ張っていくというのもおかしくはないし、とにかく非常に重宝するレスラーであることは間違いない。まさに木戸銭が取れるレスラーなのである。以上！

9・6
【バトラーツ】／TFMホール■『PRIDE．4』でアレクサンダー大塚とマルコ・ファスの対戦が発表される。セコンドには、サスケと石川のイカレ社長コンビについて欲しいところだが……。⑧

9・11
【ファイト】／田上相手に三冠王座を防衛した小橋健太の田上評。「輪島選手の合宿の時に一緒について行ったんだけど、自分が炊事や洗濯をしているのに、向こう（田上）は何もしなくてよかった。馬場さんに怒られたのは練習をしなかったからじゃない？　だいたい貰ってるお金が違ったじゃないですか」。鶴田、田上、本田、安田は、ほどほどの練習でいいんです。ナチュラルパワー（自然力）で十分。

9・12
【DDT】／板橋区都税事務所前特設リング■鴨居長太郎と一緒に入場してきたのは、な、なんとジャイ子!?　ニコル・バスのコスチュームまで着てやがる。さしずめジャイコル・バスだな。ジャイ子、何やってんだよ！「ジャイ子じゃないもん。妹だもん」。ジャイ子の妹をどうしても見たい方は9／29DDT北沢タウンホールまで。⑨

9・13
【KRS】／六本木『ベルファーレ』■『PRIDE．4』の会見が、ヒクソン、高田、他日本人全選手参加のもと行われた。質疑応答コーナーでは、中村カタブツ君（35歳）が「アレク選手はゲイということですが、マルコ選手はタイプですか？」とのイカれた質問をすると、「胸毛がステキです！」とアレクは見事な返しを見せてくれた。
【リラックス】／10・15発売の『月刊リラックス11月号』は、特集・悪役（ヒール）。プロレス界からも悪役が多数参戦。本誌・吉田豪も執筆してます。チェックしとけ!!


⑧ヤンジェネ優勝を決めた石川社長の3m級表彰式。この後前方回転エビ固めで3カウントを奪う。


⑨DDTに突如現れた大怪女。リングアナに「ジャイ子」とコールされたのは本誌お手伝いジャイ子の双子の妹。

祝キングダム活動再開
一足お先に串焼き屋オープン！ その名も

~~一億円~~ 市屋苑



ナース隊とムリヤリ記念撮影。当然、取材もそっちのけでナース隊に見とれるチョロ。「市屋苑、最高！」



「市屋苑」（元新生UWF事務所）は東急新玉川線「用賀駅」下車北口徒歩3分。なお電話番号は03・3707・3223です。



健ちゃんは「自分は父無し貧乏家庭で育った為、料理には多少の自信はあります」とのことだ。う〜ん真剣勝負！



入江秀忠と遠藤紗矢、仲良く記念撮影。健ちゃんルートでネオ・レディースの選手も頻繁に来店するはず！



君もK多重アリバイを聞きに行こう！



「はい、お待たせ！」。高田延彦と「大皿物菜・舌心」を共同経営していただけあって、接客は手慣れたもの。



見てみ、このジャイ子のデカさ！（健ちゃんが小さいわけじゃない） この二人、ジャイ子が肥満児だった頃からのお友達だと言うから驚き。ジャイ子が「だって読者に何かサービスして欲しいんだもん。ジャイジャイ」と頼み込んだおかげで、『紙プロ』持参で特別サービスが受けられるんだもん。



うっかりグレイシーTシャツを着ていった為、安生激怒！「なんだお前！ やるか！」 松葉杖でブン殴られました。



お約束の首絞め。たとえ失神してもナース隊がいるから安心！ いつもより余計に挑発してみました。

あの鈴木健氏が串焼き店『市屋苑（いちおくえん）』をオープンさせた。店名は、Uインター時代の1億円爆弾と、キングダムの借金1億円をこの店で返済するために名付け、来年には「煮屋苑」となる予定（仮）。プレオープンの9日には安生洋二とナース隊がやってきた。この日の模様は、9月29日（火）深夜1時45分〜2時15分、テレビ東京「脳みその具」で放送される。他にも有名格闘家から芸能人まで多数訪れる『市屋苑』に君も急げ！

KINGDOM「RE-BIRTH（リバース）」

10月13日（火）東京・北沢タウンホール（7:00／アマチュア6:00開始）



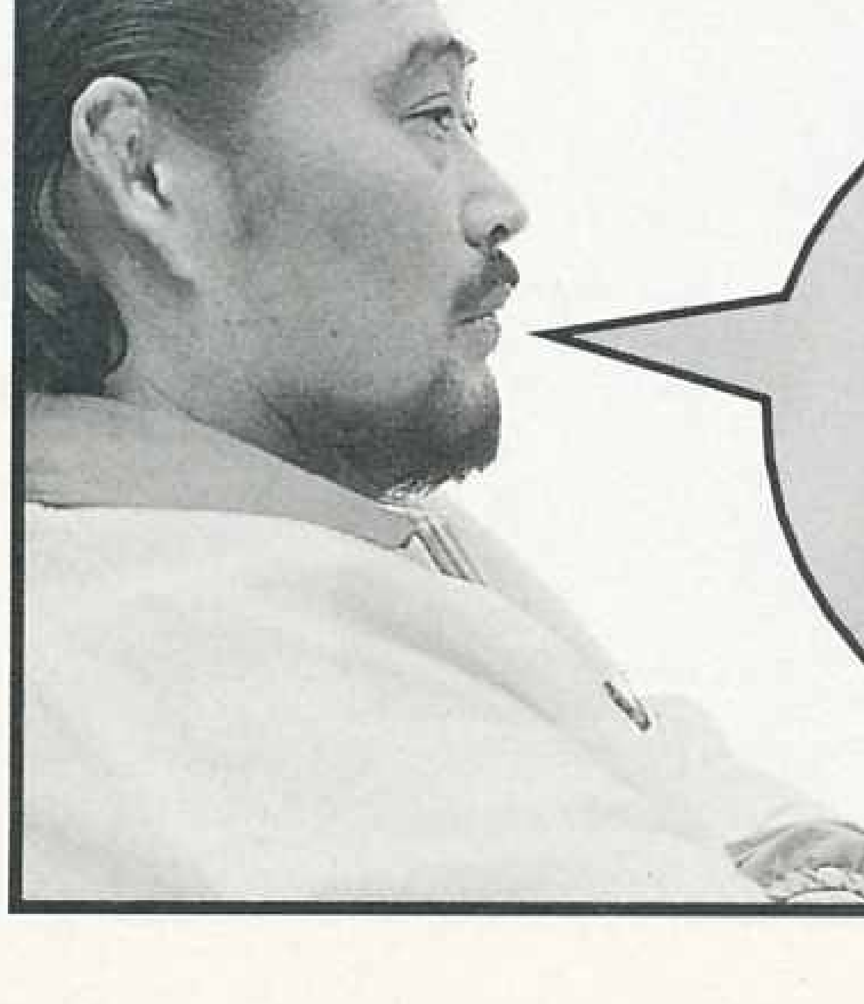
■お問い合わせ
株式会社 キングダム事務所
TEL.03・5477・5855
FAX.03・5477・8688

【出場選手】入江秀忠（キングダム）、ウエイン・アンソニー・ハス（シューティングジム八景）、ニーハオ、中村和信（総合格闘技キャプチャー）、金井日出紀（和術慧舟會）、小幡太郎、佐藤耕平（国際柔術連盟順道会館）、山崎りょう（小林拳法・アメリカン柔術）、遠藤紗矢（新日本女子プロレス）。協力＝新格闘術・藤原道場、総合格闘技・木口道場、四王塾。

次号より超強力、大型連載見切り発射!!（予定）

「紙のプロレスRADICAL」専属ご意見番谷津嘉章の

マット界、目ぇつぶって30秒!!（仮）



俺がよぉ、マット界をズバッと一刀両断してやっからよぉ〜。

『紙プロRADICAL』NO. 9.10での『谷津嘉章』毒舌満開インタビューが契機となり、日本全国で谷津人気大爆発！ 読者からの谷津嘉章全面支持宣言も後を絶たない。「ヒクソンに勝てるのは谷津だ！」「谷津サイキョ！」「『紙プロ』で谷津のレギュラーページを！」。わかったよぉ、次号からやっからよぉ。慌てんなよぉ、1ヶ月待てってての！ ということで「谷津嘉章のマット界、目をつぶって30秒!!」次号より超過激にスタート!!



1981・6・24、蔵前国技館。ブッチャー、ハンセンの猛攻撃を受け、血ダルマにされてしまった谷津の日本デビュー戦。当時はまだトレードマークのヒゲも見られない。今となれば懐かしき思い出。

♪這いずりイ
どーにかこ

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito



第1回 アポロ菅原　PART2

聞き手／吉田豪
Interview by Go Yoshida
撮影／浜田孝一
Photographs by Koichi Hamada

「プロレス界でひとつ事件が起これば、そこに関わった人の数だけ真実がある」という言葉がある。みんなが自分の主観に基づいて、あちこちでそのことをしゃべるからだ。

「金権プロレス」とメディアからは叩かれ、リング上ではUWF幻想に飲み込まれ、歴史という巨大な海の藻屑と消えたSWS。そこで起こった最もスキャンダラスな事件のうちのひとつである「アポロ菅原vs鈴木みのる」には冒頭の言葉が当てはまらない。鈴木みのるだけが一方的に取材を受け、アポロへの取材は一切なく、発言の機会さえもなかったからだ。鈴木みのるの語ったことが、そのまま事実になっているのが現状なのだ。7年間もの長い間、アポロの腹の中に眠っていた「言いたくても、言えなかったこと」を引き出すことに成功した本誌編集部は、さらにアポロを掘り下げてみた。前号で大反響を呼んだ超絶新連載の第2弾を正座して読め！



祝キングダム活動再開

一足お先に串焼き屋オープン！ その名も



——いろんな人に話を聞けば聞くほど、SWSっていうのは凄い団体ですよね。

アポロ いまでもそれは思う、凄かったよ。もったいないとも思うし。神戸大会の後に、いろんな揉め事が噴出したけどね。

——菅原さんもSWSのゴージャスな道場には通ってたんですか？

アポロ 千葉から通ってたよ。

——道場の中でいろいろ面白いことがあったっていうのは噂に聞いてるんですよ。

アポロ う～ん。そっちが話を聞いておもしろいんだったらいいけど、あのときはみんなケツのアナの小さいヤツばっかりだったな。

——結局、道場の中でもバラバラだったんですよね。

アポロ ゴマするヤツらが出てきたからダメなんだよ。俺は相手が年上だろうが年下だろうが、俺がレスラーだと相手を思ったときには相手に対して敬意を持つんだよ。俺は呼び捨てなんかには絶対しないから。「●●さん」とはあまり呼ばないけど、たいてい「●●選手」って呼んでるよ。俺はそういうことは割り切ってやってるんだよ。

——さっきも「鈴木選手」って、ずっとおしゃってましたもんね。

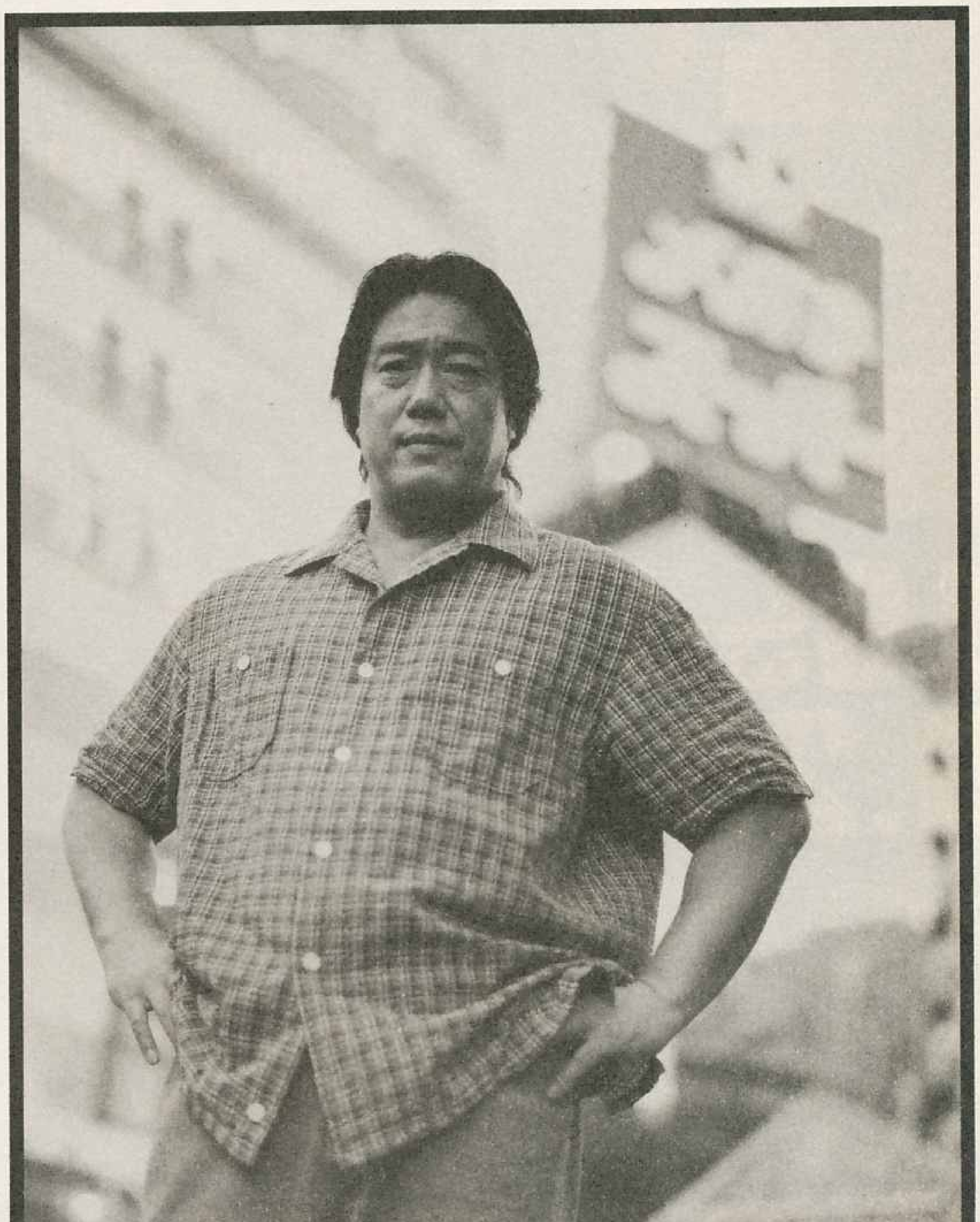
アポロ そう。だから、俺は元・阪神の掛布選手の解説だけは嫌いなんだよ。「くん」づけで選手を呼ぶんだ。そうじゃないよ、●●選手だろ！ あれは、ちょっと見苦しい。

——ところでSWS時代、面白かった思い出ってありますか？

アポロ 夜、酒飲んだこととか？

——いいですねえ。それはジョージ（高野）選手とですか？

アポロ そうだね。昨日もTVに出てたけど高野俊二（現・拳磁）選手とかとも飲んでたよ。



——SWSって酒乱というか、かなり飲まれる人が多かったですよね。

アポロ だけど、あんだけの金と物を与えられたら、少しは狂うでしょ。

——酒の席でも面白い話ばっかりですもんね。酒飲んでジョージさんが石川敬志選手にコップ投げつけたり（笑）。

アポロ 俺はそこまでバカになれなかったよ（笑）。

——最近、ボクらも拳磁さんと飲んだんですけどね（笑）。SWSが凄かったはそこなんですよ。まず、普通ならまとまらないようなアクの強い人たちを思いっきり集めてますからね。

アポロ 資金力があったから。まあ、選手を統括する人は大変だったと思うけどね。

——カブキさんも大変だったって言ってましたよ、やっぱり。

アポロ 俺ぐらい物わかりのいいヤツだらけだったら、分裂してないって！

——ダハハハハ！ なるほど（笑）。

アポロ ホントに人間っていうのは欲望の固まりだね。「このへんでいいんじゃないかな？」っていう満足が出来なくて、どこまでも突っ走るもんな。ホント、卑しいよ。このことに関しては一言でパッと言えるけどね。

——またテープを止めれば言えるわけですね（笑）。

アポロ 言えるさ！ だけど、そういうことを言うと「生意気なこと言いやがって」ってなるからさ。

——わかりました。止めましょう！

（テープまた中断）

——はあ～。凄いなあ。

アポロ な？ レスラーのパーソナリティーがすごく大事なわけだよ。だから、「アポロの試合はつまんないけど、一杯飲んでたらものすごく楽しいな」って思ってもらえればいいと俺は思ってるよ（キッパリ）。

——ダハハハハ！ そうですか（笑）。SWSに移籍したことで、人生が変わった人は多いと思うんですけど。

アポロ いやあ、あの程度で人生変わらないだろ。あの程度で人生が変わるようだったら、大した人生じゃないな。「隅田川の花火を見たかな」ぐらいの感じでいいんじゃないの？ まあ、欲を言えば、もう少し続けてもらいたかったなっていうのはあるよ。人生いろいろあるよ、大したことじゃないさ。

——あれは谷津さんたちが出ていったからSWSが終わったと解釈していいんですかね？

アポロ そんなに甘いもんじゃないと思うけどな。

——まあ、根っこはいろいろあるんでしょうけど。

アポロ SWSとしては何かのとっかかりがほしかったんじゃないの？ 切るための取っ掛かりがさ。

——谷津さんに聞いたところによると、田中社長が「谷津、もう上がり（利益）がないから終わりにしよう」と言って、谷津さんが解散させたということでしたけど。

アポロ それじゃ、谷津選手がまるでヒーローじゃないか。

——「俺だって辞めたくなかったんだよぉ。自分でギャラ捨てないよ」とも言ってましたけど（笑）。

アポロ 谷津選手のことは置いといてね。でも、確かにいろんなことあったけどさ、みんな5年契約だから3年近く契約は残ってたんだ。解散するまでのことはなかったんだよ。阿修羅・原さんが、俺にとってはいちばんいいことを言ってくれたよ。

——ほう。何ですか？

アポロ 田中社長を含めて、明日からはもうないっていうSWS最後の日だよ。天龍さんが新団体を作るとか、それ以外の選手も新団体を作るとかいうときにさ、原さんが「そうは言ってもメガネに残りたい人もいるんじゃないですか？」って言ってくれたんだよ。そしたら田中社長もさすがに「それは認めません」って言ってたよ（笑）。

——ピシャリと言いますね（笑）。

アポロ でも、俺は残りたかったね！

——つまり、あまりNOWには行きたくなかったわけですか？

アポロ まあ本音で言えば、30人近くいたレスラーで無記名投票したら「メガネに残りたい」っていうのがほとんどだったと思うよ。

——下手したら25人ぐらいはいたかも

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

多重アリバイS
multiple ALIBI "S"

しれないですね（笑）。

アポロ　出たいのは1人もいなかったんじゃないのかな（笑）。意地があったヤツは出なきゃ気が済まなかっただろうけど、だいたいの本音はそのへんで落ち着いたんじゃないのかな？　この前、たまたま長崎県に行って原さんに会ったんだ。「あのときの言葉は良かったですよね」って俺が言ったら、「俺も残りたかった」って。

――ダハハハハ！　それからSWS出身の人たちが細胞分裂みたいに別れていくんですけど。

アポロ　まあ、プロレス雑誌は読んでないからよく知らないけど「SWSの選手は金で動いたどうしょうもないヤツらだ」ということで、某雑誌に叩かれたよね。

――ターザン山本さんですね（笑）。

アポロ　向こうは関係ないだろうけどさ、冗談じゃないよ。あの人だって、『週刊ファイト』からベースボール・マガジン社に移ったことは、どうなるんだって！　みんな、よりよい職場を求めるのは当たり前で、オファーが入ったら心が動かない人もいるかもしれないけどさ、心が動かないことが立派なことじゃないんだよ。動くことも立派なんだよ。相手が認めてくれてるんだからさ。そういうふうにしていかないと、伸びていかないよ！　プロレスだってプロスポーツなんだから。

――確かにプロスポーツでは当たり前の話ですよね。海外で契約してくれるんなら、そっち行くのも当然っていう。

アポロ　あのとき天龍さんの契約金がどうのこうのという話があったけど、そういう部分もビシッと公開してプロスポーツの納税額トップになってほしかったよ！　そしたらプロレスラーに対するイメージって、まったく違うものになったと思うよ。俺が何でこういうこと言うかっていうとね、「プロレスは銭になる」というイメージを与えることで、20歳ぐらいでスポーツやってる凄い人たちがプロレス界に入って来るんだよ！

――底上げされるわけですよね。

アポロ　そう！　そういうのが大事なの！　残念ながらそういうことにはならなかったよね。そういうのも大事なんだよ！　プロレス村の中でのインパクトもいいんだけど、対外的、対世間的なインパクトも必要なんだよ。あのときは、それが出来るチャンスだったんだよ。

――谷津さんも「JOCから2メートル級のオリンピック選手をどんどん連れてくる」って言ってましたもんね。

アポロ　そう！　力道山先生から馬場さん、猪木さんがやってきた素晴らしいプロレスがあるけど、その枠を超えたところで勝負できる可能性があったんですよ。だからもったいないっていうんだよ！

――それに一方では『蛇の穴』（ビリー・ライレージム）と提携したりして時代を先取りしてましたよね（笑）。

アポロ　まあ、『蛇の穴』を見る前にトカゲのしっぽになっちゃったけどね（笑）。

――ダハハハ！　上手いですね（笑）。

アポロ　あのとき、マスコミは軸足を全日本や新日本に置いてたけど、マスコミに全体を見渡す力があれば、ああいうひどい記事にはならなかったんじゃないかな。あれがダメになってから7、8年経つけど、プロレスの人気ってあるように見えるけど、俺はないと思ってるから。新日本のドームが満杯になってて凄いとは思うけどさ、やっぱり地方巡業を見なきゃダメだよ。地方のプロレスファンは、見たいビッグマッチには飛行機代を掛けてでも来るからね。トータル的なファン数は少なくなってるはずだよ。

――資金的に見て、SWSが最大のチャンスだったんですよね。

アポロ　それは確かにメガネにいた選手の力量不足もあったかもしれないけど……。

――大きいのはターザン山本だったわけですね（笑）。

アポロ　誰、その人？

――ダハハハハ！　ウチにはレギュラーで参加してもらってるんで、思う存分名前は出しますけどね（笑）。

アポロ　まあ、山本さんのことは、よく存じ上げてるからね。でも、あの人はあの人でベースボール・マガジン社に対して、自分の仕事をしただけだと思う。そういうたった1人が足を引っ張っただけで潰れちゃったっていうのもおかしな話だからね。そんなことはないと思うし。

――リング上で結果を出せば、ファンもついてきたんでしょうね。

アポロ　物事って、好意的に書くことも悪く書くことも出来るわけ。相撲だったら勝ち負けがはっきりしてるからいいよ。でも、プロレスにはその中に灰色の部分があるんだよ。そこをどう捉えるかがけっこう難しいんだ。

――そこがいちばん難しいですよね。

アポロ　俺、相撲とかボクシングが大好きなんだ（キッパリ）。白黒がハッキリつくからさ。

――はあ（笑）。

アポロ　だって、プロレスって何百連勝してる人だって、チャンピオンにはならないでしょ？

――プロレスは勝敗よりも、強さとか巧さとかを見る競技ですよね。

アポロ　そうかな？　俺はそうとは思ってないよ。

――あれ？　そうですか。

アポロ　プロレスっていうのは強さがもちろん必要だよ。それをうまく表現して、強さを伝えることも必要なんだよ！　だけど、いまは表現の仕方ばかり過剰になっちゃってる部分がある。

――確かにそれはインディーのみならず、ですよね。

アポロ　インディーはまず強さを身に付けるべきだね。プロレスには、まだまだ熱狂的なファンが多いんだし、そういう人たちに活かされてる部分もあると思うよ。でも、そういうファンの人たちにさえ見捨てられるようになったら、一気におしまいだよ。

――菅原さんのSWS以降の人生はどうなんですか？

アポロ　順風満帆ですよ！

――我が道を行くという感じですか。

アポロ　自分の意志通りやってきてるし、ストレスはひとつもないよね。リング上のことに関してはストレス持ってるけどね。まあ、貧乏だけどさ。

――ダハハハハ！　でも、独身なんですよね？

アポロ　俺がちゃんとお金持ってたら結婚してるって！

――ダハハハハ！　インディーじゃ結婚できない（笑）。

アポロ　こんな生活してたら結婚できないよ！　昔、浮き草生活なんて言葉があったけど、俺は浮き草な上に足に重りつけてるんだから！

――草なのに浮かないんですか（笑）。

アポロ　アップアップしてるんだな。まあ、俺の生き方としては好きなことをやってるんだから、その結果として結婚できなくてもしょうがないなと思ってね。でも、俺はそんなにモテないほうじゃないよ。

――ダハハハ！　そうですか！

アポロ　これは改めて言っとかないとね（笑）。

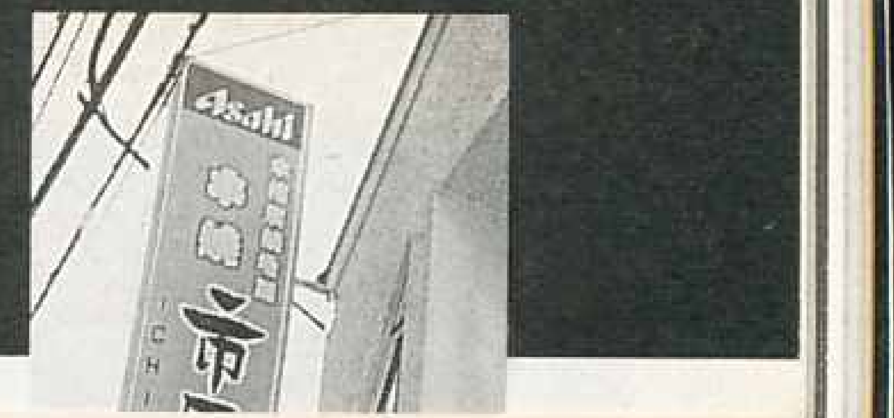
――やっぱり、色々といい目にもあっ



誰も気付かなかったかも知れないから、今さらながら言わせてもらうがこの写真はメガネスーパーの大きな看板の前という最高のロケーションで撮影したものである。前号の写真もね。



祝キングダム活動再開
一足お先に串焼き屋オープン！ その名も



てるわけですよね？

アポロ 俺が新日本や馬場さんやSWSや国際にもお世話になったときがあるんだけど、悪くはなかったなと思ってるよ。だけど、いまの人たちはちょっと気の毒かな。

――菅原さんのいまの主戦場は冴夢来プロレスとかになるんですか？

アポロ う～ん……。いろいろ知ってんだろ？

――ダハハハハ！ マスクを被ったりしてるわけですか？

アポロ ……そんなことあるの？ まあ、いまは横のつながりでいろいろやってるんだけど、自分でもプロモーターやったりっていうことは考えてるよ。生意気かもしれないけど、これからの人たちに対して責任はあるよな。さっき、オフレコで言ったような話も大事だけどね。ボクはいまも遠藤光男さんのトレーニング・ジムに通ってるんだけどさ、若い人でレスラーになりたい人たちって多いんだよ。昔だったら「よし、OK！」って言えたけど、残念ながらいまは「ちょっと待ってくれ」としか言えないもん。

――つまり、あまりいまのプロレス業界というのは勧められるような職場ではない、と？

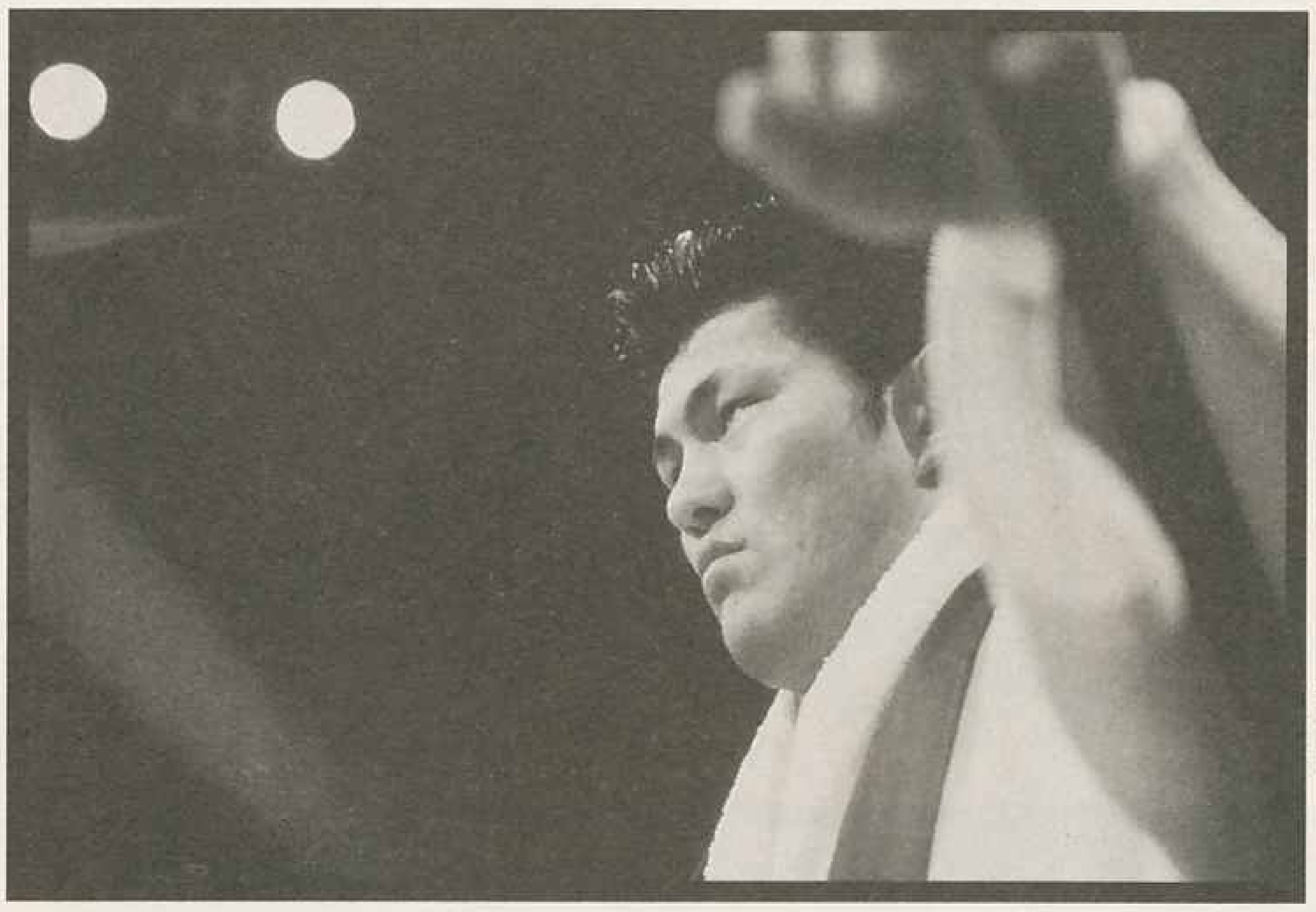
アポロ そう。システム的にも何でもね。ズバ抜けた実力があればいいんだけど、良さもわかってるけど悪いところも見てきたからね。こんなこと言うとプロレスの人気を下げちゃうかもしれないけどさ、苦労に見合ったものがないんだよ。それがいちばん問題だよ。

――そうですね。ギャラの話を聞いたりしてると、ボクでも愕然とすることが多いですよ。

アポロ 俺も昔、若いレスラーに怒ったことがあるんだよ。「インディーはなんでそんなに危険なことやってるんだ？」って聞いたら、「マスコミが危険なことを求めてて、そういうことをしないと記事にならないから」って答えたんだよ。それは違うでしょ？ マスコミにあわせて試合をするわけじゃないから。ポリシー持ってやらないと。だから、その若手の考え方は違うよ。

――一時期、プロレス界の流れがマスコミ主導みたいになりましたよね。

アポロ そのマスコミ主導に乗っかった人たちが上に上がっていくわけ。それっておかしいでしょ？ 揚げ句の果てに東京ドームで大会主催したりしてさ。だから、俺はあのとき天龍さんが突っ張って同日に後楽園ホールで試合をしたことを尊敬してる。間違ってないよ。



涙もろいことではプロレス界で1、2を争う鈴木みのる。一体、彼はどれだけ涙を流したのだろう？ 彼はパンクラスを設立して、流した涙がウソをつかない理想の団体を作ったのだ。これが感動せずに……（宍倉調）。

――菅原さんの話を聞いてると、なんだか悪いのはターザン山本だという気がしてきましたね（笑）。

アポロ いや、山本さんは悪くないって（笑）。個人的に知ってるからさ。まあ、そういうふうに突き動かされなきゃいけないものがあったんでしょうから。

――まあ、どうやれば受けるかということを計算した上で行動してたと思うんですよね。

アポロ その結果、プロレスが良くなればいいわけよ。だけど、そうじゃないでしょ？ それは結局、プロレスラーをないがしろにしてただけなんだよ。インディーもこんな状況だしね。まあ、いろんなことあるけど、メジャー団体の選手だって、会社を辞めればみんなインディーになっちゃうわけだから。まあ、所属してる選手は凄いんだろうけど、インディーになったからって、自分のプライドまで売る必要はないよ。もっと気楽に生きればいいんじゃないの？ ようは自覚の問題だよ。ず～っとダラダラやってるメジャーの選手よりも、インディーの選手はもっと違う面で苦しんでるし、頑張ってるんだよ。俺に言わせりゃ、メジャーの選手が偉そうに言えることはひとつもないと思う。だから、インディーなんて言わなくていい。俺はインディーなんて思ってないもん。俺はアポロ菅原だよ。

――名言ですね！

アポロ みんな会社にいるときは強気になれるんだよ。ひとりになってみろって！ 案外、強くなれねえぞ。それが人間の実力ってもんだよ。だから、メジャーがインディー批判したこともあるけど、相手にしなきゃいいんだよ。インディーに足を引っ張られると思ってるんだったら、足を引っ張られなきゃいいじゃねえかよ。もっと凄いもん見せろって！ でも、現実にはインディーにも凄いヤツがいるんだよ。闘ってる場所が違うだけなんだから。

――長州選手のインディー批判発言に表立ってかみついたのは松永（光弘）さんぐらいでしたからね。「インディー、インディーって、インディーで商売するな」って言ってましたけど（笑）。

アポロ そうだね、その通りだ。

――松永さんは口が多いから「俺は新日と違って●●●を使ってない」とまで言っちゃいましたけど（笑）。そうやって意地をぶつけ合うのは、すごい面白いと思うんですよ。

アポロ そりゃあマスコミは面白いだろうよ。言ってもいいんだけど、思ったことをパッと口に出すんじゃなくて、言いたいことは1回腹に収めて消化してから吐き出さないと。少なくとも、長州さんが発言するときには、口から出まかせは言わないよ。真理はどこにあるのか、受け手としても吟味して返事をしないとね。それが大事だよ。

――今日は菅原さんも8年寝かしたことを話してくれたわけですよね。

アポロ ワインだったら、凄いよ！

――これが表に出たら大変なことになりますよね。

アポロ でも、「やっぱりな」って思う人も多いんじゃないか？

――でも、これはプロレスを考えるキッカケになると思いますよ。

アポロ 今日、俺がありがたいなと思ったのは、こういうふうに話したことがほとんどないんだよ。いまのマスコミの方々には友達がいないしね。昔は『東京スポーツ』とかにいたんだけどな。こうやって公式に取材を受けるのは嬉しいね。

――ボクらも楽しませていただきましたよ。新しいプロレス史が出来たような気がしました。

アポロ でも、前号（9号&10号）の谷津選手の記事は面白すぎるよ（笑）。

――いや、菅原さんも面白いです。そしてこれからはSWS再評価ですよ！

アポロ スターと言われてる選手のコメントに面白いものは少ないからね。

――どう考えても苦労があったほうが話も面白いに決まってるんですよ！

アポロ 「こいつは何考えてるんだろう？」っていう人の方が面白いよね。目がいくよ。ただ、俺は何の拘束もないから、こうやってしゃべるだけであってね。大きな会社にいる人たちには、出来ないよ。

――そうですね。そして、8年寝かせた菅原vs鈴木戦の真実がいま遂に明らかになったわけですからね！

アポロ 俺は何言われたって、「だって、そうじゃねえか」って言うしかないもんな。そうでしょ？

――ダハハハハ！ 一言で言えば、「泣くな！」っていうことですかね。

アポロ ハッハッハッハッハ！ ホントに悔しかったら、オレをブッ倒せばいいわけだしね。オレがいろんなところで逃げ腰になったって言われてるけど、逃げ腰になった相手も倒せないでどうするの？ 俺はアマレスやってたときでも、逃げ腰になった相手だってフォールしてきたよ！ それが勝負じゃねえか！

――「ボクはこんな試合をしにきたわけじゃない」とか試合後に言ってる場合じゃないわけですね（笑）。

アポロ まあ、う～ん……もう8年も前のことだからね。

――あの試合の映像って裏ビデオという形でしか残ってないんですよね。冬

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

メガネスーパーのメガネをかければ、物事の本質が見えると思うよ（笑）。

木さんが言ってたことでおもしろいなと思ったのは「プロレスはあくまでも仕事。それを趣味のように見せてる人がいる。趣味のように見せた方がそりゃ支持は受けるだろうけど」って。SWSを通過した人って、やぱりプロレスに対して独自の距離感があると思うんですよ。

アポロ　……もう、思い込みのような記事も飽きられてきてるんじゃないのかな？　宗教的な、カルト的な記事はもう終わってるんじゃないのかな。

——カルト的な記事ですか！

アポロ　うん。もっと淡々としてたほうがいいと思う。

——SWSで面白かった企画で、道場マッチっていうのがありましたよね。

アポロ　あの試合のビデオを見てたらわかると思うよ。言いにくいことなんだけど。

——またテープを止めればいいんですか？　わかりました（笑）。

（テープ一時中断）

——面白いですねえ！　『ファイト』を読んでると、「受けの要素を極力少なくした試合＝登竜門マッチ」って書いてあったんですよ。なんか夢が膨らみますよね。しかも試合時間は短いっていう、実験的なプロレスですよね。

アポロ　あの実験マッチを興行としてやってたら受けてたかもしれないね。ハンパじゃない気迫があったしね。

——秒殺だとか騒がれる以前に2分ぐらいで試合を終わらせちゃったりしてるんですもんね。

アポロ　でも、「登竜門マッチだとそんななのに、実際の試合はああなんだ」ってなっちゃうんだよ。そこには若干の疑問が出てくるよね。不思議だねえ。これは入場料が500円だったんだ。

——激安ですよね。

アポロ　激安どころの騒ぎじゃないよ。たぶん、いまのプロレスファンが500円でそんな試合を見ちゃったら、他のところ行きたくなくなるよ。

——ダハハハハ！　『週プロ』とかがバッシングしなければ、もっと騒がれたはずのことをやってたんですよね。

アポロ　『週刊プロレス』は思ってるように書けばいいんだけどね。新日本や全日本のやってることがみんな正しくて、SWSのやってることが間違ってるっていうことはないわけでさ。お互い様なんだよ。確かに拙いことをやってたものもあるし、老舗の全日本や新日本が素晴らしいのはわかってるけど、だけどそんなに違いはないんだよ。『週プロ』がいろいろ書いてるって伝え聞いてるんだけど、その記者の目の基準はどこにあるんだって聞きたかったよ！　俺に言わせりゃ、メガネスーパーで売ってるメガネをちゃんとつけたほうがいいんじゃねえのかな（笑）。

——そうすればちゃんと見える（笑）。

アポロ　物事の本質が見えるようになると思うよ（笑）。

——違う色メガネをかけちゃったんですかね？　メガネド●ッグで買ったメガネとか（笑）。

アポロ　だからね、思い込みで物事を判断するのが間違ってる。プロレスの世界っていうことを考えれば、あれだけの大きな企業が来てくれたんだから。メガネに金が流れてたって、それが廻り廻っていろんなところに廻っていく可能性もあるわけですよ。全体ということを考えれば、絶対に悪い話じゃないわけなんですよ！

——それで業界全体のギャラも上がったわけですからね。

アポロ　悪いイメージを変えようというものじゃなしに、全面的に足を引っ張るっていうのは……。マスコミの主眼はどこにあるのかって聞きたくなるよ。全日本や新日本の雑誌じゃないんだろ？　ベースボール・マガジン社という素晴らしい会社の雑誌なんだからさ。俺は野球と相撲の雑誌だって取ってるんだから！　そういう記事とプロレスに対する記事がまったく違うじゃねえかよ！　ね？　あれだけバランスの取れたものの見方をする人がプロレス記者にいなかったのかなって思うよ、ホントに。

——プロレスの場合は記事の中の主観が強いわけですよね。

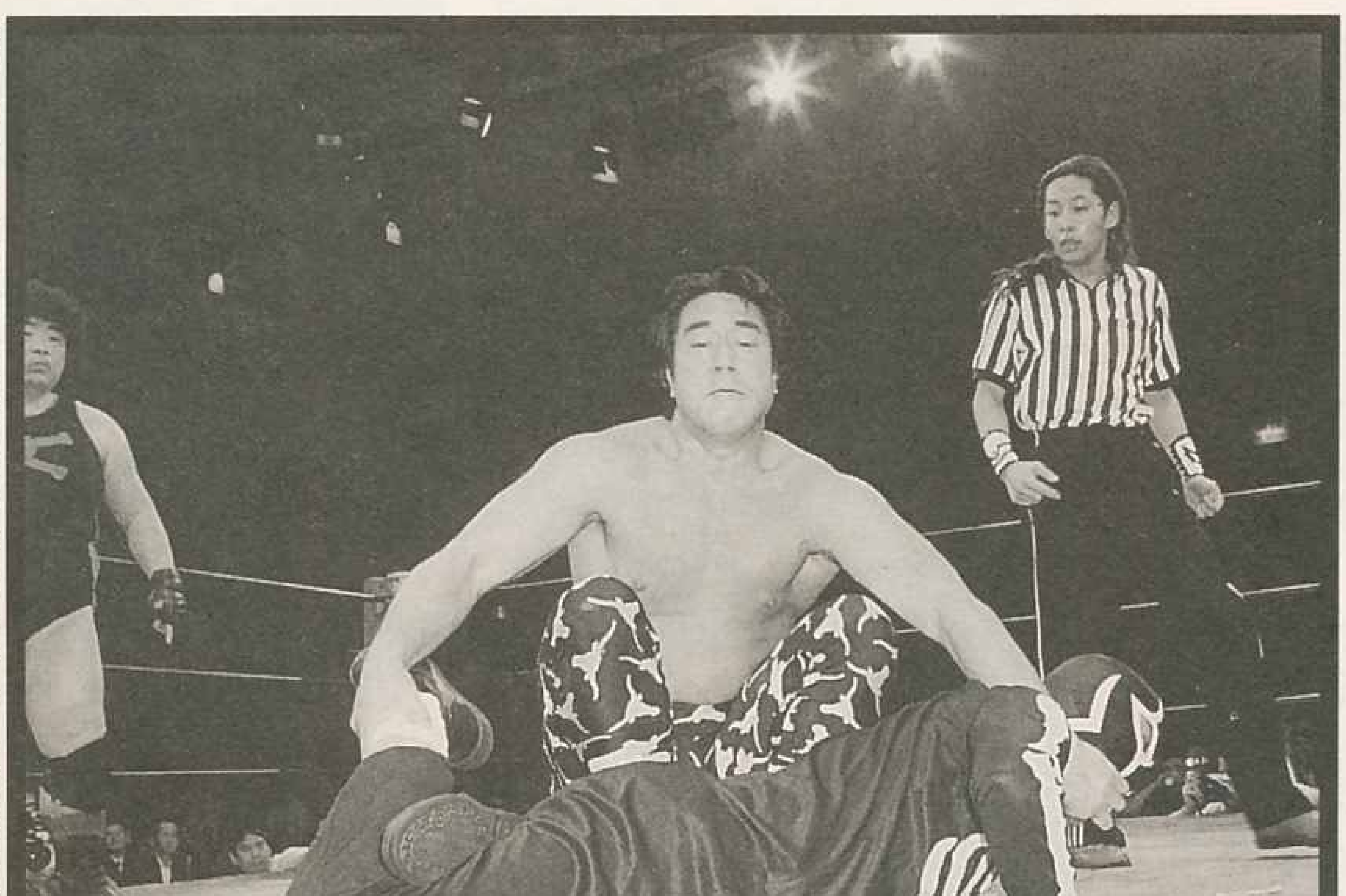
アポロ　人間いくら悪くたって、7は悪い部分でいいところは3ぐらいあるよ。プロのビジネスだから、そりゃ叩けばホコリは出るよ。だけど、それに耐えられるような細やかな神経とタフな考え方を持ってもらいたいね。主観が強いのはいいよ。プロレスってショー的な部分もあるからね。ようするにプロレスはショーでなければいけないんだよ。ショーでしょ〜？

——ダハハハハ！　抜群です！　梶原一騎が「プロレスを真剣勝負だと思うのは大間違いだ。しかし、単なる八百長だと思ったら痛い目にあうぞ」って言ってたんですけど、要するにその一言に尽きると思うんですよね。

アポロ　常にプロレスは「八百長」ということで議論がいままで巻き起こってるけど、プロレスラーを見て「八百長」の一言で片付けるには、あまりに凄い人たちが揃ってるんだよ。そんな一言ぐらいで片付けられるもんじゃないって！

——奥深いですよね。いろんな人に話を聞くと、どんどん新しい発見がありますから。

アポロ　プロレスラーの得体の知れな



長いプロレスキャリアでマスコミに登場した回数はプロレス界で1、2を争うほど少ないアポロ菅原。一体、彼はどれだけインタビューを受けたのだろう？　現在は国際のときに同じ釜のメシを食った鶴見五郎らとともに、インディーのパイオニアとしてファイトを続けている。写真は5月21日後楽園ホールのインディー活性化委員会での模様。これが感動せずに……（宍倉調）。
■写真提供／ナイタイスポーツ



祝キングダム活動再開
一足お先に串焼き屋オープン！　その名も



ターザン山本あたりが競馬のことを語るのは100年早いよ！（怒）

さ。これは絶対、野球選手より奥が深いと思うもん。

――世間でナメられがちなだけに、より深いんですよね。

アポロ　日本の国民の10％ぐらいがプロレスファンでいてくれたら、それでいいよ。十分だよ。それにプロレスファンっていう人種は意外に大雑把でいいと思うよ。「プロレスっていい加減だよな」って思って見てる人の方が社会に出てから良くなると思う。ただ、いい加減な人がいい加減なことをやったらダメよ。だからレスラーの質というのは大事なんだ。

――そういう点での不甲斐なさを一部インディー選手に感じてるんですね？

アポロ　ほとんだよ。だらしのねえ奴らさ。

――だらしのねえ奴ら（笑）。また名言ですね。

アポロ　ホントの意味でのガッツがねえな。

――菅原さんから見て、インディーに凄い選手っていますか？

アポロ　インディーで？　1人もいない（キッパリ）！

――あら。じゃあ、メジャーも含めると？

アポロ　全日本だと小橋選手。新日本だったら三銃士とライガー。これは大したもんだ。ホントに肉体的な強さを持ってるよ。しょうがないだろ、これは。認めるしかないよ。みんな順調に伸びてるもんな。

――みんなセンスなり強さなりを持ってますからね。インディーにはひとりもいなかったんですか。それは衝撃でしたね。

アポロ　いまの人たちは相手の技量を推し量る力もないよ。それはどういうことかというと、推し量るだけの強さを持ってないんだ。自分がある程度のものを持ってれば、「アイツはこれぐらいだな」ってわかるもん。だから、悔しいのはさ、どこそこのレスラーが素人とケンカして負けたなんて俺の耳に入れてくるなって、バカ野郎！

――つまり入ってくるんですね（笑）。

アポロ　ガッツ石松さんじゃないけど、プロだったら7、8人ぐらい倒さないと。まあ、素人とケンカするのはいいことじゃないけどさ、プロならそれぐらいでいいんじゃないの？　俺は、あの人に対してプロの意気を感じるよ。

――●●さんが空手家に倒されたこともありましたけどね（笑）。

アポロ　うっ……そういう固有名詞を出したコメントはやめましょう（笑）。

――インディーとかでもそういうことは、よくあるわけですか？

アポロ　わかんないけど、あるのかもしれないね。でも、いまの人たちは「この野郎！」ってバ～ンって殴られるとすくみ上がっちゃうところがあるじゃない。「なにお～！」って殴り返すハートがないよね。少なくとも俺たちは、そういうものを持ってるからね。たとえ先輩でもね、先輩に対して礼は尽くすけど、あんまり理不尽なものに対しては「そうはいかないよ」というものは持ってるから。それがプロのレスラーじゃないかな。

――そうですね。ウチの雑誌が常々訴えてるのは「レスラーが素人にナメられたらブン殴れ。それは俺が許す！」っていう世界ですから（笑）。

アポロ　それはね、段階が甘いんだよ。

――あら、甘いですか？

アポロ　だいたい素人に因縁付けられること自体、その人に品格がないんだよ。因縁付けられること自体が間違ってるわけ。おごってもらうことはいいことだけどね（笑）。

――ダハハハハ！　ウチはホントに「ケンカするレスラー万歳！」っていう雑誌ですから。

アポロ　まあ、普通のなんでもないときにやったら傷害罪だから。プロレスラーは凶器だからな。でも、ホントに狂気持ってもらいたいよね。

――ボクらも情けない話は聞きたくないですもんね。幻想が膨らむ話を聞きたいだけなんですよ。こういう仕事をしていると、裏話を聞いて夢が膨らむ人としぼむ人がいるじゃないですか。

アポロ　プロレスラーっていうのは人間の総合力を試される部分ってあるんだよ。プロレスは総合的な格闘技の頂点だっていうけど、ホントにそうだからね。確かに、最近のK-1ブームは凄いものがあるよ。でも、あれもプロレスのいいところを頂いてる部分もあるしね。

――そうですね、完全に。

アポロ　原点にはプロレスの興行と似通った部分を持ってると思う。こう見えて俺もけっこうK-1好きなんだよ。TVで見てるからさ。

――馬場さんも「K-1はプロレスの一部」って言ってますからね。殴る蹴るがあるのがプロレスなんだと。

アポロ　馬場さんの話すことについて、俺から口を挟むことはなにもないよ。多分、そうなんでしょ（笑）。だからオレが言ってるのは、プロレスはコーヒーなんだってことだよ！

――へ？　どういうことですか？

アポロ　いいところはブルーマウンテンだろうけど、モカやキリマンジャロ……いろいろあるよね？　でも、コーヒーに変わりないじゃない？　その程度の違いだよ。

――つまりインディーがダメだとか言われても、コーヒーには変わりないってことですね。

アポロ　ただインディーに関していえば、選手の質が悪すぎるよ。どういう考え方でプロレスやってるのか知らないけど、もうちょっと自分自身に厳しくないとダメだ。それが対戦相手に対する礼儀だよ。

――具体的にはどういうところがダメなんですか。

アポロ　身体を鍛えろってことだな。プロレスは相手があって成り立つものっていう考え方があるけど、それによりかかり過ぎてるんだよ。お客さんが見て楽しめりゃあ、それでいいんだよ。いいんだけど、それはある程度の基礎がないとダメ。

――他の仕事をしながらで、練習時間がなかなかないんでしょうけどね。

アポロ　だけどアルバイトしながらプロレスラーって名乗ってほしくないよね。リング上のギャラだけで飯食っていかないと。「アルバイトで金を稼いでるからリングに上げてもらえるだけでいいです」なんて、そんなバカな話あるかよ！　いまのレスラーは「酒を飲もう」って声を掛けても飲めない人も多いし。「プロレスラーになったのに酒も飲めないでどうすんだ？」って怒ったこともあるよ。

――その通りです！

アポロ　説教なんかしたくはないけどね、「プロレスラーっていうのはいいもの食って、酒をバンバン飲んで、トレーニングをバシッとやって、それでリングの上でいかに魅せられるかだ！」って言ってやったことがあるよ！　いまは女の口説き方だってかなり違ってきてるもんな。

――そこに結びつけますか（笑）。

アポロ　生き方っていうのは、結局はそこに通じると思うぞ。

――でも、酒と女とケンカってレスラーには重要ですよね。

アポロ　まあ、それは小林（邦昭）選手とか、モテる人に話を聞いた方がいいよ。

――あの人は凄かったらしいですね！　いろんな人から話が出て来るんですよ。誰に聞いても「サンペーちゃん（小林の愛称）は凄かった」って（笑）。誰に聞いても出てくるから夢が膨らみますよね。

アポロ　「凄かった」んじゃなくて、「凄い」んだよ（笑）。

――ボクの友人が某U系レスラーと一緒のパーティーに出たらしいんです。そのとき、食事を勧めたら「食べてきました」って断って、酒を勧めたら「ウーロン茶でいいです」って断った

♪這いずりィ

どーにかこ



聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

らしいんですよ（笑）。その人に「あんなのがレスラーなのか？」ってボクが言われちゃったんですよ。それは確かにそうなんですよ。

アポロ 情けないね！ オレだったら、朝5時までハシゴさせるよ。最後は、オレが金出すだろうけどね。やっぱり、ファンの方や一般の方と飲むというのは、あまりない機会だからね。よほどのことがない限りは「最後までいくぜ！」って意気込みだよな。

――「普通のファンの前で、どう見られるか？」っていうのは重要ですよね。

アポロ 酒だってある程度は強くなきゃいけないし、女の子もワ～っと寄ってくるぐらいじゃないと。フェロモンじゃないんだけど、それがセンスなんだよ！

――フェロモンじゃないんだけど（笑）。

アポロ これがな、ハナなんだよ！ フラワーじゃねえぞ、華だぞ。華に寄ってくる女の子をどうするかっていうのは、プロモーターの責任だ。

――プロモーターの責任（笑）。勉強になりますねえ。

アポロ 人間は男と女しかいないんだからね。プロレスラーは男にモテなきゃいけない商売だけどさ、男を引っ張ってくるのは女だからね。いまのスター選手の中で、誰がモテるかな？ いちばんモテるヤツが強いんじゃないかな？

――モテる＝強い（笑）。

アポロ そう思うよ。意外と間違ってないんじゃないかな？

――蝶野さんとか、高田さんなんかモテそうですよね。

多重アリバイS
multiple ALIBI "S"

アポロ （無言でテープレコーダーを止めようとする）。

――あれ？（笑）。モテますよ、蝶野さんは。

アポロ オレはチェックしてるよ。あの人は常識人だ。「女にモテるヤツ最強説」っていうのは、意外に間違ってない。

――SWSでは誰が最強だったんですか？ また、テレコ止めましょうか？

アポロ 大将（天龍）。ヨイショするわけじゃないけど、モテる要素は全然ある。

――高野兄弟もビジュアル的にはモテるんじゃないですか？

アポロ そうだね。でも、内面は違うんじゃないかな（笑）。ホントに天龍さんは強さも凄いし。レスラーの手本になってる人じゃないかな？ カリスマ性とか男気があるよ。

――天龍さんの悪口を言う人っていないですもんね。

アポロ 関係ないヤツがガタガタ言うのは良くないな。この世界にはよくあるんだけど、虎の威をかるキツネが多いんだよ。だからダメになるんだ。あの人のプロレスに対する姿勢は凄いよな。試合後のコメントにしてもホントのこと言ってるよ。つくってる人もいるんだけどさ。

――天龍さんは本音ですよね。嫌なときはボヤいたりしてますもんね。

アポロ 凄かったのは『日刊スポーツ』の競馬欄で予想やってたとき！ あれの最初の2回は凄かったよ！ 馬といえばさ、ターザン山本あたりが馬券のことをどうのこうの言うのは100年早いよ！ 冗談じゃないぞ！ バカなこと言ってるんじゃないよ！ プロレスのことは、まあ許すとしても馬のことは許せないよ！

――ダハハハハ！ オレに言わせろって感じですか（笑）。

アポロ あんまりヒートは買いたくないけど、これだけは黙ってられないね。勝負したっていいよ。10万円ずつ持ってさ、どっちが増やすことできるか勝負したっていいよ。

――その企画はぜひやりたいですね！ いいなあ（笑）。『週プロ』とSWSの代理戦争ですよ！

アポロ 揉めてた頃も言ってたんだよ、「マージャンだったら勝負出来るのにな」ってさ（笑）。だけど馬だよ、馬！ 名乗りを上げるのだっていっぱいいるよ、剛竜馬とか坂口（征二）さんとか。

――新日でいちばんのギャンブル好きのエル・サムライ選手も黙ってないでしょうね。

アポロ 目がないところに賭けたら負けるよ。勝ってる人に聞きなさい！

――菅原さんは毎週行ってるクチなんですか？

アポロ 行ってるよ！

――SWSの鬱憤をいまこそぶつけてほしいですよ。

アポロ 馬のことで鬱憤なんかぶつけないけどね。オレの競馬歴はプロレスより長いんだから！ プロレスでは試合放棄したことあるけどな、馬では試合放棄したことないぞ！

――ダハハハハ！

アポロ やめたことない！ 明日も行くよ、冗談じゃないよ！ 藤波さんじゃないけど、ネバー・ギブアップだ。仕事のことじゃいろいろあるよ。でも、趣味のことでは負けたくない！

――試合でも負けたくなかったわけですよね。

アポロ 試合か？ う～ん、まあ彼（鈴木みのる）も強かったからな。

――ダハハハハ！ まあ、とりあえずフォローしてね（笑）。

アポロ まあ、当時は背負ってたものが違うかもしれないしね。オレは背負ってるものは少ないから軽く見られるかもしれないけど、ホントはそうじゃないんだよ。

――ナメたらあかんぜよって感じですね？

アポロ ナメたっていいけどね。

――ダハハハハ！ いいんですか？

アポロ 別に、オレごときをナメていい気持ちになってるんだったら、それでもいいけどさ、ホントは違うだろって。プロレス界はジェラシーの世界だから。ところが、オレは他人にジェラシーを感じたことはないんだよ。オレは、あまり強くもないし物欲もないから、貧乏でも気にしない。女の人にし







とにかくSWSを敵にまわして徹底的に叩きまくったターザン山本。「ケンカは勝つまでやれ」という定石通り、SWSは旗揚げから2年もたずに崩壊してしまった。取材拒否をされてSWSのビッグマッチが取材できないとなると、『週プロ』は当時ブレイク中だったくどめを表紙に持ってきたりと、ある意味で卑怯な手段で対抗していた。ターザン得意のゲリラ戦法で誌面には滅茶苦茶な勢いがあって、この頃の『週プロ』は非常に面白かった。



祝キングダム活動再開
一足お先に串焼き屋オープン! その名も



たら嫌だろうね。だからあんまりモテないんだけど(笑)。

―ダハハハハ!

アポロ あんまりジェラシーはないんだよ。

―もし、競馬で菅原さんとターザンの対決が実現したら出ていただけますか? ウチはやりますよ。ちゃんと土俵を用意しますから!

アポロ いいよ。ただ、オレが勝つと思うよ。1日12レースのうち、何レースやってもいいようにしよう。最初の所持金をどれだけ増やせたかっていう方法がいいね。

―負けた方が土下座っていうルールにしましょうか? 菅原さんが勝ったら、「ターザン、SWSに土下座」っていう夢のような絵が撮れますよ(笑)。SWS経験者の競馬好きをどんどん引っぱり出したいですね。今日、明日にでもターザンを煽っておきますから(笑)。

(翌日、このアポロの挑戦をターザンにぶつけてみたところ「なに~、本当か!? 返り討ちにしてやりますよぉぉぉ。オレは今年でいちばん興奮してしまったよ! やってやるって言っといてくれ! そういうことです。はい~」とすっかり炎上してしまい、一方的に電話を切ってしまうほど興奮していた。)

多重アリバイ S
multiple ALIBI "S"

アポロ 余計なこと言わないでよ。頼むから。

―アポロさん、やりましょう!

アポロ リングの上じゃ勝てないから、これで勝つか! でもな、あんまりこういうことで有名になっちゃいかんのよ。

―金権競馬でいきましょうよ(笑)。

アポロ 勝負っていうのは楽しいんだよ。

―基本的に負けず嫌いなんですか?

アポロ 負けたくないもんね。

―プロレスでは負けてもいいけど、競馬では負けず嫌い?

アポロ ……そんなこと言いませんよ。プロレスだって負けちゃいけませんよ! そのために努力してるんだよ。オレはプロレスで負けてもいいなんて、一度も思ったことないよ! オレの目がそれを訴えてるだろ?

―ダハハハハハ!

アポロ でもな、競馬っていうのは真剣勝負なんだよ! プロレスは遊びがあるんだよ。車で言えば、ローとかセカンドのギアがある。だけどな、競馬は5速に入るか、バックに入るか、それだけなんだ、中間がないんだよ。オレは……好きだよ。でもな、オレも意外とセコいんだよ。

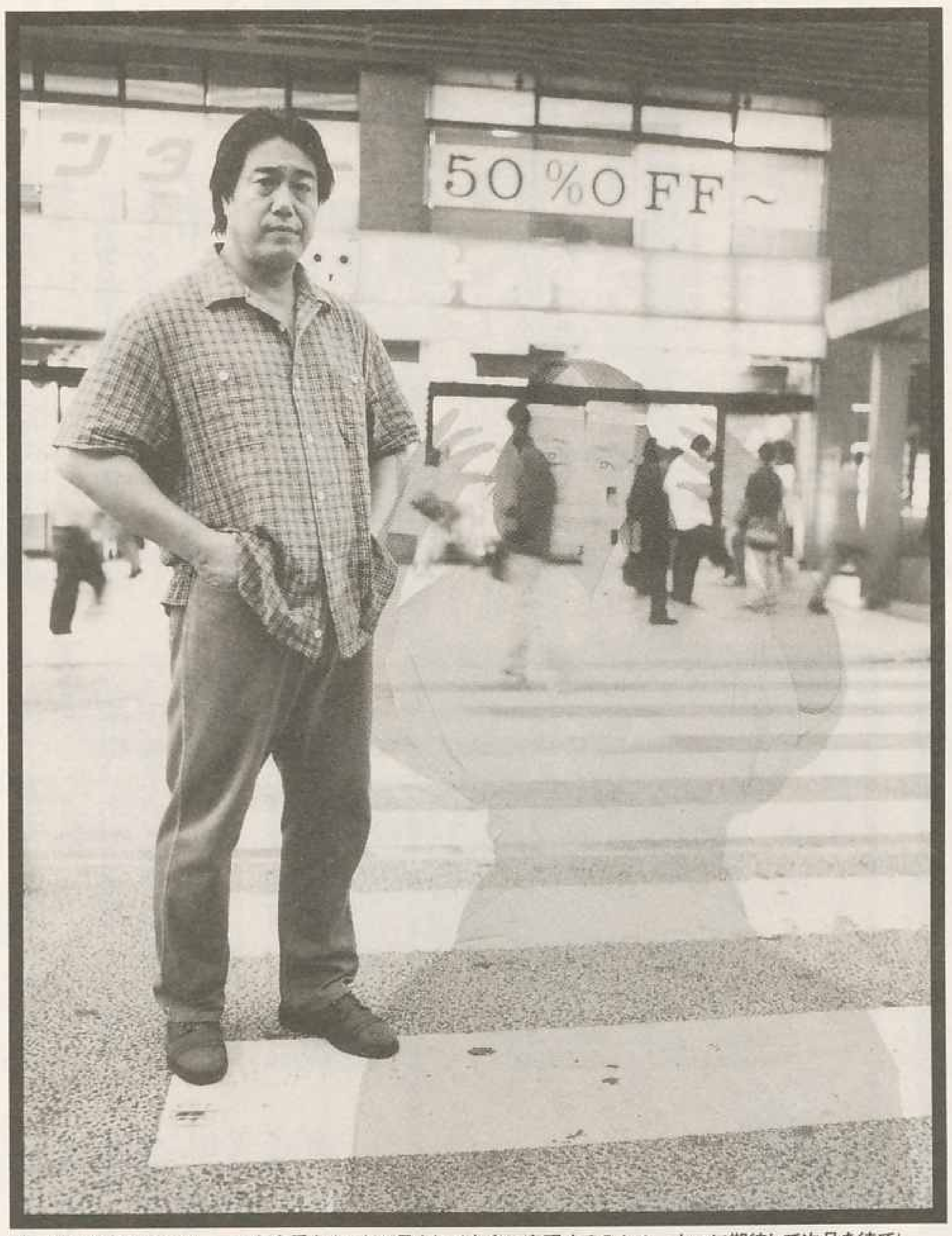
―ダハハハハハ!

アポロ 3万か4万勝つと「このへんでいいや」と思って帰っちゃうんだ。

―「や～めた」と言い残して帰っちゃうわけですね(笑)。

アポロ そうだね(笑)。あのな、人生はそんなにいいことは続かないから。妄想を膨らますことは大事だけど。

―菅原さん、面白いですねぇ(笑)。インタビュー記事を探してもあんまりしゃべってないですもんね。



ターザン山本vsSWS! こんな貴重なカードが果たして本当に実現するのか!? 大いに期待して次号を待て!

アポロ やっぱり取材する側の人も、オレのパーソナリティーを掘り下げてもらわないと。オレはこういう男だからね。幅が違うよ、幅が! オレは、恋愛相談もよく乗ってやるんだよ。

―乗りますか(笑)。それが見えるか見えないかですね。

アポロ まあ、リング上だけに絞って言えば大したことないのかもしれないよ。だけど、人間的な総合力は決して負けませんよ! 負けないどころか、冗談じゃないよ!

―競馬と総合力とvs鈴木みのるは負けてねえよ、と(笑)。

アポロ 鈴木選手は関係ないよ。彼は彼で、いま頑張ってるから。足を引っ張るようなことはしたくない。

―足は引っ張らない、いいですねえ。

アポロ 足は引っ張らないけど、頭から埋めてやるって! どんだけ強いかしらないけど、ナンボのもんだっていう気持ちはあるよ。

―ダハハハハハ!

アポロ しかし、オレも2時間近くツマミも食べずに酒だけ飲んでるのは、すごいスタミナでしょ?

―プロレスラーですよ。とにかく今日の取材で菅原さんが素晴らしいプロレス魂を持ってるということがわかりましたよ。

アポロ まあ、ナメられたくないよ。

―まあ、鈴木戦はナメられる原因になってますよね。

アポロ じゃあ、オレがさっきテープを止めて言ったことを書いちゃっていいよ。書ける勇気があるならね(笑)。ただし、書いたらタテマエとして俺はあなたの首を絞めにいかなきゃなんないんだよな(笑)。まあ、その首の絞め方で、俺の本音を感じてほしいね。

―ダハハハハ、首の絞め方で。ちょっと緩いかもしれないわけですね(笑)。

アポロ なんだか今日はしゃべり過ぎちゃったな。

―いや、言いたいことはこのさい全部言っちゃってください!

アポロ つい、いろいろしゃべっちゃったよ。しかし、あなたの「してやったり」っていう表情が腹立つなあ!

―ダハハハハハ! ウチもギリギリで頑張りますよ! 歴史を片方から見てもよくないですからね。

アポロ オレから見たらまったく逆だよ、お前。やめてくれって! 顔じゃないよ! だって、そうでしょ? 俺は逃げてないよ。俺から挑戦してるじゃねえか? 何でそんなことを俺が言われなきゃいけないんだよ。

―プロレス界で真実と思われてたことが180度ひっくり返りましたね。おもしろいなあ、プロレスって。

アポロ まあ鈴木選手には頑張ってほしいよな。

―お酒飲んでますからね(笑)。まあ、今日の結論としては、鈴木選手はいい選手だということですね。

アポロ オレは鈴木選手に対してはプレッシャーもなにもないよ。どうでもいいよ。だって、関係ないもん。オレは彼のことを軽くクリアしてる。彼はオレのことをクリアしてないかもね。ハッキリ言って人間としての総合力の差だよ!

―次はターザンですね。頑張りましょう!

【98年7月27日、東京・千駄ヶ谷のとある居酒屋にて収録】

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito
試合写真／遠藤政文
photographs by Masafumi Endo



♪這いずりィ回〜りィ
どーにかここまで来たぁサ

『PRIDE』のリングも ボクが組み立てますよ

んむはぁ

10・11高田vsヒクソン戦と同日に
我らが"格闘パーマン"アレクが
あのマルコ・ファスに挑む!!

ヒクソンが対戦を避けてるとも言われる、ブラジルの大物"路上の王"マルコ・ファスとアレクが『PRIDE.4』のリングで対戦する！ アレク？ もちろん、バトラーツの変わり者であり、元本誌編集者・のものダンナのことである。こうなったら本誌はズバリと言わせてもらおう。「応援させてよ98」!!

アレクサンダー大塚 Interview

アレク　そういえば、今日思い出しました。去年のヤンジェネ（ヤング・ジェネレーション・バトル＝バトラーツの毎年夏に開催されるシングルのリーグ戦）でボクが優勝して「紙プロ賞」をいただきましたよね。で、『紙プロ』の表紙３回分」を賞品としていただいたんですけど、いまだに１回も表紙になってないんですよ、ボク。

―ああ、思いきり忘れてましたね（笑）。すいません。でも、そのかわり、のものも（元『紙プロ』伝説の編集者＝女）を寝取ったからツーペーかなと。

アレク　う〜ん、そうで……あ！　そうすると、うちの奥さんは『紙プロ』の表紙３回分の価値の女性だということですか？

―じゃあ550回分くらいの価値はあるということでいかがですか？

アレク　あ〜、はい。550回分。それでいいです。んむはぁ（微笑）。

―で、家庭はうまくいってる？

アレク　お陰さまで、あと１ヵ月後に離婚ですね。

―ガハハハハハハハ……ウソ⁉

アレク　いや、これホント！

―それはコテコテにアツアツ的な言葉と受け取っていいんですね？

アレク　んむはぁ（微笑）。

―ま、のものもとの間に愛娘の愛ちゃんも生まれて、家庭の方は実に順風満帆だと思いますけど、この夏はちょっとリング上での活躍が足りなかったですね。ヤンジェネでも優勝どころか決勝戦にも上がれなかったし。

アレク　え、いや、夏どころか今年に入ってズッとです。

―スランプ？

アレク　う〜ん……思いきり走りたいんですけど、いまはジョギング状態で、その後の加速がつかないって感じです。

―加速がつかない原因はなんですか？

アレク　わからないです、自分でも。

―どうなんですか、島田レフェリーから見ると。

島田レフェリー＆広報　ん〜、お疲れっシ！　やっぱりねえ、去年のアレクは攻めて攻めて攻めまくりましたけど、今年は追っかけられる立場になって、初めてプレッシャーと闘ってるという感じですかね、は〜い。去年ガッと来た分、土台を作り過ぎちゃったから。ま、だから今年はいいんじゃないですか。

―何がいいんだよ！（笑）。

島田　いや、これからは岡本衛と闘い、岡本衛と当たり、岡本衛とヤリ、しっかり土台を作り直してほしいということですね、は〜い。

―島田さん、もうあなたはお願いだから黙っててください。

島田　チッ！

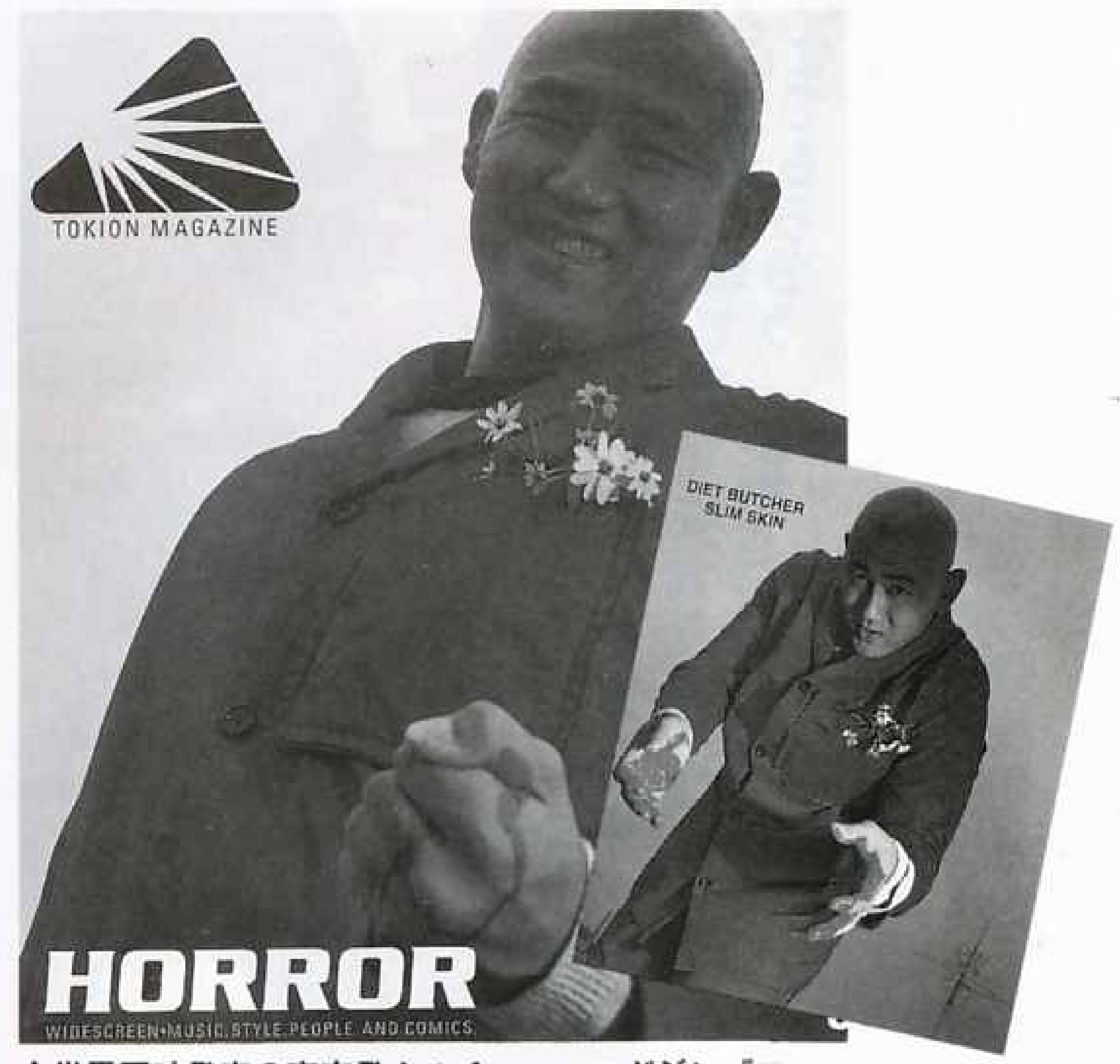
―まさか、スランプの原因が家庭にあるとかいうんじゃないでしょうね？　一応ボクはアレクとのものもの仲人でもあるから聞いとかないとね（笑）。

アレク　いや、それはないです。自分だけの原因ですね。

―愛ちゃんが生まれた時もスゴく喜んでたからね。

アレク　嬉しかったです〜。んむはぁ（思いだし微笑）。

―「これで弾みがつく」って言ってたじゃない。



全世界同時発売の東京発カルチャー・マガジン『ＴＯＫＩＯＮ　ＭＡＧＡＺＩＮＥ』の表紙にもなったアレク。この号は「ホラー特集」。ほら〜、よく見てみ！　な〜んつってな、ほえほえ〜

昨年のヤンジェネに優勝したアレクに各マスコミから賞が贈られたが、『紙プロ』賞のプレゼンターは現・アレク夫人ののものも（97・9・6）。２人はこの頃から周囲を騙して熱愛中だったのだ





今年の４月には、元『紙プロ』おきゃん編集者・のものもとの間に待望の愛娘が誕生。真ん中に写ってるデブ……もとい！　ふっくらした赤ちゃんが愛（いと）ちゃんだ。んむはぁ

アレク　の、ハズだったんですけどね。やっぱり家庭は家庭、仕事は仕事かなって思っちゃいましたね。

―でも、のものもとか愛ちゃんから、かけがえのないエネルギーをもらってるわけでしょ。

アレク　もらってますよ〜。でも、もらってるかわりに、そのエネルギーをまた家庭に還しちゃうんですよ、ボクは。だから、プラスマイナス・ゼロで、リングの上はまるまるボクの責任。だからプロレスの方ではちょっといまいち伸び悩んでますけど……あ！　でも、結婚してからホモ疑惑が薄れてましたけど、久しぶりにまた『Ｇ−ｍｅｎ』の仕事がきましたよ。

―ガハハハハハ。もしかして伝説のモーホー雑誌？

アレク　ホモ雑誌です。んむはぁ。

―これでまた偽装結婚疑惑再浮上ですね（笑）。

アレク　かと思いきや、ファッション・モデルの仕事があったり。

―ああ、ありましたね。

アレク　はい。そういう部分では、自分のなかに活気が持てるんですけど、いざ試合になるとちょっとうまくいかないですね。明かりのついた家に帰ると、おいしいご飯が待ってます。

―うん。

アレク　かわいい娘が待ってます。

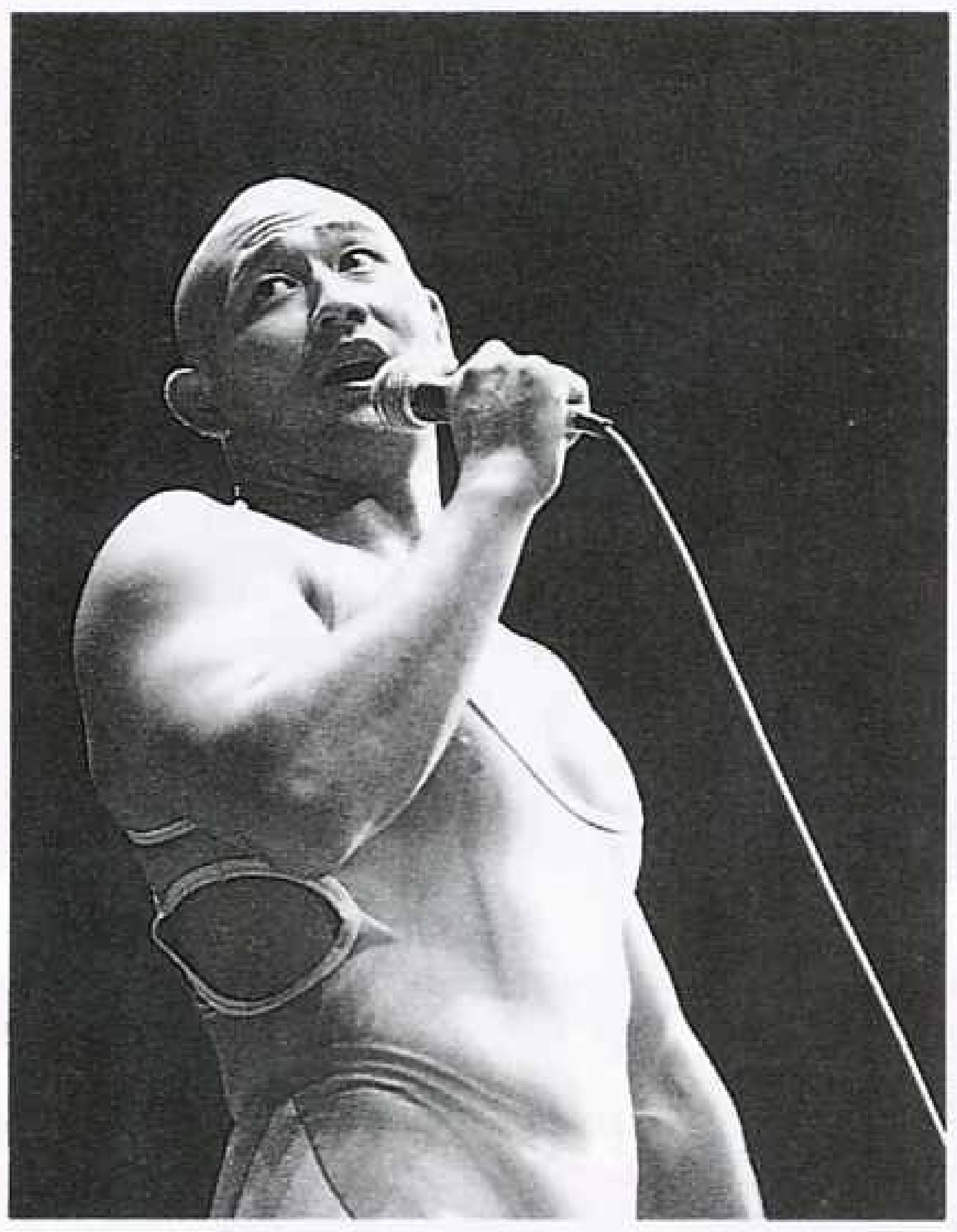
―はいはい。

アレク　かわいい奥さんも待ってます。

―そうきますか。

アレク　そして、娘とお風呂に入ります。

ボク、入れ方上手なんですよ。
――いや、入れ方上手って言われてもなぁ。「この入れ上手！」って誉めればいいの？　なんか照れるなぁ。
アレク　娘がお風呂好きなんですよ。
――ボクもお風呂好きですけどね。違う意味で（笑）。
アレク　んむはぁ。でも、いざ仕事に関しては、やっぱりウチの奥さんもわかってくれてますから。理解がありますから。その分助かってますけどね。
――バトラーツも巡業だなんだかんだと家に帰れない時が多いから。
アレク　そうですね。娘とも生まれてから半分以上会ってないですからね。
――のものもは「長い間会えなくて寂しいぃ、アレクぅ。ほえ～」とか言わないんですか？（笑）。
アレク　言わないです。まあ、草葉の陰でどう思ってるかはわかりませんけど。
――草葉の陰では寂しがってるって言いたいわけですね。
アレク　そうです。そうであってほしいです。これは思いじゃなくて願いですね。んむはぁ。
――さ、そろそろ本題に入りますか（笑）。今年は3月3日のリングスでの坂田亘戦以外は強烈な印象として残ってる試合がない状況ではありますね。
アレク　そうなんですよね。それに自分がこういう状況だからこそ、リングスでの坂田亘戦で勝負かけたのが薄れちゃってる部分があるのかもしれないです。実はあの日は、リング屋としてリングスさんと仕事する初めての日だったんです。いま明かされるあの日あの時……。



去る9月6日、バトT―FM大会で、マルコ戦が決まったことを報告したアレク。小さな館内はこれまでにない、異様などよめきと拍手に包まれた。いや、これホント






3・15の『PRIDE.2』では、ゲーリー・グッドリッジに勝利したマルコ・ファス。グッドリッジのパワーに押されたが、冷静に対処しヒール・ホールドを極めた。正直ヒクソンが対戦を避けているというほどの実力者ぶりは見れなかったが、立ってヨシ、寝てヨシのオールラウンドプレイヤーぶりは発揮した



マルコ・ファスは1961年ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ出身。通称・"路上の王"。現ビバリーヒルズ柔術クラブ所属。高田延彦が「打倒・ヒクソン」に向けて、4月と8月にマルコに指導を受けた。グレイシー柔術の天敵と言われるルタ・リーブリの大物中の大物。95年7月に行われた第7回アルティメット大会に優勝。この難敵にどう挑む、アレク!? それゆけ、アレク！

自分がこういう状況だからこそ坂田（亘）戦が薄れちゃってるのかも

――どんどん明かしてください（笑）。
アレク　あの日は、後楽園ホールにリングを運んで、11時頃着いて、リング作りました。ウォーミングアップして試合しました。はい。
――それははしょり過ぎだろ。もっとドラマチックに話してくれないと（笑）。
アレク　ああ、そうですね。午前11時に会場に着きました。
――はい、着きました。
アレク　汗水流しながら重い鉄柱を運び、板を運び、リング設営しました。リング主任ですから、ボク。
――リング屋としての仕事の主任なわけだ。いろんな仕事やらせますねぇ、バトラーツは。グッズ管理もやってるわけでしょ？
アレク　グッズ管理はバトンタッチしました、愛人に。
――あ、モハ（メド・ヨネ）にね（笑）。
アレク　よくおわかりで（微笑）。で、リング作りをして、試合に臨んだわけです。
――また、その試合が30分フルタイム。
アレク　ええ。まぁ、どうにか判定ですけど勝ちまして。
――熱闘の末にバト勢がリングス・ジャパン勢から初めて勝ちをもぎ取った。見てる方も力がかなり入りましたから、やる方は相当疲れる試合だったでしょう。でも、それからがまた大変でしたね。
アレク　ええ。で、試合終わってパッと着替えて売店に走りましたよ。休憩時間を利用して後楽園ホール大会のチケット売りですよ。「5・27バトラーツ後楽園のチケットありますよ～」って声出しながら売ってましたね。
――試合で切った目尻から血を吹き出しながら（笑）。
アレク　その甲斐あって、2～3枚売れました。
――2～3枚！　涙ぐましい。もう涙で前が見えない（笑）。どうですか、島田広報。
島田　ん～、お疲れッシ！　あれ今年だったっけ？　でもね、あの勝ち以来、アレクも目標がなくなったっていうのもありますよね。は～い。それも去年に比べると低迷してる原因かなと。せっかく成瀬（昌由）の持つトーナメント21のベルトに6月に挑戦できるって話だったのに、リングス側が逃げてね。
――言い切りますね！
島田　だって、アレクは（クリストファー・）ヘイズマンに勝って、坂田に勝って、実績からしたら挑戦できてもおかしくないはずなんですよ～。成瀬はグッドハートでいい選手だけど、やらせないのはフロントの不手際ですね、は～い。
――成瀬選手に挑戦できたら面白かったですけどね。で、坂田戦が終わった後は、


Alexander
Otsuka

パーマンは一度あの姿でやりたかったんですけどね

チケット売っただけでは終わらなかった。

アレク　ええ。作ったリングは片付けないといけないですからね〜。

——なるほど（笑）。

アレク　そのままで帰れればいいんですけど、そういうわけにはいかないんで。リングをバラして「ヨッコラセ」と下まで降ろして、トラックにリング積んで、リングスグッズを積んで、リングスの事務所に届けて、やっと家に帰れました。

——涙ぐましいと思う反面、まったくなんという貧乏団体なんだとも思いましたけどね（笑）。

アレク　う〜ん、確かに。でも、そういう部分があるからこそボクは頑張れた。

——でも、そこまでしてというか、そこまでされてというか、なんでいまでもバトラーツにいるの？　正直に言っちゃって（笑）。

アレク　……泥沼にはまっている……抜け出したいけど抜けられない……。でも、もがいてるのが頑張りに繋がるんですね。そうやって自分を頑張って光らせて。どこで、どういう人がボクのことを見てるかわかりませんからね。そういう人の目を引きつけておいて、引き抜いてもらおうと。んむはぁ。

——ガハハハハハ。「引き抜かれ宣言」！　こんなこと言ってますよ、広報。

島田　ん〜、お疲れッシ！　でも、もっといい団体があれば、バンバン行った方がいいですよ。行け行け、ＧＯＧＯ、ア・レ・ク！

アレク　そうは言いながらも、（バトラーツは）居心地がいいですから（微笑）。

島田　逆に練習だけに専念してたら物足りないですよ、多分。そういう身体にもうなっちゃってますから、ハハハハァ。

——試合に専念したいですからね、選手なら。だから、偉いというか、バカというか、バトラーツの選手にはホトホト感心しますよ。で、アレク選手といえば、バチバチのタフな試合をやったと思えば、みちのくプロレスではヘビー級ノータッチ・トペコンを披露して驚かせ、ＦＭＷでは……。

アレク　バトルロイヤルに出ましたね。それからＪＷＰさんとはミックスドマッチやって（5・10大阪／石川雄規&久住智子vsアレク&福岡晶）。

——ああ、イカレ社長が「欲情念」を出した試合だ（笑）。

アレク　いまだから言いますけど、ボクももうちょっと久住さんになんかやりたかったんですけどねぇ。結婚する前ならできたんですけどね。んむはははぁ。

——そして、この8月（8・9川崎／パンチ田原結婚披露宴興行）にはパーマンになり（笑）。

アレク　パーマンで試合したの初めてですね。

——そりゃ初めてでしょうとも（笑）。

アレク　『紙プロ』には一度パーマンで出てるんですよね、ちっちゃい時の『紙プロ』に写真が（本誌17号参照）。

——そうそう、まだ練習生の頃ね。まさか、あの姿で試合するとは（笑）。

アレク　パンチさんのためにっていうか、まあ、自分がやりたかったんですけどね、あの姿で1回くらい。

——幅広いですねぇ、実に。さあ、この振り幅がどこまで広がるか！　と思った矢先に『ＰＲＩＤＥ．４』電撃参戦発表。しかも相手はマルコ・ファス！　多分みんな冗談だと思ったでしょうね（笑）。

アレク　でも今日（9・6ＴＯＫＹＯ ＦＭホール）、リング上から発表したらドッときましたね。

——相手がマルコと聞いた時に、いかがなモンでしたか、心境は。

アレク　ラッキーだと思いましたよ。ネームバリューのある選手とできるっていうのは。

——言ってみればヒクソンとやるようなもんですよ。ヒクソンの天敵とも言われてますからね。

アレク　「仮想・高田vsヒクソン」。

——なんでカード自体を仮想にする！

アレク　いま言ってる途中で「やばい」って思いました（笑）。

——でも、数多くの格闘家は羨望と嫉妬の眼差しで見ますよ。「なんでアレクが、なんでプロレスラーがマルコとできるんだ」って。

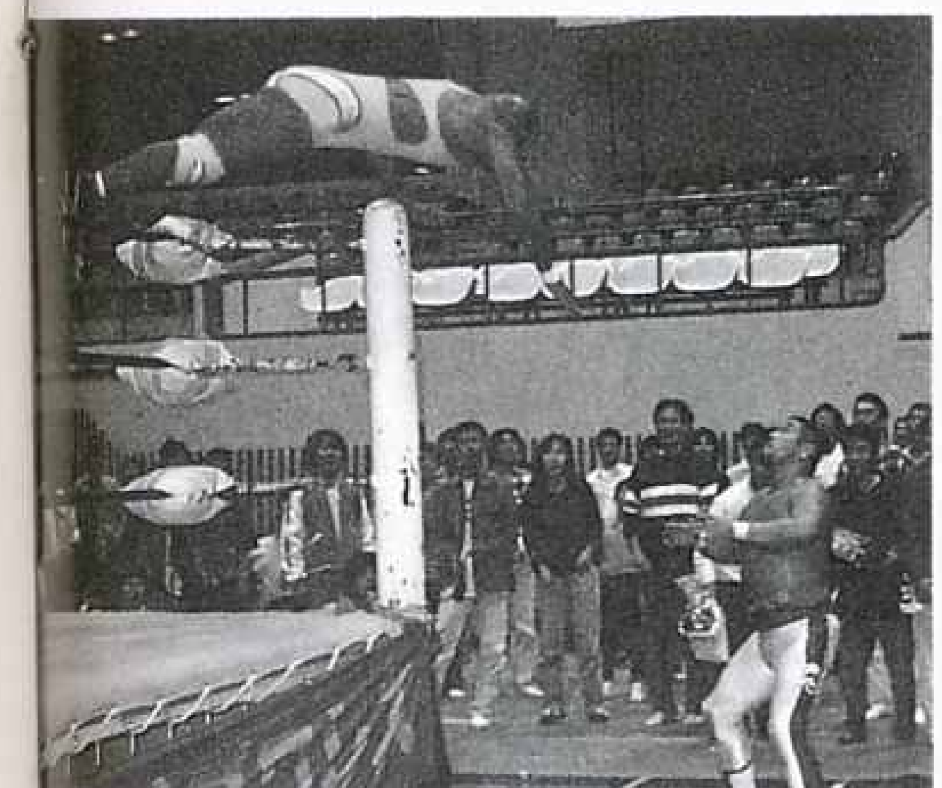
アレク　あるかもしれないですねー。

島田　そんなこと言ってる奴らは所詮セミプロだから出来ないんですよ。プロレスラーだから出来るんですよ、は～い。

アレク　そうですね。だからプロレスラーになって良かったです。『紙プロ』の編集部の女の子も捕まえられたし。んむはぁ（微笑）。

——ガハハハ。そういった格闘家たちの嫉妬の眼差しに対しては？

アレク　そういう人たちとは、こうなるまでの手順が違ってるってことですね。いまは、アマチュアでやってて、誰かに目をつけてもらって、プロのリングに立つってパターンが多いじゃないですか。確かにアマチュアの時にそうやって一生懸命練習やってれば実力つくと思います。ボクは反対に、プロレスっていう昔からある世界の——ボクもあんまり好きじゃないんですけど——年功序列の下積みからズッとやっていく、ボクや米山さん（M・ヨネ）がいまだにやってる雑用とか、そういう部分をこなしながら頑張ってプロになった、そこの違いだと思います。



97・9・22、みちプロの福島大会では、ヘビー級鉄柱越えノータッチトペコンを炸裂させた！　破壊力は超ド級!!　ちなみにこの写真は取材に行っていた現アレク夫人の、ののものもが撮ったものですぅ。愛～や

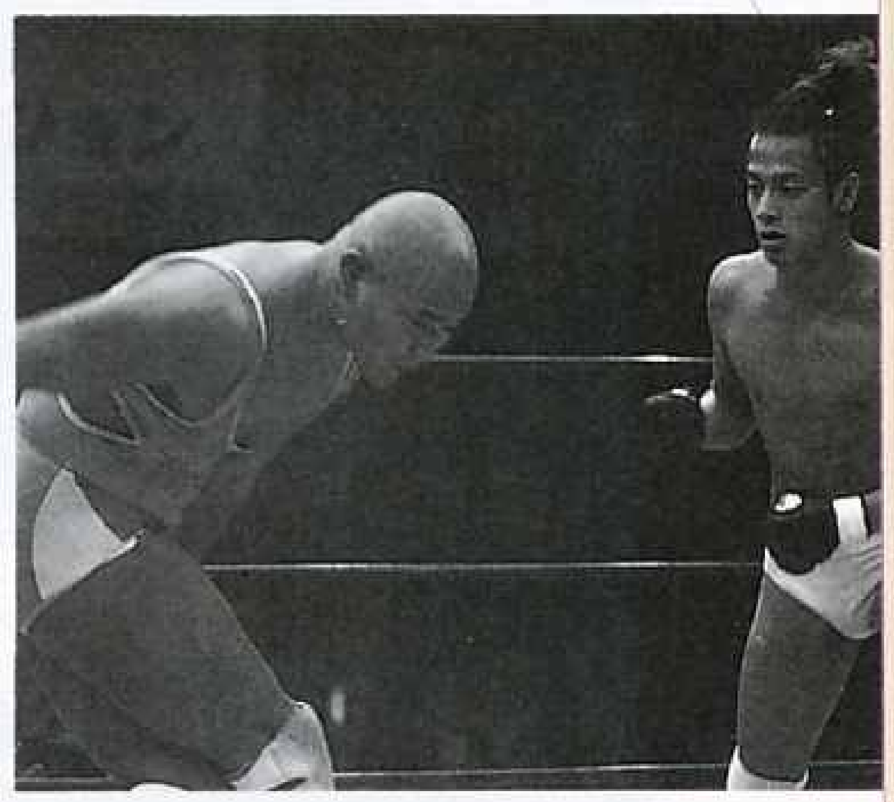
97・3・14福岡では、UWF戦士の中野龍雄を見事なジャーマンで投げっぱなしたアレク。惜しくも敗れはしたが、この一戦の後くらいから一皮剥け、石川、田中ら先輩陣を連続KO。快進撃が始まった。んむはぁ





バトの壮大なる世界征服作戦の小さな第1歩となった97・1・21後楽園『プロジェクトB』。この日は、みちのくプロレスの星川尚浩をジャイアント・スイングでコマのようにブン回した。10・11は「マルコもチャンスがあったらブン回す」というくらいの平静さが保てるかどうかが鍵だ

初期のバトは石川社長＆アレクvsチーム・タコ（池田大輔＆小野武志）のバチバチタッグが名物だった。攻めのタコに対して受けの石川＆アレク。なかでもアレクは標的にされ、ボコボコになっていた。ほえ～



プロレスラーになって良かったです。

マルコとやれるし、ののものも捕まえられたし

——だてに下積みは積んでないぞ、と。

アレク　そういう部分でチャンスが訪れるかどうかっていうのは大きな違いになってくるんじゃないですかね。

——美しい話だ。

アレク　だからリング作りして試合をするんです。んむはぁ。

——リング作りにしても、そのハンディを受け入れたことが坂田戦の勝利に結びついたわけですからね、結果として。選手としてはハンディになる、あるいはマイナスになることでも、自分の中で消化してプラスに転換したということになりますからね。

アレク　そんなカッコイイもんじゃないんですけど、そういうことですかね。んむはぁ。あ！　ですから、『PRIDE』のリングもボク、作りましょうか!!

——ガハハハハハ。素晴らしい！

島田　それいいねぇ！　ボクがKRSに言っておきましょう。

——ちなみにマルコに抱いているイメージとしては「強い選手」ですか？

アレク　それはモチロン。（対戦が）決まってまわりの反応を聞くと、「エーッ！」てみんな驚きますからね。特に（マルコを）知ってる人はそうですね。

——ついこの間パーマンになってた人間がマルコ・ファスとやるわけですよ。そりゃ、驚きますよ（笑）。プロの世界としては凄く夢がありますけどね。

島田　（『PRIDE．4』の）パンフレットにゼヒ、パーマンの写真載せてほしいね。

アレク　リングスさんに初めて出た時に、ヘイズマンがボクの試合のVTR見て、ボクがジャイアント・スイングやってるの見て……何て言ってたんでしたっけ？

島田　「オレも回されるのか！　プァ～」って言ってたらしいよ（笑）。

——「オレも回されるのか！」（笑）。チャンスがあれば、マルコにもジャイアント・スイングを決めてもらいたいという夢は広がりますね（笑）。

島田　トペコンもね。

——当日はバトラーツのアレクサンダー大塚っていうよりは、アレクサンダー大塚個人として上がるっていう気持ちなんですか？

アレク　まあ、そうは言いながらも、ファンの目から見たら、そういうわけにもいかないですからね。やっぱりそういう部分で、いままでズッと言ってきているように、プロとして、お客さんの目をシッカリと意識しながらやりたいです。どこまでできるかはわからないですけど。

——マルコとやるとなったら、普通、「玉砕するつもりで、ファンの目なんか気に

せずに、一格闘家として完全燃焼してやる！　ウオリャー」ってなるんじゃないですか？
島田　いや〜、そういう人が勝てないんじゃないですか。押忍押忍。
アレク　まあ、勝つに越したことはないんですけど、もし負けたとしてもお客さんに対して、自分から試合を通して見ている人に何かを投げかけられれば、自分にプラスになって返ってくると思います。
——去年の高田vsヒクソン戦が終わって「闘いはハートだと改めて思いました」ってコメントしてたけど、その気持ちはいまでも変わりませんか？
アレク　そうですね。ハート……イコール、心ですね。
——それはイコールというより和訳ですね（笑）。

アレク　いまもちょっと言ってる途中で「やばい」って思いました（笑）。
——アレクは集団行動より、個人行動が好きでしょ。そこでバトラーツという名前を背負ってしまうことに関しては違和感はないんですか？
島田　ん〜、いや、だって団体の名前があって、そこの選手が活躍して、そこにいるから「試合してくれ」ってオファーが来るわけじゃないですか。「団体を背負わない」っていう方がおかしいですよ。一個人として闘うっていうのはヘンですよ。それなら、その時点でフリーになるべきですよ、は〜い。
——どうですか？　いまのユージ島田の意見に対しては。
アレク　それはボクもそう思います。ボクはもう、やる以上は団体を背負って行

アレクの妻 のものも独白

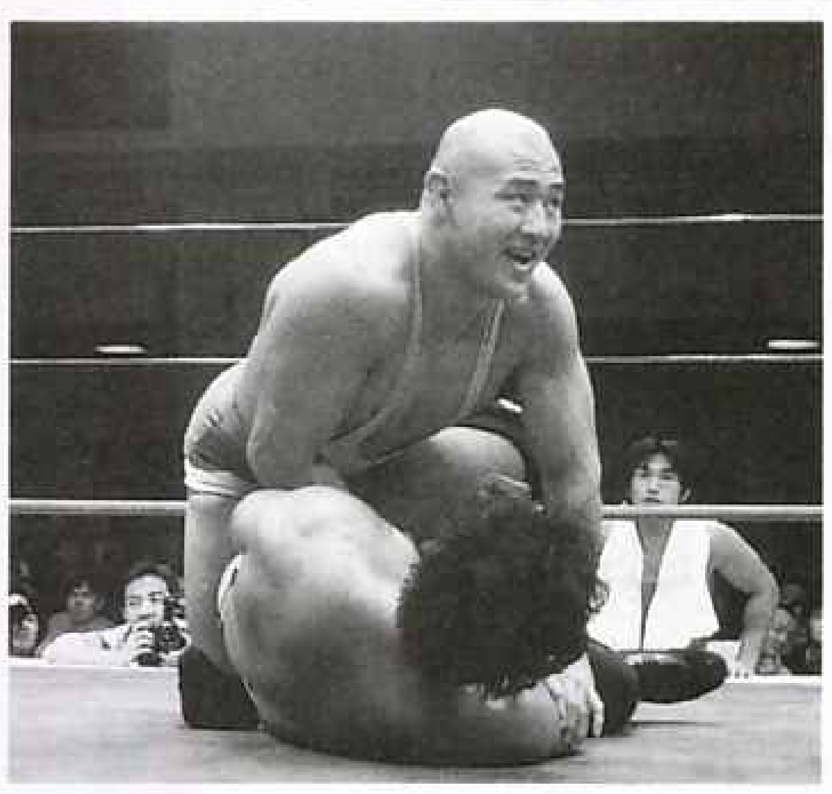


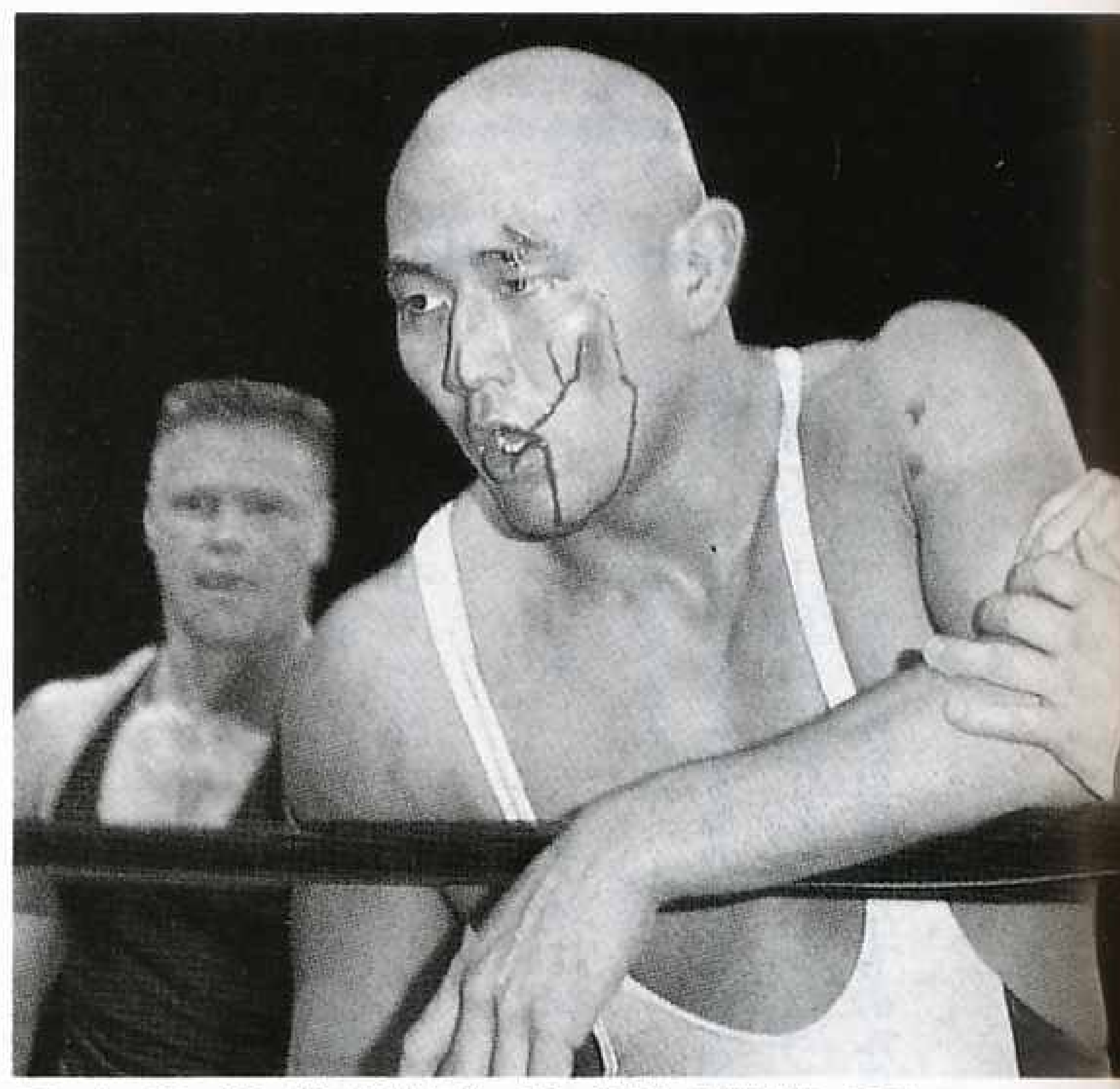
——まず、対戦相手のマルコ・ファスのイメージは？
のも　う〜ん、胸毛。
——ガハハハハ。胸毛！　高田さんが「打倒・ヒクソン」のためにこの人のところにトレーニングに行ってるくらいの選手なんだよ。
のも　ふぅ〜ん。大物中の大物ってビデオの中でも言われてましたね。
——のものもはバーリ・トゥードにはどういうイメージがあったの？
のも　私は、基本的にプロレスラーがそういう大会に出ることはすごく賛成なんですよ。だから、結婚する前だったら「頑張れ〜！」って素直に応援できたけど、やっぱり……何よりも怪我がね、怖いですぅ。私が守りに入ってるなって思った。ホントは、去年も（『PRIDE．1』の会場に）行ったし、今年は親子３人で観戦するつもりだったんですぅ。レジャーとして。ウチの親なんて、たぶんデスマッチだと思ってるんですよ。「怖い試合にアレクが出る」って言ったら（笑）。
——有刺鉄線マッチとか。
のも　そーそー。たぶんそう。正直言って、ホントは見に行きたくないんですよぉ。
——さすがののものもでもそう思うか。でも決まった以上は、心配を克服して目一杯応援しないとね。闘いを生業とするプロレスラーの妻として。
のも　でも勝てるような気がする。ランニングさえちゃんとしてれば。
——ほぇ〜！（笑）。では最後にのものもからアレクに愛を込めたメッセージを。
のも　ん〜、勝敗よりも、そうやって、そこに出るまでが大事だと思うから……あ、負けたら罰ゲームがあるんですよ。
——罰ゲーム！
のも　負けたらお寿司食べなきゃいけないの。
——ずいぶん優しい罰ゲームだねぇ。
のも　でもアレクにとってはかなりかなり重大なんですよぉ。お寿司大嫌いだから。それ言ったら「何よりも頑張れる」って言ってた。
——ガハハハ、罰ゲームが寿司！　いちいちプロフェッショナルな夫婦だね。
のも　でもこんなこと、マルコさんが聞いたら大変ですね。「ナメンな！」って。
——気にしない気にしない。ズバリ言って、決まった以上は勝つ気で行ってほしいよね。
のも　そうですね。家族のためにも、日本の国民のためにも！
——日本国民ときたか！　よし、ブラジルをブッ潰せ！
のも　ブッ潰せぇぇぇ！　ほえ〜。
【8月8日／『紙プロ』編集部にて】



今年の８月９日、藤原組にはよく出没していた伝説のパーマンがリング上に姿を現した。しかも、元川恵美と組んで、対戦相手は石川雄規＆井上京子組という豪華カード。幅の広さとは、首を90度曲げて見れば、つまり深さなのだ。んむはぁ


無念のＴＫＯで敗れたヘイズマンに半年後にはきっちりリベンジ！この試合で見せた決して諦めない粘り強さをマルコ戦でも発揮だ！（97・10・14／リングス後楽園）


98・3・3リングス後楽園。リングの設営、撤収、チケット売りをしなければならないというハンディを背負いながらも坂田亘戦を突破したアレク。今年も快進撃は続くと思われたが……


97・4・22、リングス大阪大会。パックリと目尻を切ってＣ・ヘイズマンに無念のＴＫＯ負け。「なんで止めるんだ！」と“荒れるサンダー”となった



かないといけないと思ってます。でも、ボクは個人行動が好きです。んむはぁ（微笑）。
——それはバト的にもＯＫ？
島田　ん〜、それはもうしょうがないですね。個人の趣味ですから。大ちゃん（池田大輔）に放浪癖があったり、臼田（勝美）が酒癖悪いのと一緒で個人の趣向ですから。
——で、アレクさん！　ズバリ言って、〝路上の王〟マルコに勝算はありますかーッ!?
アレク　う〜ん、勝てる可能性もあるんじゃないですかね。やる以上はなくはないですよね。でも、『ＰＲＩＤＥ．１』の高田さんのような試合だけはしたくないですね。
——気持ちの上で負けたくない？
アレク　はい。この試合で加速したいです。
——奥さんののものもはマルコ・ファスなんか当然知らなかったでしょ（笑）。
アレク　知らなかったですね。「マルコメ・ミソぉ〜？　ほえ〜」って（笑）。
——バーリ・トゥードのルールで闘うことに関しては怖がったりしてないんですか？
アレク　ボクに対しては言葉では言わないです。やっぱり、そういう部分はわかってるから。その辺がエライですね、ウチの奥さんは。素晴らしい。んむはぁ（微笑）。
——でも、これはプロレスファンのある種の夢ですよ。バトラーツみたいなふざけた団体から大きなフリー・ファイト系の大会に選手が出陣することは（笑）。
島田　ふざけた団体とは失礼な。チッ！

アレク　あ、思い出した！　ウチの奥さんにマルコ選手のこと説明してて、ルタ・リーブリの選手だって言ったら「え、ルチャ・リブレ？　飛ぶのぉ？　ほえ〜」って言ってました。そういう部分はウチの奥さん変わらないですね。

――ガハハハ。相変わらずいいですね。

アレク　10・11のセコンド、サスケ社長に付いてもらおうと思って。

島田　それいい!!　で、サスケ社長が「え？　ルチャ・リブレじゃなかったの？　アレク！　ガハハハ」って。それ面白いですね〜。ハハハハハァ。

――イカれた団体ですね（笑）。アレク選手はマルコ・ファス相手ということに関しては、恐怖感はないんですか？

アレク　それはお互い同じだと思うんですよ。向こうもボクのことなんて全然知らないですから。

――実に頼もしいですね。気をつけなきゃいけないと思ってることは？

アレク　やっぱパンチに気をつけることですね。ポジションでもし上を取れたとしても、そこからの打撃、パンチの出てきかたが、向こうは勉強して、頭に入ってるでしょうから、そういう部分でこっちもある程度勉強していかないとつまんない試合になりますから。

――つまんない試合にはしたくないと。プロフェッショナルですね。じゃあ特別な練習はしない？

アレク　普段通り、腹筋とランニングのつもりだったんですけど、島田さんが「ん〜、それはちょっと」って。

島田　いや、あとはパンチに慣れるだけなんですよね。でも、ウチには秘密兵器の岡ヤン（岡本衛）がいますからね。岡ヤンをマルコ・ファスに見立てて、マモル・ファスにしてね。あとは相撲部屋とか行って鉄砲とか打たれて顔面を鍛えると。それでいいっしょ。ハハハハハァァァァ。

――やっぱイカれてる（笑）。でもこの間（8・28）、K―1のリングで安生洋二、長井満也がいかれたし、プロレスラーは他の土俵では弱いっていう最近のイメージを、「オレがひっくり返してやろう」って気持ちはありますか？

アレク　それはないです。自分のためですから。別にプロレスのためにやってるわけじゃない。

――ガハハハハハ。言い切りますね。それじゃ応援してくれないよ、プロレスファンは。

アレク　いや、ファンの思いには応えたいんです。だから、自分のためにやって、結果としてプロレスのためってことがついてくると思うんですよ。いつも一生懸命自分のためにやって、結果としてそれがバトラーツのためになる、プロレスのためになるっていう気持ちでやってますから。

――率直に言ってプロレスラーが違う土俵で負け続けてることに対してどう思ってるんですか？

アレク　やっぱり……下積みをもっと頑張ったほうがいいかなって。日々のランニングと腹筋、そしてリング設営と撤収が最後にモノを言いますからね。んむはぁ（微笑）。

――プロレスラーよ、ランニングと腹筋とリング屋をやれ！　バッグンですね（笑）。いまは昔ながらの年功序列が薄れてきて、下積みをやらないレスラーも増えてきた。でも非合理的なものを排除するのは運動選手としてはいいとしても、まがまがしさというか、あとには引かないという気構えというか、そういう部分は合理的なことばかりでは身に付かないですからね。

アレク　底力ですね。人間としての底力を鍛えるには下積みがないと。

――いいこと言いますね！　アレクサンダー大塚の人間としての底力を『PRIDE』のリング上から、ゼヒ観客に突き刺してください！

アレク　頑張ります。

島田　10・11がルタ・リーブリ。ウチの11・23両国ではアレクがルチャ・リブレやるなんてどうですかね〜。

アレク　んむはぁ。

【9月6日／東京・虎ノ門「バーミヤン」にて収録】



【あれくさんだー・おおつか】71年徳島生まれ。平成7年、藤原組に入門。同年8月に米山サトシ戦でデビュー。得意技はアマレスの経験を活かした各種スープレックス、ジャイアント・スイング、スキン・ヘッド、謎の行動、んむはぁ。その幅広いファイト・スタイルの根っこが『PRIDE．4』のリングで見られるか。ある意味で「高田vsヒクソン戦」よりも注目だ！

What is プロ格闘家!?

強ければそれでいいのか！　弱くても人気があればいいのか！　それが問題だ！



菊田早苗



郷野聡寛

構成／チョロ
interview by Choro

撮影／松永源さん
photographs by Gensan Matsunaga

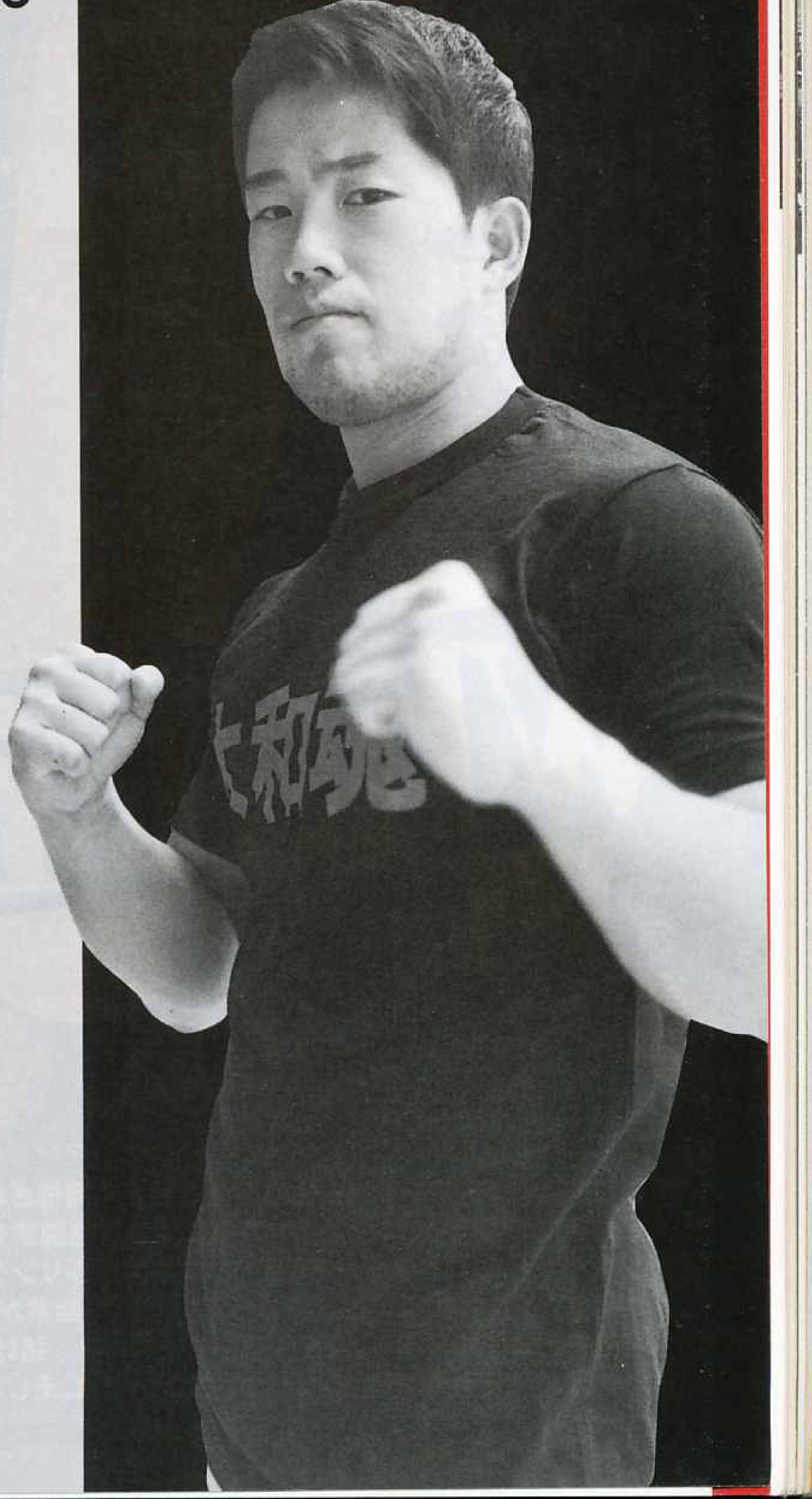
ここ最近、バーリ・トゥード系の大会が数多く開催されるようになり、それにつれ、様々なジャンルの格闘家を目にするようになった。その中にはプロ格闘家を名乗る者もいる。格闘技ボーダレス時代を迎え、リング上でも、プロレスラーと、そのプロ格闘家がリンクすることも珍しいことではなくなった。しかし、いまだにプロレス界に良い感情を持っていない格闘家が多いのも事実だ。一体その要因は何なのか？　プロ格闘家とは何を目指し、何を主張したいのか？　強ければそれでいいのか!?　弱くても人気があればいいのか!?　それが問題だ!　プロレスラーとは、そしてプロ格闘家とは何なのか!?

総合格闘技の天才児あるいは申し子

郷野聡寛

プロレスラーはズルイです。バーリ・トゥードで負けても帰る家があるから。

郷野聡寛はフリーのプロ格闘家である。その特権を活かし様々な総合格闘技系の大会を荒らしまくってきた。現在も、シューティング、リングス等々、その行動範囲は多岐に渡っている。もちろんバーリ・トゥード系の大会への出場も虎視眈々と狙っているはず。まさしく現在の格闘技ボーダレス時代を象徴するプロ格闘家のひとりである。試合では常にアグレッシブな攻撃を魅せ、観客の眼を釘付けにしている。What is郷野聡寛!?



——郷野さんは、「(総合格闘技の)トータルバランスでは日本のライトヘビー級の中で一番だと思う」って自分で言ってますよね。プロらしい発言だなって思ってたんですよ。

郷野　この間の須田(匡昇)とエリック(・パーソン)の試合(8・29修斗)を見てますますそう思いましたね。チャンピオンシップとしては非常にレベルが低かったんじゃないかと思いますね。

——低いと言い切っちゃいますか(笑)。郷野さんの試合は派手にKOしたり、4月の『ダブルクロス』でもマチュー・ロッカをスープレックスでブン投げたり、観客受けする試合が多いですよね。

郷野　そうですね。ボクは練習でやってる通りのことを試合でできれば、お客さんを喜ばせる自信はあるんで。

——天賦の才能なんですかね(笑)。

郷野　まあオレは〝総合格闘技の申し子〟ですからね(笑)。

——総合格闘技の申し子!

郷野　ボクは何でもそうなんですよ。人より早く上手くなるんですけど、ある程度のところで止まっちゃうんですよ(笑)。

——止まりますか!

郷野　今までは全部そこでやめちゃってるんで、今回だけはそこからもう一頑張りしようと思ってますけどね。

——でもこれまで郷野さんみたいに、リングスとシューティングに掛け持ちで出てる人はいなかったですよね。画期的だったと思うんですけど。

郷野　ボクは、修斗とリングスとパンクラス、三つ全部上がるのが理想だったけど、やっぱりそれは難しいみたいなんで……。どうしても三段論法的に強さを比較されるのが嫌みたいなんで。

——三団体に上がるのはいろいろと難しいこともあるんでしょうね。

郷野　できれば定期的に二つの団体には出たいとは思ってるんですよ。でもやっぱり修斗が一番ボクに目をかけてくれてるし、お世話になってるんで修斗に出られる範囲で、リングスとかパンクラスとかにも上がりたいですけどね。

——でもその三団体に掛け持ちで上がれたら凄いですよ。前例もないですし。これで高田道場の選手ともやれたら完璧ですね。

郷野　そうッスね。桜庭さんとはやってみたいですね。ボクもずっとシューティングに出て勝っていけば(カーロス・)ニュートンと試合できると思うんですよ。そしたらエンセンに頼んで紹介してもらって、稽古つけてもらいに行こうかなって思ってますけど。ホント一緒に練習してみたいですよ、桜庭(和志)選手となら。

——桜庭選手となら! 他の選手じゃダメですか(笑)。

郷野　あんまり知らないんですよ。もちろん高田選手は知ってますけど（笑）。

——高田選手とかプロレスラーで強いと言われている選手とやりたいっていうのはあるんですか？

郷野　ボクみたいにこうやってやってる人はみんなそうじゃないですかね。勝てば一気にスーパースターじゃないですか（笑）。特にプロレスラーは強いと思われてますからね、一般的には。やれば勝つ自信もあるし。実際そういう気持ちがない奴は格闘技の試合をする資格はないと思うし。でも高田選手とやれるんだったら格闘界から応募者殺到しますよ。まあやらせてもらえないでしょうけどね。

——何故か格闘家は高田選手にキツイ発言をする人が多いですよね。高田選手は「PRIDE」とかに出てますけど、プロレス雑誌にもそれほど取り上げられないし、かといって格闘技雑誌に取り上げられるかといったらそうでもないんですよ。

郷野　六月の試合を見たら、プッシュしようがないと思うんですけどね（笑）。ボクは会場で（佐藤）ルミナさんと見てたんだけど、ルミナさんはブゥ————！って言ってましたよ、思いっきり。ボクはアッハッハッ！って笑ってたんだけど。

——何がおかしかったんですか？

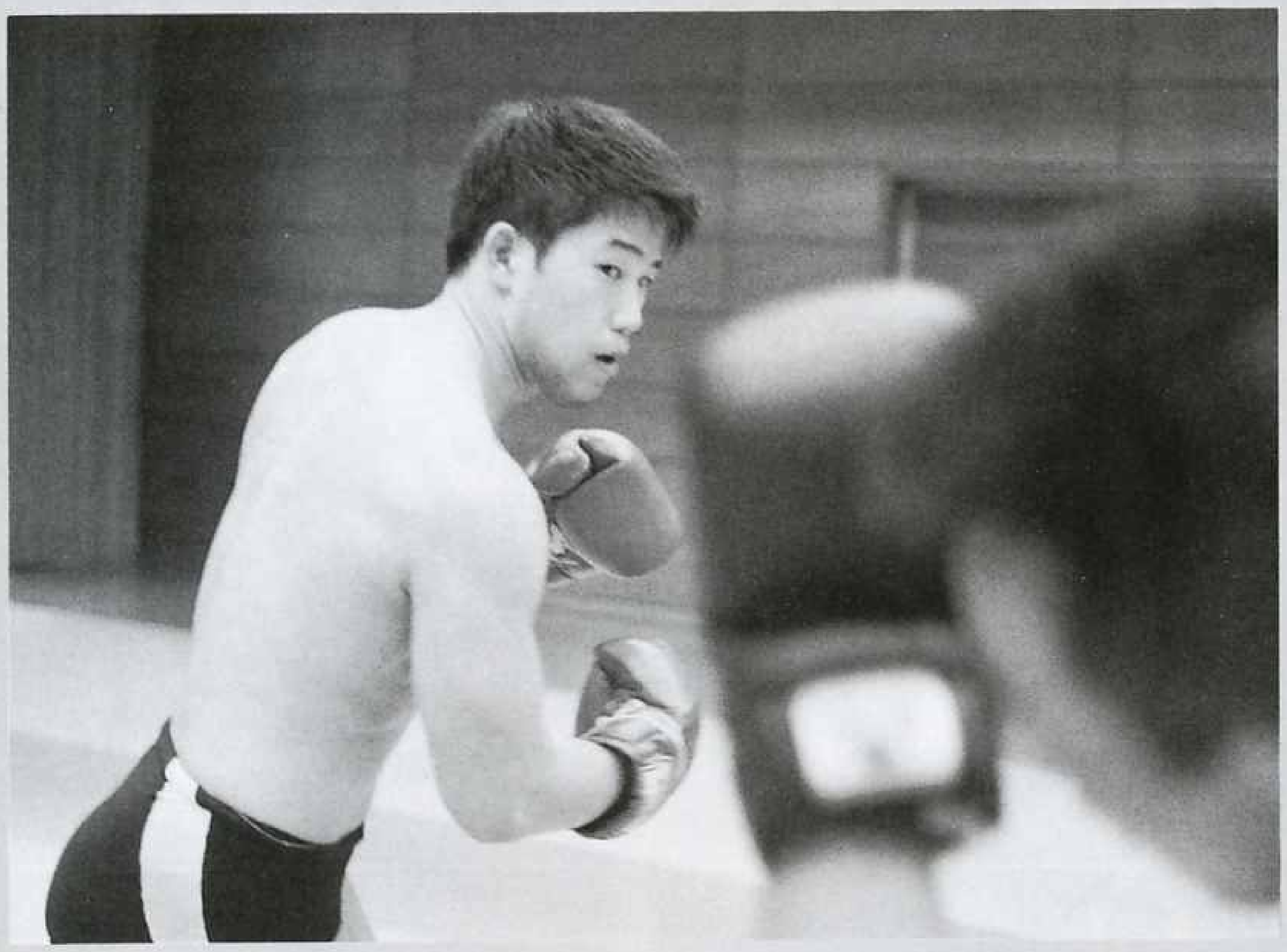
郷野　……。マルコ（・ファス）のところで練習したっていうから、何かテクニック見せてくれるかなと思ったけど、見られなかったですからね。あの試合はブーイングされてもしょうがないですよ。……まあ今まで最強って言ってきたツケですね。……でも大きなお金貰ってるしなぁ。ツケじゃないかぁ。しかもまたやるしなぁ。ヒクソンと二回できるなんて凄いッスよね。普通できないですよね。……高校生の頃は、高田延彦公式飲料のポスター、部屋に貼ってたんだけどなぁ（笑）。

——でも何だかんだ言ってもドームを満員にできるのはプロレスラーだけじゃないですか、今の段階では。

郷野　そうなんですよね〜。でもボクはプロレスは別モンだと思ってるから。

——でも郷野さんもプロレスファンの頃があったんですよね？

郷野　ありましたね（笑）。今は全然見ないですけど。ただ新日本とかこっちの世界にまで口出しするじゃないですか、「アルティメットとかウチの若い者出せば簡単だ」とか。気に入らないですね。



現在フリーの郷野は「今は入りたいと思うところもないし」ということで、新宿スポーツセンターなどで練習をしている。「今一緒に練習してるメンバーで道場を一つ持てれば1番最高の環境になると思うんだけど。日本で1番レベルが高い練習ができるんじゃないかと思いますね。どっかスポンサーが付いてくれてればいいんですけど、誰かいませんか！」ということなので、興味とお金がある人は今すぐスポンサーとして名乗りを上げるべし。

——でも石沢選手や藤田選手ならいけると思いますけどね。

郷野　確かにそういう選手もいますけど、でも絶対プロレスとバーリ・トゥード系の試合は両立できないですよ。もしプロレスラーがやるんだったら、最低限のマナーとして腹を引っ込めなきゃダメですよ。でるじゃないですか、どれだけ練習してきたのかっていうのが、体に。しっかり練習してないレスラーがボクらのことをどうこう言うことは嫌ですね。

——昔はどうこう言うのは格闘家の方が多かった訳じゃないですか。今は逆に郷野さんも出てるシューティングとか勢いがあるから、それに対してレスラーも過剰に反応するってことがあるのかもしれないですけどね。

郷野　やっと正当な評価を受ける方向に向かってきたなと。まだまだ物足りないですね。シューティングとかも、まだ知る人ぞ知るっていう程度の世界だから。競技自体がまだまだメジャーじゃないし、もっと底辺を広げないとダメですね。さっきの話で言うとプロレスラーはバーリ・トゥードとかで負けても帰る家があるじゃないですか。オレらは負けたら終わりですから。評価も下がるし。その辺がズルイですね、プロレスラーは！

——プロレスラーも相当な練習をしてると思うんですけど、なんでレスラーはそういう風に言われるんですかね。練習の質が違うということですか？

郷野　何に対しての練習をするかですよね。桜庭選手や金原（弘光）選手もエンセンっていう血が入ってあそこまでなったと思うんですよ。もともと強くなる要素はあったと思うんだけど、それを引き出したのはエンセンの柔術のテクニックっていうのが多分にあると思うし。プロレス辞めてこっちの世界でやっていくっていうんだったら、本気で応援するんだけど。それにプロレスは負けても弁護されるじゃないですか。

——弁護というか、プロレスは敗者にも光が当たることがありますからね。またそれが魅力でもあるし。確かに負けても評価されることもありますからね。

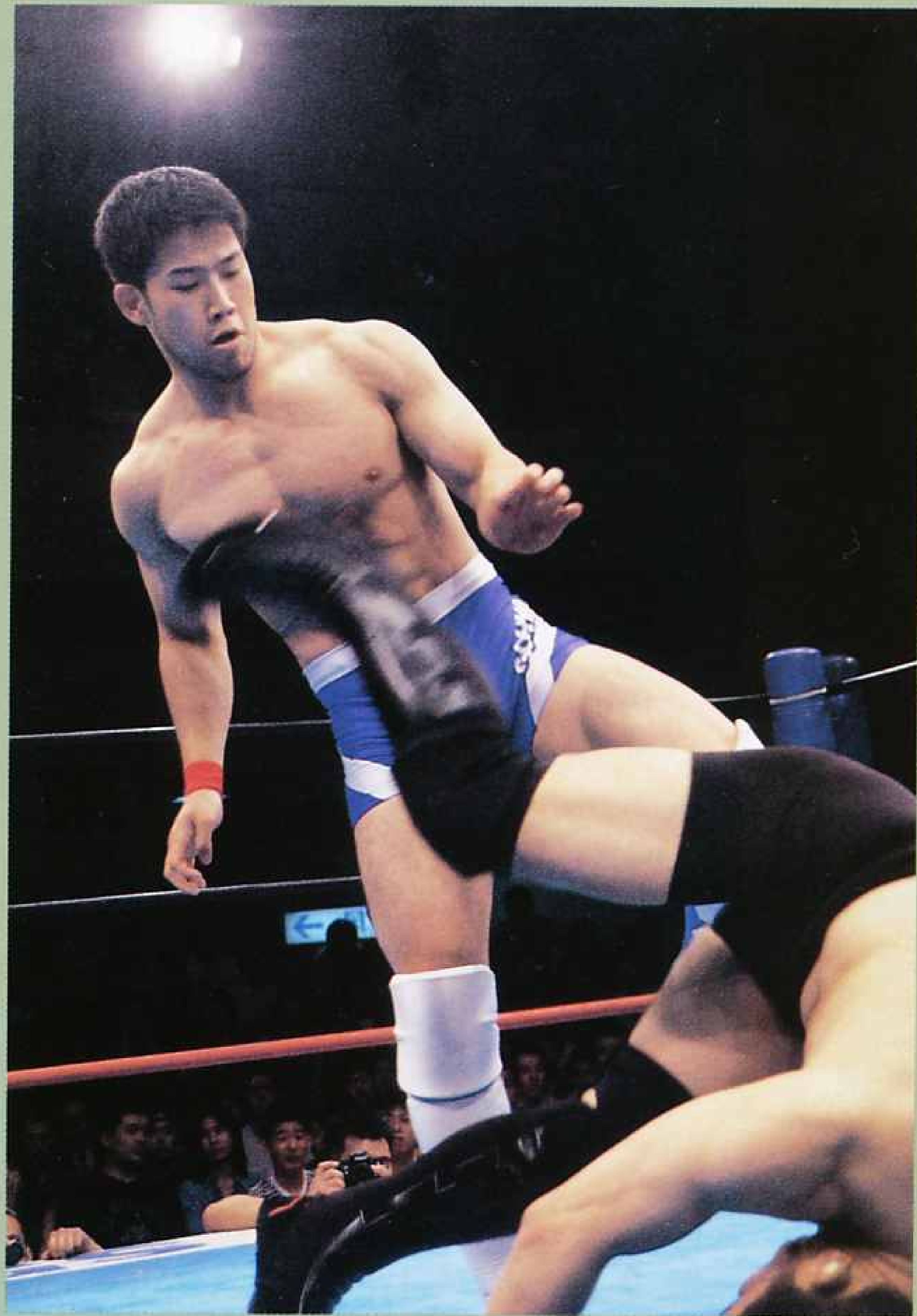
郷野　そういうとこありますよね、プロレスは。格闘技は負けたら何もないんですよ。負けたのにいい試合だったねって言われても全然嬉しくないですから。

——郷野さんも当然、格闘技一本で食っていきたいと思ってるわけですよね？

郷野　勿論ありますよ。その為にはやっぱり勝つしかないんですよ、ボクらは。

修斗に出られる範囲で、リングスとかパンクラスにも上がりたいですね。

プロレスと違って格闘家は負けたら何もないんです。勝つしかないんです。



98・6・20『リングス』での鹿糠智樹戦では一方的な勝利を収め、試合後、「勝って当たり前の選手に勝っても虚しいだけですね」と郷野らしい発言を残している。「リングスでは、田村選手とやりたいですね。やってて凄く楽しい試合になると思うんですよ。タイプ的に似てると思うんで。まあボクのこと知らない人は何言ってるんだと思うかもしれないですけど、ボクは互角かそれ以上にやる自信はあるんで」とのことだ。う～ん是非見たい！

——勝つことによって名を上げてスポンサーが付くのがベストなわけですかね。

郷野 そうッスね。オレなんかまだカスみたいなレベルですからね、ハッキリ言って。まだまだネームバリューがないですから、朝日さんやルミナさんと比べると。でも専門誌とかに載りだしたのはオレが一番早かったと思うんですよ。それがルミナさんに抜かれ、マッハ（桜井速人）君に抜かれ、ドンドン落ちていってますからね～。ハッハッハッハッ！

——まあ笑ってるぐらいだからまた抜き返す自信があるんでしょうね（笑）。

郷野 そうッスね。自信はありますね。体も大きくなってきたんで、そろそろ試合しようと思ってますけど。

——郷野さんが強いと思うプロレスラーって誰かいます？

郷野 桜庭さんとかバーリ・トゥードで勝ってる選手は強いと思いますけど。でもプロレスだけやってる選手で強い人って誰ですかね。

——金原選手とかは格闘技経験無しでプロレスラーになってますけどね。

郷野 あぁ。金原選手は強いと思いますね。テクニックがしっかりしてるし、打撃もちゃんとやってますよね。ビデオを見ても金原選手の試合だけはちゃんと見てますね。それとエンセンと練習してるっていうから、教わったものを試合で出すかもしれないから、それを盗んでやろうって思って見ちゃいますね。

——やっぱりエンセンさんは半端じゃなく強いんですか？

郷野 強いッスね。やっぱり血が違いますから。ああいう風に振る舞おうとしても無理ッスもん。育った環境が全然違うから。ボクがスパーリングした中で寝技が一番強いのがエンセンですね。

——パワーだけじゃなくテクニックでもですか？

郷野 テクニックもパワーも総合的に。押さえ込まれたら、もう何しようが逃げられないんですよ。関節もオレの先を読まれてるかなぁって気がしますね。

——その上キレたら手が付けられなくなりますからね。

郷野 性格っていうか血がそうだから、しょうがないと思いますよ。でもエンセンはホントにプロレスラー以上にいいキャラクターですよね。

——エンセンさんはホントに最高の「プロレスラー」だと思いますよ。

郷野 アレが地ですから。レスラーみたいにキャラクター作ってないですからね。試合より六本木で外人と喧嘩してる時の方がよっぽど怖いと思うけど（笑）。

——エンセンさんのケンカの現場を見たことがあるんですか？

郷野 朝日さんに聞いたことがあるんですよ。警官が来ても怯まないらしいですからね。「アナタ、逮捕してみなさいヨ!!」って言うらしいですからね（笑）。

——アハハハハハ！ 日本語で（笑）。今日はどうもありがとうございました。

【9月3日、高田馬場のレストランにて収録】

[インタビュー後記] ページ数の関係で郷野聡寛の人間像、プロ格闘家観、プロレス観がどれほど伝わったかわからないが、郷野曰く「格闘家は勝たなければ何もないんです」ということなので、物足りなかった読者は、今度の郷野の試合をゼヒ刮目して欲しい。プロとしてのポテンシャルの高さが、君にもきっと伝わるはずだ。さて次に上がるリングは、修斗？ リングス？ パンクラス？ それともバーリ・トゥード？ 期待して待て！



郷野聡寛【ごうの・あきひろ】1974年10月7日、東京都東久留米市出身。野球推薦で名門校に入るが上下関係に嫌気が差し退部。その後、コマンドサンボ、サンボ、空手など経験を積み重ね、格闘技の大会にも数々出場する。現在はフリーとしてバーリ・トゥードなどを想定した練習を行う毎日。打・投・極のトータルバランスは日本のライトヘビー級で一番と豪語し、また字の上手さは格闘家の中で1、2を争うと豪語する男でもある。

総合格闘技界の裏実力日本一

菊田早苗

プロレスがなくなればいいんでしょうけど(笑)



―「PRIDE.4」で松井駿介戦が決まりましたね。お互い出身は柔道ですけど、どういう試合になりますかね？

菊田　どうなんですかねぇ。小路（晃）戦では松井選手は結構激しくきてたんで、噛み合うとは思いますけどね。

―あの試合は見ててどう思いました？

菊田　ボクは面白かったですね、は～い。

―それは技術的な攻防がですか？

菊田　そうですね。マウント取ってから、すぐ逃げるテクニックとか、いろいろと。

―レベル的に見て、ハイレベルな攻防だったんですか？

菊田　レベルはぁ、ハイレベルだとは思わないんですけどね。ハッハッハッ！

―松井選手も柔道強いらしいですね。

菊田　柔道は弱いと思いますよ、全然。ハッハッハッ！

―豪快ですねぇ、菊田さんという人は（笑）。

菊田　松井選手は正直言って柔道は弱いと思いますけど、トータル的には強いと思いますよ。でも松井選手が「ボクはプロレスの一番下で、小路選手は格闘界で名前があって、ボクみたいな下の人間とこんなことやってるようじゃ、どうたらこうたら」とか言ってたんですけど。そういうのは言わない方がいいと思うんですよねぇ。要するにプロレス的には下なんだけども、自分は強いとハッキリ言えばいいじゃないかって思うんですよ。ホントのこと言えよと！

―はぁ、そうですか。このカードを最初に聞いたときの率直な感想というと？

菊田　秘密！　内緒！

―秘密！　内緒！

菊田　でも勝ったら桜庭選手とかの名前も上げていくつもりだし、高田道場の選手が負けるとなると、そうせざる得なくなると思うし。キッチリ勝ってアピールしたいですね。ハズさない程度に（笑）。

―アハハ！　自信あるみたいですね。

菊田　まあやってみないとわかんないんですけどね（笑）。



98・3・15「PRIDE.3」。菊田はヘンゾ・グレイシーと対戦し、ポジションは取らせなかったものの、チョークでタップ。当日のパンフレット内での勝利者予想では、ほぼ全員がヘンゾの勝ちというものだった。菊田は、「つまらない試合」と認めつつ「みんなオレが負けると予想して、しかも1ラウンドでヘンゾの勝ちっていう人が殆どだったんですよ。そのくせ50分闘ったらそれはそれで文句言われますからね。格闘技マスコミもわかってないです！」と不満を露にした。

総合格闘技界の裏番長・菊田早苗は、これまでマット界をひたすら彷徨続けてきた。その実力を十分に発揮できる環境に恵まれなかったとも言えるだろう。しかし、ここ最近の総合格闘技界への熱視線により、ようやく表舞台へとその名が挙がるようになった。プロレス界ともただならぬ因縁を持つ菊田がバーリ・トゥードという舞台で再びプロレスラーとリンクする日は、もうすぐそこまで来ている。その豪快な笑い声の奥底に潜む菊田のプロ格闘技観に耳を傾けろ！

——豪快なわりには謙虚ですね（笑）。でもいろんな意味でこの試合は重要になりますよね、菊田さんにとって。

菊田　重要ですよね。ヘボイ試合したら、もう終わりですよね。フッハッハッ！

——ヘボイ試合（笑）。菊田さんといえば『トーナメント・オブ・J』で二連覇して一躍脚光を浴びたわけですよね。

菊田　脚光浴びたんですかね（笑）。プロレスファンとか知らないでしょ。『トーナメント・オブ・J』って言ったって。

——でも高阪（剛）選手が優勝したり、他にもプロレスラー出てたりしたから結構知られてると思いますよ。96年（3・30）は優勝する自信はあったんですか？

菊田　あるようなないような。イーゲン（井上）って強いって言われてるけど、前の年に高阪選手とやってどっちも取れなかったのを見て、まあ高阪選手の柔道はそんな凄いってわけじゃなかったから、引き分けには持っていけるんじゃないかなとは思ってたんですけど、は〜い。

——その後96年（7・7）の『バーリ・トゥード・ジャパン』に出てからは、しばらく試合からは遠ざかるわけですけど。

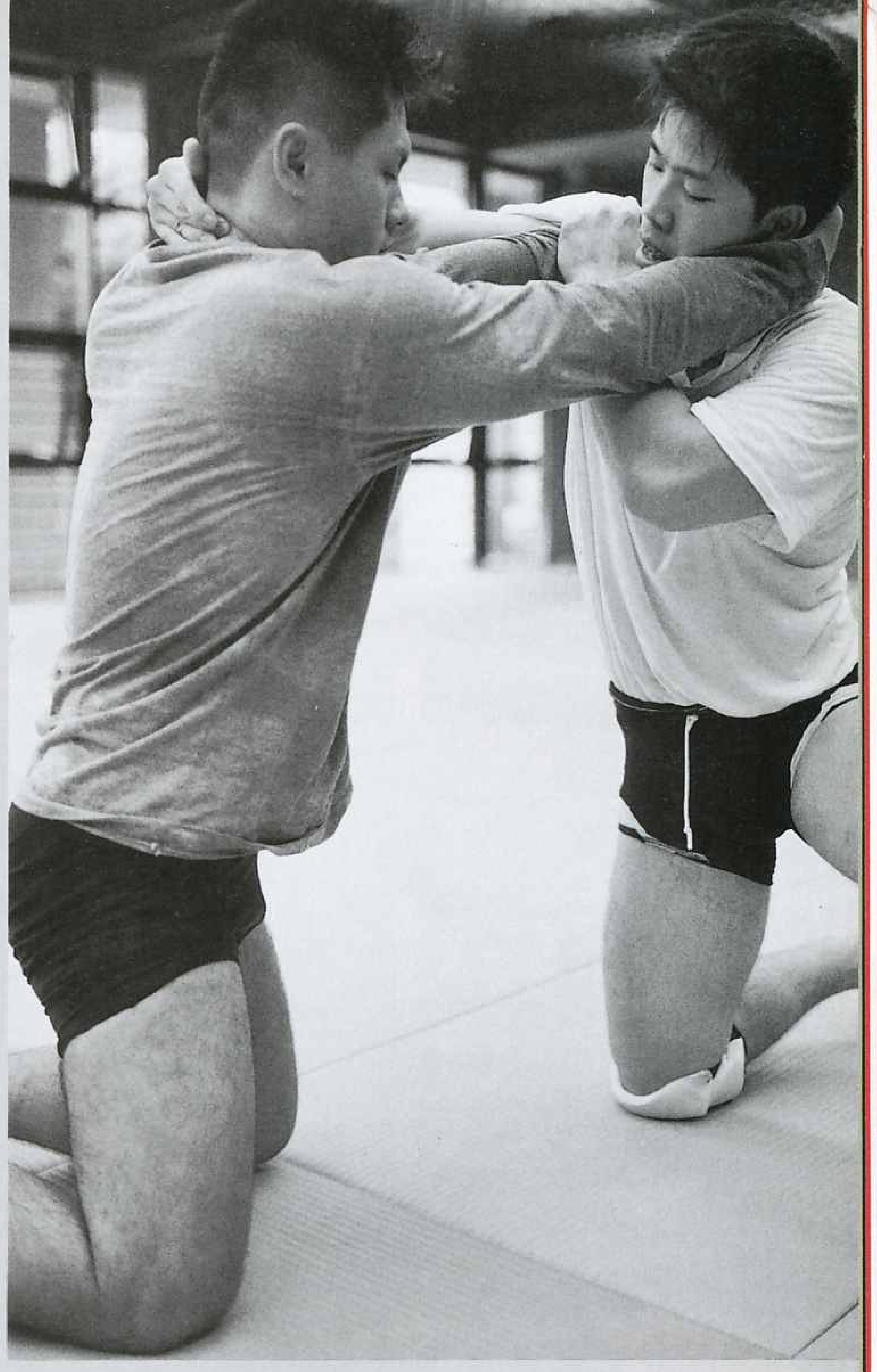
菊田　ちょっとホサれてる時期があって（笑）。それでリングスさんにお願いして出してもらったんですよ、は〜い。

——最近はリングスには上がってないですけど、もう声は掛からないんですか？

菊田　話も来ないし、もう扱い的にこういう扱いなんだなって……。それとあのルールを体感して、ちょっと合わないっていうのがよくわかったんで、もう出ないと思いますね、は〜い。

——どう合わなかったんですか？

菊田　要するに、勝負は一回きりでいいと思うんですよね。それをたまたまロープの近くにいたからエスケープができて、次に逆転されちゃうってのが、何でなんですか？って思っちゃうんですよ。でも前田（日明）さんにはホントに感謝してますね。どこの団体も怖がって出してくれなかったところを「出ればええやん」って感じで出してくれたんで。



新宿スポーツセンターでスパーリングをする菊田と郷野。ここには、佐藤ルミナ（K'z FACTORY）、桜井速人（総合格闘技木口道場）、入江秀忠（キングダム）など他にも様々な流派の実力者が集まり、日々練習に明け暮れている。通称"菊田軍団"として、総合格闘技系では最高峰のレベルを誇る練習をしていると専らの評判である。U系の某選手もここで練習をしているらしい。あくまでも噂だが……。

——菊田さんが一番最良だと思うルールってどんなルールなんですか？

菊田　バーリ・トゥードですね。小学生の頃から喧嘩に近いものをしたかったんですよ。小さい頃、初代タイガーマスクとかを見て、ああいう試合がバーリ・トゥードだったんですよ、ボクにとって。

——タイガーマスクがバーリ・トゥードだったんですか、菊田さんにとって。

菊田　アレこそがリアルな闘いだと思ってたんですよ。最強の格闘技だと思ってたワケですよ。それで、最強の技だと。

——ローリング・ソバットとかが？

菊田　は〜い。今は最強を決めるのに相応しいルールっていうのはバーリ・トゥードじゃないですか、結局。でも最近パンクラスのルールが変わって、U系の中では一番バーリ・トゥードに近いルールになったんですよ。アレは興味がありますね。いいルールだと思いますね。

——でもバーリ・トゥードも結局客が入らなければプロ格闘家としては喰っていけないワケですよね。それにアメリカとかでは暴力性が強いとかなって興行自体できないところも多いし。日本ではこれからどうなっていくと思います？

菊田　グレイシーみたいに無制限とかの試合を続けたら客は入らないでしょうね。そういう意味で『PRIDE.2』のヘンゾ（・グレイシー）戦はプロとしてダメでしたね。観客の眼を意識しないでやっちゃいましたね〜。あの試合は客に野次飛ばすなって言っても無理ですよ。

——自分で見てもつまらなかったと？

菊田　つまんないです（キッパリ）。でもあの試合みたいに膠着するのは、両者がレベルが低いか、レベルが高いかどっちかなんですよ。あと強い人と弱い人が闘ったら派手な試合になるじゃないですか。そういう意味では残念ですよ、あの評価は。時間無制限は良くないですよ。30分の方がいいッスよ、客を満足させるには。

——そのぐらいの試合時間だったら十分面白い試合を魅せる自信があると？

菊田　あります、あります、は〜い。

——菊田さんが望むのは、バーリ・トゥードの世界がもっと認知されて、それと同時にファンやマスコミの見る眼も養って欲しいということなんですかね。

菊田　そうですね。もっと認知されて……、どうすれば認知されるんですかねぇ〜（笑）。わかんないですね。プロレスがなくなればいいんでしょうけど（笑）。

——ゲゲッ!? プロレスがなくなればそのままその観客がバーリ・トゥードに流れていくと思うんですか？

菊田　逆にどう思います、それは？

——プロレスはプロレスで違う魅力がありますから。もちろん同じベクトルの魅力もありますけど。でもプロレスがなくなったからといって、そのまま観客もスライドするとは思えないですね。

菊田　だったら全日本、新日本、それとまあ、みちのくみたいなのが残って、U系がバーリ・トゥードの中に入ればその

ロープに振ってるプロレスラーが格闘家と名乗って欲しくないですね

可能性はあると思いますね。

――菊田さんの中ではプロレスと格闘技は全く別のモノになるんですか?

菊田　だから本来はそういうモノであるべきだったんじゃないかなとは思うんですけどね。プロレスラーでも外に出て勝った髙橋（義生）選手と桜庭（和志）選手、高阪選手っていうのは認められるんですよ。でもそこで必ず出てくるのが、そこの団体のトップの選手はもっとバーリ・トゥードでも強いという幻想なんですよ。もうそれはいい加減やめましょうと。その選手が強いんであってトップの選手が強いというワケではないんだぞと。それはハッキリ言っておきたいですね。

――確かに勝っている選手の上には、チャンピオンとかランキングが上の選手がいるんで、そう思う人もいるでしょうね。

菊田　ボクはパンクラスでは髙橋選手が一番強いと思うんですよ。

――それはどういうところを評価してるんですか?

菊田　パンクラスではよく負けるんですけど、なんでかなぁ。もっと強いと思うんだけどなぁ、髙橋選手は。でもバーリ・トゥードならレスリングの力が発揮できるんで。やっぱりレスリングが一番重要だと思うんですよ。レスリングができて寝技ができるか、レスリングができて打撃ができるか、どっちかじゃないと強いとは言えないですね。

――菊田さんが今、単純に強いと思うプロレスラーって誰になりますか?

菊田　今言った3人が強いんじゃないですか、は〜い。でもプロレスラーっていうより、あの人たちはアマチュア時代にミッチリやってた人じゃないですか。ある意味プロレス界のトップの人ですから、それぐらいやって当然だと思うんですけどね。プロレスは最強だっていう人多いけど、本当に強い選手ってボクはそんないないと思うんですよ。例えば小島（聡）選手と中西（学）選手を比較したら格段の差で中西選手が強いと思うんですよ。だけど実際派手で人気があるのは、小島選手であり天山（広吉）選手ですよね。

――人気はありますね。何てったって「いっちゃうぞ〜」ですからね（笑）。

菊田　でもあの二人は、ボクらがやってる闘い方ではあまり強くないと思うし。藤田（和之）、中西の方が絶対強いと思いますね。確かに小島、天山は試合の見せ方は上手いと思いますけどね。それだけであれだけ客を集めちゃうじゃないですか。ロクな死に方しないんじゃないかと、そういうことなんですよ。

――ロクな死に方しないってまた凄いこと言いますね（笑）。

菊田　でもファンを裏切ってると思いますよ。ファンは真剣に見に来てる人がいるんで。人間的にちょっとバカにした商売じゃないかなぁってボクは認められないです、そこは。プロレスはプロレスってみんなわかってて来てるからいいんだぁとは思わないですよ、は〜い。

――プロレスラーこそが最強だっていう言い方をされるのが気に入らないところなんですかね、格闘家にしてみれば。

菊田　まぁ〜〜、ひと言で言えば宗教ですよ。騙して連れてきて金取って、それはちょっとよくないなぁって思いますよね。やっぱりプロレスを格闘技と言うのはおかしいですよね。あれっ言わないんですかね、プロレスは格闘技って。

――プロレスは格闘技ですよ。ていうかそうあるべきだと思いますね。

菊田　でもなんの為にやってるのかなぁってホントに悩んじゃうんですよね。ボクはプロレスに裏切られたことがありましたから、14歳ぐらいの時に。かなりショック受けましたからね。何を目指したらいいんだろって思いましたからね。

――裏切られたってどういうことですか?

菊田　ある選手にプロレスの裏話をいろいろと聞いたんですよ。タイガージムで。

――やっぱり佐山さんですか（笑）。

菊田　いや、ある選手に。●●キ●さんです。ハッハッハッハッ！　●●キ●さんが最初に入ったプロレス団体をやめた時ってそれが理由なんですよ。ボクももの凄いショックを受けましたからね。

――●●キ●選手って今は典型的なプロレスラーなんですけどね（笑）。

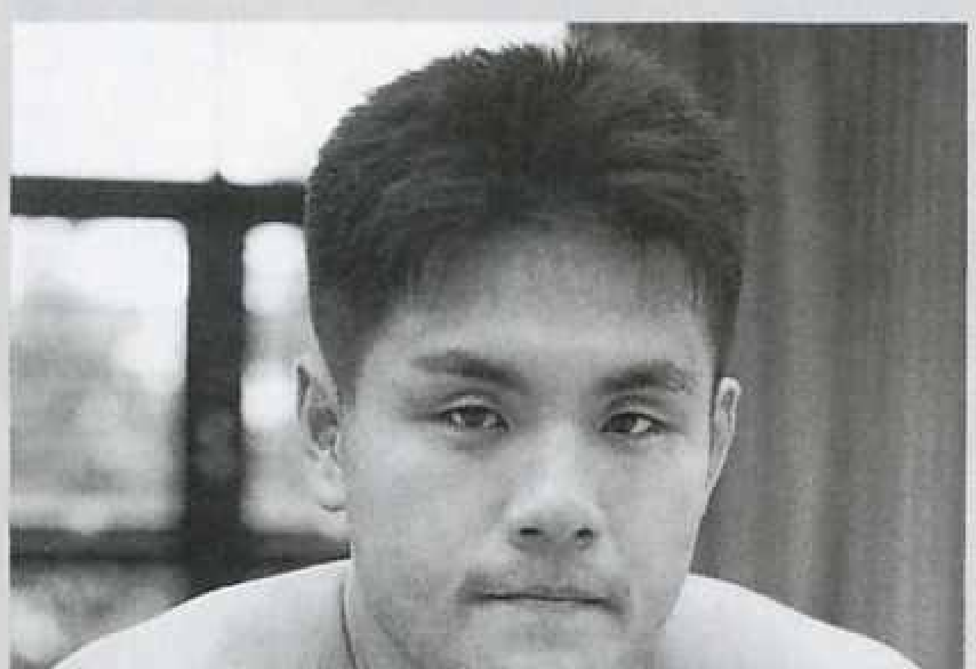
菊田　不思議ですよね。割り切っちゃったんでしょうね。でもボクはU系団体に対してはどうこう言う気はないんですよ。ただロープに振ってるプロレスラーが格闘家と名乗って欲しくないですね。

――ロープに振ってるプロレスラー！

菊田　まだね、プロレスはプロレスで、ホントはオレらは強いんだぞっていうのはいいんですよ。

――それじゃあ何が嫌なんですか?

菊田　異種格闘技戦とかああいう試合をプロレスのリングでやるっていうのが気にくわないんですよ。普段頭打ったり大変なことをやってるっていうのは凄い評価できるんですよ。でも格闘技戦とかに、他の競技の選手を連れてきてプロレスをさせるっていうのは、それはいかんじゃないですかね。



菊田早苗【きくた・さなえ】1971年9月10日、東京都練馬区出身。小学6年の頃にスーパータイガージムに入門。中学から大学まで柔道に明け暮れる。新日、Uインターに入門するも、諸事情で断念。理想を追い求めオーストラリアのスタン・ザ・マンのジムに入門。その後、総合格闘技系の大会で大活躍し一躍名をあげる。寝技とともにピアノを弾かせても相当なテクニシャンであり、更に今年はシューティングへの参戦も狙っている。

もういい加減、どっちが強いかハッキリさせようじゃないか！

―プロレスラーはそんなにイメージ悪いものなんですか、格闘家にとって。

菊田　要するに、空想の世界はもうやめようじゃないかと、もういい加減に。どっちが強いかハッキリさせようじゃないかと！　そういう感じですね（笑）。

―それじゃあ、菊田さんが今闘いたい選手っていったら誰になるんですか？

菊田　ん～、桜庭選手ですかね。いい試合になると思うんですけどねぇ。まあボクのこと知らない人が聞いたら、なんだお前はって言うかもしれないですけどねぇ。でも、今度松井選手とやるんですけど、桜庭選手の方がプロレス的に言えば格上じゃないですか、松井選手よりも。

―確かに桜庭選手の方が上ですね。

菊田　だけど、もし二人が闘って桜庭選手が秒殺するかっていったら、そんなことないと思うんですよ。30分時間切れだって十分有り得ると思うし。だからって同等って言ってるワケじゃないですよ。

―いざ勝負の場になれば、思われているほど力の差はないということですか？

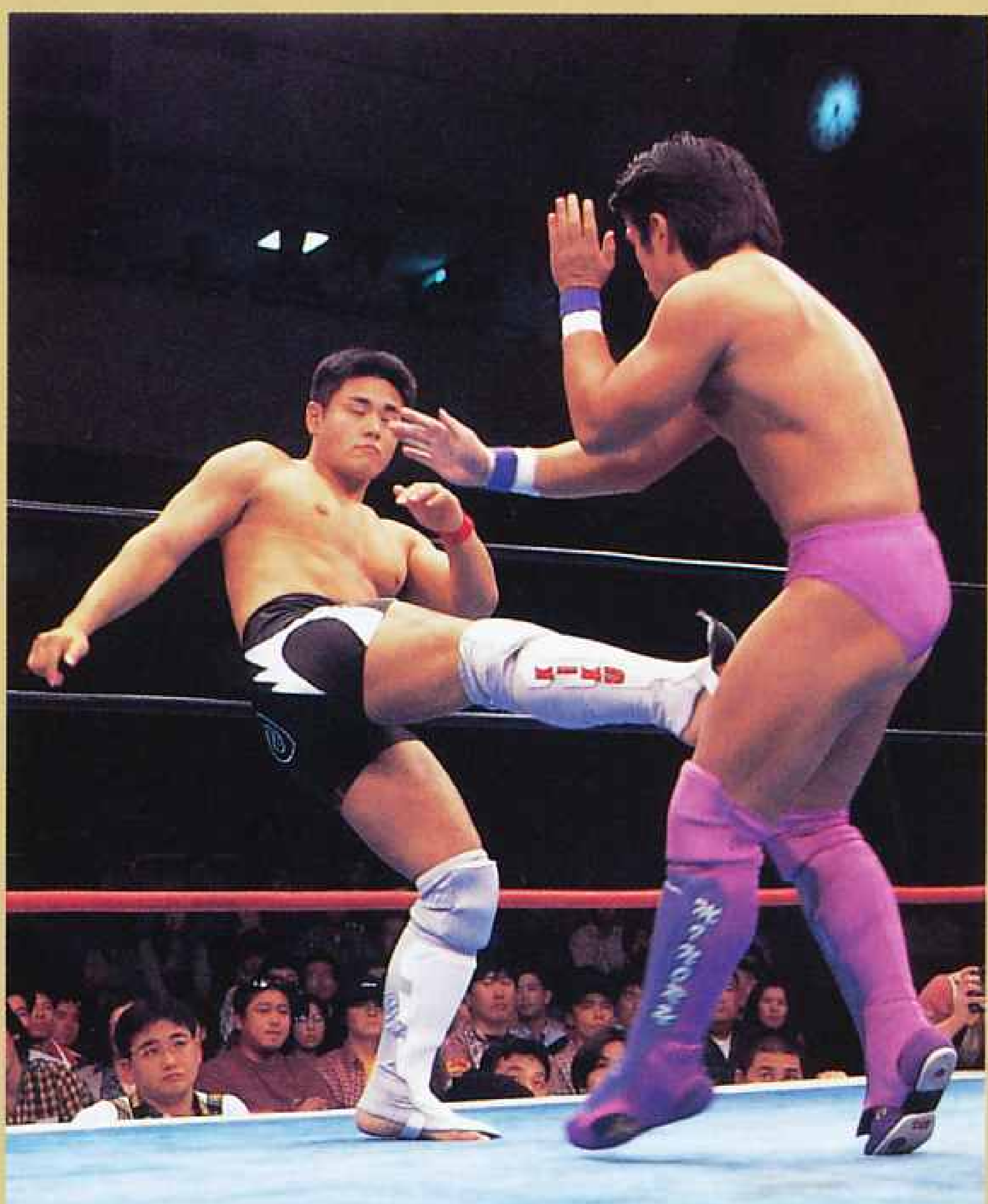
菊田　そうなんですよ。でも桜庭選手の方が凄く強いってイメージを持ってるプロレスファンって多いと思うんですよ。

―それはそうかもしれないですね。

菊田　そういうのがちょっとねぇ。でもやりたいですよ、桜庭選手とは。それで外人だったらフランク・シャムロックとやりたいですね。

―フランクに勝ったらプロレスファン、格闘技ファン両方から評価されますからね。

菊田　そうですよね。フランクは言われてるほど強いとは思わないんですよ。



97・10・14「リングス」で当時UWAミドル級王者だった田中稔を破る。「負ける気は1％ぐらいしかなかったですけど、やって良かったです。ルチャのチャンピオンには勝ちましたからね。ハッハッハッ！」豪快だ！

―そうですかぁ。ちなみに菊田さんは食事制限とかはしてるんですか？

菊田　してます、してます。パンクラスの選手の軽い版です。ハッハッハッ！

―ハイブリット・キン肉マンボディーですね（笑）。最後に何かありますか？

菊田　ボクのことを強いと言ってくれるコアなファンもいるんですよ。

―それはよく聞きますね。日本の総合格闘家の中では一番強いんじゃないかっていう人もいますからね。

菊田　でもボクはまだ実力を出しきれてないと思うんですよ。相手に恵まれてないのもあるし。ただヘンゾには結局負けてるし、あんまり大きいこと言えないんですけどね。ハッハッハッハッ！

―次にやったら勝てると？

菊田　まあ一回負けてるから、次はないでしょうけどね。ハッハッハッハッ！　でも自信はあるんですよねぇ～。寝技とかは特に自信を持ってますから。まだまだこんなもんじゃないというところを見せてやりますよ。ハッハッハッハッハッ！

―最後まで豪快ですねぇ、菊田さん。どうもありがとうございました。

【9月11日、千駄ヶ谷のモスバーガーにて収録】

[インタビュー後記]　総合格闘技界の実力者、菊田早苗は実に豪快な男であった。自分で言うのもおこがましいが、菊田の豪快さが十分に伝わったインタビューになったと思う。半人前だったボクも自信を深め、そのゲラを見て満足げにほくそ笑んでいた。と、その時、編集長の山口日昇が通りかかったから、ボクはこう言った。「次は外人のインタビューやりたいッスね～。ちっと、マーク・ケアーかヒクソンやっていいッスか？」「なにをこらぁ、ふざけろよぉ、菊田と郷野はもっと面白いはずじゃ、このボケなすチンボ!!」その後、愛のない鉄拳制裁が延々と繰り広げられたのだった。助けて、菊田さん、郷野さん!!



全女30th記念企画

ダンプ松本 interview

ダンプ・パニック!! PART 2

構成／坂井ノブ
interview by Nobu Sakai
撮影／松永源さん
photographs by Gensan Matsunaga

前号では初期ダンプ松本の苦労話を中心にお届けしたこのインタビュー。イジメ、嫉妬、嫌がらせなど、女のいやらしい部分がリング内外で渦を巻く、古き良き女子プロレスの話にギブアップ寸前の読者も多かったはず。今回は、女子プロ史上最凶の軍団「極悪同盟」として暴れ回り、一世を風靡したダンプにスポットを当ててみた。悪役とはいえ、誰もが知ってるスター選手のダンプは世間や観客に対して、いかにして自分のイメージを突き刺していったのか？　心して聞け！

試合中に物を投げられても
ヤジを飛ばされても構わない！
新車に傷をつけられたのは嫌だったけど

―ダンプさんの頃も、新人はかなり生活が厳しかったんじゃないですか？

ダンプ 飛鳥と2人で2万円のアパートに住んでたの。

―2万円！ よく見つけましたね。

ダンプ うん（笑）。風呂なし、電話なし、カーテンなし。

―カーテンもないんですか（笑）。いまの日本でそんな苦労話、なかなか聞けないですよ。

ダンプ その頃、デビル（雅美）さんから1万円で「私のベッド買え」って言われてね（笑）。「家賃の半分をベッド代には使えません」って断ったんだけど、先輩に言われたら買わなくちゃいけないんで買いましたよ。

―ほとんど押し売りですね（笑）。

ダンプ 貧乏だから、ご飯も食べられない状態よ。旅（巡業）に行くとご飯がつくから嬉しくって（笑）。

―レスラーなのに飯を食べられないのは辛いですよね。

ダンプ ケンタッキーのマイパックがそのころ400円ぐらいで、タクシーの初乗りが360円だったんだけど「タクシーで乗って帰る？」「だけど、あとちょっと出せばマイパックが食べられるよ」って言い合ってマイパック1つを3人で食べた覚えがあるよね（笑）。チキンなんか「水で洗ったんじゃねえか」ってぐらいキレイに食べてたよ（笑）。ホント貧乏だったね。

―楽しいでしょう、貧乏もそこまでいくと（笑）。

ダンプ だから、いろいろ知恵を使ったよ。昼間に事務所の窓の鍵を開けといて、夜になってみんなでそ～っと入って電話しちゃったり、冷蔵庫の中を漁ったりしてたよ（笑）。

―サバイバルですね。

ダンプ チームワークはよかったの。だから、1人の先輩が嫌だったら、やっつけようっていう作戦を考えたりとかするわけよ（笑）。そういう団体のチームワークが良かったからね。だから、辞めてからでも仲間意識が強いんだと思うんだ。堀田（祐美子）たちはウチらが一番人気があった時に入ってきた子たちだから、いい思いをしてるよ。あの子たちは毎日、大入り袋を貰ってたの。いまは大変だと思うけど（笑）。自分たちは客が入ってない時期に入門して、頑張って客が入るようにしたんだから。

―そういう時代を経て、過激な反則技で一時代を築くわけですけども、いままでの女子プロレス界であそこまでやった人っていうのはダンプさんぐらいしかいないと思うんですよね、イメージ作りとかも徹底的でしたもんね。

ダンプ いまの人とはプロレスが違うからね。自分たちの時はもう何にも技とかしないで、ただ暴れてただけだったから（笑）。いまの子はブルちゃんにしろ、アジャにしろ、凶器よりも技をちゃんとやってるから試合の雰囲気も方向性も違うんだよ。

―じゃあ、なぜダンプさんはああいうスタイルになっちゃったんですか？

ダンプ ニューヨークでマジソン（・スクエア・ガーデン）に上がってからかな。最初は凶器で竹刀とか使うとベビーフェースの上のオバサンが3人いてうるさかったの（笑）。

―ジャガー（横田）、デビル（雅美）、ミミ（萩原）ですか？

ダンプ ジャガー、デビル、ジャンボ（堀）かな。それに子分がついて（笑）。「悪役は目立たなくていい」って文句を言ってくるのよ。

―ほぉ、ひどいですねぇ。

ダンプ それで私が会社に「じゃあ、やらない」とか言ったら「給料払ってるのは俺たちだ。あいつらに使われてるんじゃないんだから」って言われて、それから開き直ったね。「そうだ。こいつらに給料もらってるんじゃねえや」って（笑）。「こっちが試合でいじめればお前たちの方がファンがつくじゃねえか」って感じだね。で、マジソンで試合したら、あそこ広いから後ろの方が見えなくなるの。そしたらオーバーアクションするしかないのよ。そこでやるようになって、東京に戻ってきてそれと同じようにオーバーアクションでやったら「ワァ～」って歓声を浴びるようにようになってきたの。モヒカンにして帰ってきたし（笑）。

―根底にはアメリカで培ったパフォーマンス精神があった、と。

ダンプ うん。見せるっていう部分ね。

―極悪同盟というのは早すぎたアメプロだったんですね。

ダンプ 最初はブルちゃんも一緒にアメリカに行く予定だったのに三ババが反対して、結局クラッシュと自分だけで行ったのね、そのときは試合なかったんだけど。で、2回目の時はブルちゃんもコンドル（斉藤）も一緒に行くってことになったの。

―それは試合で行くことになってたんですか？

ダンプ うん。コンドルは絵をやってるからロンドンにも行きたいって。で、クラッシュはニューヨークに行きたがって。自分たちが「両方行きたい」って言うから、会社は「じゃあ、いろんなところを行こう」ってことになって（笑）。

―世界を一周して試合しようと。スケールでかいですねぇ（笑）。

ダンプ だけど、また三ババが出てきて、「それは許さない」って。結局、その時はコンドルが行けなかった。

―三ババのせいで（笑）。

ダンプ 口出すなって感じよね！



――じゃあ、現場は三ババが凄い発言力を持って仕切ってたんですね。

ダンプ　自分がテレビとかいっぱい出るようになった時に、三ババと子分たちが「ダンプに極悪とか、そういうのをやめさせろ」って会社に言いに行ったんだって（笑）。だけど、そこで「やめるんならお前たちがやめろ」って会社が言ってくれたんだ（笑）。

――三ババよりもダンプさんの方を会社が評価したってことですね。

ダンプ　三ババはもう、下り坂だから（笑）。三ババって書かないでね（笑）。

――昔は、女子中高生ファンが中心で会場一体となって応援してたじゃないですか。クラッシュを応援して極悪にはブーイングしてという。いまはそういう一体感がなくなってきてると思うんですけど。

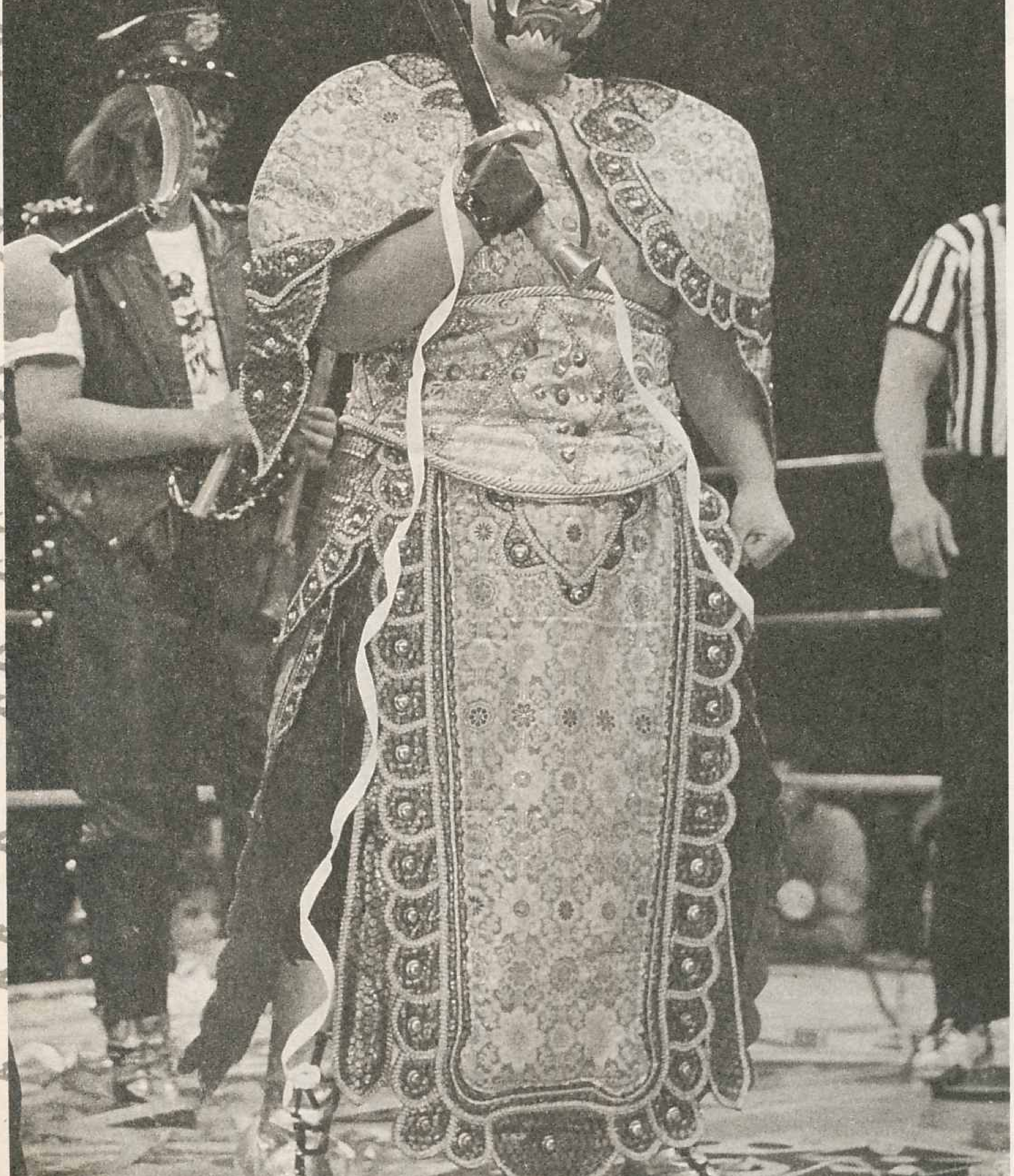
ダンプ　いまは見てないから全然わかんないけど。

――あの頃は過激なファンが多かったですよね、相当嫌がらせとかあったんじゃないんですか。

ダンプ　試合中に物を投げられるのもヤジを飛ばされるのも全然いいのよ。ただ、買ったばっかりの車をギィーってやられるのは嫌だったね。

――10円玉攻撃だ（笑）。

ダンプ　新車のフェアレディーZで会場に行ったらギィーってやられて。それに懲りて、次にバイク通勤にしたらパン



なにがどうなってこうなったのかはわからないが、とにかくひたすら悪のイメージを追求しまくっていたダンプ。現在、全女をかき回しているＺＡＰもこの域に達するにはあと10年かかる。

フォークで刺されたから ハサミで相手を刺してやった。ストレス解消になったよ（笑）

クさせられて（笑）。挙げ句の果ては自転車乗ってたよ（笑）。

——どんどんランクが下がっちゃってますね。

ダンプ　そうすると街の中を走ってても「タイヤがパンクするぞ」っていうヤジが飛んできて（笑）。

——アハハハハ！　でも、それもひとつのスターの証明ですね。

ダンプ　自宅のドアには「死ね！」って書かれたりとかね（笑）。その頃はよく工藤（めぐみ）が遊びに来てて、1人捕まえて学校に電話して文句言ってくれた。

——さすが邪道姫（笑）。いまのファンには、あの頃の熱さがない原因って何ですかね。

ダンプ　1人のメジャーな選手ってのがいないんだよ、きっとね。あと団体多いんだ。だけど客入れなきゃしょうがないからね（笑）。

——そういう点でいうとダンプさんなんか超一流ですよね。

ダンプ　そんなことないよ、クラッシュがいたからだよ（笑）。

——でも、クラッシュもダンプさんがいたから光ってたと思うんです。

ダンプ　だからお互いさまなんだけどね。そういうのがないんじゃないの、いま。もちつもたれつなのにそれがないのよね、きっと。

——そういえば、ダンプさんは1回丸坊主になったことがありますね。

ダンプ　髪切りで2回目に負けた時にね。「もう剃っちゃえ！」って剃っちゃった（笑）。あんな怖い顔してるのを会社はバカだからTシャツを作っちゃうんだよ（笑）。

——丸坊主ダンプTシャツを作ったんですか？　すごいセンスしてますね。

ダンプ　売れるわけないよね（笑）。うちにあるけど、怖いよ（笑）。

——非常に貴重ですよ（笑）。

ダンプ　気持ち悪いって（笑）。

——あの頃の試合ではハサミで腕を刺したりとかしてましたよね。

ダンプ　うん（笑）。私がフォークで刺されて、お返しにハサミで刺してね（笑）。あれは痛かったよ（笑）。腕からフォークがブラ下がってたこともあるんだから！　病院行っても穴が4つ空いてるだけでしょ？　だから、縫うことができなくて。痛みで一日夜寝れなかった。その次はこれ（と眉間の傷を指さす）。これはアルミ缶でエグられたんだ（笑）。2針縫った。

——そういうことされても、仕方ないかなっていう感覚だったんですか？

ダンプ　仕方ない？　やられたら、それ以上のことをやり返そうと思ってただけだから。フォークを刺されたら、それ以上のことしてやろうと思ってハサミで刺しただけのことだし（笑）。

——すげぇ！

ダンプ　1発やられたら2発返そうって思ってたから（笑）。ハサミも痛かったと思うよ（笑）。刺したあと、先にグジュグジュってした脂肪があったもん（笑）。

——うわぁ。そんなことばっかりしてる生活に嫌気とかさしませんでした？

ダンプ　全然なかったね。ストレス解消になるよ（笑）。悪役同士でいる時は楽しかったし（笑）。で、その頃は試合で当たらなければ他の人と会わなくてすんだんだよ。バスも違うし。

——全女の天下を取れたなって思いませんでした？

ダンプ　そういうことは思わなかったな。一度、デビルさんと自分が喧嘩した時に……。

——いいですねぇ。ホントに物騒ですね、昔の全女は（笑）。

ダンプ　ブルちゃんがボコボコにやられちゃった時に助けに入ってデビルさんと喧嘩になっちゃった時にデビル派とダンプ派に分かれて大喧嘩になってね。会社は「好きな方に入れ」って言ったらベビーフェースの子がほとんど、ウチらのバスに来てくれた時はうれしかった（笑）。

——下の選手の信頼は勝ち得ていたわけですね。

ダンプ　ただ、移動する時が狭くて（笑）。寝れなくなっちゃったから、2日間ぐらいして「もう帰った方がいいよ」って帰らしたんだけど（笑）。

——寝れないから（笑）。女子プロの軍団抗争って、ホントに選手同士の対立がそのままリング上に出るから面白いですよね（笑）。当時は、いろいろマスコミの取材も多くて「八百長なんじゃないの？」みたいなきわどい質問ってあったと思うんですよ。

ダンプ　よく言われたね。そういう人は見にこなくていいと自分は思うよ。それに「台本があるんでしょ？」とか聞く人もいるんだけど、書く人も大変だし、それを覚えるのも大変だろってことを思わないのかなって不思議に思うんだけど（笑）。ただ、一応見せ場があるから相手のいい所は引き出さなきゃいけない。

——受けの強さを見せるということですね。

ダンプ　まあ、それ以外は悪役が握ってるわけだから。だから、自分の場合は最初に見せちゃって、そのあと攻めっぱなしにしたりした方が多かったんだけど。それ以外は本気でやってるし。

——それでも納得しないで「なんでロープに飛ばされ返ってくるの？」とか。

ダンプ　そういう人は一度、飛ばされてみたらいい。よくテレビとかで、お笑いの人が道場にくるでしょ。で、ロープ

全女30th記念企画

に投げてあげるんだけど、投げた力でまず転んじゃう（笑）。だから、一度やってもらわないとわからないんだと思うんだよね。

――でもね、ダンプさんが書いた『どんとこい芸能界』って本があるんですが、この中で「プロレスはよく芝居だ、演技だとか言われるよね。確かにストーリーに粗筋は決まってることが多いけど」って書いてあるんですけど（笑）。

ダンプ ウソォー！ 読んでないからわかんないけど（笑）。まあ、あらすじを決めてくれた方が楽だけどね、そんなもんあらかじめ決めてたってできないよ（笑）。

――まあ、そういうプロレスを八百長視する人とかレスラーをナメてる人たちを、相当殴ったりしてきたと思うんですが。いかがですか？

ダンプ 客はひどかったよね。ものを投げたヤツは必ず捕まえるの（笑）。1階席のヤツは絶対に捕まえて控室に持ってきてた（笑）。

――持ってきた（笑）。モノ扱いですか（笑）。

ダンプ 缶を投げたってわかると「お前立ってろ！」って言ってこっちから缶を投げてあげるの（笑）。1人、ちびちゃった子がいたよね（笑）。あと椅子投げられた時は頭に来て、捕まえに行ったら腰抜かしちゃったこともあった。許してあげたけどね（笑）。

――本当に客とも闘ってたんですね。

ダンプ でも、「ダンプは手を出すな」って会社から言われてたけどね。だいたいクラッシュのせいにしちゃったりしてから（笑）。クラッシュも控室で殴ったりしてるのよ。

――そうだったんですか！

ダンプ まあ、ウチらも捕まえてきて殴ってたけど（笑）。1回だけブルちゃんがヌンチャクで殴ったら鼻が折れちゃったのね（笑）。

――素人をヌンチャクでブン殴ってたんですか！ ホント極悪ですね（笑）。

ダンプ そしたら仲間が警察を連れて来ちゃって大変だったよ。だから、「クラッシュがやったんだと思います」って言って逃げたよ（笑）。クラッシュがサインしてあげたら許してくれたらしいけど（笑）。まあ、ほとんど客には手を出さないけどね。

――いや、そういう素敵な話が聞けただけで十分です。あの当時、ダンプさんの衣装は誰が考えてたんですか。

ダンプ 自分だよ。化粧もバンドのKISSを参考にして。それに当時、パンクファッションが流行ってたから取り入れて（笑）。それに暴走族が皮ジャン着てたから、それも着て。あとはチェーンとかも持ってね。

――当時の悪のイメージを全部詰め込んで（笑）。あと、歌も出していましたよね。坂本龍一教授作曲で（笑）。

ダンプ いい曲なんだけど、売れなかったね（笑）。

――問題はなんだったんですか。

ダンプ 音痴だから（笑）。だって、歌い出しがわかんないんだもん！ あと、歌う時は声が可愛くなっちゃうの（笑）。

――それはイメージ狂っちゃいますね（笑）。有名になりたいっていう野望があったんですか。

ダンプ 全然なかった。お金持ちになりたかっただけだから（笑）。でも、お母さんに家建ててあげたよ。

――いい話ですね。じゃあ、最後の質問です。引退直後、「あたしは処女なのよ」って盛んに発言してましたよね？

ダンプ いまでも言ってるよ（笑）。

――ありがとうございます（笑）。

【98年8月4日、都ホテル東京にて収録】



奇抜な入場は昔のまま。かつては影武者（影かほる）付きで入場していたダンプだが、8月14日のOG戦ではバカでかいダンプちゃん人形を従えて帰ってきた！ サービス精神は超一流だ。

プロレス界の生き字引き

志生野温夫

Haruo Shiono

interview



全女 30th 記念企画

え～、1200万人のプロレスファンの皆様、こんにちわ。ここからは日本プロレス界の長老・志生野さんが登場します。街頭テレビの時代からプロレス中継に携わり、いまなおマイクを握って元気いっぱい志生野節を響かせています。プロレス創生期から携わっている人だけに、その言葉はどれも非常に重いです。さあ、あなたも元気いっぱい読んでみてください！　ねえ、ジャガー？（志生野節）

聞き手／坂井ノブ
Interview byNobu Sakai
撮影／浜田孝一
Photographs by Koichi Hamada

――志生野さんは、いつ頃から女子プロレスの中継に携わっていらしたんですか？

志生野　いや、最初は女子プロレスじゃないんですよ。僕は日本テレビにいたから最初に実況したのは、力道山がいた頃の日本プロレスなんです。

――そうなんですか⁉

志生野　新人の時にね。東京・人形町のプロレス会館からでね。

――日本プロレスの道場ですね。

志生野　そうそう、あんまり歴史の中で語られてないんだけど。力道山は、東富士とか、マンモス鈴木だとか、そういう若い奴を鍛えるような試合をしてたんだな。

――そうだったんですか！　初耳でした。道場マッチをやってたんですね。

志生野　そこで30分間『ファイトメンアワー』っていう番組を土曜日の夕方やってたの。プロレスは何にも知らない僕達が実況してね。まあ、当時は技なんて空手チョップぐらいしかないからさ。あと、岩石落とし。

――へ？　バックドロップですか？

志生野　いや、岩石落としってのは、何のことはない、まあ、何となくこう、ドーンと下に投げるような技なんだけど。『岩石落とし』なんて勝手に言っちゃあね、放送してたんですよ。今のボディスラムだな。ボディスラムをちょっと大袈裟にしてね。

――仰々しい名前を付けて（笑）。



プロレス技に勝手に名前をつけて放送してたんだ

そういう技の名前、メチャメチャ情緒がありますよね。

志生野 だって、僕らが作ったんだもん（笑）。

―かっこいいなあ。

志生野 昔は他の選手のスペシャル技を他の選手は使っちゃいけなかったの。その原点に今のプロレスは、また戻らなきゃいけないと思います。いまは、それ以外のものに気を取られてる部分があるんだろうな。

―小手先の技であるとか、そういう部分ですね。

志生野 そう、みんな技に溺れてる部分があるね。いろんなスープレックスを編み出してる豊田真奈美によく言うんだよ。「ジャパニーズオーシャン（スープレックス）を納得するまで追求してみろ！ オリジナル技一つで勝負しろ」って言ってるんだけど……。今の若い子って器用だから。技に走りすぎちゃって、魂が入ってないように見えるんだよね。

―確かにそうですね。昔から女子プロレスは、偏見の目で見られてるプロレスの中でも一段下に見られてましたよね。

志生野 うん。僕が「女子プロレス中継やって欲しい」って言われた時も「嫌だなあ」「恥ずかしいなあ」と思ったもん。だけどその時に初めて見て、ものすごい空中殺法と、男子にないすごい技を連発した試合でね、ホント、びっくりしたもん。

―志生野さんが恥ずかしいって思ったのは、お色気ショーみたいな部分があったからですか？

志生野 （元気よく）そう！ だってお客さんだって野次で楽しんでる時代だから、「もっとはだけて」とかさ（笑）。マッハやビューティーが唄ったら唄ったで中年のファンはみんな怒ったよね。「歌なんか聞きに来たんじゃねえ」って。

―マッハは、熱狂的に歓迎されてたスターじゃなかったんですか。

志生野 全く歓迎されてなかった！ ただ、マッハが歌を唄った時に初めて会場に少年ファンがついたんですよ。で、マッハが引退したら、会場もガラガラになったけど、テレビの視聴率だけは良かったね。女子プロ中継はピンクレディーや山本リンダを手掛けてた人がやってたから、そういう手法があったんだよね。

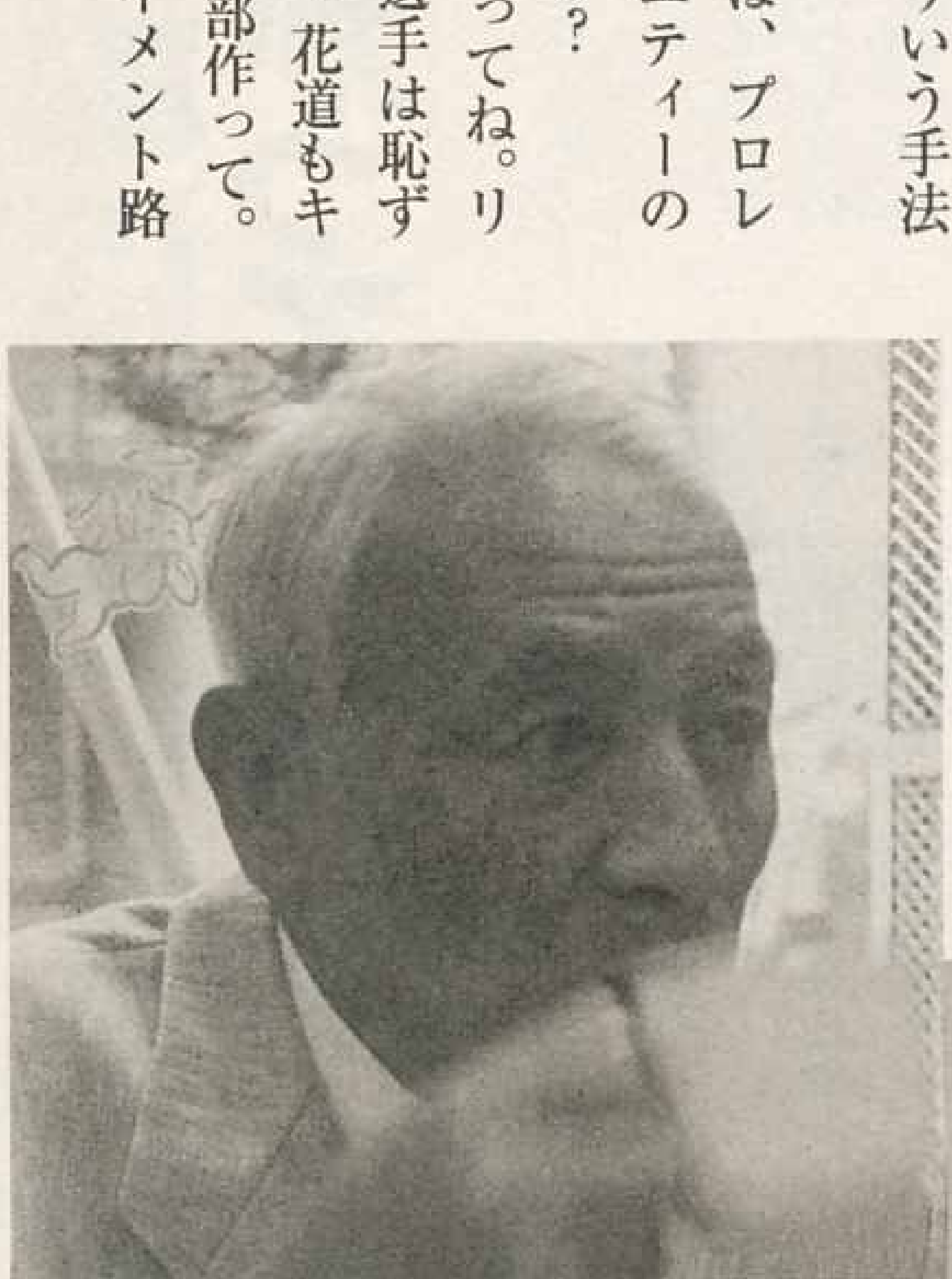
―え？ ということは、プロレス番組を芸能とかバラエティーの人が制作してたんですか？

志生野 そう、演出も凝ってね。リングを花柄にしてね、選手は恥ずかしがってたけど（笑）。花道もキレイにして、登場曲も全部作って。

―完全にエンターテイメント路線ですね。

志生野 そういうふうにショーアップされたモノが日本にはまだなかったからさ、男子プロレスは「何だ、アレは？ 格闘技じゃない」ってバカにしてたけどね。アメリカではもうやってたんだけど。

―クラッシュ・ギャルズの時代はどうでしたか？





しおのはるおプロフィール■昭和7年11月4日、大分県出身。國學院大学文学部卒、昭和31年日本テレビに入社。昭和47年に独立。あの徳さん（徳光）の先輩にあたる、日本女子プロレス実況界の第一人者なのだ。現在も『全日本女子プロレス中継』改め、地上波唯一の女子プロ番組『格闘女神アテナ』（フジTV）で元気いっぱい実況を担当中。素晴らしすぎる志生野節を耳に刻み込め！





志生野 長与千種が頭角をあらわしてからはケガ人が絶えなかった。文字どおりクラッシュだったね。飛鳥はそうでもなかったけど、千種は「八百長だ」と言われるのに一番反発してたから。

―技に説得力を持たせようとすると、ドンドン過激になりますよね。

志生野 実況中継してても怖い技をたくさん使ってた。それでダンプは「それなら私たちは今までの悪役とは違う、徹底的に悪いことをする悪役になってやる」って、容赦しない試合をやってたんだ

長嶋茂雄はプロレスをよくわかってる!!

よ。毎回血ばっか流してた。もう、純粋だから、どんどん過激になっていったよ。

――でも、そういう熱がプロレスには必要ですよね。

志生野　まさにクラッシュの時代が、いや長与千種の時代がそうだったね。

――志生野さん自身は「プロレスって八百長なんでしょ」みたいなことを聞かれませんか？

志生野　もう年中ですよ。ボクも昔は「胡散臭いな」って思ってた。でも、違うんだよ。プロレスっていうのは、プロスポーツの原点だからね！　だから八百長っていう日本的な感覚で捉えずに、やはりプロスポーツってのはお客様が喜んだり、期待していることを上手い形で実現させてあげるっていうのがプロスポーツの原点だから。そこで結果を出した奴がスーパースターなんだよ。長嶋（茂雄）は必ずそういうところで結果を出したんだよ。それを解りやすく身体を鍛えて、魅せてお金を取るのがプロレスなんだ。

――その通りですね。

志生野　ワンちゃん（王貞治）が巨人の監督のとき、巨人が創立50周年のときで「今年こそは優勝しなきゃいけない」ってみんなが期待してたんだ。でも、優勝できなかったんだよ。その時ワンちゃんにね、「プロレスだったら優勝してる」って言ったの。

――プロレスだったら（笑）。世間一般にはすごい誤解を生みそうな言い回しですね。

志生野　そう。ワンちゃんも「プロレスとプロ野球一緒にしないで」って言うんだ。だから「プロスポーツっていうのはみんなが期待したことの結果を出してこそプロスポーツだから。今年の王監督も、ジャイアンツも、プロのチームでもないし、プロの監督でもない」って僕は言ったの。

――いい話ですねぇ！　プロは結果出してナンボですからね。

志生野　ジャイアンツ60周年のときは長嶋が監督だったけどさ、ちゃんと優勝してるんだよ。長嶋っていうのはファンが「今年はダメだ」って言ったって最後まで頑張るじゃないか。期待されてるうちは絶対途中で投げたりしませんよ。長嶋はプロレスをわかってます！

――長嶋はプロレスをわかってる（笑）。それは名言ですよ。

志生野　ワンちゃんもさっきのようなことを言ってから、今ではプロレスを否定しませんよ。

――ワンちゃんも素晴らしいですね。観客の要求する高いハードルを超えられる人がプロレスラーなんですよね。

志生野　そうだね。プロレスっていうのはプロスポーツの原点なんだけど、格闘技精神を忘れるとダメになるからね。

――その上、女子プロレスはそのレスラーが背負ってる人生を見せつけてくれますよね。

志生野　そうですね。僕にとっての女子プロレスは……自分の娘みたいな気持ちをどこかで持ってるね。

――親父の目になっちゃうんですね。

志生野　最近は孫を見る目だな（笑）。

――「あんな技使ったら危ない！」とか（笑）。

志生野　そう。男子プロレスよりも前から過激な歴史を持ってるんだから。この安定思考が蔓延する世の中で女子プロレスラーってのは冒険を求めてるよ、誰も安定を求めて入ってこないんだよ。だから、思いきり人生を生きて、安定思考をぶち破ってもらいたいね。

――全女自体が破天荒な会社ですからね（笑）。

志生野　まあ、エリートが集まって黄金時代築いたわけじゃないから。どうしようもないヤツらが集まってね。

――どうしようもないヤツら（笑）。

志生野　山崎五紀だって、1年間で父親と母親をいっきに亡くしてるんだよね。その間にミサイルキックっていう技を産み出してるんだ。あの技は両親に捧げる鎮魂歌なんだよ。それからあいつは本物になっていった。みんなそうやって人生を背負った技を開発してるんだよ。最近は、そういうドラマがないよね。いい意味でも悪い意味でも選手がチャラチャラしてるから。

――いろいろ女子プロ界も変わりましたからね。

志生野　でも、僕はずっと変わらずに期待してることがあるんですよ。

――なんですか？

志生野　ジャガー（横田）がお嫁に行って結婚式をやるときは僕が司会をやるっていう約束をしてたんだけどね。あと2、3年のうちに結婚してくれないと、僕、死んじゃうよ（笑）。

――そんな（笑）。まだまだ元気に実況して下さいよ。

【98年9月4日、千代田区麹町の喫茶店にて収録】

全女 30th 記念企画



志生野さんがクラッシュ・ギャルズ全盛期に書いた女子プロ本。よく来る親戚のオジサン的視点からの女子プロ本。取材の際に頂きました。

L-1開催記念



そんな2人がブチ上げた でかい話

俺たちはプロレスの枠におさまりきらない!!



史上最大の 北尾光司（武輝道場） VS 神取忍（LLPW） 飲み仲間対談



聞き手／坂井ノブ
Interview by Nobu Sakai
撮影／浜田孝一
Photographs by Koichi Hamada

見てみぃ、この和気あいあいぶり！　正直すぎる言動が仇となり、いくつもトラブルを起こしてきたプロレス界の２大問題児が『紙プロRADICAL』に初登場！　大相撲で横綱まで昇り詰めた男と、柔道日本一の女が、プロレス&バーリ・トゥードを股に掛けて大激論！　プロレスという枠だけには収まりきらないナチュラルな力人どうしだけに、通じ合うことも多いはず。しかも２人は酒飲み仲間だという。そんな２人のナチュラル対談を怒涛のスケールでお届けします！

きたお・こうじ■昭和38年8月12日、三重県出身。大相撲で横綱「双羽黒」として活躍後、廃業。スポーツ冒険家業を経て、新日本プロレスへ。平成2年2月10日東京ドームでデビュー。長州とモメて離脱後はSWSに参戦するも「八百長野郎」発言で解雇。平成5年、武輝道場の前身・北尾道場設立。今年7月19日、キャプチャーでの試合を最後に引退。200センチ、160キロ。



これからの俺はお助けマンでいいよ(北尾)

―今日のスパーリングは、どういった経緯で実現したんですか?

北尾 LL(PW)の選手とは、いろんな団体で顔を合わせて、よく一緒に飲みに行ったりしたりして仲良くなったんだよね。

―以前から飲み仲間だったと(笑)。

北尾 そう。で、前回のL-1を見に行って。「神取選手が勝つだろうな」と思ってたら悔しい負け方をしたからね。そのとき以来、いろいろアドバイスをしてるんだ。

神取 いや~、心強いですよ。北尾さんが実際にやってきたことだから、すごい適切なアドバイスを受けられるし、すごくいいですね。

北尾 やっぱり、格闘技でいちばん大事なのは目慣らしだから。相手をどういう目線の高さで見ればいいのかっていう部分ね。

―お2人とも格闘技からプロレス、そしてバーリ・トゥードに挑戦という共通したバックボーンを持っていますよね。

北尾 まあ、すべて格闘技だから。変わるものは何もないよ。細かいルールは変わるけど、精神的な部分で変わることはないよ。変わらないでしょ?

神取 そうですね!

―相撲や柔道での勝利、プロレスでの勝利、バーリ・トゥードでの勝利、それぞれ充実感って変わるものですか?

北尾 勝ったときの喜びも同じだよ。結局、嬉しさの度合いってコンディションとか、そのときの状況によるから。

神取 対戦相手にもよりますよね。基本的には変わらない。

―『PRIDE.1』で北尾さんが勝ったときに、今まで見たこともないような大喜びをしてたんで、「バーリ・トゥードで勝ったときの充実感ってそんなにも凄いのかな」と思って聞いてみたんですけど。

北尾 あのときはコンディションが悪かったしね。大きな練習相手もいなくて、苦労した部分もあったから、それだけ嬉しかったよ。

神取 そういう環境でいったら、私は恵まれてるかもしれないですよ。練習相手もいるし、シューティング(現・パレストラ)の中井(祐樹)さんにも教わったし、今日みたいに北尾さんにもコーチしてもらえるし。でも、アマチュアの格闘家と対戦するのはプレッシャーが大きいですよね。女子プロレスってナメられてる部分が大きいから、「そういうんじゃないんだ」って見せつけてやりたい。



昨年の『PRIDE.1』で、勝利を挙げ巨体をブルブル振るわせ、ぴょんぴょん飛び跳ねながら男泣きした北尾。バーリ・トゥードで連敗を重ね、マスコミに叩かれまくった末の勝利だけに感激も横綱級のスケールだった。

北尾 そういうハートは大事だよね。

神取 プライドあるから。自分の中では、看板を背負ってるっていうプレシャーは大きいですよ。

―確かに女子プロレスは軽く見られてる部分は大きいですよね。力道山も「女子プロなんかと一緒にするな」って報道を規制させたらしいですから。

神取 へぇ~、そうなんだ。

北尾 そういう時代だからね。大事なのは歴史をいかに変えていくかだよ。

神取 こういう時代だからこそ、ムチャしないとダメなんですよね(笑)。

北尾 俺もこれから業界全体を盛り上げていくようなことをしなきゃいけない。それが自分を育ててくれたこの業界に対する恩返しだからね。その上で、俺はこのまま現役で闘うことが得策なのかなって考えて、それで引退した。

神取 なんか寂しいですよね。ただ、逆に惜しまれながら引退するのもカッ

女子プロはナメられてるから見返してやりたい（神取）

コいいかな（笑）。

北尾　だけど、俺は戻らないよ（笑）。これからはお助けマンでいいよ。誰かが困ってたらちょこっとアドバイスしてあげるようなね。

神取　ハッハッハッ、困ったときの北尾さんだ（笑）。

北尾　いまの自分の状況を言い表すいい例えが見つかったんだけど……マニアック過ぎるから言うのやめようかな～。言っちゃおうかな～。

——どうぞ、もったいぶらずに言っちゃってください（笑）。プロレスファンはマニアックな人が多いですから。

北尾　そう？　なんか俺、『赤ずきんチャチャ』に出てくるセラウィみたいだね（笑）。

神取　え～、『赤ずきんちゃん』のセラピー？　知らない、知らない（笑）。どんな人なんですか？

北尾　先生なんだけど、ちょこちょこっと出てきて、ちょこっとしゃべってすぐ帰るという。非常に面白いんだ。

——北尾さんのそういうマニアックな面はすごく面白いですよね（笑）。あんまりマスコミに出てないですけど。

北尾　俺はマニアックだよ。お酒から何から、何でもマニアックだから。

——お酒もマニアックなんですか？

北尾　そうだよ、何でも。ただ、彼女は飲んでも大人しいよ。

神取　私は、すごい強そうに見られるんだけどさ（笑）。そんなに強くないよ、飲んでも変わらないもん。

——飲んでも変わらないって、それ強いってことですよ（笑）。

神取　まあ、普段から酔っぱらってるみたいなもんだからね（笑）。他の選手の方がガンガン飲んでますよね？

北尾　凄い！　風間（ルミ）社長がいちばん凄い。それですごく変わるよね。

——体型もだいぶ変わっちゃったみたいですけどね（笑）。

神取　それ、ちゃんと自分が言ったって書いておけよ（笑）。まあ、うちは三禁ないから。北尾さんとは、だいたい楽しいお酒になりますよね。

北尾　俺、いくら飲んでも、あんまり酔わないから。

——SWS関係の人、誰に聞いても「天龍さんの飲みっぷりは凄い」って聞くんですけど、北尾さんも相当飲まされたんじゃないですか？

北尾　昔に比べると、最近はそうでもないけどね。でも、普通の人に比べるとけた違いに強いよ（笑）。SWSのときなんか、ウイスキーの中に目薬とヘアトニック入れられちゃったもの。

神取　もう、酒じゃないですね（笑）。天龍さんは酔わせて潰すのが基本的に好きだから。

北尾　俺、1回潰されたことがあるよ。3升を30分で飲まされたもん。結局、救急車で運ばれた。

神取　え？　救急車も大変だよね（笑）。でも、天龍さんは、あんまり私たちには無理させないんだ。

北尾　凄いときは「へっへっへ」って笑いながら近づいてきて、手に持ってるブランデーをそのまま俺の口に突っ込むんだよ（笑）。

神取　ホントにストレートだね（笑）。

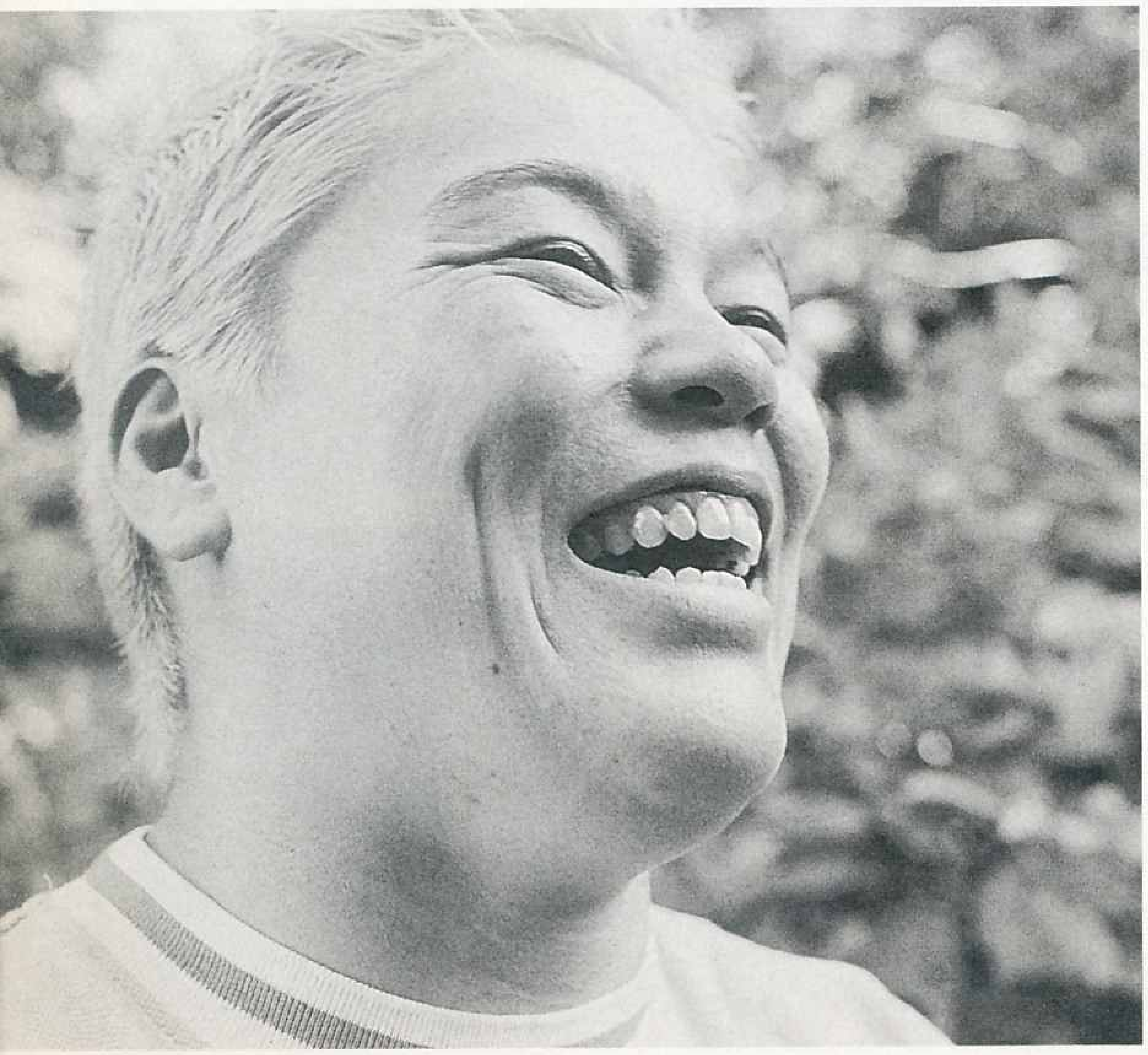
——そういう男のプロレスっぽい匂いをLLに感じますよね。他の女子プロ団体にはない、男気の世界（笑）。

神取　ハッハッハッ、確かに任侠の世界っぽいよね。女子プロの中では、いちばん男気あるかもしれない（笑）。移動のバスの中で飲んでるから。もう、ビールがスポーツドリンク代わりだよ（笑）。

北尾　そのぐらい勢いがなきゃダメだよ。いまは男子プロレスでも元気のないところが多いからね。でも、彼女は冷静に、客観的に物事を見てるんだ。こういう人がキレると怖いよ。逆にそういう彼女を見たいんだけどね、そう



1995年7月8日、駒沢オリンピック公園で行われた第1回L-1。トーナメント決勝でロシアの怪物女・グンダレンコにギブアップ負けを喫した神取。あまりのショックで2ケ月間体調を崩すほどだったという。



かんどり・しのぶ■昭和39年11月3日神奈川県出身。柔道で活躍し、第6回全日本選手権優勝。昭和61年8月17日、後楽園ホールでプロレス・デビュー。平成4年にLLPWを旗揚げ。170センチ、75キロ。

ヒクソンには俺たちのような
ラフなファイトは出来ない（北尾）

すると試合にならなくなっちゃう。

――お2人とも試合にならない試合を過去いろいろとやってますよね。

北尾　いろいろやってます（笑）。でも、やっぱりプロレスには、そういう危険性がないとね。

神取　こと細かくはわからないけど、北尾さんっていろんな団体を転々としてたから。いつも気になりましたよ。

北尾　転々とって言うけど、俺はひとりだけ枠に入れなかったんだよ。プロレスの世界に「前へならえ！」するために入ってきたわけじゃないからね。

神取　うん。それ、すごくよくわかるわ！　なんだかんだ言っても、会社組織ってあるからね。ジャパン女子の頃は、ホントにモメてたんですよ。リング上よりリング外で闘ってる方が多いんだもん（笑）。私も枠に収まってるだけのプロレスラーは嫌だったからね。

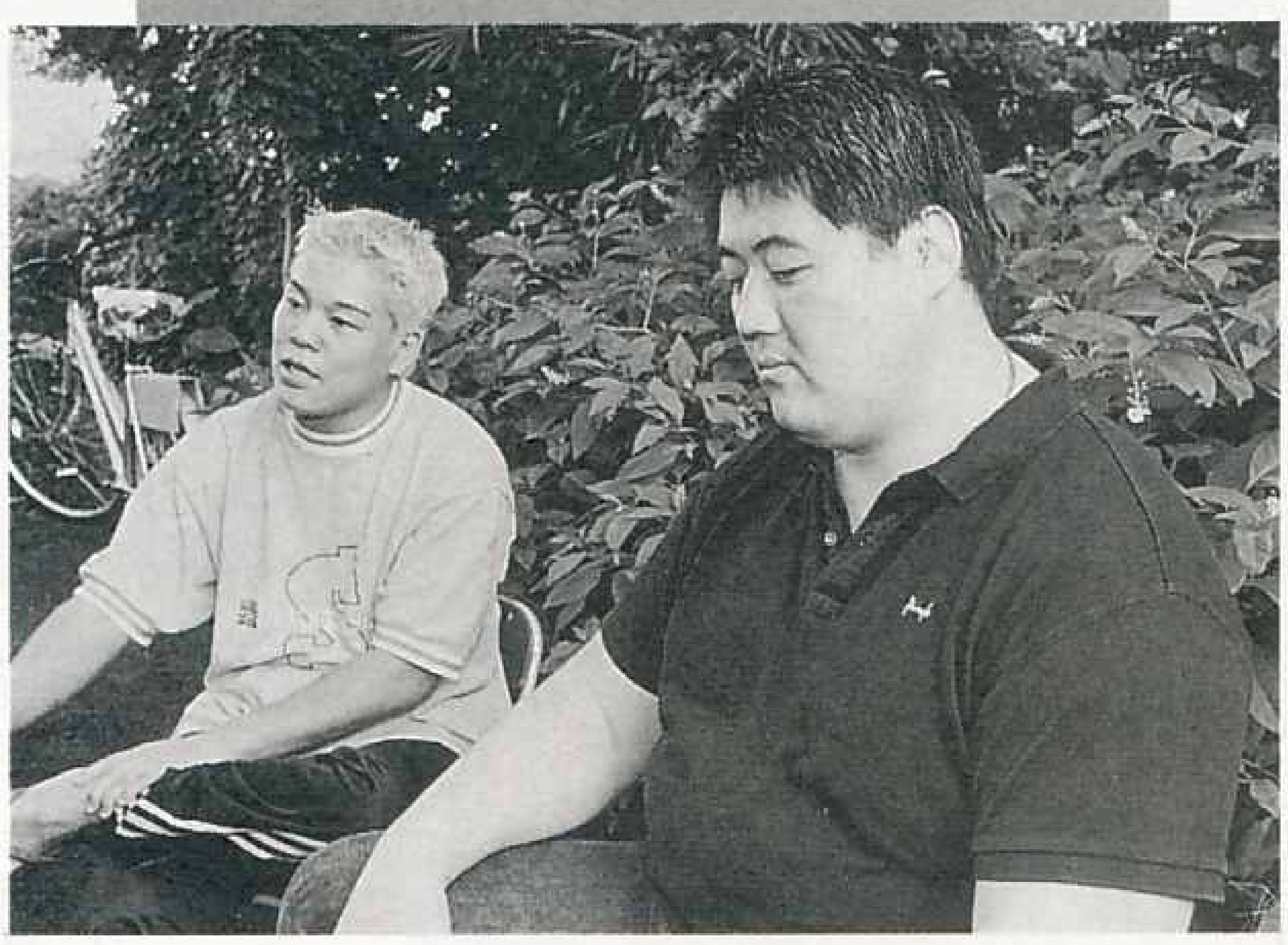
北尾　バーリ・トゥードに出た高田（延彦）選手もそうだし、小川（直也）選手もそうだし。枠に入れないでしょ？　それが彼らの魅力なんだよね。

――L－1の翌日に、北尾さんは東京ドームで引退式をやるんですよ。

神取　そうなんですか？　ケガしなかったら花束持って、ご挨拶に行けたら……グンダレンコに勝って、いい気分で勝利報告をしたいね。



酒飲み友達なだけあって、トークもなごやかに進んでいく。ちなみにこの対談は「この辺は緑が多くて気持ちいいなあ」という北尾氏の希望により、蚊に刺されながら野外で収録した。



――神取さんは外部のリングでバーリ・トゥードを闘うということは興味ないですか？

神取　まずL－1だよね。そこで勝つのが自分の使命だから。

北尾　彼女が女子格闘技の先駆者だから。自分で盛り立てていかないとね。

神取　女子でも格闘技をやれる場を作っていきたいからね。これから盛り上げていかなきゃいけないと思うし。女子格闘技があまり受け入れられないのは食わず嫌いなんだと思うよ、ホント。

北尾　その状況を変えるためにも、俺が力になれることがあればね。『赤ずきんチャチャ』のセラウィとして、ちょこっと力をお貸しできればと思いますよ（笑）。まあ、ウルトラマン・ゾフィーまではいかないとしてもね（笑）。でも、彼女を中心に盛り上がっていくよ。だから、みんなもっとL－1の重大さを分かってあげてほしいよ。女性がああいう試合をすることの重さをね。男でも、口で偉そうなことを言うヤツはいるけど、あの八角形の中に入る勇気のある人は少ないんだから。

神取　格闘技って負けて覚えることが多いですからね。

北尾　そうなんだ。プロレスラーが勝とうが負けようが、やればいいんだよ。だって、競技が違うんだもん！　ルールが違うんだもん！　スーパーマンじゃないんだから、負けたっていいんだよ。そりゃアンタ、10年バーリ・トゥードやってる人と1ヶ月しかやってない人では違うよ。

――ひとくちにバーリ・トゥードとはいっても、ボコボコに殴るタイプと、寝技で相手をコントロールするタイプの人がいますけど、神取さんはどういう試合をしたいんですか？

神取　どんな相手にも対応できるような選手になれればいいと思うよ。

北尾　よく「プロレスは芸術だ」って言うけど、「バーリ・トゥードだけど芸術」ていうのもあっていいと思うんだよね。ある意味でバーリ・トゥードもルールが違うだけで、形を変えたプロレスだから。短距離と長距離みたいなものだよ。

神取　かけっこであることには変わりはない（笑）。

北尾　そう、そう。なんぼ100メートル走が早い人でも1キロ走れってことになったら、1キロ専門の人にはかなわない。ようするに、どこにゴールを設定するかだけの違いだから。

――話はガラッと変わるんですけど、神取さんは男と闘いたいという気持ちはないですか？

神取　ハッハッハッ、何それ？（笑）

――よく『東スポ』に載ってるじゃないですか、「神取、おかまキックボクサーと対戦か⁉」って（笑）。ああいう闘いも、神取さんだったら実現してもおかしくないかなと思って、実際に見たいんですよ（笑）。

北尾　女性なんだよ、一応（笑）。

神取　う～ん。よく「女で最強だ」とか言われるけど、まだまだ自分の中では足りないものが多いと思うから、そう言われてもピンと来ないよ。

北尾　それがピンと来るようになったら引退するときじゃないの？

神取　それが来ないから頑張っちゃうんでしょうね。そうなんだよなぁ。まだ全然納得できないもん！　今回のL－1でのグンダレンコ戦はあくまでも



リベンジだから。これから、もっと凄い選手も出てくると思うしね。

——L−1の翌日には高田延彦選手もリベンジに挑むんですが。

神取　興味あるよね。

——ヒクソンってどう思いますか？

神取　いいんじゃないの？

北尾　カッコいいからね。

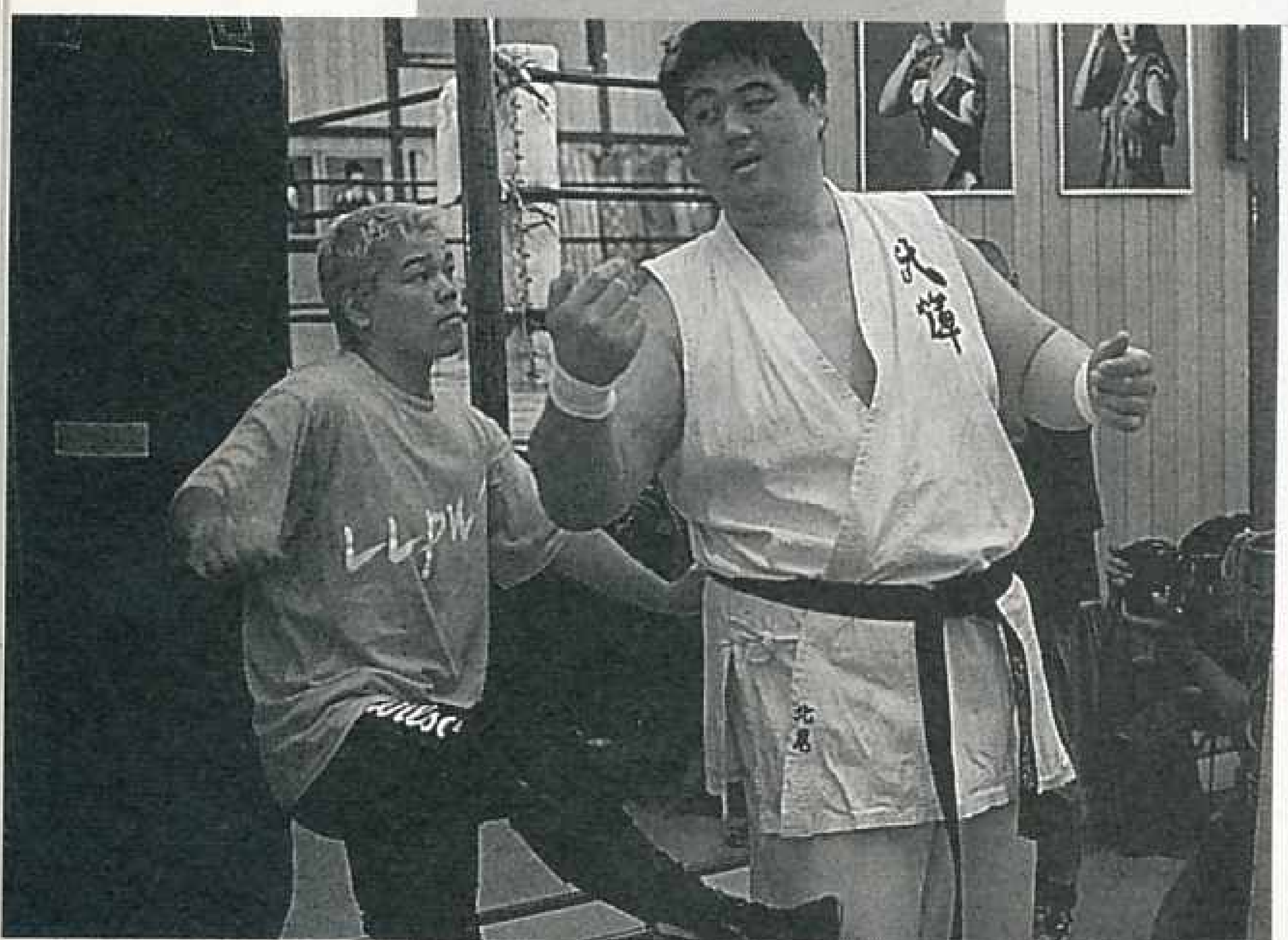
神取　うん。私には山篭りは出来ないけどね（笑）。

北尾　あの人は、ああいう競技のために生きてる人だからね。

神取　こんなちっちゃいときから柔術しかやってこなかったんでしょ？「お前の生き方はこうだ！」っていう枠にはめられた生き方だからね。

——お2人とも、そういう生き方を強制されたら、絶対途中で枠から飛び出してたでしょうね（笑）。

神取　ハッハッハッ、窮屈なのは大嫌いだからね。



この対談を行う数時間前に、vsグンダレンコ戦へ向けての対策を練った2人。「内緒にしといてね」と北尾氏がマスコミに釘を刺すほど、重要なアドバイスが送られた。

L-1で勝つのが自分の使命だから（神取）

北尾　でも、逆に、ヒクソンには俺たちのようなラフなファイティングは出来ないよ。

——そうですね。プロレスラーの魅力はそういうところですからね。神取さんが試合中にキレちゃったりとか、北尾さんが試合中に突然マイクを持って「八百長野郎」と叫んだりするようなハプニングはないですから（笑）。見てるぶんには退屈かもしれないですよ。

北尾　あれは武道だからね。

神取　みんなプロレスラーがあんなになっちゃったら嫌だな（笑）。

北尾　バカ話のひとつも出来ないとダメだよ。お酒も飲めないとね（笑）。あれは古い日本人が持ってるような雰囲気だよね……なんかすごく堅い難しい話になっちゃったなあ。

神取　そうですねえ（笑）。どうすんだよ、ねえ？

——いや、いや。今日のテーマは「プロレスと格闘技の違い」と「L−1」ってことなんで。最後に北尾さんから神取さんにエールを送ってもらえれば、いい締めになりますよ。

北尾　そうだね、切羽詰まった試合じゃなくてさ。好きでやってるんだから、楽しんで試合をしてもらいたいよね。

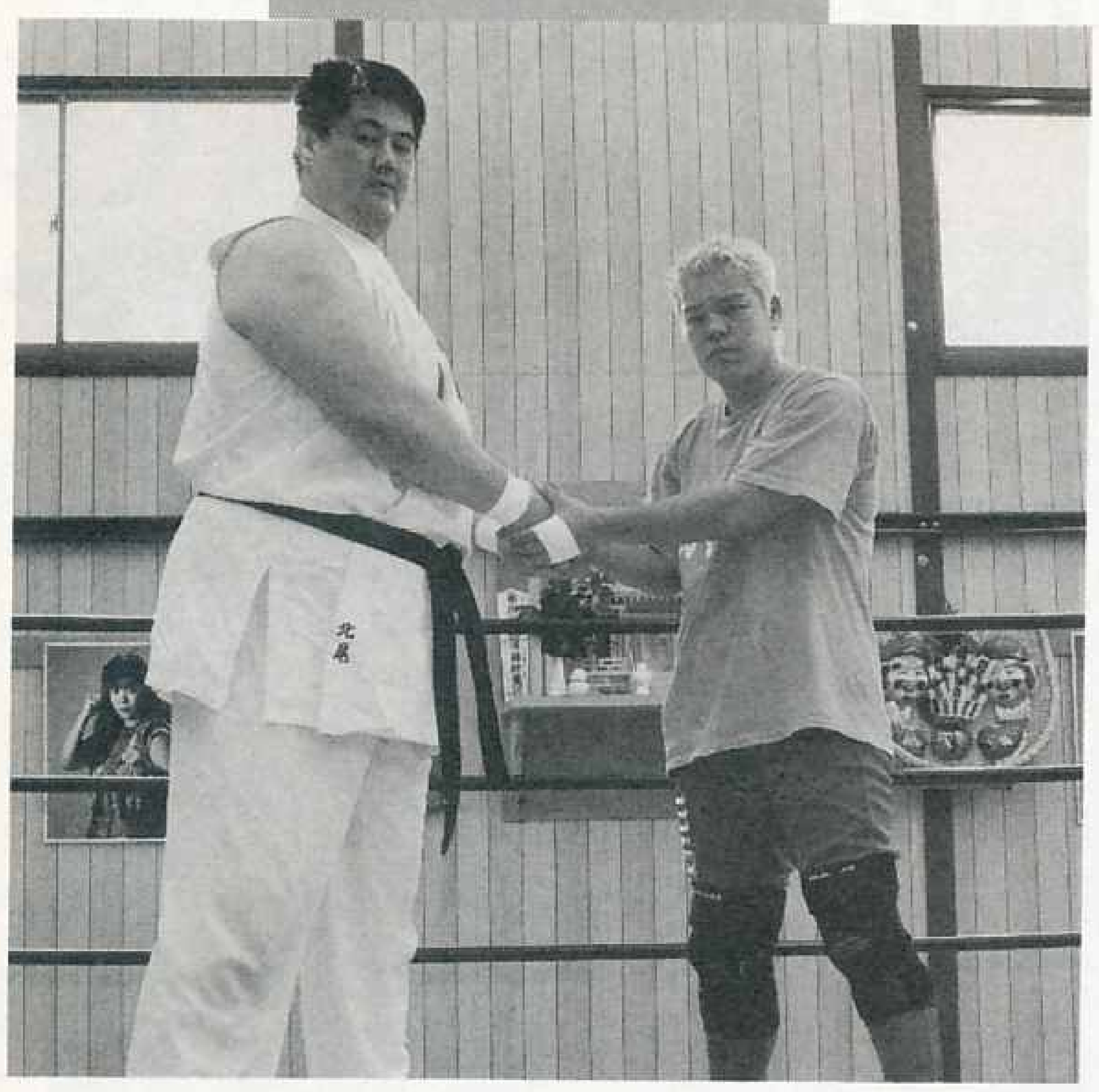
神取　はい。北尾さんも引退なさるということですけど、闘うリングが変わるだけであって……（「ババババババッ」という爆音と共に上空をヘリコプターが通過。すると空に向かって）うるせえな、この野郎！

——ガハハハハ！　男らしいなあ。

神取　ふ〜。指導者という立場になっても闘い続けて欲しいですよ。

——そして、ときどき『赤ずきんチャチャ』のセラウィとして現れるということで（笑）。

【98年9月8日、山と緑と蚊に囲まれたLLPW道場にて収録】



必読連載第10回

石川雄規の『闘いの美術館』

あるいは「タンパの思い出、そして旅立ち」



『ダイジョウブ、シンパイナイ』

ラリー・マレンコさんは、部屋に入ってくるなり日本語でそう言って私の右手を強く握った。ラリーさんは、かつて〝ボリス・マレンコ〟という名前で日本にも何度も来日したことのある名悪役レスラーである。当時私にはそういった予備知識がなかった為、恐ろしいイメージよりも逆に、彫りが深くとても優しい目が強く印象に残った。私は突然の来訪者に緊張しつつ、彼に椅子を勧めて自分はベッドの端に腰掛けた。ここまで来たいきさつやプロレスに賭ける夢等、前もって手紙に書いておいたものを手渡して読んでもらった。というのは、当時私は英語の読み書きには自信があったけれど、実際に話すことはまだ自信がなかったので、伝えたい事柄を文章にして事前に用意しておいたのである。

ラリーさんは手紙を読み終えると何度か深くうなずいて、後ろに立っている一緒に来た奥さんのノーナさんにそれを渡した。ノーナさんもそれを読み終わると、二人は互いに目配せをし、私の方へ向きなおった。

「私の家に来ないか。ホテル住まいはお金もかかるし何かと不便だ。今まで日本人の留学生がたくさん来たが、皆そうしている」

ラリーさんは真っすぐに私の目を見つめてそう言った。もちろん断る理由などなかった。私が頷くと、彼は私の両肩に手をおき、

「ダイジョウブ、シンパイナイ」

もう一度そう言ってにっこり微笑んだ。

マレンコ道場は、タンパの街を横断するメインロード〝デイル・メーブリィー〟通りから脇道に少し入り込んだ所の小さな倉庫街の一角にあった。車から一歩外へ出ると、素肌に痛いほどの強い日差しに包まれ、思わず目を細める。ガレージの中に置かれた二つのリングの上には屈強な男たちが活気に溢れてスパーリングをしていた。ここで新しい生活が始まる。夢に向かってようやく第一歩を踏み出すことができる。そう思うと体中に心地よい緊張感が満ち溢れ、広い空を仰ぎ新天地の空気を胸一杯吸い込んだ。



リングサイドを見ると口髭を蓄えた日本人が一人、リング上の選手たちに檄を飛ばしていた。ラリーさんの紹介で挨拶をしたその人は、年の頃は40歳、怖そうな人だった。そして困ったことに彼は大阪弁を喋った。

「どないしたん？　何しにきたんや？」

久しぶりに耳にした日本語が日本でもほとんど馴染みのなかった大阪弁だったので、なんだかケンカを売られているようで、私にはどうも苦手だった。

「まあええ、とりあえずリングに上がれ」

練習着に着替えリングに上がると、さっそくスパーリングが始まった。その人の指示で次から次へと目の前にスパーリング相手が送り込まれた。約1時間半、それは休みなく続いた。それは相当にしんどい闘いであったが、リングサイドに光る鋭い視線を横目に感じながら、私は意地でも弱音を吐くわけにも簡単にギブアップするわけにもいかなかった。

「よし、それまでや。あがってええで。メシでも食いに行こうか？」

ようやく地獄から解放され、皆で食事に行くことになった。どうやら私は最初の試験はパスしたらしい。

目の前に座ったその人の名は、空中正三（そらなかまさみ）さん。カール・ゴッチさんの娘さんと結婚し、タンパに住んでいる。日本ではUWFのレフェリー、外人選手の招聘役を務め、ここマレンコ道場では日本に送り込む外人レスラーにミッチリとUスタイルを叩き込むコーチでもある人だ。そしてこの空中氏との出会いによって、のちに私は数奇なる運命へと導かれてゆくことになるのであった。

『別れの涙がこんなにもとまらないなんて、この時生まれて初めて知った』

「TOY……トーイ、そうだトーイというニックネームはどうだ」

豊彦（TOYOHIKO）という私の名前の発音に四苦八苦していたラリーさんが、ある時突然思い立ったようにそう言った。頭の三文字をとってTOY、最高にしゃれている。覚えやすい名前は愛されやすいと何かの歌で唄われていたけれど、その通りに皆トーイ、トーイとなにかにつけて気にかけてくれた。そのお陰で、私はあっという間に当地の生活に溶け込むことができた。そして周りに日本人が一人もいないにも拘わらず、とうとう私は滞在の間中、一度もホームシックにかかることはなかったのだ。

日々練習に明け暮れる毎日であったが、刺激に暇はなかった。それというのもゴッチさんが私との約束通り、度々道場を訪れては我々に指導をしてくれていたからである。当時はジョニー・バレット、ウィルキンスJr、デュセル・バット、マック・ローシュといったUWFの常連外人選手たちが通ってきており、皆ゴッチさんの技術に感動し、そして尊敬の念を抱いた。どうやらゴッチさんはマレンコ道場を訪れたのは初めてであったらしく、レスラーたちもプロレスの神様の存在、姿を初めて目の当たりにしたようであった。そして、その場にいあわせた一人の女子レスラーがその関節技レスリングの技術に魅了され、ゴッチさんに教えを請うたのであった。

「女の子は教えたことはないし、どうしたらいいかわからん」

さすがの神様も照れることしきりで困ってしまったが、レスリングを愛する心に国境も性別もないということを誰よりも信じているゴッチさんである。彼女の熱意におされるまま、彼女をゴッチ教室に仲間入りさせたのであった。その女子レスラーの名前はデビー・ドレィク。のちのデビー・マレンコである。

道場が休みの日は、ラリーさんと共にスポーツクラブに行って汗を流す。時折ゴッチさんもそれに合わせてクラブのプールでリハビリをしにみえた。そして決まって私を誘い、大好きなサウナに長時間入るのであった。この長時間入るサウナは非常にキツかったのだけれど、それと引き換えてもゴッチさんと一緒に過ごせる時間というのは私にとってかけがえのない夢のような時間であった。そして昼過ぎからはマレンコ家で二人でビールを飲み交わす。ラリーさんはゴッチさんの長話につかまらないよう、いつも何かしら用事を作ってどこかへ出掛けてしまい、夕方までは帰ってこない。これもいつものパターンであった。

とにかくゴッチさんはよく喋った。ほうっておくと5〜6時間は平気で喋っているだろう。それを知る人は皆敬遠するけれど、私にとっては少しも苦痛に感じたことのない貴重な時間であった。しかし、気持ちはそうであっても体がついていかない場合も多々あるものだ。無理して入っていたサウナで脱水状態になったまま、空腹に5時間近くビールを呑み続けていたらさすがに具合が悪くなってくる。その夜、どうにも気持ち悪くなって、吐いた。そして、よせばいいのにまた翌週同じことを繰り返してしまうのであった。

あっという間の3ヶ月だった。帰りたくなかった。ずっとここにいたかった。

『夢は近づけば近づくほど大きな壁に突き当たる』猪木さんの本にそういったことが書いてあったのを思い出した。いま私はひとつの経験を通して夢の第一歩を踏み出したのだ。そして次の壁を乗り越えるためには、同じ場所、居心地の良い場所に長居をしてはいけないのだ。苛酷な道へ自らを投じなければならない。しかし新しい道はどこにあるのか、次に何をしたらいいのか……。わからない。わからない。車の窓から流れ行く風景をただぼんやりと見ていた。

あの時たった一人で降り立った空港に今、ラリーさんと二人で立っている。いよいよお別れだというのに言葉がでてこない。伝えたいことがたくさんありすぎて言葉が見つからない。こみあげてくる涙をこらえるのが精一杯だった。ふと見るとラリーさんもサングラスを外せずにいた。

「トーイ、ユウはVERY BEST STUDENTだ。ダイジョウブ、シンパイナイ。……サヨナラ」

そう言ってラリーさんはサングラスを外すと、涙を浮かべながらとびきりの笑顔を見せてくれた。

「See You Again」

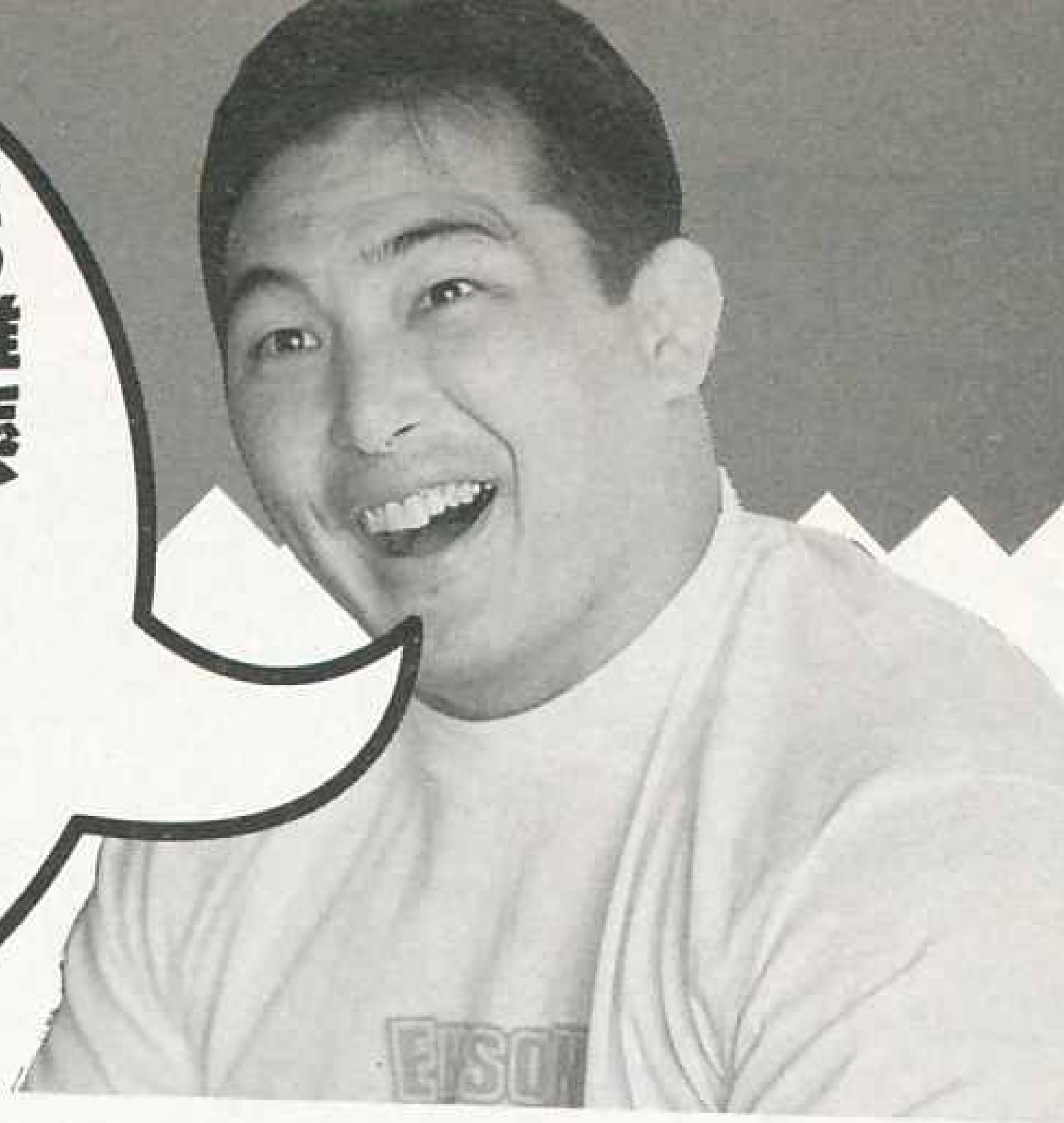
そう答えて搭乗ゲートに向かった。もはや溢れる涙を抑える術はなかった。

飛行機の窓が傾き、眼下にタンパの街が広がった。今この瞬間もこの街で出会った人々は何も変わらず過ごしているはずだ。どんどん離れてゆく懐かしい風景がたまらなく愛しかった。そして、別れの涙がこんなにもとまらないなんて、この時生まれて初めて知った。

（つづく）



RADICAL Back Number のお知らせネ!



この雑誌、問題作ってばっかりネ。
でも面白いヨ(笑)
買わない人はもう……殺したい

創刊号
**驚天動地! 何だこの表紙!!
が、しかし中身は豪華絢爛
特別インタビュー大満載!
これは買わねば!!**



★特集「プロレスラーとは何か!」
「プロレスにプライド持つっていうのを捨て始めたんだよね」**高田延彦**/「UWFはパンクラスだと思った」**船木誠勝**/「綺麗な肌の女の子は内臓も綺麗でしょ」**初代タイガーマスク**/「俺たちはどんなことをやっても美しい!!」**橋本真也**/「いつも心にダイ・ウィズ・ガッツ!」**タイガー・J・シン**/「感動なんてもんじゃなく、感覚が激する!『感激』が大事なんや」**前田日明**などスペシャルインタビュー多数掲載!
◎な、なんと**格闘探偵団バトラーツ**を32ページに渡ってブチ抜き大特集!
他じゃ見られないバトラーツの全貌が今此処に明らかにされる!

第2号
**ドスを構えたシリアスバージョンの
髙田延彦。ヒクソン戦を控えた
髙田の心意気は君の脳髄にも
グサッと突き刺さるハズ!**



◎読者支持率ナンバーワン!
「相手の技が見えるようになっちゃえばおしまいですからね。あとは目を突けるかどうかですよね」男気溢れまくる喧嘩話満載の**佐山聡**インタビュー
★特集「プライドとは何か!」
過激で素敵な脳髄直撃師弟対談
アントニオ猪木vs初代タイガーマスク
◎「真剣勝負で闘ってください」発言の真意とは何か? **田村潔司**
◎もはや実現不可能!?
長州力vsターザン山本「猪木イズム世界一決定戦」小社発行の『猪木とは何か?キラー編』完全再録!
◎パンクラスとは何だ!ザ・対談編
ターザン山本vs山口昇

第3号
**神様的な大反響!あのカール・ゴッチが
ついにRADICALに降臨!!
OH! MY GOD!! な発言の連発に
君は耐えられるか!? 迷わず買うべし!**



★特集「針の穴にラクダを通せ!」
◎「レスラーとしては、わざとリアリティを売りにしている。だから、ファッションですよ!」
船木誠勝19ページブチ抜きインタビュー
◎「ボコボコのシバキ合いを見せる!」
山本宜久インタビュー
◎世界格闘技連盟とは何か?
猪木の「『LOVE』とかってあるでしょ」という謎かけで終わった師弟対談のパート2
この過激さから目をそらすな!!
アントニオ猪木vs初代タイガーマスク
◎「**八百長論議**」を忘れるな!
闘え! プロレスの敵は世間だ!!
プロレス・ファンじゃない500人のアンケート結果を叩き込んだ総力特集!

第4号
**ゴンタ顔の日明兄さんが
「引退します!」との衝撃発言!
「落とし前つけたるで!」とばかりに
無限のパッションがあちらこちらで大炸裂!**



◎**神様カール・ゴッチ**大反響インタビュー第2弾・グレイシーからアルティメット、アメプロ、馬場さんまでエアガイツでメッタ切り!
★特集「落とし前」と「世界征服」97
◎「新日本プロレス25周年特別試合」
酒、女、喧嘩、何でもありの超過激対談
藤原喜明vsドン荒川
これを読まずに20世紀は終われない。
◎「俺、リングスで一番強いと思ってるからね」**髙阪剛** インタビュー
◎プロレスをナメ切った世間に今こそカチ喰らわせ!大反響!プロレスファンじゃない500人アンケート第2弾

第5号
**打倒ヒクソン・グレイシーに
立ち上がった最後の刺客、髙田延彦。
『RADICALはいつだって
髙田延彦を応援するゼ!!』**



◎猪木、Puffyほか有名人33人が髙田vsヒクソンを大予想
◎読者人気爆発!! ストロング・スタイル対ひょうきんプロレスの頂上対決。
伏せ字だらけの超過激対談パート2
ドン荒川vs藤原喜明
◎全てはここから始まった!
開始前から話題騒然の新連載!
前田日明のウルトラ・メガバトル人生相談『人生は語らず』
◎世界格闘技連盟を語りたおす!
食い倒す?『ケーキクェイ』
佐山聡(タイガーキング)インタビュー
◎"活字プロレスの悪魔(ターザン山本)"が語る髙田vsヒクソンの意味!「今は髙田延彦の方が前田より100倍魅力的ですよォ!」

第6号
**「俺たちが世界を支える!!」と
腕組みをしてRADICALに
初登場したのがnWo・蝶野正洋!
プロレス界、『紙プロ』の救世主となってくれ!**



★特集「"プロ"と"レス"融合か分裂か!」
◎**前田日明**の人生相談&パンクラス問題に日明兄さんブチッインタビュー&前田のイラダチ頂点に達す!! リングス大会終了後の共同会見完全再録
◎ゴリさんこと**アレクサンダー大塚**のみちのくひとり旅日記'97
◎「サスケがダメなのは『紙プロ』と付き合っているからだ!」
TAKAみちのく毒舌爆発インタビュー
◎髙田×ヒクソン戦直後、
Puffyに独占インタビューを敢行!
◎打倒!八百長論議!**ザ・グレート・サスケ**が素人相手にお説教!
◎**井上京子**/**井上貴子**/**角掛留造**/**松永高司**インタビュー

第7号
**特集「反骨の剣」
堂々の読者人気1位奪取!
赤いパンツの頑固者・
田村潔司鮮烈ロング・インタビュー**



◎読者もシビレまくり!
黒いパンツの心意気・激白 **木村健悟**
◎酒、煙草、男、三禁なんてクソ食らえな大型不良新人!**中原奈々**インタビュー(現在失踪中)「凶器しか使わないプロレスをしたい!」
◎みちプロ経営危機の真実を**ザ・グレート・サスケ**が独占告白!
「こんな経営をしていたら50年もつみちプロが5年で潰れてしまう!」
◎……ああ、好評すぎて怖い。寸止めなしの殺戮連載!**前田日明**の"ワールド"メガバトル人生相談「人生は語らず」
◎祝! 復帰記念
モハメド・ヨネインタビュー
◎ラジカル初登場2連発!
冬木弘道/**MEN'Sテイオー**

第8号
**「見てみ、この面!!」シリーズ第1弾・
桜庭和志の戦闘スマイル満開ショット
「ヒクソンですか?いけそうな感じするんですけどねぇ」ズバリ永久保存版!**



★特集『格闘技世界大戦前夜!!』
◎**アントニオ猪木**「元気」と「気づき」のロングインタビュー
◎ヒクソンとの再戦が決定!**髙田延彦**の意気込みを聞け!
◎プロレスラーはホントは強いんです記念「格闘家から見たプロレス!」
エンセン井上/**村浜武洋**ロングインタビュー
◎波動砲! **前田日明**の人生相談『人生は語らず』
◎必読!黒いパンツの心意気PART2
猪木を裏切らなかったもうひとりの男
木村健悟が猪木、坂口から八百長論まで大いに語る!
◎業界内外で話題騒然
吉田豪の書評の星座PART2

第9号
**「見てみ、この面!!」シリーズ第2弾・
髙阪剛 この顔はマット界の宝だ!
「ヒクソンに勝つのは自分も自信あるし
誰もが狙ってると思う」勿論保存版!**



◎「アントニオ猪木・闘魂連鎖!無礼講大特集!」
前田日明/**ザ・グレート・サスケ**/**髙田文夫**/**春一番**
久々に大炎上!**ターザン山本**/燃える情念!**石川雄規**
◎衝撃の**さらばプロレスマスコミ**宣言!
業界病を吹き飛ばせ!!
◎**前田日明** ラス前ロングインタビュー&炸裂人生相談
◎日プロOB**吉村道明&ユセフ・トルコ&遠藤幸吉&駿河海**
◎[格闘家からみたプロレス!]**朝日昇**
◎大ブレイク**谷津嘉章**最強宣言!
「グレイシーよりアマレスの方が強い!」
これを読まなきゃプロレス者とはいえない!

第10号
**「驚愕の表紙」シリーズ第1弾・
前田日明vsエンセン井上
各方面に波紋を投げ掛けたスクープ対談が
ここに実現!! まさにプロレス者必携の一冊**



★特集「灼熱の地殻変動'98」大和魂は連鎖する!!
◎とにかく元気!**髙田延彦**ロングインタビュー
◎「タイガーマスクのマスク取れって言ったの、俺じゃん?」等々またまた大爆発!衝撃の**谷津嘉章**インタビューPART2
◎社長&会長対談・**ザ・グレート・サスケvs松永高司**全女会長
◎『紙のプレイボーイ』発進!!
ダイアナ&宮内美穂
◎大噴火!! **ターザン山本**の
プロレスマスコミ表紙批評!!
◎『紙のプロレス』スーパースター列伝
北沢幹之
◎**冬木弘道(金村ゆきひろ&伊藤豪)**ロングインタビュー

第11号
**「驚愕の表紙」シリーズ第2弾・格闘Viagra'98
髙田延彦vsエンセン井上烈談!!
こんな対談が出来るのは本誌だけ!
お買得にもほどがある一冊**



◎**前田日明引退記念特集**&ラストマッチ後・初インタビュー **前田日明**
◎良くも悪くも大反響!
ターザン山本のプロレスマスコミ表紙批評!
◎「格闘か?芸術か?それとも格闘芸術か!?」**佐山聡**/**スーパー宇宙パワー(木村浩一郎)**/**福田雅一**インタビュー
◎**ザ・グレート・カブキ**/**ダンプ松本**
◎バトラーツ両国進出記念特集**石川雄規**/**トンパチ・マシンガンズ(折原&小野)**/**岡本衛**/**マッハ純二**/**土方隆司**
◎SWSの真実がいま初めて語られる!
「S多重アリバイ」**アポロ菅原**
◎他じゃできない!UFO大特集!!
&Mr・ウォーリーピンナップ

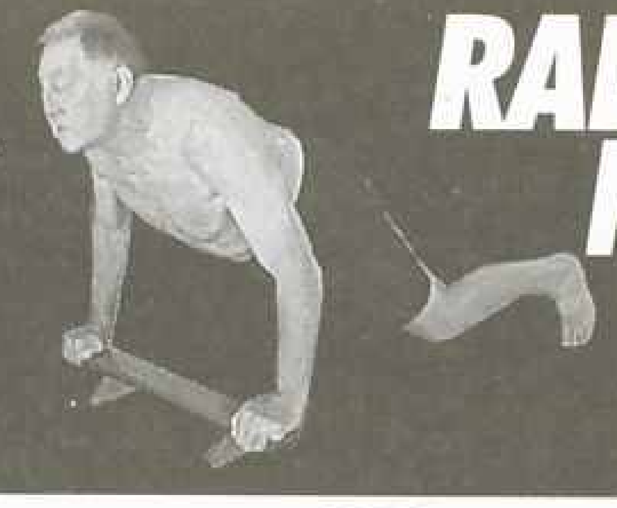
【購入方法ネ】
●現金書留と郵便振替の2種類があるネ(バックナンバーは通販でしか扱ってないヨ。書店では買えないヨ!)

●現金書留の場合
**〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
(株)ダブルクロス『RADICAL通販』係**まで

●郵便振替の場合は用紙裏面の通信欄に希望号数を明記し、
00130-3-769154(株)ダブルクロスまで

代金は創刊号=610円 2号=660円 3号〜10号=680円 11号=780円 送料1冊=310円 2冊=340円 3冊〜4冊=450円 5冊=520円 6冊以上=700円

PUSH UP! プッシュアップ! RADICAL NEWS



今号は気合いを入れて月刊ペースでの発行である。まぁ、そんなことはどうでもいいとして……（byジニアス君）。『紙プロ』の熱心な読者なら月刊化は大歓迎、でしょ？　まぁ月刊化と決まったワケじゃないけど、今回はテストケースとして、『紙プロ』で入手した新鮮なネタを伝えてみようかなと。その中から『紙プロ』がプッシュする注目大会を大々的に紹介する、名付けて『プッシュ・アップRADICAL NEWS』開幕!



バーリ・トゥード・ジャパン'98

勢いに乗る男達のプライドを感じろ! プロレスファンよ目を逸らすな!

この闘いを見ずして修斗は語れない! MJ（マイケル）か、VTJ（バリジャパ）かそれが問題だ!

見てみ、この修斗面!!

修斗四天王見参!!

今年のバーリ・トゥード・ジャパン'98の目玉は、何といっても、エンセン井上、朝日昇、佐藤ルミナ、桜井速人の修斗四天王の揃い踏みであろう。最近の後楽園ホール大会は常に満員を続け、その勢いは留まるところを知らない修斗。それに拍車を掛けるようにして行われるのが、今回の東京ベイNKホールでの「バーリ・トゥード・ジャパン'98」である。

その中でも期待せずにはいられないのが、昨年の「バーリ・トゥード・ジャパン'97」でのフランク・シャムロック戦以来、久々登場の、エンセン"大和魂"井上だ!

締切間近の9・18現在、エンセンの正式な対戦相手は発表されていないが、対戦候補として、ランディ・クートゥアー、トム・エリクソン、マーク・コールマン等、世界の強豪の名前が続々とあがっている。エンセン曰く、「エリクソンは強いけどまだ日本でそんなに知名度ないネ。コールマンも最近負けたりしてるし、一番やりたいのはクートゥアーね」とのことだが、誰が相手になっても現在の総合格闘技界のビッグネームとの試合になることだろう。

およそ一年間の充電期間を経たエンセンは"賢い野蛮人"となっているのか!? それとも"ワイルドな野蛮人"のままなのか!? どちらにせよ、エンセンと対戦相手との心の潰し合いが見られるはずだ。『紙プロ』大推薦・エンセンの暴れっぷりを堪能してくれ!

他にも、朝日、ルミナ、マッハ、須田匡昇、宇野薫等のファイトも見逃せない。現在の修斗のオールスター戦とも言えるこの大会。格闘技ファン、プロレスファンみんなまとめて超必見!

VALE-TUDO JAPAN'98

【現在の予定カード】

修斗ヘビー級王者・**エンセン井上**vs超スーパーヘビー級・**X**
修斗ライトヘビー級1位・**須田匡昇**（クラブJ）vs**超大物外国人選手**
修斗ミドル級王者・**桜井"マッハ"速人**（総合格闘技木口道場）
vs**超特別外国人選手**
修斗ウェルター級1位・**佐藤ルミナ**（K'sFACTORY）
vs**超強豪外国人選手**
修斗ライト級王者・**朝日昇**（STG大宮）vs**ジョン・ホーキ**
修斗ウェルター級5位・**宇野薫**（慧舟會）vs**ヒカルド・ボテーリョ**
※その他1～2カードを予定。

1998年10月25日（日）
《開場》15:00　《開始》16:00

[入場料金]
SRS席￥20000／RS席￥15000
アリーナ席￥12000／パノラマ席￥10000
スタンドS席￥7000／スタンドA席￥5000／スタンドB席￥3000

【お問い合わせ】
株式会社ワールド修斗　0471・66・6071
バックステージプロジェクト03・3357・8080

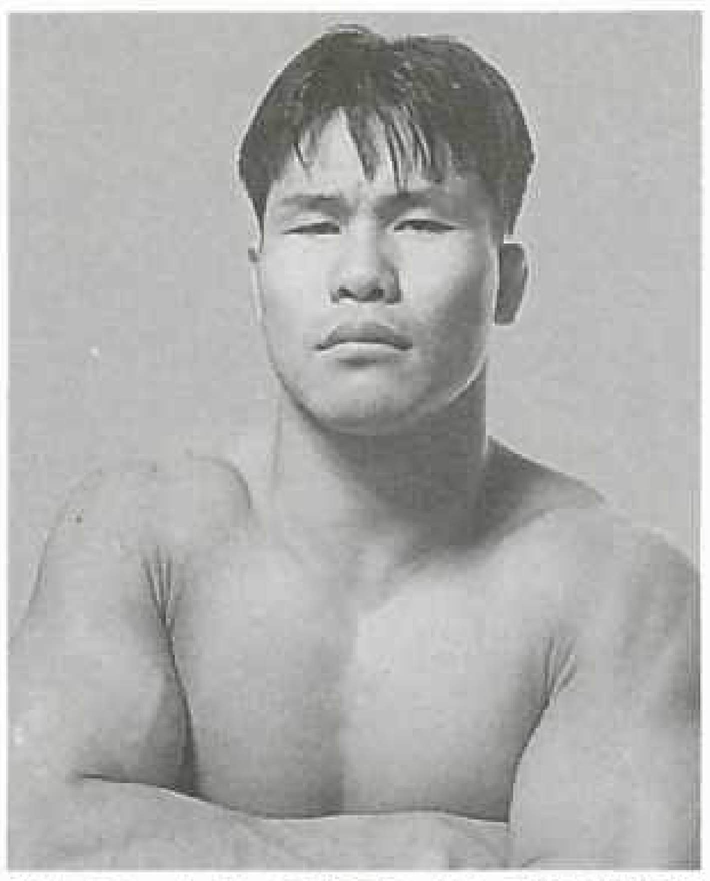
※緊急ニュース：とか何とか言ってるうちに「エンセン井上vsランディー・クートゥアー」決定!!

RINGS

リングス版第一次世界大戦敢行!!

世界最強の国もリングスが決める!!

毎年恒例のリングスのトーナメントが今年も近づいてきた。今年は今までとは、ちっと違う。「〜第1回国別対抗戦 FNRカップ〜」という大会タイトルを見ればわかるとおり、「個人vs個人」の闘いではなく、よりワールドワイドに、「国vs国」のチーム対抗戦となったのだ。FNRとは、おそらくファイティング・ネットワーク・リングスということなのだろう（TNRではない）。発表されている出場国は、リングス・ジャパンから2チーム、ロシアから2チーム、オランダ、ブルガリア、グルジア、オーストラリアの全6ヶ国となっている。ハッキリ言って、これはリングス版第一次世界大戦だ！ これだけの国の大男達が、己の肉体を武器に国の威信を懸け激突するのだ。壮絶な闘いとなるのは間違いない！ 願わくば、特攻隊精神を持った前田日明にこの戦争に加わって欲しかったなと。でしょ？ 君もこの闘いに参加せよ！



昨年のトーナメントで優勝し、リングス初代無差別級王座に輝いたのが田村潔司。今年は高阪、成瀬と共にジャパンBチームと決定した。、トーナメント内でタリエル、オーフレイムへのリベンジは果たせるか!

現在アメリカ在住の高阪だが、今回のトーナメントにはジャパンBチームとして出場が決まった。田村、成瀬との3人がBチームとなるが、ズバリ優勝候補筆頭チームであろう。怪獣・高阪の大暴れは見られるか!



RINGSワールド・メガバトル・トーナメント1998
〜第1回国別対抗戦　FNRカップ〜

【各国出場選手】

ジャパンA	山本宜久、金原弘光、坂田亘
ジャパンB	田村潔司、高阪剛、成瀬昌由
ロシアA	ヴォルク・ハン、イリューヒン・ミーシャ、セルゲイ・スーセロフ
ロシアB	ニコライ・ズーエフ、アンドレィ・コピュロフ、バロージャ・クレメンチェフ
オランダ	ハンス・ナイマン、ディック・フライ、ヨーブ・カステル
グルジア	ビターゼ・タリエル、グロム・ザザ、ビターゼ・アミラン
ブルガリア	トドール・トドロフ、ディミータ・ペトコフ、ボリス・ジュリアスコフ
オーストラリア	クリストファー・ヘイズマン、ドミニク・デレィニィ、トロイ・イッテンソン

【大会日程】

一回戦（Aブロック）1998年10月23日（金）愛知県体育館
ジャパンAvsブルガリア　ロシアAvsオランダ
一回戦（Bブロック）11月20日（金）大阪府立体育館
オーストラリアvsグルジア　ロシアBvsジャパンB
準決勝戦12月23日（祝）　福岡国際センター
決勝戦1999年1月23日（土）日本武道館

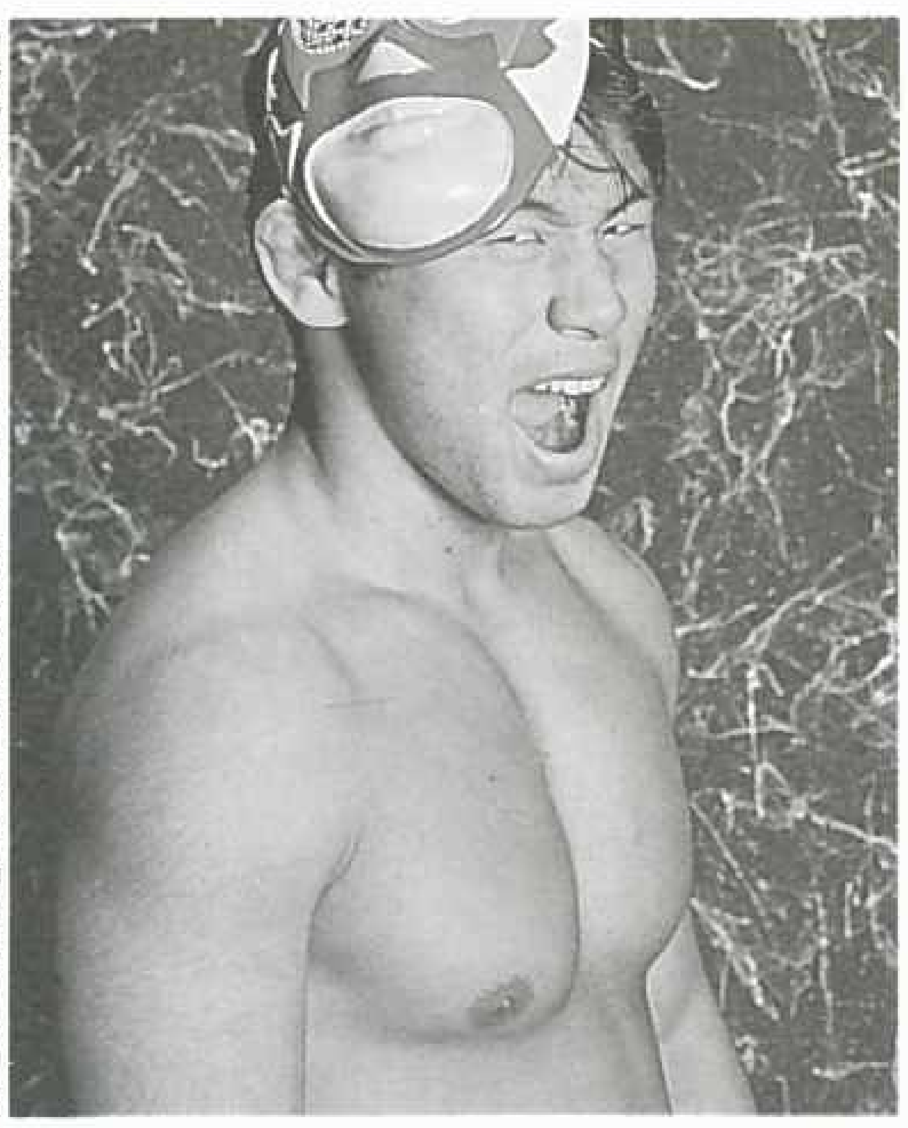
【お問い合わせ】
リングス　03・3461・0257

シュートボクシング

オカマムエタイ戦士・パリンヤー増殖?

村浜よ、勝ってデルフィンポーズを見せてくれ!

4月の『ダブルクロス』に続き、SB大勝負第2弾！ 会場は日本武道館ということで、ヤーブロー級のカードが組まれること間違いなし！ 一般マスコミにも絶大な支持を得た、オカマムエタイ戦士パリンヤーの再来日も決定している。パリンヤーは「私は誰とでも闘うワ！」ただし、「イヤらしくて汚い人は、ダメ」ということである（プチ脱落！）。さらにパリンヤー2世、14歳のオカマムエタイ少年コムクリット・チャカブット（愛称ノンベン）も来日予定。吉鷹弘のラストマッチも見逃せない！ 性別を超越した戦士たちの闘いを見よ!?



"爆弾小僧"村浜"ダイナマイト"武洋が対戦するのは「ムエタイの9冠王」で「神」とまで呼ばれたチャモアペット・チョーチャモアン。チャモアペットのタイでの知名度は、知らない人を捜す方が手っ取り早いくらいの、ムエタイのジャイアント馬場的な存在である。村浜のセコンドにデルフィンの姿は見られるのか？

シュートボクシングチャリティーイベント
「GROUND ZERO TOKYO」

日時　11月14日（土）　会場　日本武道館
時間《開場》15:00《開演》17:00

入場料
SRS¥20.000／RS¥12.000／SS¥10.000
S¥8.000／A¥5.000／B¥4.000／C¥3.000

発売所
チケットぴあ／チケットセゾン／CNプレイガイド／後楽園ホール／ローソンチケット／書泉ブックマート／大山アメリカン／レッスル／東急文化チケットセンター／レンタルビデオチャンピオン

【お問い合わせ】
シュートボクシング協会
03・3843・1212



「ボクサーでもプロレスラーでもドンドン挑戦して来て欲しいワ」とパリンヤーは言っているが、対戦相手は、神取か？ それともニコル・バスか？ 関係ないけど、ヤーブローの参戦はあるのか？ 期待度大！



UFO 世界格闘技連盟
ユニバーサル ファイティング オーガナイゼイション

UFO目撃率100%! 両国の空を見上げよ! そして君も歴史の証人となれ!

10・24 Mr.ウォーリーはどこに? 未確認飛行団体「UFO」発進しま〜す!

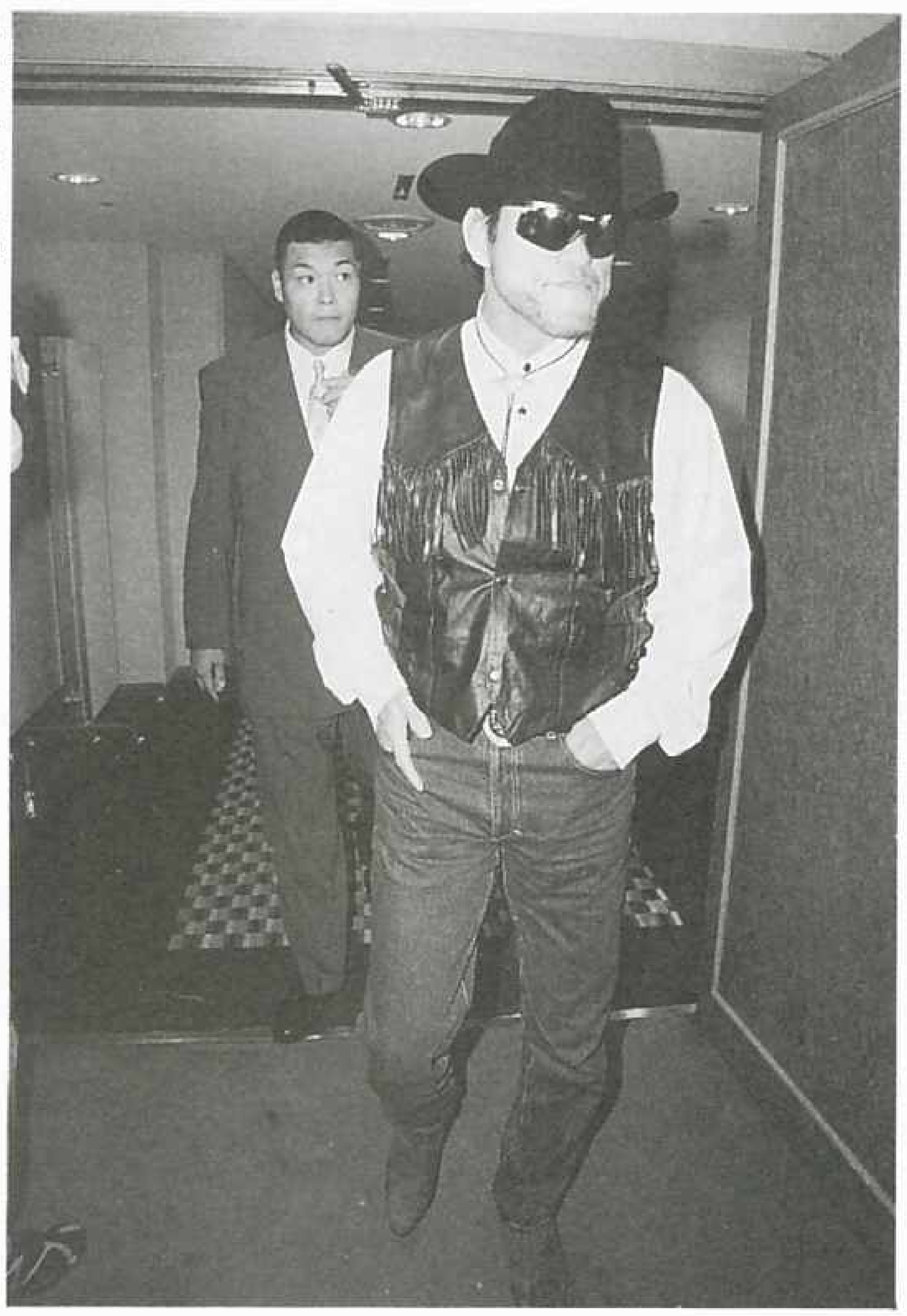


9・8UFO旗揚げ戦の緊急記者会見。席上にはメンバーの肩書きが掲げられた。猪木は“チェアマン”、小川は“ファイティング・アーティスト”、佐山は“プレジデント”、藤原敏男会長は“トシちゃん”(USO)。この肩書きを見るだけでも「ヨッ!大統領」と声を掛けたくなる素敵な団体がUFOなのである。

UFO『TAKE OFF』10・24両国国技館で旗揚げ決定!

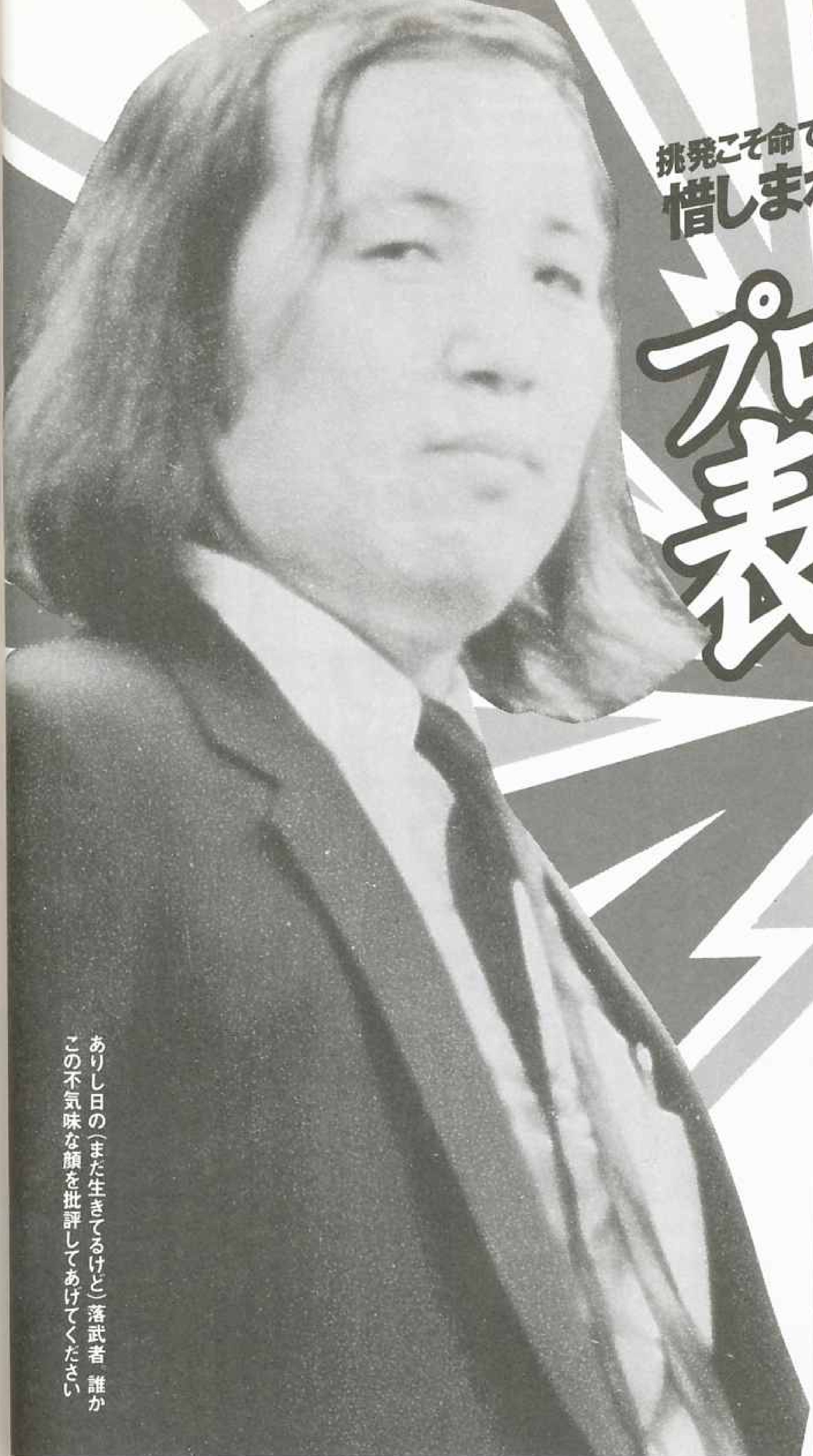
謎が謎を呼ぶ未確認飛行団体UFOが遂に我々の目の前に現れる。紆余曲折を繰り返しながら、世界格闘技連盟『UFO』の全貌がようやく明らか(?)にされた。

猪木チェアマンは会見で「え〜、最近の世の中には、笑いというものが欠けてるような気がします。これからは笑いを人々に伝えていきたい」との抜群のコメントをするなど、心身共に絶好調の様子で、(現役復帰は?)との質問が飛ぶと、「そんなことはありませんけど、ンムフフフフ」と報道陣を煙に巻き、「まあ、中身については、まだハッキリ決まってねえんですよ。ダーッハッハッハッハッ!」と豪快に笑い飛ばしてくれた。



なんだかんだ言ってもファンが一番期待しているのは、アントニオ猪木の試合はあるのかということだろう。なかには格闘家・猪木寛至として試合に出るのではという噂もあるが、ここは一発Mr・ウォーリーの登場を期待しよう(ローラーブレードに乗って)。そして、悲しき天才・セッド・ジニアスの猪木寛至への直接アピールはあるのか!? 取りあえずUFO搭乗チケットは押さえておけ!

注目の参戦選手は、日本人所属選手として小川直也、佐山聡、村上一成。当初、名前の挙がっていた世界の柔道王ラファエル・クバッキ(ポーランド)は条件面で折り合いがつかずUFOに搭乗することはなくなってしまったようだ。しかし、UFO代表・佐山聡お得意のインターネットを通じて、世界各地から80人以上もの超有名強豪格闘家が『UFO』にアクセスしてきているという。その中から佐山のアンテナに引っ掛かった大物格闘家が、215センチ“デ怪物”ガン・マギー(23歳・米国)。トムいやガン・マギーは、バーで力自慢の腕自慢たちが賞金を賭けて闘う、地下室マッチ(キャプチャーではない)で名をあげたリアル・喧嘩ファイター。地下室マッチでの戦績は86戦無敗(9月18日現在)を誇り、相手がいないと見るや、すぐさま『UFO』にメールを送ってきたというから、ヤル気と実力は申し分がない。さらにキックの経験もあり、キック界での戦績は11戦11KO勝ちというから期待できるだろう。佐山も「マギーはアルティメットに出れば優勝できると思いま〜す」とその素質をベタ褒めしている。「マギーは小川の好敵手となれるのか!この日はキックボクシングを含め8〜10試合が予定されている。しかも当日深夜にはTBSでテレビ中継も決まり、その結果次第では来年4月からのレギュラー放送も間違いないということだ。この秋注目の新団体『UFO』離陸! 良い子も悪い子もRIDE ON UFO!!



ありし日の（まだ生きてるけど）落武者　誰か
この不気味な顔を批評してあげてください

挑発こそ命ですよオオオオ!!

惜しまれながら最終回!!　元・『週プロ』編集長 現・全身編集評論家ターザン山本の

プロレスマスコミ 表紙批評!!

とにもかくにも、あちこちで「挑発」を繰り返す"活字プロレス界のローランド・ボック"。だが、先日、中村カタブツ君（35歳）を前に「もうプロレス・マスコミの低調ぶりには黙ってられませんよ～」と全面現場復帰宣言をしたらしい。その暁には『紙プロ』にもキッチリと噛みついてきていただきたい。そういうことですよォォォォ!!

この『週プロ』の表紙のストーンコールドっていうのはホントに凄いんだよ、アメリカでの人気が。でもアメリカン・プロレスっていうのは浸透してないんだよな、日本では。

だけど、ハッキリ言ってポーズ写真、バックの色と要するに、キマってるんだよ、この表紙は。動きがあって、一番乗りに乗ってる大スターであるストーンコールドのオーラが発散してるなと思った。絵的にもの凄くいい！　ストーンコールドらしくて。これはオレは視覚的に好きだよ。視覚的に気に入った！

アメリカンプロレスの定義立てを言えば、これは遠い遠い国の世界のことでしょ。衛星放送が出てきてもまだまだ身近じゃないでしょ。そういう突発的という意味では否定するファンが多いかもしれないけど、こういう路線をもっとドンドンやってほしい。

ただ、あまりにも唐突に出てきたんで引いちゃうと思うんだよな。だからストーンコールドの魅力をもっと大々的に伝えるべきだったんだよ。でもオレはこの表紙は肯定する！　久々のいい表紙だ!!

あとバトラーツの表紙という手もある。今度の11・23の両国大会というのは、いまのプロレス団体が失っているロマンを体現しようとしてるわけよ。ボブ・バックランドを呼んだり、グレッグ・バレンタインを呼んだり、ほかにも強豪外人を呼ぼうとしてるわけ。そういう大それたことをやるということは、夢に利子をつけてファンに還元してるということですよ。オレだったら「バトラーツは偉い！」っていう大きなコピーにする。「11月23日はバトラーツだ」ってオレはやる！　これは大変なことだよ。パンクラスに行けなかった劣等生が両国でやるんだよォォォ！　劣等生たちの反乱ですよ！

一方、『ゴング』はｎＷｏの蝶野と武藤が台湾に行った時の記者会見を表紙にしてるけども、一番悪い拡散した表紙だ！　ゴミ箱をぶちまけたような表紙！　ゴミ台風！　字もゴミだし、写真もゴミだし、みんなゴミゴミだ！　目がチカチカする。

この「黒色風暴」と「台湾」の文字を同じ色にしてるために繋がってるように見えるわけ。つまり、読めない！　これをやるなら「台湾」という文字を赤にするなり、色を変えなきゃいけない。文字も多ければ、少年たちがｎＷｏのプリントを顔にしてて写真もゴチャゴチャしてる。

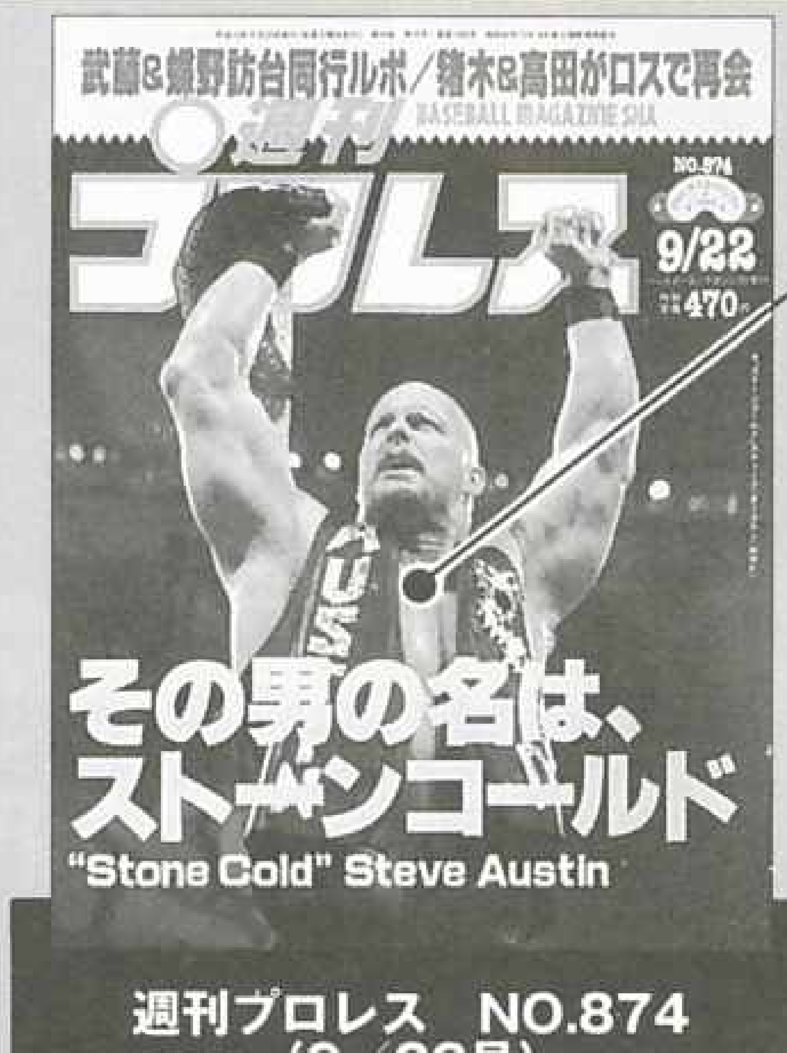
だいたい台湾に行くからなんだってことだよ。これが南極だとか、マダガスカル島だったらまだ意味はわかるよ。それだったら、オレは目がチカチカしても我慢しますよぉ。だけど、台湾なんていまはみんな行けるだろ。ｎＷｏが興行を行うってわけでもないでしょ。つまりこの表紙はまったく意味がないんですよォォォ！

「一番悪い拡散した表紙だ！　ゴミ箱をぶちまけたような表紙！　これじゃゴミ台風ですよ～!!」



週刊ゴング　NO.732
（9／24号）
■表紙コピー：
台湾　黒色風暴
in Taiwan
■表紙サブコピー：蝶野&武藤人気が爆発!! nWoは今アジア圏へ
■表紙担当：?
■巻頭カラー：「蝶野正洋インタビュー」（取材&構成・谷口範夫）
■トップ記事：「大仁田FMW離脱の舞台裏と波紋　UFOが10・24両国で旗揚げ戦!!」大仁田のFMW離脱宣言と、アントニオ猪木率いるUFO旗揚げの動きを検証し、マット界への影響を考える

「これはオレは肯定する！　久しぶりにイイ表紙だ!!」



週刊プロレス　NO.874
（9／22号）
■表紙コピー：
その男の名は、
ストーンコールド
■表紙サブコピー："Stone Cold" Steve Austin
■表紙担当：鶴田倉朗
■巻頭カラー：「nWoタイフーン、台湾を直撃!!」テレビ朝日『ワールドプロレスリング』が台湾でも放送されることになり、蝶野と武藤が台湾で展開したそのプロモーション活動をリポート（佐藤正行前特派員）
■トップ記事：「映像はリアルタイムでやってく来る　多次元メディア時代のプロレス考」衛星放送によってほぼリアルタイムでアメプロを楽しむことができる現状とその未来を考察

『週プロ』のこの号の表紙にオレはビックリしたよ！　ジュニアヘビー級の小川良成がヘビー級の秋山に勝ったことは大異変じゃないんだよ。大異変といったら、かつてだったら、新日本に起きたクーデターとか、新間さんが追放されたとかのスキャンダルが起きた時に言うわけでしょ。
でも、偶然小川が秋山に勝ったという裏ではもの凄いことが起こってるわけ。つまりこれは、ジュニアヘビー級がヘビー級のトップに勝ったという現象面が大異変じゃなくて、馬場さんのプロレス観が否定されたということが大衝撃なんですよォォ！　これまでの馬場さんの世界観の中では、ジュニアがヘビー級に勝つことなんてありえないわけでしょ。だったら「馬場プロレス破壊される！」とか「馬場哲学が何十年目にして破壊された！」とか「馬場哲学が襲撃された！」とかオレだったら打つよ。「真夏の大異変」だけじゃわからない。もしかしたら、これは「ジャイアント馬場に対する反抗なのか？」っていう形にするべきですよ！
「大異変」の中身、この試合の持つ意味、その本質は「馬場プロレス」が否定されたことなんだよ！　だから、表紙には馬場さんの写真が絶対に必要だったわけよ。全日本プロレス旗揚げ何十年かの最大の大事件なんですよ、これはアァァァ！　全日本にマグニチュード8の大激震が起こった！　恐るべき自体になってしまった！　だからこれはすぐに馬場さんにインタビューに行くべきなんだよ！　そうすれば一番面白かった！
『ゴング』の方はね、真の意味での迫力のある話題がマット界になくなってしまったことの不幸から出てきた表紙ですよ。船木と高田の2ショットは『ゴング格闘技』でも使った。それをなんでもう一回使うの？
一番重要なのは、ハッキリ言って船木と高田が会ったのは、単にスカイ・パーフェクTVのセッティングでやってるだけであって、ここからモノが発展していく裏付けが何もないわけよ。蝶野と三沢もただ単に写真記者クラブの中で出会っただけでしょ。ここから二人が何かをすることは何もないわけ。そこに幻想を持ってはいけないんだよ、根拠がないんだから。
つまり、実現の可能性マイナス200％なんだから。オレから言わせれば、気をもたすだけの犯罪行為なんですよォォ！
それを表紙にしなければならない『ゴング』は、いままで対抗戦とかそういう夢を歴史的にやってきたから、根拠がないものにでも夢を持たせようとしなければならない。それが哀しいねぇ。いまのマット界にいかに夢がないか、夢を提供する気持ちが彼らにないか。三沢にも蝶野にも高田にも船木にも夢はないし、実行力もないし、意志もないということですよ。だから、これを見せられるファンというのは不幸だよ。ホントはこれを見てワクワクしなければいけないんだよ。現実化していかなければいけないんだよォォ！
だから、ハッキリ言ってこれは、夢の空手形の2ショットだ！！　夢の不良債権って言ってくれ！！！　夢を倒産させていいのか？　プロレスラーが！　ファンにもマスコミにも時代に対しても利子をつけて夢を与えてくれるのがプロレスラーじゃないのか？　違う？
『ゴング』だってこの先に何かがあるとは信じてないですよ。「見たい〜」っていう願望を言ってるだけですよ。悲しい叫び、悲しいつぶやきですよ。いかにマット界がダメかってことをこれで証明してるわけですよ。若い人が夢をなくしてどうすんの？　ふざけんなですよォォ！

『ゴング』のこの表紙はいいねぇ！「K—1にやられた」っていうのももの凄くいいよ。K—1がプロレスラーの安生（洋二）と長井（満也）という、マット界のボートピープルと化した人に救いを与えて、結局二人とも無惨にKOされてしまったわけでしょ。
でも、だからと言ってオレはプロレスが負けたとは思わない。K—1にやられたんですよォオォ！　だから、プロレスが負けたわけじゃなくて「K—1にやられた」と打ったこのセンスはハッキリ言っていい！
「プロレス敗北」じゃいままでのパターンでつまんないし、「またレスラーがやられたのか……」というファンの絶望感をあおるだけだけど、「K—1にやられた」だったらプロレスラーが負けたのが消えてるでしょ。「K—1」を主語に持ってきたことがいいわけ。K—1が凄いってことを浮かび上がらせたわけよ。それに「K—1にやられた」という赤い文字と安生の黒のタイツのコントラストが非常にいい。それにコピーをV字型にしてるでしょ。このV字の形に文字を置いたのがいい！　これがもの凄く効いた！　ハッキリ言ってハイキックをイメージさせる。ビシッと右から左からハイキックが入ってる感じ、安生に。
これは凄い表紙だ、デザイン的に。鋭角的だぁ！　素晴らしい表紙だぁ！　最近の表紙の中で一番イイ!!
だけど、一つだけ欠点がある。長井の写真を載せたのが悪い。安生と長井、写真を2枚載せて説明的にしようとしてるけど「安生、長井揃って討ち死に……」というサブコピーで十分だった、うん。これで100点満点のところがマイナス15点になったなぁ。惜しかった。
それに比べて『週プロ』は、ファンとライガーの討論を載せてるけど、ハッキリ言ってファンの側が問題提起したわけじゃないでしょ。『週プロ』が勝手にやった、ファン・サービスの。『週プロ』の自己満足でしょ、ファン・サービスの。これを表紙にもってきたことはカスを表紙にしたようなもんですよ。つまり、これは〝『週プロ』ピクニック〟の表紙なんですよォォ！
ピクニックに行って、「ああ、面白かったた」っていうのを表紙してるようなもんですよ。ファンの集い雑誌だ！
あのね、この週は全日本プロレスが岡崎でやって、リングスが新潟でやってたけど、ほとんど新聞記事にはなってなかったんだよ。全部が『K—1BUSHIDO』に取られてしまった。リングス新潟大会と全日本の岡崎大会がやられたんだよ、K—1に。それをオレなら大々的に巻頭記事にして、「エライことだぁ！」という表紙にしますよ！
リングスの田村とか、全日本の三沢に「なんと考えてるんですか、この現実を？」って聞くよ。そういう問題提起をするよ。そういう大問題を3時間徹底討論しなきゃいけないんですよォォオォ。ピクニックに行ってる場合じゃないんだよ、ファン10人と！　ママゴトやってる場合じゃないんだよォォ！

「『K—1にやられた』という赤い文字と安生の黒のタイツのコントラストが非常にいい」



週刊ゴング　NO.731
（9／17号）
■表紙コピー：
K—1にやられた!!
■表紙サブコピー：安生、長井が揃って討死…
■表紙担当：？
■巻頭カラー：「勝つには、勝ったが…」〈K—1BUSHIDO／8月28日・国立代々木第二競技場〉小川直也VSダン・リデル戦リポート
■トップ記事：「極論！　K—1にやられた」プロレスラー小川、安生、長井が出場したK—1BUSHIDOを総括。プロレスが格闘技に呑み込まれる可能性を危惧

「リングス新潟大会と全日本の岡崎大会がやられたんだよ、K—1に。それをオレなら大々的に巻頭記事にして、「エライことだぁ！」という表紙にしますよ！」



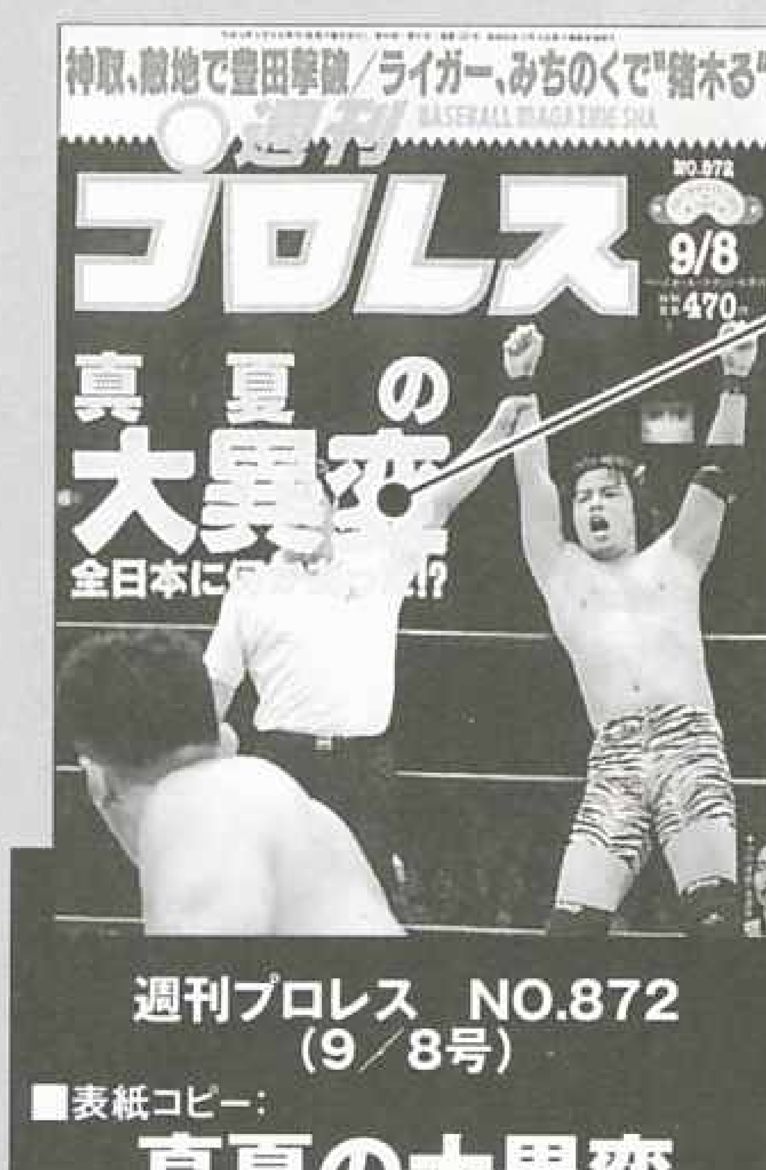
週刊プロレス　NO.873
（9／15号）
■表紙コピー：
徹底討論、3時間！
■表紙サブコピー：新旧プロレスファンの“本音”を聞け！
■表紙担当：佐藤正行
■巻頭カラー：「三沢&秋山組、発展的解消…」〈全日本プロレス／8月30日・博多スターレーン〉三沢&秋山組vs小橋&大森組リポート（湯沢記者）
■トップ記事：「長州力“新日本監督”に訊く」聞き手・浜部良典

「夢の空手形の2ショットだ！！　夢の不良債権ですよ〜」



週刊ゴング　NO.730
（9／10号）
■表紙コピー：
リングで見たい!!
■表紙サブコピー：Uの逆襲　メジャーの覇道
■表紙担当：？
■巻頭カラー：「高田と船木が笑顔で再会!!」パンクラスの船木と高田道場の高田がスカイ・パーフェクTVの番組で対談。その時の記者会見の模様を再録
■トップ記事：「高田&船木の握手に障害はなし！　三沢の全日本改革の先に見えるものは!?」高田と船木の握手、蝶野と三沢の握手の意味と今後の発展の可能性を示唆

「表紙には馬場さんの写真が絶対に必要だったわけですよ〜」



週刊プロレス　NO.872
（9／8号）
■表紙コピー：
真夏の大異変
■表紙サブコピー：
全日本に何があった!?
■表紙担当：鶴田倉朗
■巻頭カラー：「職業、女子プロレスラー」〈全日本女子プロレス／8月23日・川崎市体育館〉神取vs豊田WWWA世界シングル戦リポート（佐藤景記者）
■トップ記事：「さあ、三沢革命」3ヶ月ぶりに復帰した三沢光晴の全日革命の展望

「一番悪い拡散した表紙だ！　ゴミ箱をぶちまけたような表紙！　これじゃゴミ台風ですよ〜！」



プロレスマスコミ表紙批評!!



「ゴングのインタビューに出るのを復活っていうのか？　バカげてますよォォォ！！！」

週刊ゴング　NO.729（9／3号）

■表紙コピー：
長州、復活60分
■表紙サブコピー：8ヶ月ぶり…この顔が表紙へと返り咲き!!
■表紙担当：?
■巻頭カラー：「カムバックに向けて…これから練習するよ（笑）」長州力インタビュー（聞き手・金沢克彦記者）
■トップ記事：「大仁田が徹底的な邪道路線で巻き返しへ、波乱含みのFMW統一機構を最終検証！」大仁田グループが中心となったFMWの統一機構、新システムと今後を探る



「要するにパンクラスに対するおべんちゃらの表紙を作ったわけですよォォォ！」

週刊プロレス　NO.871（9／1号）

■表紙コピー：
21世紀、迫る！
■表紙サブコピー：パンクラス9・14武道館まであと1ヶ月
■表紙担当：宍倉清則次長
■巻頭カラー：「ホンモノは誰だ!!」〈みちのくプロレス／8月16日・青森県民体育館〉G・サスケ＆G・サスケ・ティガvsS・ザ・グレート＆M・タイガー戦リポート（鈴木健記者）
■トップ記事：「エンターテインメント・プロレス“第3の選択肢”か？　いま再び動き出したFMWという運動体」FMWのエンターテインメント・プロレス路線を検証し、8月11日の後楽園大会の異様な盛り上がりの原因を探る

あのね、増刊号の基本は、〝ナマモノ〟を〝早く出す〟という2大コンセプトがあるのね。つまり腐らないうちに出すというか新鮮なうちに出すというかさ。ボクがよく言うようにコンビニのおにぎりと一緒なんですよ。ハッキリ言うと増刊号っていうのは賞味期限がある。賞味期限っていうのは大会があった日から5日以内。それを10日遅れで発売しては、もう商品としてまったくダメなんだよォォォ！

つまりこれは、いままで出た数ある増刊号の中で、もっともマヌケな、増刊号の基本コンセプトを二つともハズした史上最悪の増刊号なんですよォォォ！

でも、それは先陣を切って作った佐藤正行もわかってるから何かヒネらなきゃいけない。そこで藤波を破ってIWGP王者になった蝶野を持ってきた。その蝶野を新幹線の中で特写してインタビューすれば、増刊号の遅れた分の賞味期限を補えるんじゃないかという甘い発想だね。それから、「nWo」と「蝶野」を〝駆け込み寺〟というか〝神頼み〟というか、そういうふうに考えているということが露骨に見えてしまうわけ。

その発想と期待でやってるところに佐藤の甘さがある！　しかもそれがファンに読まれてしまうわけよ。コピーも説明的だからパワーもリアリティーも感じられない。「黒」はnWo、ベルトは「太陽」、西は「大阪」。非常にイージーな連想しか思いつかないところに欠点があるということです。

中身も、試合リポートを巻頭に載せないで、例えば緊急インタビュー巻頭30ページとかさ、そういう特色を出さなきゃいけないわけよ。そうすれば読者にも、蝶野の生の声を一番最初に聞けるありがたみが生まれるし、差別化もできる。内容次第ではもの凄く面白いことになるよ。賞味期限を補えるかもしれない。

それとね、この表紙の写真の構図は蝶野らしくていいんですよ。蝶野をやるんだったらこれしかない！　でも敢えて言うとしたら「蝶野の顔」と「ベルトを取ったこと」と「インタビュー」というものの三点をもうちょっと強調しなきゃいけないんだけど、これじゃベルトがわからない。もっとベルトを強調しなきゃ。それがこの写真の弱点だよ。

でもね、これは十日遅れで増刊号を出してる時点でもう、何を言ってもダメだ。何も弁解できない。賞味期限を切れたものを出すということは、商品として犯罪なんです！　読んだ人が食あたりを起こしますよォォォ！



「コピーも説明的だからパワーもリアリティーも感じられないんですよォォォ」

週刊プロレス　NO.870（8／30特別増刊号）

■表紙コピー：
西から昇った黒い太陽
■表紙サブコピー：新日本プロレス8・8大阪ドーム大会「RISING THE NEXT GENERATIONS in OSAKA DOME」完全詳報号
■表紙担当：佐藤正行?
■巻頭カラー：「A・猪木の向こう側へ行こう！」〈新日本プロレス／8月8日・大阪ドーム〉藤波vs蝶野IWGP戦リポート（佐藤正行記者）
■特集記事：「蝶野正洋にとってのIWGP、藤波辰爾、新日本、マスコミ、プロレス…」IWGP奪取から3時間後、ニューチャンプ蝶野に佐藤正行記者がインタビュー

まず『週プロ』。シッシー（宍倉次長）は「試合をしてる者を正当に評価する」と常々言ってるのに、なんで試合をまったくしていない新人の渡部謙吾が表紙なの？　次長のやってることに客観性はない！　要するにこれは、パンクラスに対するおべんちゃらの表紙を作ったわけです。

しかもパンクラスは実績を一番大事にしている団体のはずなのに、試合をしてない渡部を表紙にすることによって自分を否定してしまったことにもなったんだよ。ゼッッタイに渡部だって喜んでませんよ。自分の力で表紙を勝ち取ったわけじゃないでしょ。

それにこの表紙じゃ、パンクラスの会員とか信者にしか、メッセージが伝わらない。だから、こういう表紙を作るシッシーっていうのはパンクラス信者のライセンスナンバー1なんですよォォォ！！！　でも、これは逆にシッシーの表紙としては200％の表紙ですよ。信者以外の人は感情移入できないけどね。

つまりこの表紙は、次長がパンクラスの上層部にいい顔をしただけです！　自分が担当してる団体だけ気を使うというか、いい顔をするというか、おべんちゃらするというか私物化現象が始まっているんだよ！

だから表紙は担当制で順番にやるんじゃなくて編集長がやらなきゃダメなんです。だって編集長がすべての責任を取らなきゃいけないわけでしょ。浜部編集長がやらなきゃダメなのに、それをほかの奴にやらせたらト～ゼン自分が担当してるところを持ち上げますよ。いい顔するために。それを断たなきゃダメだぁ！

この週はオレだったら、FMWの荒井（昌一）社長を表紙にする。荒井社長というレスラーでもないドシロウトがリングに上がったわけでしょ。オレはこの事件を表紙にしますよ～。荒井社長はボロボロになりながら「FMWは永遠に不滅じゃあ～！」と叫んだ。レスラーじゃないから表紙にしたら怒られるかもしれないけど、あの真面目な荒井社長がリングに上がったことがいい悪いは別として、非常に破廉恥で面白いわけです！　その破廉恥な事件をどう捉えるかの方が刺激的ですよ！

それから『ゴング』！「長州復活」って、ゴングのインタビューに出るのを復活っていうのか？　バカげてますよォォォ！！！！　オレが『週プロ』にいた時は、『ゴング』の長州のインタビューはもの凄い人気になって、オレ自身も読んでみたかったけどよ。

長州が、『ゴング』という媒体を利用して、『週プロ』というか、オレを批判するというのが長州インタビューの売りだったわけよ。だからオレがいない時に長州が何を言ったってな～んのインパクトもないんですよ～。この中でオレのことがチラッとでも書いてあるとか、オレが長州のことを書いた『弾圧』のことが書いてあるならば、それは面白いよ、刺激的で。でも、一切それが書いてないから刺激のないインタビューになってしまった。長州インタビューの賞味期限が切れているんですよォォ！

それに、こういう場にノコノコ出てきて自分のことをしゃべってる長州っていうのはハッキリ言って魅力ない！　ノコノコ出てきちゃいけないんだよ、長州の哲学からしたら。隠居生活してる長州が出てきた感じだもん。これは、なんにもなかった時の空白を埋めるための表紙だよ。大ボケの、大季節外れの表紙ですよォォォ！

【全身編集評論家の総括】

ハッキリ言って表紙を作ることがもの凄く難しい時代になってる　その苦しさはオレがやってる時よりは100倍の苦しさというのもわかる

なぜかというと、猪木、長州、前田がいないんだもん　この3人で70％ぐらいの表紙を取ってたわけでしょ、イメージ的には　で、それにかわる人がいるかといったらいないんだよ　だからオレがいま表紙批評をしても、作ってる人たちに何の罪もないわけよ　人材がいないんだから表紙になる、輝いてる人が　加えて事件もないわけだから作る方としては苦しいのはわかるよ、気持ちは

でも、編集というのは無から有を生むのが醍醐味なんだよ　で、有を探したらいけない　まずは頭を無にして何かあったらすぐに反応できるように準備してなきゃいけない　不景気とか、スターがいないとか、客が入らないとか、ネガティブな気分ってあるでしょ　そういうものに冒されないポジティブな気分を持って、ガアーッといかなきゃいけないいんだよ

つまり、長嶋監督ですよ　あきらめてないよ、あの人は　いつも元気でしょ　長嶋監督は編集者の鑑ですよォォォオ!!

それに比べて『週プロ』は、いまの時代の気分と同じになってしまってる　もう表紙批評すらやりたくない　酷でしょ　彼らは簡単に言うと遊びの精神に欠けてる　8月は最悪の月だったのに、比例して最悪の表紙を作ってしまったということは、編集者としてのタフな精神がないということだね　編集者としての逆転の発想もないわけね　面白がらせてやろうとか、遊んでやろうという精神がない　大事なものがみんな欠けてるんだよ

だからあの人たちは普通の人たちだよ　あの人たちに罪はない　普通の人が何やったって普通のものしかできないもん　かえって精一杯違ったことをやろうとする姿が美しいよ　『週プロ』は美しい！　でも10月にはいろんな試合があるから、そこで奮起して新しい激流を作ってほしいよねぇ　これは親心です

オレがエグゼクティブ・プロデューサーをやった『プロレス激本』（双葉社）？　あれは読者が「プロレスへの愛が感じられない」とか、「便所の紙代わりにもならないクズ本だ」と怒ってるんだろ？　ということは中身は狙い通りなわけだ　挑発大成功ですよ！　ただ、表紙に商売心が足りなかった

だから10月20日発売予定の第2弾はオレが現場復帰しますよォォォ！　エグゼクティブ・プロデューサーとか言って喜んでたオレは狂ってたんだよ！　オレは長州力より早く現場復帰しますよォォー！　そういうことです

※というわけで、ターザンが全身編集評論家という肩書きを降ろし、編集者として現場復帰するということと、優しい本誌は「もう表紙批評をやっても意味がない」というターザンの気持ちを汲んで、今回をもってこの企画を最終回とします　10月20日発売予定という『プロレス激本』の第2弾とターザンの手腕に期待しましょう　これだけ他誌を辛口三昧してきたんだから、まさかつまんないものを作るわけがないですよね、山本さん「面白くなかったら、ガチ喰らわすゾ、コラァー！」（by長州力）といった関係者のみなさんの声も最後に代弁しておきます　そういうことです！

書評は平和ではない
書評は戦いである
武器のかわりが毒舌であるだけで
それは地上における最も激しい厳しい
自らを捨ててかからねばならない
戦いである——（ネール元インド首相の娘への手紙）

吉田文豪人生劇場

書評の星座 PART2

『U多重アリバイ』の書評が読者や関係者などの間で異常なまでに大好評。これはボクが支持されているからなのか、Show氏が異常に嫌われているからなのかは謎なんだが、そんなことはどうだっていいんです！ というように、ちっぽけな相手は決して視野に入れない、いつでもグローバルな書評コーナー。



プロレス危険地帯／ミスター・デンジャー
（松永光弘／長崎出版）

以前、ステーキ屋で「いま、本を書いてるんですよ」と松永に告白されたときのことだ。佐山チックな本になるのかと思って「じゃあ、『ケーフェイ』みたいな感じですか？」とボクが聞いたら、なぜか「ケーフェイ話は書きません！」とすっかり誤解されてしまったものなのだが、これは明らかに『ケーフェイ』以上に危険な一冊である。

さすがは会長が犬の鳴き声と花火を嫌うため、犬の飼い主や花火をしている子供を幹部に注意させたり、反抗されたら木刀で犬を叩き殺させたり、ついでに飼い主までボコボコにさせて警察沙汰になった（『紙プロ』本誌でボクが取材した情報）という「猪木寛至と水谷会長が作り上げた地上最狂・最後の格闘技」寛水流の出身者。

なにしろ**「あの水谷会長の狂気な目を思い出すたびに、ミスター・デンジャーの起源は寛水流にあったと実感させられる」**と松永も証言しているのだが、その会長の付き人時代に花火を打ち上げた奴を実際に脅していたのが、実は松永だったのだという。

まさに闘魂は連鎖する、であろう。

ちなみに松永が寛水流時代、**「一番困ったのは、水谷会長から千代の富士（現・九重親方）への挑戦状を渡されて、『これを横綱に渡してこい』と言われた時だ。会長は以前にも、横綱北の湖に挑戦状を出そうとして、その時、新日本の幹部から『国技館が使えなくなるから、相撲協会を相手にするのだけはやめてくれ』と言われていた事を忘れていたのだ」**というのも、さすがは寛水流。

まさに近頃の格闘家が忘れつつあるサムシングばかりをとことんまで凝縮した、異端の空手流派だろう。

そして**「ジャイアント馬場にも挑戦状を出し」**、**「いつだったたか、俺が水谷会長と話をした時には、『馬場の水平チョップなんて、あんなものは簡単にかわせるけど、ヘッドロックはちょっとキツイだろうなあ……』などと」**クソ真面目に言っていたことまで公開するから、とんでもなさすぎである。

馬場への挑戦問題はちょっとばかりデンジャーなのでボクも『紙プロ』には伏せ字で誌面に載せたのだが、さすがは松永。そんなことすらノー問題だ。

新日でのグレート・ムタ戦が発表されたとき、松永は**「もし、どうしてもドームに出なくちゃいけなくなった時は、俺、殺っちゃいますよ」**と小鹿に断言したそうだが、その言葉にも説得力すら感じてしまうほどである。

要するに活字の世界でもやっぱりミスター・デンジャーな松永は、いつ何時、誰にでも非常に牙を剥くのだ。伊達にFMW時代、付け牙を装着しちゃいなかったわけである。

たとえば**「電流爆破は見ておもしろいとは思ったが、あんなものTVのバラエティーでキャリー東野を相手に、天地真理だってやってたじゃないか。俺がやりたいのはTVのバラエティーなどで絶対真似できないようなデスマッチだ」**と、まずは大仁田に牙を剥く。

そして、かつての盟友・金村が**「他団体の練習してないような若手なんかと一緒にされたくない」**とスーパーインディーを宣言すれば、**「金村自身、W★ING時代は道場がなかったから満足な練習はできなかったし、新生FMWになってからは、『今年からは真面目に練習やりますから、ジム行く時は誘ってください』と俺に言っておきながら、1年間で15回しか来なかった」**などと牙を剥き、えらく具体的なことまで暴露してしまうのであった。

その他、**「おもしろいから」**という理由だけで**「世間知らずのボーゴ」**をW★INGの副社長にしたことや、ボーゴがコックリさんに熱中して**「霊にとりつかれてるんだよぉぉぉ！」**と巡業先のホテルで大騒ぎしたこと。はたまたダン・スバーン戦の前に**「サンボの経験がある神格闘十字軍の矢口壱琅に、ガードポジションだけを徹底的に教わった」**ことなど、ボクらの夢が膨らみまくる素晴らしい話を次々と暴露。

それでも**「俺は本書が暴露本であることを強く否定したい。だいたい、ミスター・デンジャーが暴露本を書いたら、こんな程度の内容で済むはずがない」**という最後に負けず嫌いぶりまで発揮する松永を、ボクは全面的に支持する次第なのである。なにしろShow氏の数十倍は文章も上手いし。必読。

プロレスから学ぶ 一撃！ 必殺技完全マニュアル
（猪だましプレス／ビー・エス・ピー）



思えば『東スポ』紙上で**「レスラーの必殺技を紹介し、実生活でたまるストレスを晴らしてしまおうというユニークな一冊」**という本書の紹介文を読

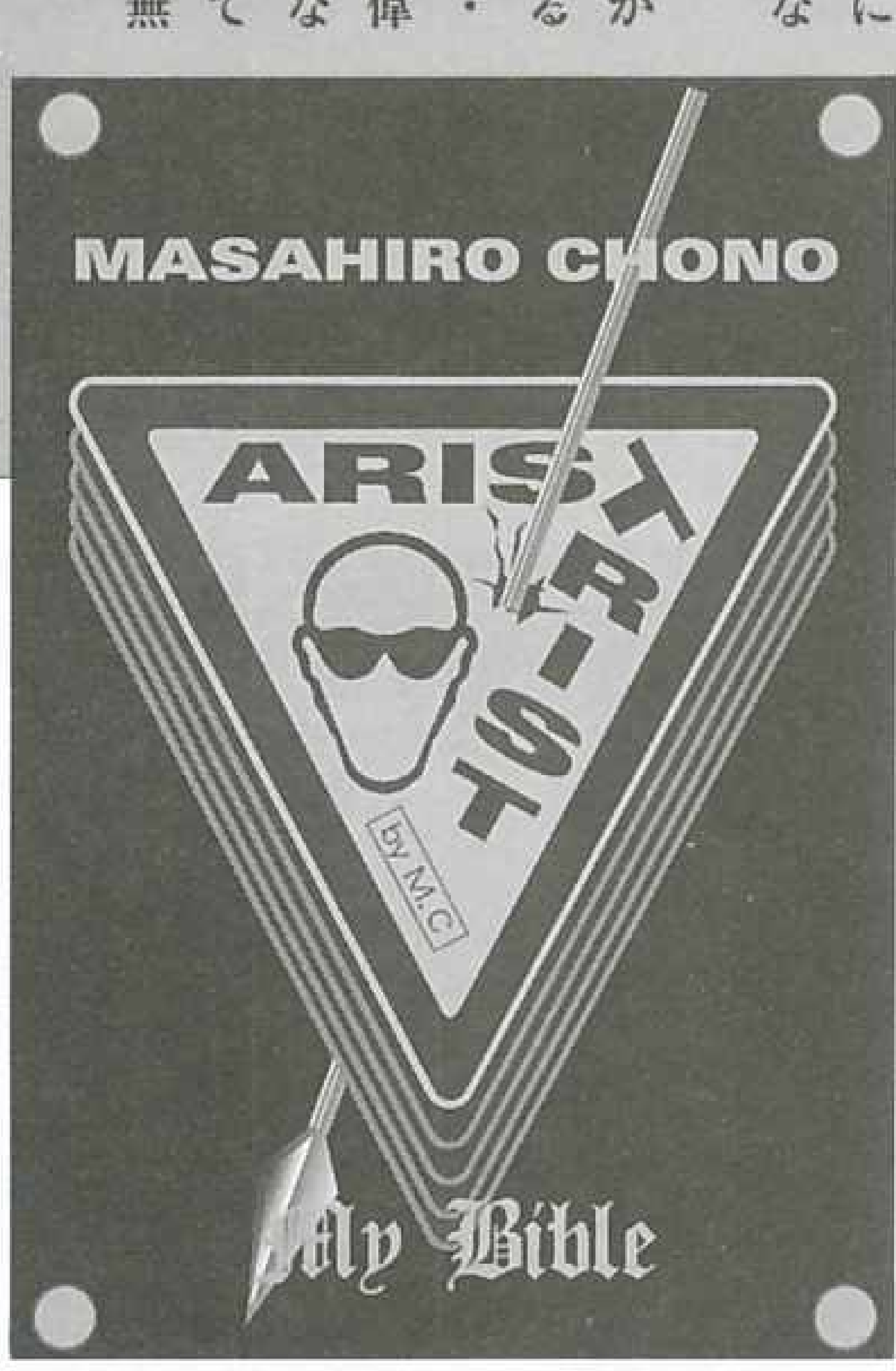
んだときは、さすがのボクも衝撃を受けまくったものである。「いじめでプロレス技が使われた！」などとマスコミでとかく糾弾されがちな昨今だというのに、まさか世間の感情を逆撫ですることを目的としてリリースしたわけじゃないだろうな、と。

ところがビックリ。その主旨は**「なんとかプロの格闘家が開発した技をオフィスの中で生かしていきたい」**という、ボクには全く理解できない不思議なところにあったのである。

つまり**「派手なホストクラブに勤めているくせにあいつ、手堅くマンションのローンを組んでいるらしい……。まるでトップロープから飛び上がっても、ヒザ十字なんて関節技を決めてしまうケンドー・カ・シンにそっくりじゃないか？」**などという説得力皆無の強引なギャグで様々な必殺技をオフィスで使うコツを我々に伝授してくれた後には、**「出世争いに勝つためにも、この本で社会生活の傾向と対策を練ってみてはいかがでしょう」**と、これまた強引に締めるわけなのだ……。

本文とデータを、ボクも個人的に好きな『ガロ』系漫画家・三本義治先生が手掛けているため、ちょっと言いづらいのだが、正直言ってちょっと読むにはキツい低レベルな内容でしかない。

普段、三本先生が漫画で描いている「こじきのハリー・レイスがどんどん偉くなる話」のようなコクや深み、そしてファンタジーが皆無なのは残念である。



My Bible／黒の聖典
（蝶野正洋／ルー出版）

今月の聖書その1。プロデュース＆ディレクションを平成の猪木番・木村光一君が手掛けた、男（というかnWoファン）のバイブル。蝶野が入場時に持参することになるらしいアリスト・トリストの聖書と全く同じ代物を、会場売り限定で一般販売したというバージョンがこれである（書店売りバージョンとは表紙が異なるらしい）。

で、肝心の中身はというと『週プロ』の広告で**「この本は読み物なんかじゃない」「感性を受けとめる準備をしてから手に取れ」「読むな。感じろ」**などと、かなりとんでもないこと言い切っているだけあって、**「白ははかない」「ファッションに惑わされるな」「リスクは甘い」「遊べ、ただ無心に遊べ」「無知は無垢ではない」「音楽は色彩だ」「勝利は美しい」「勝利は醜い」**などの明らかに蝶野が考えたとは思えない、それでいて深いのか無意味なのかもよくわからないシンプルな言葉が1ページに2個づつ紹介されていくという、シンプル極まりない構成なのだ。

なにしろ調べたところ、1ページ当たりの文字数は約40文字。本文なんて15文字程度だ。そういうわけで定価を考えると割高感を嫌というほど感じさせてくれる、非常に珍しい一冊であろう。

格闘誠書
（船木誠勝／ベースボール・マガジン社）



今月の聖書その2。『ハイブリッド肉体改造法』がベースボール・マガジン史上に残る記録的な売り上げとなった船木＆ヤスカクおじさん（マイ・フェイバリット・ハイブリッド・ライター）の最強タッグによる第2弾である。

なによりも世間では宗教的だと言われがちなパンクラスが遂にバイブル（誠書）を出したという事実が、個人的には非常に感慨深い。

といっても『格通』で連載されていた船木の技術講座をまとめたものでしかないため、「セメントとの遭遇」や「ゴッチさんから学んだ心の強さ」などについて船木が語る第一章についてのみ軽くコメントさせていただこう。

相変わらず**「5年もあれば、パンクラスの選手をバーリ・トゥードで勝てるようにできると思います」**などとえらく長いスパンで考えている船木は面白い男だと再確認した次第なのだが、ちょっとした表現だけは気になった。

たとえば、**「私はいろいろなジムに通い、または技術書を読み、レスリング、サンボ、ボクシング、ムエタイなど、さまざまな格闘技を知るように努めてきました」**という、船木の前向きな姿勢が伝わってくる文章だ。

新日時代の船木が日本古来のとある有名な格闘技にハマり、リバプールの風（現・ライガー）と二人で道場に通っていたというのは、あまりにも有名すぎるエピソードである。

それが、**「17歳のとき、某格闘技道場で出会ったのが廣戸聡一さんでした。関節技の師匠は藤原さんですが、打撃の師匠として初めて憧れた人が廣戸さんでした」**などとすっかり格闘技名が隠蔽されているのはなぜなのか？

ぜひともボクに教えてチョンマゲ、ヤスカクおじさん！

別にパンクラスをどうこう言うつもりもないんだが、UWFや某格闘技団体といった過去の関係を次々と否定していくのだけは、ちょっと応援できない傾向だと思う次第なのである。

リングドクターがみたプロレスの秘密
（富家孝＆林督元／三一書房）

「リングドクターがみた」という割には医学的な部分とは一切関係のない、単なるプロレス本からの引用で埋め尽くされた、変わった本。

そもそも富家孝先生や林督元先生が、いちいち馳や新倉の本のみならず、**『不沈艦ハンセンの必殺！ラリアット一直線』**や鈴木庄一・著**『宿命のライバルG・馬場A・猪木』**などのマイナー本まで熟読した上で、わざわざそれを日本のプロレス史的な原稿を書く際に引用するとは思えない。とすると、やっぱりゴーストライター仕事ってことだろうか？

などと、謎は無限に広がってしまうのだが、そんなことは一切ノー問題。

木村政彦の**「最初はプロ柔道ですね。その年にハワイに渡ってプロ柔道の興行をやった。その後、プロモーターの依頼でプロレスの稽古をした」**という地の文で書けばいい程度の発言でも、わざわざ**「『Number70』／文藝春秋社刊」**などと出典まで明記して掲載する義理堅さに、ボクは敬意を表してさしあげたいのである。

なにしろ**「『紙のプロレス』No.3／山口昇氏のゴッチへのインタビューから」**という、実名入りのとんでもない引用まであるほどだし。

タイガーマスクを**「黄金の仮面をかぶったレスラー」**と表現したり（あれは黄色い虎の仮面であり、ゴールデン＝マスクはタイガーマスクの原作に登場したレスラー）、マスカラスは**『ミスター・パーフェクト』とも呼ば**



れた」などと聞いたこともないことを言い出すのも、とりあえずノー問題！

……と思ったが、ボクの記憶では「ジ・インベーダー2号」でしかなかったホセ・ゴンザレスを、「わが国のリングにも"ウルトラセブン"という"仮面レスラー"として登場したことがある」などと高杉（セブン）呼ばわりしたり「仮面レスラー」という勝手なジャンルまで生み出したりするのは、さすがにちょっと問題ありなのである。



必殺！　プロレス激本

（双葉社）

スーパーバイザーを務めたターザン山本氏には申し訳ないが、これは近年稀に見る悪質極まりないプロレス本である。それも全て「今時ダサいかもしれないが"挑発するマガジン""本気マガジン"をやっていくのだ！」というターザンの言葉に乗せられたらしき執筆チーフ&編集長が、どうにも余計な暴走を繰り返したためなんだろうが。

なにしろ執筆チーフの須田鷹雄とかいう男は「競馬業界ではお笑いライターと呼ばれ」ているそうなのだが、そんな彼が考えたバーリトゥード用の秘密兵器というのが、なんとビックリ「超ワキガレスラー」「超モーホレスラー」「超足ツボレスラー」「超くすぐりレスラー」だというのだから、ボクにはもう言葉もない。競馬業界における笑いのレベルの低さを心から痛感させていただいた次第である。

チーフの時点でこうなのだから、他のライターが中田潤&田端到の両氏を除くと非常にとんでもないことになっているのも当然というもの。

なにしろ巻頭の高田延彦インタビューからして「プロレスは八百長だと30年以上も思い続けてきた」ライターに、ヒクソン戦は「どこまでマジだったのか」を「彼の言葉と表情から追及」させるという、完全に気が狂ったとしか思えない企画なのである。

こんなことで一体、編集サイドはボクらに何を訴えかけようとしているのだろうか？

続いて日本一ファンタジーに包まれた魅惑の団体・UFOの広報であり、タチの悪い発言で知られる佐山聡のインタビューの場合も同様だ。

「UFOのプロデューサーである佐山の話は私にとっては退屈なものだった。健康にして健全すぎるのである。毒がなさすぎると言い換えてもいいかもしれない」などと、『紙プロ』読者的には想像も付かないような結論を導き出すのみならず、文章の締めには佐山の言葉でもなければろくな伏線も張られてはいない「へっへへ……。こんなところでぐたばれますかってんだ。生きてみせますぜってんだ」などという言葉を持ち出すのだから、つくづく本当に意味不明。

この本の主旨は「お寒いライター」の須田君に言わせると「業界のムラ人じゃないという立場を活かし、身もフタもない突っ込みを入れる」ことにあるそうだが、とにかくあまりに身もフタもなさすぎなのである。

そして最も問題なのが編集長の黒須田守君（元・別冊宝島）による、本誌に掲載された格闘技選手やアマレスの五輪男・谷津などのインタビューに触発されたとおぼしき「敵か味方か!?　アマレス五輪メダリスト・太田章」なる謎のインタビューなのだ。

そもそもボクに言わせれば、太田章はプロレスとの接点もろくになければ現役の選手（＝自分の発言に自分で責任を取れる立場）でもないため、最初から敵でも味方でもない。単なる別の業界の人間である。

それゆえ「プロレス？　どう考えてもあれはショーに過ぎないでしょ」というスポーツマンらしい考え方を持つ彼氏に、「パンクラスのような格闘技系のプロレスはどう御覧になってますか」だの「パンクラスは真剣勝負であることをかなり強調していますが」だのと無神経な質問をぶつけることには、何の意味もありゃしないのである。

結局、「俺には興味ない話」だと言っている彼氏から、「本気っぽく見せてるけど、実際はプロレスだからね」「（パンクラスも真剣勝負は）絶対にやっていない」という答えを引き出すことにも成功するのだが、これをわざわざ「受け取り方次第で、あなたはプロレスファンをやめなければならなくなるかもしれない。ハッキリ言って太田氏の発言を通過するのは、茨の道を裸足で歩くのと同じである」などと銘打って発表する意味は、一体どこにあるのだろうか？

ボクの手掛けた「格闘家から見たプロレス」という本誌の企画はプロレスを守り、そしてプロレスと格闘技をリンクさせることで双方を盛り上げるための企画であった。

つまり、プロレスと近い位置にいる格闘家が格闘技専門誌でプロレス批判チックな発言をしているのであれば、ウチが直接真意を問いただそうじゃないか、ということである。

しかし、彼らのやろうとしていることは、無意味にプロレスを貶めるだけでしかない。

ターザンの主張する「挑発」とは、まさか「プロレスもパンクラスも八百長」だと断定することなのか？　だったら止めろ、こんな本。

黒須田君は「誰もやらないパンクラス徹底批判」なるコーナーで、「入場テーマ曲がぞんざい」「チケット代が高い」「観客が静か」などと低レベルに突っ込んでいるが、ゴチャゴチャ言わんと「クサいんです！」と言い切ったどこぞの格闘家の方が、よっぽど説得力も男気もあってボクは好きだね。

なにしろパンクラスに「いますぐプロの看板を降ろしなさい」などとプロ意識を求めているくせして、そんな黒須田君の文章からプロ意識もプロとしての技術も感じられやしないのだから、どうにも問題なのである。

この本を「プロレスラー、プロレスマスコミ、プロレスファンに対して本気でケンカを売」るつもりで作ったという、喧嘩腰の黒須田君。

そんな彼の「歪んだ視点」の原点はどこにあるのか？　ちょっとボクが教えてさしあげよう。

以前、高野拳磁が「お前らマスコミってのはさぁ、結局プロレスラーになりたくてもなれない奴の集まりなわけだろ？」と言い出したことがある。

当然、ボクは「そんな奴いねえよ！」と思ったものだが、この黒須田君がズバリそんなバカだったわけである。

「僕はプロレスラーになりたくて新日や全日に願書を出したのに、背が低くて通らなかったんですよ。ところが（いまは）僕より小さくてもどんどんレスラーになって……」などと誌面でいちいちボヤき続ける彼氏。これは、プロレスラーになりたくても背の低さなどのために挫折して格闘技界に進んだ男たちが、プロレスに噛み付くのと全く同じ構図だと思われる。

いや、格闘家たちの場合は「俺の方が練習してるのに」「俺の方が強いのに」など、それなりに筋の通った理由もあるからいいんだが、黒須田君の場合はただ単に「俺の方がデカいのに」でしかないから本当にタチが悪い。

確かに、新間寿や宮戸のインタビューなど、追放された男たちにターザンが挑むインタビューは面白い。「私だったら、坂口社長と小川の柔道ジャケットマッチ組む」「ストロング小林戦のあとはジャンボ鶴田を引き抜きにかかった」「カール・ゴッチこそ、あんな弱虫はいない！」「前田とヒクソンやらねえかなあ。前田に今度、一度会いたいって言っといてよ」などと語る新間は、おそらく「挑発」の意味を編集者以上によくわかっているのだろう。

だが、それ以外はほとんどがブルシットでしかないという、本当にとんでもない稀代のダメ本なのである。

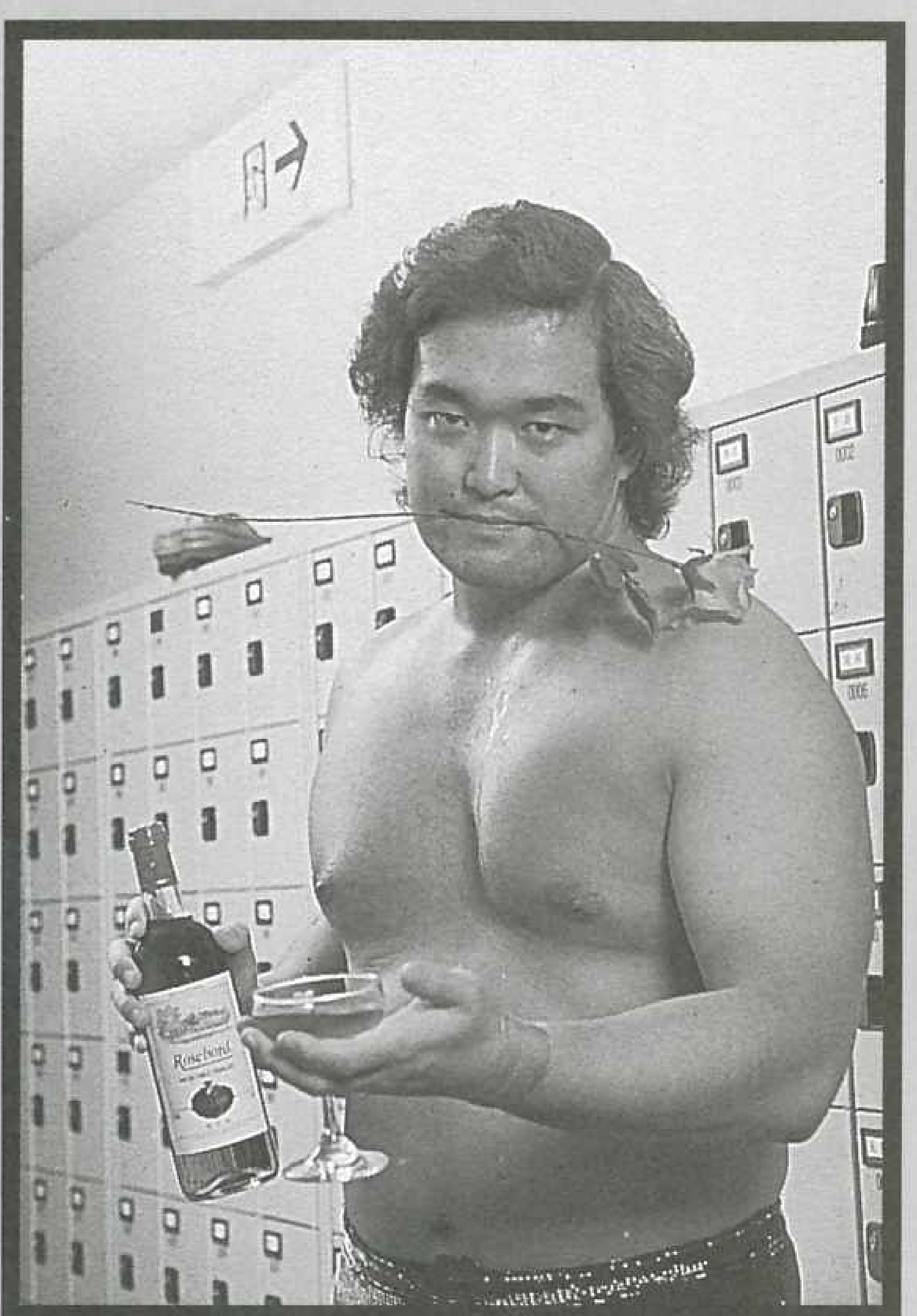
指定の文字数を守らないうえに
クイズまで同封(載せませんが)してきた
トンパチコラム

紙のプロレス名誉会長(自称)

セッド・ジニアスの「レスラー猪木寛至は“悲しき天才”だった」

本誌前号で『紙プロRADICAL』初登場を果たした悲しき天才、セッド・ジニアス。こちらのアンケートをFAXで流したところ、自分の回答に自ら脚注をつけてよこすという前代未聞の掟の破りっぷり。その欄外には「コラムを書かせてほしい」との旨が書き添えてあった。さっそく本誌編集部は「やれんのかーッ!」とばかりに原稿依頼をしてみた。数日後、悲しき天才から原稿がさっそく届いた。依頼した量のほぼ2倍の文字数で原稿用紙を埋め尽くして……。というわけで、急遽、ページを引っ越して「となりのマット界　番外地編」としてお届けします。

(編集部)



せっど・じにあす自筆プロフィール■山梨県上九一色村精進湖出身(事実ですよ)。190センチ、240ポンド。幼い頃より卓球で体を鍛え、そろばんで握力を養い、ラマーズ法で心肺機能を高め、あっち向いてホイで反射神経に磨きをかけ、強靭な基礎体力をつくりプロレスラーになって頑張っている今日この頃。
得意技=弁護士を使っての示談
ライバル=“しゃべる核爆弾娘”デンジャラス木佐彩子
子供の頃の夢=卵を産んでみたかった
現在の夢=スポーツを通じて世界平和
趣味=太陽の光をいっぱい浴びて光合成すること
理想の女性=倍賞美津子
愛読書=スチュワーデスマガジン
好きな食べ物=イラク料理(子ラクダのサダムソースあえ)
好きな言葉=きりんさんが好きです。でも、ぞうさんの方がもっと好きです♥

「なぜレスラー猪木寛至と闘いたいのかって? 闘いたいから闘いたいのだ!」

プロレスラーは練習しなければいけない。よくマスコミ誌上においてそんなことが書かれておりますが、「マスコミの皆様、書く練習してますか?」。私もこのコラムを書くために1日3時間書く練習をしました。まぁ、そんなことはどうでもいいとして……。

昔々あるところに、馬場さんと猪木がいました。馬場さんは山で全日本プロレスを、猪木は川で新日本プロレスをやっていました。すると、そこに…UWFがどんぶらこ〜どんぶらこ〜と流れてきました。そして、日本のプロレスは大変なことになってしまうのです。まぁ、そんなことはどうでもいいとして……。

「猪木は●●●●から優しくやってやれ!」〝鉄人〟は〝神様〟にこう囁いた。昭和47年10月4日、蔵前国技館で行われたカール・ゴッチvsアントニオ猪木の実力世界一決定戦。特別レフェリーは20世紀最●のレスラー〝鉄人〟ルー・テーズ氏。あまりのレスラー猪木寛至の弱さに〝鉄人〟は〝神様〟にドイツ語でこう囁いたという。そう、レスラー猪木寛至は〝悲しき天才〟だったのである。ちなみに、私は、ルー・テーズとカール・ゴッチはアキレス腱固めを知らなかったと思う。え、どういうことかって? 教えないよ〜。

昭和50年10月9日蔵前国技館で行われたチャンピオン・アントニオ猪木vs挑戦者・20世紀最大の加●者〝鉄人〟ルー・テーズのNWF世界ヘビー級選手権試合。特別レフェリーは〝裸足の帝王〟アントニオ・ロッカ。レスラー猪木寛至、全盛期の32歳。ルー・テーズ、還暦目前の59歳。

〝鉄人〟は私に言った。「イノ〜キ? NOT B●D!」「●くはない……」やっぱりレスラー猪木寛至は〝悲しき天才〟であった。

ちなみに〝鉄人〟は馬場さんのことも話してくれました。「ババ　イズ　●●●●!」　昭和60年9月19日東京体育館で行われたアントニオ猪木vs藤波辰巳の犬●の仲対決! 特別レフェリーは20世紀最大のコ●チ料〝鉄人〟ルー・テーズ氏。セッド・ジニアスvsマーク・フレミング戦を思い出してしまうようなストロング・スタイルの原点といった試合内容であり、レスラー猪木寛至が卍固めによるレフェリーストップ勝ち。しかし、〝鉄人〟は私に言った。「●●●●では藤波の方が強い!」。レスラー猪木寛至はやっぱり〝悲しき天才〟であった。

平成10年4月4日、東京ドームでのアントニオ猪木引退試合。私は名乗りを上げた。それはプロレスラーであるならば当然のことであると自分では理解していた。記者会見で、「やるやらないは、どちらにしても必ず正式に返事を出します!」と大勢のマスコミの前で公言した。しかし、返事はなかった。「この道を行けばどうなるものか。迷わず行けよ。行けばわかる

突撃！となりのマット界

さ！」行ったらスカされた！ どういうこと？ どうなってんの？ WHAT？ WHY？

4月4日東京ドーム。私は一塁側ベンチの長嶋監督の席にいた。ベンチ内には、富家孝リングドクター、橋本真也選手の恐妻がいた。トーナメントで優勝したのは、何と〝ラビッシング〟リック・ルードかと思いきや、ドン・フライ。そして迎えた引退試合。レスラー猪木寛至は、前日に20時間以上かけてアメリカから来日し、この日3試合目の〝ラビッシング〟リック・ルード、いやドン・フライ相手に、脳天唐竹パンチ（ナックルパート？）、14文キック（延髄斬り？）かららのグランド・コブラツイスト＝アメリカ名＝アブドミナル・ストレッチ（腹筋伸ばし）で勝利！ 猪木vsジニアス戦消滅！ その瞬間、私の頭の中には次期フジテレビ取締役アナウンス部長候補〝しゃべる核爆弾娘〟ことデンジャラス木佐彩子が歌う与作のBGMが流れた。どういう意味かって？ あ〜りゃりゃ、ダメだこりゃ、終わったな……。

なぜレスラー猪木寛至とそれほどまでに闘いたいのか？ それは、闘いたいから闘いたいのだ！ え？ 猪木戦を実現させたければ下から順番にやっていけ？ だから一番下からやってるじゃねえか！ 一番下のおじいちゃん、ご隠居からやってるじゃねえか！ 文句ねえだろ！

レスラー猪木寛至と闘うことが大変なことであり難しいことであるかというと、そうでもないと思う。参院選に出馬する以前は、シリーズに出ていて日本人もガイジン選手もみんな闘っているわけだし。マーク・フレミングもレスラー猪木寛至とは試合してるんですよ。何て言ってたかって？ イノキ イズ ●●●●！

そういえば、フレミングが新日本に来日していたシリーズ中に、イージーな試合をしたボブ・オートンJr.がレスラー猪木寛至の逆鱗に触れ、途中帰国させられてしまったという事件があった。私はガイジン選手たちからその話を聞き、「イージーな試合をしたら帰されるの？ じゃあ、猪木も●るのか？」と思わず聞いてしまった。その少し前に放送された猪木vsオートン戦はハ●リ●・レ●スの60分フルタイムの試合のようなスピード、テンポの好試合？だったのだが……やっぱりレスラー猪木寛至は〝悲しき天才〟である。

〝元祖悲しき天才〟猪木と〝本家悲しき天才〟ジニアスは非常によく似ている。「顔がでかい」「時代の先っちょをいってる」「我が強い」「変わったことが好き」「自己顕示欲が強い」「人と同じことをやるのが嫌い」「目立ちたがり屋である」「爆弾発言が多い」「トンパチである」「大田区体育館で旗揚げしている」「言うこと聞かない」「背格好が似ている」「3vs1の試合をやっている」。そう、私はルー・テーズ道場のジャック・ワーイング、ヘンリー・ロビンソン、マーク・フレミング相手に3vs1の試合をやった。しかし、翌日の『東スポ』には試合結果すら載せてもらえなかったという逆取材拒否を受けてしまった。8月8日の試合（土曜サウナ・プロレス〜粉ミルクを飲んで3倍大きくなろう〜）も東京であるにも関わらず『ゴング』も『週プロ』も逆取材拒否をしてきた。『ゴング』は日程すら載せてくれなかった。そういうことすると後が怖いぞ！ 猪木戦が実現したときに取材拒否をしてやるぞ！

8月25日（火）午後5時頃、池袋のサンシャイン60の屋上から女性がフライング・ソーセージを自爆した。私はたまたま通りかかり、死体を見てしまった。そのとき真っ先に思ったのは「人生に悩む有名人が自爆したのか？ 誰だ？ ●ひ●みか、小●ル●子か、それともレスラー猪木寛至に振り回されている小川か？」と思ってしまった。自爆現場は、体のみそや頭がい骨が飛び散り、お魚屋さんみたいな生臭い香りがプンプン漂っていた。みなさん、頭の上に注意しましょう。誰が飛んでくるかわかりませんよ！

SAD GENIUS

1998年4月4日東京ドーム
セッド・ジニアス（試合逃避）
アントニオ猪木

よってセッド・ジニアスがリアル・ワールド・ヘビー級チャンピオンとなった。

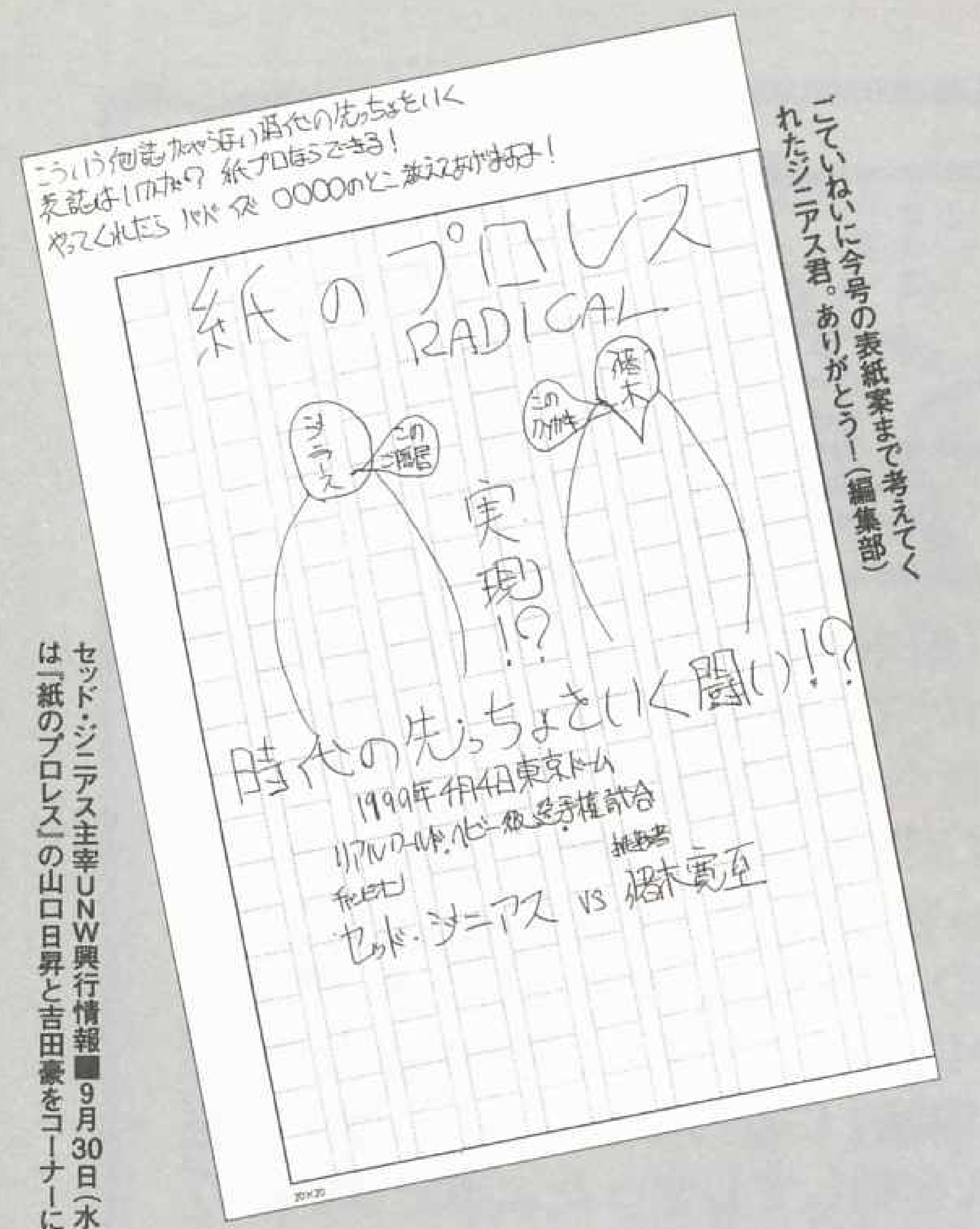
文句があるなら試合しろ！

よろしく猪木
もっと素直に僕の　挑戦受けてほしい
一緒にやりたいよ　できるものならば
お互いのトンパチを　もっと出しあえるのさ
君だけに本当の　心見せてきた
やれない時間が　因縁育てるのさ
『東スポ』めくれば　君がいる
新日とUFOの　境を決めた以上
もうやるしかないぞ　東京ドームで

猪木さん、あなたは「最後の試合をやらせていただきます」とは言ったが「引退」という2文字は一言も言っていない。最後の試合とは「今年上半期最後の試合」であると理解する。早くしないと馬●さんとトーキョー・トムJr.相手に防衛戦やっちゃいますよ！

NWFとゴッチ・ベルトを賭けろ！ ついでに20世紀最大の●●師〝鉄人〟●ー・●ー●氏がラジオで50万ドル（約7250万円）で売りに出した、秋葉原の金物屋で作ったというブリキ製のプ●●●グが世界ヘビー級チャンピオンベルトも賭けるか？（ベルトはUFOで責任持って買ってくださいね♥）。

文句があるなら試合しろ！ 以上。



ごていねいに今号の表紙案まで考えてくれたジニアス君。ありがとう！（編集部）

セッド・ジニアス主宰UNW興行情報■9月30日（水）大田区民プラザ大会「時代の先っちょをいくプロレス」（会場18：00、試合開始18：30・メインはジニアスvs内藤恒仁）ではジニアス君vs観客の時間無制限Q＆Aトークショーを行います。なお、当日は『紙のプロレス』の山口日昇と吉田豪をコーナーにくくりつけ、『紙プロ』への苦情を募集します。苦情が出た時点で、ジニアス君の天才注入ビンタをするという企画を計画中。（なお『紙プロ』編集部はこの企画に一切関知しておりません＝編集部）



ハガキ道場

読者、元気！

なんか婚約会見みたいだね（船木と7年ぶりに対面した直後の本家ノブ兄さん談）。というわけで、毎度毎度ホヤホヤでアツアツなハガキをお届けする読者ページの時間です。突然ですがここにお叱りのハガキが1枚来ているので紹介しましょう。差出人は神奈川県の藤島誠良っち（21歳♀）さん。「自分のコーナー（ハガキ道場）のハガキのところに様付けるとたぁ、てめェ何様のつもりじゃコラ！」確かに前号のタイトル部分のハガキのイラストの宛先が「ハガキ道場様」になってますね。どうやら取り返しのつかないようなミスを犯してしまったようです。この件について編集長と約15秒間密談を交わしました。まあ、それは3時間分ぐらいの内容です。というわけで、ごめんなさい。編集部に転がってる秘蔵発掘ガラクタ詰め合わせをイヤになっちゃうぐらい送らせて頂きます。このように、突っ込むべきところは、ガシガシ突っ込んでください。いつ、何時、誰のツッコミでも受けて立ちます。

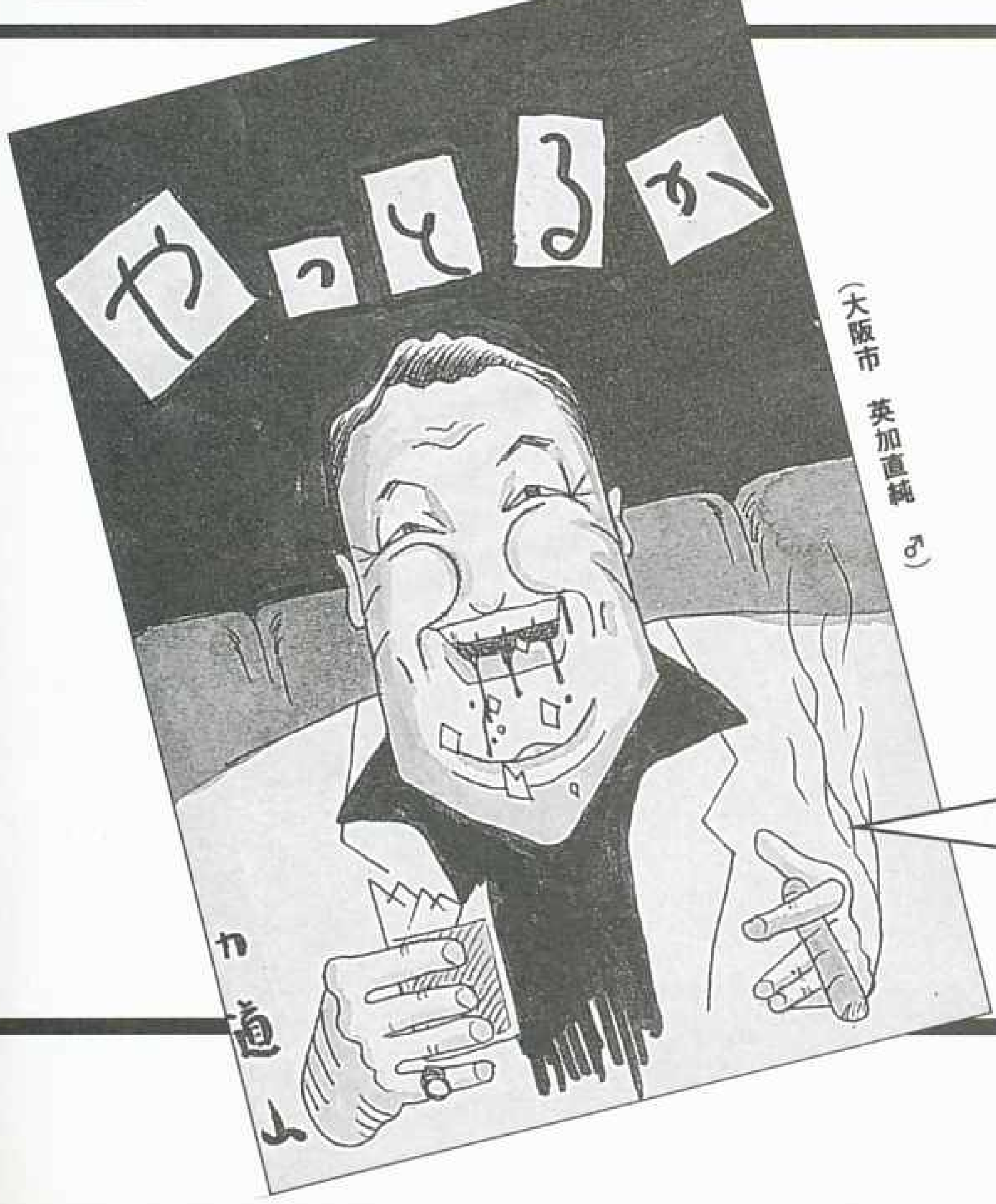
代表＝高野拳磁公認座敷犬・SAKAI NOBU

＜ハガキ道場システムチャート＞

つまらない → おもしろい

呼び方	キッズファイター	シニアファイター	プロフェッショナルファイター
賞品	イージーな粗品	ワンダフルな粗品	トレビア～ンな粗品
昇段資格	20点以上	40点以上	×

【ルール】
私SAKAI NOBUが道場主を務める投稿コーナー『ハガキ道場』では、世界に通用するハガキファイターを育てるべく、みなさんに頑張って頂きます。当然、ハガキファイターもランク分けします。毎号、面白いハガキを書いてきた人に段位をさしあげます。
●採用されたハガキには、面白さに合わせて1～5点差し上げます。どんどんポイントを取って段位を上げましょう。
▽そこそこ面白い人＝キッズ・ファイター
▽けっこう面白い人＝シニア・ファイター
▽めちゃんこ面白い人＝プロフェッショナル・ファイターとなります。
●それぞれ採用されると
◇キッズ・ファイターにはそこそこいい粗品
◇シニア・ファイターにはけっこういい粗品
◇プロフェッショナル・ファイターには超豪華粗品を進呈します。

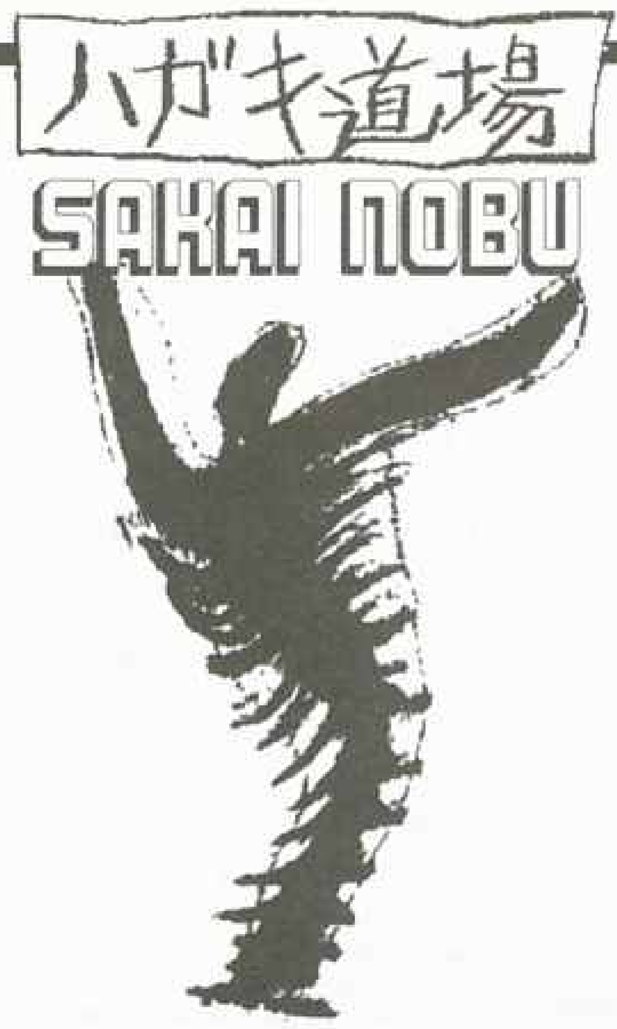


（大阪市 英加直純 ♂）

いままでにない作風で、しかもレベル高いです。これは非常にノー問題!! ですよ。あいかわらず天国でも元気そうなのが最高！ 豊登さんも亡くなってたらしいです。あちらの世界でも日プロを旗揚げしてるかもね。こんな幽霊軍団が来たらミスター高橋ならずとも確実にギブアップするね。

今号の お絵かき模範演武







（埼玉県　中川雅博　20歳　♂）　絶好調!!　いいねえ　5点

☆さてさて、いつもの隔月ペースではないので今回はレギュラーコーナーをかなりお休みしてお届けするぜ！　というわけで、まずは恒例の前号を読んだ読者の感想からいってみよう！

高田vsエンセンの対談、顔合わせのインパクトが凄かった！　明らかにエンセンの方がヒクソンに勝つ可能性がデカいと思うのは私だけではないでしょう。イジワルな企画。
（京都市　中田秀人　26歳　♂）　3点

☆高田の明るく陽気で呑気な部分が引き出せたいい対談だったね。しかし、さすが鋭いね。ミスター裏読みって感じだね。

「高田vsエンセン対談」を読みました。この際、U系仲良しグループを結成して『紙プロ』主催の興行をやってほしい。前田も高田もエンセンも出てくれるのでは……という淡い期待が持てる。
（大阪市　菊池耕太　38歳　♂）　4点

☆やりたいっスね。その件について編集長と15秒ほど密談しました。3時間分ぐらいの内容だったんですが。で、結局、UWFゆかりのあの人……第2回ターザン山本追悼興行としてクラブ・チッタでそれがやれたら最高かな、と。エンセンvs高橋義生の「オレが殺す」対決とか見たい！

アポロ菅原（原文ママ）のインタビューが面白かった。その人柄に好感が持てたから。
（大阪市　島崎長遠　24歳　♂）　3点

☆人柄ねえ？　いや、決して悪いとか、いいとか言ってるんじゃなくてね。もっと、大事なことあるんじゃない？　それと非常に多かったのが漢字の間違い。これじゃ「アポロくだわら」になっちゃうよ。

前号の「書評の星座」での『U～多重アリバイ～』評が良かった。Show氏の感性には本当に賛同できません。Show氏インタビューは面白いのにShow氏の返しが最悪！
（世田谷区　高橋由美子、30歳　♀）　5点

☆よく読んでらっしゃる。しかし、そういうインタビュアーの返答一つまで、レベルの高いこと要求されるようになっちゃったんですね。まあ、Show氏はプロレス界で1、2を争う技術の持ち主ですからね。え？　技術なんかねえだろうって？　そんなことないもん！　人を不快にさせる技術は天下一品ですよ。でしょ？

前号の前田日明インタビュー、グラビアはP誌、G誌より数段良かったがインタビューでは「もっと身体を絞れ」とあと10回は言って欲しかった。
（大阪市　菊池耕太　38歳　♂）　4点

☆そうですか。非常にごもっともな意見かも知れません。この件については中村カタブツ君（35歳）と15秒間密談しました。3時間ぐらいの内容だったんですが。結局、中村カタブツ君（35歳）がホーク・ウォーリアーばりの逆モヒカンになることで許してチョンマゲ！

『私の夢』というタイトルで、こんなFAXが読者（無記名）から送られてきました。おれも見たいよ



先日、行われた『青空プロレス道場』に5回とも参加した者です。生カタブツの想像以上のダメっぷり、数々のセクハラ発言、随所に見せるたまらない表情、そのすべてがボクの後の人生に対する不安を打ち消し、大きな自信を与えてくれました。ちなみに氏によれば「ボクはみんなを掌の上で踊らせてるんですよ～」とのこと。今でも目をつぶれば「ねえ、ねぇ」とノブさんの背中をつついてタバコ代をねだり、抱きしめたくなる表情を浮かべた35歳の姿が目に焼き付いています。カタブツの感想になってしまいましたが、とにかく西武コミニティー・カレッジ「青空プロレス道場」は面白かったです。次回の絶対参加します。
（大宮市　瀧下哲也　♂）　5点

☆ちょっと長いですが、一晩酒を酌み交わすだけで、ここまでダメっぷりが伝わってしまうすさまじい男・中村カタブツ君（35歳）に会いたければ、次回、秋から再開する青空プロレス道場に参加しよう！

私の夢。それはブロディとアンドレを見ること。
（岡山県　藤田美洋　25歳　♂）　2点

☆早まっちゃダメ！　死ぬのはいいけど、人に迷惑掛けないようにしてね。



（熊本県　山崎英紀　32歳　♂）
似てないけど愛がある。　3点

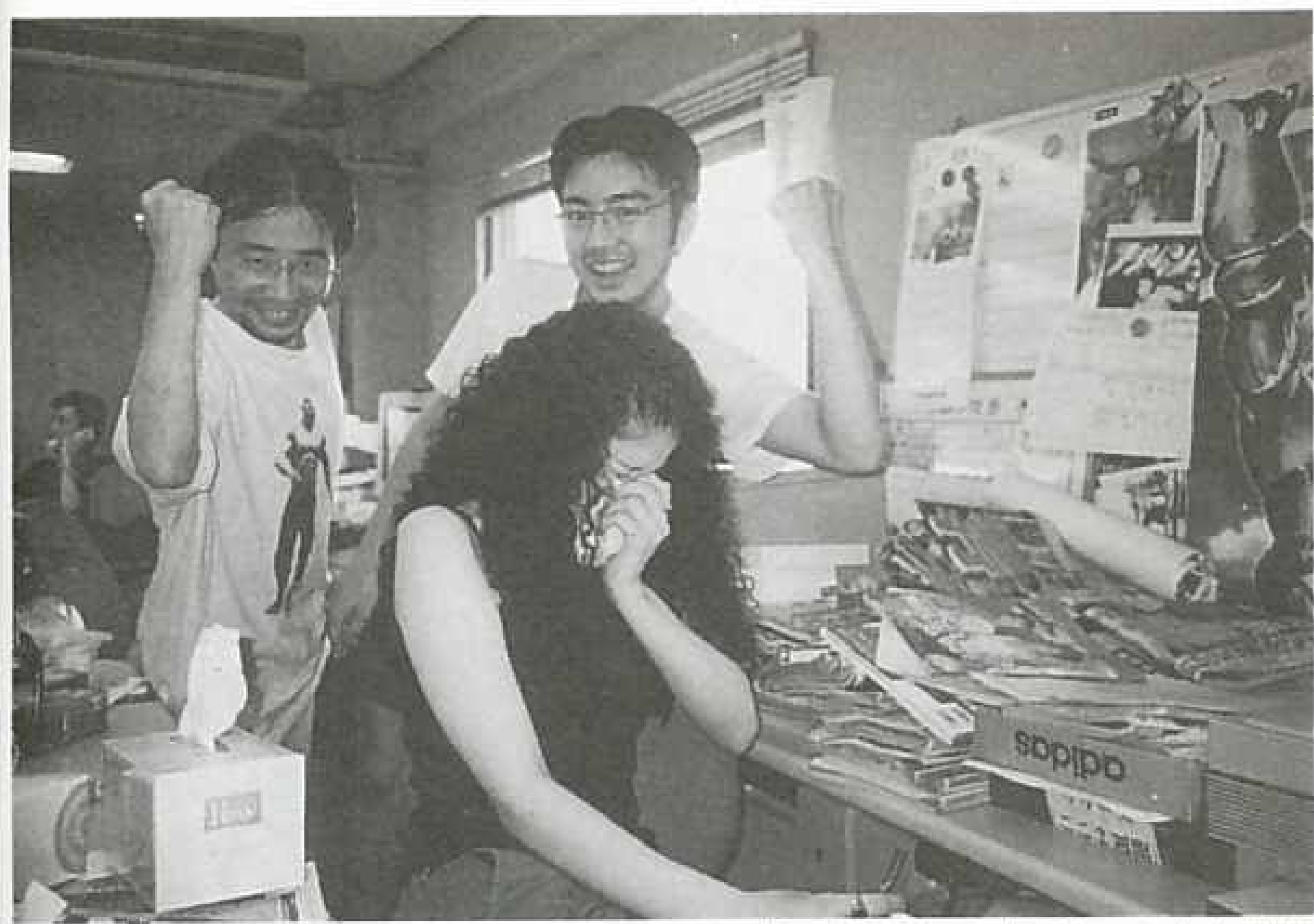
（熊本県　塩本祐介　32歳　♂）
2人とも元気でいいね！　2つで10点





バカ日誌 RADICAL

暴走台風ジャイコル・バス



ジャイ子泣かし、成功！　すかさず記念撮影だ！「パオ〜ン」と雄叫びをあげると、次の瞬間からスコールのように涙がこぼれ落ちた。決めゼリフは「もう、カタブツ君もノブりんもムカつくぅ〜（涙）」。ちなみにこの日は、失敗のお説教をしてたら泣き出しました。ノー問題！

バカがバカを呼び、バカが集まる。いろんなバカ野郎どもが集まる巨大な磁場が本誌編集部にはあるようだ。

最近、編集部に居着いてしまったのが「ジャイアント馬鹿」ことジャイ子。この大きなバカは、クソ忙しい時期にお手伝いに来てくれたのはありがたいのだが、本当にデカいのでじつに邪魔。

仮眠を取るのも大騒ぎだ。編集部の男連中がイス3つ並べて寝るところをこのデカ女はイス4つ使い切り、それでも足りず、さらに男顔負けの大開脚を決めてグースカと眠っている。巨象の死体のような豪快な寝姿にこの女の本質を見た気がした（P113の衝撃写真を参照）。編集部には簡易ベットや寝袋などもあることはあるが、ふさがっていれば、たとえ女であろうともイスで寝なければならない掟なのである。

おまけに、デカいくせして本当によく泣く。ある時、親は心配していないのか聞いてみたところ、突然「お母さんがウソつくんですぅ〜」と小学生のようなことを言って泣き出したことがあった。よくよく聞いてみれば、編集部で終電の時間までお仕事をして、家に帰ったところ、「お母さん、今まで寝てたくせに、私が帰ったら起きてきて『心配で寝れないじゃない！』」って怒るんですぅ（泣）」（ジャイ子談）。怒られて泣いてるんだか、ウソつかれて悲しくて泣いてるんだか知ったこっちゃないが、どっちにしても泣くようなことじゃない。

セクハラ部長・中村カタブツ君（35歳）を筆頭に、誰もジャイ子を「女の子」として扱わないので、言葉でのセクハラはやり放題。セクハラしても全然楽しくないのだが、バカなだけあって負けん気だけはひたすら強いから面白い。

下の写真に写っている、棚を破壊した瞬間などは「私が壊したんじゃないですか？」とすっとぼけやがり、挙げ句の果てには「壊れてないですよ。もう、嫌だわ」とわけのわかんない強がり方をし始める。どう見ても壊れてるだろ。中村カタブツ君（わりとサド男爵）などは、ジャイ子が失敗すると「クリ●リスでもいじってろ！」と、男尊女卑魂むき出しで中学生レベルの罵倒している。それが通用するのも、ジャイ子のジャイ子たる所以だろう。ジャイ子には下品な罵倒がよく似合う。

といったように見事なまでに「いじめられっ子」な電波をビンビンに発信しているため、口の悪い編集部ではツッコミの的として重宝がられている女なのである。何を言っても壊れない頑丈さだけが取り柄っちゃあ取り柄だ。さらに人をムカつかせたら天下一品。テッド・タナベには蹴られ、大ちゃんには突っ込まれ、小野武志には「クチビルゲルゲ」と言われ、アレクにも「なんかムカつくんですぅ……」と言われ、石川社長にセクハラされるのも無理のないことなのである。

と同時にタチの悪い部分もある。初対面の相手に名前を聞かれれば、必ず「……ジャイ子」とぶっきらぼうに答えるところまでは、アタマが悪そうな外見と相まって最高にステキングなのだが、このバカ女は、その3秒後にはいきなりなれなれしい態度で「仲良くしましょうよぉ〜」と相手にすりよるのだ。「よるな！」とジャイ子をお蹴りになる関係者が、後を絶たないのもやむをえない話である。身長180センチの大女がすりよって来たら身の危険を感じて、蹴りたくなるのも当然っちゃー当然である。

男には受け身を信条とするケタ外れに打たれ強い試合を展開するジャイ子だが、女に対しては非常に厳しいツッコミを信条とするキラーな試合を展開するようになる。会社に遊びに来る女子を「なに、あの下品な女!?」「パンパンでしょ、あんなの？」「同じ空気も吸いたくない」と牙を剥きまくる。じつに根性のねじ曲がった女である。

ところで、読者諸君は、なぜジャイ子がこんなに大きいのか興味はないですか？　この大女、何を食ってこんなに大きくなったのだろう？　別に粉ミルクを飲んで3倍大きくなったわけではない。このデカさの素は、1日4本食べるアイスにある。アイスクリームだ。ちゃんとした食事は1日1回しか食べずに、アイスばっか食ってるとこういうモンスターになれるのだ。女子プロレスラーを目指す女子には耳寄りな情報でした。

小樽の運河にて、チョロチョロしすぎて落っこちそうになるチョロ。夜のススキノでも●●●の●●●●●をチョロチョロするという暴挙を働く。詳細は次号以降で。



突然、ファッションを気にしだした中村カタブツ君（35歳）。何を勘違いしたのか、突然「B-BOYになりたい！」と言いだしやがったので、「だったらなら逆モヒカンっすよ！」とデタラメを教えて差し上げた。そしたら翌日……こうなってました。どこまでいってもバカである。





見事に棚を破壊しておきながら、「だって……私、壊してないもん！」とのこと。「だって、●●●だもん！」という小学生並みの低能ボキャブラリーが、ジャイ子のトレードマーク。バカだねえ。

おたよりさせてよ The Letter

本誌読者投稿選手権『PRIDE・0』で人気爆発中の

武田いづみとは何か？

毒づきマンボウ（23歳）

武田いづみとは何なのか？

それを考える前に、世の中には、物書きに向く人間と向かない人間がいる。向かない人間とは

1、自分のために世の中が回っていると思っている者

2、万人が同じ人間だと思っている者

3、自分は人生を極めてしまっていると思っている者

である。これらのことは、3つとも表裏一体のことであり、自分で気付くようなことではない。しかし、これらのことが体に残っているうちは、人前に文章を出すべきではないと思う。

そこへいくと、武田いづみは金の卵である。こういった条件は、年の数が多い程、兼ね備えている割合が高くなる。作家のデビュー年齢が遅いのは、経済的なものの他に、文才が覚醒するのに時間がかかるためでもあろう。武田いづみの魅力とは、女子高生というキャラクターにして、こういった条件を満たしていることにある。

では、どうしてプロレスなのか？　世の中に数多くある題材の中で、何故プロレスなのか？　奇をてらった？　いや、武田いづみは真剣にプロレスと向き合っている。

恐らく、武田いづみは何らかの形でプロレスと出会っている。その時、くるものがあった。そこまでいかなくても、受け入れるのに抵抗がなかった。で、その調子で周りの人にプロレスの話をしたところ、彼女が思っていたよりもずうと反応が冷ややかだったのではないか。

勿論、これらのことは憶測だが、こういった経験があって、プロレスというジャンルを肌で感じたに違いないと思う。自らの直感を信じ、世界を守り、追求していく。そう、彼女はまさしく『紙のプロレスラー』を地でいっている。さらに、この文体に漂う礼儀正しさ、控え目なところ、ちょっと青臭い感じ……そう、これはJr.ヘビー級時代の藤波辰巳ではないか。武田いづみは『紙の藤波辰巳（Jr.）』だったのである。

果たして、今の世界にJr.時代の藤波が現れても、かつてのようなドラゴン・ブームが起こるかどうかは分からない。しかし、いてくれれば嬉しい人材である。地道な天才肌には、スターの臭いがする。『紙プロ』が生んだ最大のスターは『サダハルンバ谷川』であったが、『紙プロR』では、前者を超えるスケールのアイドルが誕生した。

女子高生、有望株、高原の空気、うつろ気パッチリお目々にモナ・リザの微笑み。もう武田いづみちゃんから目が離せない。一字一句逃さず刮目せよ！

☆やさぐれプロレス雑誌である本誌に咲いた一輪の花（読者なんだけどね）・武田いづみちゃんのフーリガンからの応援レターでした。想像力という名の翼で、高く高く飛んで、素晴らしい応援の手紙を書いてくれました。このコーナーでは、妄想文から応援文まで、ちょっと長めの文章を載せます。待ってます！

サッポロ・イズ・バーニング！

好きです。サッポロ！ 旅日記

独占スクープ！



ススキノは燃えていた。北の独立国家では、いろいろ看板を掲げながらオヤジが道端でカラオケをしているのだ。この他にも「私はピエロになりたい」という看板を掲げて歌っていた。

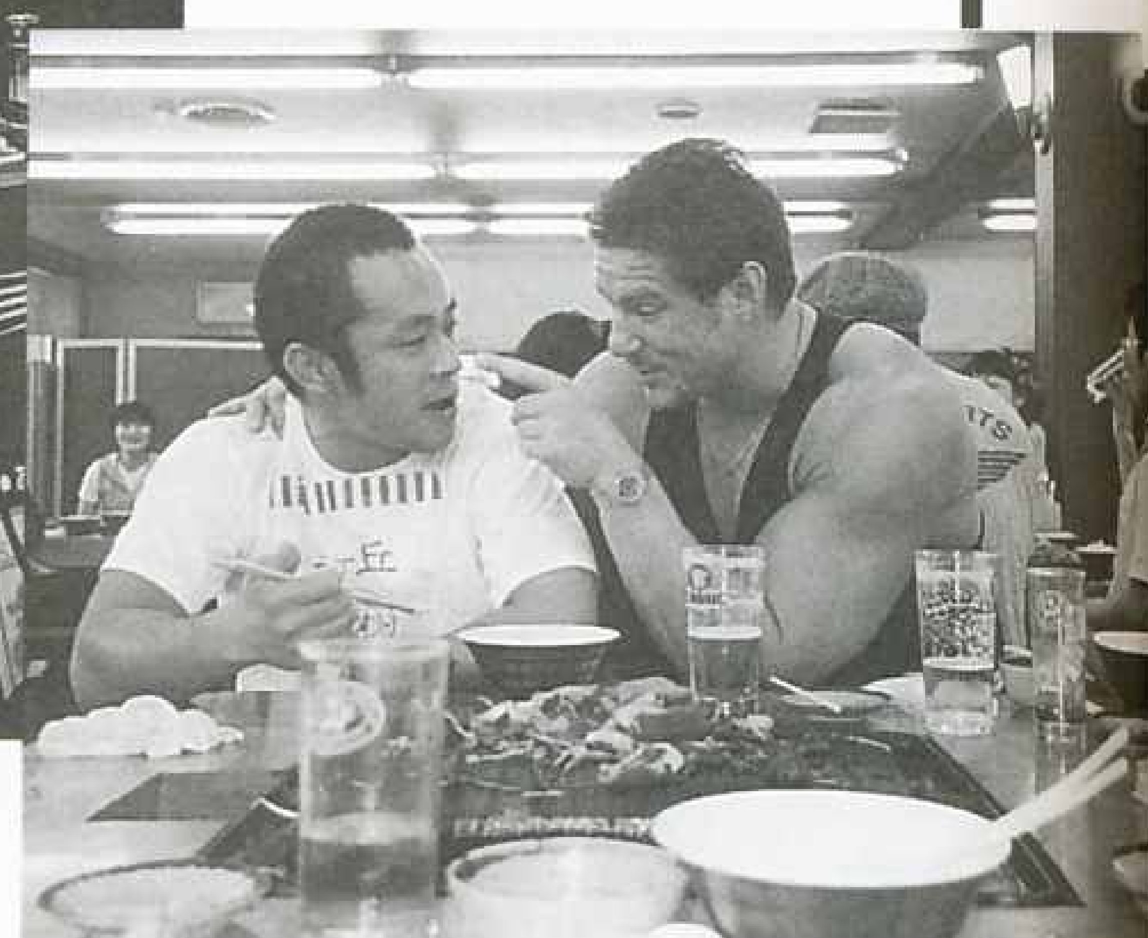


アレクとシングルで対戦したイカレ社長。試合の１週間前から札幌入りして、北の気候に慣れながら調整したのが功を奏したようだ。愛が交錯するバトラーツ的名勝負だった。





『北のアイスクリーム屋』にてタイガーマスク（佐山）のサインを発見！　佐山、最高！



この1週間後、TFMホールで大爆発したマッハ人気。札幌ではビクターから熱血注入イッキを勧められていた。快進撃の原因か。



この日、サッポロでブレイクした男・臼田。足に有刺鉄線を巻いて山川をキック！　場内が大騒ぎになった。観光気分を吹き飛ばす壮絶な試合だった。



テイセンホールは、はちきれんばかりに人がいっぱい！　毎年恒例、みんな心待ちにしていたのだろう。

だって＝ガッデム？ ちっと＝シット？ な募集！

ハガキ道場では、いろんなものを募集しま～す。

- ●本誌へのご意見、ご感想
- ●楽しいイラスト
- ●匿名リサーチ2000XXに聞きたいこと
- ●マヌケなダジャレ
- ●ぜひやってもらいたいカウントアップ・グル～ヴのテーマ
- ●紹介してほしい同人誌
- ●編集部に遊びに来たい美女

などを送ってください。ちなみに合言葉の「だって！　ちっと！　あす！」を明記して下さい。宛先は

〒151-0051 渋谷区千駄ケ谷3-11-3-702
（株）ダブルクロス「ハガキ道場」係まで

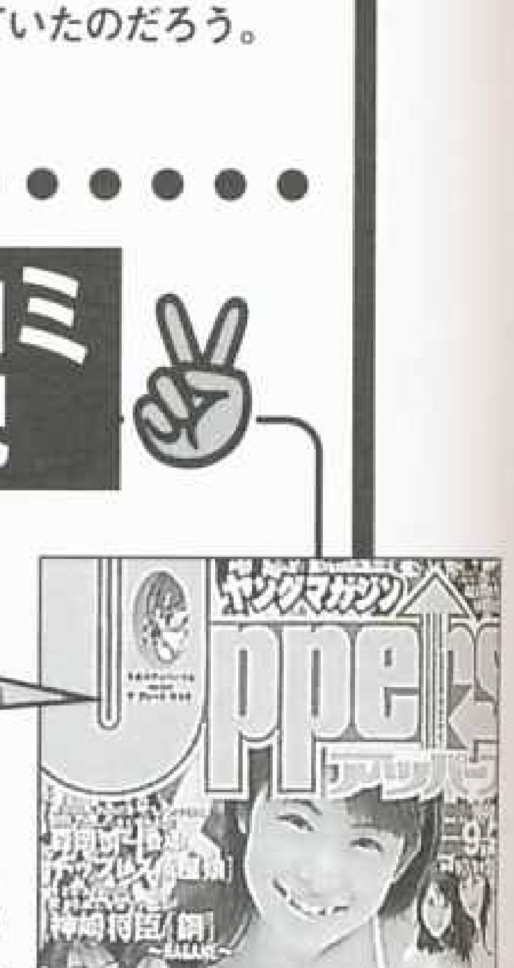
ドスコイ ハガキ道場番付表

1位	中川雅博	58点 P
2位	インチキッズ	31点 S
3位	塩本祐介	29点 S
4位	うしえもん	18点
5位	武田いづみ	14点
6位	サル・ザ・マン	9点
7位	武富浩二	9点
8位	今井麻実	9点
9位	栗野幸次	8点

Pはプロフェッショナル・ファイター
Sはシニア・ファイターの略です

一般マスコミ観察雑記





このコーナーは、前々号で惜しまれながら終了した『プロレスマスコミ観察雑記』の間口を少々広げたものです。レスラーが対世間に何を見せるのか？　をテーマに一般マスコミに目を光らせます。今回は『ヤングマガジン・アッパーズ』に登場したサスケです。奇跡のようなバカマンガ満載のこの雑誌で「アッパー面」として表紙に登場。異様なまでのハイテンションでインタビューに答えています。

読書の秋にぴったりの
おすすめバックナンバー

(元)読書家に聞け!

このページは『紙のプロレスRADICAL』を出すようになる以前、小社がこっそり発行していた世の中とプロレスする雑誌『紙のプロレス』本誌のお知らせです!

Q.馬場さん、『紙のプロレス』ってご存知ですか?



ええ、知ってますよ。今じゃプロレス雑誌みたいになってますけど、昔はプロレスラーはほとんど出てなかったんですよ。プロレス雑誌なのに芸能人が出てること自体ボクは感心しませんね。

※この広告はフィクションです

特選! 芸能人が出てる『紙のプロレス』BEST5

NO.5



どこでなにをやっているのだろう? 有村氏神一番がデビル雅美と対談!

NO.8



プロレスファンにはおなじみ関根勤にロングインタビューで迫る!

NO.11



ガッツ石松、西村知美、佐野量子、糸井重里が「狂気」の正体に迫る!

NO.12



ストリッパーとAV女優とくさや屋のオヤジが色気を語る!

NO.16



由利徹師匠 vs ユセフ・トルコのカックン対談で戦後50年を振り返る!

○定価は『紙のプロレス』5、8号は700円、11号～22号は780円となります。
○『猪木とは何か?』は1320円、『極真とは何か?』は1530円、パンクラス公式読本『矛』『盾』はそれぞれ1260円となります。
○送料は1冊=310円、2冊=340円、3冊～4冊=450円、5冊=520円、6冊以上=700円となります
*なお1号～4号、6号、7号、9号、10号、『大山倍達とは何か?』『猪木とは何か? キラー編』は完売しました。残念でした。
*10号、『大山倍達とは何か?』は書店やプロレスショップで探せば若干残っているはずです。頑張りましょう。

〈申し込み方法〉
●現金書留 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
(株)ダブルクロス「芸能人がいっぱい出ている本誌バックナンバー係」まで
●郵便振替 00130-3-769154 (株)ダブルクロス

紙のプロレス RADICAL
No.12
1998年10月15日発行
定価:本体743円+税

発売元:株式会社ワニマガジン社
〒160-0014 東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03-3357-2911(販売・営業)
発行元:株式会社ダブルクロス
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
TEL.03-3403-5188(編集・制作)
編集兼発行人:山口日昇
編集スタッフ:坂井ノブ/松澤ぴのこ/吉田豪/八木賢太郎(栗ごはんの季節なので非番)
助っ人:寺島ジャイ子/恒遠バカツネ
デザイン:ツー・スリー(出田さん、村松さん、ヒサくん、マツ、出前持ち入江、古川トッポ)
カメラマン:斉藤ユーリ/松永源さん/戸成ぶつぞう/浜田孝一/遠藤政文
お勘定:林ヘックション一枝
ミスター味っ子:中村カタブツ君(35歳)
フィニッシュ:ツー・スリー
印刷:図書印刷株式会社

編集内容等に関するお問い合せは(株)ダブルクロスにね♥

紙のプロレス RADICAL
おい、ホントかよ!?
No.13は
10月下旬
発売予定
※地域によっては多少発売が遅れます

イスを3つ使っても全然足りない大女がたまらず寝込む衝撃度満点コラム

突撃！となりのマット界



プロレス村を
外から眺めてる
鋭角的な執筆陣

花くまゆうさく
「リングの汁」

セッド・ジニアス
「レスラー猪木寛至は悲しき天才だった」（P106−107に引越しました）

時代の先っちょをいく素人投稿ページ
PRIDE.0

椎名基樹＆せきしろ
「ザ・検証」

モデル：先日、ＤＤＴのリングにあがった怪女の双子の姉にあたるジャイ子さん（爆睡中）



ガチャポンのロボコンシリーズを支持する作文

いよいよプライド4ですね。あれから1年です。

悪名高いプライドですが、これまでにヘンゾ、ホイラー、ファス、クァー（ケアー）、ニュートン、キモ、スバーン、桜庭、菊田らをあっさり呼び上げるし、ヒクソンvs高田を実現させ、今回は桜庭vsアラン・ゴエス、クァーvsウゴをやってしまうのだから、その点は素直に凄いと思います。

だからといって、100%手放しで歓迎しているわけではないです……

……問題ありすぎです。

これを書いている時点では、まだ全カード発表されていないので何とも言えませんが、ウワサであがっているマルコ・ファスvsトム・エリクソン戦なんて凄いですよね。

エリクソンをまた見たいと思っていたのに、その相手がウワサどおりファスになったとしたら凄い楽しみですよ。昔からプロレスラー・格闘家にはいいキャッチフレーズがありますよね、〝人間発電所〟のサンマルチノ、〝超獣〟のブロディ、〝スーパーフライ〟のスヌーカ、最近では髙阪の〝怪獣〟がとてもグッドです。去年のVTJでのエリクソンの怒涛の突進ぶりを見てすかさず、これは〝馬鹿が戦車でやってくる〟だ！と思いましたが、どうでしょうか。そんな突進戦車vsファス見たいです。しかし、この号が発売される頃にはそんなカードはないような気がします（この原稿到着後、アレクサンダー大塚vsマルコ・ファス戦が決定・編集部）。

桜庭vsゴエスも楽しみです。今の桜庭はもう負ける気がしないのですが、どうなるんでしょうか。足を壊されてゴエスが立てなくなって終わる気がしないでもないですが……あるいはカメの桜庭に後頭部パンチでゴエスの反則負けとか……それともゴエスが意地を見せフランク戦のようにチョークを極めるか……。

それで、クァーvsウゴですよ。本当なんですかこのカード!? この試合が実現したらファスはどうするのかな？ ウゴとは昔からの友達だし、クァーともビバリーヒルズ柔術クラブ（それにしてもこの名前はちょっと……）の仲間でしょ。マジでやるのかな？

タンク（・アボット）戦での敗北で、世界中に1000人いや5000人ぐらいはいてほしいウゴファン（私含む）を悲しませてしまったウゴには今回なんとしてもがんばってほしい。しかし、今回の相手はキビしすぎます。でも会場のみなさんが、高田を応援するように、私も会場でウゴを応援してますぞ。ガンバレ、ウゴ!!

そして、ヒクソンvs高田である。あと何試合するかわからない、いやもうしないかもしれないヒクソンの相手が高田なのがちょっと残念です。柔術側の誰もがトップと認めるヒクソンなんだから、相手も日本のプロレス＆格闘技のトップを決めてやってほしいです。

新日から橋本、武藤。全日から三沢、川田。リングスから前田、髙阪。高田道場から高田、桜庭。パンクラスから船木。UFOから小川。プロ格闘家から菊田、エンセン……など、この中から誰が一番強いのか決めて、ヒクソンと当てれば誰もがスッキリするのではないでしょうか。（私の予想では、髙阪・桜庭・菊田・本気でヤル気になって練習したらと仮定しての小川、この4人の中から日本のトップが出てくると思います）。

ヒクソンvs高田で気になるのは、ヒクソンの「今までは柔術のために闘ってきたが、これからは自分のためにやる」というようなコメントです。うーむ、どういうこと？

それと、最近あるウワサを聞きました（9月はじめ）。かなり具体的な内容です。信じられんが、もしそれが本当だったら非常にガッカリである。と同時に不安な心配も生まれてきました。本当にそれでいいのか、ヒクソン？ そんなことしたら途中でだまし討ち食らって木村政彦の二の舞になっちまうぞ！

たぶんデマだろうけど、あとで笑える単なるウワサであってほしいです。キーワードは〝5〟。



花くまゆうさく■松永光弘著『ミスター・デンジャー』が素晴らしい！ みなさん必見です！ 読書の秋はこの1冊で決まり！

ジニアス君の文字数完全無視の
原稿のおかげで減ページ

ENTERTAINMENT WRESTLING VIDEO

「このビデオ、趣味でやってるわけじゃないから。仕事だから。間違えちゃダメだよ」というわけで、金を払ってでも見る価値のあるプロフェッショナルなプロレスビデオをお薦めするために、前号から新発進したビデオ評コーナー。

構成／坂井ノブ

『誰も未だ見ぬ猪木』

少し前の作品だが、猪木ファンなら三度のメシを抜いても必見のビデオなので、今さらながら紹介させていただく。引退前後のリリース・ラッシュの中でも、個人的にはこれが一番オススメだ。だって、おもしろいんだもん！（ジャイ子調）。

力道山先生を例に挙げるまでもなく、プロレスラーたるもの、積極的にプロレス村の外に撃って出なければならない。プロレス界でトップに立ち、有り余るエネルギーで他の分野に活躍の場を求めるのは決して悪いことではない。むしろ、ガンガンやるべきだと思う。軸足をプロレスからズラして芸能や宗教の方面に進出、成功したレスラーはたくさん（?）いる。しかし、政治に進出しておんもしれえことをしたのは猪木だけ！　馳は成功したかもしれないが、つまらない。というわけで猪木のありあまる闘魂は世界各地に飛び火し、世界各国を揺り動かしてきた。このビデオには、そんな裏・猪木物語が凝縮されている。プロレスから軸足をズラし、世界情政というグローバルな世界に踏み込んでいるぶんだけ、猪木のただごとじゃないエネルギーが浮き彫りになって視る者を突き刺してやまない。

内容はというと、のっけから1982年当時ブラジルにあったアントン・ハイセルの貴重な映像が炸裂！　そこで、村松友視氏と共に敷地内を散策しながら猪木は牛の糞を発見！　「こんな渦巻いたウンコはないよなぁ。これなんか最高だよ」と子供のようにその糞をワシ掴みにしながら喜ぶ姿に失神確実！　映像でしか楽しみようのない、至高のシーンである。

お次は1991年、天安門事件で世界中から非難を浴びまくっていた頃の中国で、猪木がシルクロードをバイクで走破するツアーを主催したときの模様。出発前、「猪木さん、バイクの運転方法知ってますか?」と聞かれれば、「知らない」と言い切り、「大丈夫ですか?」と心配されても「ンムフフフ」と笑って切り返す猪木。そんな状態でシルクロードを走破しようとする、とことんムチャな人生の片鱗を再確認できる。ちなみにガイジンのツアー参加者に遊びでレスリングを仕掛けられ、しだいにマジになってしまい、最後には相手を倒して腕を極める大人げないステキな猪木の映像も収録されている。本当に「いつ、なんどき、誰の挑戦でも受け」ている。

この他にも、ソマリア視察や北朝鮮興行や小川のオランダでの飛び入り試合の模様までも収録していて、マニアには嬉しい限り。

どこに行っても元気が売り物になってしまう、そんなタフな猪木と一緒にアントン・ハイセルを視察に行った村松友視氏が著書の中で猪木を評した言葉がこの作品中にナレーションで流れる。「刻一刻の体験をいちいち感動として受け止めていく能力と体力があるらしい」。とにかく、「ヤバそうな土地に行って遊ぶ！」という闘魂外交の神髄を感じることが出来る貴重な映像は見ておかないと一生の楽しみの何分の一かを損することは間違いない。必見である。



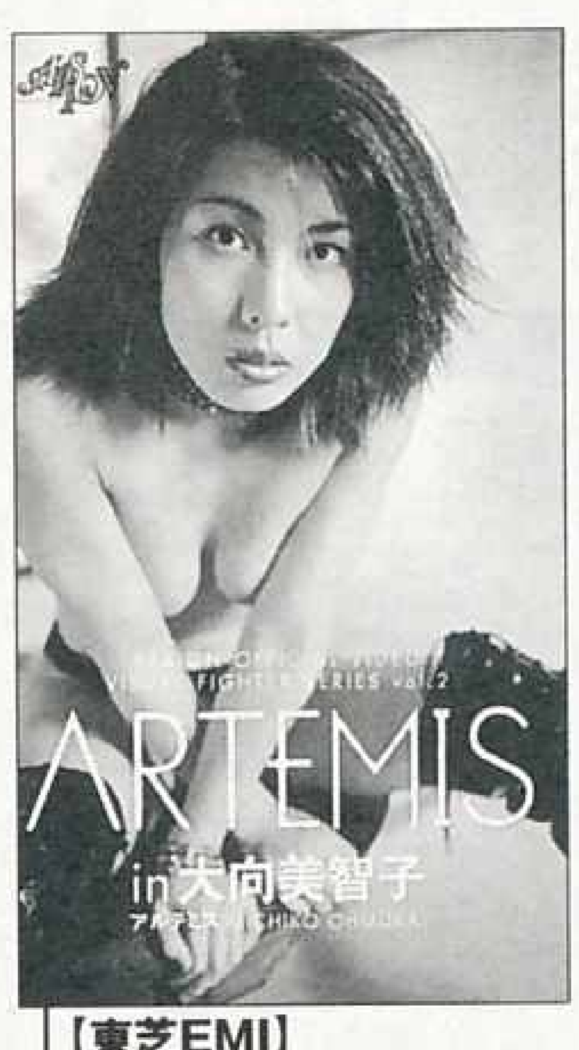
【VARiS】
◆60分
◆カラー
◆モノラル
◆¥5000（税別）

『ARTEMIS in 大向美智子』

このビデオの制作発表の際、大向は「芸能活動をやっていく上で将来の夢は?」と聞かれ、「ファッション・モデルをやってみたい」と語っていた。モデルのことなんか何一つ知りゃしないボクだが、うろ覚えのモデル知識を総動員して分析した結果、どうやらモデルに必要なのは「スレンダー・ボディー」、「高身長」、そして何よりも「ショッキングな顔立ち」であるらしい。とすると、大向は合格ということになるのかな?

というわけで、このビデオは前半こそ定番の水着姿（唐突なタイミングで股間や胸のどアップがカット・インしてくるのは、マニア的にはたまらないポイントか）が大部分だが、後半にはモードなファッションで身を固めた大向の姿も収録されている。こういうことやって似合うのは大向ぐらいだろうね、確かに。以前、井上貴子がボンテージに挑戦して股ぐらにでかい花を挟んだりして大変なことになっていたが、あそこまでのはっちゃけた映像はなし。汚れず、綺麗に、大胆にというのがこのビデオの狙いのようだ。

ズバリ言って、見終わった感想はというと「なにかが足りねえ！」。確かに露出という面での健闘は非常に光るが、奇をてらいすぎてしまったようだ。それよりもむしろプールサイドで、水をスタッフにかけながら「ガッハッハッハ！」と大笑いするシーンに、本誌・練習生のジャイ子がオーバーラップしてしまった。ああいうような「強いお姉さん」マッハ文朱的な豪快なビジュアル・ファイターがいてもいいじゃないかとは思うのだが、そうもいかないか。



【東芝EMI】
◆30分◆カラー
◆ステレオ
◆¥3980（税込）

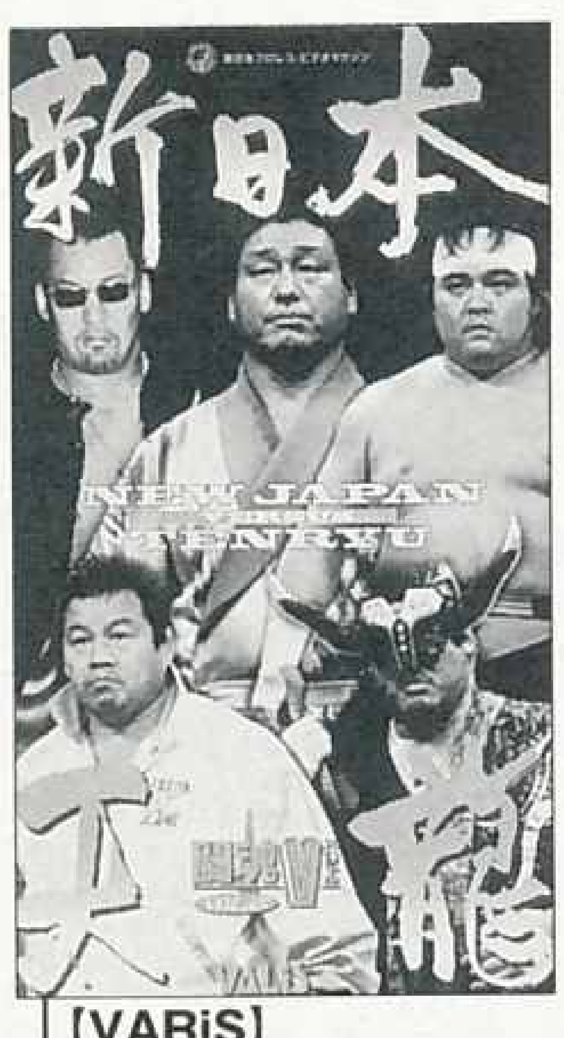
『新日本VS天龍』

天龍というレスラーは、vsランディー・サベージ戦はじめ、ド派手なパフォーマンスを駆使するアメリカンなテイストのレスラーとは高打率でいい試合をする。

まあ、天龍自身もガンコオヤジを地で行くような強烈なキャラクターの持ち主だし、全日仕込みの天龍の試合のテンポと非常にぴったり噛み合うのだろう。このビデオの中でもメチャメチャいい仕事しているという印象を受けた。特に蝶野とのカラミは最高だ。天龍チョップが一発入るたびに蝶野がバッタンバッタンと大暴れで受け身を取る、そんなしびれるような素晴らしい攻防もこの2人にしか作れない、純プロレスの世界の極致であろう。もう最高。

数年前の新日参戦時とは、異なる対戦相手との激突ばかりなので、メチャクチャ新鮮味がある。特に西村〝無我〟修との異次元昭和対決もおつなもの。何がすごいって、試合後のマイク！　例によって非常に聞き取りにくいかすれ声で源ちゃんが、「いまの新日本で誰がいちばん強いんだ?　言ってみろ！」と挑発。すると、マイクを掴んだ西村は、「IWGPヘビー級チャンピオン（当時）の藤波辰爾だ！」と、すかさず親分を、しかもフルネーム肩書き付きで推薦する西村の無我さ加減には脱帽するしかあるまい。相手の良さを引き出すことにかけては天才的な技量を持つ非常に天龍らしい一幕だった。

天龍のプロレスを媒介にして新日を見て、ここ数年の新日の変貌ぶりが顕著になった。



【VARiS】
◆60分◆カラー
◆ステレオ
◆¥3700（税別）

突撃！となりのマット界

PRIDE.0（ゼロ）

強者に闘いの場を与えようという趣旨で発足した「PRIDE」。一方、読者にも闘いの場を与えようという趣旨で発足したのが「PRIDE.0」。"魔の10・11"「PRIDE.4」が近づいてきた。タカダはどうする？　かたや、「PRIDE.0」のリングで3戦無敗のタケダはどうなる？　読者よ、立ち上がれ！　負けてもいいじゃないか！　手にしたものは離さなければならない！　失ったものは取り返しちゃいけない！　恥ずかしがってちゃ、何もできない！　それが、「PRIDE.0」。

前号の結果発表！

ライセンスナンバー3／武田いづみさん『あの世行きテレビプロレスのころ』	91票
ライセンスナンバー6／グレート・ショウゴさん『なにがなにやら、セッド・ジニアス』	35票
ライセンスナンバー7／マスクド・ツネさん『タイガー・ジェット・シンはどこに…』	37票

今回は締切の都合上、いつもより票数は少ないがそれでもおさまらないのがいづみちゃん旋風！「この子ただもんじゃにゃあど、ええど」（広島県／石原光教）「可愛い女の子を写真付きで載せるのは反則だと思う。でも文句の言えない文章なんじゃあ～」（長崎県／大仁田厚子）「武田いづみっち」（山口県／河杉奈央子）「Showより数段上」（東京都／武田智）「武田いづみさん、結婚してください」（岐阜県／伊達三国志）他同様圧倒的多数。文句がある奴は挑戦してこい。でしょ？

谷津さん、「PRIDE」出て下さいよ！「いいけどよぉ、じゃあ誰が営業やんだよぉ！」

3戦勝ち抜き　ライセンスナンバー3
『やさしさとも　あまさとももいう』
武田いづみ（18歳）



例えばプロ野球。応援しているチームが大量得点。このまま行けば勝ちそうってときにあなた、相手のチーム応援します？　普通はしない。自分が好きなチームが勝ちそうなんだもん、それでいいじゃん。じゃあ、陸上競技。ゴールまであと10m、応援している選手がトップってときに、その後ろから来る選手をわざわざ応援するかっての。そう、プロ野球や陸上にはないのだ。アレが。

プロレスの試合中、一方のレスラーAが攻勢になったとき沸き上がるコール。それは大抵、負けている方Bの名前である。当たり前だ。負けているなら応援しよう。……じゃあなんでさっき負けていたBが立場も逆転して勝ちそうってなったとき、今まで応援してなかったAを力一杯コールしているのだ、ついさっきまでBを応援していた君よ。結局どっちの見方なんだ、Aか？　Bか？　――つまりこれが、野球や陸上にはない"判官びいき"である。

判官びいきの判官ってどういう意味か知っているだろうか。別に裁判官のくだけた呼び方ではなく、「九郎判官義経」のことらしい。「源義経のような不遇の英雄に世間が同情しひいきした」ことから判官びいきという言葉ができたそうだ。

うん、まぁ義経はいいとして、プロレス。日本とアメリカのプロレスでは観客の反応がちがう。アメリカのプロレスには判官びいきはない。ヒールとベビーフェイスの抗争を軸に展開するので、観客は忠実にキャラクターを観る。アメリカ人というのは基本的に愛国心が強いんだそうだ。だから初めてみる他国籍のレスラーにはとりあえずブーイングとUSAコールである。アメリカの観客は自分の応援するレスラーが気持ちよく勝つのを観に来るのだ。

対して日本の観客の大半は判官びいきをする。ヒールとベビーフェイスというのはあるものの、自分好みなプロレスをみせてくれるレスラーは誰であれ賞賛するよ、という姿勢だ。こうなると勝敗が第一ではなく、内容重視ということだろう。

このまえボクシングの試合を観ていたら、自分が1Rから最終Rまで無意識に一方の選手を追っていることに気付いた。攻めていれば力が入り、押されてくれば応援する、という具合である。これは私がプロレスラーの格闘技戦を観るときのスタンスと同じだ。去年の高田VSヒクソン戦も、プロレスファンの私は、まず高田ひとりの動きを追って観た。そうして「高田が攻められ、1Rで負けた」と認識する。その後、もう1回観て、「ヒクソンがこう来て高田がこうなって――で、ヒクソンが勝って高田が敗けたんだな」と全体的に認識しなおすのだ。わかりにくい？　アタシもわかんねぇや。

ともかく、プロレスファンは「勝敗をみる」スタンスをとる。高田が負けたことに対して皆がこだわったのが何よりの証拠だ。格闘技戦にも判官びいきはない。

そもそもプロレスには、どうやっても人情がついてきてしまう。判官びいきなんて人情の仕業以外の何モノでもない。プロレスの判官びいきをどっちつかずの曖昧さと見る人も"外"にはたくさんいるが、人情なんてものはハナから曖昧なものである。

プロレスとは人の血の通った闘いなのだ。野球とか陸上とかボクシングが血の通っていない闘いだ、と言う訳じゃない。プロレスが特別過剰に血が通いすぎているだけの話だ。

プロレスファンが判官びいきするのは、レスラーも、レフェリーも、観客も、会場も、全て、その試合自体、プロレス自体を"愛してしまっている"ためだ。いつまでも観ていたい、終わらないでほしい、という気持ちから、つい分の悪い方を応援してしまうんである。

いいか悪いか別にして、判官びいきはプロレスを愛する人の正直な行動なのだろう。しかし、「どっかで本物じゃねぇんじゃねぇかな、愛というのは。ンムフフフ」ということで、当然、裏切りもあるわけだ。

結局、どっちの味方なのって、たぶん私もプロレスの味方です。

プライドゼロ・ドールズも募集中!

ライセンスナンバー 8

『松永光弘とは何か?』

原田幸治(32歳)



僕は愛知県に住んでいます。愛知出身のレスラーといえば、日本一カッコいいプロレスラー後藤達俊さんがおります。しかし、他にもいたのです。

その男は、やたら目立っていた。廊下をたくさんの人が埋めつくしていても、ひとりだけニョッキリ顔が出ていた。

その男は、ある時期バッティングセンターで働いていた。やたら、『週プロ』、『ゴング』が散乱している店だった。

その男は、名古屋の栄大通りを闊歩していた。その時、なぜか映画のチラシを配っていた僕は、すぐに彼とわかった。

その男は、武豊町という町に住んでいた。母屋の隣りに倉庫のような道場を持っていた。偶然そこを通りかかった僕は、何かに吸いこまれるようにその場所に入った。錆びたバーベル等が置かれた道場の壁には、「打倒、前田!! アントニオ猪木!!」と書かれた白い紙が貼られていた。

その男は、マンガ「リングにかけろ」の愛読者だったようだ。僕もそうだった。通販でアポロ・エクササイザーを取り寄せたのはいうまでもない。足首に巻きつけて学校に行く鉄片入りのベルトを買ったのも同じである。

その男は、馬鹿なことに、大メジャーの新日本プロレスのメーンの仕事を蹴って、ワニと戦うことを考えていた。

その男は最近燃えている。デスマッチとUWFの融合という力道山が考えもしなかったような、考えたようなことにチャレンジしている。ぜひ、越谷ショッピング・センターで買い物する石川雄規とその妻を襲ってほしいものである。

その男は、日頃は厨房で自分の肉ならぬ牛の肉を焼いている。

その男は、栄大通りで安いと有名なカメラ屋さんを探していた。僕は、自分から声をかけた。「おー、久しぶりだね。なんで、こんなとこにいるの?」事情を知った僕は親切に店の場所を教えてあげた。彼は、その後2時間、道に迷ったことだろう。

その男は、まわしが好きだった。僕の通っていた中学に相撲部があった。三年一組の教室から丸見えの位置に土俵はあった。人はなぜ相撲をとるのだろう……。そんなことを考えながら僕は稽古風景を眺めていたものだ。僕たちの間で囁かれていたことがある。それは、どうも相撲部員たちは、まわしを身につけるときには、自分では無理だから、「ふりちん」になってお互いにつけ合うという噂が、まことしやかに流されていた。少しうらやましかった。

その男は、ある日から髪を金色に染めた。だから、僕はその男を知らなかった。

その男は、僕がサラリーマンをしていた頃、すでにプロレスラーだった。高い所から飛んだり、火だるまになっていても、僕は、その男を知らなかった。

その男が生涯プロレスラーであることを誓った頃、武豊中学校の土俵は、三年一組の教室から見えない場所に移った。

REVENGE ライセンスナンバー 1

『虎の穴とは何か』

武上康夫(22歳)



プロレスラーには様々な過去がありなり幅がある。レスラーになるのに一番簡単な方法はミスター高橋の本を読んで入門試験に合格することであるが、そのような方法でレスラーになってもらっても狂ったファン的にはおもしろくない。

レスラー志願者よ虎の穴へ行け。最近では少なくなったが、昭和の虎の穴は、テキサス州立大学であると断言する。

スタン・ハンセン、ファンクス、テッド・デビアス、ダスティ・ローデス、ディック・マードックがこの大学の出身である。

マードックは『プロレス学科があったわけじゃない。馬鹿でも入れる学校だったのさ』とテキサンジョークを言っているが、それが真実だとはいえないだろう。

何かが行われていたと思う。一番可能性が高いのは体育の時間である。一般的に大学の体育の授業はただのお遊びに過ぎない。しかし、ヤツらは違う。リアルファイトしているのだろう。勝ち残った者しか単位がもらえない。ハンセンの『ウィーーーー!!!』はウィンの略なのだろう、たぶん。

ここまでテキサス州立大学と書いてきたが正式にはウェスト・テキサス州立大学である。テキサスはじつは州全体が虎の穴状態であり北テキサス州立大学にはスティーブ・オースチンがいた。

オースチンは現代的な感じがして若いファンにうけているが、なんとなく昭和ファンにはうけていない。それはなぜか? じつはオースチンは大学中退なのである。新日本で育った者は新日本の遺伝子を受け継ぐように、テキサス州立大学で暴れた者はテキサス州立大学の遺伝子を受け継ぐのである。オースチンはその遺伝子を受け継がなかったために昭和ファン、テキサンフリーク(俺だけ?)にはいまいちというかね。

アメリカの虎の穴がテキサス州立大学であるならば、プロレスにおいてのみ対立しているカナダはどうであろうか?

カナダの虎の穴はハート・ファミリーである。男8人兄弟が一度はプロレスを経験している、すさまじい家庭である。しかし、現在残っているのはブレットとオーエンだけなのでテキサンレスラーズほど狂っていなかったのであろう。カナダらしいといえるかも。

アメリカ&カナダときたら当然つぎは日本である。

日本の虎の穴はどこか? 新日本プロレス学校、TPG、レッドマン経営のナイトクラブ等があげられるが、名門は専修大学である。

長州力、馳浩などの個性的すぎるレスラーを生んだだけでなく、レスラー以上にレスラーらしい松浪健四郎を教授にしていた素晴らしい大学であるが、最近の卒業生である秋山の常識的な発言、中西の常識的な髪型をみると以前ほどのパワーはないのかもしれない。

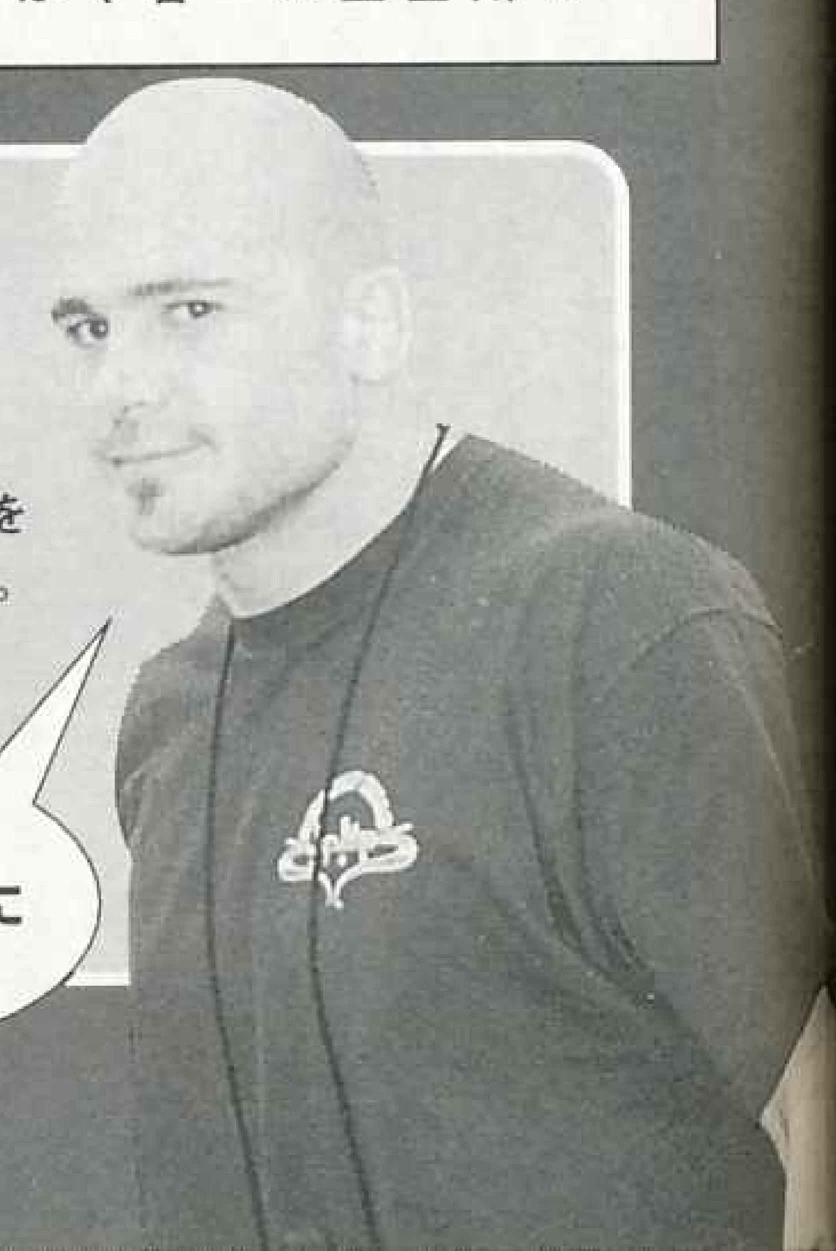
ということでそろそろ行きますか——。1、2、3、ダァ——!!(21世紀の虎の穴は闘魂猪木塾である。火槍特訓よ、永遠なれ!!)

本物のビジュアルライターは君だ!

いづみちゃんが人気でるのは一向に構わないんです。問題は投稿が余りにも少ないことなんです。頼むから投稿してきて下さい。きっといいことがあると思いますから。それでは、いつものように今回の3選手の中から1番お気に入りの作品を一つ選んで下さい(応募方法はP144参照)。1番人気の選手は勝ち抜きとなり次号への参戦が決定します。なお掲載者全員にジャンボなプレゼントを差し上げます。参戦希望選手は、400字詰原稿用紙3～5枚程度、君の、プロレス・格闘技に対する熱い思いをブチまけて下さい。住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、ついでに顔写真(自分の似顔絵でも可)を同封の上、

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
(株)ダブルクロス『紙プロ』編集部「ウハウハしちゃう!」係 まで送って下さい。

●締切は10月11日『PRIDE.4』メイン終了までです。(ぴのこ)



ザ・検証

構成／椎名基樹
撮影／戸成ぶつぞう

迷わず飲めよ！ 飲めばわかるさ！

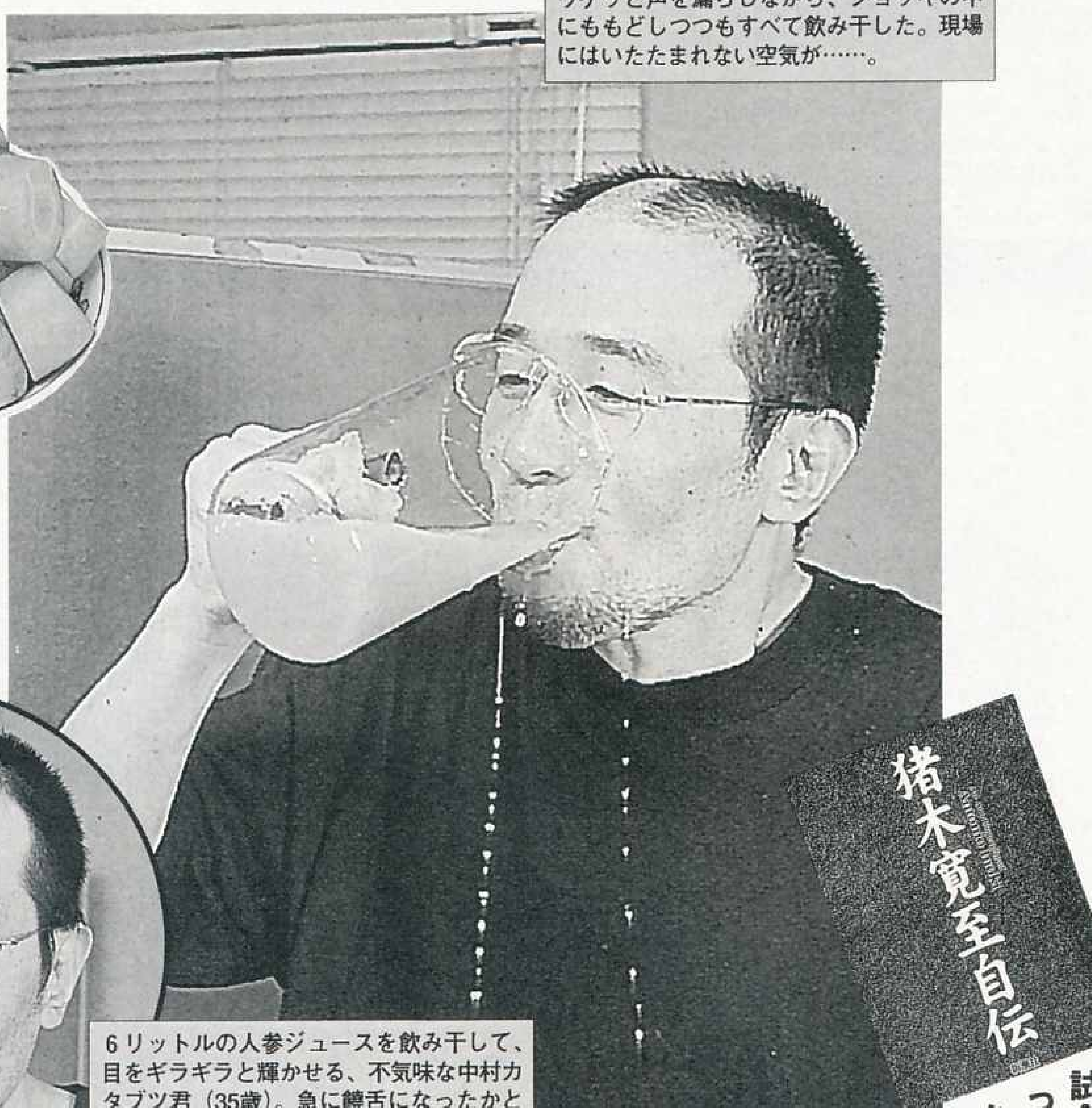


強烈なビデオ&写真集で
パワーアップ!





大ジョッキ６杯分の人参ジュースを作るため、60本の人参をジューサーにかけた。お百姓さんごめんなさい。その横で中村氏は「人参嫌い、チョコレートが好き」と小学生レベルの発言。



涙を浮かべながら、立て続けに大ジョッキ６杯の人参ジュース一気に飲み干した中村カタブツ君（35歳）。途中、何度もウゲッ、ウゲッと声を漏らしながら、ジョッキの中にももどしつつもすべて飲み干した。現場にはいたたまれない空気が……。



どんぶり１杯のニンジンが、ジョッキ１杯のジュースとなる。



６リットルの人参ジュースを飲み干して、目をギラギラと輝かせる、不気味な中村カタブツ君（35歳）。急に饒舌になったかと思うと、総合格闘技の未来についてベラベラと語り出す。テメエの未来を考えろと思うが、黙っているしか手がなかった。

「モンゴリアン・ストンパーが自宅に招待してくれたことがある。彼の家には見たこともないほどの巨大な冷蔵庫があった。それを開けたら、物凄い量の人参がぎっしり入っていた。普通の人参である。ストンパーはその人参を取り出してはジューサーにかけ、人参ジュースを作る。それを特大のジョッキで御馳走してくれるのだ。その気持ちが嬉しくて、私はジョッキで六杯飲んだ。そうしたら、翌日から異変が起きたのである。ムスコが元気になってしまい、三日三晩立ちっぱなしになってしまったのだ。これには困った。試合のときも一向に衰えないのである。試合中にそうなってしまうとどうなるかを想像していただきたい。いやあ、あれには本当に苦労した。

（猪木寛至自伝／新潮社刊より抜粋）

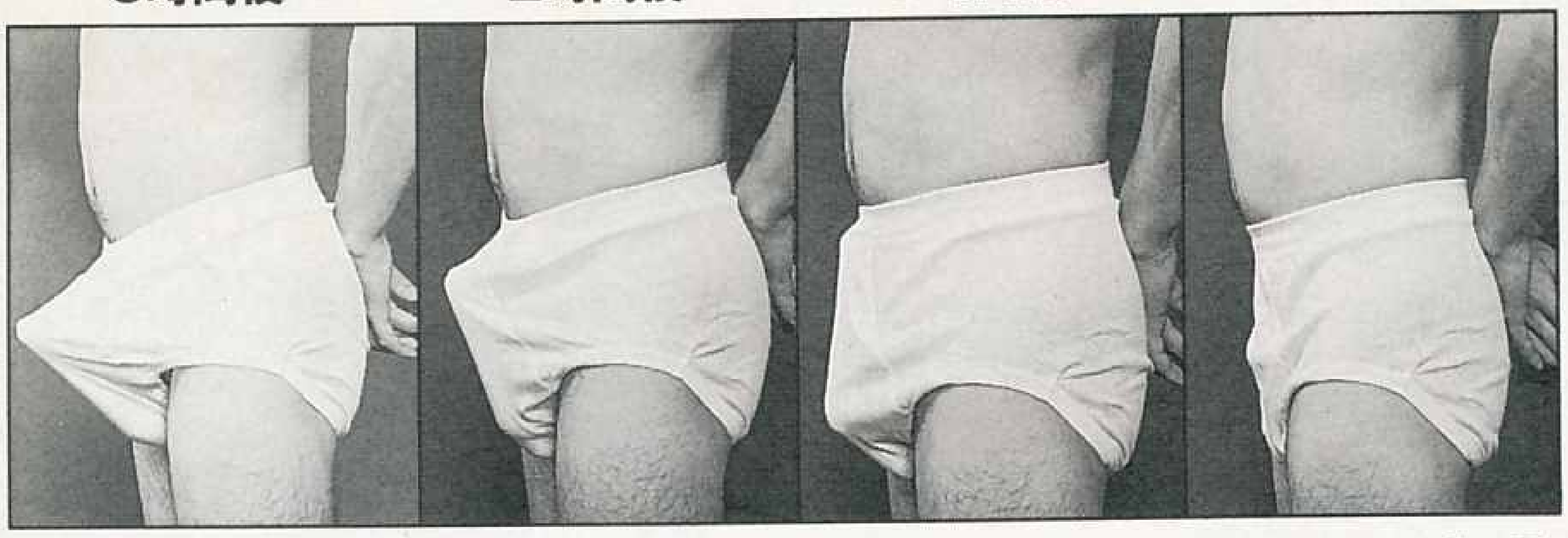
「賭けをするときは、警察(サツ)には内緒にした方がいいですよ」（『サムライニュース』にて菊池孝翁の視聴者へのアドバイス）。

ってことで、秋風も吹き始め、例年通り高田延彦選手が、東京ドームでなにかをしでかす季節がやってまいりました。

そこで我々エゴイスト集団こと「ザ・検証」スタッフが、今回真実のメスを鋭く入れてみようというテーマは、高田とはまったく関係なく、右にあげた、今世紀最大の名著『猪木寛至自伝』の中の一節であります。

昨今、バイアグラなる媚薬が、世の中を騒がせておりますが、猪木はそれよりもずっとずっと大昔に、人参ジュースのバカ飲みにより、三日三晩ムスコ立ちっぱなしという、絶倫ドープ体験をしているというのです。

「想像していただきたい」と、猪木は問い掛けています。でも、もちろんそんなこと〝想像できないよ!!〟であります。果たして、人参ジュースをバカ飲みすると、チンチンが立ちっぱなしになるのでしょうか？　仮りにボッキ作用があるとして、人間が三日三晩立ちっぱなしになるものでしょうか？　途中で射精しても収まらないのでしょうか？　様々な疑問が、私たちの脳裏に浮かびました。こうなれば「いっちょうやってみる」しか手はありません。人体実験



飲めばグングンでかくなる！



「ボッキ待ち」というわけで、仮眠室でリラックス。ビジュアルファイターたちの肢体をながめ、スタンバイOK。マゾ男の血が騒ぎ出す。「私の闘魂が燃え上がった」［中村カタブツ君（35歳）談］。ちなみにフェイバリットネタは玉田（凜映）選手だって。



そして3日後

本当に3日後もビンビンにボッキ中!! 猪木さんの言う通り!!



藤原組長＆サンダー・クラックの監督主演ビデオを見て、さらにボッキをうながす。また、さらにマゾ男爵の血が騒ぎだす。「私の闘魂が燃え上がった」［中村カタブツ君（35歳）談］。画面に向かって「ハウ・マッチ!?」と叫ぶカタブツ。



ボッキを利用し、いつものようにジャイ子嬢にセクハラをする。今度はサド男爵の血が騒ぎだす。「私の闘魂が燃え上がった」［中村カタブツ君（35歳）談］。セクハラ中、「仕事だから」を連発。強烈なプロ意識だ。

突撃！となりのマット界

をしてナゾを解き明かさずにはいられません。このナゾを解くことは、ただ単にプロレス界のナゾを解くことだけにとどまらず、インポに苦しむ多くの男性諸氏の、さらに、夫や恋人の不能や早漏に悩む、女性の方々の欲求不満も解消できるのです。これぞまさに、地球平和をかかげる、猪木イズムではありませんか!!

で、今回この猪木イズムの実践に名乗りをあげてくれた、モルモット役の木偶（デク）は、言わずもがな、中村カタブツ君（35歳）であります。このマルタ野郎の体を張ったスタンドプレイに、どうか読者のみなさん、マラソン大会でビリになったデブにするような、温かい拍手を送ってあげてください。

この実験のために、この35歳は3日間も大好きな射精をガマンしてきたそうです。（ちなみに3日前のズリネタは女子高生物ビデオ）。彼の並々ならぬも不必要な意欲が感じられました。が、いざ実験に入ると、「オラ、人参は飲めねえ」とダダをこね出すという、支離滅裂ぶり。編集部全員でおだてたり、なだめつかせたり（イナイナイバー、コマネチ等のギャグで）して、やっとの思いで人参60本6リットルのジュース（ヒ素入り）を飲ませることに成功したのでした。

するとどうでしょう。ジュースを6リットルも飲んでしまったという事実だけで、このマゾ男はハイテンションになってしまい、ブリーフ一丁で編集部を走り回るという手のほどこしようのない乱れっぷり。人参はチンチンより先に、失業離婚と立て続けに経験した男の内面に作用してしまったのでした。あらぬ方向の実験結果に、一同「俺が悪かった」と肩を落としたのは言うまでもありません。

今回の検証結果

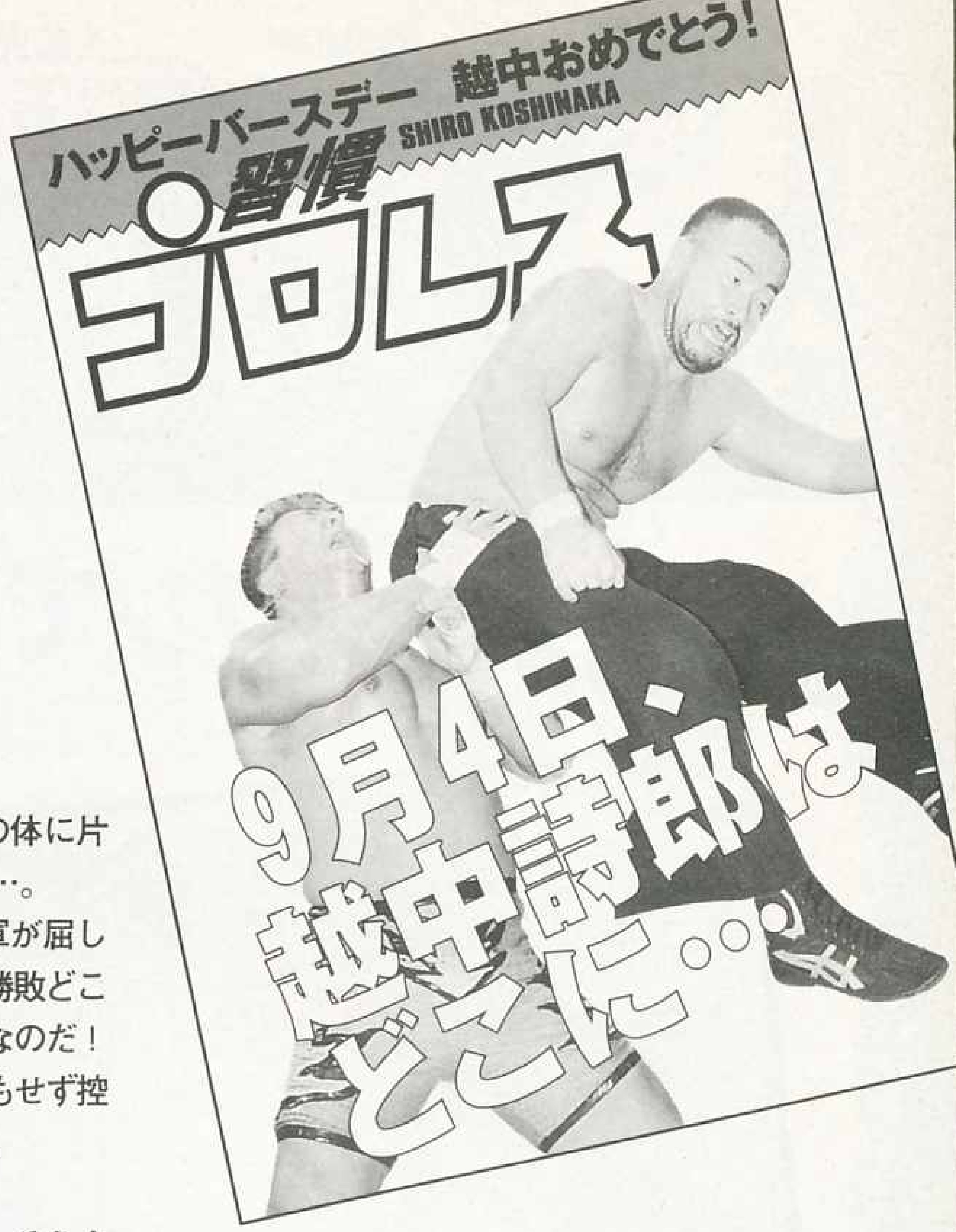
ニンジンじゃないってば!!



驚愕!! 人参ジャンキー中村カタブツ君（35歳）は、このブリーフを実験後8日間も履き続ける離れ技を達成した。（編集部）

ザ・検証

構成／せき詩郎



G1クライマックスというシリーズ名を維震軍クライマックスに変えてやるって!

9月4日。この日が何の日であったか、皆さんはご存知であろうか？　「1909年、ロンドンで世界最初のボーイスカウトが誕生した日」男性読者諸君ならそう答えるかもしれない。「1943年、上野動物園で空襲に備え、動物を薬殺するよう命令が出た日」と心優しい女性読者諸君は即答するだろう。年配の読者なら「1821年、伊能忠敬が『大日本沿海地図』を完成させた日」と大変ためになる話を聞かせてくれるのではなかろうか。

しかし、9月4日という日は、そんなどうでもいい日ではないのである……。

「タッチしろって！」

9月4日、某体育館に越中の声が響き渡った。

この日行われた維震軍vs本隊の試合（10人タッグ）。越中と他の維震軍メンバーとのタッチワークは、どこかギクシャクとしていた。一枚岩とまで言われた維震軍にはとても見えない。

「無視するなって！」

コーナーから手を伸ばしながら、越中は再び叫んだ。

その声に気付いているはずの他のメンバー4人。しかし、振り向きもせず、本隊相手に次々と合体攻撃をキメていく。ぽつんと1人残された越中。

「俺も仲間に入れろって！」

ついに業を煮やした越中が、そう叫びながらリングへと飛び込んだ！

その時である。誰もが予期せぬ事態が起こった！　なんと維震軍の他のメンバー4人が、越中に向かって攻撃を始めたのだ！

「やめろって！」

越中がそう叫ぶ暇も与えずに、カラテ出身彰俊が容赦ない蹴りをぶちこんだ！　なんとか胸を突き出してガードする越中。

「全然痛くないって！」

そう強がる越中のバックに回りこんだ後藤が殺人バックドロップ！

「これはきいたって！」

ふらふらになりながらもなんとか立ち上がり、こう叫んだ越中を今度は小林の網打ち式が襲う！

「もう立てないって！」

さすがの越中も大の字。その越中の体に片足を乗せて、小原が気合いのポーズ……。

結局、試合は安田のパワーに維震軍が屈したかたちとなったが、越中にとっては勝敗どころではなかった。維震軍が分裂の危機なのだ！

大の字になったままの越中を見向きもせず控室へと戻っていく他の維震軍メンバー。

「何だか寂しいって！」

越中はなんとか自力で立ち上がり、そう小さく呟いた。とぼとぼと控室へと歩きだす。脳裏には浮かび上がる様々な事柄。

維震軍のお家騒動も一件落着した。

後藤と小原も戻ってきた。

維震軍の体勢は整った。

勢いもあった。

その証拠にタッグのベルトも取った。

今シリーズは突っ走るはずだった。

次シリーズの『ｎＷｏタイフーン』というタイトルを『維震軍タイフーン』へと変えてやるはずだった。

が、しかし……。

他のメンバーの無視、そして自分へ対する攻撃。

「なんだかやるせないって！」

越中はか弱い声でそう叫び、維震軍控室の扉を開けた。

その時！　バン、バン、バーン！というクラッカーの音が！　そして「越中選手、誕生日おめでとう！」の声。

「何が起こったんだって！」

ビックリして自問自答する越中。

その日、9月4日は越中の誕生日だった。どうやら他のメンバーはそのことに気付いていたらしい。しかし、ただ祝っただけではおもしろくない。そこで、誕生日には気付かないふりをし、越中を無視し、冷たくして、驚かそうとしたのである。

「びっくりさせやがってコノヤロー！　でも、嬉しいって！」

その夜、控室から聞こえる笑い声は、一晩中絶えることはなかった……。

そんな夢物語はさておき、９月４日は「エジソンが自家発電器で約5000個の明かりを灯した日」や「クラシック音楽の日」ではなく、越中詩郎の誕生日なのである。

そんなわけで、『9月4日、越中詩郎はどこに…』という今回の検証は、多分自宅で誕生パーティーじゃないかな、といい加減な結論を一応書いて終わりとする。実際のところ、私は知らない。

突撃！となりのマット界

今回の検証結果

まわりの人10人に聞きました
9月4日は何の日？



だれも「越中の誕生日」とは答えない、残念かつ当然の結果に。ところで、この日はなんと木村健悟の誕生日でもあるのだ！　９月４日、木村健悟はどこに……！　「バイクで日本全国を廻る（選挙活動）」かも!?　ちなみに９月４日の誕生花は「だいこん草」。花言葉は「満ちた希望」だ。

■緊急募集！　平成維震軍Tシャツ（特に黒地に「覇」の文字）をお持ちの方、譲る&売ってください。また売ってるところを知ってるという人も。sekishir@pg.highway.ne.jpまで連絡ください。

二元同時 INTERVIEW

猪木イズム世界一決定戦

実現か?

11月23日、「狂気の沙汰もバト次第」ということで、バトラーツが両国国技館に進出する。ヘタすると、『B—CUP』の決勝で、〝陰の猪木イズム〟石川vs〝陽の猪木イズム〟サスケという、とんでもない対決が実現しそうだ。やれやれやれやれ、このヤローッ!!

98・11・23 両国国技館



“陽の猪木イズム”

ザ・グレート・サスケ

“陰の猪木イズム”

石川雄規

撮影／遠藤政文
photographs by Masafumi Endo



好きに感じろ!
好きに描け!

11・23は“問題のない問題集”なんですよ!!

陰の猪木イズムを持つ男――。

“燃える情念”

石川雄規

Interview

聞き手/山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi

「オレの満足はまだまだこんなモンじゃない! 両国だよ、両国! いいか、もっとオレたちがビッグになったらな、この会場で6万人の行列を作ってやる!」――9月6日、『ヤンジェネ』を初制覇した石川雄規は、たった300人しか入らない会場でこう叫んだ! このスケール、この価値観はホントにカッコ悪いのか? ジックリ考えろ! グッフッフッフ。

――まずは、ありきたりの挨拶ですが、昨日（9・6TOKYO FMホール）は、ヤンジェネ優勝おめでとうございます。

石川　ありがとうございます。そろそろ優勝しないとね、オレのための会社ですからね！　オレだけ優勝しないワケにはいかないからね。フハフハ（鼻息）。

――ガハハハ。ま、社長ですからね。で、勢いに乗ったところで11月23日には両国ですね。『B―CUP』には〝ニューヨークの帝王〟ボブ・バックランドも参戦するし。

石川　あの時子供だったオレたちが、その伝説と相まみえる。タイムスリップ現象ですよ。他の団体だったらただのレトロになると思うんですけど、オレたちは『バック・トゥ・ザ・フューチャー』ですよ！　つまり、たまらないタイムスリップの世界なんですよ。

――単なるレトロ、懐古主義を売りにしているわけではないと。

石川　違う。邂逅なんですよ。オレたちが少年だった時、死ぬほど尊敬していた人がまだ健在であると。そしてオレたちがたどり着いた。昔、オレたちが死ぬほど恋焦がれた蔵前国技館の時代。プロレスが圧倒的に光を放っていた時代。いまはなき蔵前の幻を両国で見る、蔵前の幻を見せるためには両国なんですよ！　そして、次の夢にステップアップするために触れ合った。一夜限りの幻を見るんですよ！　グッフッフッ。

――『バック・トゥ・ザ・フューチャー』でいうと、時計台のシーンみたいなもんですね（笑）。

石川　そう、時計台なんですよ。そして、その邂逅の瞬間を逃すと、もう二度と見られないんですね。

――たった一夜の邂逅。刹那的ですね。

石川　まさに刹那的なんですよ。プロレスって本来そういうものなんです。オレたちの心の宝物を復活させるんですよ！　その宝物は他の人が見たら、ただのガラクタかもしれない。トーナメントに勝っても賞金が出るわけじゃない。だけど、幻を見たいんですよ、一緒に。まるで、みんな集って（つど）ハレー彗星を一緒に見るとワクワクするように。で、見終わるとみんなバラバラになってゆく。そのロマンなんですよ。いま一番ないのはそれじゃないですか、プロレス界でも。本来、ロマンが一番なきゃいけない世界なのに。クソッ！

――でもいまは、『ロマン』なんて、その三文字を言っただけで「ナニ言ってんの、この人？」ってなるじゃないですか。

石川　だったら、そういうバカ共をみんな抹殺するんですよッ!!　そういうバカ共をみんな殺すんですよッ!!　首根っこ引っ掴まえて、引きずり回して、「コイツはバカだ」って世間に知らしめてやるッ!!　ナーシャッ!!　いまの時代はね、大人たちが夢の見方、ロマンへの恋の仕方を教えてないんですよ。大人たちが！　人生の先輩たちが！　それは罪ですよ！　上の世代のヤツらはバカだから!!　オレたちが骨身を削って、ロマンの愛し方とか夢の愛し方、そういったことを伝えていきたいですね。

――うう、熱い！　だけど、石川社長のこのジワリとした熱さみたいなものが、徐々にだけど伝わってきてますね。

石川　一種ストーカー的なね。グッフッフ。

――ロマンにストーカー（笑）。

石川　そうです。ロマンをとことん追求すると。そして、それを否定する奴らをとことん追いかけていく、これは『猪木イズム』ですよ。猪木イズムというのは、例えば自分が天国にいて、憎いヤツが地獄にいるとしたら、わざわざ天国を捨てて地獄にブン殴りに行く！　そういうエネルギーですよ!!

――天国から地獄へ降りる勇気と情念（笑）。ムキになってエネルギーを伝えようとする人を拒否しますからね、いまの世の中は。

石川　おかしい！　狂ってますよ！　結局、オレはムキになって世間でプロレスをバカにしてるヤツらに喧嘩を売ってきたから。

――猪木さんも「無関心な人をこっちに向けさすっていうのが、ある意味ではオレの闘いの歴史というか」と言ってましたね。

石川　いま、そういう人はあんまりいないじゃないですか。「来ないヤツは来ないでいい」「わかんないヤツはわかんないでいい」そう割りきっちゃったらつまんないですよね。オレが地方に行って「プロレスなんて八百長だ」と思ってるオヤジにね、闘いを通して、首根っこ掴んでこっち向かして、「オマエ、これのどこが八百長なんだ!!　音聞いたか！　蹴り見たか！　バカ！　クズ!!　オマエ声も出ないだろ、バカみてえに口開けやがって」とね。そういう闘いを、例え100人に満たない会場でもやってるんです！　燃えるんですよ、数が少なきゃ少ないほど!!　狂ったように闘うんですよ!!

――さすが『燃える情念』ですね（笑）。『情念』ってことに関して言えば、石川社長は常々『情念』とは、「呪いと怒りである」と言ってますね。

石川　そして、「愛の裏返し」!!　愛の延長線上にある。

――その『情念』って言葉に対してもストーカーですよねぇ（笑）。

石川　そうですね、しつこいですね、相当（笑）。でも、昨日の会場の雰囲気を見たら、少しずつオレの世界を理解した同志が増えてきてるってことじゃないですかね。そういう見方をして、そういう生き方をすると、「やっぱ正しいよな、こっちの方が」ってだんだん理解されてきて、オレに塗り替えられていくんですよ。グッフッフッフ。

――要するに、バト魂（こん）が連鎖しているということですね。

石川　「夢やロマン。真剣、一生懸命、勇気。そういった、いわゆる世の中で言われてる『ダサイ』っていうことが、本当はカッコいいんだよ、バカヤロー!!」って言える人たちが増えてる。「見ろよ、だからオレたちはバトラーツが好きなんだよ」って言える人たちが増えてるんですよ。そういう人を巻き込んで、世紀末に向けてオレたちが地球を守りますよ!!　だって大変じゃないですか、洪水とかって。

――へ？　いきなり洪水ときましたか（笑）。この間、東北地方にも大きな地震がきましたね。

石川　あれはサスケさんが仕掛けたんでしょ？（笑）。

――あれはグレートの仕業ですね、もちろん（笑）。で、そのグレートは、東北からノコノコとジュニアのトーナメントと騙されて、『B―CUP』に名乗りを挙げましたが。

石川　うれしいですね。だから最高のプレゼントを用意しましたよ！〝2mの熱血巨人〟ビクター・クルーガーを！　ジュニアのトーナメントだと騙されて、1回戦で2メートルの男と闘ってしまう、と。オレと闘うためにビクターを倒せ！　と。

――ガハハハハハ、タチ悪いですねー。で、お互い勝ち上がって行けば、両国の決勝で当たるかもしれない。これはもう『猪木イズム世界一決定戦』というか『イカレ社長



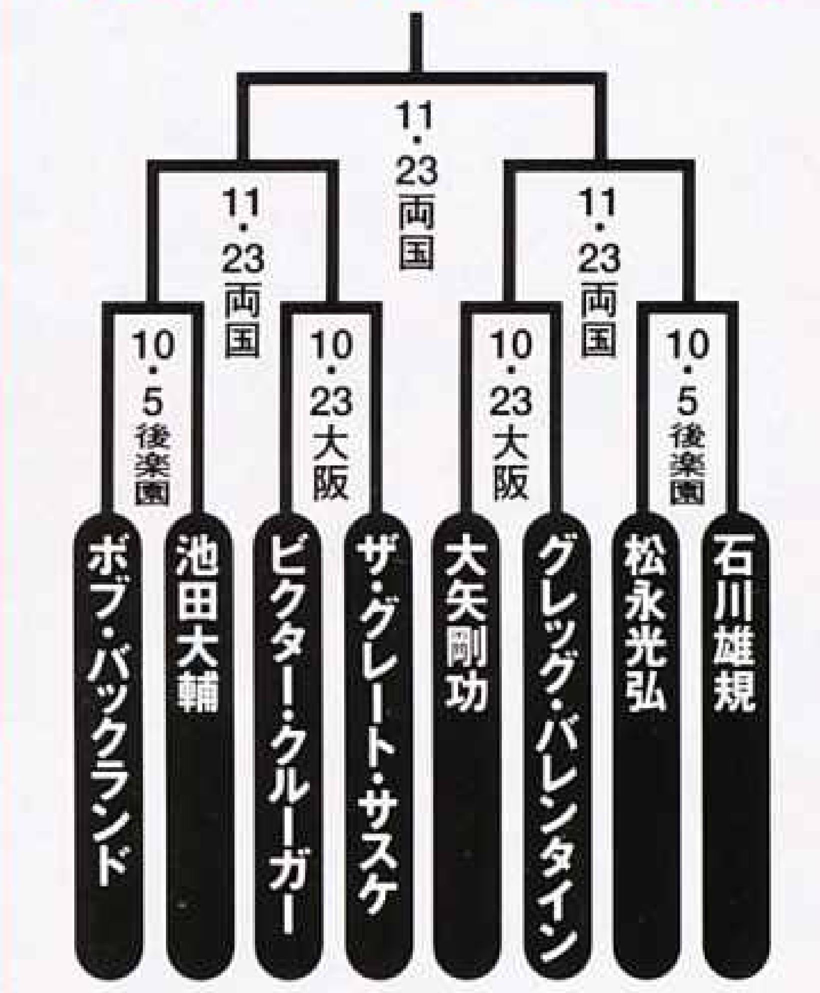
猪木イズム世界一決定戦

世界一決定戦』というか。
石川　非常に怪しいというか。
——石川社長自身は、1回戦の松永光弘戦（10・5後楽園）が注目だけど、でも、この一戦は単なる猪木vsシンのリメイクとかに捉われない方が面白そうですね。
石川　だから、松永選手がただ単に椅子持ってるだけでも、イヤ～な感じがするでしょ。だから、魂っていうのかなぁ、人間臭いバイオレンス、肉体の狂気性。闘いの色気が見える。松永がサーベルを持つ、あるいは何かを持つ、それだけで絵になるんですよ。そういった意味でオレは松永選手を認めてる。だから単なるレトロって意味じゃなくて、あの当時の猪木vsシンっていうのは艶と色気があったじゃないですか。
——はいはい。あのね、極真の故・大山倍達総裁が「私は50年たってもいまだに拳の握り方に疑問を覚えるよ」って言ってたんですよ。凄い言葉だなと思ってね。
石川（カール・）ゴッチさんと通じますね。
——猪木さんも、いまだにプロレスに対して疑問を持ってるし。
石川「ナゼだナゼだナゼだナゼだ！」と考える。考えるってことが色気なんですよ。



——松永選手なんかも、50年たっても凶器の出し方ひとつに疑問を覚えるタイプでしょうね（笑）。
石川　そうそう（笑）。でも他のデスマッチにはそれがないから、みんなただの羅列になってるんですよ。普通のレスリングにしてもそう。技の羅列。
——そうなると単なる記号ですね。
石川　オレなんか、見てください。バックドロップしか出さないでしょ、いま。
——あと恐ろしく鈍い音のする頭突きね。
石川　つまり、『B―CUP』とは、まさにDNAの闘いなんですよ。オレたちの魂のDNAの中にアントニオ猪木の闘魂が入ってるんですよ！　そして、松永のDNAの中には当時憧れていた悪役レスラーのDNAが入ってるんですよ！
——『B―CUP』は形を変えた『猪木祭り』ですよ。猪木イズム伝承祭り。
石川　魂の勝負、ロマンある闘いを若い世代がやらなきゃイカンのですよ。オレたち自体がDNAを受け継いで、新たに何かをクリエイトしなくちゃイカンのですよ。
——考えてますねぇ。とてもカレーライスを指さして「ウンコウンコ」って言ってる人と同じ人とは思えないですね～（笑）。
石川　ええ、さっきいただいたのも美味しいウンコでしたよ。あ！　ロシアン・カレーっていいですね!!　ひとつだけカレーの中にウンコが入ってるの。
——ガハハハハハハハ。ロシアン・ルーレットのカレー版。くっだらねえな（笑）。
石川　スゴイですね、それ。やりたいですね。フハフハ（鼻息）。
——そういうことを考えさせるとアジアで3本の指に入りますね。いつもそういうイタズラ心というか、遊び心と真剣な部分が背中合わせですね。
石川　まったく同じなんですよ。もう、グッチャグチャに混ざってるんですよ。
——遊び心といえば、ミスター・ウォーリーっていうのが出現しましたよね。猪木さん本人は「別人」って言ってますけど（笑）。
石川　イイですねー。前田さんの引退興行にもアレで行ってほしかったですね。
——最近のCMで、「人間っていうのは冗談か本気か、ギリギリのところで生きてるんじゃねえかな」って松田優作がつぶやくのがあったけど、まさに猪木さんってそういう感じでしょ。
石川　ギリギリのところまで持ってって、そこを痛快に生きれるってことは、その人間の度量ですね。いまは肝っ玉のちっちゃいヤツが多すぎるんですよ！　そこまで行く

[B-CUPトーナメント組み合わせ]



[B－CUP開催会場]

10月5日（月）後楽園ホール　18：30
10月23日（金）大阪府立体育館（第2競技場）　18：00
11月23日（祝）両国国技館　15：00

※10・5後楽園大会と10・23大阪大会。どちらかを観戦して、なおも11・23も観戦される奇特な方には、11・23当日に記念グッズをプレゼント。必ず後楽園大会もしくは大阪大会の半券をお持ち下さい。ぶあ～

猪木イズム世界一決定戦



情念とは怒り!!

藤原組時代から数えて4回目にして『ヤング・ジェネレーション・バトル』を制した石川社長。卍固めから前方に回転しての逆十字で"熱血巨人"ビクター・クルーガーを見事に下した！　石川雄規のプロレスは、真面目に見ても不真面目に見てもわからない。クソ真面目に見なければ滲み出てこないのだ！　意味がわからないなんて言ってる奴は、死んだら骨壷にクソ入れてやる！　ナーシャッ!!

【ロマンと情念のバトラーツホームページだ。ナーシャ!!】 http://www.ops.dti.ne.jp/~batbat

のにビクビクしやがって！　無難なラインばっかりで生きてるんですよ。
——猪木さんも、サスケ社長も、お遊びなのか真剣なのかギリギリのところでやってますよね。で、サスケ社長なんか、ときどき遊びの方にケブラータしちゃうから、思いきり叩かれたりとかね（笑）。
石川　いいんですよ。失敗するとみんな笑う。だけど、いいじゃない。1回や2回笑われたってどうってことない。みんな1回笑われることにビビってるんですよ。また違ったことやってそいつらを見返してやりゃあいい。「いつか死ぬときにオレが笑ってやる、お前のことを」ってね。気に入らないヤツは墓を掘り起こして、骨壷の中にクソ入れてやりゃあいいんですよ！
——ガハハハハハハハハ！　墓にクソをブッかけるんじゃなくて？
石川　ブッかけるだけだったら洗えば済んじゃうじゃないですか。だから、サスケさんていうのはスキャンダルを味方にするタイプ。逆にオレはスキャンダル自体あまりないと思うんですよ。サスケさんはブワーッてスキャンダル撒き散らして、それで世間を巻き込むタイプ。オレはしつこ〜く、陰湿に罠を仕掛けるようなね。グッフッフ。
——にじり寄るって感じですよね（笑）。だから、二人の対照的な猪木イズムは面白いですよね。
石川　その二つの〝陰〟と〝陽〟の猪木イズムが合体したら、もう、プロレス界の救世主ですよ。
——だからこそ、二人の対決を決勝で見てみたいなって思いますね。
石川　期待してください!!
——それから、例えばね、アレクが『PRIDE.4』に出てマルコ・ファスとやる。そのアレクを基準に考えても、みちプロに出た、FMWにも出た。もの凄い振り幅ですよね。その振り幅が広すぎて、「バトラーツって一体ナニやりたいんだ？」っていう声が出てきた時に、社長はどう答えるんですか？
石川　出てこないもん、そんなモノは！　そんな頭の悪い人たちはバトラーツに集まってこないもん!!
——はっは〜、なんかいますごいスッキリした気がしますね（笑）。答えが出ないからプロレスなんですね。
石川　だって、〝もしこんな風に言われたらどうしよう〟なんて思ったら何もできないもん。でも、そういうものにもオレたちは流されないようにね。いつでもベーシックならベーシックに戻すことができるように、ギアチェンジがいつでもできるようにしておかないとダメなんですよ。
——やっぱり、いまのプロレスは答えがすぐにわかりすぎちゃいますよね。
石川　目の前にある虎の巻を渡してるようなモンですよね。
——もしくはファミコンの攻略本的なものがなければ、何も考えないレスラーやファンが増えてる。それは考えさせない団体側にも原因があるけど。
石川　ウチなんか、『解答さえない問題集』ですからね。イヤな問題集ですよね。気持ちわりィ（笑）。
——そのうち『問題のない問題集』になったりして（笑）。
石川　つまり、それが芸術になるんですよ！「さあ、描きな」って真っ白なキャンバスだけ渡されて。
——じゃあ、石川社長が究極的に目指すところは？
石川　芸術なんです!!　一問一答じゃないんですよ。「好きに描け！」「好きに感じろ！」というか。
——格闘芸術！　そこまで言い切ったからには、ズバリ言って（『B-CUP』の）優勝は間違いないですね。
石川　ズバリ言って行きますよ！　だってオレのための大会だもん!!　グッフッフッフ。
——ガハハハ。VIVA、イカレ社長!!
【9月7日／石川雄規、ヤンジェネ初優勝の翌日、六本木アートセンターにて収録】



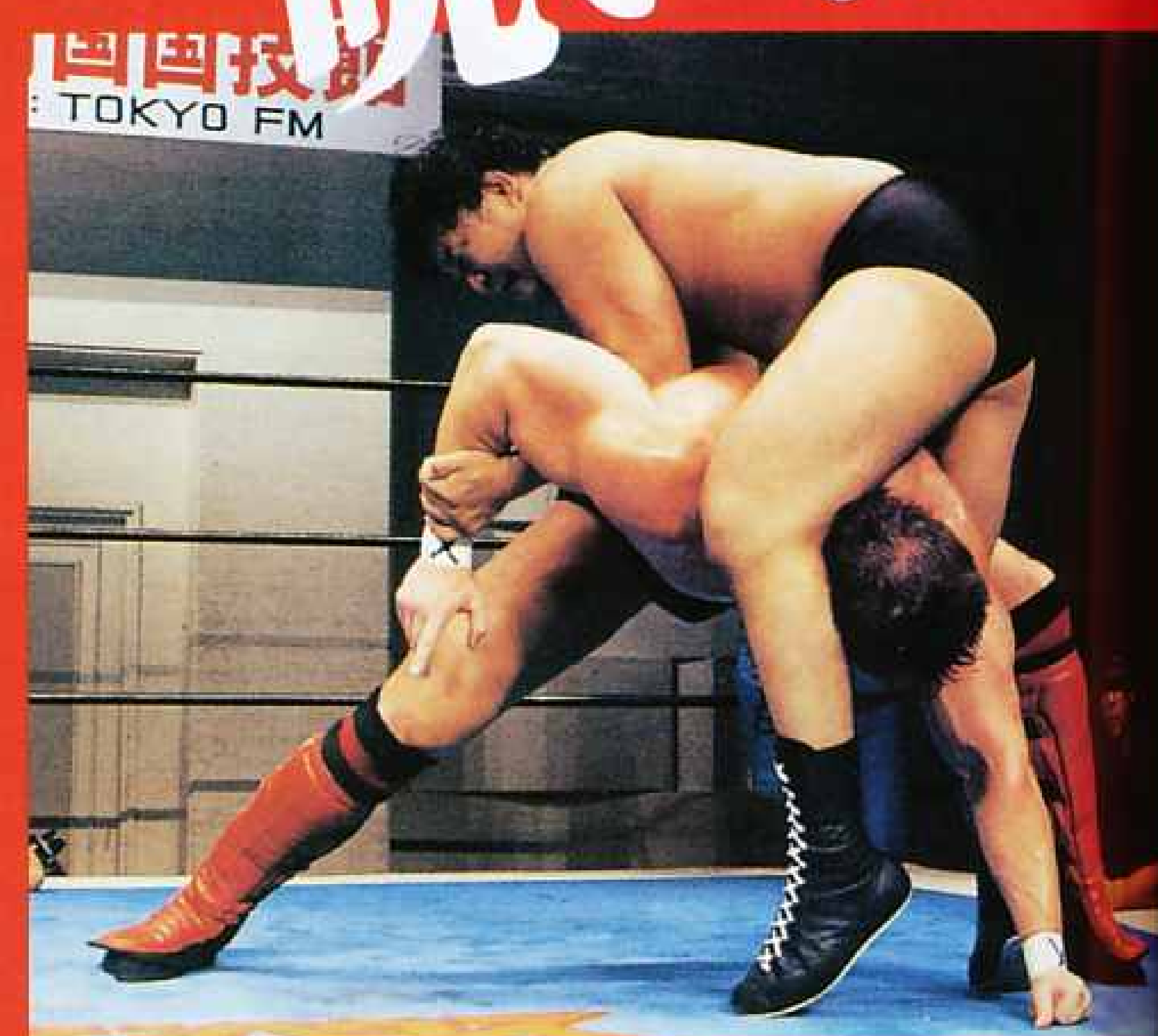




そして情念とは 愛の裏返しだ!! ナーシャ!!



情念とは 呪い!!



試合写真／遠藤政文



みんなバカだ!

OVNI（オブニ）・・・僕はスペイン語でUFOを離陸させますよオオオオ!!

陽の猪木イズムを持つ男——。

“東北の英雄”ザ・グレート・サスケ Interview

聞き手／チョロ
interview by Choro

怪我による長期欠場から復帰したサスケだが、その復帰戦で怪我をして再び欠場。みちのくでのファンの人気投票では、サスケ・ティガにまで負けてしまうなど、何かと暗い話題ばかり。そんなサスケの猪木イズムとは何か？ 話していくうちに、サスケ大爆発! デルフィン、みちプロから、みちのくファンまでメッタ切り! そして驚愕の衝撃発言!

猪木イズム世界一決定戦



――この間の北朝鮮の弾道ミサイル！

サスケ　あ～、テポドン、テポドン。アレはウチ狙ったんですよぉ。ウチの練習生がね、一人拉致されてるんで。ガハハハ！

――アハハ！　されましたか、拉致（笑）。

サスケ　ちょっとね、バッシングしたら逆にミサイル撃たれたんだよ。まいったな。

――みちのくにまいったか！

サスケ　ガハハハ！　上手いね、どうも。

――サスケ社長、実はボクは社長の妹と高校時代同じクラスだったんですよ。サスケ・ザ・シスターというか。

サスケ　ガハハハ！　何それ、何それ。

――隣の席だったんですよ。

サスケ　エッ～～！　じゃあ盛岡出身？

――盛岡より更に田舎の九戸村なんですよ。みちプロでも来てくれない（笑）。

サスケ　ハイハイハイ。いずれ行きたいと思ってたんだよ、九戸も。

――本当ですかぁ!?　本当に来ます!?

サスケ　行っても来ないでしょ。

――まあ行かないですけどね（笑）。

サスケ　いい加減だな、いい加減！（笑）

――前号でサスケ社長に、高田vsヒクソン戦の勝敗予想をお願いしたじゃないですか。ヒクソンに勝てるレスラーはやっぱり谷津さんですかね？

サスケ　そうそうそう。これから谷津さんがブレイクするから。『紙プロ』のインタビュー（NO9、10）は良かった。今は震源地だ！　これは来るぞ、来るぞってね。これからは谷津さんの時代だ！　来てるよ！

――来ますよね、谷津さんは（笑）。それでボクは26で、サスケ社長とそんな歳は変わらないんですけど、岩手では新日本の放送時間は、真夜中とかあんまりいい時間帯じゃなかったですよね。

サスケ　なかったねぇ～。でも俺の場合はね、もっと昔に遡って、ゴールデンタイムで新日やってる時にもうファンだったからね。だから5歳とか4歳の時ね。

――その頃ってゴールデンタイムでやってました、新日？

サスケ　やってたんだよ、新日本ね。

――IBCで？

サスケ　そうIBCで。ガハハハハ！　ローカルネタだな、うん（笑）。岩手県人は多いんだよ、猪木信者が。ホントそうよ。

――確かにそうかもしれませんね。サスケ社長はよく会場に見に行ってたんですか？

サスケ　オ～レは、いつも行ってたもん。サイン貰ったんだから、中学2年の時に。

――誰にですか。ミスター高橋？

サスケ　いやいや違う違う違う。ガハハハハハ！　猪木さん本人にな。そうだ、猪木さんに貰う前に高田さんに貰ったんだ。

――〝青春のエスペランサ〟の頃ですか。

サスケ　そうそうそう。サイキョ！って言ってたんだよ。ガハハハハハ！

――アハハハ！　レスラーになってからの猪木さんとの思い出って何かありますか？

サスケ　何年か前に、『紙プロ』主催のイベントで猪木さんを呼んだんだよね。

――やりましたね。クリスマスの時に。

サスケ　一緒に舞台に上がってね、その時猪木さんが俺に言ったんだよ。（猪木のモノマネで）「いつもケーブルテレビで見てます」って。ガハハハハハ！

――メチャメチャ嬉しいですね（笑）。

サスケ　（再び猪木マネ）「あのー、飛んだり跳ねたりしてますよね」って。「最初はどんなプロレスかと思いましたけど、ああいうプロレスもいいかなと。私にはできないですから」って言ってくれてね。アレは嬉しかったねぇ。アレは嬉しかった！

――アハハハハハ！　それで猪木さんといえば、最近、石川社長が〝闘魂伝承〟とか〝燃える情念〟とか言ってますけど、当然サスケ社長も黙ってられないですよね。

サスケ　黙ってられないよね～。でも石川さんには一歩も二歩も先行かれちゃったね。実際闘ってるからね、猪木さんと。

――石川社長は試合してますもんね。

サスケ　オレは闘わずじまいでねぇ。でもテレビの企画で控室にお邪魔して同じソファーに座ってさぁ、「みちのくプロレスはどう思いますか？」ってコメントして貰ったんだよぉ～、アレは良かったなぁ～。

――その時も言われましたか、「いつもケーブルテレビで見てます」って（笑）。

サスケ　その時はね………、うん、同じようなこと言われたなぁ。ガハハハハハ！

――アハハハ！　ところで社長、今度のバトラーツの大阪大会では、ビクター・クルーガーとの対戦が決まってますね？

サスケ　いやぁアレは嘘だろって思いましたねぇ。アレは嘘だな！　絶対オレ、ジュニア・トーナメントで（田中）稔ちゃんとやるもんだと思ってたから。島田（レフェリー）さんに騙されて会見場に行ったんですよ、「いい娘いるんですよ～」って言われてね。ガハハハハハハ！

――また簡単な手で騙されますね（笑）。

サスケ　ガハハハハ！　それで控室に行ったら松永さんがいて、「松永です、押忍！」ってさぁ。ガハハハハハハ！

――でも決勝は是非、石川VSサスケの猪木イズム世界一決定戦が見たいですけどね。

サスケ　そうなったら理想的だよなぁ。でも難しいんじゃない。お互い1回戦で負けて、両国の1試合目でやるっていうのもいいな。それでもいいよな。う～ん。

――猪木さんも1試合目でやってましたからね。バトラーツというと、〝闘魂〟と同じように〝バト魂〟ってあると思うんですけど、バト魂って何だと思います？

サスケ　バト魂！　バト魂は、……う～ん、やっぱピュアハートだな。ピュアハート！

――どっかの女子プロみたいですね（笑）。

サスケ　ガハハハハ！　ピュアだよな、みんな。ピュアなままでいって欲しいよなぁ。

――もちろんみちのくもピュアですよね？

サスケ　あ～、それは違うんだよ。今みちのくはピュアじゃないんだよ。限りなく濁ってるんだよ、みちプロは！

――エッ！　みちプロは濁ってる!?　何が濁った原因なんですか？

サスケ　デルフィンがまずダメだな。あとはも～う、ほっとんど濁っちゃってるな。

――アハハハハハ！　ほとんど！

サスケ　かろうじてねぇ、タイガーとギリギリ星川ぐらいかなぁ、濁ってないのは。ただ星川、タイガーも完全にピュアじゃないよな。だからオレも、もうみちプロから独立しちゃおうかと思ってるんだけどね。

――エッ～～～！　独立するんですか！

サスケ　そうだな。オブニっていう団体作ろうかと思ってんだよ。オブニ！

――エッ！　オブニ!?

サスケ　これはね、O・V・N・Iって書いて、OVNI。これはスペイン語でUFOっていう意味なんだよ。ガハハハハハ！

――おぉ～、UFO（笑）。それは具体的に決まってることなんですか？

サスケ　ホント独立しようかな。みちプロを捨ててな。OVNIの参加メンバーは決まってるんだよ。岡もっちゃん（岡本衛）と、タイガーと俺だよ。あと（田中）稔ちゃんね。その辺でやってきゃいいんだよ。

――OVNI、面白いですねぇ。スペイン語でUFO！　UFOは旗揚げ前から強力

なライバル団体ができましたね（笑）。

サスケ　ガハハハハ！　でも最悪はそこまで考えないとな。だからバト魂っていうのをウチの選手も見習って欲しいよな。

――でも、今みちのくでのサスケ社長は、猪木さんが社長の時みたいになってますよね。いつの間にか選手がドンドン辞めちゃって「大掃除ができた」とかみたいな。

サスケ　ガハハハ！　そうだよなぁ（笑）。

――出ていっても「どうってことねぇや」って感じですよね、サスケ社長は。

サスケ　ホントどうってことねぇよ！

――猪木イズムですね～。出るのも、戻るのも拒まないって感じですよね。

サスケ　そうだよ。ただカズ・ハヤシは拒む！　だってよ、カズ・ハヤシをやっつけるのに1分も要らないからな。目つぶって30秒だから。ガハハハハハハハ！

――アハハハハハ！　谷津さんだ！

サスケ　カズ・ハヤシなんてのは、シロウトだからな。みちプロの人間だって言い張ってるけど、一回も見たことない！

――アハハハハ！　キラー・サスケだ!!　どこまでなら許せるんですか？

サスケ　う～ん、海援隊は許せるかな。海援隊でも3人だけな。ＴＡＫＡはダメだよ。

――猪木イズムじゃないですね（笑）。許しきれない！

サスケ　ガハハハハハ！　そういうとこもあるんだけどな。

――出るものは拒まず、来るものはちょっとだけ拒むと。

サスケ　そうそうそう。みんな好きにやれよと。ただし濁ってちゃダメだと。

――それじゃこれからサスケ社長は、みちのくを改革していくんですか？

サスケ　そうだねぇ。みんなの眼を醒まさせたいよな。もう一度原点に戻れよと。結局みんなハングリー精神を失っちゃったんだ、今のみちプロの連中はな。みんなハングリーを忘れちゃった。

――でも他の選手に突っ込まれてますよね、サスケ社長がハングリーさを失ったと。

サスケ　それはおかしいんだよ。だから奴等は何もわかってないんだよ。例えばここでホントのこと言うとさ、俺は自分の食いっぷちを減らして、選手を食わしてるワケよ。だから、ホントみんなオレよりもいい給料貰ってるんだぜ。ここだけの話な。

――ヘッ！　そうなんですか！

サスケ　書いてもいいんだけどな。『紙プロ』だから話すんだけどさぁ。ホント奴等はわかってないんだよね。

――リムジンだとか、そういう上っ面のとこだけ捉えてるんですかね。

サスケ　そうそうそうそう。よくリムジンが槍玉に挙げられるんだけどさ、ただささ、あのぐらいのことしないと入門希望者が来ないよ。でしょ？

――そうですね。やっぱりファンに夢を与えないとダメですからね。

サスケ　ねぇ～。絶対そうだよ。やっぱり夢を与えなきゃダメだよな。そういう見えるところは派手に金を掛けてもいいと思うし。それは俺のポリシーだよな。う～ん。

――猪木さんも多額の借金を抱えてもリムジンとか乗ってましたからね。

サスケ　そうだろ。それだよ！　見えるところぐらい見栄張ってもいいじゃん、ねぇ。

――そうですよね。六本木ぐらい行かせてくれって感じですよね（笑）。

サスケ　そうだよなっ。ガハハハハハハ！　それはホントそうだよなっ！　アレだって自分の小遣いで飲んでんだぜ。そんなのあれこれ言われる筋合いないよなっ。

――そうですよね。ボクも行きたい（笑）。

サスケ　なっ。それをウチのレスラーってのは、わかってないんだよ。ファンと同じ目線にいるわけよ。俺に対しては。なんだサスケ、いい格好してるなと。でもこれも『紙プロ』だから言っちゃうけどさぁ。みんな盛岡にいないんだよね、選手は。

――盛岡に住んでいないと？

サスケ　みんな好きなところに住んでんだよね。だから普段俺が何やってるか知らないんだよ。俺ホント、朝から晩まで働いてんだぜ。この間、会社設立して6年目にして初めて1日だけ休み取れたんだから。

――6年間でたった1日！

サスケ　初めて家族旅行ってのをしたよ。

――どの辺まで行ったんですか？

サスケ　東京までな！　ガハハハハハ！　寂しい家族旅行だよね～。でもそんぐらいし





98・8・8大阪ドームでのライガー戦、左肩の脱臼が完治しないまま臨んだサスケだがウラカン・ラナで奇跡の勝利。しかし9・10大宮でライガーに敗れる。さらに9・15宮城での星川尚浩7番勝負最終戦でもサスケはまさかのフォール負け。試合後、サスケ、人生を除くみちプロ選手がリング上に集結。円陣を組み「バンザイ」と大合唱。デルフィンは「サスケ、みちプロにお前は必要ないぞ！」とサスケを挑発！果たして、ＯＶＮＩは離陸できるのか!?

猪木イズム世界一決定戦

かできないんだよね。そんだけ働いてるんだっていうのをウチのレスラーは知らないんだよな。

——そうなるとリング上で目を醒まさせるしかないんですかね？

サスケ　そうだよな。俺はも〜う改革に乗り出すね。ほら、西村修ちゃんがさぁ、俺は修ちゃんって呼んでるんだけどさ（笑）。「ファンはバカだ」って言ったじゃない。俺も最近そう思い始めてきたね。特に今のみちプロのファンはバカになってるね。

——みちプロのファンが！

サスケ　そうだよ。この間のシリーズでも、サスケ人気ガタ落ちと言われたけど、ファン投票してもほとんどデルフィンなんだよ。

——今はそうみたいですね。

サスケ　デルフィンに騙されてるんだよ、ファンが。奴は媚び売ってさぁ、ファンに対してカッコイイこと言うんだよ。「サスケのいないみちプロを俺が守った」とかさぁ。だったら普段から守れっつうんだよな。俺に言わせれば。それで、悲しいかな、東北のファンが騙されてるんだよな。

——地元のファンが騙されていると。

サスケ　東北のファンが騙されてどうすんだよと。盛岡に住むのが嫌だって言って大阪に住んでる奴がさ、東北のファンの前でカッコイイこと言って何がわかるんだって。それを信じるファンもダメだね。だから、今はみちプロのファンも濁ってるね。みちプロのファンもバカだ！

——ファンもバカ！　猪木イズムから無我イズムまで幅が広いですね（笑）。

サスケ　みんなバカだよ！　だから俺は独立するかもしれない。ＯＶＮＩ！　なっ。

——そんなこと言って大丈夫なんですか？

サスケ　今の俺の心境は、ちゃぶ台ひっくり返してるような心境だよね。

——ホントひっくり返してばっかりですね（笑）。ますます猪木さんみたいだ。

サスケ　そうだよ（笑）。デルフィンも社長代行だなんだって言ってるんだったらお前が社長も金勘定もやれっつうんだよな。

——アハハハハハ！　絶好調ですね、社長。

サスケ　絶好調！　ガハハハハハハ！

——書いていいのかなぁ？

サスケ　大丈夫、大丈夫。ドンドン書いて（笑）。でもね、誤解して欲しくないのは、例え俺が、ＯＶＮＩを作ったとしても、みちのくでやるから。東北エリアで。それでみちプロを捨てるんだよ。みちプロはデルフィンがやりたいって言うんだろ、これ。

——これ！　アハハハハハ！

サスケ　譲ってやるよ、みちプロ。でも昔のファンには戻ってきて欲しいよね。昔のファンはみんなサスケ信者だと思うんだよ。もし、旗揚げしたらさ、昔のファンをガッと引き寄せたいね。今の新しいファンはバカだからさ。あんなのはデルフィン、デルフィンって言ってればいいんだよな。

——それじゃあ、ＯＶＮＩで東北の英雄グレート・サスケは復活するわけですね。

サスケ　復活するよ、俺は。ＯＶＮＩ！　ＵＦＯを離陸させますよォォォォ!!

——幕張は旗揚げ戦だ！　大スクープだ！　大スクープですよ、サスケ社長！

サスケ　ガハハハハハ！　じゃあ最後に猪木さんの言葉を借りて締め括ろうなっ。

——いいですね〜。何借りてきますか？

サスケ　俺はね、一点の曇りもない人生を送ってきた。これからもね、俺の行く道は間違いがないと思うな。それは言えるな。

——〝道〟ですね。迷わず行けよと！

サスケ　そうそうそう（笑）。迷わずゆけよ、ゆけばわかるさ！　ガハハハハハ！

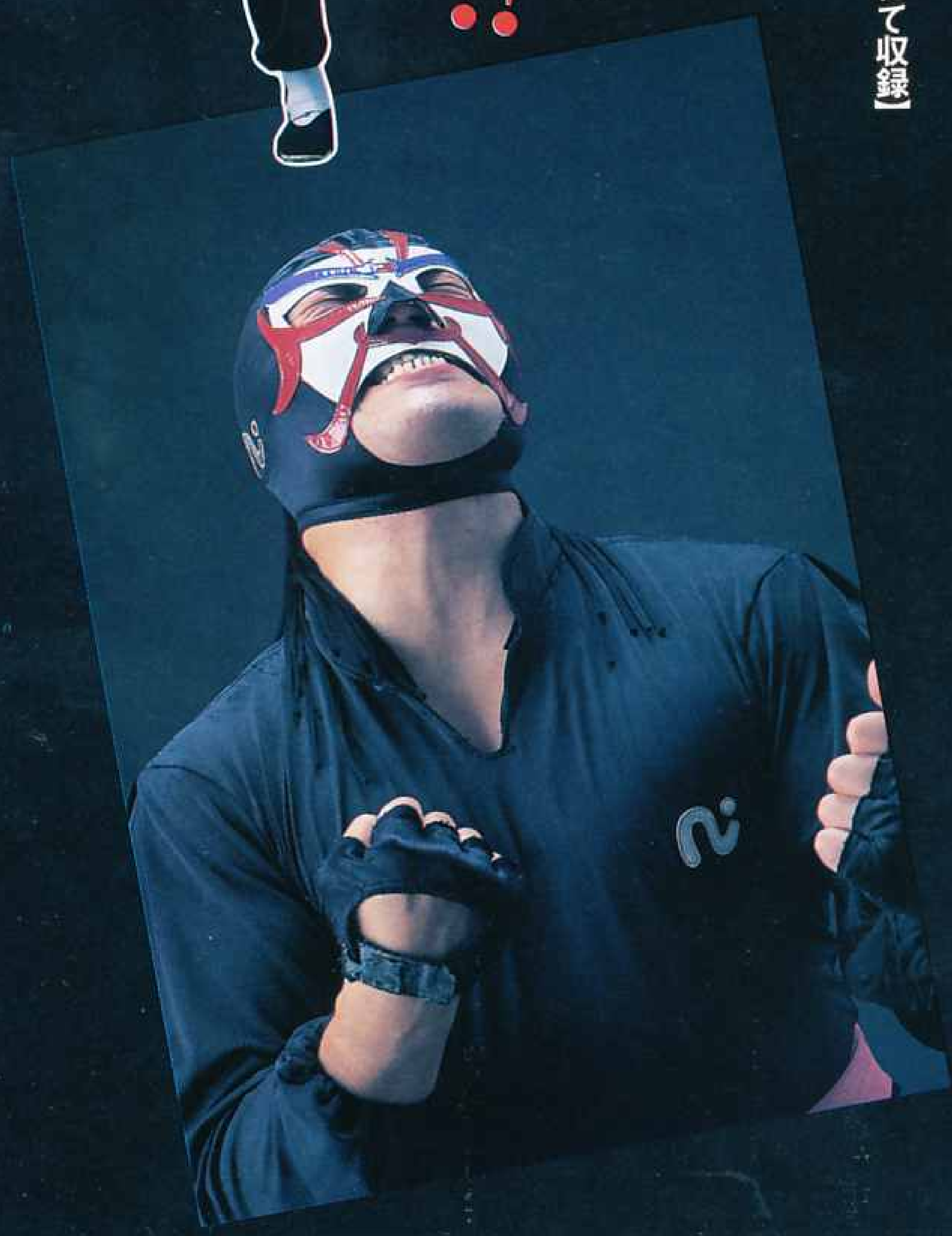
——アリガトーッ!!（笑）

サスケ　ノー問題、ノー問題！　ガハハハハハハハ！

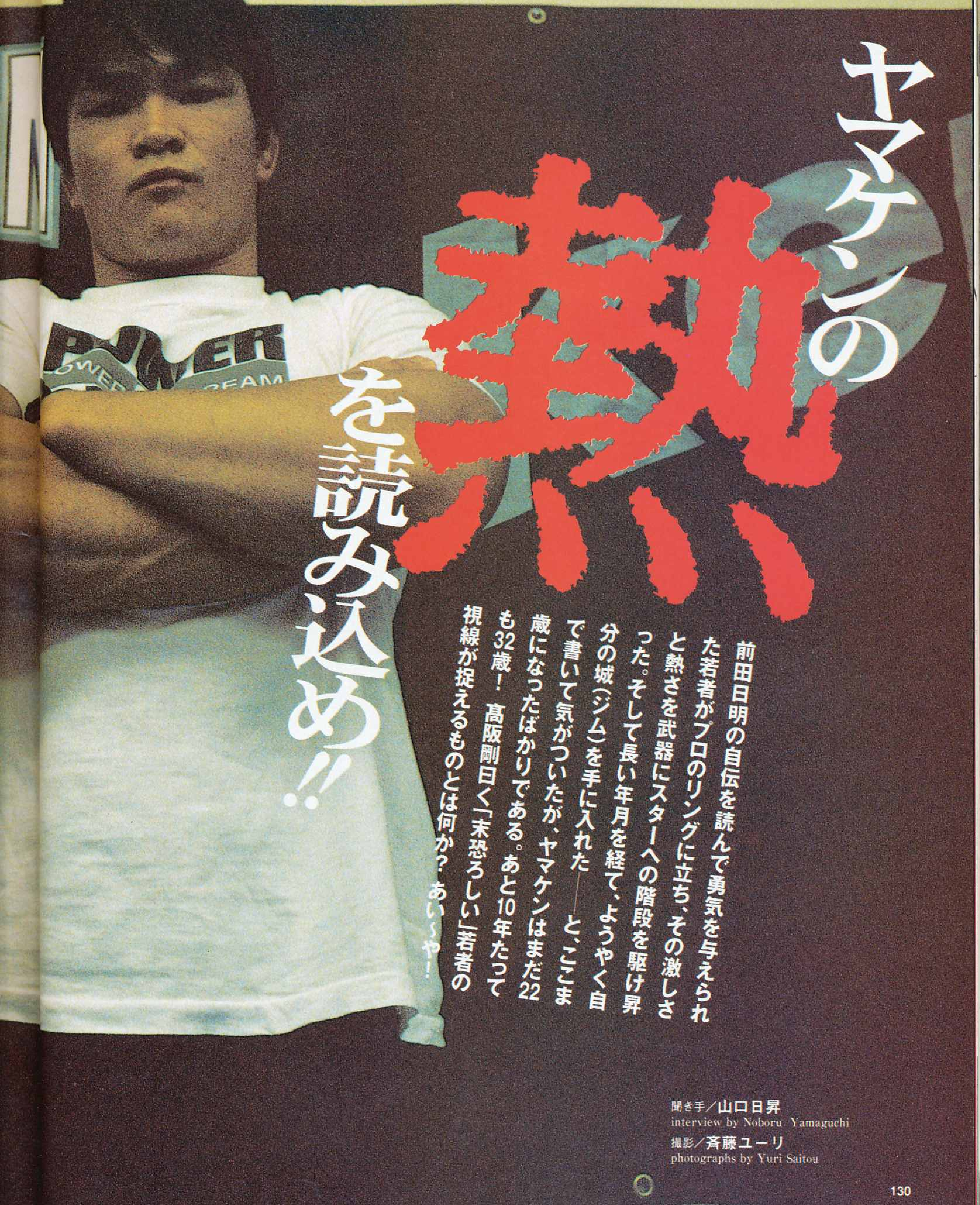
——アハハハハ！　高田さんだ（笑）。今日はどうもありがとうございました。

【9月7日、六本木アートセンターにて収録】









ヤマケンの熱を読み込め!!

前田日明の自伝を読んで勇気を与えられた若者がプロのリングに立ち、その激しさと熱さを武器にスターへの階段を駆け昇った。そして長い年月を経て、ようやく自分の城（ジム）を手に入れた——と、ここまで書いて気がついたが、ヤマケンはまだ22歳になったばかりである。あと10年たっても32歳！ 高阪剛曰く「末恐ろしい」若者の視線が捉えるものとは何か？ あい〜や！

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou



山本健一
Interview

——やっぱりジム生の間でも挨拶は「あい〜や」ですか？（笑）。

山本　あい〜や（笑）。いや、ジム生たちの挨拶はさすがに「あい〜や」じゃなくて、「こんにちわ」とかですわ（笑）。

——それはそうか（笑）。ところで、いまヤマケン自身はプロレスラーという意識？　それともプロ格闘家？

山本　どうなんですかね。別にプロレスのリングに上がっても僕は闘えると思ってるし、ある意味プロレスラーとしても出来ると思ってるし。その人が俺のことをプロレスラーだと思えばプロレスラーでいいし、総合格闘家と思えばそれでもいいしね。ただ、俺は格闘家には違いないから、「格闘家だよ」って言えばてっとり早いのかなと。「プロレス」って言っちゃうと、やっぱり自分の子供をジムに入れようと思わないんですよ、お母さん方は（笑）。

——ああ、「プロレス」っていう言葉はいまだにイメージが悪いですからね。

山本　血を流したり、ホントにウサン臭いものに見えちゃう。そんな危ないところに自分の子供を入れたりしたくない。だから、いわゆるU系の素晴らしいところは、こうやってジムを持てることだと思うんですよ。一般に開放してね。その可能性がズッとあったのにやってなかった。もっと早くにやるべきだったと。で、ハッキリ言って、従来のプロレス団体にはできないと思うんですよ。

——トップロープからのエルボー・ドロップの落とし方を教えるわけにはいかないですからね、小学生に（笑）。

山本　空手とか柔道みたいに青少年育成として教えるには難しいでしょ。だけど、総合格闘技だったらその可能性は絶対あると思ってます。ジムをどれだけ大きくできるか。支部をどんだけ作れるか。それが僕の中での挑戦ですよ。

——プロレスは「プロ」。例えば空手道場に行ってる人は「アマ」。そういう単純な分け方もある。だけど、プロレスというジャンルは、興行を打ってお客さんを集める「プロ」。例えば空手も、アマチュア道場に人を集めて青少年育成とか支部を広げていく「プロ」ともいえるでしょ。その二つの輪がリンクしてますよね、いま。

山本　うん。

——興行のプロと、アマチュア育成のプロが接点を持った。要するに「プロ」という概念が新しい価値観として生まれ変わる時代ともいえると思うんですよ。

山本　だから格闘技でいったら、いま最

先端を行ってるのは相撲でしょうね。

——相撲！　伝統的な世界の相撲が最先端というのは面白いですね（笑）。

山本　だってアマチュアもあるし、ちっちゃい頃から腕白相撲とかやれるでしょ。で、プロもある。だから、目標設定がちゃんとできる、子供の頃から。俺は勉強はできないけど相撲でメシを食うんだとかね。俺は総合格闘技をそういう風にしたい！　その可能性は十分もってると思う！　でも、それを作るには時間がかかるわけですよ。次の10年をやるために俺は10年頑張る。次の世代のためのレール作りをする。そのために俺は頑張る。そう自分に言い聞かせてますから、いまは。絶対にできると思ってるから。それが僕の夢ですよ。

——まさにパワー・オブ・ドリーム（笑）。

山本　そうです！　それを実践するためにいま頑張ってるんですよ。チャレンジしたいんですよ。

——ヤマケンみたいな成り上がり系の熱さというのは、いまの時代には合わないですよね、風潮としては。それは感じるでしょ？（笑）。

山本　俺は同じ年齢の奴らと話ができないですもん、あんまり（笑）。中学校の頃からそうでしたよ。学校の先生からはね、「お前はいま生まれるべき人間じゃなかった。もっと昔に生まれるべきだった」ってよく言われましたわ。その時は意味はわかんなかったけど、いまはなんとなくわかりますね。

——そういうヤマケンの存在って非常に面白いなと思ってね。Uインター末期に新日本と対抗戦やったけど、ああいう洗練された場に出てくると、「なんだ？　あの金髪のニイチャン」っていう感じの存在だったからね。

山本　そうでしょ。俺もドームの花道を歩くとか思わなかったですわ、金髪で（笑）。

——それまでUインターでヤマケンを見てた僕でも役不足に映ったわけだから、新日本のファンから見たら、ホントに「誰だ？　あれ」っていう世界でしょうね（笑）。

山本　さんざん言われましたもん。「なんだ、あいつ」「誰だ？」って。そういう時はクワッ！と睨んでやるんですわ（笑）。それが僕の起爆剤になってましたよね。ブーイングだってなんだってすべて力に変えてましたね。「そうだそうだ、こういうのもすべて俺の力に変えたらいいんだ」っていうね。



次の世代のためのレールを絶対作る。それが僕の夢ですよ

——そこら辺のプラスに転換できる力がいまの多くの選手に一番欠けてるところですよ。

山本　俺はね、思うんですよ。いまの選手はもっともっと自分のことを旗揚げしてほしい！　まだまだ前田さんとか高田さんの陰に隠れてる。なんでもっともっと自分が前に出ないんだろうって思いますよね。

——もっと自分の旗を振れ！と。

山本　プロだったら、もっともっと自分の存在をアピールしてほしい。そうしないと俺もやりがいがないしね。（ゴールデン・）カップスの時に凄い感じしたのは、僕みたいなペーペーも頑張ったらちょっとは名前も上がる。ハッキリ言って、そういうのは端から見たら、「後輩のクセしてなんだお前、なんでそんなに目立ってるんだよ！」って感じになるでしょ。

——年功序列の風習は根強いですからね。

山本　そう。俺は当たり前のことをやっただけだと思ってるし、そんなものはハネ返してやると思ってましたよ。みんながみんなああいう風にギラギラしてれば、もっともっとこの業界は盛り上がると思うんですよ。

——活気が渋滞してる感じですからね、いまのマット界は。

山本　あの時は会社（Uインター）を守るためだと思って、精一杯頑張った。だから真剣に勉強しましたよ、新日本スタイルを。

——そうみたいですね。ヤマケンの生き方は、例えば相手が弓矢を持ってくれば、自分も弓矢を持つ。弓矢を持った同士という対等の条件で勝たないと気が済まないというか（笑）。

山本　目には目を、歯に歯を（笑）。

——だけど、その弓矢を見せてもらってポイッと捨てちゃうって闘い方もあると思うんですよ。相手が弓矢ならばこっちはマグナムを持つという手もあるし。だけどヤマケンはとりあえず弓矢という新日本スタイルも勉強したと。そういった愚直さみたいなものが凄く真摯で熱いなぁと思うんですよ。

山本　あそこが分かれ道だったと思うんです。でも、会社を守るためにはやんなきゃいけないんだから割り切ってやりましたよ。それでせっかくインターにないメディアがあるわけだから。

——地上波という大きな媒体がね。

山本　そう。そのメディアを利用するためには、とにかく目立たなきゃいけない。ともかくやりたいことまで辿り着くためには、名前を売ってからでもいいじゃねえかと。その時は安生（洋二）さんがギラギラしてて、上り坂の人だったんで、そこにくっついて金髪にして、写真の隅っこでもなんでもいいから露出することだけを考えましたよ。

——あくまでも目立つこと。メディアに進出すること。それは新日本スタイルを学ぶ上では大事な要素だったということですね。

山本　最初に迷いはあったけど、もう吹

っ切るしかないなってことで徹底的にやった。

——ヤマケンの面白さっていうのは無鉄砲さとね、いま言ったような計算。それが同居してるところですね。で、無鉄砲さばかりが強調されちゃうじゃない？　いままでのヤマケンだと。

山本　はい。

——日本人って計算っていうと悪いイメージを持つけど、計算なくしてやっぱり勝てないしね。でもいくら計算ができても無鉄砲さがないと勝てない。だから両面を持ってるヤマケンの存在には大いに可能性を感じますよ。

山本　だから「考える」ってことが必要だと思うんです、プロは。考えないで、ただ単にやってるだけだったら、僕の中ではハッキリプロ失格だと思ってるから。こういうこと言って、俺がああだこうだ言われたりするなら、まだまだレベルが、次元が低いって思う。やっぱりまだ足の引っ張り合いなわけですよ。

——出る杭は打たれるですね。

山本　そういうところがまだあるし、それはなくしていきたいし。例えばリングスだって、個人競技とはいえ、チーム・ジャパン一つでやっぱり団体競技なんですよ。読売ジャイアンツなんですよ。いうなればジャイアンツの中で試合をやってるような。ジャイアンツほどの人気があればいいけども。

——紅白戦やってるようなもんだと。

山本　だからリングスに入ったからって前田道場だけでしか練習しちゃいけないってなっちゃったら、僕がリングスに行った意味がないと思った。

——道場間での行き来はかなりひんぱんに行われるようになってますからね。

山本　だから、前田道場にも練習に行く。でも、俺はもっともっといろんなところに練習に行きたいんだと。そういう条件で入りましたから。出稽古はナンボ行ってもいいと思う。それでいてリングスという協会で試合をするわけだから、一人一人が旗揚げしていかなきゃいけない。立ち上げていかなきゃいけない、自分のことをもっともっと。そのために僕はパワー・オブ・ドリームを作ったんですよ。



今年3月のリングス初参戦では、歯が下唇を貫通、18針縫った上に鼻にも裂傷を負った。それでも闘うヤマケンは根性論だけの人かと思われがちだが、実は「根性論なんてもう古い」という理論派だったりする

——そうなると一人一人が旗揚げしていけるぐらいの力を持った人をプロと呼ぶわけだから、プロになる人のハードルを高くしなきゃいけないですね。

山本　そうですね。いまはこんだけの競技人口じゃないですか。選手がこんだけしか育ってなくて。で、いまいる選手が食っていけるんだったらいいですよ、それで。僕はこれから食っていけない時代が来ると思ってるから。いま例え給料をちゃんともらってたとしても、それで満足してたらダメ。もっと上を目指さないと。「こんなハシタ金」ぐらいの気持ちを持ってないと。「こんなチンケなもんかい」って思ってないと。野球選手やサッカー選手を見てみろ、と。長者番付に載るじゃないか、俺らだって載ったっていいだろう、と。悔しいんですよ！　それくらいの価値あるだろうと、俺らにも。俺は長者番付に載りたい！　プロだから。

——いまは、プロという概念を洗いなおす時期なのは確かですよ。

山本　あるところで納得して「はい、わかりました」って淡々とやるような、プロとして妥協する人にはなりたくない。「俺の価値ってこんなもんかい。俺の価値をもっと上げてやろうやないか！」って思うんですわ。別にお金なんか、僕はバロメーターとしか見てないから。この世はみんなお金で計るじゃないですか、物ごと。だから、お金は物ごとを計る上で絶対に大事だし、プロとして大事だし。そういう面でしか、お金のことを考えてないですよ。いざとなったらゼロにできるし。

——お金に縛られないということ？

山本　例えば、このジムを作る時だってそうですわ。デビューしてすぐに僕は車を買った。合宿生活してるから金も溜まるだろうと思って。だからフルローンで外車を買ったんです。

——あい〜や！　合宿所に住みながら外車買ったの？　凄ェな（笑）。その価値観買ったって感じですね（笑）。

山本　買いましたわ（笑）。でも、結局このジムを作る前に売りました。なんでその時に外車買ったかって言ったら自分を追い込むため。なんもいらないから車だけほしいと（笑）。

——なんで車なの？（笑）。

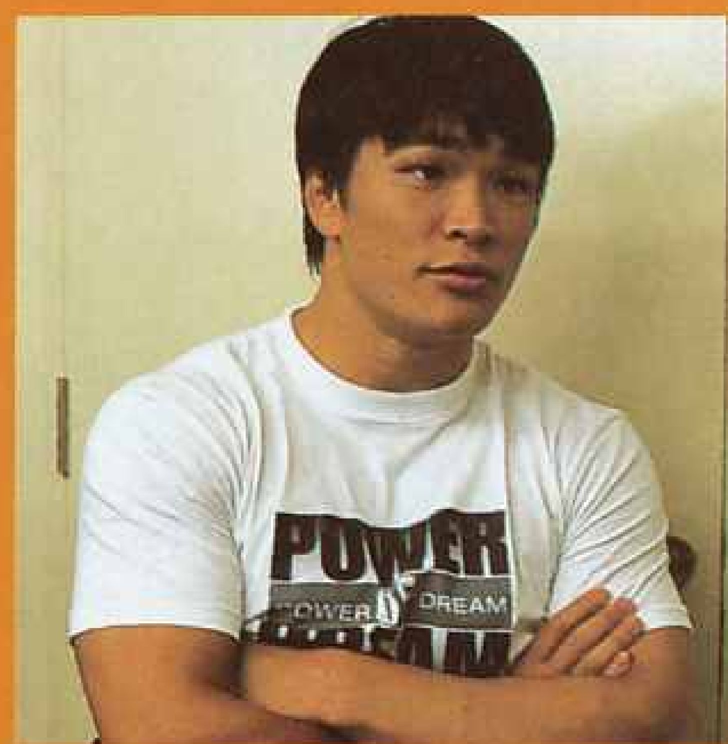
山本　たぶんプロとして励みになるだろうなと思ったから買った。それでズッと頑張ってこれた。で、このジムを作るってなった時にいろいろ考えて、結局売りましたよ。だから、お金はその時に一番大事なものに全部使えちゃうんです。自分はゼロか100か、ですから。

——でも正直言って、22歳になったばかりでジムを出すのは早いとは思わなかった？

山本　思う！　だけどそんなことを考えたら、またこの業界に対して恨みしか出てこない！　そんなこと考えたら進めなくなる。俺、辞めちゃうと思うんですよ、それを考えた時には。だから、辞め

マット界に恩返しするのはこれから。それが今の僕の起爆剤

YAMA-KEN



ないようにするにはどうしたらいいかと考えたら、これをやるしかなかったんですよ。

――ジムをやって、また自分を追い込んでいくぞと（笑）。

山本　今度は追い込むんじゃなくて、自分のためにもやらなきゃいけない。確かにリスクはありますよ。この年齢でこの不景気な時期にこうやってジムをやるっていうのはリスクはあります。いまリングスはちゃんと給料出てますよ。でももし給料が出なくなっちゃった場合にどうするんだと。なんもできないですよね。例えば会社が苦しい、前田さんが苦しい、悩んでる時に僕がなんか力になれるのかと。な～んもできないと思うんですよ。キングダムやインターの時もそうだったですから。

――ヤマケンが所属していた団体は二つとも潰れてるわけだからね。

山本　インターの時だって僕が何をしたかといったら、対抗戦に出ることしか恩返しできなかったですから。何にもできないですよ、俺には。その歯がゆさが凄いあったから。結局インターもなくなってキングダムだってなくなって。当たり前のようにやってたけど結局ダメだった。僕ら選手は練習する環境がないとダメですよ。それと最低限食っていくことができればいい。だからジムをいまからやっていかないと、もしもリングスが傾いた時にジムをやるってなったら、もっともっとリスクは大きいでしょ。

それと同時に興行会社っていうのは協会にならないといけないんじゃないかと思って。

――うん。常々言ってますね。

山本　協会が選手全員をおんぶしちゃったらリスクが凄い大きいだろうと。一人一人がプロなんだから、個人商店なんだから、もっと自由に動いて、それぞれが自分の力で人気を集めればいい。例えば芸能関係の仕事をやるとか、どっかの事務所に所属するとか、プロなんだからいいと思うんですわ。別に会社がすべて仕事を持ってきたりとかする必要ないと思う。会社的にやってほしいことに関しては参加しなきゃいけないけど、それ以外のことに関しては自由にやらせればいいんですよ。

――なるほどね。

山本　その代わりプロは人気がないとダメ！　チケットに繋がる選手だけ年俸が上がるに決まってるだろうし、自然に人気選手は上がるだろうし。そうじゃないと選手が増えれば会社が苦しくなるだけじゃないですか。それでまた分裂と。それじゃいままでの歴史の繰り返しでしょ。会社が全部、選手の人気を作るってことまで引き受けてたらダメなんですよ。会社にとっても選手にとってもどっちもよくないことなんですよ。苦しくなった時に誰かのせいにしたくない。

――マット界に対しての危機感と同時に自分に対しての危機感も持ってるわけですよね。

山本　そうですね。だからいま給料が出てても危機感を持たずにはいられんのですわ。満足してられない。僕が満足してたら次のいい選手が出てこないだろうし、僕がいま頑張れば、絶対いい選手が出てきてくれると思うんですわ。僕はインター、キングダムといい勉強させてもらったと思います。

――いい経験というか、あまりお目にかかれない体験というか（笑）。

山本　ハッキリ言って恩返しするのはこれからです。恩返しするのは僕が頑張って上に上がった時に初めて何か出来ると思うんですわ。その時に何かビッグな仕事ができたりとか、何か恩返しができると思う。

――そこで恩返しができてないと思えるところも凄いですね。22歳にして。

山本　ハッキリ言って、そういうやるせなさとかありますよ。普通に考えたらここで文句しか出ないでしょうね。

――でしょうね。

山本　それが僕にとって起爆剤になってるってことは僕にとってプラスになってるんですよ。ということは、プラスになった分の恩返しはこれからさせてもらいますよってことです。まだまだこれからですよ。

――それは同年代と話が合わないはずだわ（笑）。

山本　自分は真剣に生きてますから！　気合いで生きてきてますから！　人生の途中から前向きに生きるようになりましたから。

――途中からってことはそれまでは？

山本　死のうと思いましたよ、何回も。暗い少年でしたわ。荒んでましたからね。

――波瀾万丈だったみたいですからね。

山本　だからその時の辛さを思ったら、いまなんか屁でもないですからね。自分にしかできないことをやってるだけで誰かに押し付けられるわけじゃないし。

――本人にとってはたまらない体験だったかもしれないけど、逆に考えれば、そういう人にできないことを体験できるっていう運を持ってるんですよ。

山本　運なのかなんなのか（笑）。

――しかもそれをプラスに考えられる能力と体力がある。

山本　あい～や。だから、これからは僕がやるしかないでしょ（笑）。でも誰でもチャンスはあるんですよ。チャンスはあるけど掴めてないだけ。そん時、そん時、目先のものばっかり目に入ってたらチャンスも逃しちゃう。なんか一つ目標があってビジョンをちゃんと自分の中で作っていければ、絶対チャンスをものにできると思うんですね。

——ちょっと話は変わりますけど、8・28の新潟の坂田亘戦のあとに報道陣を前にして「自分たちは満足してるけど客席が湧かないのはファンの見方がまだまだ育ってないからだ」って言ってましたね。それとファンを増やすという作業はどうしても矛盾してくるところが出てくると思うんですね、これから。

山本　だからお客さんを増やすことも大事だし、ファンの目を肥やすことも大事だし。例えば、いまここに来てくれてるジム生たちは「ここに通い始めて、テレビで試合を見るのも楽しくなった」って言ってる。生の試合を見てもわかるようになったと言うんですね。なんで痛いのかもわかるし、テレビの中の動きをやろうと思ったら、どんだけ自分の身体をイジメなきゃいけないのかっていうのもわかったし、そういうことがわかってから10倍楽しく見れるって言うんですよ。だからこの間の坂田戦のビデオを見せても反応は凄くいいんですよ。

——ああ、なるほどね。

山本　そういう風に教えることはできるんですよ、絶対に。ただそれにはまだ時間がかかる。スタートしたばっかりだから。いまここで習ったヤツらはね、家族はいる、友達はいる。少なくとも5人ぐらいは注目しますよ。ジム生が増えれば増えるほどそれだけ広がっていく。これが力になるんですよ。僕の考えてることをこの人たちが後押ししてくれるんですよ。

——面白いなぁ。成り上がり的なヤマケンと地道にコツコツと「5人は増える」って言ってるヤマケン。

山本　ハッハッハ。



6月には成瀬の持つトーナメント21のベルトに挑戦。熱戦の末に惜しくも敗れたが、ヤマケンの存在はリングス・マットでも光り始めた。喧嘩屋かと思われがちだが、実はスポーツとしてこのスタイルを広めたいと考えている

——プロの興行においては、力道山とかアントニオ猪木とかボクシングの辰吉丈一郎にしてもそうだけど「競技としてはよくわかんないけど面白そうだから見に行きたい」と思わせる、大衆を引き寄せるパワーって絶対に必要だと思うんですね。それと同時に技術なら技術をわかってるコアなファン層。これが同居してなきゃいけないわけですよね。そこでU系の選手たちは「お客さんが見方をわかってないから」だという風になりがちですよね。それだけにこだわると袋小路にドンドンはまっていくと思うんですね。

山本　僕がそういう風に言ってないのは伝わりますよね？　僕はこの間の坂田戦のあとのコメントでも「僕らにも責任があるんです」と付け加えた。僕らがしっかりやるべきことをやっていけば、さっきも言ったみたいに広がっていくんです。ここで習ったヤツらがみんなに能書きをたれるんです。「こういう風に極まるんだ」とか。「ここでこういう返し方があるんだ」とか。だったら僕らが言ってることも伝わるんですよ。

——それはヤマケンが伝えてることになりますからね。

山本　回りに「あんなのつまんねえ」とか言ってるヤツらがいれば、彼らは言うんですよ、「こういう風に見れば面白い」って。そういう風になってくれば自然と広がっていくもんなんですよ。だからまず僕らがいまできることをやろうじゃないかっていう発想なんですね。

——はっはー。

山本　だからそれを真面目にコツコツ10年ぐらいやってみたら絶対変わりますよ。まずはこの辺一体で広めてみせますよ。

——自由が丘一帯に！（笑）。

山本　あい～や！　やっぱりなにかカッコつけたいと思ったらリスク背負わないとね。

——リスク背負わない人にはカッコはつ

けられない。卑屈になるだけですよ（笑）。

山本　そうそう。会社っていうのは自分のもんじゃないんですよ。下のモンがいてナンボ！　俺だってジムの従業員に給料払ってるんですよ。彼に給料を出せないってことは、彼はお腹減って仕事できないんですよ。

——食えなきゃパワー・オブ・ドリームもパワー・ウォーリアーもなんもない（笑）。

山本　ないないない（笑）。僕は食えなくてもいい。でも、彼が食えないと何も始まらないんですよ。「俺はスターだから食えるのは当たり前」「俺はガッポリ儲かって当たり前」？　そんなの下がいて、それが盛り上がってからじゃないと取っちゃダメだよ。会社を起こすっていうことはそういうことじゃないですか？　1年目から左うちわができるようなことってないでしょ。

——いや、僕も吹けば飛ぶような会社やってるから、身に染みますねぇ〜〜。

【ヤマケンはこのインタビュー中に「自分は中学しか出てないですから」と言っていたが、実は本誌・編集長の山口日昇も中卒（本人は時々高校中退と学歴詐称するが、学歴は立派な中卒である）。この後、中卒同士の異様に熱い経営論が交わされたのだった。もちろん、経営論的にはヤマケンのKO勝ちである】

——あい〜や。ヤマケンは実に立派です。とても22歳とは思えません（笑）。



意味もなく ド突かれたら ド突きかえしますよ。 前田さんでも

YA-MA-KEN

——さ、気を取り直して（笑）。で、選手としてはこれから何をやろうと思ってるんですか。

山本　そうですね。いままで通りいい試合をしていこうって気持ちで挑みますけど、う〜ん……具体的には、いまストレスを溜めてる段階。ストレスを溜めてパワーにしてる段階。

——リングスという場はどうですか？

山本　やりがいは凄くある！　やりがいがあると思ったから僕はリングス・ジャパンに入った。だけど、リングス・ジャパンに入ってすぐに僕がジムを作ったってことを会社的には考えてもらいたいですよ。僕はただ利益を求めるためだけにジムを作ったのか何なのか？　その辺のことを考えてくれたら次が見えてくると思うんですわ。だから、いまの時点では僕はまだまだ結果を残してないんで発言権もない。だから、その件に関してはハッキリ具体的なことは何も言いたくないんですけど。

——ヤマケン的にもリングスがこうなったら自分の実力が発揮できる、さらにマット界も盛り上がるというビジョンがあるみたいですね。

山本　俺は一本気な性格だから、一つのものをやるって決めたらトコトン盛り上げるために頑張ろうと思いますよ。例えばいま食っていくのに精一杯の団体もある。でもそういう人たちはハングリーさを持ってるかもしれない。逆に変に落ち着いちゃってるのがリングスの選手だと思うんですよ。もちろんメジャーの風格というか、落ち着きっていうのも凄く大事なんだけど、もっとギラギラしたものも大事だと思うんですわ。

——言わんとすることはわかりますよ。だからリングスの選手がギラギラしてないわけはないんだけど、それが伝わりきってないんですよ。

山本　そうですね。俺が最初からリングスにいたら、活性化させるために前田さんにもっと食ってかかってたかもしれない。俺が最初からリングスにいたら前田さんと喧嘩してたんじゃないですか？（笑）。俺の性格考えたら。どう思います？

——あい〜や。前田さんとヤマケンは共通点も多いから、かわいがられる反面、鉄拳主義の洗礼を浴びて、よく殴られたかもなぁ（笑）。

山本　あい〜や！　でも俺は殴り返しますよ（笑）。

——自伝にラインマーカー引いて穴が空くほど読んだ人を殴り返しますか！　さすがだ（笑）。

山本　そんなん許せないでしょ（笑）。やっぱり筋道が通ってることで殴られるのはいいですけど、もし筋道通ってないことで殴られたら、僕はファイターとして、人間として許せない。そういう性格だから。前田さんには、あの自伝のお陰で生きる勇気をもらいました。だけど、もしもですよ、意味もわかんなくド突かれたらド突き返しますよ！　それは前田さんだからってことじゃなく誰相手だってそうですよ。自分が悪いんだったら謝ります。でも、自分が納得できないことに関してはとことんまでいきます！　そんなの関係ないです。総理大臣だろうがなんだろうが関係ないです。

——ガハハハハ！　総理大臣まで殴りますか（笑）。

山本　右翼だろうが極道だろうが関係ない！　筋道が通ってなきゃ殴りますわ！

——熱い。ところで酔っ払って喧嘩しちゃったこととかないの？（笑）。

山本　あるんじゃないスか？（笑）。そんなん覚えてないですわ。やっぱり僕のお酒の師匠は高田さんなんで（笑）。

——わぁ〜お！　それは嫌な系統ですね（笑）。

山本　高田さんに鍛えられましたから、相当酒グセは悪いと思います（キッパリ）。だから、あとでいろんなところで聞かされるけど、「ウソォ〜ッ！」って思いますもん（笑）。

――これは自分じゃないって（笑）。それは高田イズムですね。それじゃあ最後に。「あなたにとってプロとは何か？　ひと言で答えろ」と聞かれたら？

山本　〝生き甲斐〟と〝見せる〟ことじゃないですか。プロとしてギラギラしたものとかいろんなもんを見せるんですよ。

――要するに、以前ヤマケンが言ってた「人生に勝つ」。試合に勝った負けたじゃなくて人生に勝つ。つまり生き様を見せていくっていうことになるんですかね。

山本　だから100％の俺を見せるために頑張るんですよ。それで自分が頑張るためには生き甲斐というか、やりがいがないと頑張れないですから。いかにやりがいを見つけていくか。やりがいを見つけていけばプロとしての仕事が出来ると思うんですわ。

――あい～や。ヤマケンのエネルギーに当てられましたよ、今日は（笑）。ジムもリングの上も頑張ってください。俺も社員に給料払えるように頑張りますよ。

山本　あい～や。頑張りましょう！

【9月5日／東京・自由が丘／POWER　OF　DREAMにて収録】

ヤマケン、高田vsヒクソン戦を語る

――そういえば高田vsヒクソン戦が迫ってきましたけど。

山本　できれば見にいきたいですね、うん。『PRIDE』は高田さんとヒクソンがやって、もう二度と見にいかないだろうと思ってたけどズッと見に行ってるんで（笑）。とりあえず次で終わるかなと思ってるんで（笑）。

――観戦歴に終止符（笑）。

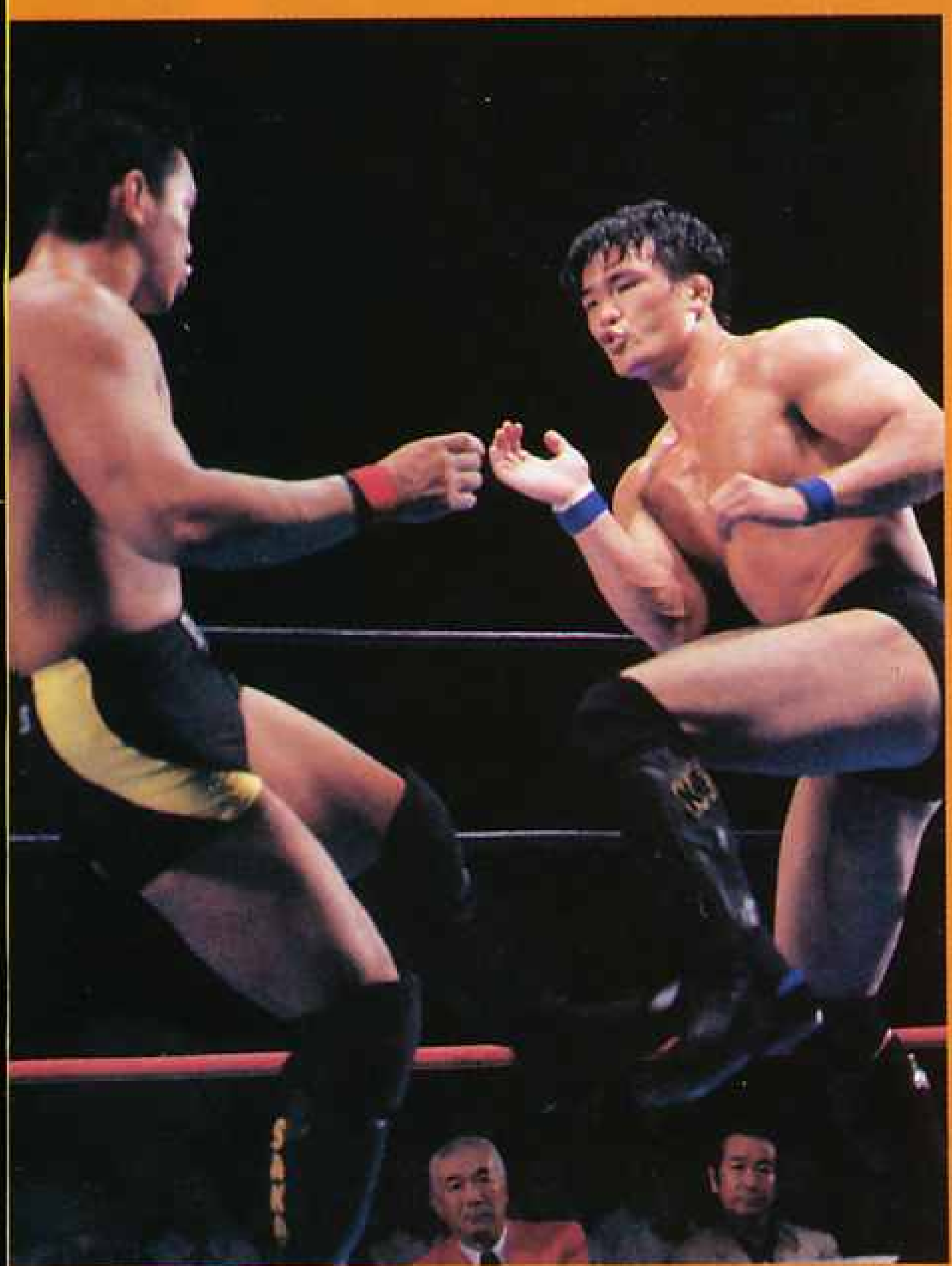
山本　次に高田さんが納得してくれる形で試合をしてくれたら、そこで終われるなっていう感じですね（笑）。でもまあ、高田さんだったら何かしてくれる力を持ってる人ですから。前はあまりにもヒクソンを意識し過ぎて合わせ過ぎてヒクソンの強さのイメージが膨張し過ぎたところがあると思うんですよ。その辺がたぶん高田さんを固くさせちゃったとこだと思うんですよね。普通ね、高田さんはオーラがあるから、高田さんのオーラで向かってこられたらみんな怖いと思うんですよ。でもあの時はヒクソンのオーラの方が勝ってましたから。入場してくる時は〝さすがだな〟って思ったけど、リングに立った瞬間ヒクソンに包まれちゃったから。あそこでヤバイなって思いましたね。

――僕もそうですね。入場の時はイケルと思いましたよ。

山本　ヒクソンなんかよりも全然上でしたよ。リングに上がった瞬間飲まれちゃった。あの時の高田さんだったら、俺でも余裕で勝っちゃうんじゃないかと思うぐらいでしたね。あれは、あそこまで行った選手を、もっと自由な気持ちで上がらせなかったっていう回りの人たちの力のなさですよ。リングの上で気持ちよくなかったら選手は幸せじゃないですよ。高田さんは自分のためって言ってたけど、自分のためじゃないですよ、嘘っぱちですよ。最初は自分のためって言い聞かせてたんでしょうけど。でも、もの凄くいろんな人の期待をしょってるじゃないですか。

――結果的に背負ってますからね。

山本　もの凄いプレッシャーだったと思いますよ。その中でやっぱり最強と呼ばれているバーリトゥード専門でやってきたヒクソンといきなり向かい合って、いままでやってきたスタイルと違うことをやれって言われて。あれが反対に、インターのリングに立てよ、キングダムのリングに立てよってなった場合、ヒクソンはやらないでしょう。自信がないから。高田さんは自信があるから立ったんですよ、あのリングに。そうでしょ？　自信がないから立たないヒクソン。高田さんは反対に立った。俺は高田さんの方が偉いと思いますけどね。俺はできるんだったら次はルールを変えて、自分の土俵でヒクソンと向かいあってほしかったですね。ヒクソンに勇気があるんだったらの話ですけど。





前田日明のラストマッチが行われた7・20ではV・ハン、8・28新潟では坂田亘と対戦。どちらも敗れたものの、リングスのトップどころとも当たるようになってきたヤマケンの今後は、リングス・マットの勢力分布図をどのように塗り替えていくのか、非常に注目である



L-1 開催記念

本誌も太鼓判を押す超大物ド素人

八木淳子(LLPW)

ド素人？ それとも超大物？ こいつは一体何者だ!?

陰では「新人不毛の団体」と言われていたLLPWに凄玉が現れた！　新人離れしたボディーと、デビュー戦なのにオーラを漂わせた試合ぶりに、ボクは正直言って度肝を抜かれてしまった。ところが話を聞いてみると、プロレス知識はド素人。話すノリは、ごく普通の大学生。新人に厳しい本誌が珍しくカラー４ページを使って、リング内と、リング外の不思議なギャップの魅力に迫る！

聞き手／坂井ノブ
Interview by Nobu Sakai
撮影／浜田孝一
Photographs by Koichi Hamada

YAWARAちゃん（田村亮子）には絶対負けないですよ！

—八木さんは、大学時代にYAWARAちゃん（田村亮子）と同じ柔道部だったんですよね。一緒に練習して、乱取りとかしてたんですか？

八木　しませんでしたね、ケガさせちゃいますから。

—じゃあ、実際に試合したら……。

八木　絶対負けないですよ！　柔道は体重が違うと全然違いますから。

—YAWARAちゃんには絶対負けない!!　いいですねえ。柔道では、どんな成績を残したんですか？

八木　東京都大会では、よく優勝してたんですけどね。全国だと、最高でベスト8止まりなんですよ。私、おっとりしてるように見えるから、よく判定で負けちゃうんです。それで結構悔しい思いもしましたね。

—悔しいときはどうするんですか？

八木　トイレで泣きます！

—トイレで（笑）。

八木　負けず嫌いなんですよ。

—でも、なんというか肩に力が入ってないですよね（笑）。大学時代はいろいろ遊んでたんですか？

八木　よく飲みに行ってましたよ。近所の『つぼっぱ』で飲んでました。

—居酒屋『つぼ八』ね（笑）。八木さんはホント他の女子プロレスラーにはない大学生ノリですね。そもそもプロレスに興味はあったんですか？

八木　いや、全然まったくなかったです。プロレスはまったく知らなかったですね。自分も柔道やってましたから、1対1でやる格闘技は好きでよく見てました。だから、LLの先輩で知っていたのは神取さんだけなんですよ。

—柔道の全日本王者ですからね。

八木　いや、テレビに出てたのを見て、知ったんですよ（ニコニコ）。

—なんで（笑）。神取忍は柔道界で有名な選手なんですよね？

八木　ちょうど世代的に神取さんが柔道を辞めるのと、私が柔道を始めるのが入れ替わりだったんですよ。LLに入ってから、神取さんが柔道やられてたという話を聞きました。非常に失礼なんですけども。

—いや、非常に素晴らしいです（笑）。それでいて、新人なのにそんな堂々と振る舞ってられるのは凄いですよ。

八木　そうですか？　よく言われるんですよ。「落ち着いてるね」とか。何にも知らないんですけどね。ここに入ってから、いろいろプロレスのことを勉強しましたよ。

—何にも知らないのに、なんでプロレスに入ろうと思ったんですか？

八木　柔道部でマネージャーやってる友達がいて、その子がサウナでたまたま神取さんと出会って「LLPWに誰か入らない？」って言われたんですよ。そのとき、自分は「OLになろう」と思って、いろいろ就職活動もしてて、一般の企業に決まりかけてはいたんです。そんなときに声がかかったんで「プロレスは知らないけど、やってもいいかな」っていう軽い感じで（笑）。

—バイトやるんじゃないですから（笑）。

八木　いや、ちゃんと考えてましたよ。体もデカかったし、「普通にOLするのもなんだかな〜」と思ってたんですよ。背もあるし、もったいないから何かやりたいなと思って。それで神取さんに「試合を1回見に来ない？」って言われて、見に行ったんですよ。それで「凄い世界だな。やってみよう」って決めました。

—でも、女の子が柔道やるのって冷静に考えると大変なことですよね。

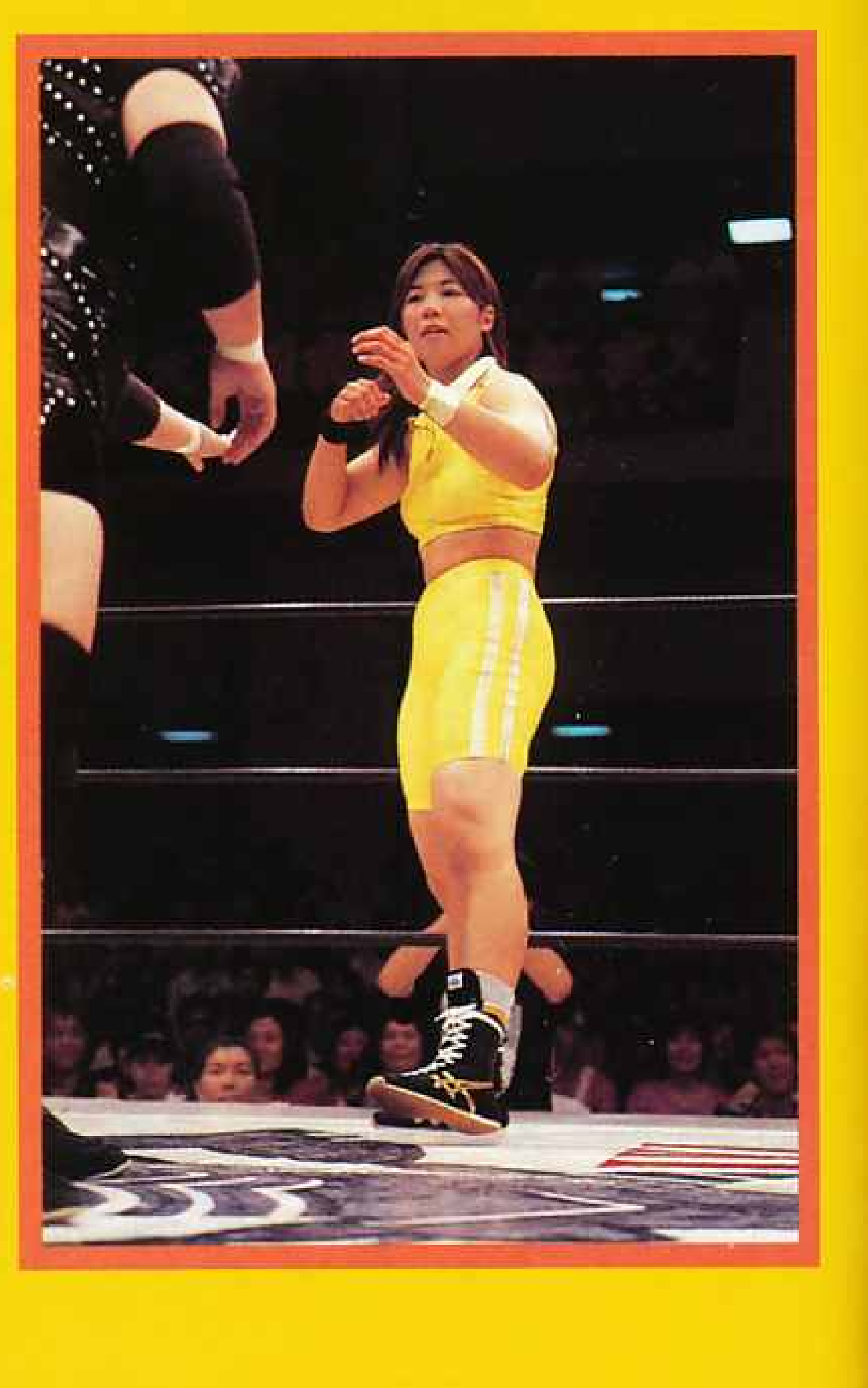
八木　ですよね？　お父さんにダマされたんですよ。自分、そのときはおピアノとか、お琴とか、女の子っぽいことしか習ってなかったんですけど（笑）。

—おピアノ習ってましたか（笑）。

八木　父親が高砂部屋で相撲取りやってたんで、本当は相撲をやらせたかったらしいんです。でも、女ですからね。「柔道がいちばん相撲に近いだろう」と勝手に解釈したらしくて、「いいところに連れていってやるから」って言われるままに町道場に連れて行かれて、気が付いたら現在に至るって感じですよ（笑）。

—そのノリでここまで来るっていうのは驚異ですよ。プロレス入りしてから何か変わりましたか？

JUNKO YAGI



リングに上がったら緊張しないというだけあって、その堂々とした試合ぶりは「タダ者ではない感」が雰う。特に印象的なのはスムーズな動きで極める関節技だ。



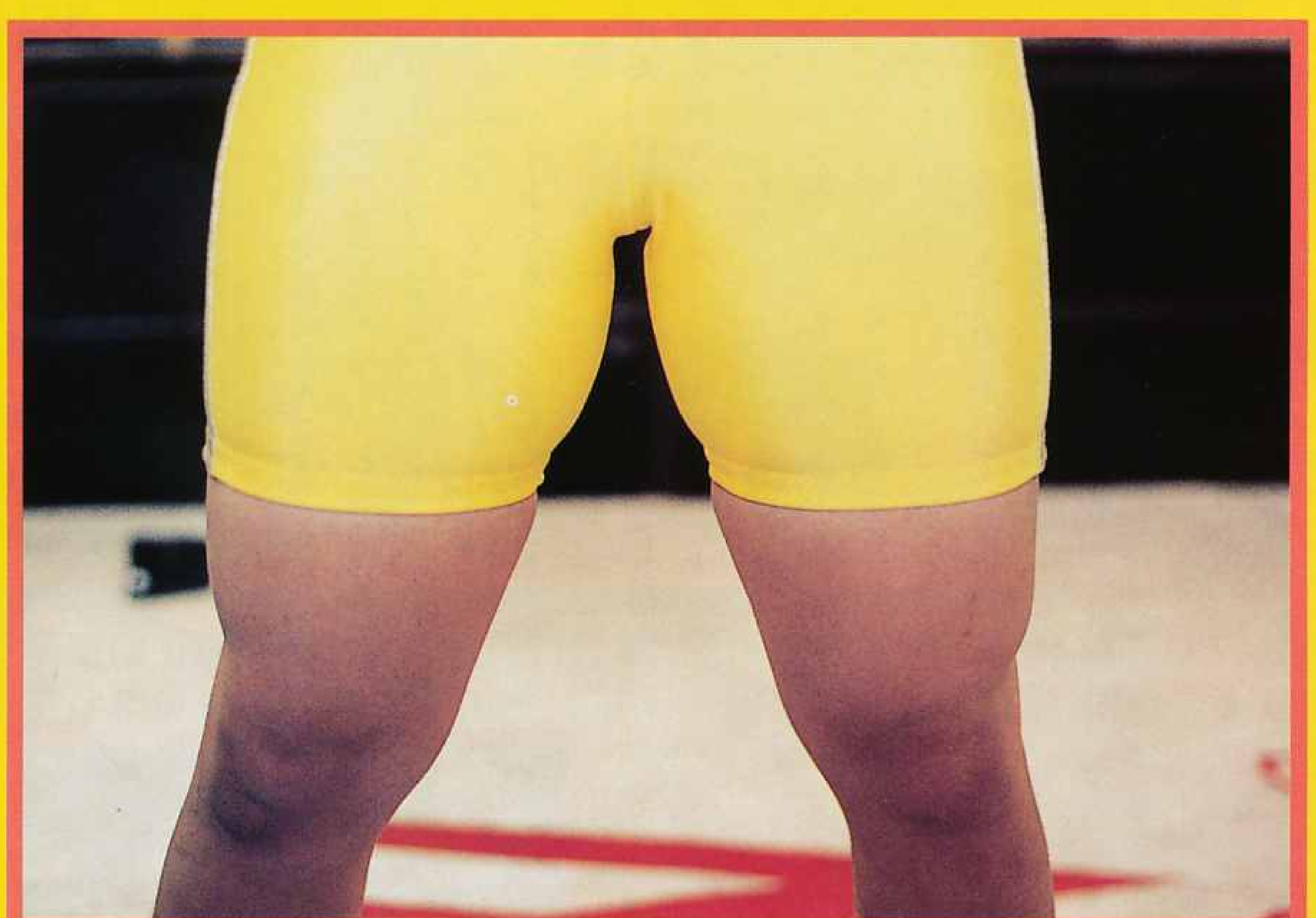
八木　体重が15キロ増えましたね。「プロレスは体が資本だ」って聞いたんで「そうか」と思って、ひたすら食べてたんですよ。そしたら2ヶ月で15キロ増えちゃいましたね。

—2ヶ月で15キロ!?　ムチャしますねえ。

八木　でも、「このままじゃただのデブになる！」と思って、いろいろ鍛えた

デビュー戦だからってオドオドしてもしょうがない！

らこういう体になりました（笑）。
――八木さんのボディは、マスコミ各誌でも評判いいですからね。ここまでプロの壁の厚さとか、奥の深さって感じたりしませんでしたか？
八木　デビュー前までは注意されたり、いろいろ言われました。
――そんなときは1人、トイレで泣いたりしてたんですか？
八木　はい（ニコニコ）。
――でも、パッと見はメチャメチャのんびりしてて、きついことも飄々とこなしてしまいそうなイメージがありますけどね。ジャンボ鶴田タイプというか（笑）。
八木　よく言われるんですよ（笑）。
――そんな大物新人らしく、いきなりL-1出場が決まりましたね。相手は空手の選手みたいですけど、バーリ・トゥード対策はできてるんですか？
八木　これから本格的な練習に入る予定なんですよ。それまでは、大学の空手部の友達に教わったりしてます。
――ああいうルールに恐怖感ってないんですか？
八木　ありますよ（ニコニコ）。
――でも、ニコニコしてるじゃないですか。
八木　「堂々としている」とか言われるんですけど、緊張するし、不安もすごくあるし、なにげに心配性だし（笑）。結構、オドオドしてるのに、それが全然気付いてもらえないんですよ～。
――全然、わかないですね（笑）。逆になんかオーラ出ちゃってますもん。
八木　デビュー戦もリングに上がるまでは緊張しましたけど、リングに上がってゴングが鳴ったら緊張が飛んじゃいました。いつまでもオドオドしてもしょうがないですからね。
――試合を見たら闘い慣れてる人だなっていう印象を受けたんですけど、ケンカはしょっちゅうしてたんですか？
八木　ケンカなんてしたことないです！　殴り合いはしたことないですね。何か……殴り返すのが面倒臭いんですよ（ニコニコ）。
――それじゃ負けちゃいますよ（笑）。
八木　だから、プロレス入ったときに「このままじゃいけない」と思って、「やられたらやり返す！」という気持ちに切り換えたんで、大丈夫です！
――そんな簡単に切り替わるもんなんですか？（笑）。
八木　もう、大丈夫です。切り替わりました（ニコニコ）。
――プロに入ってから、かっこいいなあと思う選手っていましたか？
八木　同じ柔道出身っていうのもありますし、研究熱心で、神取さんは凄いなと思いますね。男っぷりがいいですよね。
――確かに男っぷりは最高にいいですよね（笑）。
八木　ああいう男っぷりにすごく憧れちゃうんですよね。フフフ。自分の心の中で勝手に「師匠」と呼ばせてもらってます。あと堀田（祐美子・全女）さんの蹴りも凄いですよね。
――格闘技系の人たちですね。
八木　やっぱり気になりますよ。
――アマチュア格闘技をやってプロレスに入った人って、プロレスと格闘技を分けて考える人が多いんですよ。
八木　自分も最初は、柔道着を絶対着たくないと思ってました。自分は柔道を辞めてプロレスに入ったんで、プロレスのコスチュームを着るんだって思って。プロレスはプロレスですから。同じ格闘技ですけど、まったく違う競技ですから。
――そうですね。でも、プロレスで柔道技は一切使わないっていうほど、分けては考えていないんですね。
八木　なるべくプロレス技を多く使っていきたいんですけど、そこまでプロレスラーとして完成してないんですよ。いまはほとんど柔道技になっちゃってますけど。
――男子だと「俺の方が強いのに」とか、格闘技をやってたというプライドが邪魔してしまう場合が多いんですけどね。
八木　自分はプライド捨てました！（キッパリ）。入ったときはプライドありましたよ。でも、そのプライドが邪魔して、何事も上手く出来なかったんです。なにげに堂々としてるように見えるかもしれないですけど、デビューする前はかなり辛かったんで。
――辞めようと思ったり？
八木　何回も思いましたよ。で、落ち着いて考えた時期があったんです。そのときに全部プライドを捨てました。そこで「これは職業なんだ」と割り切って考えるようにして。そうしないと続かないですね、いままでアマチュア格闘技をやってきた人間としては。プロレスがこういう厳しい世界だとは知らなかったんで。
――はあ～、プロの世界の厳しさを味わったわけですね。
八木　「聞いてびっくり！」みたいな、フフフフ。自分はわりと素直なんで、


見てみぃ、このたくましい太モモ！　2ヶ月で15キロという常軌を逸した肉体改造も、先輩の教えを守る素直な性格があったから成功したのだろう。

L-1は楽しみですよ。ああいう闘いは好きですから

なじめない部分もありましたよ。すごいショック受けて、トイレで泣きましたもん。「うわ〜、嫌なところ入っちゃったよ!」って（笑）。

——でも、そういう状態から、よくプロレスの世界になじめましたよね。

八木 プライド捨てるのは簡単ですね。その瞬間は辛いですけど、捨てきったら自分自身が楽になるんですよ。「これからはプロレスラー・八木淳子なんだ」って思ってしまえばね。

——ずいぶん思いきって割り切りましたね。

八木 別に泣き虫じゃなかったんですけど、この世界に入って、すごく泣き虫になっちゃいました。はじめはこんなにいろいろ雑用が回ってくるなんてことも知らなかったんですよ。先輩のものを洗濯するなんて夢にも思ってなかったですから（笑）。それを知ったときは恐ろしかったです。

——ホントに何にも知らなかったんですね（笑）。でも、そんな八木さんが、プロレスの世界に残ってることがいちばん凄いですよ。

八木 プライド捨てたから、もう何も怖くないです。だから物事に動じないって言われるんじゃないですか。

——じゃあ、プライド捨ててからは、格闘技にも興味なくなっちゃったんですか?

八木 興味ないことはないんです。ただ、いまはプロレスど素人の身分なんで、Lのビデオを見て研究することが多いですね。



やぎ・じゅんこ■昭和50年8月9日、愛媛県出身。帝京大学で国民的アイドル(?)田村亮子と共に柔道に打ち込み、LLPWに入団。今年8月16日、後楽園ホールでデビュー。いつもニコニコしているが、自称・泣き虫。170センチ、78キロ。

——男子のビデオは見ないんですか?

八木 男子は技の一発一発が重いんですけど、女子プロよりも間が長いからスローに見えて眠くなっちゃって、あんまり見れないんですよ。フフフフフ。

——男子プロレスは眠い! はぁ〜、ちなみに男子プロレスはどんな団体があるか勉強しました?

八木 いちおう、ちょっと勉強しましたよ（ニコニコ）。

——猪木さんが作った団体は?

八木 新日本……ですよね?

——馬場さんのところは?

八木 全日本!

——じゃあ、大仁田さんが作ったところは?

八木 ……知らないです（笑）。女子は全部覚えたんですけど、男子は半分ぐらいしか知らないですよ〜。今年中には全部覚える予定なんですけど。

——まあ、雑用とかで忙しいでしょうけど頑張ってください（笑）。L-1もありますしね。デビューして、いきなりL-1出場って凄いですよ。でも、最初は「いまはプロレスに専念」って言ってましたけど。

八木 「まだ早いかな」と思ってたんです。でも、会社からお話を頂いたんで「それだったら出させて頂きます!」って（笑）。不安ですけどね。

——顔をボコボコに殴られて、変形しちゃう場合もありますよ。

八木 それも勝負じゃないですか。

——えらいサバサバしてますね。

八木 「やられたら、やり返せ」の精神でやりかえしますよ（笑）。

——プロレスラー・八木淳子としてはプライドを捨てて1年生からの出発ですけど、L-1ではどういう闘いになるんですかね。

八木 そういう面では、プライド捨ててないですよ! もともと、好きなんですよね。ああいう闘いが。

——あ、好き! いいですねえ。じゃあ最後に、これからプロレスラーとしての目標はありますか?

八木 早くいろんなこと覚えて、かっこよくてサマになる試合内容が出来るような選手になるのが目標です! フフフフ。

【98年9月8日、LLPW道場にて収録】

JUNKO YAGI

L—1情報



超大物ド素人のプライドは炸裂するのか!?

八木淳子

大抜擢! L-1に出場決定!!

極真空手出身で、ジェラルド・ゴルドーにコーチを受けるオランダの空手マシーン、フロアー・ホルマンと激突。八木のプライドが炸裂するか? 見届けろ! その他にも全女から堀田祐美子、フリーのライオネス飛鳥、Jd'の高橋洋子ら、女子プロ界のオールスターが大挙出場!

そんなに欲しけりゃ

くれてやるしおん YARSION

HYPER DOKUSHA PRESENT

本誌の超デラックス読者プレゼントは、最近話題の懸賞応募雑誌でも注目されているらしく、先日、電話でアンケートを受けました。「どういうハガキが当たりやすいんですか？」という図々しい質問に対して「男の子だったら面白いギャグを、女の子だったらプリクラ&携帯電話の番号が書いてあればノー問題で当たります！」と答えてやりました。ま、半分ウソですけど。というわけで注目の読プレ・ページ、いってみよう！

ここでしか手に入らない超絶読者プレゼント！





独占

ライセンスNo.1

いったれ高田！ヒクソン戦もノー問題！高田延彦がPRIDE.3のvsストゥージョン戦で実際に着用した元気スパッツ　1名

奇跡の大復活を果たした6・24『PRIDE.3』のvsカイル・ストゥージョン戦で、ホントにホントにホントにホントに着用した元気いっぱい夢いっぱいのスペシャル・スパッツをノブ兄さんからあなたへ！　売っちゃダメだよ　【高田延彦さん提供】

ライセンスNo.2

メガ渋 非売品 PRIDE.4ポスター 5名

世界的デザインチームにして、あの高田道場の鬼カッコいいロゴをデザインした「K2」が手掛けてます。とにかくやたらめったらカッコいい、『PRIDE.4』の非売品ポスター。間違いなく家宝級の逸品ですぞ！

【KRS提供】



こんなにカッコいいTシャツなら秋になってもノー問題!!



●ライセンスNO.5 大和魂Tシャツ(黒×赤) 1名
10・25VTJの会場のみで限定販売するニューTシャツ!! 凄いネ!!
【PUREBRED提供】



●ライセンスNO.4 エンセン顔面Tシャツ 1名
本誌10号で掲載したエンセンの顔写真でつくったTシャツ。カッコいいネ!!
【PUREBRED提供】



●ライセンスNO.3 シューティング新作Tシャツ 1名
天才・朝日昇画伯のイラストが素晴らしいニューTシャツ。お問い合わせはPUREBRED シューティング大宮ジム(TEL.048-686-3328)まで
【PUREBRED提供】



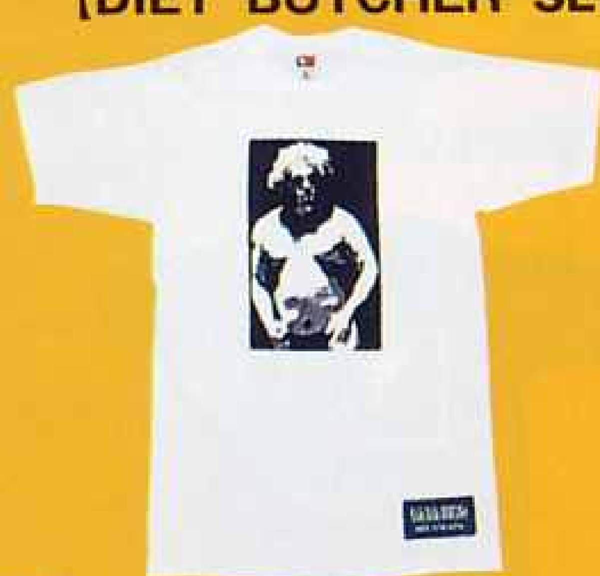
●ライセンスNO.7 アレク×ダイエットブッチャーTシャツ-B 1名
戦車のイラストがかっこいい! ダイエットブッチャーのウェアは直営店『オクタゴン』(渋谷区神宮前5-16-8・TEL.03-3486-5539)で買えます! 色違いの白バージョンもあるよ。
【DIET BUTCHER SLIM SKIN提供】



●ライセンスNO.6 アレク×ダイエットブッチャーTシャツ-A 1名
「アレクサンダー大塚を応援するぜ!!」とおなじみのダイエットブッチャーがアレクTシャツを制作!! バト会場の売店だと他のSHOPより安く手に入るぞ!
【DIET BUTCHER SLIM SKIN提供】



●ライセンスNO.12 ビガロのイラストTシャツ 1名
モンスター・ファクトリー出身、お店の名前の由来でもあるビガロTシャツ
【バンバンビガロ提供】



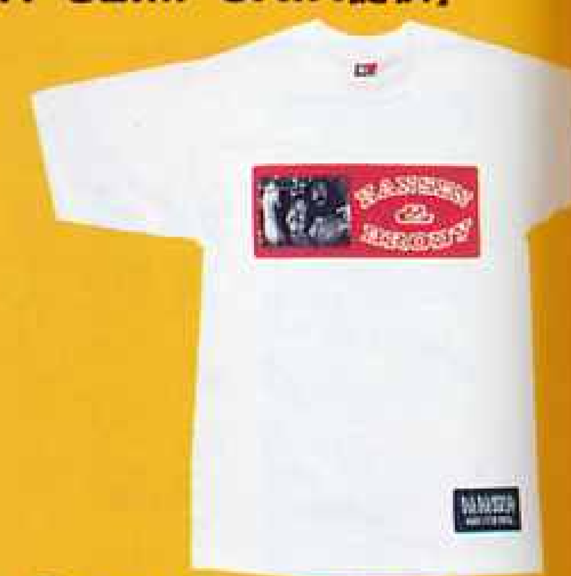
●ライセンスNO.11 イカした大巨人Tシャツ 2名
どうですかーッ!! 見ていてホレボレし…あれっ、涙がこぼれてきたよ。
【バンバンビガロ提供】



●ライセンスNO.10 背番号Tシャツ 2名
背番号がカッコいいよね! 通販もやってるよ。問い合わせはTEL.03-3460-1145まで
【バンバンビガロ提供】



●ライセンスNO.9 クラッシャーTシャツ 2名
プロレス物じゃないけれどカッコいいでしょ? お店は世田谷区北沢2-33-11-2Fです!
【バンバンビガロ提供】



●ライセンスNO.8 超獣不沈艦Tシャツ 2名
以前出ていたミラクルパワー・コンビのTシャツがリニューアルして登場。
【バンバンビガロ提供】



●ライセンスNO.17 カブキのバンダナセットで1名
色は黒、赤、緑があります。なんかカブキの毒霧みたいだね。どれも1000円!



●ライセンスNO.16 カブキんちゃく袋 2名
かわいいイラストのカブキ・グッズは一生モンでしょ? 定価は1000円! 【オフィス・カブキ提供】



●ライセンスNO.15 鬼レア1億円Tシャツ 1名
通称・悪い方の健ちゃんことキングダム鈴木健氏の串焼き屋の特製Tシャツ。鬼レア!
【市屋苑提供】



●ライセンスNO.14 Mr.デンジャーのTシャツ 3名
狂乱のステーキ屋がTシャツの通販を開始! 色は黒。サイズはL(2500円)、3L(3000円)。住所、氏名、電話番号、サイズを明記して商品代+送料300円を郵便為替で〒131-0043東京都墨田区立花3-2-12田中ビル1F『Mr.デンジャー』まで送ってください。 【Mr.デンジャー提供】



●ライセンスNO.13 アルジオンTシャツ 3名
パンチ田原恒例のインチキグッズ。おなじみのブランドのパッタもん
【リングスタッフ提供】

引退してもカブキは君のそばにいるよ!



●ライセンスNO.18 カブキ引退記念Tシャツ 各1名
黒(2800円)と白(2500円)の2パターンあります。通販やってます! 電話で注文して、現金書留で代金を送ってください。その後、発送します。お問い合わせは「オフィス・カブキ」東京都文京区白山3-4-13(TEL.03-5684-0406)まで。【オフィス・カブキ提供】

ついに発進! UFOグッズ



●ライセンスNO.19 UFOキャップ 各1名
前号で大反響だったUFOグッズの続編です。希望の色を明記して応募しろ!
【夏の大祭実行委員会提供】

みちのくをはったか？　非売品ポスター大特集!!



●ライセンスNO.23
温泉バージョン　1名



●ライセンスNO.21
デカ太鼓バージョン　1名



●ライセンスNO.20
サスケのお買い物バージョン　1名



●ライセンスNO.24
あおい空バージョン　1名

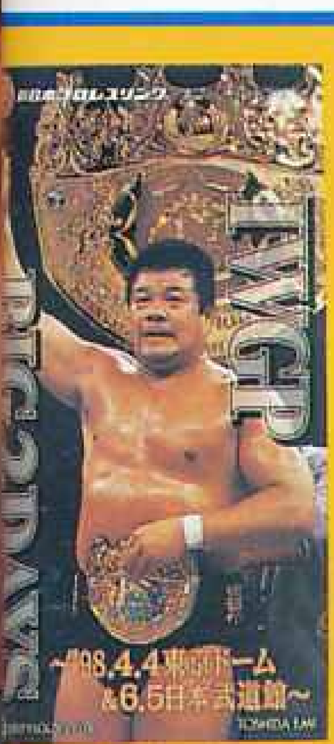


●ライセンスNO.22
ポイ捨て禁止バージョン　1名

各方面で引っ張りダコのみちプロ軍団。いろいろ揃えてみましたが、やっぱりサスケのお買い物が一番ヤバい!!　ヨネ原人のポイ捨てポスターも家宝にしたい!!　太鼓も渋い!!　温泉もステキ!!　青いのも綺麗!!　ホントに欲しい!!　みちのくに、まいった!!

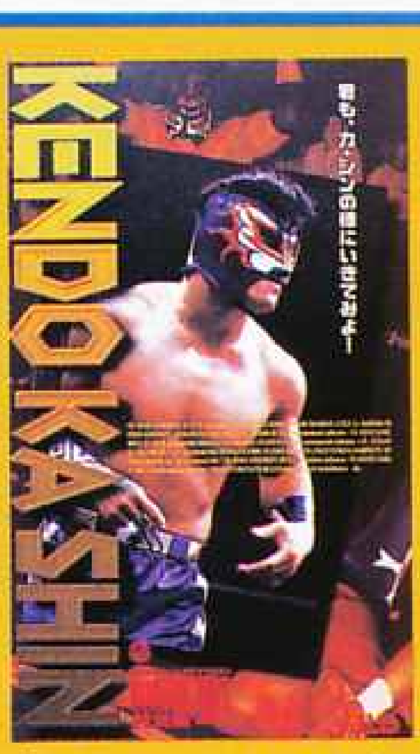
【みちのくプロレス提供】

マット界広しといえども、ノー問題な団体はここだけ！　新日本特集だ！



●ライセンスNO.29
IWGP BIG 2DAYS
98・4・4&6・5　2名

IWGPのジュニア、タッグ、ヘビーのタイトルを巡る攻防全5試合を完全収録！　【東芝EMI提供】



●ライセンスNO.28
闘魂Vスペシャル
ケンドー・カ・シン　3名

「君もカ・シンのように生きてみろ」というキャッチコピーに、このビデオの本質がある！　【VALiS提供】



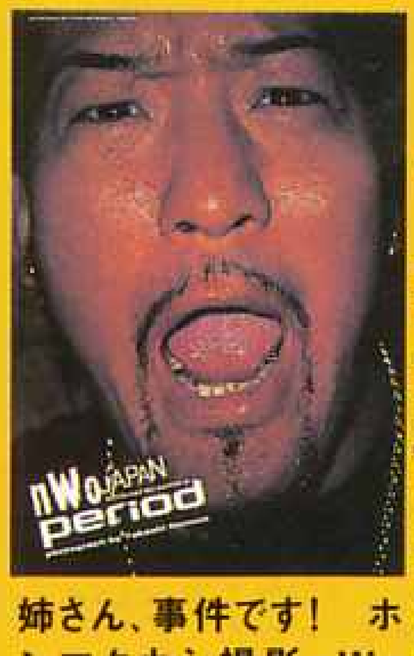
●ライセンスNO.27
闘魂Vスペシャル
悪霊闘武多武藤敬司
3名

ナチュラル・ボーン・マスターという新たなる肩書きを得た武藤に迫るビデオ！
【VALiS提供】



●ライセンスNO.26
アリストトリストTシャツ　2名

蝶野の嫁さん・蝶野マルティーナがデザインした非売品限定Tシャツ。ヤバい！
【STRONG STYLE提供】



●ライセンスNO.25
nWo写真集period　2名

姉さん、事件です！　ホンマタカシ撮影nWo JAPAN公認写真集が出ました。
【STRONG STYLE提供】



●ライセンスNO34（ホントは14）
なぜ新日特集に文子が？
セクシービデオ　2名

グラン浜田の娘なだけあって、この破壊的身体には新日の血が流れているんです！　【東芝EMI】



●ライセンスNO.33
ムタ　デスクトップ・デコラ　1名

お近くのパソコンショップや、プロレスショップで売ってます！
【コロムビアクリエイティブ提供】



●ライセンスNO.32
ライガー　デスクトップ・デコラ　1名

この4タイトルはジャケット写真の柄のメタリックマウスパッド付。
【コロムビアクリエイティブ提供】



●ライセンスNO.31
藤波　デスクトップ・デコラ　1名

プロレスファンのためのパソコン改造キット。4タイトルいずれもWindows95&98用。【コロムビアクリエイティブ提供】



●ライセンスNO.30
蝶野　デスクトップ・デコラ　1名

自分のパソコンに蝶野の壁紙やスクリーンセイバーをたたき込め！4タイトル各3800円！【コロムビアクリエイティブ提供】

「知ってました？　今日の朝、雪が降ったんですよ」と、9月上旬にすっとんきょうなウソをつくMr.ライアー・松澤チョロのような男とは正反対！　公明正大な読者プレゼントページの……

応募要項

ページは減ってもメチャメチャ濃いです！　そしてウルトラ・デラックスです！　というわけで、「プレゼントが欲しくて欲しくて…たまんねえ！」というクレクレタコラなボーイズ&ガールズは一攫千金を目指してハガキを出してください。ハガキは右記の要領で、応募券を必ず貼付して下記の住所まで送ってください。締切はちょっと早いけど10月15日（当日必着）です。

※応募券のないハガキは無効となります。そこんとこ？　ヨ・ロ・シ・ク!!

宛先は
〒151-0051東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
（株）ダブルクロス『紙プロRADICAL』編集部「俺、吸ってないですよ!」係まで

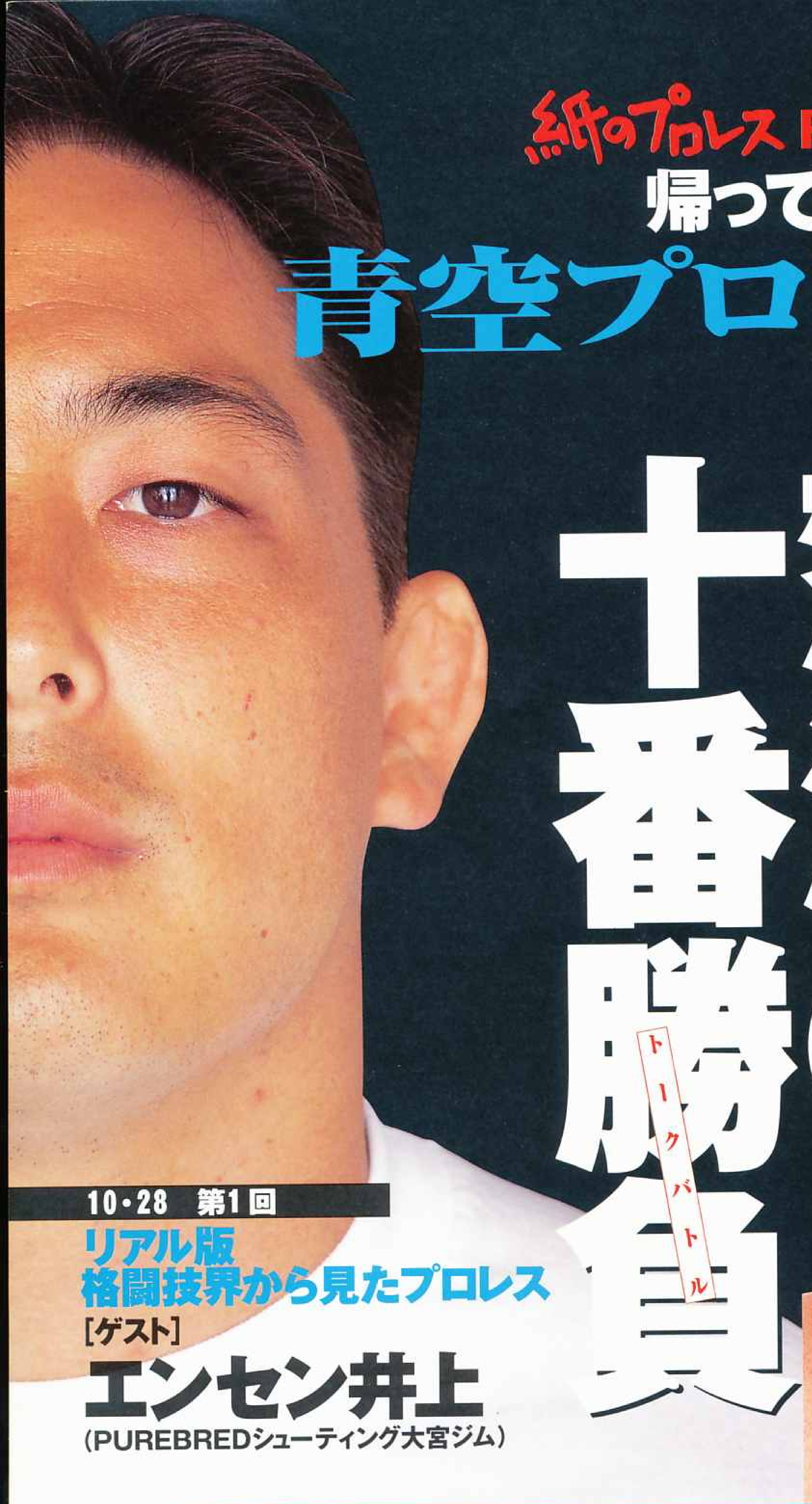
応募券

1.住所　2.氏名
3.年齢
4.プレゼント希望商品
5.面白かった記事&理由
6.つまらなかった記事&理由
7.『PRIDE-0』（P116〜）の勝者は誰？
8.パソコンを持ってますか？持ってる人は機種を教えて！
9.紙プロ未登場の人で誰を取り上げてほしい？
10.プロレスのリングに上げたい日本の有名人は？



●ライセンスNO.35
必見ルチャ映画『ミル・マスカラス〜愛と宿命のルチャ』招待券&ポスターセット　5名

親が死んでもマスカラス！　BOX東中野で9月12日〜10月下旬まで上映予定。このプレゼントだけ締切を10月5日とします。問い合わせはイーサン（03-3475-4993）まで。
【イーサン提供】





紙のプロレス PRESENTS

帰ってきた
青空プロレス道場

怒涛の十番勝負（トークバトル）

10・28　第1回

リアル版
格闘技界から見たプロレス

［ゲスト］
エンセン井上
（PUREBREDシューティング大宮ジム）

11・11　第2回

格闘パーマンが語る
プロレス～バーリ・トゥード

［ゲスト］
アレクサンダー大塚
（格闘探偵団バトラーツ）

ゴチャゴチャ言わんと豪華なゲストを揃えて待ってます!!

■講師／『紙プロ』編集長・山口日昇＋『紙プロ』編集スタッフ・吉田豪、坂井ノブ、松澤チョロ、中村カタブツ君（35歳）＋毎回スペシャル・ゲストが登場!

『紙プロRADICAL』でおなじみのプロレス&格闘技界の大物がゲストとして続々登場予定です！　机をドンドン叩いて炎上するあの人?　目をつぶって30秒のあの人?　テープレコーダーを止めればいろいろしゃべってくれる人?　おへその下が35歳の人?　などなど決まり次第、誌面を通じて発表します。キミもこの機会に生の『紙プロ』を体験してみないか?　お楽しみに!

前回よりもお安くなってお得です!

■受講料　【10回通し券】一般30.000円　【1回券】3.500円　※消費税別
■申込み方法／池袋コミュニティ・カレッジ8F総合受付にて受け付けます。申込書に必要事項をご記入の上、受講料を添えてお申し込みください。定員になり次第締め切らせていただきます。

※受付時間は10:00～18:20（日曜日は18:00まで。祝祭日は休館）
10回券を申し込んだ方、先着10名様にグレート・プレゼントを進呈します。

第2、第4水曜日は『青空プロレス道場』の日!
【紙のプロレスPRESENTS『青空プロレス道場』日程】（内容はあくまでも予定です）
講義時間（18:30～20:30）

11／25 UWFを語る夕べ
新生UWFから10年目。あの運動体の根幹には何があったのか?　今しか、あの男にしか語れない秘話が、いま明らかに!

12／9 リアル版・S多重アリバイ
数々の伝説と現在のマット界に足りない何かを持ったまま消え去った伝説の団体を再評価します。あの男がデンジャラスなトークをぶちかます!

12／23 プロレスファン実力世界一決定戦
どうしてこんなにプロレスファンが冷めてしまったのだろう?　超一流の批評眼と超一流のギャグという二刀流を持った、あの人たちが遂に登場!

1／13 新春・マット界BIG3そろい踏み
おとそ気分も抜けきらないうちに、『紙プロ』から超ビッグなお年玉爆弾が落とされます。この人たちがいる限りプロレスは永遠に不滅です!

1／27 アマレスから見たプロレス
やってきました!　あのアマレス王が徹底的にプロレス界を斬る、斬る、斬る!　あの人ならきっと目をつぶっても30秒です!

2／10 格闘技を通じてプロレスを考えてみよう
「強くて、面白いヤツこそが真のプロレスラー」と本誌は定義してみましたが、要するにこの人こそが真のプロレスラーなんですよ!

2／24 甦る道場王伝説
超人的なトレーニングをこなし、浴びるほど酒を飲み、道場破りを半殺しにしてきたあの男が、レスラーのあり方とファンタジー溢れる昔話を披露します!

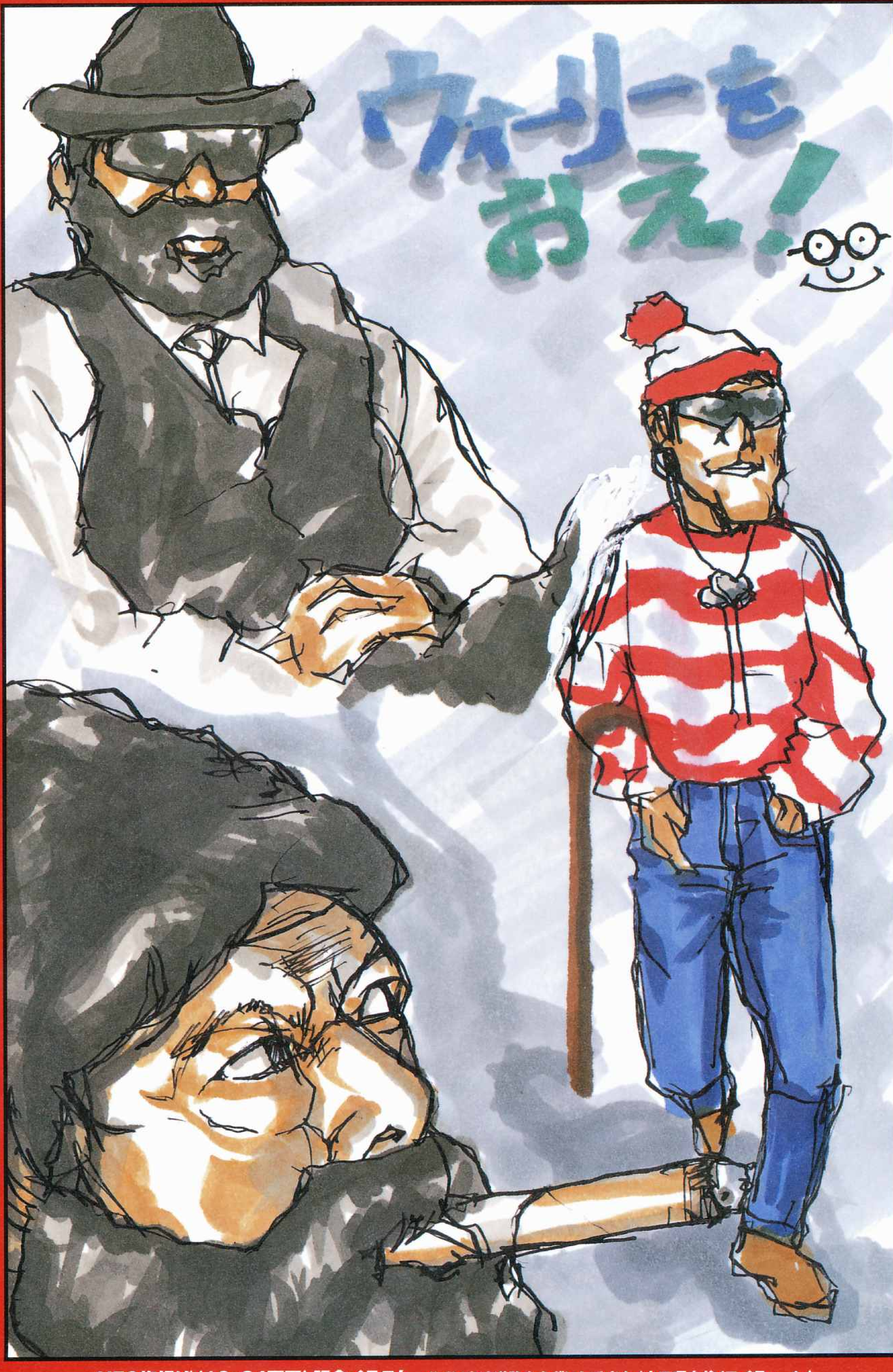
3／10 プロレスマスコミの通信簿
「問題多すぎますよ!」とマエダアキラに言われてますが、マスコミ界の元祖問題児が本音で語るマスコミ論!　誰が悪いのか、はっきりさせろ!

［お問い合わせ］池袋コミュニティ・カレッジ　TEL.03-3988-9281

紙のプロレス RADICAL WANIMAGAZIN MOOK 88
1998 No.12
10・11直前!! 髙田よトラになれ!!
ファンよ プロレス祭り囃子を鳴らせ!!
平成10年10月25日発行 編集発行人／山口日昇
発売元：(株)ワニマガジン社 〒160-8580 東京都新宿区内藤町1番地 電話／03-3357-2911
発行元：(株)ダブルクロス 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話／03-3403-5188
ワニマガジン社 定価：本体743円＋税

雑誌 69861-88
ISBN4-89829-599-1
C9476 ¥743E
9784898295991
1929476007438
印刷：図書印刷株式会社

読者のハガキを勝手にポートレートにするコーナー（ちっちゃなガッツポーズ）



UFO旗揚げ（10・24両国）記念イラスト　作者/高速道路をタダにしろさん（山口県在住/エイティーン）



BATTLE FICTION
蘇れ
ゴールデンタイム伝説
来リ！コンニャロー!!
ニューヨークの帝王
ボブ・バックランド
燃える情念
石川雄規
東北の英雄
ザ・グレート・サスケ
妖鬼Jr.
グレッグ・バレンタイン
BATTLARTS



世界征服への第一歩! B-CUP決勝戦

11月23日(祝) 15時開始

両国国技館

【チケット発売所】

- ■チケットぴあ／03·5237·9999
- ■後楽園ホール／03·5800·9999
- ■大山アメリカン／03·3962·6443
- ■チャンピオン／03·3221·6237
- ■書泉ブックマート／03·3294·0011
- ■プロレスマニア館／03·6276·0304
- ■レッスル渋谷／03·3464·0078
- ■レッスル池袋／03·3294·0011
- ■アイドール／03·3371·5211

【お問い合わせ】バトラーツ／0489·63·0005

入場料

特別リングサイド	10.000円
リングサイド	7.000円
1階指定席	5.000円
2階特別席	5.000円
2階指定席	3.000円
パノラマシート	15.000円

(枡席1·2列目、パンフレット·お土産付)

※マス席は2人掛けになります

[主催] 格闘探偵団バトラーツ　[協力] 東芝EMI　[後援] TOKYO FM、週刊プロレス、週刊ゴング、週刊ファイト、紙のプロレス